THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第三十八年 第五號 第四百二十一號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タッタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗ふて剝げず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり

實篤全集

特色

一、署名。第一卷及十二卷の扉には武者小路氏が自署します。

二、番號。本全集は記念出版として各卷悉く番號を附します。

三、續行。今後の武者小路氏の著作は、全集の續刊として同じ裝幀の下に刊行し、本全集豫約者のみに頒ち、以て全集の意味を徹底させて行きます。

裝幀は岸田劉生氏の苦心の裝畫を、高見澤遠治氏が卵黄色羊皮の上に木版手摺筆彩色を施したもので、未だ世界の出版界に類例なき美本です。内容の不朽と相俟つて永遠に後世に傳はるものと、本會は聊か自負してゐます。

内容見本 御申越次第進呈

豫約規定

一、本全集は豫約申込者のみに頒ち分賣せす。

二、刊行期間。本年五月末より毎月一冊宛刊行し十二ケ月を以て完了。

三、裝幀、特別版洋裝。總羊皮。全紙數九千頁。

四、豫約會員を二種に分つ。

(甲)一時拂金五十圓(十二冊)申込同時に拂込みの事。

(乙)毎月四圓六十錢(一冊分)乙種會員に限り申込金四圓六十錢を申込と同時に拂込みの事。右申込金は最後の月の拂込金に充つ。

五、送料(一冊について)市内十二錢、地方廿五錢、朝鮮臺灣、滿洲廿五錢、外國一圓。

發行所——曠野社——合名會社藝術社

申込所 東京市外中澁八六八 合名會社藝術社内 武者小路全集刊行會

振替東京六三二五四、電、青、一六四一

The Tokyo Nichi-Nichi

English Edition

英文東京日日

◉『東京日日』を母體とする英字新聞が新たなる試みとして來る四月十二日を以て發刊されます

◉形式は四頁で携帶繙讀に至便、然かも内外の重要記事は殘らず壓搾して此内に網羅すると云ふ編輯振りを示します

◉首腦は全然日本人なるが故に外人の英字新聞を讀んだ時のやうな「物足らなさ」は絶對にありません

◉同時に外人も眞に「日本人の觀たる日本」の眞相を捉ふるに便利であります

◉定價は一ケ月壹圓(郵稅拾錢)一部五錢、英字新聞として誠に破格の低廉であります

發行所 東京丸ノ内

東京日日新聞社

振替東京二八〇〇番

取次所 全國新聞店及書店

社會研究　娛樂業者の群

最新刊

定價壹圓八十錢
郵稅八錢　中型
四六版函入

東京帝國大學前講師
大原社會問題研究所

權田保之助氏著

生ける社會の研究は、哲學や理論を拔きにして、生活事實に直面する事が何より大切である。著者はこの意味から社會研究の第一歩として、娛樂業者の群れを選んだ。現代社會の生活の基調と推移とは最もよく、こゝに反映して居るからである。

——內容畧目——

藝者、娼妓—料理屋の女中—待合の女中—カフエの女給—宿屋と下宿屋の女中—落語家—オペラ俳者—活動女給—踊の師匠—ダンスの師匠—大道藝人—昔の大道藝人のいろいろ　民間信仰—鼠小僧—聖天樣—緣切り榎—鬼子母神—金刀比羅樣—因果地藏

救は反省より

最新刊

定價二圓卅錢
郵稅十錢
四六判函入

現代の我が同胞は渾沌たる時代思想の渦中に卷かれて救を求むることが頗る急である。

然るにその態度は徒らに燥急輕薄であつて、唯々已に過去になつた舊信仰を復興せんとし、又異邦の文物制度を傳承せんとするに止まらんとして居るのみである。何ぞ知らん、眞の救は自己の生活を反省するより他になき事を。著者はこの見地より、我が現代相を徹底的に考察して、深刻痛烈なる斷案を提唱したのである。

懊惱やめる人は速かに本書を見よ。

田中王堂先生著

東京京橋南鍋町二丁目　實業之日本社發行　振替口座東京參六番

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　．中央公論社



フローリン
紙白粉
七色粉白粉
オイデルミン
資生堂石鹼
水素クリーム
キユーカンバー
花椿
大阪市東區南久寶寺町 支店
東京銀座 資生堂


▲流行の新型▲
▲新人の趣味▲
▲帽界の權威▲
純品質主義
鷹印麥稈帽子
數ある中に鷹印麥稈帽子は獨り歡迎の焦點となれり
大阪・東京
株式會社高橋製帽所

▼說苑


新人の武器
プラトン萬年筆
万年筆用
事務用
學生用
プラトンインキ
書きよい萬年筆として有名になつた新式の優良萬年筆其の名はプラトン



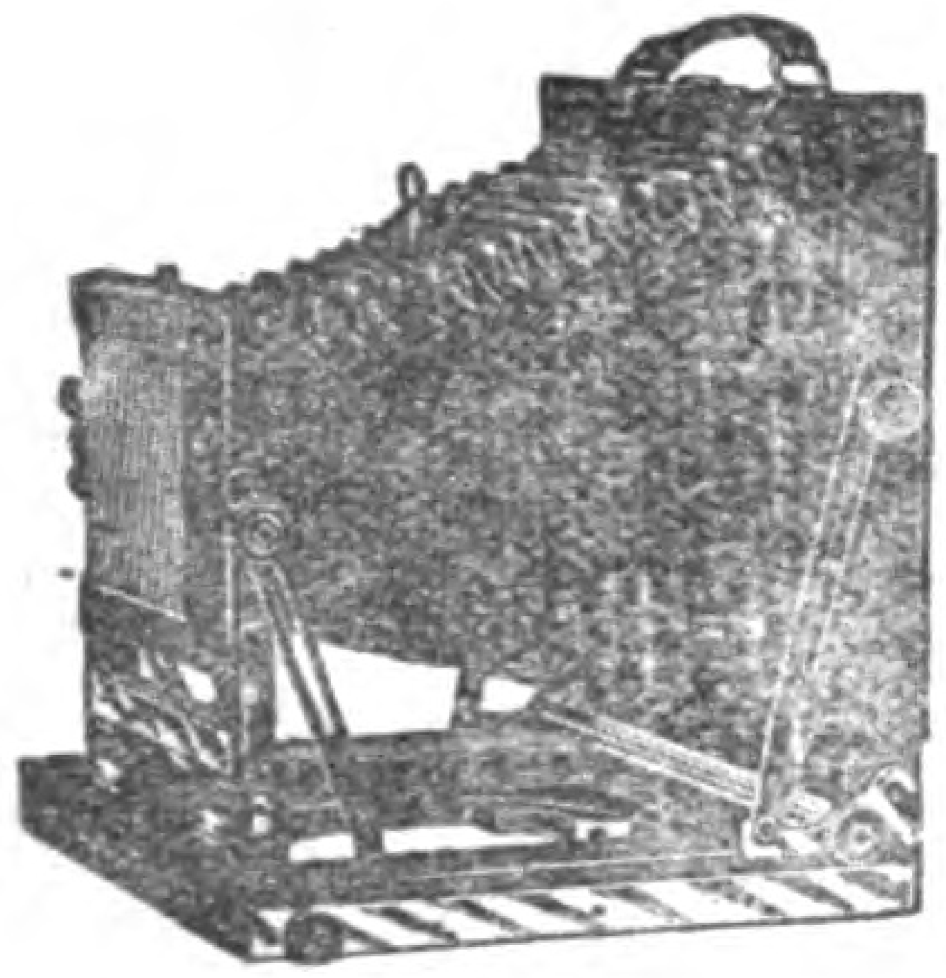
新緑　　小杉未醒筆

藝術寫眞宣傳の爲め

携帯暗函 組合せ大特價販賣

此の頃非常の隆盛を來たしました藝術寫眞……つまり寫眞に依つて吾々の藝術的要求を滿足せしめるには如何しても組立暗函によるの外はありません。本店では之が宣傳のため六櫻社製組立暗函と鏡玉其他の附屬品を組み合せ左の通り大特價を以て販賣致します。

組合せは一號より七號まで七種あります



（第五號の例）

メリー三段伸**カビネ**暗函、取枠三個附	一組
◎**ベルサー**四番鏡玉F/6	一個
◎**ソルントン**型**シヤター**、**ゴム**球附	一組
木製三折三脚	一組
暗函及取枠入用**ズック**鞄	一個
三脚入用**ズック**袋	一個
毛襦子冠布	一枚
以上一組　定價 一七七、五〇　特價 一四二、〇〇	
◎印を除き　定價 八六、七〇　特價 七〇、〇〇	

◆回組合せ大特價目錄進呈回◆

東京本町二丁目　**小西六本店**　大阪支店長堀橋

實業之日本社社長 増田義一著

立身の基礎

青年一度志を立てゝ發奮努力せば、必ず發展するものである。併し自己の缺點を知らず、又その矯正に努めず、而して成功に必要なる修養を怠つては大成が到底不可能である。本書は先づ各人共通の缺點を指摘し、その矯正法を説き、進んで立身出世に最も必要なる修養を各方面より縷述し、世に處し人に對する態度を教へ、是等の理論を證するに一々東西古今の實例を以て具體的に懇説せるものである。

定價貳圓 郵税拾貳錢
東京京橋南鍋町 實業之日本社發行
振替東京三二六番
四六判函入 裝幀優雅

目次要項

第一編矯正編――弱點の矯正―粗放の矯正―嫉妬の矯正―近視欲の矯正―心の强弱―心の錆―良心の賣買―輕信の危險―煽動に乘る人物―他人の美擧にケチを附ける根性―職業に對する根本精神―精神的貧困。

第二編修養編――自信力の養成―確信の力―自重心の養成―注意力の修養―活眼の養成―應用力の修養―綜合力の養成―整理の才能―獨創力の涵養―大才の修養―英氣の涵養―不動の精神修養―心の健康―性の修養―進歩的人物の修養―天職の理解―價値ある人物―自己を治むる力―自己完成。

第三編態度編――變に處する道―失敗に處する態度―刺戟に對する心の態度―人の待遇―椽の下の力持―準備の必要―個性の發輝―緊張したる精神―境遇を支配せよ―投機の危險―實行は最後の勝利。

忽三版

◆井上十吉先生の掌中辭典◆

井上ハンデイ英和辭典

事實は雄辯

内容見本或は書店に於て他辭書と比較研究を乞ふ。直に本辭典の優秀を承認せん

定價 貳圓六拾錢

◎縱四寸三分◎横　寸四分◎約一千頁◎装幀高雅綿章◎郵税内地金八錢也◎

英學界の多年の翹望の焦點たりし井上先生の掌中辭典は出たり。掌中辭典の生名は形體頗る手頃にして、内容はよく尨然たる大辭典の實質を有具するにあり。

本辭典は、過去の袖珍辭典と全然その構成を異にし形體の手頃なると共に内容は綿密豊富にして、如何なる方面の人々にも多大の滿足を與ふべしと確信す。

その製版印刷は世界的新發見たるＨＢ式應用に依り版面の緻密鮮明なる、光線を反射せざる等絶對に視力を疲勞せしめず。之れ現代の印刷・出版界に一新紀元を劃すべき一大貢献なり。乞ふ事實に徴して本辭典の眞價を知られよ。

新刊

Inouye's Handy English-Japanese Dictionary.

＝形體◇内容◇製版印刷共に眞に＝

＝理想的辭典界の驚異的新收穫＝

東京本石町

至誠堂

振替東京一七四四番

エイ・シー・ブラッドリー氏著
文學博士 坪内雄藏氏序
鷲山弟三郎氏譯

最新刊

シェイクスピア悲劇の研究

◇菊判上製本函入
◇定價金五圓五拾錢
◇送料金貳拾四錢
◇高雅なる新装幀

人生を在るが儘に凝視すれば其處に何物か莊嚴な不可抗な力のある事がわかる。その力は名づけて神とも眞理とも云へよう。これに調和すれば人生の平靜が生れ背反すれば悲劇が起る。シェイクスピアは何故に偉大であるか？彼れは人生を在るが儘に描出してその莊嚴な絶對力をさながら吾人の面前に提出した爲である。ゲーテは『沙翁の戲曲には神が見える』と云つた。ミラーは『人生は嚴肅なり』と感銘した。眞相を語ることそれ自身が說敎である。此の意味に於て沙翁劇は第二の聖書でなければならぬ。沙翁劇特に四大悲劇のこの點を遺憾なく論述したものとして、恐らく世界にブラッドリー氏のこの書程優れたものはなからう。私は斯道の壇に立つ思ひで過去二年間この書の邦譯に從事し文字通りに心血を注いだ。今これを公刊するにあたり、人生を藝術と沙翁劇の眞諦を探らんとする同志の前に心より此の書を捧げたいと思ふ。（譯者）

藝術と藝術家
文學博士 山岸光宣氏著
定價金參圓八拾錢 送料金拾八錢

舞臺藝術 演劇の理論と實際
カアル・ハーゲマン原著
文學士 新關良三氏譯
定價金五圓 送料金拾八錢

映畫劇と演劇
警視廳檢閲係長 橘高廣氏著
定價金貳圓八拾錢 送料金拾貳錢

活動寫眞の原理及應用
文學士 權田保之助氏著
定價金貳圓五拾錢 送料金拾貳錢

發行所
日本橋區大傳馬町二丁目
振替東京一二一四六番
電話堀留一三三五番
內田老鶴圃

◇辭書界の最高權威◇

文學博士 服部宇之吉
文學博士 小柳司氣太
兩先生著

228版

詳解漢和大字典

『改修增補』

定價參圓五拾錢

郵稅拾八錢

『東京日々新聞評』：：收容せる漢字熟語無慮七萬、撰擇は悉く進歩せる社會の要求を本位とし全然無用の死字廢語を除外し、出來るだけ多く現代實用の新字新語、學術語、外來の漢語等を網羅し、舊慣を破りて慣用の俗字、俗音をも正字正音と共に併載し、總て學究の理窟に流れず、現代の慣用に從ひ親切に融通自在ならんことを努めたる其一也。字句の解釋は親切丁寧を極めて平易明快、小學教育を終れる程の者には何人にも解し得べく、熟語成句の解釋をなすに遠くは出典を究めて語原に遡り、近くは日新の學術用語、飜譯語、新聞用語に及び、悉く分解的に詳說したれば、最も徹底的に意味を了解し得べき其二也。漢字漢語を國字國語として取扱ひ、和訓を明白に擧げ文法上の註解を加へ、國語としての應用變化に注意したれば、漢籍は固より、國語國文の書乃至新聞雜誌を讀むにも、日常坐右の師たること其三也。編纂の體裁あく迄實用的にして便利を極む。例へば部首索引を表紙の見返し開卷第一の處に置きたるの如き、檢出のため如何に便利と時間の經濟とを與ふるかは、吾人の使用する毎に忘れがたき喜を感ずるところ其四也。卷末の索引、最新式にして如何にも氣が利きたり。音訓索引七十七頁は發音通りにて直ちに其字の所在頁を見出し得るを以て、部首に惑ふ等の煩勞を省き草字便覽は書簡を認むるに常りて無上の參考にして、是又同様式の索引十二頁を添へたること其五也。熟語成句は類字を以て排列したるが更に脚字の排列を附したれば、讀書、作文、作詩等のため二倍の便益あること他の字書に見ざる特色なること其六也。：：權威と常識と兩ながら相備はり：：漢和字典の白眉たること、茲に繰り返して揚言せんとするものなり。以下略

文學博士 上田萬年
文學博士 上田 敏
兩先生著 **正譯英和新辭典** 第十七版 定價壹圓八拾錢 郵稅拾錢

文學士 小田切良太郎
ウオールファアルト
兩先生著 **新譯註解和獨辭典** 第二十二版 定價參圓五拾錢 郵稅拾八錢

文學士 篠原一慶
文學士 岡本清逸
兩先生著 **英和熟語大辭林** 第四版 定價參圓五拾錢 郵稅拾八錢

文學博士 上田万年先生著 **ローマ字で引く國語辭典** 第三十二版 定價貳圓 郵稅拾錢

東京神田 **富山房** 振替東京 五〇一一番

大正十二年

中央公論

五月一日發行

五月號

第卅八年第五號

第四百二十一號

結婚と戀愛

人は曰ふ。結婚は戀愛による男女の結合ならざる可らずと。又曰ふ。若し既成の結婚生活にしてよく戀愛の圓滿に到達し得ざるものあらん乎、そは何等の犧牲を拂ても打壞さなければならぬ、結局に於て戀愛と沒交渉な結婚生活は現代文化人に取て一顧の値がないと。斯くて今日の社會制度は斯かる不合理な結婚生活の存續を許し又は之を支持せんとする傾向さへありと觀られて、今や正に非難の標的となつて居る。

結婚生活を合理的ならしむる所以の基礎たる戀愛とは何か。結婚といふ一つの重要たる社會制度を左右し場合に依ては之を打壞すの理由とさへなり得る戀愛は何の故に夫れ程重視せられねばならぬか。

人を戀するとはたゞ其人が好きだと云ふことではない。多情な男が美しい女を見て起す時の感情などから吾人が所謂戀愛を區別して考ふる所以は、そが全人格の信認傾投の關係だからである。心身の全體を捧げても悔ゐずとするまでに沒頭し得る貴い相手方を見出した所に在るのではないか。斯う云ふ感情の高調を繼續的に經驗するのでなければ戀愛と云ふことが出來ぬ。而して斯うした男女の全人格的連關の到達點にして又或る意味に於ては更に一段と向上する發端として、結婚といふ社會制度が人生に重要な意味を爲すのである。正しい結婚が人性の完成に貢獻するは畢竟この爲である。戀愛の神聖なりと云はるゝ所以も亦之に外ならぬ。

結婚といふことを先づ我々に定つた運命であると觀れば、我々はこの運命を戀愛に由て終始したいと思ふ。既に結婚したものは此點で自らの過去を振りかへり、未だ結婚せざる者亦此點から新しき運命を開かんともがく。是れ現代文化人としては當然の冀望であらう。只玆に忘れてならぬことは、戀愛は決して輕々に弄ばるべきものでないと云ふ一事である。心身の全體を捧げて悔ゐずとする程の貴い相手は、容易に見付かるものではない、又さう澤山にあるものでもないから。輕々しく動いて盲目的の選擇に陷るの弊は世上頻りに其例が多い。

さり乍ら又之を誤解してそんな立派な人間は一寸見當らぬ、だから戀愛の發動などいふは現實の出來事として先づあり得ないと決めて掛つても不可い。斯う考へて戀愛の神聖性に安價な諦めをつけ性慾の發動の儘に荒んだ生活を送る者も頗る多いが、又生眞面目に彼れでもない之れでもないと尋ねわづらうて遂に婚機を失する人も世上には尠らずある。成程戀愛の本質が上述の如きものとすれば、其相手方は互に非常に貴い値打を有つた者でなければならぬが、玆に忘れてはならぬことは、其の貴い値打といふは必しも客觀的たるを要しないことである。

換言すれば、世間一般から觀て水準を上下する程度に止る者でも、戀する當人同志の主觀に於て間違なく非常に貴い者として現れゝばいゝ。夫れで戀愛は立派に成立し得るのである。但し其の戀愛が正しいものである爲には、當人同志の主觀的判斷が盲目であつてはならぬ。戀は兎角人を盲目にする。此點大に警戒するの要あるは勿論である。

さう云ふと讀者は直に疑問を發せらるゝだらう。客觀的に平凡と判斷せらるべき人間が、互に戀する男女同志の間に於てのみ非常に貴い者と現ずるといふは、取も直さず戀に目くらみたる誤りの判斷ではないか。世間並の標準でつまらぬ人間が、戀する者同志の間又とない絶對價値として現ずることに、正しい判斷だの誤りの判斷だのと區別する餘地が一體あり得るだらうかと。是は一應尤もな疑問だが、併しよく考へてみると玆が即ち戀愛の神秘的な所ではあるまいか。

吾人はこの現象を次の如く解する。凡そ人にはもと皆無限に向上すべき素質を賦有する、至上價値を實現すべき稟質を有すると謂てもいゝ。但之等の素質なり稟質なりは其儘の形に在ては冬籠りの種子の如く、潜在して外に現れない。而して之に發芽生育の機會を與ふるものは實に愛情の光熱だ。就中强烈なる戀愛が其の最も有効なるものだ。愛の導引に依て最も貴いものが隱れたるより顯はるゝと謂はうか、愛人の前へ出ては人は總ての醜を隱して有らゆる善きもの美しきものを發揮すると謂はうか。要するに普通の交際に於て容易に現れざる稟質が、戀する者同志の間に意外の顯現を見るの事實は疑を容れない。人間天賦の稟質を信じ其の稟質の愛に由る發展を信ずる者に取つて、この吾人の解釋は容易に首肯されるだらう。

戀愛乃至結婚を倫理的に觀れば、そは人間天賦の稟質の最も有効な發露の機會である。此機會が特定の異性間に全く偶然に與へらるゝ點に於て、戀は全く異なもの味なものだ、が、兎に角此機會を與へられた特定の男女は、更に之に依て得たる經驗を擴充して益々人性の完成に努めなければならぬ。こゝに聰明をひらき損ねて、一方には低級な家庭生活に跼蹐するに甘じ、又他方には内心の要求を他方に求めて結婚生活の成育を誤る者の多きは亦頗る慨嘆に値する事柄である。

要するに結婚は飽くまで戀愛に終始せしめたければならぬ。此の觀點から今日の社會制度も又之に基いて出來上つた既成の結婚生活も嚴密な批判を受けねばならぬは勿論であるが、併し其前に吾人は篤と戀愛の本質について省察する所なければならぬ。機械的に結ばれた異性の共同生活から何時の間にやら本當の戀愛が生れてゐることもないではないから、出來上つたものを破壞するには、更に一段の反省を要すると思ふのである。



現代文化の社會盲

杉森孝次郎

一、序說

わたくしは、曾つて、本誌のある號に於いて「社會の發見」を論じた(『社會人の誕生』收錄)わたくしは、いま、それの一成長とも見るべき思索と、その思索の表出を企てる

社會は、それの原因と現存と目的とを人に持つ。社會から人を取り去れば、むかしの君主專制國から君主を取り去り、近時の民衆主義國家から民衆を取り去つた結果よりもなほ貧しい。それは、實に、さびしさの限りを越えた絕對寂滅にかへる。人なき社會は存在なき社會だ。けれども、人から社會を取り去ることは、かれのすべてを取り去ることをほと

んど意味するが、精確に文字通りには意味しない。個人が社會の延長であるよりも一層根本的に社會は個人の延長だ。社會が個人の派生である程度は、個人が社會の派生である程度以上だ。最深層に於いては、個人が社會をつくり、多少の上層に於いて社會が個人をつくる。社會は、個人からどんなに遠く離れ行くやうに見えやうとも、傳書鳩に似て、主人の用命をかれの友人に達するを待つて還飛する。社會は、交通といふことばのある最も正しい意味に於いて、交通にほかならない。複數個人間の交通が人の社會だ。

個人と個人とのあひだの關係は、その各個人以外の事柄では決してない。それは完全にその各個人以內の事柄だ。社會は個人の外延にほかならず、個人は社會の內包にほかならないといふ立言は、ある正當理由を持つ。社會盲は、もしもそれがあるとすらならば、そして、現代に於いて、それは、まさしく、一普遍的存在だが、すなはち、社會眼は、現代に於いて、普遍的に未開だが、その社會盲は、徹底的に觀察すれば、個人盲の全範圍內のある位置にすぎない。ただし、その位置は、現代に於いて、個人觀の上に最大晦蝕を投げる巨大なる部分を占領する。現代に於いて、正しい個人觀が持たれるために先づ滿たされねばならない至要條件の一は、疑ふ餘地さらになく、十分なる社會觀が持たれるにある。現代文化の代表的通有不完全の一は、その意味に於いて、現代文化があまねく最も缺乏してゐるものの一は、したがつて、現代文化があまねく要求して獲得すべきものの一は、社會眼だ。あまねくとはいふても、哲學に於いて、政治に於いて、經濟に於いて、教育に於いて、それから道德に於いて、この判斷はことに切實に妥當だ。

二、現代哲學の社會盲

認識論及び形而上學は、現代に於いて、かれら自身の改築の要を明示すると同時に、かれら自身の滿期廢用をも告げ

る。認識論及び形而上學は、現代に於いて、反省すべき客觀的必要を高くしめす。しかしながら、現代の認識論及び形而上學は、もしもかれらが反省するならば、光りに照らされる暗の如くに、必然的に無くなる。あるひは、うすぐらがりに出動した魑魅魍魎の如くに、知識聰明の光りに打たれて逃げ、惑ひ、すくみ、斃れる。現代の認識論及び形而上學は、純粹に無智と不識を巣とする。かれらは、書架のかびくさを聯想させる。淸明の風が導き入れられるまでの析生だ。かれらの生命は本質的でない。それゆゑに永久的でもない。かれらの蔓延は、かれら自身の力を意味するよりも、かれらに醉化される人人の蒙昧を意味する。一匹の犬が幻影に吠えて、近所界隈の犬どもがその聲に吠えるかたちが、現代のいはゆる哲學に於いていちじるしい。そして、これよりも皮肉な現象はすくない。恐らくは一とつもない。哲學心こそは、あるひは、哲學心だけは、聰明の信者であるべきだのに、現代の哲學者は、迷信そのものだ。

現代の認識論者は、例へば、好んで經驗を口にし、筆にする。現代の形而上學者は、例へば、好んで實在を口にし、筆にする。わたくしは、敢て現代の認識論者にたづねたい。政治、經濟、家庭、教育、例へばこれらは、經驗のうちか、そとか、または、經驗であるか、ないかと。わたくしはまた現代の形而上學者にむかつて、政治、經濟、家庭、教育等は、實在のうちか、そとか、それらは實在であるか、ないかを、機會があつたら徹底的に問ひただして見たい。哲學は經驗の全體を直接に對象とする知的努力だともいはれる。哲學は眞實在、全實在を認識し、批判する代表的努力だともいはれる。近時のいはゆる哲學書や哲學論説をのぞいて見て、なかんづく、代表的、指導的、權威的と一般に目され、または仰ぎ信ぜられてゐるものをのぞいて見て、先づ驚かれる一事は、そこには、なんらの經驗も、なんらの實在も、ほとんどいささかも注意されず、取り扱はれてゐないことでなくてはならん。經驗も、實在も、すべては、現代のいはゆる哲學に於いては、單なる空語だ。いはゆる價値も、いはゆる當爲または當在も、規範も。理想も、眞、善、美、聖

も、不聰明のまぼろしだ。ある意味に於いては不聰明及び不正直の混成だ。それは、哲學以外のすべてのものでありえようとも、哲學でだけは、たしかに、ない。

政治、經濟、家庭、教育、例へばこれらは、各別的にも、全關的にも、現代人の興味と活動を深く、廣く、そして切實に、强烈に決定するあるものだ。そのあるものが、還元されたり、抽象されたりせずに、そのまま立派に經驗でもあり、實在でもあるといふ判斷を、なに人か合理的に否定しえよう。それらは、經驗や實在のすべてではないが、經驗や實在に無緣なもの、無關係のものでは決してない。それらは、しばしば、經驗そのもの、實在そのものとしての位置にさへ立つ。現代人の全生活が、もしくは全存在が、政治、經濟、家庭、教育等のあるひは部分的勢力に、あるひは全體的勢力に支配的位置を與へることは絕無では無論なく、稀有でさへもなく、むしろ通則であり、常態である。國民際、種族際の戰爭と紛雜との最近の歷史及び現實を一瞥しても、階級際、職業際の最近及び現實の狀態を一瞥しても、これは明白であるべきだ。例へば、現實には家庭問題のために腦漿を絞られながら、哲學に於いては、それこそ家庭の家の字にも言及しないことが、現代哲學の一般的方式だが、こんな哲學は、文字または言語の浪費及び濫用以外のなにものであらうか。このなにものでもありえない。

わたくしの友人のチユードル・ジヨンス君が、ボーサンケツト氏であつたか、スタウト氏であつたか、要するにこの兩氏であつたと見てさしつかへない事柄だが、オイケン氏の哲學書を評して、それがいかにも社會的生活經驗と、社會的生活實在に閉眼し、もしくは緘口してゐることの甚だしきを咎め、そして、オイケン氏の頁數ゆたかな人生哲學書を通讀して、家族といふ一語を見いだしえなかつたといつて、輕侮的に驚嘆したといふ話を、一度のみならず、わたくしとの自由交話の際に持ちだしたことを、わたくしは、いま想ひ起こす。このジヨンス君は、オイケン學者として知られ

た人だ。精確に、オイケン氏のある、もしくはすべての著作に家族といふ文字が使はれてゐないか、また精確にポ氏またはス氏のいづれが、あるひは、いづれかが件の通りの批評をしたかどうかは別問題として、これは、大體、知的注意をあたひしない話柄ではない。

オイケン氏は、どちらかといへば、現代ドイツ哲學者のなかでは、比較的に、社會的生活經驗にも、社會的生活實在にも、注意を拂うてゐる一人だらう。なほかつ、氏が、もやと、かすみに、眞實の哲學的責任と功績をぬすませたり、奪は、たり、殘賊させたり、腐蝕させたりしてゐる罪過は顯著だ。

經驗と實在は、社會かに、無責任なしかたに於いて抽象された個人に於いて、及び社會を無責任に飛び越えた自然と世界と宇宙に於いて、最も純眞であり完全であると現代哲學は思惟し且つ信仰してゐる形跡と證據がおほへない。現代哲學に於ける認識論を見、心理學を見、また美學を見、倫理學を見てさへも、社會的複雜を個人生活から怠惰に、短見に、淺慮に排除し去つた殘骸と拔け殼の本質と法則の研究にすぎぬかの不滿足が深く、廣く感ぜられる。現代哲學に於ける形而上學を見れば、それは、しばしば、實に、空虛な概念の堆積以外のなにものでもない。現代の認識論者が、最も無資格な經驗に經驗界の帝位をささげたてまつつてゐる如くに、現代の形而上學者は、最も無資格な實在に實在界の支配權を許與してゐる。經驗と實在を　それの最も純眞な、完全なかたちに於いて認識し、批判し、評價する方法は、人を、かれの社會的及び宇宙的外延と內包とにしたがつて認識し、批判し、評價するに限られてゐるから、そして、これは、現代の如き社會的生活經驗と社會的生活實在が複雜に且つ大規模に發達した場合に於いては、その社會的外延と內包とにしたがつての認識、批判、評價の部分に於いて非常の難事業とされるから、創造力乏しき現代のいはゆる哲學者が、經驗と實在を、社會以前の原始的、一律的、等質的、簡疎的個人と人生とに、及び社會以外の不變、不易の世界

と宇宙とに局限する心理は理解されるが、その心理の倫理價はあはれむべく低い。なぜかといふに、そこには習慣主義と怠惰主義との支配があつて、意思の發動がない。

現代の認識論と形而上學を見て、僞はらざる自己内心の判斷に信を置きうるなに人もが、現代の認識論者と形而上學者は、第六感だか、第七感だか、とにかく、普通の眞人間が決して持ち合はせてゐないある意識官能をでも自然的に、また當然的に持ちそなへてゐるかの如くに言說してゐるなといふ知的、道德的、及び美的不快を感ぜずにはゐられまい。

人の知力は、眞理を知らないための道具、あるひは、眞理を知りちがへるための道具ではないかと疑はれるほどにも、しばしば、あまりに微弱だ。創造者や主宰神を遠い過去にみとめたり、手も足も屆かない無限の上方の天にみとめたり、人及び他の萬有の現在の生存の理由を、人類は死に絕え、恐らくは太陽も燃えつくした遼遠の未來にみとめたりした人人が、哲人とよばれた少數の知的指導者のなかにさへあつた。西諺に「熟知は輕蔑を生み育てる」(Familiarity breeds contempt)といふがある。人にとつて、時の關係に於いては現在すなはち當時ほど、處の關係に於いては此處すなはち當處ほど熟知なものはない。それゆゑに、人は、いまをいやしみ、輕んじ、無視して創世紀を崇拜したり、ミレニアムを信奉したりする。またかれは、カントや、カントをその點に於いて讃仰する後世の哲學者のやうに、あるひは、ナポレオンや、ナポレオンをその點に於いて實はなかつたエマサンのやうに、特に星夜の天空に、またはその種のあるものに、理想主義の本體だか特徴だか指標だかを發見したりする。

政治、經濟、家庭、敎育、及びその他の複雜要素から成り立つ社會は、すなはち社會的生活經驗及び社會的生活實在は、現代人にとつては、ある意味に於いて、熟知の對象でもあれば內容でもある。それが熟知である程度に應じて、現代人は、ことに哲學者としての現代人は、それをないがしろにもてなすのかも知れん。心理學書を開けば、感覺論、知

覺論、またそのさきのなに〳〵論が、數學の教科書を開いた時と似た形式的、固定的、抽象的精神に支配されて呈露する。形而上學書を開けば「價値」、「體驗」、「自覺」等が、單なる死語として、迷辭として、既成宗教の神學書を開いた時と同じ無用を告白する。

社會的生活經驗と社會的生活實在が、經驗と實在の全體ではない。けれども、哲學といへば、經驗と實在の全體から、社會的生活經驗と社會的生活實在を除き去つた殘りの全部またはある部分のみに直接の注意を拂ふてよい理由がどこにあるか。單なる知性の起原、本質、價値の問題を扱ふ學としての認識論でなく、もつと廣く、深く、方法論としての認識論の發達の餘地は、現代に於いても勿論大きい。現代に於ける方法論としての認識論が、社會的經驗、社會的實在、社會的價値を閑却して成り立たう筈はない。いな、實に、現代に於ける方法論としての認識論は、その方面にこそ精力を集中すべきだ。認識論の時務としての時代的必要は、社會科學の方法論の確設にあると斷言することができる。科學そのものに神秘をみとめず、技術と工藝との自體に創造質をみとめない現代人は、社會的生活經驗と社會的生活實在に於いて、單なる派生的經驗と、派生的實在をみとめるらしい。曾つて、ヤソは、人は神と財とに兼ねつかへることはできないといつたさうだが、ある正しき意味に於いて、わたくしは、人は自己と神とに兼ねつかへることはできないといふ意見を抱持してゐる。そして、この立言と、すくなくとも形式的類同を保つ別の立言として、わたくしは、現代人は、かれの自己と現代の哲學とを同時に肯定することはできないといふこととの合理的可能を信ずる。多くいふまでもない事柄ではあるが、社會的生活經驗と社會的生活實在は、この場合に、現代人の自己に屬し、現代の哲學には、それらが不備であり、不具であり、缺乏してゐる。

現代の哲學者が、眞理をいふことはある。けれども、それは、かれらが、現代の哲學を忘れて物をいふ時に限られて

ゐる。およそ、一人が、どれほど有能な哲學者であるかは、かれが、どれほど十分に赤ん坊のまなこで世界を見、どれほど完全に赤ん坊のことばで經驗を呼び名づけるかを觀察することによつて、最も精確に測知される。プレトーは、この測知方を適用して見て、すぐれた哲學者であつたことがわかる。ウイリアム・ジエームスも、同じ測知方を適用して見て、かなり非凡の哲學者であつたことがわかる。現代の哲學者は、かれらが哲學的言說をなす時に限つては、經驗に對する判斷と考察からは物をいはずに、讀んだ本と、聽いた講義のある記憶からのみ物をいふ。その本と、その講義が、それ自身すでに經驗以下であり、經驗以外であるのだが、それの迷信的追隨者の言說に至つては、ただその經驗以下と經驗以外が一層徹底する。それは層一層の程度に於いて、經驗以下に、經驗以外に墮落する。

形而上學は、そのことばのある意味に於いては、今後存在すべきでないが、そのことばの他のある意味に於いては、今後なほ存在すべきだ。今後存在すべからざる意味の形而上學とはなんであるか。それは、科學以前に科學の不完全なる代用としてそれの存在權を持つた形而上學だ。知識體系だ。その意味の形而上學は、科學と兩立しない。科學が發生し、且つ成長の途にのぼつた現代に及んでは、その意味の形而上學は、當然引退すべきだ。その意味の形而上學としての哲學は、神話に取つて代はつた知識體系だが、科學によつては、自身取つて代はられべき知識體系だ。現代の形而上學は、しかるに、反省と勇氣とに缺けてゐるために、科學時代に入つて、なほ依然として科學以前の知識體系に執着する。

現代の形而上學は、環境の進化によつて、存在權を失なつたものが、反省と勇氣を奮るひ起こして、自己改作による再生的適應を企てる代はりに、民衆の寛大と蒙昧の餘地をぬすんで、舊態そのままに自己保存に鋭意腐心する一形にほかならない。自知は、古代ギリシヤのソクラテスによつても、最近代のクーノー・フィッシャーによつても、哲學の一要件としてみとめられた。自己認識、自己批判が、現代の形而上學が、たしかに、最も必要とすべきものだ。

形而上學は、そのことばのある意味に於いては、今後なほ存在すべきだとわたくしはいうた。その意味の形而上學とはなにか。それは、科學の總果を食ひ、そして科學の總根につちかふ知的、精神的努力だ。その意味の形而上學は、科學以上に假說と想像の可能に自由機會を與へる。科學に加へるに進步的假說と進步的想像とをもつてしたものだ。方法と成績に於いて、かならずしも科學の總果を食ひ、そして科學の總根につちかはないとしても、精神に於いて、科學の子たると同時に科學の母たることは不可能でない。子、母は、この場合の譬喩として多少不適切だ。今後なほ存在すべきかたちの形而上學は、科學の一益友だ。それは科學と協力すべきあるものだ。そして、そのあるものは、經驗のおの〱の本質と、經驗のすべての關係とを知り、正しうし、完成することを目的とする知的及び全精神的努力だ。

この意味の形而上學が、現代に於いて、いかに大いなる注意を、社會的生活經驗に拂ふべきであるかは、多言を待たずして明らかであるべきだ。どうしてかといふに、たとひ、形式的には、今後なほ存在すべきかたちの形而上學は、經驗のおの〱の本質と、經驗のすべての關係とを努力の直接目的とすべきだとはいうても、そんな事が、文字通りの淺薄な、表面的な意義に於いて、人間によつて企てられやうもなければ、成功されやうはなほさらない。要するに、聰明なる選擇がこの場合の一大要件だ。

眼前のいかなる小さな、且つ平凡な出來ごとでも、それの原因は、全宇宙の歷史的總勢力だ。それこそ、一羽の雀子の落下にも、天の川原に於けるそれ以前の各動靜もいくらかの原因をなしてゐるにきまつてゐるし、太古のいかなる一男一女間の戀愛による往來訪も、嫉妬による口論も、あるひは、フランス革命の巨細も、南北戰爭の各經過も、わが明治、大正の各事件も、いやしくも、それらが、その眼前の一とつの出來ごとと以前の出來ごとであつた限り、その一とつの出來ごとが、現に出來た通りに出來るために必要なある條件であつたにきまつてゐる。因果律に對するわれらの信用

が單純にこの判斷を裏書きする。けれども、事實としては、すなはち、實際に於いては、一事件の發生を、それの原因を指示することによつて說明する人間の能力には極めていちじるしい限りがある。一事件にさきだつて在つた、もしくは起こつたすべての存在や變動を知りつくすことなどは空想としての資格をさへ持ちえない。眼前の雀子の落下の原因を知る目的にむかつて、維新の歷史などをしらべてゐたら、そのひまに、惡童も狡猫も逃げるかも知れん。あるひは、かれらは、第二隻を第二雀に新たにするかも知れん。眼前の雀子の落下の原因を知る目的の一が、もしくはすべてが、同樣の事件の再起を不可能に導くに存する場合ならば、その邊に惡童はうろついてゐないか、狡猫が樹間に欒ちうづくまつてはゐないかと、注意の範圍を選擇して、聰明に局限することが賢明だ。有目的だ。

これと似た原則にしたがつて、今後なほ存在すべき、すなはち、今後なほ現實に有用なかたちの形而上學は、經驗の全範圍を努力の對象とすべきだとはいうても、現代人の生活にとつて比較的に關係の切實な部類の經驗を、その形而上學は代表的に選擇すべきだ。さうであるとするならば、社會的生活經驗こそは、現代に存在權を有する形而上學の注意對象の焦點に位置されるべきだ。實に、國際戰爭も、階級革命も、家庭不安も、教育問題も、その一とつだけでさへ、またその一とつの一小部分だけでさへ、現代に於いては、思索と精神のあらん限りをあるひは常に、あるひはすくなくとも時々に要請する。人生は問題だ。しかるに、問題中の問題は、現代に於いては、深義、廣義の社會的生活經驗内に存することをなに人か有意義に爭ひえよう。新時代の形而上學としての新形而上學は、社會的生活經驗そのもののなかからこそ生まれいでべきだ。社會的生活經驗をほかにして、新形而上學の發生の礎地はない。現代の社會苦は、すなはち、國際戰も、階級爭も、たほその他の社會不安も、社會問題も、これを哲學的興味から考察するならば、新形而上學の產痛だ。

新裝した形而上學は、實は、すでに產まれた。學者と民衆がそれを見ないだけだ。それは、實に、學者と民衆の面前に呈供されてゐるのだが、かれらにはそれを見るだけの眼力がない。斯ういつた意味の事實も、たしかに、いくらかある。けれども、意思のまなこから見れば、過去は瞬間よりも短かく、將來は永久よりも永い。問題の要點は將來にある。社會哲學などいふけちな稱呼を保存したり、甘受したりせずに、哲學といへば、それは社會的生活經驗の本質と關係と價値とが第一に扱はれた知的、精神的努力であると一般に認知されるやうに、早く學者と民衆のめを覺ますことが目下の一必要だ。

社會科學の方法論としての認識論も、論理學も、社會科學の全精神としての形而上學も、社會心理學も、社會倫理學も、社會美學も、前述のやうな次第で、現代に於いて未發達だ。

例へば、社會美學の可能について考へるに、それは極めて有望だ。けれども、それは、いまなほ、ほとんど全然未着手だ。愛國心にしても、社會主義にしても、無產階級運動にしても、革命主義者にしても、デモクラシイにしても、實に、反動的政治組織主義者にしてさへも、保守的經濟制度主義者にしてさへも、眞と善の判斷にもとづいてそれらであるばかりではなしに、ある大いなる程度に於いて、一種の美判斷にもとづいてそれらであるのだ。美判斷の一特徴は自已目的にある。美的興味及び美的活動の主要性質の一は、それが手段價でなく、目的價であるところに存する。ガラス製の珠玉でも、それを美くしいと判斷する限りに於いて、その意識は趣味だ。純眞の黃金石でも、それが高價だからといふわけでそれを愛するならば、それは審美活動ではない。國民主義でも、軍國主義でも、帝國主義でも、民族自決主義でも、階級革命主義でも、平等主義でも、眞と善と利益と正義の意識の主張のみでは決してない。それらは、同時に、一種の趣味だ。自己目的だ。目的價だ。勿論、それらの社會的運動や社會的主張は、それらの發生の初期

またば當初には、可説明の理由を、あるひは功利的に、あるひは道德的に多分に持つてゐる。しかし、發達の勢ひが加速し來たるにつれて、また爛熟するに及んでは、多少、形式主義の要素を増してくる。ただ、わけもなく、デモクラシイがありがたかつたり、無產階級運動がうれしかつたり、忠君主義、愛國主義がたうとかつたりするやうに多少なる。その、わけもなく、客觀的には說明もできないしかたに於いて、ある思想や、傾向や、運動や、事實に無上の興味を覺えるならば、それは、それだけの美的生活だ。ただ、しかしながら、美は、根柢に於いて、眞や善や功利から獨立し、孤立しうる性質のものでも、關係の事柄でも決してない。眞を犧牲にしてゐるなと知れた瞬間に於いて、または善を犧牲にしてゐるなと知れた瞬間に於いて、あるひは、眞及び善を犧牲にしてゐるなと知れた瞬間に於いて、その認識以前には立派に成立しえた美も、美でなくなつたり、一層不完全な美にされたりする。それゆゑに、たとひ、すべての社會運動や社會思想や社會信仰や社會行動や、慣習や制度や理想やは、必然的に、多少の美的活動としての意義を帶んでゐるとはしても、眞や善と協力しえない美は、それだけ幼稚な、低級な、野蠻な、未成長な、不完全な美であるのだから、その美的活動自身の本質的必要に忠實であるために、人は、それらの美的活動を常に反省し、また批判する要がある。現代の社會不安は、決して、經濟學や、政治學や、倫理學や、教育學の努力のみによつて救濟される性質の事柄ではない。これは、實に、ある正しい意味に於いての社會美學の發生と成長を待つて始めて解決される問題だ。しかるに、社會美學は、名稱として存在しないことは多く問題とするに足らぬとしても、實に於いてそれの曙光をだに、いまだ山頂にさへ投げしめさないでないか。最近に發表された西田幾太郎氏の「眞と美」(「改造」誌上)の如きも、わたくしの僞はらざる感想をいへば、それは、單に筆墨の浪費であつた。

社會心理學にしても、マクヅーガル氏のその通りの名の著や、ワラス氏の『政治に於ける人間本性』あたりが代表的

に呼びあげられる現狀は、明白に不完全だ。

三、現代政治の社會盲

現代政治の社會盲については、わたくしは、本誌上に、及びその他の機會に於いて、再三のみならず意見をのべた。例へば本誌の最近のある號に發表した「無政治の發見から社會國家の發明へ」も多少それであつたし、その久しからぬ前の號に發表した「政治の本質價を考究して現代國家不安の將來を論定す」もまた多少それであつた。政治の社會盲にもまして錯誤的な事實はあるまい。どうしてかといふに、政治といふ人間的努力の對象は社會そのものであるべきだからだ。政治が社會盲であることは、實に、政治が政治盲であることに該當する。一致し、または歸趨するといふ意味に於いて該當する。現代政治は、その關係に於いて、無自覺だ。

社會は、現代に於いて、國際または人類大にひろがつて發達しつつあることは、わたくしも、從來、多少の筆舌を用ひて注意し來たつた事柄だ。社會は、しかしながら、各職掌間、各專門間にも發達しつつある。それは、また、兩性間にも、過去及び現在と現在及び將來との間にも、すなはち、時間的先生者と時間的後生者との間にも發達しつつある。社會は、現代に於いて、驚くべく多方面に、そして大規模に發達しつつある。しかも、その多も、大も、要するにある一の屬性だ。形相だ。そして、その一の自覺が、行動的には政治によつて代表されべきだ。

現代政治が、はたして、いかなる程度に、この一の自覺を行動的に代表しえてゐるかは、現時の國際關係を見ても、現時の階級意識と、それの條件としての事情を見ても、頗る明瞭であるといはねばならん。政治は、實に、人間協力の全體的範圍を直接の對象として、これに組織を與へ、統整を與へ、斯くして、結局、保導を與へる行動的努力であるべ

きだが、現代に於いては、政治は、國際的社會に於ける富强國民の專制としての帝國主義と、國內的社會に於ける富强階級の專制としての資本主義とによつて、あまりに甚だしい程度に代表されてゐる。社會は協力だが、この協力としての社會が、現代政治のまなこには見えない。現代政治のまなこには、協力各員のうちの專制的强者だけが見える。その强者以外の全員は、その强者の手段價値だけのものとして見える。そんなまなこは、政治眼とはいへない。それは偏局眼だ。私黨眼だ。單なる反社會的、非社會的利己眼だ。政治は手によつて、いひかへれば意思によつて代表されるけれども、手が動く前に、眼がその手の動くべき方角を見さだめなくてはいかん。意思が發動するにさきんじて、その意思に於ける統導的要素としての目的觀念が確立されなくてはいかん。現代政治には、社會眼が開かれてゐないゆゑに、社會手の動きやうがない。社會意思の發動しやうがない。階級爭も、國際戰も、實に、現代に於いては、政治の社會盲にそれの原因を有することをなに人かついに否定しえよう。

田中王堂氏が、あまり遠くない過去の本誌及び『婦人公論』誌上等に於いて、時代後れのかたちに於いて國民主義を迷信したり、最近また本誌上に、後ればせに國際主義に參加したかの如き口吻を弄したなどは、恐らくは、前節のある場處に、現代哲學の社會盲の一例證として適當に注意されべき事柄であつた。

四、現代經濟の社會盲

現代經濟の社會盲は、生産者も、消費者も、また生産者の終役者としての分配者も、その生産行爲、消費行爲、及び分配行爲の動機すなはち目的觀念を、孤立的、分離的に私已に局限してゐることによつて明示される。生産者は、消費者の目的をば、消費者自身に同情したかたちに於いては顧慮せずに、生産者自身の利益を唯一の目的として生産行爲を

決定する。されば、現代の生産者は、それが資本家であり、企業者である場合には、消費者の必然蒙むる禍害を豫知しつつも、自利を目的として拂底高價を策したり、あるひは、生産者自身の社會に於ける大多數男女の生存のための必要品を生産しうる事情下にも、單純に私益の大小を打算し、計較して、その社會に於ける少數者の贅澤品を生産した方が有利だと知れば、遠慮も躊躇もなしにその有利生産に機會を與へる。分配者としての卸し及び小賣り商人も、購買力や生産費の眞實情には頓着なしに、儲けうるおの〳〵の機會をぬすみ、奪ひ、純私的に利用せねばやまない。消費者も、警官とさへ見れば敵視する慣習を助長させられた日本の民衆にも似て、やすく買ふことのみに腐心する。みづから耕やしてみづから食ひ、みづから織つてみづからき、みづから建ててみづから住む自給自足の身の上ならば別の考慮をもあたひするが、買はれることをあてに、必要として生産し、生産者のおかげで食ひ、き、住み、その他、自己の經濟的消費の必要を滿たしうる關係下に生活しながら、すなはち、この意味の協力下に生活しながら、行爲の結果は必然的に公益か公害かであると知れてゐるにかかはらず、その行爲の動機をば專ら私利に制限することは、いかにも社會盲ではないか。

生産行爲としての勞働は、その勞働者自身にとつて、すくなくとも現實的に、すなはち饑寒を避けるために唯一の方法として、窮策として、有用であり、必要であることは、かれが勞働することによつて、すなはち、勞働しないことよりも、勞働することを選ぶことによつて、單純に告白されてゐるが、その勞働者の社會に於けるかれ以外の多く乃至すべての男女にとつても、それの結果に於いては有用であり、必要である。勞働の結果はとみだ。とみは、すべての人人が、すくなくとも消費人としての性質に於いて、これを自己の直接の必要物としてみとめる。されば現代人としては、勞働の社會價をみとめべきだ。窃盗は一行爲だが、窃盗は、それの動機に於いても、結果に於いても、窃盗者自身にと

つてのみ有用であり、必要であつても、すなはち、有價であつても、かれの社會に於けるかれ以外の多く乃至すべての人人にとつては有害だ。かくして、竊盜には、私價はあるが、社會價すなはち公價はない。勞働は、しかるに、純眞、正當、善良な學問や藝術や敎育や立法や行政と同樣に、公價を有する。しかるにもかかはらず、現代人は、ことに現代に於ける勞働者以外の大多數者は、勞働の社會價をみとめるにあたつて吝嗇だ。勞働には、生存競爭界に於けるあるひは本質上の、あるひは制度上、環境上の弱者が、自己保存の最後の方法として自然に、たとひいや／＼ながらも從事するから、これを、社會奉仕の功績としての社會價といふ側面から評價するには及ばないといふ觀念が、現代に於ける勞働者以外の大多數者の勞働觀を支配してゐる。これが社會育の一大現實でなくてなんであらう。

經濟は商買だ。商買は儲けさへすればよい、儲かりさへすればよいといふ一般的傳統的觀念が現代人の頭腦に、心胸にこびりついてゐる。けれども、これは、明白に不料見だ。經濟行爲は、現代に於いては、それの動機に於いて、政治以上に私的であつてはならず、政治以下に公的であつてはならん。國家社會主義や、都市社會主義や、國家資本主義や、都市資本主義や、共産主義や、公營主義の精神と方法が、種々の程度と樣式に於いて、近時の多くの國々と社會に、事實上、發達して來たのは、經濟生活に於ける社會眼が、經驗に敎へられて、段々と開けて來たことをしめす。

五、現代敎育の社會育

敎育は、十九世紀に於ける國民主義の勃興以來、また同じく十九世紀に於ける産業文明の發達以來、大體に於いて、帝國主義、資本主義の友であり、臣下であり、ある程度に於いては君主でもあつた。十八世紀に於いて著大なる發達を遂げた個人主義が、その後に發達した國民主義を、帝國主義のかたちに決定することによつて利己化し、同じくその後

に發達した產業主義を、資本主義のかたちに決定することによつて利己化したといふ意味及び事情もそこにはある。ビスマークも、ニーチエも、カーネギーも、十九世紀の教育を反映する。深淺、精粗の差は限りもなく保たれてゐながらも、十九世紀の教育の支配調は、成功主義にあつた。社會我の自覺は、十九世紀の教育に於いては、まだ閉ぢたる卷であつた。戰爭、階級爭、これらは、教育的側面から考察すれば、十九世紀教育の蒔いた種の成長にほかならない。十九世紀教育は、一言にして、實に、利己狂であつた。そのことばのある意味に於ける自我狂は、利己狂の比較的に深い、精しい質のものにほかならない。最近、その反動として、多少の社會狂が現はれて來たのは、歷史的論理から考へれば、極めて當然だ。自然だ。

現代教育の最大要務の一が、社會盲の反省に存することは、さういつただけでさへも、底ぶかく、幅びろい刺戟を現代人に與へうるだらうと期待されるほどにも、いまや、理性によつてよりも、本能と行動によつて、反逆的、革命的、爆發的、奔騰的、傾向的形式を採つて、かしこに、こゝに、青年と學生を不完全なる先覺者として、發擬だてられて來た。

六、現代道德の社會盲

現代倫理學の社會盲をば、わたくしは、第二節の「現代哲學の社會盲」論のなかで扱ひうべきであつた。しかし、學說としての現代倫理學の社會盲だけでなく、もつと廣く現代道德の社會盲について、こゝに多少の考察を企てる。

現代倫理學が、概して、いかに社會盲の批難をあたひするかは、リップスの『倫理的根本問題』を見本として採用するならば、むしろ酷烈にすぎるほどだ。これは、他面に、デュヴィー、タフツ兩氏の『倫理學』の如きもあるから

だ。けれども、大觀するに、現代の倫理學は、爭ふ餘地ほとんどなく、社會盲の深層に半生半死の狀態を續けてゐる。現代倫理學は、人格々々と高聲に連呼するけれども、その人格は、社會から抽象された怪物だ。されば、現代の倫理學者は、國際戰爭にも、階級革命にも、なにものを與へようとも曾つて本氣には企てなかつた。またなにものをも與へえなかつた。現代の倫理學者と現代の社會の意思と行動と思想とは、完全に無關係だ。沒交涉だ。ことに倫理學の場合に於いては、行動のための學說であるべきだから、これは現代倫理學の過失を意味し、病弊を意味し、不完全を意味する現象だ。體驗も、反省も、自覺も、意思も、行爲も、現代倫理學に於いては、現代哲學一般に於いてのやうに、抽象的個人または抽象的人格を假定し、妄想してのはなしだ。それらは非實在だから、それらの學說は無作用だ

ジムメルは、かれのニーチェ論に於いて特に責任に注意した。カントが横に、空間的のかたちに於いて思索し、主張した責任を、ニーチェは、縱に、時間的のかたちに於いて信仰したのだといふのが、ジムメルが、ニーチエの「永久再來說」に對する試釋だ。社會は、たしかに、横に、同時代の多くの人人を包容し、縱に、過去及び將來の多くの人人を包容する。その多くの人人の間に、結果に於いての協力が、利、害、禍、福等の種々のかたちに於いてありうるならば、動機に於いての協力を、結果に於ける利福の保護と增進を目的とする性質のものに、自由意思を使用して決定することは、たしかに、倫理的一根本必要だ。社會が、それの內包に於いて複雜を增し、またそれの外延に於いて廣大を增すにしたがつて、しかるに、責任を確認し、明覺し、完全に實現することの困難が增す。現代の道德的諸弊は、驚ろくべく高い程度に於いて、責任の不完全にそれの原因を持つ。戰爭も、革命も、家庭不安も、幼者問題も、責任心の不具に、また幼弱に、それの說明を見いだす。

責任の抽象的原則的認識としての概念構成は難事でない。責任は自決能の一論理だ。自決能は意思だ。人がある行爲

を選擇するならば、かれは、その行爲の結果をも選擇したのだと判斷すべき理由がある。責任は、實に、行爲者が、その行爲の延長としての結果を、その行爲の出發點としての動機に十分に關係させて認識し、評價することを、それの主要內容とする。これだけの理論は、なに人にも簡明であるべきだと思ふが、意思に原因を有する協力としての社會が、それの內包と、それの外延とに於いて、現代に於けるが如くに、甚だしく複雜化し、廣大化してくると、その簡明なる理論の具體的認識、評價、實現は、決して容易の業でない。それには、社會を、現にそれが存する通りの、また現にそれが存するだけの、內包上の複雜さと、外延上の廣大さとにしたがつて知る必要がある。それを、完全に體驗的に知ることは不可能だとしても、なるべく完全に體驗的に知る必要がある。現代の倫理學者は、第一に、この努力を惜しんでゐる。

社會眼なき人格心は不具だ。畸形だ。すくなくとも幼弱だ。現代の倫理學は、人格盲ではないつもりだらう。しかし、現代に於いて、また、現代に及んで、なほ社會盲である人格心は、實は、同時に人格盲であるのだ。わたくしは、リップスの『倫理的根本問題』を、人格盲の一適例としてここに再び注意する。

所有の倫理に代はる創造の倫理の可能及び價値も、實は、單なる形式的論理の上の問題ではなく、所有は社會盲であり、創造は社會愛であるといふ一側面の事情と理由に、その問題の主要興味は、たとひ不覺または無意識ながらも、それのいのちを汲んでゐるのだ。

社會盲は、現代倫理學に加へられる批難であると同時に、もつと廣い、深い存在としての現代道德そのものに加へられる批難だ。學としての倫理は、行としての倫理を目的とすべきだから、現代道德の社會盲は、現代倫理學の社會盲以上に遙かに大きい問題だ。

社會主義の感情的信奉から理智的建設へ

林　癸未夫

一　宗教的信仰としての社會主義

私は曾て、我國に於ける社會主義運動の先驅者の一人であつた人の口からかういふ言葉を聽いたことがある。「自分が生れて初めて社會主義の理論に觸れた時には、狂喜——恐らく青年が初戀の叶つた場合に感ずるであらうやうな——それに似た興奮を禁ずることができなかつた。そしてかくの如き眞理を普く宣傳し且其實行を圖るために、自分の一生を捧げることができるならば、よし中途に斃れて止まうとも、こんな生きがひのある生涯は他に決してあるまいと、一圖に思ひ極めてしまつた」と。

私は竊に思ふ。いやしくも現代の社會生活、殊に自己の經濟生活に多少苦い體驗を有つてゐる人であるならば、其人が初めて社會主義の理論を聽き、其企圖を知り、それが未來に建設しやうとする理想社會の輪廓を說き明かされた場合に感ずる一種傾倒の念は、恐らく皆之と同様であるに相違ないと。それ程社會主義は現代の經濟的不遇者に絶大な魅力を有つてゐるのである。社會主義が學問上の理論としてよりも、寧ろ宗教的の信仰として無產者を陶醉せしめる所以は全く其處にある。眞の宗教的信仰が常に弱き者、惱める者、虐げられる者の熱情に哺くまれてのみ育ち得るものであるやうに、社會主義も冷靜なる學理として專門家の論究に限られてゐる間は、如何程それが新眞理の發見であらうとも、地動說や進化論によつて人類の常識に受け納れられた科學上の眞理と同じやうに、徐々に無熱情に民衆によつて理解されては行くにしても、彼等を現實の社會運動の水火に飛び込ましめる程の强い原動力とはなり得ないと思ふ。

然るに幸か不幸か、社會主義は最初から書齋で研究されつゝ同時に街頭に說教されたのである。しかも說教者は之を科學として提唱したけれども、無產者は之を宗教として受取つたのである。無產者が科學として受取るべく餘りにそれは難解であつて、彼等はそれを理解し得べき何等の智識的素養を有たなかつ

た。が、同時にそれは無産者が科學として却けるべく餘りに實感的であつて、彼等はそれに傾倒すべく充分の情緒を具有してゐたのである。從つて近世の社會主義が其科學的たる點に於て、初期の空想的社會主義から鑑別され、評價され、尊重されなければならぬとする其特權を要請して息まぬにも拘らず、其特權を正當に認容するものは只少數の高級智識者に止まり、大多數の無産者は事實に於て其特權には何等の注意をも拂ふことなしに、又拂ふ必要を認めることなしに、社會主義の有する空想的神殿に其信仰の本尊を安置して、其祭壇の前に禮拜することによつてのみ、自己滿足を見出さうとしたのである。何故に資本主義が背理であり社會主義が眞理であるかの科學的論證は彼等の聽くを欲せず、又聽くも解せざる所である。唯彼等は結論だけに滿足することを欲する。そして社會主義の與へる未來の無産者王國の速に地上に建設せられて、彼等の苦難を救濟してくれることをのみ待ちあこがれる氣分に浸らうとするのである。而して其日を一日でも早めることのできるためには、水火も辭せないとする程の熱情が屢々彼等の胸奥に燃え上つて來るのである。かういふ心もちを以て社會主義を受取る者に取つては、確にそれは宗教的信仰であつて、私は社會主義者を以て自ら任ずる現代の無産者中には、まだ餘程此種の者の多數を含むに相違ないと想像するのである。

二　社會病理學としての社會主義

私は無産者と言つた。無産者必ずしも無識者ではない。併し無産者の大部分が勞働者であると同時に、勞働者の大部分が、組織的な知識と科學的な推理力を缺いてゐるといふ意味に於て、無識者であることは爭はれない。既に無識者である以上は、かなり高級な科學的知能を必要とする社會主義の理論を、眞に良く彼等に理解せしめることが殆ど不可能であることは、吾等の承認しなければならない事實である。

然らば無産者中の少部分を占める有識者が悉く社會主義の理論に精通してゐるかといふに、必ずしもさうでない。社會主義の理論は少くとも經濟學に對して相當の豫備知識を有する者が、かなり注意深い研究と思索とを費さなければ、克く之を理解することは難い。從て單に普通の知識と讀書力を有する者でさへあれば、誰でもそれを咀嚼することができるとは決して言へないのである。例へば現時の所謂プロレタリヤ文學の評論家或は創作家と稱せられてゐる人々は、紛れもない有識者であるに相違ない。併し彼等が果して社會主義の理論に幾何の造詣を有するかは甚だ疑問であつて、案外それは社會主義に宗教的體

拜を捧ぐることしか知らない無識者と同じ程度に在るのではないかと想像されるのである。勿論それはプロレタリヤ文學者としての彼等に責むべき缺點ではないかも知れない。空想に生き熱情に動く彼等の本領としては、現社會の實相に即して、階級的反抗憎惡の念さへ固ければ、それでプロレタリヤ文學者としての資格は十分である。從て私は毫も彼等を非難するのではなくて、唯社會主義の理論に對する無理解が獨り無產者中の無識者のみに限られないことを言はうとしてゐるのである。

然るに此處に一群の有識者がある。彼等は社會主義に觸れた其最初の陶醉に於ては毫も無識者と變る所は無いのである。只併し彼等は其有する知能と推理欲とのために、此陶醉を理論づけずしては自ら安んずることができない。其結果彼等は社會主義の理論に關する精到な知識を要求し、此要求に導かれて、廣く深く其科學的追究を續けて行くのである。かくの如くにして彼等の知識が進み、考察が加はり、理解が展けて行くに從うて從等が最初に懷いてゐた熱情は次第に理智によつて規律せられ、いつしか信仰よりも、より多く理智に信賴しやうとする自己を見出すやうになるのである。そして彼等が自己の感情の向背を律するに、理性の背否を以てすることができる程度に冷靜であり得さへすれば、早かれ晩かれ、彼等は必ず一つの危機に遭遇しなければならぬことになるのである。

所謂危機とは何であるか。それは社會主義の前進的方面、詳しく言へば、それが未來に約束する新社會組織並にそれに到達する爲に必要とされる手段が、果して眞に人類全體の爲めに福利であり得るか何うかと言ふことの疑ひに逢着して、此處に是非とも自己將來の社會思想及社會活動の基本的精神として社會主義を捧持すべきであるか否かを決しなければならぬことになる其場合を謂ふのである。

最初から社會主義に無關心であつた人、或は感情上から絕對に之を拒否してゐた人は論外である、併しいやしくも眞面目に現社會の實相を觀察する人々に取つては、現社會が其組織の中に有する何等かの缺陷に胚胎して、幾多の矛盾、背理、不公正を包擁してゐることに氣付かないわけには行かないのである。而して既にそれに氣付く程の者ならば、是等の社會惡の由つて來たる最大の原因を指摘して、それを耕除すべき理由と方法とを闡明しやうとする社會主義の理論に傾聽しないわけには行かないのである。まして最初に社會主義の理想に陶醉した經驗を有つてゐる有識者に取つては、社會主義から出來るだけ多くの眞理を攝取しやうとする熱心を以て之に臨むのであるから、其人が餘程學者的良心の强い、理智的省察に勝れた人でない限

りは、社會主義理論の有する巧妙なる辯證法の弱點を摑むことは、頗る困難であつて、思想的には其信徒となり了する者が甚だ多いことを否むわけには行かないのである。

言ふまでもなく社會主義は科學であつて宗教ではない。それはユートピヤ郷の豫言書ではなくして、現實社會の解剖圖である。從つて社會主義理論の根柢は現社會生活の樞軸ともいふべき經濟組織を支配しつゝある原則を爬羅剔抉して、其不合理を究明し、此經濟組織を改造することによつてのみ、恒久の社會的正義と人類の平和とを確立し得べき所以を立證しやうとする所に在るのである。例へばそれは病理學の如きものである。現社會の有する疾患の病源を究め、其症狀を說き、又如何にそれが全體の健康を傷け、活動を害しつゝあるかを辯證して、それに根本的の治療を施すことの急務なることを論攻する點に於て、殆ど到れり盡せりの感があるのである。無論枝葉な點に就ては學者間に異論が尠くないにしても、大體に於て、社會病理學としての社會主義は疑ふべからざる定說であつて、今日と雖、將來と雖、此定說を覆すが如き新學說が生まれるであらうとは、到底吾等の想像できないことである。從つて社會主義が社會病理學である限りは、或は社會病理學として研究することの興味にのみ吾等が終始する限りは、吾等は何等の危機にも見舞はれることなしに、智的安心立命の境地を其處に見出すことができるのである。

併しながら、正か誤か、大多數の人々は社會主義を單に病理學として見ることに滿足し得ない。彼等はそれを內科學及外科學として見る。そして診斷學も臨床講義も手術も投藥も、すべてをそれに期待しやうとする。此處に社會主義理論の破綻が初まるのである。

社會主義は病理學としては殆ど完成されてゐるけれども、內外科學としては、完成はおろか、實はまだ學問としての形態を備へるまでに至つてゐないのである。併しながらそれが病理學として先人の學說を根柢から覆すやうな眞理を提唱し來つた其餘勢に驅られて、直に內外科學の領域にまで殺到し、立ち所に社會の疾患を、しかも膏肓に入つたほどの重症を治療しやうと焦慮し初めたゝめに、其任に當つた人々や診斷も手術も投藥も、不正確であり、未熟であつて、缺點や遣り損ひが甚だ多いばかりでなく、諸家の說に矛盾を生じ、統一を缺ぎ、仲間同士の內輪揉めに日を送つて、肝腎の疾患が却てます〳〵重態に陷つて行くのを何うすることもできない狀態に立ち到つたのである。從て差當りの治療法としては、依然舊式の病理學を其礎とする舊式の內外科學、即ち社會政策が一般に行はれて、新式の病理

學を基礎とする新式の内外科學たる社會主義は、徒に縱論横議に曠日彌久して、一向實施の機運に向ひ得なかつたのが、大體に於て過去の實狀であつたのである。

惟ふに現社會の有する諸害毒の最大の原因を、個人主義的經濟組織に見出すことが、社會主義理論の根柢であつて、私有財産や不勞所得の不當、營利的生産手段や剩餘價値搾取の不合理、貧富の懸隔や階級爭鬪の弊害を、悉く個人主義的經濟組織に歸納することによつて、社會病理學としての社會主義理論が構成されてゐるのである。而して此理論の辯證法として用ゐられたる唯物史觀や資本蓄積論を其儘に受け納れる者も然らざる者も、社會病理學としての社會主義理論が、大體に於て動かすべからざる眞理であることを、既に十分に認容して居ると言へるのである。

併しながら此個人主義的經濟組織を、他の如何なるより善き經濟組織に變革すべきであるか、又如何なる方法により、如何なる時期に於て其變革を造就すべきであるかといふ、所謂内外科學としての社會主義理論は、各方面に分裂して、何れが果して眞理であるかを　總ての人に認容せしむるに足るべき一體系をまだ形造つてゐない。そして又今日までは、それを形造り得べき傾向をも示してはゐないのである。具體的に言へば、如何なる經濟組織を以て現在のものに置きかへるべきかの主張に關しては、共産主義があり、國家社會主義があり、サンデイカリズムがあり、ギルド社會主義がある。又如何なる手段によつて目的を造就すべきかの主張に關しては、議會主義があり、ボルシエヴヰズムがあり、I・W・Wイズムがある。そして是等は互に論難し排擠し、各がじゝ自説の優越を競うて相下ることを知らないのである。而して又是等の何れもが其理想とする新社會に於ける人類生活の充實康寧を合理的に辯證して、總ての人を首肯せしむるに至るべき提案を成し得ないのである。若し彼等の何れかがかゝる提案によつて、内外科學としての社會主義を完成することができたならば、危機は最早去るであらう。併しながら危機は未だ容易に去るべくも見えないのである。

三　書齋の人と街頭の人

社會主義理論の批評的、回顧的、否定的、破壞的、消極的方面は總ての有識者を首肯せしむるに十分なる根據を有することは疑ひないのであるが、それと同時に社會主義理論の計畫的、前進的、肯定的、建設的、積極的方面は有識者の多數をして適從する所に惑はしむるほど、多くの弱點を有することが爭ふべからざる事實なのである。そして斯ういふ事實が、曾て一度社

會主義に宗教的信仰を捧げた經驗のある有識者の意識の上に、彼等自らの社會主義理論に對する檢討の結果として確認された場合に於て、彼等は是非とも次の問題に逢着しなければならぬのである。それは、彼等將來の社會生活を律すべき思想及活動の指針として、現存する社會主義の實行的諸提案中、何れを選んで之を自己の信念として把握すべきであるか、或は、姑くその何れをも選擇することを避けて、更に研鑽を積み、思索を重ねて、おのづから知見の開け、信念の生ずる時期を待望すべきであるか、といふことである。此二つの態度の何れを選ぶべきかによつて、其人が學究として書齋に殘るか、實行家として街頭に出づるかの運命が決するのである。これは其人の生涯に取つて大なるクライマツクスでなければならない。私が危機と呼ぶのは實に此意味に於てゞある。

重ねて言ふ、これは勿論社會主義に同情も理解も有ち得ぬ人々を初めから問題外に措いての話である。併し社會主義に深い同情を感じ、充分の理解を具へたからと言つて、其人が社會主義の實行家として街頭に立たなければならない道德的義務を有つて居るとは決して言へないのである。それは必ずしも各個人が自己の生活方法の決定に完全な自由を有つべきであるといふやうな理論からではなくて、寧ろ同情や理解が常に直に人を信條に導くものでないといふ平明な事實を基として言はるべきことである。純感情の發作としてならば知らず、苟しくも組織的思索を通じての理性の判斷の上に、自己の社會思想及社會活動の基調を定めることの必要を感ずる者に取つては、單に同情や理解のみを以て、直に自己の實生活の指針とするわけには行かない。何うしても其處に自己の理性を滿足せしめ、良心の裁可を經ることのできる的確なる計畫が自己の前途を照明することを必要とするのである。そして其計畫は建設的であり、積極的であり、又かなりの程度まで具體的でなくてはならないのである。かくの如き計畫を、自發的にまれ、他働的にまれ、自己の信念の裡に確保することのできた曉に於てのみ、吾々は敢然として實行の戰線に馳せ參ずることができるのである。併しながら、悲しいかな、社會主義は未だ吾等の信念の裡に確保するに足るべき十分な建設的、積極的、具體的計畫を示してくれない。其故に、唯其故にのみ實行者として街頭に出づることが出來ない。又出づることを欲しないのが即ち第二の部類に屬する人々の態度である。

然るに、これとは何うしても別の態度を取らなければならない人々が其處にある。彼等は建設は常に必ず破壞の後に自ら來るべきであることを信ずる。從て破壞に先立つて建設の計畫に

沒頭し、其計畫の十分に具體化せぬことを理由とし若しくは遁辭として、破壞に躊躇することを以て甚しい懸案であるとする。苟しくも現社會に營利的生産の、貧富の懸隔の、階級的差別の存在することが、人類の禍害の根源であることを確信する以上は、唯其確信だけで、社會改造の實際運動に飛込むに十分な理由ではないか。如何なる陣營を占め、如何なる戰略を用ひ、如何なる武器を選ぶべきかといふが如きは次の次の問題であつて、すぐさま戎衣を纏うて階級鬪爭の戰線に馳せ向ふことが吾々に焦眉の急務である。かう信じてゐるのが即ち第二の部類に屬する人々の態度である。

第一の人々からすれば、第二の人々は餘りに短慮であり、輕卒であり、無謀であり、暴勇であるやうに見える。第二の人々からすれば、第一の人々は餘りに思案倒れであり、優柔であり卑怯であり、無氣力であるやうに見える。併しこれは餘儀ないところである。而してかくの如き態度の分裂を齎す最も重な原因は、畢竟各自の性格に在るのである。多血質で感情に富み、活動を欲する人は進んで實行家となり、神經質で用心深く、靜思を愛する人は退いて學徒となる。實行家からすれば學徒は餘りに談理の遊戲に耽つて經世濟民の熱情を缺き、學徒からすれば實行家は餘り猪突猛鬪に偏して深謀熟慮の用意を忘れてゐる。併しながらかくの如き態度の相違が、意見よりも寧ろ性格に因るものである以上は、又如何ともすることのできない事態と認めなければならぬのである。

四　勞働組合の白晝夢

私の見る所によれば、過去及現在に於ける社會主義の實行運動なるものは、前に述べたやうな、社會主義の建設的方面には重きを措かないで、直に現社會組織の破壞に猛進しやうとする若干の有識者と、社會主義の理論には毫も頓着することなしに、唯それが漠然未來に約束する理想郷に對して、宗教的信仰を捧ぐる一群の無識者との、時としては獨立したる、時としては結合したる運動に外ならないものであつた。そしてそれは私が上來述べ來つた諸考察から當然歸納されなければならぬ事實であると私は信ずる。

然るに過去及現在に於ける社會主義の實行運動者が、此二種の人々から成立つてゐたことは、二樣の意味に於て其運動に大なる弱點を提供したものであつた。第一は、彼等の運動を指導したる頭腦が、理智的よりも遙に多く感情的であつたことによつて、彼等の陣營は常に内訌によつて分裂し、强固なる協同戰線を形造ることが到底不可能であつたといふことである。これは

國民的にも國際的にも、社會主義運動の過去の歴史が、殆ど内部の爭論、反目、分裂の歴史であるといふ事實によつて證據立てられることであり、又現在各國の社會主義者が、大別して第二及第三の兩インターナショナルに分裂し、細分すれば更に多數の流派に分屬して、互に冷嘲熱罵を交換し、到底融和すべからざる現狀に在ることによつても首肯されることである。若し彼等が今少しく協調的であり、理智的であり、建設的であるならば、假令彼等の歩調は緩慢であつても、目的地への到着は却て迅速であり得るに相違ないのであるけれども、彼等は然かあるべく餘りに狹量であり、無反省的であり、好戰的であるために此弱點を何うすることもできないのである。これは確に全體としての社會主義運動の一大憂患でなくてはならないのである。

　第二の場合は恐らくもつと重大である。社會主義に對する宗教的信仰は、それが究極に於て宗教でなくて科學である以上は、當然一度は醒めなければならないものである。しかも有識者は、既に述べたやうに、自己の理智的檢討によつて、徐々に、自然の經路を辿つて、宗教としての社會主義から科學としてのそれに推移することができるのであるが、無識者には到底それが許されないのである。彼等の信仰は唯一回の演説によつても、唯一篇の論文からでも、忽ち熱火の如く燃え立つのであるけれども、此熱火に冷水を注ぐものは、自己の理智的判斷でなくして、常に外界の現實的な生活である。彼等が此現實を凝視する時に、其信仰と其生活との間の餘りに大なる空隙に先づ驚怖するのである。そして僅かの躓きは彼等をして意氣の沮喪を感ぜしめる。而して次に來るものは信仰に對する絶望と、因襲的な現實生活への復歸である。無論彼等の信仰を繋ぎ留めるために、其指導者によつて絶えず熱烈な宣傳が試みられるけれども、其効果は概して微弱たることを免れなかつたのである。

　かくの如くにして、社會主義に對する宗教的信仰から目ざめたる勞働者は、理想郷建設の夢から、現實生活改善の努力に轉ずるのである。現實は常に理想よりは醜い。併しながら彼等は勗めてそれに甘じやうとする。甘じつゝそれを改善すべき階段を歩一歩に固めて行かうとする。其處に彼等は社會主義から隔離した別箇の針路を開拓したのである。所謂固有の意味に於ての勞働組合主義なるものがそれである。過去の勞働組合運動は社會主義運動に向つて障壁は築かずとも、嚴に戰線を區別して、協同運動に對する誘惑から回避することを怠らなかつた。それが大體に於て戰前までの各國の狀勢であつたのである。そしてかくの如き勢こそ過去一切の社會主義の實行運動をして極めて部分的にしか成功せしめなかつた所以であり、又其成功

を永續せしめ得なかつた所以である。

併しながら右の如き狀勢が、戰後に於て餘程變化したことは爭へない事實である。此變化を招來した主たる動因は勞農露國の建設であつた。これは言ふまでもなく過去に於ける社會主義實行運動中の最大の成功であつた。此成功を傳聞したる各國の勞働階級は、俄然再び社會主義に對する宗敎的信仰を恢復したのであつた。其結果曾て夢幻的な誘惑として勞働組合運動から回避された社會主義は、現實的な福利として再び熱心に彼等に追求されやうとするに至つた。かくの如くにして獨逸でも、佛蘭西でも、伊太利でも、英吉利でも、勞働組合の大旗の尖端には、翻々として赤旗の揚るのを見たのであつた。

併しながらかくの如き勞働組合の白晝夢はやはり永續しなかつた。彼等は復もや現實暴露の悲哀を感じた。其理由は蓋し二つある。其一つは勞農政治の根幹ともいふべきプロレタリヤの獨裁主義が西歐各國の勞働組合を承服せしめなかつたことであり、他の一つは第三インターナショナルが世界の社會主義者に號令しやうとした其企圖が、西歐各國の無產階級を反撥せしめたことであつた。

私はこれから勞農革命の特質を論究して、たとひボルシエヴヰズムが如何ほど露國に於て可能であり又成功的であつても、それは何處までも唯露國だけのものであつて、世界に共通なる社會主義の前進的指針、建設的計畫として、各國のプロレタリヤにそれを採用せしむることのできない所以を明かにしたいと思ふのである。

五　勞農革命の特異性

プロレタリヤの獨裁は形式的の理論としては兎も角、露國の實際の場合では少數者（ミノリティー）の專制を意味するものである。若し社會革命が國民の多數者（マジョリティ）の支持によつて行はれる者とするならば、普通の意味に於てのデモクラシー――ボルシエヴヰキによつて「ブルジョアのデモクラシー」と呼ばれるもの――は革命の手段として十分有効であり得べき筈である。然るにデモクラシーによつては到底革命の目的を達することができないことを前提として、プロレタリヤ獨裁論が生まれるものである以上は、それは必然的に、少くも或過渡期に於ては、革命的なる少數のプロレタリヤが非革命的なる多數の國民を强壓し、其自由を奪ひ、其意志を拘制することを必要の手段とするのである。暴力を用ゐる必要もそれが爲に起るのである。併しながらボルシエヴヰズムの反對者からすれば、假令少數者の目的が究極に於て正當であるにせよ、唯其理由によつて多數者に强壓を加へ、其自由

を制壓することによつてのみ實行し得るやうな手段を取ることは、其手段自體が過去の支配階級の傳統的罪惡を模倣し、踏襲するものであつて、革命の事業に對する大なる冒瀆でなくてはならないのである。何となれど個人の思想と言論との完全なる自由の確立を餘所にして、當來新社會の理想を建設することは不可能であると思はれるからである。

惟ふにボルシエヴヰキがプロレタリヤの獨裁を固執し、英獨佛の多數社會主義者が飽くまでもそれに反對する所以は、單に理論上の是非からばかりでなく、當面の政策として勢ひさうでなければならない實際上の理由にも因るものである。何となれば露國と西歐諸國との間には、政治的及經濟的の諸事情並に民衆の思想に於て、質的にも量的にも著しい相違があるからである。詳しく言へば露國に於ては、第一に舊支配階級の政治が西歐諸國のそれよりも遙に專制的であり、武斷的であつた爲に、政府に對する國民の信賴が甚だ微弱であつた。第二に貴族、大地主其他の特權階級の暴虐、貪婪、懶惰、放埒は、西歐諸國の特權階級よりも遙に激甚であつたが爲に、無產階級の彼等に對する敬慕の念は全く失せてゐた。第三に生產の大部分は農業であつて、工場工業の發達が未だ幼稚であつた爲に、貧富の懸隔は西歐諸國に於けるよりも一層甚しく、階級闘爭の緩衝地帶ともいふべき中產階級や知識階級が頗る少數であつた。かくの如き諸國に固有な事情は革命思想を激成するには好箇の素地であつて、又事實共產實行を容易ならしめた所以でもゐるけれども、同時にそれは露國と反對の事情を有する諸國に於て、革命思想の普及を防げ・共產實行を難んぜしむる所以であることは言ふまでもないことである。

露國の革命を比較的容易に成就せしめた理由は獨り之のみでない。若し戰敗が舊支配階級の權威を失墜せしめることがなかつたならば、又若し長期の戰爭が國民生活を荒廢せしめ、軍隊の士氣を腐敗せしめ、怨嗟の聲をして地に滿つるに至らしめなかつたならば、ロマノフ王朝は未だ容易に覆滅しなかつたに相違ない。然るにそれは覆滅する前に先づ崩落したのである。しかも之を崩落せしめたものはボルシエヴヰキではなくして、ケレンスキーやミリユコフを中心としたる社會革命黨であつて、彼等はまさしくレニンやトロツキーのために道を平坦にしたるスチームローラーの役割を務めたものと言つてよかつたのである。かくの如き特殊の事情、特殊の條件及特殊の機會に惠まれたが爲めに勞農革命は案外容易に成就することができたのである。彼等に取つては實に千載一遇であつたに相違ない。併しながら一九一八年の戰爭ならざる他の諸國は、同じやうな事情、

條件、機會に於て見舞はれもしなかつたし、又將來見舞はれやうとも豫想されぬことである。

尚此外に露國の革命に特異な事情として擧げなければならぬ重要な點は、露國民の大多數が自分の名すら書き得ぬ程に無教育であり、自己の日常生活以外、政治にも經濟にも、社會にも、將他の如何なる公的な問題にも無理解であり又無關心であり得る程に無識であることゝである。彼等の眼中には帝國もない、議會もない、共產主義もなければ、革命もない。唯漠然なる日常生活の平和と充足とさへあればそれで、滿足するのである。此平和と充足とを彼等に約束する者でさへあれば、彼等は常にそれに服從するの用意を有するのである。かゝる智力的に低級な農民の間に交つて、比較的に共知見の進歩してゐるのは、都會地に於ける工場勞働者に限られてゐた。併し彼等とても、露國の工場工業が未だ幼稚であつたことゝ、勞働組合の組織が甚だ不完全であつたことゝのために、社會主義思想の理解に於て、團體運動の訓練に於て、英獨佛諸國の工場勞働者に較べれば、尚遙に遜色のあつたことは疑はれない所である。果してさうだとすると、畢竟革命前に於ける露國のプロレタリヤなるものは、階級鬪爭にも關せす、共產主義をも解せす、只窮乏荒廢したる自己の生活を救濟してくれる者でさへあれば、何者をも推戴することを辭せない數千萬の農民と、戰爭に倦怠し、軍紀の頽廢したる數百萬の兵士と、共產主義に宗教的信仰を捧げつゝあつた僅々數十萬の工場勞働者とから成立つてゐたのである。從つてかゝるプロレタリヤの名に於て、しかも實際に於てはかゝるプロレタリヤの僅少な部分の協力によつてのみ行はれた革命直後の治世が、必然的に少數者の獨裁でなければならぬことは、必至の勢であり、至當の理であつたのである。何となれば、彼の無識なる國民、彼の尨大なる國土、彼の不完全なる通信交通機關、彼の疲弊困憊の極に在る生活、彼の懼るべき外國の脅威、是等のものゝ重圍の裡に行はれた革命直後の一切の國務が、萬機公論の假面の下に、少數者の專斷によつて處理されなければならぬことは、理論を超越したる絕對の必要であつたことを吾等は認容することができるからである。

六　世界赤化の雄圖空し

私は、上來述ぶる所によつて、露國に於ける共產主義の革命は、唯彼の國の、彼の機會に於てのみ可能であつたこと、竝に、勞農政治の根幹たる少數者專制としてのプロレタリヤ獨裁は、唯彼の國の、彼の事情に於てのみ可能であり、必要であり、又認容さるべきものであつたことを明かにすることができたと思

ふ。從て露國と全く狀態を異にする他の諸國に於て、それを踏襲することは不可能でもあり、又强ゐて踏襲するも成功の見込のないことは多言を要しない所である

それにも拘らず、勞農革命の成功が一時世界の勞働運動に深刻なるインスピレーションを與へたことは爭はれない事實である。此刺激によつて各國の社會主義運動は遽にペンから武器に移ることに焦慮し、同時に各國の勞働組合運動は著しく左傾して、社會主義の神殿に拜跪しやうとするに至つたことは確かである。併しそれは彼等が未だ勞農革命の眞相を明かにすることのできなかつた期間に限られてゐた。其後幾もなくして、神秘の幕は徐々に揚り、露國の內情は次第に世界に展示せられた。其結果各國のプロレタリヤの思想的振子は間もなく左方から中央に向つて押戾されたのである。何となれば勞農革命の機會と方法とは、唯露國の共產主義者のみに可能であり適當であつて、他國の社會主義者のためには可能でもなく適當でもないことが彼等によつて發見され會得されたからである。

かゝる事情であつたにも拘らず、勞農政府の首長等が新に第三インターナショナルを組織して、大規模なる宣傳を開始し、世界のプロレタリヤを橫斷的に結束しやうとする壯圖に出でたことは、彼等の聰明にも似合はぬ一大失策であつた。何となれば彼等は、露國と全く歷史、事情及思潮を異にしてゐる各國のプロレタリヤに對し、露國と同一なる革命的戰略の採用を强要することは、畢竟各國の同志を糾合することよりも遙により多く各國のプロレタリヤを彼等に反撥せしむべき所以であることに氣付かなかつたからである。第三インターナショナルの創設は世界の勞働運動を截然二箇の分野に分裂せしめ、各々其旗幟を鮮明にせしめる動機であつたことは疑ひないが、其結果は却て第二インタナショナルの結束をます／＼鞏固にし、露國の共產主義者は、國內的にも少數派であると同時に、國際的にも亦少數派であることの事實に當面して、玆に初めて彼等は全世界を擧げて赤化しやうと試みた其雄圖の、終に空しからざるを得ない理勢を痛感することができたのであつた。

併し此苦い經驗は彼等のために決して徒爾ではなかた。何となれば彼等は之によつて姑く國外に對する攻勢的戰線を收縮して、國內の施政を整理刷新するの餘裕を與へられたからである。今や彼等は革命直後の匆忙に際して犯したる種々なる誤謬を訂正し、理論に捕はれ過ぎた諸制度は、實際の必要によつて著しく緩和若しくは修補せられ、所謂新經濟政策の樹立によつて、勞農政治を萬代の安きに置かうとするの用意をさ／＼怠りなきを見るのである。そして空前の大飢饉といふ意外の災害に

も拘らず、國内の秩序は良く維持せられ、國民の經濟生活も着々改善せられ、世界最初の社會主義が次第に其基礎を安泰ならしめつゝあるの事實は今や吾等の承認せざるを得ない所である。これは確に彼等の成功である。少くも成功の緒に就いたと言へる。唯問題は彼等が此成功を保持するために、現在及將來に於て、其主義の上に幾何の讓歩妥協を餘儀なくされるかといふことである。併し、若干の讓歩があり妥協があつたからと言つて、直に、それを資本主義への逆轉と呼び、共産主義の放棄と唱へることの早計であることは勿論である。吾等は彼等の成功を好むと好まざるとに拘らず、事實に對しては常に公正な觀察者でなくてはならないのである。

七　獨裁されつゝあるプロレタリヤ

かく露國の勞農政治が次第に成功の緒に就きつゝあることが明瞭であるにも拘らず、西歐諸國の勞働階級は非ボルシエヴヰズムの主張を決して緩和しないのみか、却てます／＼それに對する反感を增大しつゝあるのである。勿論其一つの原因は、勞農政府が戰後に於ける世界的宣傳の失敗にも懲りずに、依然各國の勞動運動指導者を中傷して其内部統制を攪亂しやうとするの策を續行しつゝあることが、甚しく各國勞働運動の中堅分子を憤慨せしめつゝある事實にも由るのであるが、併しもつと本質的な原因は、ボルシエヴヰムの主義及形態が、徹頭徹尾只露國だけのものであつて、他の一切の國々のものであり得ない所以がます／＼彼等に判明し、理解されつゝあることに在るのあでる。

主義としてのボルシエヴヰズム、及其形態としてのサウヱート統制が、西歐諸國の勞働階級を承服せしめることのできない根本的な理由は、勞農政治に至要の特質を爲す所のプロレタリヤ獨裁が、必然的に或範圍と或期間とに於て、個人の人格の蹂躙と、自由の束縛とを前提とするからである。そしてそれが國民全體の人格の尊重と自由の保持とを度外しては絶對に成立ち得ないデモクラシーの本義と、如何にしても相容れ難いからである。そして又それは、現代に於ける社會哲學思想の傾向からしても、個人の人格と自由とを無視したる新文化の建設が、到底鞏固なる基礎を築き得ないことが明白であるからである。勿論ボルシエヴヰズムと雖、人格と自由の拘束を以て過渡期の已むを得ない手段とするに過ぎないものであることは承認しなければならぬ。併しながら、たとひ過渡期の已むを得ない手段であるにもせよ、多年支配階級によつて濫用せられたる此兇惡なる戰術を踏襲するとは、畢竟暴に酬ゆるに暴を以てするのであ

ると同時に　更に他日自家の頭上に落下することあるべき第三の暴に對する直接の誘引であることを知らなければならぬ。多年の壓制に慣熟して、自己の人格や自由に對する信念も慾望もない無智無識な民衆を以て滿たされてゐる露國のやうな國なればこそ、プロレタリヤの獨裁は必要でもあり、可能でもあるのである。何故それが露國に於て必要であつたかと言へば、プロレタリヤの獨裁を以てしなければ、舊支配階級から、あらゆる名擧や權利や因襲的勢力を一擧に剝奪することができない。それを剝奪することができなければ、無識無自覺なる大多數の國民を舊制度の附力から直に解放することができないからである。又何故それが露國に於て可能であつたかと言へば、露國に於けるプロレタリヤの獨裁は、名に於て勞働者全體の獨裁でありながら、實に於て僅少な勞働者の獨裁であり得るほどに、一般の勞働者が無識無自覺であつたからである。專制は露國の下層階級の常識となつてゐたほどに、彼等に多年の因襲であつた。從て貴族や資本家の專制が共產主義者の專制に變つたからと言つて、彼等は格別それを氣に留める理由はなかつたのである。唯最初彼等は田地を分けて貰つたことが嬉しかつた。只それだけの理由で彼等は革命を謳歌したのである。次に彼等は收穫物の剩餘を政府に徵發されることが痛かつた。只それだけの理由で彼等は共產主義を嫌忌し初めたのである。そこで熟練なる帆船の船長の如く、風向き次第に船の進路を轉較することのできる勞農政府の首長等は、所謂「新經濟政策」のかけ聲と共に、田地と收穫物の實質的私有を農民に許容することによつて、再び「獨裁されたるプロレタリヤ」の御機嫌を取り直すことができたのであつた。

かくの如く露國に於てのみ必要であり可能である所のプロレタリヤ獨裁が、人格を尊重する念の深い、自由を擁護しやうとする要求の强い、社會革命の意義に對する理解の比較的に行屆いた、新文化の理想に對するプロレタリヤの使命をかなり善く自覺しつゝある西歐諸國の勞働階級に到底認容さるべきでないことな理の當然と言はなければならぬのである。

私の信ずる所に依れば、現今世界の主要國中、社會革命手段としてのボルシエヴヰキムを實行し得べき可能性を有する國は露國以外唯支那だけに限られてゐる。何となれば支那は其國民の大多數が無識無自覺なる點に於て、少數者の壓制に慣熟して居る點に於て、政治の形態に無頓着である點に於て、經濟生活に寡欲なる點に於て、勞働者に團體組織の幼稚なる點に於て、民衆に政治的素養及訓練の全く缺けてゐる點に於て、其他種々なる自然及人事の諸條件に於て、餘程露國に似寄つてゐると思はれ

るからである。從て支那國民よりも遙に理智に勝れ、個人の社會的意義を自覺し、政治に對する相當の批判力を備へ、言論と選擧權とを通じて若干の政治的訓練を有し、經濟生活の向上に對する欲求の發達し、又勞働組合運動によつて或程度までそれを獲得することのできる手段を有し、且如何なる場合にも少數者の多數者に對する專制を認容し得ない程度に民主的な思想と習慣とに養成されてゐる國民に取つては、彼等が露國や支那の狀態にまで殊更に退轉し逆行することを希望しない限りは、ボルシエヴヰズムの採用は最早絕對に不可能と見なければならないのである。

八　理性と友愛との革命

私は西歐諸國のプロレタリヤが、やゝもすれば彼等が陷らんとする甘い誘惑を斥けて、良く其非ボルシエヴヰズム的態度を固持しつゝあることを、彼等の爲に又彼等が未來に理想する其新社會のために祝福するものである。何となればそれは彼等が漸次社會主義に對する宗教的信仰から擺脫して、科學的理解に入りつゝあると立證するからである。カベーやフーリエの空想的社會主義がマルクスやエンゲルスの科學的社會主義に取つて代はられたといふ見解は、只社會主義者の辯論上にのみ承認されることであつて、プロレタリヤ自身の主觀に於ては、依然社會主義は宗教的信仰の對象であり、空想的憧憬の目標であつて、彼等は未だそれを科學的理解の裡に確實に捕捉してはゐたかつたのである。言ひかへれば彼等の頭腦の中には空想的社會主義あつて、未だ科學的社會主義がなかつたのである。併しながら世界最初の社會主義國たる勞農露國の出現は、プロレタリヤの空想的社會主義を科學的社會主義に轉向せしめる好箇の實物教育であつた。何となれば彼等は之によつて、實現されたる社會主義が、彼等の宗教的信仰の本尊たるには餘りに光彩の乏しい、御利益の薄いものであることを悟り、迂濶にそれに隨喜渇仰することの如何に危險であるかを痛感したからである。彼等は又之によつて、ボルシエヴヰズムが社會主義の一般的前進を指導すべき建設的形態としての價値を有たないことを明にすることができたと同時に、各國の無產階級解放運動は、唯各國固有の歷史、習慣、傳統を背景とする舞臺の上にのみ展開さるべきであり、又各國獨特の國民的思想、政治的形勢、經濟的狀態を基礎としてのみ建設さるべきであることを十分會得することができたからである。

惟ふに社會組織の改造は早晩免れ難い進化の理法である。意識するにせよ、せざるにせよ、各國民は每日それに向つて何程

かの步を進めつゝあるのである。唯其實現は、徐々であるにせよ急激であるにせよ、當然到來すべき時期に於て到來しなければならない。それが適當なる時期よりもより速く行はれることは、より遲く行はれるのと同じやうに人類の災禍であることを知らなければならないのである。

然らば如何なる時期を以て適當と看做すべきであるか。それは各國決して同一であり得ない。唯併し玆に共通の原則たるべき一條件を擧げるならば、それは實質に於て――ボルシエヴヰズムの如く單なる形式に於てゞなく――少數者の多數者に對する專制を以てせずして實行することのできる革命でなくてはならないといふ一事である。言ひかへるならば、それは個人の人格と自由との武斷的壓迫なくして行ひ得る革命である。テロリズムもなく、病的狂信もない革命である。理性に導かれ、友愛に支へられた革命である。此の如き革命の基調が若し社會主義であるとするならば、それはボルシエヴヰズムの實行を到底不可能且不必要ならしめる程度に、プロレタリヤが全體として理智的であり、民主的であり、而して又各自の人格を尊重し、自由を愛護することを知つて居る國民にのみ唯望まれる所の社會主義でなくてはならないのである。

對支文化事業の經濟的觀察

法學博士　堀江歸一

我國に於ける外力跋扈の前例

文明國と未開國と相對して、政治上に經濟上に種々の交涉を生ずるに當つて、前者が自國の狀況の優秀であることに乘じ、後者に威壓を加へて、以つて前者の意の如くに左右し、其間に利益を謀らうとするが如きは、大なる間違であるとせざるを得ないが、不幸にして此種の間違は實際の國際政治に於て、常に濫用されて、殆ど已む所を知らなかつた。現に之を日本の實際

問題に徴しても、其事實であつたことを斷言するに苦しまないであらう。卽ち日本が幕政の末期に外國から開國の要求に接したのは、諸外國の方から云へば此國を開かせ、通商上の關係を結ぶことに依つて、諸外國に其れ〲の利益を收める趣意に出でたものであつて、固より日本を文明國と班を共にする國たらしめようとか、其國民に文明の恩澤を洽からしめようとか云ふような同愛の精神に基いた次第ではない。我開國の當初北米合衆國を代表して、日本に駐剳して居つた公使兼總領事タウンセンド、ハリスと云ふ人は日本並に日本人に對して、特別に温い感情を持ち、外交上の掛引や、典例等に慣熟しない幕府の官吏を指導するに懇切を極めたようであり、現に彼の安政五個國條約に認められた關税權の如きも、此の日本の爲めにする斡旋宜しきに適した爲めに、日本の國權を豫想以上に伸張せしめるを得た次第であつて、私の師事した福澤諭吉先生は、晩年日米兩國外交上の關係を論ぜられる場合には、常にタウンセンド、ハリスの日本に盡した功勞に遡つて、感謝の意を表されることを恒例とした程である。然しながら斯の如きはハリスの人格之を然らしめたのであるか、又は當時の合衆國が日本たり、東洋なりに對して、何等特殊の野心を包藏しなかつた結果であるか、孰れとも之に對する判斷を下すことは後日に讓り、兎に角斯の如きは先進文明國の後進未開國に對する態度としては、甚だしき異例に屬すると云ふことが認められる。隨つて合衆國以外の諸國は當時の日本に對して、何事を爲したかと云へば、日本幕府の最も難問題として嫌忌する開港開市を强要し、一寸一尺の土地も尙ほ之を外國人の利用するに任さしめようとするのは勿論、自國貿易の便宜の爲めには、日本の關税權に極端なる束縛を加へ、自國民の我國に於ける生活を安全ならしめる爲めには、治外法權を持つて、日本の司法權を壓迫するが如き横暴の甚だしきを致し、明治初年條約改正の時期に至つても、容易に改正の交渉に應ぜず、辛うじて明治三十二年以來漸次に日本をして多年屈從の已むなきに至つて居つた地位を脱せしめるを得たのである。其玆に至る數十年間日本は外國の爲めに、其獨立國たる面目を傷けられたばかりでなく、關税權の束縛に依つて、經濟上に於ける發達を妨害されたことの幾何であつたか、殆ど之を測り知るを得なかつたのである。

固より明治初年に於ては、我國民の經濟思想は甚だ幼稚であつて、洋燈亡國論や、金巾亡國論を眞面目に唱道した者があるかと思へば、一方には金銀を以つて唯一の富であるとする「マーカンチリズム」一流の考へを懷く者が廣く朝野に彌漫して居つたのであるから、若しも我國が絶對自主の關税權を持つたな

らば、如何に其れが運用されたであらうか。思ふに一部少數者の僻見に左右されて、外國貿易殊に輸入貿易を遮斷するやうに、關稅權の濫用を見るやうなことが起つたかも知れないが、之を以つて外國の我國關稅權に加へた束縛を是認するが如きは、許す可からざる議論であり、又現に關稅權に對する束縛殊に無差別に賦課された從價五分稅の爲めに、輸入稅をして國庫收入の見地から云つて、何時までも重要のものたらしめるを得なかつたことも、亦爭ふ可からざる事實であつて、當時諸外國の我國に對する專恣我慾が我國民をして義憤を惹起さしめる種子と爲つたことは論を俟たない。

支那に對する列國の態度

然しながら斯の如きは所謂先進國が獨り、我國に對してのみ取つた態度ではない。權力を以つて權利の本源とする考へは多くの場合に於て國際間の關係を律する鐵則と爲る。殊に近代の軍備は精巧なる機械力に依賴する所多く、之を完成し、充實するに巨額の費用を要することの關係上、文明の程度の進んだ國であれば其進んだゞけ、强大なる軍備を擁するを得るが、文明の後進國に至つては、財力の關係から、其然るを得ない。斯くて先進國は富國强兵であつて、後進國は貧國弱兵である趣きを免かれざる其際に、前者が軍國主義の下に、後進國に對すると云ふことは、恰も猛獅の群羊に當ると同樣の關係を生ぜしめる所以であつて、弱肉强食の事實を國際間に展開するに至ることと爲るのである。唯富强國が軍國主義の威脅を挾んで、貧弱國に向つて、帝國主義に基く行動を逞しうせんとするに當つて、多少の掣肘を加へたものは、國際間に於ける權力の平衡であつて、一國が或る方面に向つて無限に權勢を擴張したり、領土慾を縱にすることは、多年國際間に保たれ來つた狀況に異變を招き、一國をして他の諸國を凌駕する優秀の地位を占めしめ、其結果或は國際間の平和を攪亂するに至る虞れなしとしないと云ふ理由の下に、一國の爲す所に對して、他の多數諸國から抗議が起り、自ら前者の遂げんとする野心や非望を半途に中斷せしめるを得たのである。歐洲の諸强國中に中立國が介在して居つたり、南米諸國がモンロー主義の庇保を受けたりするのは、要するに强國間に於ける權力の平衡之を然らしめるのであつて、思ふに歐洲戰後の條約に關聯して、成立組織された小國の如きも、同樣の關係に縋つて、存立の運命を保つものと考へられるが、裏面に於ては富强國が貧弱國に向つて經濟的侵略を擅べることの勢は着々として進むのである。支那に對する列國の關係も亦正に斯の如きものである。一時支那分割の氣勢が列國の間

に出現した時代もあつて、某國は支那の如何なる方面を經略するとか、或る方面は他の某國の爲す所に任せるとか云ふような得手勝手の評論すら行はれた。若しも明治三十年前後から日露戰爭までに至る七八年間に亙つて、露獨兩國の支那殊に北部支那に跋扈する勢が許されて、何ものも之を掣肘しなかつたならば、而して日英米の諸國も露獨兩國に對抗する必要上、支那に對する政策を講ずる上に領土上の野心を加味したならば、支那の天地に如何なる不祥事を現出したかも知れない。幸に三國は支那に對する門戸開放機會均等を以つて外交上の方針とする點に於て、大體上相一致する所のものがあり、日露戰爭に依つて滿洲から露國の勢力を日獨戰爭に依つて、山東から獨逸の勢力を其れ〴〵驅除し、殊に山東に於て獨逸の持つて居つた利權は支那をして之を回收するに至らしめたことは、誠に支那の領土を保全する所以であつて、斯の如くして平生日本の對支政策として中外に聲明しつゝある所のもの首尾全うされたりと稱するを得るであらう。

英米幷に日本に對する支那の感情

斯く論じ來ると、玆に一ツの疑問が起る。支那の領土保全と云ふことを大なる目標とし、之に到達する爲めに、門戸開放、機會均等を外交上の礎石として、支那の爲めに働いた國は日英米の三國である。固より斯く働くことは、支那の利益であると同時に、三國の利益にも爲り、日本で近頃流行り出した共存共榮の實を擧ける次第であつて、必ずしも一部の日本人の考へる如き義俠的精神の發露した結果ではあるまいし、又國として國際間に處する場合に、自國の利益を放擲して、他國の爲めに、力を盡すが如きは、道理ある所業とは認められないのである。然しながら日英米三國は常に支那に對して取る所の外交方針を一にし、殊に日本は一度ならず、二度までも支那の爲めに兵馬を動かし、巨額の國帑を費すと共に、國民の血を流したに拘はらず、支那人の英米兩國に對する感情と日本に對する感情とを比較して、其間に冷熱の差の著しいことを認めるのは、何故であらうか。英米兩國に對しては、支那人は餘程温い感情を持つて居れば、尊敬の念をも懷いて居る。排米とか、排英とか云ふような國民的運動の起ることは、殆ど之を耳にしない位であるのに、日本に對しては、必ずしも然るを得ない、日本が支那の朝野を通じて、最も好評を博したのは、大正四年から兩三年に至る歐洲戰爭時代であつて、詰り當時歐米諸國は戰時財政の壓迫を蒙つて、支那に財政上の援助を與へる餘裕を持たなかつたのに反して、日本は獨り一種經濟上の必要から、政府自ら率先

して、對支借款に應ずるとを辭さなかつた結果、偶然にも支那をして國際間に依賴す可き國は一の日本あるのみと云ふ感を懷かしめたようであつたが、是れも束の間であつて、今日に至つては、日本は支那に於て最も不評判の國であつて、公々然二十一個條廢棄の問題が議會の議に付せられたり、幾何の誠意が籠つて居るか分らないとしても、廢棄の請求が日本政府に傳へられたりする一方に民間に於ては、日貨排斥の運動が行はれると云ふ工合に爲つて來た。斯の如くであれば、日本が幾ら支那の領土保全に努力した所で、毫末も酬ひられざる次第であつて、假に日本の義俠心からしたとすれば、世話甲斐のない話であり、又日支兩國の共存共榮と云ふ見地からしたとすれば、全然期待に反する結果を生じたものと云はざるを得ない。斯の如く日本の支那の爲めに動いた誠意の徹底せず、支那に於て常に日本の地歩が英米兩國に比較して、劣勢であると云ふのは、抑も何に原因するのであらうか。

支那に排日の行はれる所以

私は以上の疑問に對して、左に數個條の原因を擧げることに躊躇しない

第一、日本の對支態度には甚だしく不徹底の嫌があつた。支那の領土保全を主張し、他國を敵手として、再度の戰爭を敢てするが如き大なる犧牲を拂ひながら、我國の軍閥者流は動もすれば此犧牲を種子として、支那の領土に對する野心を遂げようとして已まない。斯の如くして支那人が日本の爲す所を德とする道理があるであらうか。即ち彼等が日本の對支態度に表裏二面のあることを看取して、安んずるを得なかつたのも、亦偶然でないのである。

第二、軍閥者流が右の如き考を以つて、支那に臨んだのは、殆ど年來の政策とも云へるが、殊に其甚だしかつたのは、大正六年から七年に至る約二年即ち日本に於て寺內內閣の政局に當つて居つた當時であつて、支那の軍閥を代表する段祺瑞內閣を助ける爲めに、我國の政府が政府管轄の下に在る特殊銀行である日本興業銀行、朝鮮銀行並に臺灣銀行に命じて、支那の爲めに借款の要求に應ぜしめたことは、餘程の金額に上つて居る。一方に日本の軍閥者流は此借款を通じて、支那に權勢を擴張することを夢み、他の一方に支那の軍閥者流は借款の收入を以つて、南方討伐に戰つたとすれば、日本こそ自國の野心を遂行する爲めに、支那の內政を左右し、又內國に於ける紛爭を大ならしめるものであると云ふ非難を免かれない。

第三、現に第四十六議會に於て、政府の豫算委員會に提出した材料に據れば、大正六年から七年に至る間我國に於て應募した對支借款は一億四千五百萬圓の多きに上り、之に對する擔保は何れも不確實であり、利子は支那政府に依つて支拂はれず、元金の償還される見込もなく、隨つて其引受に當つた諸銀行の資金は此方面に固定して、營業上に打擊を及ぼして居る。而して斯る打擊は是等特殊銀行を苦しめた代りに、何か之に酬ゆるだけの利益を國家に與へたかと云へば、日本政府は自家の野心を充す爲めには途方もない損失をする、特殊銀行を犧牲に供することをも顧みないものであると云ふ印象を支那人の腦裡に留めるに過ぎない次第であつて、斯くて一部の支那人は日本の輕擧を嘲笑するであらうし、又他の一部の支那人は日本の野心に戰慄せざるを得ないであらう。

第四、從來日支兩國間に於ける交涉の事歷を考へて、日本は支那の爲めに如何なる善事を爲したかと云ふに、私は之を見出すに苦しまざるを得ない。日清戰爭前まで、諸外國は支那を以つて、眠れる獅子であるとして、畏怖の念を懷いて居つたが、斯る迷信を打破し支那こそ眠れる獅子ではなくして、死んだと同樣の獅子であると云ふことを世界に表明したのは實に日清戰爭であつて、爾來列國の支那に對する領土上の野心は無遠慮に暴露され、支那の領土保全に缺陷を生ずるに至らしめたのみならず、日本自ら亦或る時代に於ては、支那の領土を脅かすことを敢てした。而も其日本は地理上に於て支那に隣接し、日本の短所や缺點は盡く支那人に依つて知悉されて居るとすれば、彼等が不案內である歐米諸國を盲目同樣に崇拜して居るのと正反對に、日本を憎惡し、又輕侮する考へを持つことも、亦已むを得ざる所と認められる。

第五、近年支那には頻に利權回收論が主張され、關稅增徵、司法權恢復、郵便權回收等種々の方面に亙つて、支那人の之を要求すること、頗る熱烈であり、其一部分は華盛頓會議に於て成立した極東に關する九個國條約に依つて、實現されるに至つた。然も斯る利權の恢復を支那に許すに當つて、多く當面から反對の地位に立つのは、日本であつて、歐米諸國は必ずしもさうでなく、寧ろ贊成の意を表すること少なしとしない。是れは日本が經濟上支那と特殊の關係を持ち、他の諸國と一律に論ずるを得ない事情の存する爲めでもあらうが、一ツには我國の政治家なり、實業家なりに日支經濟上の關係の將來如何に爲る可きものであるか、又如何に之を爲す可きものであるかと云ふ二點に就て、明確なる判斷を下すだけの明を持たず、唯既成の事實に引摺られて、目前の利益を謀る

に急なるの致す所としなければならぬ。而して其孰れに出づるを問はず、斯る日本の態度が支那人をして常に焦慮せしめる所以と爲り、日本人に對する反感を熾烈ならしめる原因と爲ることは、論を俟たない。

第六、歐米諸國が近年支那に向つて力を盡す所は單に有形的利益の方面のみに止まらない。即ち諸國が支那を以つて、世界の爲めに天然富源を豐富に産出せしめる場所であるとし、資本や機械技術の類を供給したことは、固より支那を經濟的に發達せしめる所以であつて、斯くて支那人に職業を供へ、所得を與へ、彼等の物質的繁榮を大ならしめるに、與つて力ありと考へられる。然しながら歐米諸國民殊に英米兩國民にしろ、戰前の獨逸人にしろ、斯る有形的方面の事業に努力しつゝある一面に於て、無形的精神的方面に亙つて、支那に種々の事業を起し、支那人に利益を洽く及ぼして、以つて彼等を徳化することを怠らない。學校を起して、支那人の子弟を教育し、其優秀なる者に對しては、更に本國に送遣して、完全なる高等教育を授けしめるが如き、教會を開いて、宗教上の方面から、支那人に精神上の慰安を與へ、彼等の知徳を開發するが如き、病院を設けて、本來幼稚である支那の醫術を補助し、病傷に惱む者に救治の道を與へるが如き、英米其他の外國民の勉めて爲す所であるに對して我國は是等の點に就て、何事を爲すかと云へば、如何にも規模の小なることに驚かざるを得ない。日本人の學校はあつても、在留日本人の子弟に小學教育を授けることを主眼とする。病院はあつても、是れ亦在留日本人を救療するだけで、手廻り兼ねる次第であり、更に教會に至つては、佛教其ものが支那から誘導された關係もあるので、日本人自ら支那人に宗教上の指導を與へるが如きは、思ひも寄らざる所に屬するのである。是れでは何として支那人をして日本人の徳風を慕はしめるを得るであらうか、其道なしとせざるを得ない。

排日の風を一掃するの必要

斯の如く論じて、是れまで日本が支那に對して爲した所を見れば、盡く其軍事的であり、武斷的であり、政治的であつたことは掩くを得ざる事實であつて、何事か支那に對して、要求する、然も其要求が偏私的のものであるとする、支那が之を容れゝば兎に角、之を拒絶すれば、直に軍事上の力を以つて、支那を壓迫して、我意を貫徹しようとする、平生斯る底意があればこそ、常に支那を輕蔑し、何事にしろ、自國に隨從せしめるを得る如くに考へて、之を過するのが、日本の對支方針に膠着し

て離れない特色と爲つたのであつて、是れでは日支兩國は地理的に如何に近接して居つても、支那人の日本に對する感情に千萬里の距離を生ずるに至るのは、已むを得ざる所に屬するのである。然しながら日支兩國の關係を永く阻隔された狀態に置くことは、日本の經濟的立國から考へて許す可からざる所であつて、日本が飽くまでも製造工業の發展を謀り、輸出工業國としての地步を築き上げようとする以上は、一方に支那を以つて、我國に對する重要なる原料品の供給地とする他の一方に、斯く天然富源の開發と共に、支那人の間に物資を需要する力の增進するに隨ひ、之に乘じて、支那に工藝品の販路を擴張する方針に出でなければならぬ。一部の人士が日支兩國の共存共榮と云ひ、又日支兩國間の經濟同盟と云ふのも、種々の意義があるであらうが、大體に於て兩國の間に右の如き關係を結ばしめようとする考への凝つたものであると想像される。即ち以上の關係を推究して行つたならば、日本は支那に向つて、資本を輸出する、技術を供給する、更に日本人の力に依つて、支那に事業を經營する、而して是等資本、技術、經營の結合に依つて生產された物資は其生產されるに隨つて、日本自ら供給を受け、之に依つて工業の基礎を鞏固にし、同時に工業の產出した工藝製造品は之を支那に輸出して、以つて一方に輸入された原料品の代價を決濟する資料に充てると云ふことが、兩國間に起る可き、又起らなければならない經濟上の關係である。斯る關係の生ずることを求めるに當つて、日支兩國民の感情が從來の如く阻隔して居るが如きは、大なる障害を前途に及ぼすものであつて、我國民の最も眞面目なる考慮を要する問題であること論を俟たないのである。

對支文化事業の規摸如何

此際に臨んで政府が對支文化事業を行ふことの計畫を立て、其特別會計に關する法律案を第四十六議會に提出したのは、固より遲れ馳せの嘆なきを得ないのは勿論であるが、全く爲さゞるに比して、勝ること萬々であるとしなければならぬ。然しながら同じ對支文化事業を經營し計畫するにしても、其之を實行する方法や手段に就て考へる所がなければならないのは勿論、斯る事業を爲す根本の精神に就ても亦之を明にすることを要する。政府の計畫に據れば、對支文化事業特別會計の基金は六千三百萬圓であつて、團匪事件の賠償金や、山東鐵道の代償金收入を以つて之に充て、一方に每年の事業費は寄附金に依るものの外、二百五十萬圓を限りとすることゝ爲つて居る。對支文化事業として、政府は何事を爲さんとするものであるか、兩院の

委員會に於て政府委員と議員との間に行はれた質問應答に據れば、支那に於て學校病院を建設したり、既設の機關に補助を與へたりすることに依つて、支那人の知識を進め、又其健康を保たせる、更に內地に於ける支那人留學生に諸般の便宜を供へると云ふことが眼目に爲つて居るようである。是等の事たる、固より文化事業たることを失はないものであつて、而して從來我國に依つて、著しく閑却された所であるから、政府が先づ計畫の第一着步として、之を爲すのは、誠に當然の次第と考へられるが、支那の領土の甚だ廣く、且つ民衆の多きものに對して、右の如き少額なる基金と其れより生ずる同じく少額なる收入とを以つて、文化事業を經營するものとして、果して何事を爲すを得るであらうか。一二三の開港場なり、開市場なりに、相當規模の學校や、病院を開設するとか、又は既設の學校病院に對して、補助金を與へるとか云ふことに依つて、是れ位の收入は忽にして消耗され盡しはしないであらうか。此程度の資金を以つて、對支文化事業に臨むが如き、揭げる所の看板ばかりであつて、內容は之に伴はない、俗に云ふ天井から眼藥の伊呂波單譬に類することゝ爲りはしないであらうか。合衆國であれば、一個の富豪の獨力を以つて、爲し得る所を日本では政府の力を藉つて、漸く爲し遂げ得られると云ふが如き、抑つて支那人に日本の財力に於ける內兜を見透される所以と爲りはしないであらうか。私の竊に恐れる所である、

茲に於てか政府は對支文化事業の基金として、限りある國庫支出金の外に、世間から寄附金を得て、之を收入の內に入れることを考へて居るようである。誰れが此種の寄附金をするであらうか。邦人中殊に邦人の富豪中、支那四億の民生を文化に導き、更に進んで世界一般の文明進步に貢獻すると云ふ篤志の下に、相當の資金を政府に寄附するが如き人のあることが豫想されるであらうか。稀に斯る人ありとしても、之を勘定の內に入れることは、大なる間違でありはしないかと思はれる。歸着する所、政府は例に依つて例の如く、岩崎、三井、大倉、古河、住友、藤田の如き富豪を始め、對支事業に鞅掌する諸會社銀行の代表者を召集し、御用金を命ずる態度を以つて、寄附金を迫るに至るであらう。是等の富豪にしろ、銀行會社の代表者にしろ、我志す所は營利の一點であつて、對支文化と云ふが如きは、固より其眼中に存しない。自己の利益さへ擧げられる見込みがあれば、支那に武器を賣付け、一揆內亂を起させても、尙ほ差支なしとする連中である。斯る輩が飜然態度を更めて、文化事業の爲めに、若干の金員を寄附すると云ふが如き、狐を馬に乘せたと同樣の滑稽事に類せさるを得さる次第であるが、彼等が

之を爲すに就ては、必ず營利上の打算が加へられざるを得ない。卽ち第一は政府の歡心を迎へることであり、第二は支那人の好感を繋ぐことであり、第三は寄附金の負擔を償うて餘りある利權を日本政府の仲介と支那政府の讓歩とに依つて、支那に獲得することであつて、是等の三點に大凡その見込みが付いた時に、始めて日本の富豪や、事業家の對支文化事業に對する寄附金が行はれるのである。政府如何に迂濶であつても、此邊の事情の了解されないことはあるまい。斯くて政府が對支文化事業の寄附金を民間に募集することは、政府をして早晩支那に於ける利權を獲得するに就て、民間財閥の走狗たらしめるに至る所以であることを覺悟しなければならないのである。

支那人の所感如何

斯の如く考へると、日本の對支文化事業に對して、支那の官民は如何なる感を懷くであらうか。從來歐米諸國の行つた文化事業には何等裏面に深い意味はなかつた。獨逸の支那に派遣した宣教師の支那人に依つて、殺害されたことが獨逸をして膠州灣を經略するに至らしめた事實から云へば、宗敎宣傳と云ふ文化的事業と領土經略と云ふ政治的功業とが混淆したようにも思はれるが、是れは獨逸前皇帝が偶然の出來事を捉へて、政治上に利用したまでに過ぎない他の一方に英米兩國を始めとして諸國の支那に爲す文化事業を見るに、直接に政府に依つて管轄されると云ふが如きものは甚だ少なく、却つて民間篤志家なり、又其れ等の人々の團體に依つて經營されるものを多しとする、而して其經營者は決して直接の利益を斯業から收めようとするのではなく、單に先進文明國の後進未開國に盡す義務の觀念に促されて、之を爲すの趣きを存する。斯の如くにして對支文化事業の效果は發揮され、其支那人に及ぼす德も自ら著しきに至るのである。

然るに日本の爲さんとする所は如何であるか。政府が自ら指導者を以つて任じ、民間事業家の出資を仰ぎ、其資金の必ずしも豐富ならざる結果、小規模の事業を營んで、以つて對支文化の要を得たりとするのである。華盛頓會議の決議以來流石に軍國主義に終始した我國軍閥者流や、一部の政治家も公然支那に此主義を行うことに躊躇せざるを得ないであらうが、尙ほ彼等の間に領土の擴張や、利權の獨占を念とする思慮の棄つ可からざるものゝ存するは論なき所である其際に、對支文化事業と看板こそ掲げたれ、政府の意嚮の赴く儘に、支那に或る種類の事業が起され、然も其資金は從來支那に利權を獲得することに熱心であつた實業家から醵集されたものであるとして、支那の官民

が平然として之を迎へ得るであらうか。麗はしき花の裏に恐る可き刺の隱されて居ることを知つたならば、如何に多慾の支那人と雖も、斯る花を觀賞することを好まないのみならず、日本の爲す所を陋とするであらう。由來日本の國家なり、人民なりが支那の爲めに盡すこと、幾十年に及ぶと稱しながら、支那人の之を德とする念に甚だ乏しく、又支那人に依つて、酬ひられることの少ないのは、要するに日本人に有形的打算をする僻が著しく、今日若干の資金を投じて、或る事をすれば、明日之に對する利益を收めなければ承知することの出來ないと云ふ流儀が餘りに露骨に發現し、多少の德を受けた支那人をして之を受けつゝも尙ほ不快の感を懷かしめる結果に外ならない。固より諸外國にも利權獲得業者（コンセッション・ハンター）なる一團の運動者があり、常に北京飯店や、六國飯店を定宿とし、支那要路の大官と結託して、漁利に忙はしく、彼等の屬する國の公使の如きも、時に自國外交上の方針に依つて、陰に陽に彼等の運動を支持し、助長することもあるようであるが、文化事業と利權獲得とを混同するが如き形跡は決して事の表面に出現しない。前者は事極めて高尙であつて、無形の利益を目標とす可きものであるに反し、後者は俗中の俗事である以上は、兩者の分界の明瞭に劃定される必要のある可きことを以つて、當然とするのである。共れには政府をして文化事業から分離せしめることが肝要であり、又富豪資産家をして虛心坦懷、資金を醵出せしめることを必要とする。少なくとも富豪資産家をして目前の採算を行はしめず、將來數十年なり、百年なりの後に亙る採算を行はしめることを必要とする。我國の事業家に此種の理解が行はれるかどうか、一個の疑問であつて、斯る理解の伴はない對支文化事業の如きは、形骸備はつて精神の吹き込まれない歎を免かれないのである。

對支政策刷新の時機

元來我國民が支那に臨むに當つて、軍國主義を背景とし、後援として、無力の民を壓迫する以外に何ものゝあるを知らなかつたことは、對支政策上に於ける大なる間違ひであつた。之に加ふるに偏狹なる政治上の情弊に制せられて、支那に於ける一局部の勢力者を援助するとか、支那人を利用して、自家の慾望を充たさうとする一群の野心家が支那の朝野に出沒するとか、日本の對支政策に依つて、却つて支那の政爭を盛ならしめるとか云ふことも、徒に支那に於ける日本の地歩を危うし、支那人の對日感情を險悪ならしめる所以と爲つたこと、論を俟たない次第である。一方に歐米諸國の對支文化事業が漸々進捗し、支那の內地に於て諸國に向つて、温き感情を持つ者の續出する

方に、諸國に留學した支那の青年は續々歸國して、留學地の文物を紹介する有樣であるに對して、日本の對支文化事業は少しも發展する所なく、日本に留學した支那青年は日本の軍國主義に反感を持つ一方に、日本人の異國人を遇するに冷かなることに刺戟されて、歸國後動もすれば排日感情を懷くが如き狀態であつては、十年二十年後に於ける日支兩國の關係は如何に動くであらうか、私の常に憂ひを懷いた點である。此憂ひは今度の對支文化事業位の計畫で容易に一掃されるものと見るを得ないが、兎に角武斷主義や、軍國主義を事とした寺内内閣時代の對支政策が原、高橋内閣時代の無爲傍觀主義と爲り、更に規模や計畫に就て、難ず可き點は多々あるとしても、文化事業の計畫の案出されるまでに達したのは、大なる進歩とせざるを得ない。唯政府が何處までも文化事業の何ものたるやを解して、衷心支那の爲めに盡す誠意を發揮するか、富豪實業家が隣國の文化を進めると云ふ公共的精神から、政府を助けるなり、又は獨自の力なりを以つて、文化事業を進める決心があるかどうか、是等の一點こそ、文化事業の成敗の岐れる所である。而して既に我國官民が支那の爲めに斯る高尙なる心を持つて仕事をする以上は、他の方面にも同樣の精神を擴充し、支那の關稅權に就ても、又其司法權に就ても、獨立國たる支那を尊重する意を以つてしなければならぬ。一方に支那に文化事業を起して、其効果を支那人に及ぼしながら、他の一方に於て其効果を抹消するが如き取扱の下に支那人を置くに至つては、此位大なる矛盾あるを認められない。而して此種の矛盾は從來の日本人に於て、又日本の對支方針に於て、最も著しかつたのであるから、私は對支文化事業の我國に依つて行はれると同時に、是等の點に就ても、亦斷然態度の一變されることを必要とするものである。其れには幕末時代から、明治初年に至る間、日本が如何に歐洲諸國の橫暴なる方針の下に、司法權や、關稅權を束縛されて、苦痛を感じたかを回想したならば、直に對支方針を刷新しなければならぬ關鍵を見出すを得るであらう。汝の好まざる所を他人に强ゆる勿れと云ふことは、日本人が支那の先哲に敎へられた所であるが、今や日本人は此敎訓を奉じて、支那人に臨み、以つて對支政策の公正を謀る基準とす可き時期に達したのである。

忠君愛國主義の變革

(國定教科書に現はれたる忠君愛國主義の内容について)

高島米峰

小兒の衣服が、大人の用を爲さゞるが如く、島國的根性は、世界的大國民には、通用せざるなり。日本も、單に日本の日本たりし時代に在りては、その思想の鎖國的にして、その道德の消極的たるを妨げざりしとするも、今や、躍進して、世界の日本として、極めて優越なる地歩を占むるに至りたりと、稱せらるゝに當り、依然として、彼等の精神生活が、鎖國的の思想と、消極的の道德とに依りて、營まるゝとせむか、正に是れ、笑ふべき時代錯誤たらずむばあらざるなり。殊に、帝國主義の可能が疑問とせられ、軍國主義が破産の宣告を受けたる今日、尚、侵略と戰爭とが、國家の目的にして、國民の義務なるかの如く教ふるものあらば、これ亦、實に、笑ふべき時代錯誤と言はざるべからざるにあらずや。

されど、インターナショナリズムと、ナショナリズムとは、歐洲にも米國にも、對立(その力相等しとにはあらざれども)して存在し、デモクラシーの本家を以て、自も許し他も許せる米國に於てさへ、尚且つ、イムペーリアリズムの勢力、侮るべからざるもの存するのみならず、近來に至つて、小中大學、共に、兵式の訓練に力を致すこと、尋常ならずと言ひ、ワシントン會議に於て、佛蘭西の全權が、その陸軍制限の不可能を力說したるは、少くとも、ミリタリズムを放棄したるものとは、做すべからずと言ふ。現に、平和會議の後に於てさへ、希臘と土耳古と相戰ひ、英國もこれに對して、何等か備ふるところあらむとし、又、佛蘭西の對獨政策は遂に、ルールを占領せざるを得ざらしめたるにあらずや。果して然らば、今の時、侵略を說き、戰爭を教ふること、必ずしも、時代錯誤とは稱すべからざるべきか。殊に、十年後に於ける世界の大勢を悲觀して、軍備の調

限を後悔せざるべからざるもののあるべしと、豫斷せむとするが如き人々の間に於ける共鳴は、少くとも、ナショナリズムたらざるべからず、若くは、イムペーリアリズムならざるべからず、或は更に進みて、ミリタリズムならざるべからざるを思ふ時、國民教育の理想を、那邊に樹つべきかは、啻に、專門教育家にのみ與へられたる、重要問題にはあらざるべきなり。

曾て、予は、國定教科書に就いて、日本の國民教育の理想に向つて、疑問を提出したること一再ならず。殊に、その過去の國民生活の記錄として、現在及び將來の國民生活に、影響するところ少からざるべき歷史教科書が、殆ど、ミリタリズムの鼓吹を目的とせるにはあらざるなきかを疑はしむる程、それ程多く、戰爭の記事を輯め、しかも吾等の、祖先の文化生活に關する記事の、頗る少きに失することを指摘して、以て、當局の反省を促したることありしが、今又、國民思想の中樞を形成し、國民道德の根柢を爲すべき、尋常小學修身書を一瞥して、到底、滿足すること能はざるもの少からざるを遺憾とす。

小學修身書は、忠君愛國を眼目とし、この思想を中心として、自己に對する本務、社會に對する本務、國家に對する本務を反覆したるものにして、『忠義』と言ひ、『忠孝』と言ひ、『忠君愛國』と言ひ、『擧國一致』と言ふが如き項目は、全六册中（第一學年より第六學年まで）毎册必ずこれ無きはなし。そのこれあるは、もとより當に然らざるべからざるところ、たゞこれに盛られたる内容に至つては、今日の小國民をして、尙此くの如きことを、學ばしめざるべからざるかに、迷はしめられざること能はざる底のもの少からず。第一卷の『キグチコヘイハ、テキノタマニアタリマシタガ、シンデモ、ラツパヲ、クチカラ、ハナシマセンデシタ』にして、第二卷の『忠義』は廣瀨中佐と杉野兵曹長との戰死の記事、第三卷の『忠君愛國』は、熊本籠城の時に於ける、谷村計介の事蹟、第五卷の『忠義』は、正成が、北條高時を征討する記事、第六卷の『忠君愛國』は、日露戰爭の時に於ける、出征軍人、及後方勤務、慰問袋、綳帶卷に關して記し、別に『忠孝』といふ一章を設けて、楠正行の生立より、四條畷の討死までを敍せり。

それ此くの如く、日本現代の國民教育の理想は、熱烈なる忠君愛國者を、作らむとするに在ることを知ると共に、謂はゆる忠君愛國とは、戰爭に出でゝ、討死することなりと言ふことを力說せるものなりと解せざるべからず。『死ぬるを忠義といふことは』、先代萩の政岡でさへ、『いつの世からのならはしぞ』と、旣にこれを疑問とせるところ、明治の昭代を經て、平和なる大正の聖世に生れ出でたる兒童に對して、尙、此くの如き、

殺伐なる忠君愛國のみを教ふること、これを妥當なりとして、許し得べきや如何。

縱令、世界各國に於けるナショナリズムの底力侮るべからず、インペーリアリズムの傾向、又、輕視し難く、ミリタリズムの殘壘、尙拔くこと能はずとするも、しかも、各國が、世界化、國際化、平和化するに依るにあらざれば、その存在の安定を保し難しとするも、亦疑ふこと能はざるところ、そこに存する、幾何かの矛盾と撞着とを、如何ともすること能はざるは、即ち、現代の悲哀にして、現代人の煩悶ならざるべからず。日本も、日本人も、共に、かゝる立場に立たしめられつゝあるなり。現在に於てさへ、尙且つ此くの如し、今後、十年廿年の後に於ける、國民思想の變遷、果して如何あるべきかは、茲にこれを逆睹すること能はされども、少くとも、日本現代の教育に於てはまづ善良なる日本人を作ることを主眼とし、同時に又、善良なる世界人たらしむべく、教育せざるべからざるなり。從つて、忠君愛國を教育の根本義とするも、斷じて、褊狹なる、排他的愛國心の涵養を許すべからず。これが內容は、人類愛に出立して、平和的たることを要し、國際的たることを要するや、論なきなり。

今や、國定教科書の內容に對する非難少からず、これが改訂を迫るもの、亦漸く多からむとするに際し、敢て此の一言を呈して、以て、當局の考慮を要求すること、蓋し、全く無用の業にはあらざるべし。(附言、予は教育上の劃一主義に反對し、教科書の國定に反對し、更に、小學校に於ける、教科書萬能的態度に反對して、無教科書主義を理想とするものなれども、これに關しては、既に、屢々論するところありたれば今は特に言及せず。)

實業議員運動

法學博士　渡邊鐵藏

(一) 武藤氏の新運動

既に第四十六議會も經過して政治界の波瀾も暫く靜つたやう

であるが、未だ對樞密院問題が再燃して、政局の動搖が云々されるやうであるが、現在の内閣が次の議會まで繼續しやうが、又それを通過しやうがそれ程重要な問題でない。國民の注意は今年の秋に政變があるかないかと云ふ事よりは、寧ろ來春の總選擧に向つて傾注されんとして居る。今年の秋の府會議員の總選擧も固より來年の總選擧の前哨線として例年以上の緊張を示すであらうが、來春の總選擧は更に何此數年來國民の議會及び政黨に對する不滿足の念が甚しく、或は普通選擧、議院制度の改革、貴族院改革、其他代議政治の改革に對する餘程具體的の主張も現れ、眼の當り國民黨の解黨、革新倶樂部の成立等の事實もあつたのであるから、議會改造の精神、及び之れに關する運動は必ず來春の總選擧に於て一の重要な旗幟となつて現れるに相違ない。政黨の行詰り、現在の政黨が必しも多數國民の希望に副ふものでないと云ふ事は、必ず政黨の改造若くは議會の新空氣を作る運動となつて現れる事は疑ひない。孰れにしても次の總選擧は國民が最も興味を以て見、否自ら最も熱心に此總選擧に向はねばならぬ所である。

殊に先般の世界大戰爭は我國經濟狀態及び社會狀態に著るしい變動を與へたのであるが、此大戰爭の終了後我國經濟狀態は又更に一轉して居る。從つて戰時中は政府の經濟政策、社會政策は甚しく神經の昂奮した國民の批評の的になつて居たが、戰爭終了後は又別の意味で政府の經濟政策並びに財政々策が國民の注目の焦點となつて居る。これに加へて世界的に重要になりつつある社會勞働問題に關する政府の政策は一步一步と政治の中の重要な地位を占めるやうになつて來る。

普通選擧運動、勞働者の政治的運動は我國に於ては近年追々其聲を盛にせんとして居るが未だ勞働黨又は社會黨を組織すると云ふ程進んでも居ないし、又幾人かの勞働者代表議員を議會に送ると云ふ話も未だ耳にしない。然るに一方最近に於て最も注目すべき現象の一は武藤山治氏を中心とする大日本實業組合聯合會の所謂商工黨組織運動である。武藤氏が直ちに名實共に商工黨なる政黨を次の總選擧に於て一時に成立せしめんとする程の大決心であるか否かは不明であるが、此運動は少くとも議會に實業代表議員を送る運動と稱する事が出來る。武藤氏の說かれる所は近來經濟問題が政治の中樞を爲すやうになつたから實業家の國政に關與する事が甚だ必要でありとし、而て從來の如く實業家が政府政黨と結んで私利を營む事を排斥し、政治の公明と實業界の廓清とを期し、且つ大戰以來我國財政の急激なる膨張をなした事を指摘し、營業稅其他の負擔を減少し、國費を節約する事を主張し、其爲め次の總選擧に際し、實業家相謀

つて準備委員を設け、選擧費用は一切寄附に依り候補者を煩はさず、政黨外に在つて惡税全廢の目的を達するに適する候補者を擧げんとするのである。之れに依つて數十名又は數百名の實業代表議員を議會に送らんとするのである。

武藤氏の主張は黨利黨略に囚はれず、私利を營まず、國運の發展に適切なる經濟財政に關する政策を樹立する能力と熱心のある候補者を議會に送らんとするのであるが、氏の示されたる具體的政綱の大眼目は惡税撤廢に在り、惡税としては營業税、通行税、醬油釀造税、織物消費税を掲げ、更に地租の全廢にも贊成協力すると云ふのである。即ち氏の運動は商工代表運動であるが、實質は惡税廢止、就中營業税廢止運動とも云へる。然し兎に角政治的に活動し、否もつと具體的に其目的の爲めに次の總選擧を利用して此目的に協ふ代議士を議會に送らんとするのである。然るに之れと同じやうな傾向は他の方面にも起つて居る。武藤氏は主として大阪を中心として活動して居るのであるが、東京に於ても先般議會開會に先立つて東京市實業組合聯合會に於ても熱心な營業税廢止運動を行ひ可なりの反響があつた。又元日本興業銀行總裁志立鐵次郎氏を中心として東京市の一流の實業家十數名が集つて經濟攻究會といふのを組織し、日本の經濟財政の實際問題を頗る眞面目に研究的態度を以て具體的に調査して居るが、之れも亦税制整理が其中心であつて、營業税の撤廢、地租の地方移讓等は其最も重要視して居る點である。武藤氏の廢止を主張して居る通行税、醬油釀造税、織物消費税は又此會の廢止を主張する所であるが、此會は更に直接税、間接税、國税、地方税の各項目に亘つて廣く具體的の改革案を掲げて居る。勿論此會は現在に於ては何等政治的の活動を爲す意向もなく、眞面目な研究を續けて居るのであるが、實業家の政治に對する熱心、就中戰後の負擔に對する意見の高潮して居る點は實業聯合會と同一である。要するに實業界に於ける此種の研究運動が期せずして東西に起つた事は實業家の覺醒として次の總選擧に一面の活氣を與へるに相違ない。次の選擧に於ける普通選擧運動、並びに勞働社會問題に對する同情を旗幟とする言論等と相對比して一種の妙な對照を爲す事であらう。

(二) 政治の内容の變化

特に商工業者の代表としての議員を議會に送る事が代議政治の精神から見て好い事であらうか、又自然の進化であらうか、更に名實共に商工黨なるものを組織する事が理論と、我國の實際に照して必要な事であらうかと云ふ事は大いに考慮を要する。

抑々昔の政治は其の内容が至極簡單であつて立法と警察、裁判、軍事、土木、徴税位の仕事に過ぎなかつた。即ち今の司法省及び內務、大藏の仕事の一部分位のものであつた。然るに文明の發達、經濟狀態等の激變と共に教育、衛生、產業、交通、金融等が重要な政治の內容となり、將來は益々經濟關係の政治が重要となり、更に此經濟の發達に伴ふ社會問題が政治の內に漸次重要な地位を見出すやうになる。文部、農商務、遞信、鐵道等の各省の出來た事は明治の政治の進化を語るものであるが、英、獨等の諸國に於て近年勞働省又は社會省の出來て居る事は更に大正時代に於ける我國政治の內容に新らしい附加へが出來る事を或點まで暗示してゐる。即ち明治の政治の中心は經濟にあつたが大正の政治の中心とまでは云へなくとも新らしい重要さを示すものは、言葉は惡いかも知れないが社會であると云へる。丁度經濟學が社會學から發達して國民經濟學の體系をなしながら勞働問題の重要となると共に分配問題を中心とした社會問題が新しい經濟學の中心となつたやうに政治も亦之れを重要視するやうにならう。封建時代の政治は防備保安であつたが明治の政治は產業教育が中心であり、今後は經濟は一の大きな道を社會問題に讓る事にならう。

従來我國一流の人物は多く官吏になつたものである。私が學生時代に或外國教師は優秀な學生が舉つて官吏になる事を不思議がつて實業界に行く事を勸めて居つたが十數年後の今日に於ては一變して優秀な人が續々として實業界に行く。此點に於ても實業界は我國の社會に漸次重要な實力を有するやうになつた。又官吏自身も從來は只主として法律の智識があれば足り、樂に威張つて居られたが段々夫れでは足りなくなり經濟的の智識が重要視されるやうになり、近來に於ては一時は政府に於て毛嫌ひをして居た社會問題、社會政策に關する智識が各方面の官公吏に重要視されるやうになつて來て居る。實に隔世の感がある。餘事ながら此點から見ても現在の高等文官試驗課目は甚しく時勢に副はぬものと言はねばならぬ。翻つて初期に於ける議會の狀況を見ると、國家の根本法規、各種の警察的行政法規、軍備の充實等、所謂內外の秩序の維持、制度の樹立に忙しく議員は國事を憂ふる、所謂憂國の士か、大言壯語する豪傑か、或は法律智識に通ずる者が重きをなしたが漸次に財政經濟に關する智識、技倆を有する者が重ぜられるやうになる傾向がある。元來代議政治は最初が國王に對する貴族、地主の利益擁護に始まり、次では此等の特權階級に對する民衆の自由平等の主張に基き、更に歐洲に於ては貧者、若しくは勞働者階級の所謂ブルジョアに對する對抗運動、即ち勞働運動、社會運動が代議政治の一

面の新しい精神として加はらんとして居る。思想上の自由主義と産業革命とが殆んど同じやうな時代に起つたので近世の議會には一般に産業關係の利害が強く代表せられて居る事は爭ひ難い事である。併し之れより遅れて起つた社會主義的の思想、分配問題を主張の中心とする勢力は未だ我國の議會には旺盛ではないが、歐洲では既に可なりの勢力を占めて居る。要するに近代の政治は、政府に於ても議會に於ても、既に十分に經濟勢力は頗る重要な地位を占め、而て一面に社會問題が其勢力を擡頭せんとして居るのである。

さて此樣な時期、此樣な形勢の下に於て更に特に今日商工代表議員を議會に送ると云ふ運動、或は商工黨を組織すると云ふ運動は適切であらうか、又社會問題の旺盛とならんとする傾向、及び外國に於ける社會黨擡頭の形成に鑑みて如何なる意義を有する事にならうか、愼重に考慮すべき點である。

（三）商工代表の現勢

政治の内容が經濟問題を重要視するやうになつた事は前述の如くであり、又政治に關係する人が經濟的智識を具へるやうになり、少くとも之れを重要視するやうになつて來た事は事實であるが、武藤氏は更に之れに滿足せず、將來一層實業家が揃つて議會に出て、更に十分に議會に於て商工業の利益が代表せられん事を希望するのである。抑々議員、政黨が或種の産業若くは職業の利害を特に代表する事が代議政治の本務を盡す上に於て最も適當か否かは大に考慮すべて事である。中世紀ヨーロッパの都市に在つた手工業者若くは商人のギルド（組合）の如きは經濟的の性質は同業組合であるが、或程度の行政權を持ち、或者は裁判權さへ持つて居た者もある。歐洲の諸都市やハンザ同盟の諸港市の自治的政治は歴史的には此樣な商工業者の職業的團體の勢力を中心として發達したものと云へる。それが後に國家統一、國家的經濟政策の樹立の必要、國會の勢力增加と共に其勢力を失つて國家の政治には特種職業代表的の勢力は弱くなつた。併しながら現代の經濟組織の改革論の中に社會主義から轉化して組合社會主義が唱へられるやうに政治的にも國民の利害が職業的に代表される事が最も政治の合理的に行はれる事に適當し且つ政治が圓滿に行はれると云ふ實情が現れ、又其理論が確立されるやうな時期が來るかも知れぬが、現在の代議制度は一般的には特殊利害の代表者よりは寧ろ國政の各方面に亘つて相當の智識があり、人格の高い公平な人を要求するのである。勿論自己の地位、智識、經歴、選擧區等の關係より或特種の利害若くは問題を特に強く主張し、又は專門的に取扱ふ事は

あらうが、根柢は矢張國民の代表であつて、特殊利害、例へば商工業者の代表と云ふのではない、若し職業代表、例へば商工代表議員を宜しとするならば、當然農業代表議員を善しとし、商工代表が資本家代表の意義であつて且つ又其の政策を執らんとするならば當然勞働代表の成立を促進せねばならぬ。商工の利害と云つても傭主、資本家と其の使用人とは問題に依つては利害の反する事もあらう。農業の利害を代表すると云つても地主と小作人とは多くの問題に於て正反對の利害を持つ事もある。名は商工黨、農業黨と雖も其主張する政綱に依つては其の中に種々の利害の對立を生ずる。若し商工代表、農業代表が資本家又は地主の代表的政綱を執るならば當然勞働黨又は社會黨が對立せねばならぬ。少くとも商工代表黨が如何なる政策を執つても之れに對して農業代表黨が成立し、自由職業及び俸給生活者等の利害を代表する或種の團體の成立は當然必要となる。政府の經濟政策且つ殊に課税問題に就いて現實の爭を必要とする事が生じるであらう。此故に若し商工代表を作ると云ふ意味が永續的團體を作ると云ふ意味ならば當然農民黨、場合に依つては勞働黨の對立を豫期せねばならぬ。現在の我國の實状に於て自然の進化は別として今直ちに理論上、實際上此方針に進む事が正當であるか否かは大なる疑問である。

試みに我國の衆議院議員の職業別を見ると第一回の選擧の結果に依れば定員三百人中、百二十九人が農業者であり、商工業に從事する者は僅かに二十一人、其他銀行會社員として十一人あつたに過ぎない。然るに最近の第十四回の總選擧の結果に依れば定員四百六十四人中、農業者は九十三人に減少し、商工業者は三十六人に增加し、別に十二名の鑛業者があり、更に、百三人の多數の銀行、會社員が加つて居る。即ち第一回の選擧に於ては商工業者、銀行、會社員一に對し農業者四人の割合であつたが最近の選擧の結果は之れが逆轉して農業者三人八分に對して六人強の商工銀行者等が選擧されて居る。此數字を見れば一目の下に農業を代表し得る地位に在る議員の數が激減して商工を代表し得る議員の數が激增したと見得る。併しながら之れは我國が經濟的に農業國から商工業國に移りつつある變化が政治的勢力に反映したものと見る事が出來やう。勿論會社員と掲げてあつても農業が寧ろ主たる收入である者があり得るし、其他此職業別の數字で其儘議論する事は不正確な事もあらふが大體右の變化を認める事は誤りのない事である。そこで數から云へば現在必ずしも商工の勢力が議會内に於て弱いと云ふ事は出來ない筈だ。現在議會に於ける職業的色分けは右の如く商工業銀行會社の百五十一人、農業の九十三人に次いで、辯護士の六十

九人と云ふのが斬然頭角を現はした數字である。實際問題としては現在の議員數は四百六十四人に定つて居るのだから各種職業別議員數を見ると、商工代表の數を增さんとすれば農業者か辯護士の勢力範圍に食入るより外道はない。然るに既に產業代表と云ふ方針を執るならば、旣に著しく減少した農業者の範圍に侵入する事は理論からも實際からも出來ない事である。然らば餘す所は辯護士の範圍である。

辯護士から議會に六十九人の議員が出て居る事は辯護士の總人數と比較しては勿論それが職業代表の意味で之れ丈けの勢力を得たとは云へない。元來我國の議會に於ては地方議會でも、國會でも、辯護士の勢力が甚だ著じるしく、近來益々其傾向が增加する。辯護士は智識階級であり、法律に通じ、比較的理論的の頭を有し、且つ公平な立場の職業に在り、且つ政策の如何に依つて、物質的の直接利害を受ける事の少い階級であるから代議者としては最も適當な資格を有する者に相違ない。併しながら餘りに多數の辯護士が合議體の議員となる時は議論が形式に流れ、政策の樹立實行に障害を來す場合が多い。例へば我國の或都市の事業の一向に進捗せぬ事は其市會議員の大多數は辯護士である事が主因ではないかと思ふ事さへある。そこで辯護士は本質上代議者として最も適當な者ではあるが、我國に於ては餘りに多く之れに依賴し過ぎる傾きがありはしないかと思ふ。

右の商工議員、農業議員は勿論各自の產業の利害を代表すると云ふ意味で選擧されたのではなく、辯護士と均しく彼等も國民の選良として議會に送られたのである。併しながら議席に於ける商工、農業の數は同時に實際に於て問題の生ずる每に各自の特殊利益を主張する基本的勢力とたり得るのである。此意味に於て商工業其他所謂實業家は、十分に、現在既に議會に於て代表せられて居ると云ひ得る。若し商工業者にして猶其經濟的及財政的の貢献、並びに勢力に比較して政治的の勢力少しと信ずるならば、即ち選擧場裡に於て辯護士の勢力と爭ふの他實際的の効果はない。事の良否は別として我國の大都會に於て當然實業家が出馬すべき場合に辯護士が選出されて居る所も多いから、少くとも實業家が自らこれに代ると云ふ事も起らう。但し實業家の利害代表としても、辯護士であつて有能廉潔な者と、假ひ實業家であつても私利を顧みる者とでは結局孰れを善しと言ひ得るか。然らば要は人格に在りとも云へる。

（四）政黨改造の必要

右の如く論じ來ると商工代表運動は、殊に商工黨の組織は理論的に大いに考慮すべきものであり、且つ實際上の必要もない

やうに見えるが、之れを我國の政治の實際の運行に見れば、武藤氏の主張せられる商工代表運動の一面の眞理を認めない譯に行かぬ。我國の衆議院に於ける實際勢力は第一に政友會、第二に憲政會に在る。而して之等の政黨は一方に色着いて居るとは云ひながら孰れも或は農民黨であり、或は商工黨であるとは云ひ得ない。又商工業者と農民との利害が常に二大政黨の政綱として相對立し得る程總ゆる點に於て相反する者では決してない。勢ひ之れ等の政黨は産業代表ではなく、國民代表ではあるが、併し初めに述べた如く現在之れ等の大政黨中には眞に必しも國民の利害を代表せず、單に黨利を計り、黨員の私利を擁護する傾向のあるものもある。即ち武藤氏の云ふ如く黨利黨略を事とする政黨、詭辯を弄し、揚足取りを事とする議員は到底吾人の與する能はない所である。從つて氏は經濟の實際に通ずる實業家、又は實業を理解する人をして國政に關與せしめ政治を一新せんとするのである。即ち現に商工業者に屬する者と雖も在來の政黨に關係して、其威力に依つて私利を營む者も多いであらう。玆に於て既成政黨の改造といふ事は萬人の希望する所である。然しながら之れを實行する爲めには別に有力なる勢力を必要とする。舊國民黨、新に成立した革新倶樂部は政黨改造、若くは議會政治改革の先覺者として立つたのであるが、其勢力は未だ强しと云ふ事は出來ぬ。革新倶樂部は其名は現代の機運から云へば勞働黨若くは社會黨の方向に進むべきが如くにして必しもさうでない。將來は別として現在は寧ろ商工に縁の深かつた國民黨と大差はないが、偏に政黨改造、議會改造を欲する者は何等か更に强い勢力が議會に現れる事を欲する。此意味に於て政治の公明と實業界の廓淸とを期し、純正な實業家を議會に送らんとする運動は同時に既成政黨の弊害に對抗し、之れを動搖せしめ、之れを覺醒せしむる者であるから、此意味に於て眞面目な實業家が從來の政黨と其因緣を離れて選擧場裡に出陣する事は寧ろ希望する所である。

併し乍ら實業家代表の意味が實業家のみの利益を代表し、他との調和、他の國政を顧慮せずといふのなら夫れは甚だ誤つて居る。所謂實業家代表運動は勿論此種の我利的意味でないのに相違なからう。或は革新倶樂部、庚申派と並立し、或は時に依り之れと提携する場合には一の勢力を形造るであらう。

（五） 營業税廢止運動

武藤氏の商工代表運動の宣言書には商工黨組織と云ふ文字は現れて居ない。政黨の組織といふよりは寧ろ確定した具體的の政綱の實現が目的のやうである。即ち惡税撤廢、殊に營業税廢

止が夫れである。即ち營業税廢止其他の目的が到達出來れば特に必しも永續的の商工黨を興さうといふのではないやうに見える。例へば次の四十七議會に於て營業税が廢止されたなら商工代表運動はどうなるのであらうか。此點が曖昧であるから商工代表運動は單に營業税廢止運動としても考へて置く必要がある。我國の國税、營業税の負擔の過重である事は明確なる事實である事を私は斷言する。殊に直接税としての地租、所得税に對する均衡から云つても著るしく過重である。我國の國税地租の十年一日の如く變更せざるに反し所得税、營業税は逐年增加し、殊に大戰爭終了後に於ては全體租税收入が減少し、所得税さへ減少したのに、獨り營業税のみが激增して居る實狀である。加之國税に對する地方附加税としての營業税の如きは頗る重く、東京市の實例を見ても大正十一年度地租附加税七十三萬圓、所得税附加税二百七十萬圓に對して營業税附加税五百七十萬圓と云ふ巨額になつて居る。元來營業税は所得税の補完税と云ふ意味で取られるのであつて、徵税の理論から云つて當然所得税より少くなければならぬ。然るに右の營業税附加税の如きは所得税の約二倍になつて居る。伯林市の主なる租税は戰前市地租二千三百萬馬克、所得税三千五百萬馬克、營業税千百萬馬克であつて、營業税は所得税の三分の一弱にしか當つて居ない。然るに東京市の例では其逆になつて居る。即ち上下營業税の負擔は非常に重い事になる。一般租税減少の時に當つて國税、營業税のみが增加し、更に營業税附加税が右の如き激增をすれば、何人と雖もこれを驚くであらう。況んや不景氣に苦む營業者に於てをや。或財政學者は之れを評して取る者もよく取つたが納める者もよく納める者だと云つた。私も全く同感である。此納税者は鳴かざる鵞鳥の感がある。

營業税の課税標準が外形的標準で取り易いからと云つて無暗に取つたのであらうが、取られる方は好い迷惑で、所得税の如き負擔の實力に相應せず、單に營業税は推定負擔力を根據とする收益税であるから、人の懐の勘定に無頓着な取り方をされては堪えられまい。此數年來の營業税に對する甚しき苛斂誅求は遂に營業税廢止運動を激成したのである。

營業税を全然撤廢すべきか否かは議論のある所である。所得税の不完全な間、又一方に地租の存在する間營業税全廢の議論は考慮の餘地がある。玆に税制論をする時はないが、少くとも地方税に移讓すべき性質のものである。然らば國税としては廢止せられ、營業税の負擔額は勢ひ減少する事になる。其他武藤氏の主張せられる通行税其他を國税として廢止する事には大體異議はない。

然し乍ら地租の全廢に就いては大いに考慮すべきである。私は現在に於ては數年來地租の地方移讓を主張して居るが、土地に對する負擔を全く廢すべしと云ふ考へは持たぬ。寧ろ土地に對する負擔は都會に於て特に將來重要な財源となすべきものと考へる。此意味に於て既に地方官會議の決議もあり、當季議會に於ける主張もあり、前記の經濟攻究會の意見の如く地租移讓を宜しとする。然し大體に於て戰後急激に膨張したる豫算を或程度迄縮少し、負擔の減少を計る事は適當と考へる。其實行は或程度迄軍備縮少と關聯して考ふべき事であらう。

然し乍ら將來の政府の施設として最も急速に重要な事は、單に負擔の輕減と云ふ意味よりしてのみならず根本的に稅制改革を行ふ必要がある。之れを行ふに非れば種々國家事業に支障を生ずるのみならず、殊に地方財政及び事業が殆んど救ふ事の出來ない窮地に陷るであらう。現内閣は此大事業を行ふに最も適當であり、又最も適當な時機であつたと思つたが未だ之れに手を染めない。總選擧前の議會に於て之れを望む事は頗る難いと思ふが、總選擧後の議會に於ては是非共此問題が進捗する事を希望する。

(六) 議會に於ける新勢力の必要

獨逸で十年程前に國民經濟學に對して私經濟學若くは商事經營學と云ふのが起つた時に、有名な國民經濟學者ブレンタノ氏之れに反對して曰く、現今國民經濟學が實業家の間に喜ばれないのは事實である。殊に英國では國民經濟學者の論ずる所が抽象的であるから實業家は之れを輕蔑して居る。獨逸に於ても實業家は國民經濟學者を輕蔑し、更に之れを憎惡するに至つた。國民經濟學は實業家の利益を計らず一般國民の利益を考へるから之れ程嫌はれるやうになつたが、私經濟學は實業家の利益を計り、私經濟學者は實業家の味方をする者である。例へばカーテルと消費者との關係、或は專賣價格の維持、勞働契約等の問題に於ても私經濟學は實業家の特殊利益を代表する恐れがある。即ち國民經濟學者は實業家には厭はれるが國民の利益を計る者である。之れに反して私經濟學者は特殊利益を代表する恐れがある。即ち私經濟學者は國民經濟學者の主張を裏切る恐れがあるものだ。從つて獨立の私經濟學の發達を喜ばぬ。

即ちブレンタノは私經濟學者を頭から實業家の傀儡として排斥して居るが之れは偏見で、私經濟主體の研究、經濟現象の私經濟的研究は決して實業家の利益代表とは同一ではない。全く公平な立場から事實の研究をするのである。私自身も私經濟の研究に從事する者だが、未だ特に實業家の特殊利益のために偏

頗な議論をした事はないと思ふ。

私經濟學者は實業家の利害を代表する者ではないが、武藤氏の所謂商工代表議員は、單に眞面目な商工業者を議會に送ると云ふ意味に止まらず、特に商工業者の利害のみを主張する事、或は廢稅運動のみを主眼として議會に立たしめると云ふ事であれば、これこそ餘りに特殊利害を代表すると云ふ非難を被る恐れもある。先年の米價騰貴に際して農會が主動となつて米の不賣同盟をした事があるが之れ等も世に異論が多かつた。此樣に餘りに明確に議會に特殊利益代表を露骨に送る時は反つて政治の圓滿な進行を害する恐れもありはしないか。非常なる弱者は其地位の向上に全力を盡しても敢て反感を招かぬ。例へば二三の勞働代表が勞働者の利益伸張のみに心血を傾倒しても世間は之れを異としないが、相當に勢力のある者、現在特殊利益代表者はないが議員數から云へば現在既に多い商工業者が特に特殊利益代表運動を標榜する事は考慮すべき事であらう。要するに武藤氏の運動は優良な議員を商工業者から出すと云ふ意味で贊成すべきであらう。

然し若し營業稅廢止が目的であるならば、今回の商工代表議員運動に依つて從來の大政黨に對抗し得る大勢力が出來ればそれで成功するが然らずんば實際問題としては寧ろ政友會に運動して營業稅廢止の政綱を揭げしめる事が近路ではないか。

兎に角商工代表議員運動の動き方は未だ明瞭でないのであるから、不取敢來春の總選擧に對する一の新空氣の注入運動として注目すべきものである。此運動が政黨の改造、議員素質の改良に成效し、革新倶樂部の活動と共に我國の議會政治の向上に貢献する所あらば甚幸である。

思想の險惡化・行動の兇暴化

要するに生活を離れた幻想的意識

長谷川如是閑

思想と行動とが極端化するといふことは何處から起るかと言ふに、必ずその思想なり行動なりが生活と沒交渉に昂進するところから起る。今日では形而上學や哲學や科學やがそれ自體に於て昂進して、何等生活上の根據なしにその存在を主張し得るかの如く考へられてゐる結果、思想とか行動とかいふものも、そのこと自體が所謂價値といふやうなものを有ち、超然たる獨自の存在理由を有つかの如く信じられてゐるが、しかしそれ等のものは畢竟人間が共同の生活を營むに方つて、その目的の爲めに進化したものであつて、それが人間の生活の現實性に背いても尙ほ存在理由を有つといふ譯のものではない。人間の意識は元來意識する爲めの意識ではなくして、生活の爲めの意識である。行動も亦行動それ自體の爲めの行動ではなく、生活の爲めの行動である。哲學者又は科學者といふやう人々は、生活の分業の上で思惟といふことを自分の分擔としてゐるので、何人も自分の生活上の分擔を神化する傾きを有つてゐるところから、彼等も亦その分擔であるところの思惟を神化して、思惟といふことが生活と交渉なしに獨自の發展を、自分の頭の中だけで、無限に遂げらるものであると考へるに至つたのである。又英雄といふやうな人々は、その創造的行動が一般の人々の空想を現實化したやうな目醒しいものであるところから、その英雄的行動は、一般生活と沒交渉に何處までも發展し得るかの如くに妄想するに至るのである。彼等にあつては、人間の行動は神の全

能の行動と同じく無際限の自由を行つたものと考へられてゐる。でさういふ人間の歴史は、一般の間に、思想や行動やが生活を離れた――さうして生活より以上の――あるものにまで向上したかの如く考へられるに至つたのである、

このことは無論人間に取つて常に必ずしも禍であつたのではない。偉大なる思想が如何に人間を尊くし、偉大なる行動が如何に人間の生活を崇高にし、繁榮せしめたかは、歴史の示す通りである。然し他方に於てはまた、それが歴史の示して居るほど、人間に取つて絶對の働きを遂げたものであるかどうか、頗る考慮を要する問題である。ギリシアの思想が西洋人の心的生活を立派にしたことは疑ないが、然し世界の歴史がギリシア思想によつて立派にされた西洋人だけによつて造り上げられたかの如く人々に信じさしてゐる今までの歴史は、甚だ眞實から遠いのである。單純に心の歴史といふものだけについても、哲人の思想を承け繼いだ心だけが、人間の心の歴史の中心動力であつたと考へることは出來ない。況んや一般の歴史がそんな心的生活を動力として發動したのであるといふことは考へられない。多數の西洋人の心にはギリシアの哲學は無い。そのギリシア哲學を有たない心が、寧ろ人間の心の歴史の動力であり、さういふ集團が一般歴史の動力であつたのである。又、世界が英雄の行動によつて重大な紀元を造り出したことは眞實であるが、その英雄の行動が彼の天才に宿つた空漠たる靈氣であつたと考へるのは、間違ひであり、またその行動だけが人間を押し進めて行つたと思ふのも間違ひである。天才の心や行動を、彼に宿つた或るものの偶發的の發動であると考へたならば、人間は極めて氣紛れな歴史を造り出したこととなる。事實に於いては天才の心や行動は、社會的感覺並びに社會的動力を働き出すところの運轉手のやうなものであると見なければならない。彼の心や行動は、彼自身にある崇高や壯大やを以て人間に君臨する權利を得たのではなく、それが時代の生活を發動せしむる契機を握つて居つたところからさういふ資格を得たのである。崇高と言ひ壯大と言ふのは、一般に信じられてゐるやうに、獨自の超越的の價値ではなく、多數人の生活に根柢し、その時代を生かす偉大の力であるところにその生命があるのである。

歴史が天才の思想や英雄の行動やを、それ自體の生存であり、それから一般人の生存が導き出されたと教へてゐるのは、歴史といふ文書を作る人々がさういふ生存の意識を有つ階級に立脚してゐたからである。實際の歴史は一般の人間が之を造り出し、文字の上の歴史は所謂歴史家といふ人々の屬する特殊の階級の意識がそれを造つたといふところから、右のやうな錯誤

が生まれたのである。「自然の歴史」、即ち所謂博物學は知覺に訴へる自然物の歴史である故に、何人がそれを研究しても、病的錯覺に支配されない限り、普通人の知覺を根柢としてその知識が組み立てられる。之に反して人間の歴史はその對象が知覺に訴へる自然物でなく、記憶。言語・記錄その他の心理的仲介を通じての事件であるから、その眞實性は物理學的ではなく、全く心理學的である。從つてその客觀的眞實性といふものが決して一致せず、又統一されない。一つ事件も近くにあつてそれを見聞したものと、場所と時代を遠ざかつてそれを知つたものとの間には、到底一致し難い相違がある。その內容も限り知られない複雜な內的並びに外的條件から成立つてゐるので、物理學者の如く對象の全部を攫むといふことは無論不可能であり、一部を攫んだにしろ、その部分の相違によつて全體に對する解釋が雲泥の差異を生ずる。化學者のやうに試驗室で同じ現象を繰返すといふやうなことも出來ず、その眞實性を保證する何等の手段も無い。從つてその歴史の眞實は、歴史家の生活そのものの上に立つてその事件を判斷しただけの事である。而して何人も自己の生活上の分擔が彼の生活意識を規定するものであるから、その意識によつて人間の歴史を見た場合には、やはり一致すべからざる懸隔が生ずる。武士が天下の形勢を觀察するのと、農夫がそれをするのとはとても一致する筈が無い。故に武士と農夫とが別々に歴史（文書）を作つたとすると、同じ國の同じ時代の歴史が、まるで違つた世界ででもあるかの如くに相違する。今日までの西洋人の歴史が特にギリシア以來の少數人の心の歴史を承け繼いだ階級の人々によつて作られてゐるといふことが、その眞實性の局部的であることを免かれない理由である。

而かもこの局部的の歴史は、今日までそれと同じ心理狀態にある人々が多數人に對する支配者の地位にあつたといふことの爲めに、過度に重大視されてゐたのである。而して生活の意識は如何なる時代でも、さういふ高級の支配者がその支配の目的に副ふやうに之れを組み立てて、一般に宣傳するといふのが普通である爲めに、所謂歴史學の揭げて居る歴史的動機といふものが、意識の上でだけ極めて重大な地位を占めることになるのである。それは即ち思想と行動との、生活を離れた超然的自存である。偉大なる思想、偉大なる行動が生活の總ての動力であり、生活以上の生活である。吾々は生活以上の何處からか得た、生活以上の何物かから授けられた思想と行動とを捉へて、其處から歴史が創り出されるといふのが、今日までの生活過程の理想的狀態である。

が、かういふことは事實の上では殆ど有り得べからざること

と言つて可いくらゐ空想的な意識である。而かもこれを空想又は幻想とする私自身の見地が甚だ突飛な、思ひも寄らない偏見であるかの如く見えるほど、一般の信仰は堅固に成立つてゐる。然しさういふ一般の信仰が今後も永久に人間を支配するものであるかどうかといふことは、既に今日の事實の上から豫見することが出來る。卽ち今日の生活の組織が崩壞するに從つて、さういふ信仰も亦崩壞すべく餘儀なくされるといふことは、未來のことではなく、現在に現はれてゐる事相である。言ひ換へれば、何が生活の歷史の動力であり、如何なる思惟と行動とが生活を活かす人間的態度であるかといふことが、今日ほど明確にそして組織立つた革命を經驗しつゝあることはない。

そのことは甚だ範圍の廣い、そして奥行きの深い問題であつて、思惟と行動との社會的約束が造り變へられるものであるから、永い年月がその仕事を仕上げる外はないのであるが、しかし方向は既に見定められてゐる。生活組織に於ける價値の顚倒が思惟の上に現はれたのは、重大であるか無いかは別として、生活の現實に於いて顚倒的事實が社會の各方面に急劇の勢ひで起つてゐるのは、確かに重大のことである。あらゆる關係の支配者と被支配者との間柄は、在來の盲目的服從關係から脫して、孰れが支配者であるかを疑はれるといふ愚痴が、あらゆる支配者の口から漏されてゐるのを見ても分る。それは偶然に支配者及び被支配者の心理に發生した突發事實ではなく、生活關係に於いて何れが人間の社會的生活を活かす重大の役目を勤めてゐるかといふことから生れた事實なのである。ストライキ、サボタアジュといふやうなことも畢竟、社會的共同の上に於いて今までは無價値な動物であるかに思はれてゐた被支配者がその實社會的生存の鍵を握つてゐるといふ事實をデモンストレートするものに外ならないのである。支配者が懶けても直ぐに社會的生存は脅かされないが、被支配者が半日でも懶ければ、社會的生存が脅威されるといふことは、卽ち生存の動力が支配者に於けるよりは、寧ろ多く被支配者に存することを證明するのである。其處から在來の意識の上の價値が顚倒させられる譯である。どちらが支配者か分らないといふのが事實であつて、それは生活の內容がどちらの手により多く握られてゐるかについて、今までの意識が間違つてゐたのである。今日の現實はこの意識の上の幻想を破壞する過程なのである。

實際今日までと雖も生活の歷史は、生活者その人が組み立ててゐたのであつて、單にそれを支配した者だけが造り出したのではない。そこで實際の生活を根柢づけてゐたところの思想、實際の生活を働き出してゐたところの行動が、どういふもので

あつたかを推定することが出來るのである。それはギリシアの哲學者のやうな極めて少數の人々の思想ではなく、アレキサンダアやナポレオンや、百年千年に一人だけ出るといふやうな、所謂不出世の英雄の行動ではなく、日々の生活を根柢づける社會全體に亘つて、苟くも人間である以上有つてゐないものの無いといふ心の働き、及びすべての人々が日々働き出すところの、苟くも人間である以上はさう働き出さない譯に行かないといふ行動、それが人間を活かし、社會を結び付け、そこから人間の生活の歴史を生み出してゐたのである。この思想、この行動に於いては、生活を離れた何物もない。その思想自體、その行動自體がそのまゝ生活であつて、それを措いて人間的生活がある譯ではない。これは實に傳統的意識の思惟に於ける思想行動とは違つたもので、而かもそれが生存を内容づけ、それが生活の動力であり、生活の表現であり、言ひ換れば生活そのものは、即ちさういふ思想行動それ自體であつたのである。

　この思想行動は生活と少しも離れない點に於て、傳統的意識で考へられた思想及び行動とは全くその社會的効果を異にするのである。一言にして言へば、さういふ思想行動は決して極端化されない。生活と離るゝことの出來ないものは、何に限らず極端化しない。なぜなれば極端化とは生活を抽象化した場合のことであつて、現實の生活に取つては、極端化は空想であり、それが實現すれば滅亡である。思想行動も意識の世界で抽象化されれば、どんな極端にも行くことが出來る。人間は霞だけ吸つてゐても生きて行くことが出來ると思想することも容易である。否、霞だけ食つて生きて行ける人間が初めて理想的人間に到達したものであるとさへ考へることが出來る。しかし考へといふものが生活を離れてはならないとなると、霞を吸つてるだけで生きられるといふやうな思想が成立ち得る筈がない。實際物質慾に支配され、いろんな物を食ひ、穢いものを排泄するといふやうな面倒な生活から脱がれたら、人間はサバサバするに違ひなからうから、理想としてそんな人間を空想するといふことは無理のない話であるが、畢竟さういふ空想は、生活といふものを閑散な時間に於ける頭の働きであると考へる階級の仕事であつて、生活に即した生存法を取つてゐる人々の決して思ひ付くところのものではない。思想が極端化するのは、それが生活を離れた場合に限る。行動が極端化するのも亦さうである。實際的な人間ほど爭ひを好まないといふのも、爭ひといふ行動が大抵の場合爭ひそのことの爲めに昂進した極端の行動となる恐れがあるからである。尤も爭ひに勝つといふことが生存に極めて必要なことなので、爭ひといふことは莊嚴化され、理想化さ

れ、爭ふことそのことがまるで生活の極致であるかの如く醇化されるに至つたのであるが、それを生活に引戻すと、醇化は忽ちにして幻想であると分つて、戰の後の悲哀が痛烈な生活の桎梏となる譯である。思想でも行動でも極端化すれば生存を危くする。故に社會が頽廢して生存の能力が弱められた時に、定まつて思想行動の極端化が起る。世紀末の社會的動亂はそれに原因する。一方では思想の頽廢的極端化があり、他方では行動の頽廢的極端化があるといふのが世紀末的世相である。それはその社會の組織的構成が崩れて、新たな建設を生み出すまでの崩壞の過程である。

この崩壞の過程はそれゆゑに、文化的頽廢の時代から次ぎの時代を生み出すまでの過渡期に於ける有力な現象である。有力といふのはそのこと自體が生活の最も良い狀態といふ意味ではなく、腐れ掛かつた生活を打ち壞して、次の建設の爲めの空地を作るといふ働きが肝要なのである。故にこの破壞作用が起らないと、何時まで經つても次の建設がその地盤を得ないことになる。從つて革命は起り得ない。歷史上革命前期に於いて思想行動の極端化が判で捺したやうに定まつて起つてゐるのは、卽ち人間がその生存の可能性を保有する以上、自己の行き詰まつた生活を破壞する能力を働かせるものであるといふことを示してゐるのである。

今日に於ける思想の險惡、行動の過激化も亦右の說明によつて理解することが出來るのである。思想と行動とが生活を離れて勝手氣儘な發展を遂げたところに世紀末的意義がある。それに對して種々なる極端な社會思想の起りつゝあるのも、それがまだ生活に卽して働き出したものでないといふ證據である。傳統的思想の極端化は軍國主義となり、壓迫政治となり、ファシスチとなり、國粹會となり、思想行動の極端を發揮してゐる。ファシスチの宣言書が極めて平凡な反動思想に根柢し、我が維新の武士の思想のやうなものをそのまゝ表はしてゐるのも、彼等が生活そのものゝ立場に於いて生きる人でなく、生活を支配する傳統的階級の人だからである。今日彼等が政府を乘取つて見ると、その生活を離れた思想行動が次第に幻想と化して、彼等自ら實際政治の上で信仰と行動とを制限しない譯に行かなくなりつゝある。彼等が無責任な支配團體である限り、生活を離れた信仰と行動とが如何にも實際的のそれの如く思はれたが、次第に現實に近づくに從つて、彼等も亦何時の間にかその異常の信仰と行動とを平凡化せしめなければならないことに立ち至るのである。日本の軍國主義でも國粹會でも、現實の生活の外に立つて氣儘なことの出來るのは、彼等が生活を離れた幻想的世

界を有つてゐるからであつて、一朝現實の生活に即して生存しなければならないといふことになると、その幻想は夢の如くに消える。軍縮の結果、堂々たる軍人が簿記を習らひ、算盤の稽古を平氣でするやうになるのは、即ち彼等も亦生活に即して生きなければならないといふ時代に遭遇したからである。

然し又、極端な思想、極端な行動が世界的に支配してゐるやうに見える現狀は、果してそれが目に見える通りの事實であるかどうかをも考へる必要がある。如何にも日々の新聞紙上に極端な事實が報道され、書物や演說に極端な思想が吐き出されてゐるのであるが、今日の生活に於いて、さういふ行動なり思想なりがどういふ働きをしてゐるかを知ることが肝要である。一方に就いて生活組織の崩壞が新しい世紀を生み出す爲めに、舊組織に對する反抗、舊道德の破壞、現代的秩序の無視……さういふ行動なり思想なりが歷史的過程の必然として起り得る筈であるが、同時に他方に就いては、その崩壞の過程の底から作り上げられる新たなる生活の基礎が、現實の世界の歷史を生み出すものとして發育しつゝあるに相違ない。この破壞的の現象と建設的の現象とは、共に今日の標準からは極端に見え、過激に見えるのである。事實兩者共に極端でもあり過激でもある。何となれば前者は實際、生活の破壞であるから、思想的にも行動的にも極端であるに相違なく、又これに對して防護する傳統的階級の思想行動も、その本來の極端性過激性を十分に發揮するに至ることは、末紀的現象として當然である。次に新たなる時代を建設する生活現象の上に立つ思想及行動も、それが實際の建設的事業であるよりは、寧ろ未來に對する生活理想であるところから、自ら生活の現實そのものよりも極端であり、過激であるべき筈である。現代に於けるすべてが極端であり、過激であるのは、斯くして當然の事相である。それは丁度頽廢した感覺を刺戟する色彩が、今日の頽廢婦人の服裝のやうに、極めて刺戟的の强烈な色でない譯に行かないのと同じ現象である。

かやうな世紀末的現象を惹き起す社會的條件としては、必ず支配狀態の弛緩がある。支配はそれが生活の組織と一致して、その機構の圓滿な發動である時に、最も堅固に最も圓滿に成立する。現代の生活組織はこれに反して傳統的支配による管理が、組織の機構を代表したものでないところから起つた變化に遭遇してゐるのであつて、支配と生活の機構とが食ひ違つてゐる。故にその機構と一致した生活管理を生み出すべく働いてゐるのが現代の社會過程である。そこで傳統的支配が根柢から動搖してゐる譯である。で、現代人の思想と行動とが現代の法律的支配、道德的支配、宗教的支配の何れにも反抗するやうな形

を取つてゐるのである。

故に實際問題としてこれを見ると、今日の場合思想及び行動の極端化は必然の時代相であつて、その破壞的作用が往々實際的に役立つといふ變則的狀態にあるのである。それが爲めに人々は投機的にフアシスチ的行動を取る。然しながら次の建設は、社會がこの破壞によつて根柢まで崩されないで、腐つたものだけがその破壞力の影響を受け、新しい芽生えは舊いものの破壞と相應じて、その頭を擡げて行くといふところにある。現に現代を特徴づけてゐるやうな思想行動の亂暴狼藉も、この萠え出づる力を有つた新たな生活の組織の發生を如何ともすることが出來ない。種々なる極端な行動や思想は、それ自らの戰ひに於いて亡びる一つの芝居である。それは歷史家と稱する階級の眼に極めて重大に映じ、後々までもある階級の人々の意識に重大にして唯一の歷史的動機であつたかの如き印象を殘すであらうが、要するにそれは特殊の階級的生活者の意識である。實際の生活及び生活組織は、そんな水の表面に浮いた脂のやうな生活の滓から作り上げられないで、その下の實際の生活を內容づけてゐる平凡の生活者が、コツ〳〵と作り上げてゐるのである。それは恐らく如何なる歷史家にも記錄されず、如何なる哲學者にも觀念されない生活で、從つて文字や言語の上ではちつとも歌はれない、認められない生活ではあるが、實際の人間はさういふ生活の中に生き、そこで時代を作り、進化を生み出してゐるのである。華々しい亂暴狼藉の世界は、特殊階級の芝居である。

しかしながら現代がまださういふ舞臺の上の芝居に支配されない狀態にまで進んでゐる譯ではない。寧ろ生活の大部分が今尙ほ生活に即したそれでなく、生活を離れた幻想的意識の强い影響を受け勝ちである。この事實の存在する限り、幻想が實際的生活に働き出す力を無視することは出來ない、――丁度野蠻人がいろ〳〵の迷信に支配されたやうに――そこにフアシスチの成功の動機があり、現代的支配の强味がある。けれども針路はもうさういふ進行から外れてゐることは、前にも言つた通りである。英雄が時代を作り、哲學者が萬人の心境を作つてゐたかの如く信じられてゐた時代は、次第に滅びつゝある。軍國的運動が力を失ひ、生活的運動が頭を擡げたのもそこに根柢する。現代的英雄は技師であり、管理人である。天才的思想と行動とから生れた全人類の引率者ではない。

現代的險惡はかういふ意味で必然性を有ち、かういふ意味で滅びて行く。しかし實際家は或る程度までそれによつて成功す

るといふ實際的事實を無視するとは出來ない。吾々は生活行動がさういふ表面的事實そのことでないといふ確實な意識を把む必要があると同時に、今倘ほ生活行動がさういふ生活行動でない幻想に左右されるといふ事實の存在することも、忘れてはならない。現代的經世家はこの認識の下に、その生活理想とその實際行動とを作り上げてゐるのである。レーニンの如きは、それで成功した一人である。

思想の力と傳統の力との合成

法學博士　牧野英一

立法は妥協である、しかし科學に妥協はない。——法律家は常に斯やうなことを考へて居るのである。法律も亦一般の社會現象と共に變遷を重ねて行くが、常に、一歩一歩、順序を追ふて、其の變遷の過程を践むのである。それで、立法は常に妥協的なものだ、といふことになる。しかし、立法が、一度、何かの點で、例外を認め、特例を許すことになると、其の瞬間から、法律全體の說明が根本的に變つて來るのである。從來の原則が、よし一つでも例外を認めねばならぬことになると、從來の原則と、新らしい例外とを併せて說明し得る原則は、其の例外をも說明し得るものたる點に於て、從來の原則とは全く根本的に變つたものでなければならぬことになるのである。

□

立法は妥協である。之を言ひ換へると、政治は妥協であるといふことにならう。科學には妥協がない。之を言ひ換へると、思想には妥協がないといふことにならう。

私は、常に、政治の本質が妥協に在ることを論じて、右の言を繰りかへすのである。政治は妥協でなければならぬから、政治に妥協以上の或ものを待ち設けることは無理である。しかし、それと同時に、其の妥協の裡に、政治の赴くべき方向が考へられねばならぬのである。されば、此の意味に於ての妥協と

は、常に、理想に向つて一歩を進めることであるのである。

同時に、思想の自由を論ずるに方つても、おなじやうに考へねばならぬのである。思想はどこまでも自由でなければならぬ。思想は常に傳統から解放されるといふ所に、其の生命を持つものであると謂はねばならぬ。しかし、それと同時に、傳統も亦一の力であることを認めて置かねばならぬ。卽ち、思想の社會的職能は、傳統を一氣に破壞することではなくて、それを適當に改造することでなければならぬ。

□

法律に就いて例を擧げよう。——所有權に付て考へて見る。

フランスの人權宣言は、所有權を以て神聖にして且不可侵な權利であると言つた。之を民法に移して、所有權とは物に對する絕對的の支配であるとするのである。之が所有權に關する傳統である。

十九世紀の中葉以降所有權を呪ふ聲が漸次高まつて來た、所有權を呪ふの意味に於て、此の新思想は、從來の所有權思想に全く反對な立場に立つものである。しかし、それは思想の上のことである。

所有權否定の思想を事實の上に顯はすと、それは、今、所有權の濫用は之を許さないといふ原則として現はれて居るのである。第一に、所有權——例へば或る大きさの土地と考へよう——の不使用は之を許さないのである。其の方法としては、さし當り租稅の制度が考へられねばならぬ。正當に其の土地を利用して收益すれば納めることのできる迄に租稅を負擔せしめるのである。增價稅とやら、累進所得稅とやらがそれである。第二に所有權の不當な使用は之を許さないのである。例へば、正當に理由なくして、殊に他人を害する意思を以て所有權を行使すると、それは當然に損害賠償の責任を生ずるのである。又、所有權の行使が企業として許される場合に於ても、其の企業から發生した損害事實に對しては、企業者に無過失賠償責任を負擔せしめるといふこともある。

所有權に濫用を許さないといふことを、ドイツ共和國の憲法は面白い言葉で言ひ現はすことにした。曰く、所有權は義務を伴ふ、所有權の行使は公共の福利の爲めに爲されねばならぬと。斯くして所有權は漸次義務化しつゝあるのである。

□

其のフランスの人權宣言は慘たらしい革命の結果であつたのであつた。其のドイツ共和國憲法も亦痛ましい革命の結果であつたのである。歷史に就いて其の革命の由つて來る所を考へて

見ると、其の革命はまことに避くべからざるものであつたとも言ひ得よう。しかし、われわれはフランス人でもなければ、ドイツ人でもない。其のフランス人の踐んだあと、其のドイツ人の嘗めたにがさを繰り返さないでも、われわれは、別に、おなじ成果をもつと合理的な方法で收めることができないでもないではあるまいか。

むかし、フランスが革命に因つて得た新文明をドイツは革命なしに受け容れたのであつた、今やドイツが革命に因つて明かにした所をフランスは革命なしに又全うして行かうとするのである。フランス人やドイツ人が革命に因つて成し遂げた所を、われわれとしては革命なしに成就して見ようではあるまいか。

□

世の思想家は、斯やうな立場を妥協的だとし、又微温的だと嗤ふかも知れぬ。しかし、私としては、其の思想に於て決して妥協的ではないつもりである。又微温的であるとは考へて居ない。私は、妥協的な微温的な思想は學問になつて居るものでないと考へて居る。さうして、少くとも其のつもりで學問をして居るのである。

思想そのものは妥協的であつてはならない。しかし、思想を政治化するに方つては、常に、政治の、むしろ宿命的な妥協的本質を忘れてはならない。政治には、思想以外の幾多の力が存立して居る。思想の力は、其の幾多の力、殊に傳統の力と合成した所にのみ其の實績を擧げるより外ない。此の合成的な運命を意識する所がないと、思想は徒らに險惡になるのである。手段が無用に兇暴化するのである。其の險惡と兇暴とは、又徒らに反動運動を擡頭せしめ、又無用に識者の眉をひそめしめるだけである。

□

學者は曰う。世に絶對の弱者はない。社會に於ける生存競爭では、おのづから優れたる者が榮え、劣れる者がそれに服從して行くのであるが、しかし其の弱者とても、弱者だけの力があるものであると。それで、政治は、強者が常に弱者に對して妥協を全うする所に成立するのである。さうして、政治の進化は、此の妥協點の軌跡になつて居るのである。奴隷から農民へ、農民からブールジョアへ、ブールジョアから、更に或ものへ。——此の軌跡の更に向ふ所を如何に理解するかが思想の問題である。

世に絶對の弱者なきとおなじく、世に全く無力な傳統もないのである。私は、傳統を奉ずる者に向つて、世に絶對の弱者なきことを說き、其の權力を無用に行使するなからんことを勸め

るのである。しかしそれと同時に、世の思想家に向つて、世に全く無力な傳統のないことを考へて貰はねばならぬ。傳統は結局消え失せねばならぬものであるにしても、それをして消え失せしむべき順序とか手段とかいふものが、又考へられねばならぬとおもふのである。――之を法律的に謂ふならば、權利は常に適法な手續に依つて主張されねばならぬのである。

□

權利は常に適法な手段に依つて主張されねばならぬ。それで、實體法たる民法とか刑法とかの外に、民事訴訟法や刑事訴訟法があるのである。其の手續法は相當に煩瑣なものであり、廻りくどいものではあるが、其の手續を眞向から排斥してかかると、民法上刑法上認められる權利は決して適當に其の效果を擧げ得るものでないのである。手續法の進化は、權利者をして其の權利を最も簡便に且最も有效に主張せしめる方法に付ての吾人の祖先の苦心と經驗とを物語るものであるのである。吾人は、今日、此のあまりに煩雜な手續法を改正しようと考へては居るのであるが、それが爲め、祖先の苦心と經驗とを全然沒却してしまふつもりはない。

戰爭にも法規がある。國際法の其の存立は何人も疑ふ人はあるまい。しかし、何故に、戰爭にも法規が要るかと考へるときに、ややもすれば、多くの人はそこに矛盾を感ずるのである。しかし、國際法の沿革は、戰爭も亦法規を必要とすることを明かにして居る。戰爭の目的は要するに自己の權利を相手方に承認せしめることである。さうして、相手方がわが權利を承認した以上、われと相手方とは再び平和關係を恢復せねばならぬのである。それで、第一に、戰爭は、わが權利を相手方に承認せしめるに付いて有效な方法だけを適法視するのである、又第二に、將來平和關係を恢復したときに、其の平和の持續を害することのないやうな方法だけを適法視するのである。換言すれば、戰爭法規は、戰爭の能率を最高限度に發揮せしめる爲め、戰爭方法が、多年の經驗上、淘汰を受けた成果であるのである。

□

社會運動を、若し、社會的鬪爭と見て行くならば――私に、斯やうに見て行きたくはないのであるけれども――其の鬪爭も亦、其の目的の實現に對して最高限度に能率を發揮すべき方法に依らねばならぬ。此の意味に於て、鬪爭は常に公正でなければならぬ。私は、思想を論ずる者が、其の實體上の權利を論ずる外に、又其の手續上の關係をも考へねばならぬと思ふ。此の關係を考へない限り、其の思想は無用に險難なものである。同

時に社會運動の局に當る者も、其の正義と信ずる所を行ふに方つて、又おなじく正義にかなつた手段に依らねばなるまいとおもふ、方法が正義にかなはない限り、其の手段は徒らに兇暴なものである。——自己の手續が適法でない限り、吾人は他人の態度を非難するに何等の權原をも持たないことになるのである。

思想險惡化の一誘因としての議會の墮落

林癸未夫

政治は權力と服從との關係を離れては存在し得ないものである。權力者は必ず何等かの軌範を設けて、國民に服從を強要する。此場合に謂ふ所の權力者とは、現在の法治國家に於ては、憲法に依つて國家意志を決定し、執行すべく權利づけられて居る機關を意味するのである。普通の立憲國に於ける議會と、政府と、裁判所とが卽ちそれであるが、就中最も責任の重いのは議會である。何となれば議會は權力の發動を合法的ならしむべき對象、範圍及場合を決定するの權能を有するからである。尤も此の如き權能を有する者が、議會の外に、議會と並んで、或は議會の上に存在する國家——例へば宣戰媾和の如き大問題が議會の協贊なしに決定されるやうな憲法を有する國家——に在つては議會の責任はそれだけ輕減されるわけである。併し現存の民主的政治組織を有する諸國家に於ては、議會が國家意志の決定に對する唯一最高の責任者であるからして、畢竟權力なるものは議會に於て決定せらるゝ國家意志の遂行手段として必要なる合法的の力の謂であると解して可いのである。

權力は力である。所謂力とは究極に於て暴力を意味するのである。權力の觀念は暴力を離れても成立ち得るけれども、權力の行使は暴力を離れては存在し得ない。集會の解散、發賣の禁止、家宅搜索、押收、逮捕、監禁の如き普通に行はれる權力行使の形式は皆或程度まで暴力である。權力は總て暴力を背景としないでは、暴力の脅威を以てしないでは、行使することができ

ない。畢竟權力とは暴力の合法化に外ならないものである。從て權力はそれを以て自分を擁護しやうとする國家意志の一部であつて、同時に、其國家意志に反抗するの者に對して加ふべき暴力の肯定である。若し反抗者が絶對に無ければ暴力は發動すべき機會を與へられないで濟む。併し反抗者があれば暴力は容赦なく發動して、國家意志への服從を强制するのである。

併しながら國家意志に對する總ての反抗が直に暴力發動の原因となるのではない。議會は法律の形態に於て、豫め暴力を加へてまでも制壓しなければならないとする反抗の種類を限定して置くのである。その限定の範圍に入らなければ假令反抗するも暴力の對象とはなり得ないのである。例へば一學者が議會を通過したる一法律の不合理なことを新聞紙上で激しく攻擊したとする。これも國家意志に對する一種の反抗には相違ない。併し單にそれだけの行爲に對しては、法律は暴力を用ひるの必要がないと認めて之を觀過するのである。併し若し其攻擊が安寧秩序を紊す程度に及んだとするならば、政府は法律の命ずる所に從つて、其新聞の發賣及頒布を禁止し、或は進んで其差押へを行ふ。これは疑ひもなく暴力の發動である。乃ち此場合に於ては、國家意志に對する反抗が、安寧秩序を紊亂する虞れある程度に及んだ場合に於てのみ、暴力を以て之を禁制するの必要があると認めるのである。然らば安寧秩序とは何であるか。それは國民生活の安寧と現在の法律秩序とを意味するのである。然らば若し現在の法律秩序が國民生活の眞の安寧と一致しない場合は、權力は果して其何れを擁護しなければならぬのであらうか。此疑問に先づ私の考察點が定められるのである。

○

現在の法律秩序は言ふまでもなく議會の多數によつて是認されてゐるものである。多數議員の意志が即ち國家意志と看做されるのである。併しそれが國家意志と看做されるといふことは、法律上の一つの擬制であつて、多數決の方法それ自身が國家意志必ずしも議會全體の意志でないことを表明してゐるのである。既に議會全體の意志の合致なくして國家意志が決定せられるものとするならば、多數人の意志は少數人の意志よりも常により多く合理的であるといふ命題を是認し得る場合に於てのみ、國家意志の妥當性が承認されるのである。併しながら多數人の意志が少數人の意志よりも合理的であるといふ命題が如何にして是認することができるであらうか。若し議員全部の知識、經驗、道德、利害關係が一切均等であるならば、一議案に對する彼等の意見は自然に合致して、所謂滿場一致に到達しなければならぬ筈である。併し事實に於て議員各個の知識、經驗、道德、利

害關係は悉く相違してゐる。而して彼等の前に提出された一法律案は、特別の知識經驗に富み、道念に秀で、經濟的利己心の淡い少數の議員の意見では、是非とも否決されなければならぬものであるが、それと反對の素質を有する多數の議員の意見では、必ず可決されなければならぬものであつたとする。此場合には、其議案は多數決によつて通過するには相違ないけれども、それは決して合理的な法律であり得ない。此の如き法律によつて表明せられる國家意志は決して妥當性を有し得ない。多數決即合理といふ命題の到底是認される筈のないことは之れによつても明かである。

獨り多數決の場合のみがさうなのではない。滿場一致の場合に於てすらやはり同じことが言へる。現今の議會制度に於ては、滿場一致と多數決とは單に程度の差であつて、本質の相違ではないのである。何となれば議會に於て決定される諸議案の妥當か不妥當かを判斷するに最も適當なる知識、經驗、立場を有する人々が、議員中に網羅されてゐるやうな場合は、滅多にあり得ないのみならず、時としては此判斷をするに不適當な或は不十分な素質を有する人々のみが、議員の全部を占めてゐるやうな場合すら決して無いとは言へないからである。從て此場合に於て、議案の提出者が故意に偏頗なる判斷の參考資料を提供して議會の協賛を求めたとするならば、議會は或は滿場一致を以て之を可決するかも知れないけれども、それによつて其決議が常に妥當性を有するといふ證據には決してなり得ないのである。

○

既に議會に於て決定される國家意志が必ずしも常に妥當性を有しないとするならば、議會内に於て之に反對したる少數派の議員も、又議會外に於て之に反對の意見を有つてゐる一般の國民も、既定の國家意志に反對する意志を表示することが、全く其自由に放任されなければならぬ筈である。勿論此自由は現今或程度までは何れの國の法律に於ても承認されてゐる。此自由を承認することが國家意志の一部を爲してゐるのである。何故に此自由を承認するかといふに、それは必ずしも少數派議員の意見及多數少數の不明なる一部國民の意見を發表することが、既定の法律秩序を維持する上に必ずしも障害を與へないといふ、消極的な寛大からばかりではなく、それよりも一層重要な意義、即ち既定の法律秩序の或然的不妥當性を發見して、議會自らがそれを訂正すべき動機及機會を捕捉しやうとする積極的顧望に基くものである。議會の決議が必ずしも合理的でない以上は、これは議會として最大限度の合理性を欲求するための當

謬の増殖でなくてはならないのである。

果してさうだとするならば、既定の國家意志に對する反對の意志表示は、極度に自由に放任されることが國家自身の利益であることを承認しなければならぬのである。何となればそれが自由であればある程、議會自らが既定の法律秩序の誤謬缺陷を發見し、それを訂正するの必要を感得すべき機會が多い筈であるからである。

然るに若し議會の態度茲に出でずして、既定の國家意志に對する反對の意志表示を禁壓又は制限するならば、それだけ議會は既定の法律秩序の誤謬缺陷を發見して、それを訂正するの機會を失ふわけであるから、それが國家の目的から見て不得策であり、國民全體に取つて不利益であるとは疑ひを容れないのである。それにも拘らず現存諸國家の議會は何程かの程度に於て、國民の言論の自由を束縛すべき法律を有たないものはないのである。何故に彼等は言論の自由を束縛しなければならぬのであるか。それは彼等が既定の國家意志の誤謬缺陷が餘り赤裸々に暴露することを懸念するからである。而して又其暴露によつて既定の法律秩序に變更を要求する聲の増大することを怖れるからである。言ひかへれば、彼等は既定の法律秩序の誤謬缺陷を發見して之を訂正しやうとする欲求よりも、それを誤謬缺陷を有するが儘に維持しやうといふ欲求をより多く有するからである。若しさうでなければ彼等が言論の自由を抑壓しなければならぬ必要は決して存在しない筈である。何となれば、既定の法律秩序に出來るだけそれだけ多くの合理性を附與するがためには、それに對する各方面の批評に出來るだけそれだけ多くの機會を與へ、それに傾聽し、省慮することが最も適切なる方法であるからである。勿論是等の批評の中には、既定の法律秩序よりも一層不合理的なる論據に基くものも交つてゐるに相違ない。それ等に對しては、宜しく之に論駁を加へて、現存の法律秩序を辯護することも妨げないし、又默して一般國民の判斷に任すも差支ないが、とにかく反對者の批評の公表を禁止すべき理由は毛頭なく、又さうすることは國家のために常に有害であることは爭はれない所である。これは前段に述べた通り、多數人の意志必ずしも合理的でないことを承認する者に取つては自明の道理でなくてはならない。現に各國の政治史に於ても、最初多數人の是認したる法律が、少數人の執拗なる非難の結果として、終に廢棄又は訂正された例は枚擧に遑ない所である。

○

かくの如き明白なる道理にも拘らず、現存諸國家の議會が、既定の法律秩序に對する批評を制限しなければならぬと考へて

ゐる理由は、現存の法律秩序によつて構成されて支持されてゐる社會組織を、其誤謬缺陷の有無に拘らず、飽くまでも現狀の儘に維持しなければならぬとする人々が議會に多數を占めてゐるからである。さういふ人々が議會に多數であつても、又さういふ人々を選擧する有權者が國民の間に多數であつても、それは彼等の現狀維持の欲求を道理づける根據にはならない。何となれば數の多少によつて問題を決定することは、單に一つの便法であつて、決定された事項の內容の本質的妥當性には無關係であるからである。勿論單に便法に過ぎないにせよ、彼等が現存の法律によつて、多數を以て問題を決定すべき權能を與へられてゐる以上は、而して又其權能を維持し執行するに必要なる權力をも掌握してゐる以上は、其權能と權力とを容捨なく行使したからと言つて、彼等を責むべき理由とならないことは解つてゐる。從て彼等に責むべきは其點に在るのではなくして、彼等が多數によつて決定されたる事項といへども、幾多の誤謬缺陷を藏することの可能が自明の道理であるにも拘らず、之を無視して、飽くまでも既定の法律秩序に執着しやうとする其態度に存するのである。成程現在に於て彼等の味方は多數であるかも知れない。併し多數で決定したことが、常に必ずしも國民生活の眞の安寧と一致するものであると斷定すべき理由は些しもないのである。反對に言へば、現在少數人によつてのみ主張されてゐる事項が、實は國民生活の眞の安寧を持來たし得る可能を否認すべき根據は些しもないのである。それにも拘らず現在の多數人が決定したる假定の安寧を、眞實の安寧にまで導いて行かうとする少數人の努力を禁壓し、より低い妥當性からより高い妥當性へ近接すべき機會を自ら閉鎖しやうとする彼等の不合理的な態度、そのものが十分非難に値するのである。

かくの如き現存議會の態度は明に政治の最高の目的、即ち全體の文化の建設のために個人の人格を完成し、個人の人格の完成のために全體の文化を建設しやうとする、其理想を沒却するものである。政治の目的は議會によつて毫も左右されるべきものではなくして、議會は政治の目的によつて常に左右されるべき筈のものである。如何な場合に於ても議會は單なる政治の一手段に過ぎない。從て議會の行動は終始一貫、嚴に政治の最高の目的の下にのみ軌範せらるべきであつて、若しそれが此軌範の外に脫線して、單に國民中の一部のために——それが現在に於て多數であつても少數であつても——考慮し、決定し、保持しやうとするやうな事實があるならば、それは疑ひもなく、手段が目的を裏切るものであつて、議會そのもの丶本分を沒却し、政治の理想に背馳するものである。直截に言へばそれは議會

の墮落に外ならないものである。

○

私の信ずる所に依れば、右の如き意味に於ての議會の墮落が、竝に其墮落を擁護しやうとする合理的暴力の容捨なき發動が、思想險惡化の一つの有力な誘因を爲すものである　謂ふ所の思想の險惡化とは、私の解する所では、現存の議會竝に其議會の存在を可能ならしめてゐる現存の政治組織の變革を要望する一部の主張を指していふのである。何故に此の如き主張が起るかといふに、現存の法律秩序の下に於ては、自由に既定の國家意志に對する反對の意示を爲すことを禁せられてゐる人々が、現在の議會の墮落に當面して、此議會の廓淸を、現存の法律秩序の下に實現することの不可能に失望し、唯此の如き議會竝に此の如き議會を保持しつゝある政治組織を變革することによつてのみ、眞の政治の目的に復歸し、眞に國民生活の安寧を確保するに足るべき新たなる議會、若しくは議會以外の他の政治上の手段を見出し得るとする、其信念に立脚するものである。此の如き信念は或は合理的であり、或は非合理的であらう。その主張の妥當不妥當を決定すべき方法は、吾等の未だ有しない所である。が、併し合理的であるにせよ、ないにせよ、此の如き思想が「險惡」であるとせられるのは、單に現存の法律秩序を其儘に維持しなければならぬとする現在の議會、竝に其手段としての權力――合法的暴力――を容捨なく發動せしめつゝある現在の政府に對してのみ適用し得べき言葉であつて、現在の議會や政府に反對する者の側から見れば、現存の法律秩序を固執しやうとする現在の議會や政府こそ、實は險惡なる思想の持主なのである。此故に今吾等の論議の對象として置かれてゐる「思想の險惡化」とは、現存法律秩序の擁護者の立場から見た用語であらうけれども、さういふ見方そのものが必すしも合理的であり得ないことを吾等は記憶して置かなければならぬのである。

併し何れにせよ此の如き「思想の險惡化」の直接の一誘因が議會の墮落に在ることは爭はれない所である、具體的に言へば、現在の議會が政治の本道から脫線して、現存の法律秩序をより合理的に、既定の國家意志をより妥當的に訂正しやうとする欲求を缺ぎ自ら其議會を遁避し、以て全體のための政治を一部のための政治たらしめやうとしてゐる、其不正な態度が所謂思想の險惡化を誘發しつゝあるのである。何となれば若し彼等が現に有する所の權能及權力は、彼等の議決したる法律に贊成したる議員の利益のためでもなく、又彼等を選擧したる選擧權者の利益のためでもなく、又彼等が權力の行使者として支持し

つゝある政府官僚の利益のためでもなく、贊成議員たると然らざると、選擧權者であると然らざると、官公吏であると然らざるとを問はず、唯國民の全體の福利に關渉する所の各個人のため、又各個人の福利に關渉する所の全體のためであつて、其他の如何なる多數のためでも、少數のためでもないことを痛切に自覺し、此自覺の下に於てのみ一切の政治機關の存在が容認され、保持せらるべきであることを理解してゐるならば、彼等は如何なる少數者の意見と雖も、それが旣定の國家意志の誤謬を指摘し、現存の法律秩序の缺陷を批評するものである限りは、自由に、露骨に、絶對に其公表を承認しなければならぬ筈である。かくの如くにして初めて制度の硬化が豫防され、文化の進展に對する各個人の貢獻が十分に可能であり、又各個人の天才、努力に對する全體の惠澤が完全に享受せられ得るのである。それにも拘らず現在の議會が、權力を行使して此個人の貢獻を抑制し、彼等の天才、努力を空しからしめんと圖るがゆえに、之に對する個人の反感が、彼等を驅つて、批評から攻擊に、說明から嘲罵に、建設的意圖から破壞的熱情に奔逸せしめるのである。そして其處に所謂「思想の險惡化」と名けられる一團の雰圍氣を社會の一隅に釀成せしめることになるのである。從て之に對する責任は、主として現在の墮落したる議會が負擔しなければならないものである。

豫め無理と不自然を改め置け

文學博士　三　宅　雪　嶺

動物は敵と戰ふの本能及び武器を具へて居り、人類は他の動物を征服し得るだけ、其本能も旺んであり、武器も整つて居る。人は他の動物よりも、如何に戰ふべきかを知り、成るべく肝要な場合を擇ばうとする。蜂が濫りに刺せば針が利かなくなり、電氣鰻が濫りに電氣を出せば、電氣が出なくなる。猛獸は激しく飛び掛からうとして、暇があれば寢込んで居る。人類は

よく敵と戰ふけれど、常に鬪つてばかり居らず、萬已むを得ぬ時に限らうとする。敵と戰はうとて、其準備に着手し、いよいよ運命を決しようとする所、頗る危險性を帶びると云はねばならぬ。敵味方相ひ對立する間、互に危險と知りつゝ、其の儘に習慣を形造り、危險を危險とせず、殆ど全く之を意識しもせず、後から省みて、能くもさういふ危險を忍び來つたと思ふような事がある。

然し其の當時に於いて危險とせぬのみならず、後に其の危險を恐れるのを見て、却つて危險と感ずるのがある。日本で戰國より德川時代に入り、門を出づれば七人の敵ありとか、人を見れば泥棒と思へとか、誰れを見ても敵と看做すのであつて、物騷千萬の次第ながら、斯く云ふ當人が物騷と思はず、それで十分に用心し、騷ぎが起らぬと心得て居つた。人を見れば泥棒と思へと云ふは、人に對して無禮も甚だしい譯であつて、疑はれる者が直ちに憤りさうなことながら、誰も特別に憤らず、世間の當り前の事として居つた。實際それ程泥棒が居つたかと云へば、さうではなく、戰國時代から引續いてそれ位に用心しようと云ふに過ぎぬ。長い習慣で、人を見れば泥棒と思へと云ひ振らし、自分でも其の心持で居るやうであつて、人を泥棒とも何とも思はず、至極泰平に打過ぎて居つた。腰の大小は伊達には差さず、いざと云へば拔き打ちの構へするのであつて、それこそ劍呑至極と云ふべきに拘らず、腰の物を忘れて居るのと同樣に看做すべき事が多かつた。武士の魂を忘れるとは何事かと云ひ、何時でも腰の物の用意をするのを當然とし、之を忘れるのを歎息し、之では世が治まるまいとした。

明治九年廢刀令の出た時、日本が滅びるやうに歎いたのがある。絕えず武器を携帶して居るのを安全とし、之を手離すのを不安全とした。つまり門を出づれば七人の敵ありとして用心し、さういふ用心を無用とするのを危險視したのである。何故に之を危險視したか、從來の階級の儘で續き難いところに危險を感じたのであつて、慣れて見れば危險が危險でなく、其の慣れを廢するところに危險を感ずるやうになる。危險と云ひ安全と云ひ、境遇による事が多く、何故に危險かと押し詰めて行つて、自分の立場で判斷するのを見出す事が多い。實際當人に於て危險を覺えるに相違なく、無理も無い事と云はねばならぬが、之と境遇を異にする部分も、等しく危險を感ぜねばならぬかと云へば、さうは行かぬ。他人は何が危險か、危險が減じたとしか思へぬ事がある。武士が二本を差さなく成つて、素町人土百姓が大に安心したところがある。摩れ違ひさま、うかと腰の物に觸れ、眞二つにするぞと叱り飛ばされては、魂が宙返りし

たりする。若し武士の帶刀を廢し、國防を全くし得ないと云ふ恐れあつては、廢刀を以て國家に危險とせねばならぬが、國防は別に整へ、武士の大小なんか役に立たぬとあつては、大小は弱い者を脅かすだけの事になり、大小を差さぬ物が多い世間に、或る階級の大小を廢するを望まずに居れなくなる。今日士族に帶刀を許したならば、何うであらうか。別段の事ないかも知れぬが、帶刀の權利ない者が怖毛を慄つて恐れずに居られまい。

一方より見て危險とし、他より見て危險を感ぜぬ事がいろいろあつて、何れの判斷が中つて居るかは、時代の必要から考へねばならず、其の必要は無理から道理を指し、不自然から自然を指して居ると認めて差支へない。初めは然るべき理由あつて成立つた事ながら、時代を經て其の理由を失ひ、脫殼のみが存在して居つては、何とか之を處分せねばならぬ。王朝時代に公卿が白粉を塗け、型ばかりの太刀を佩び、優越の位置を占めて居つたのは、何を恃みての事か。食祿を世襲的にしただけの事であつて、いよいよ位置相當の事を爲さねばならぬとなつては、少しの役に立たず、足手纏ひになるだけである。保元より平治に引續き、武士が跋扈して公卿が時勢の變化を痛歎したが、公卿のみで何とも仕樣が無く、武士の手を藉るの外はなかつたではないか。武士を働かし、自分は殿中に巫山戲つゝ、高位高官を占めて居らうとするのは、餘りに蟲の好い次第であつた。公卿から見れば、武士の思想險惡、行動兇暴であるけれど、武士は何の爲めに公卿の指圖通りにせねばならぬかが分らぬ。尤もと思へるならば、畏まらずに居らうと思つても居れぬが、不尤もの事のみと思はれ、保元の亂、爲朝が折角建策すれば、公卿が分りもせぬ僻に反對し、敵に逆襲されて狼狽するなど、何とも話にならぬ。義平は公卿に何か云はれて、それは叔父も斷つたところと言ひ放つた。公卿が力無くて高位高官を占めて居つたのが、遺憾なく缺陷を暴露し、政權を武士に明け渡すの餘儀なきに至つたのである。其の武士が力盡くで政治を執行し、何とか續いて來たものゝ、之れ亦力無くて祿を貪いて居り、愈、國事を擔當せねばならぬと云ふところで、馬脚を露し、門閥廢止と云ふ事になつた。

國家社會に於ける或る位置は、國家社會の必要に應じて、其位置に相當する能力を具へる者が當るべきであつて、位置と能力と相應せぬやうになれば、早晩變革を免かれる事が出來ぬ。必ずしも變革が急に起らず、それで變革が起るまいと考へるが、其處が間違の基であつて、何處か無理な事、不自然な事があれば、何時までも平穩に過ぎないものと斷定せねばならぬ。

若し必要に應じて位置があり、位置相當に能力ある者が事に當れば、急激の變化の起り樣が無く、從つて思想險惡とか、行動兇暴とか云ふやうな事が無い。位置と能力と相懸隔し、無能力で働きもせずに優越の位置を占めて居つては、何時如何に紛亂が起らぬと限らぬ。人は平素深く考へ事しなくても、自づと無理や不自然に氣付き、事によつては平素溫厚なのが、激しい事を敢てするに及ぶ。人が平穩に過ぎて行くのは、種々の事情で調和して居るのであつて、一旦調和を缺くと共に、危險性を表はすに至る。溫厚な紳士が唾を引つ掛けられて、鐵拳を振上げるやうな事がある。決鬪を許されて居る國では、決鬪する事になる。唾を引つ掛けられたとて、痛くも痒くもなけれど、憫つて身を失ふを辭せなくなる。

人は本來敵と戰ふの本能を具へ、其の場に適當なる方法で戰はうとする。無理な事が甚だしいか、不自然な事が甚だしいか、怪しく思ふ事が甚だしい程、劇しく戰はうとする。如何に人が思想の險惡、行動の兇暴を尋常視して居るかは、常に戰爭に對する準備を整へ、開戰と共に出來るだけ多くの人を殺さうとするのを見ても分る。平時何の恨も無く、面白可笑しく話して居るのに、一度び敵味方を分けて相鬪ふや、見ず知らずの者を銃劍で突き殺し、何でも多く殺して、腕前を誇り愉快と叫ぶ。國家の爲めに之を必要とし、斯くなくては國家を維持し難いので、最も尊敬すべき精神とするが、其精神は單に國家と國家との間に表はれず、一國内でも階級と階級との間に表はれる。道を讓る讓らぬでさへ打合ひが始まる程であつて、平素潜んで居る危險性が、不圖した事でムラ〳〵と起り立つ。國家だけに限るとするやうな譯に行かぬ。國家と國家との間に表はるべきものとせば、階級と階級との間にも表はれ、或は個人と個人との間にも表はれる。毎日の新聞に血塗れ事ないのはないが、之れ皆本來敵と戰ふの本能に出て居る。敵が無ければ戰ひ樣が無く、至極平穩であつて、敵を見て急に本能が起り立つ。敵とは何か自身が無理とし、不自然とするところであつて、無理や不自然が無ければ、戰ふやうな事は、自擬瘋癲を除くの外に無い。政治で餘りに無理、餘りに不自然と云ふやうな事があれば、其儘穩かに過ぎるだけ、猛烈なる騷動が起るやうになる。議會制度は其の爭ひを緩和するに有効と知られるが、それで有効でない場合、聊か危險を感ぜずに居れぬ。總選擧に政府黨が必ず多數を占めると云ふやうな國柄では、内閣更迭に別の方法を以てせぬ以上、危險な行爲に出づる者無いとせぬ。貴族富豪と稱し、能力及び努力に不相當な收入を得る事になつて居るのも、安全と云へぬ。愚劣な者が優越の位置を占めて居ると

知れては、其の關係を變改せぬ限り、思想の險惡になり、行動の兇暴になるのを防ぐに難い。若し豫め無理とし不自然とする所を改めて置けば、思想を險惡にしようとしてもならず、行動を兇暴にしようとしてもならず、至極平穩に過ぎく行く。雷電より幾十百倍の電力が、音沙汰無しに電線を通じ、電信・電話・電燈及び機械の動力となつて居る。人は戰ふの本能があり、時と處とに應じて武器を見出すが、之を平和事業に差向ければ、進步發達として現はるべく、戰ふべき機會を與へれば、何れ程猛烈になるか分らぬ。昔は野蠻とか殺伐とか云ひ、戰爭が烈しかつたとするけれど、最近世界戰役程劇しいのが何時何處に在たか。國家的騷亂がその勢であつて見れば。階級的騷亂が平穩でありやうがないではないか。既に階級的鬪爭の劇烈なのは、前に佛國革命があり、後に露國革命がある。何れも無理が甚だしく、不自然が多かつた。貴族僧侶が全國の土地三分二を占むるとは何事か。一億以上の民が茅屋に住んで居るのに、統治者が百億の富を據へて居るとは何事か。之に反し、米國は自分勝手の者の寄り集つて國家を造つて居るやうで、南北戰役後割合に平穩であり、階級鬪爭も猛烈にならぬ。人に機會を與へる事が多いからである。餘りに資本家が力を伸しては何うなるか分らぬが、先きの見える者も少くなく、隨分感心な事をするのがある。

日本は戰國と云ふても殘忍な事が稀であつて、階級間の鬪爭に險惡兇暴を極めるやうな事が無い。政治の爭ひでも、寧ろ平穩過ぎる位であつて、階級の爭ひもさうである。優越の位置に立つ者が、佛露の如く最後まで頑張らうとせず、眼先きが利かぬやうで利いて居る。思想が險惡化し、行動が兇暴化しても、激しくなく、他國から見て何程のものでないが、若し眞に險惡化し兇暴化する事があれば、よくよくの事であり、今日のところ萬々さうならぬと認めて宜しからう。

内部生活の窮乏と險惡と

高島米峰

行動は思想の具體化だ。而して、粗野な行動は、思想の幼稚から生じ、狂暴な行動は、思想の惡化から發する。粗野は、なほ幾分の愛すべきところがあるが、狂暴は、たゞこれ憎むべきのみである。

『ヤイ、何しやがるンだい、この唐變木め。』

人込みで、足でも踏まれた時は、かういふ挨拶をするものだと、誰が教へたのかは知らないが、滿員鈴なりの電車の中で、停車發車の機會、煽りを食つてよろける拍子に、他人の足の上へ、自分の足が乘つた場合、突如として耳元で響く音聲は、即ちこれだ。誰が、人間の足だと知つて、その上へ、故意に自分の足なんぞを乘せる馬鹿者があらうか。東京の電車のやうに、乘るにも降りるにも、命がけでなければならない程の混雜、その混雜の中で、不意に激動を與へられゝば、足も踏まれるだらうし、怪我もするだらう、事によると、殺されることがあるかも知れない。それを、足を踏まれた位で濟んだのは、謂はゆる大難小難なるもので、まづ以て不幸中の幸だ。寧ろ、踏まれた方から、『どうも有り難う』位は、言つて然るべしだ。……これは即ち、『唐變木め』といふ賣言葉に對する買言葉で、さてその次は、取つ組み合ひだ、擲り合ひだ。さても恐ろしい世の中とはなつたものである。

交通機關から受ける刺戟だけでも、都會人は、かなり神經を尖がらかされる。歩道と車道との區別のあるところもあるが、それさへ、十字路にさしかゝると、交通巡査の整理して居るところでも、尚且つ、駈け抜けるのは容易でない。況んや、歩道車道の區別のないところでは、前から責めて來る自轉車を避り過せば、後からは自働車が、猛獸のやうに吠え立てゝ脅かす、やつと人力車を避けたかと思へば、すぐ後から、荷馬車の馬子が、『間抜け氣をつけろ』と突き飛ばす。『エツ、業忌々しい、俺も、自働車に乘つて、人を轢き殺して歩きたいなア。アー金が欲しい。』と來れば、即ちこれ思想の惡化だとあつて、『チョイト警

視聽へ同行を』とやられる。これにも、いろ〳〵、言ひ分がないでもない。

人間も、彈力が無くなつてはお仕舞だ。と言つても、敢て、反抗を是認しやうといふのではない。僕は、絕對無抵抗とは、健全なる彈力の上にのみ可能だとさへ考へて居る。押せば凹み、離せば膨れるゴム人形、あれこそ、真に、絕對無抵抗者ではないか。絕對無抵抗の生活は、卽ち反抗のない生活だ。反抗の無い生活は、卽ち平穩滿足の生活だ。人若し、平穩滿足の生活が營まれるならば、誰か狂暴の行動を敢てするものがあらうか、誰か、思想の中正を失ふものがあらうか。現代人の行動狂暴となり、現代人の思想惡化せりとするならば、それは確に、强烈なる刺戟に、神經衰弱し、彈力麻痺した結果で、身心共に、平穩滿足を缺いて居るからだと、言はなければならない。

吾々の平穩滿足、それは、一面、確に、經濟組織の改造に基ける、富の分配の公平といふことからも得られが、しかし、それは、たゞ、吾々の外部生活の平穩滿足にしか過ぎないものであつて、吾々の內部生活の窮乏と險惡とは、依然として救はれないのである。吾々の外部生活は、それ自身、獨立の地步をも有しては居るが、しかも、吾々の內部生活から、軌範せらるゝことに依つて、始めて意義づけられるものである。思想が行動の具體化したものだと言ふならば、吾々は、吾々の外部生活の平穩と滿足とを得むがために、まづその、內部生活の安定を求めなければならないではないか。內に、毅然として犯すべからざる正大の氣を蓄へて居るならば、發して遂に『千萬人と雖も我往かむ』と叫ぶことが出來る。これを、吾々の實生活に卽して說くならば、卽ち、經濟生活と趣味生活とを、宗教的信仰に依りて統制し得るものにして、始めて、身心兩方面の平穩と滿足とを與へられ、こゝに絕對無抵抗の境地に、安住することが出來るのである。

とは言ふものゝ、人間には、多くの缺點がある。その一は、卽ち爭鬪だ。戰つて勝たむと欲する意志だ。しかし。戰つて勝つといふところに、進化があるのだとすると、この爭鬪性は、寧ろ、人間の長所だといふことにもなる。爭鬪が、單に爭鬪のための爭鬪であるならば、幾何か事態を變化せしめるであらうが、そこに何の進化も持ち來さない。若しそれが、進化のための爭鬪であるならば、そこに自然の淘汰が、爭鬪を、單なる爭鬪には終らしめないで、必ず、適者を生存せしめるにきまつて居る。しかし、植物と動物とが、炭素と酸素とを交換することによつて、生存を有利にして居ると言ふやうに、進化の過程には、互助奉仕といふやうなことをも、無視することは出來な

い。そこだ、そこに氣がつきさへすれば、もう一歩で、目的地に到着することが出來る。……ソーシャル、ソリダリチーといふ説もあるが、それよりは、佛陀の、衆生恩説の方が、遙に廣く遙に深い。ソーシャル、ソリダリチーは、人と人との聯帶責任を説くにしか過ぎないのであるが、衆生恩は、宇宙の森羅萬象は、悉く、相互に恩惠を受けて居ると説き、從つて、一個の存在は、他の總ての存在に對して、感恩報謝すべしと教へるのである。總ての存在に對して、感恩報謝するといふ思想からは、爭鬪は生て來ない、狂暴の行動は現はれて來ない。たゞ、在るものは、絶對無抵抗の境地に安住し得るといふ確信だけだ。

　他に對して威張るといふことも、人間の弱點の一つだ。しかし、考へ違ひしてはいけない。『天上天下唯我獨尊』、釋尊が、天にも地にも我獨りと喝破し給ひしは、卽ち、一切の衆生は、悉く、天上天下唯我獨尊でなければならぬといふ、原理を擧示させられたものであつて、我の尊きが如く、他も亦尊く、我の尊さを發揮するには、他の尊さを尊重しなければならない、他の尊さを尊重すればする程、我の尊さが發揮せられる。そこで、自ら、天上天下唯我獨尊の人たらむと欲すれば、他をして、天上天下唯我獨尊の人たらしめなければならないといふことを、教へられたのである。自分は、他に對して威張るが、他人が、自分に對して威張ることは癪に障るといふのでは、問題にならない。他人に威張り散らされるのがイヤなら、自分も威張らぬがよく、他人から尊敬せられるのが愉快なら、自分も他人を尊敬すればよい。法華經の常不輕品に出て居る、常不輕菩薩の故事を援引するも、聊か古めかしいが、この菩薩、常に、比丘比丘尼及び在家の人々を見る毎に、直に禮拜し讃歎して曰ふやう、『我、汝等を敬ひて、敢て輕んぜず。汝等當に、菩薩の道を行じて、皆佛とならむ』と。人々此の言を聞き、却つて侮辱を加へるものだと考へ違ひして、杖で打つたり、石を投げつけたりすると、此の菩薩、さつさと逃げ出して、又、同じことを繰返して居た。そこで、時の人々が、常不輕菩薩と呼ぶやうになつたといふことである。誠に、佛教の哲學は、汎神觀の上に建設せられ、一切衆生悉有佛性と説き、草木國土悉皆成佛と教へて居る。宇宙の森羅萬象、何ものか平等でないものがあらう、既に平等である、他に對して、特に我のみ威張り得るといふものが、何處にあり得やう。在り得べからざるものが、爲すべからざることを爲す、これ卽ち、狂暴で無くて何であるか。

　長幼の序もなく、師弟の誼もない。そこで、今の老成人は、これを思想の惡化だと稱して心配する。しかし、長幼の序を紊

るのは、幼が長に對して紊るのか長が幼に對して紊るのかを問はうとはしない。師弟の誼が滅びたのは、弟子が師匠を敬はないのか、師匠が弟子に敬はれるに足らないのかを論議しやうとはしない。師匠に師匠たるの德望があるならば、如何に不作法の弟子と雖も、これを尊敬せずには居られない。長に長たるの威信があるならば、如何に不遜の幼と雖も、その序を紊ることは出來ない。不德無信の師長が、自己の不德無信を棚に押し上げて、子弟の不遜不作法のみを責めやうとするならば、責められる子弟の思想より、責める師長の思想の方が、遙かに惡化して居ると云へないことはない。假令又、實際、現代青年の思想が惡化し、兎もすれば、狂暴の行動に出づるものが少くないとしても、それに依つて、青年のみを責めるのは、チト氣の毒である。これを帝國議會に見よ。言論に依つて、國事を審議するを職能とする議員なるものが、他の言論を妨害し、冷罵することを以て、能事と心得たるが如きのみならず、何かと言へば、直に腕力に訴へて、武勇の程を示さうとする。言論萬能でなければならぬ筈の議場に、武勇を輝すことに依つて、立法部の尊嚴を示さうといふのは、狂暴でなくて何であるか。それを、新聞が、面白をかしく、輪入で報道することが、如何に青年をして、その狂暴神經を麻痺せしめたかを測り知ることが出來ない。國家の選良とやら、國民の代表者とやらいふ人々さへ、狂暴の行動を敢てして、國法これを罰せざる以上、青年が、擲り合ひ、叩き合ふ位が何だ、となる。

平和會議とか、國際聯盟とか、さては軍備縮少とかいふ、外的條件の整備に依つてのみ、世界が平和になると思ふならば、それは、短刀携帶を禁止することによつて、殺傷を絶滅し得べしとするのと同じく、共に、笑ふべき淺見である。それも、勿論、平和を將來する要件ではあるが、しかし、一たび國家の氣が狂へば、決議や規約は、一片の反古紙にしか價しないことは、世界大戰に於ける、獨逸の態度が、明にこれを證明したではないか。人間に、爭鬪性の絶滅せざる限り、如何に外的條件が整備しても、單にそれのみに依つて、世界の平和は望まれない。敢てそれを無用だといふのではない。しかし、それよりも先きに、少くともそれと同時に、如何にして、人間の爭鬪性を、絶滅すべきかを考慮しなければならないではないか。基督言はく、『爾の敵をも愛せよ』と。自分の敵をも愛し得るといふことは、人類愛の極致である。されど、敵を假想しての生活は、全然、敵を認めざる生活に比して、尚、幾分の不安なきを得られやうか。佛陀言はく、『今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子』と。此くの如くにして、佛陀の前には、敵と稱するもの

存在は許されない」ただ、慈悲の光のみが輝いて居るのである。これを以て、『佛心者、大慈悲是也』とも讃嘆せられて居る。佛に在つては慈悲、衆生に在りては感恩報謝、かくて始めて、絶對無抵抗の世界に、平穩滿足の生活が、營まれるではなからうか。

「ナイ、何しやがるンだい、この唐變木め。」

嘸！、溪聲廣長舌、山色清淨身だ。いづれか、佛陀現前の說法でないものがあらうか。來れ、相携へて、共に道に進まう。

（大正十二年、神武天皇祭の日。春雨しとゞに降る、花を開かしむるの雨か、抑々又、花を散らすの雨か。この日の新聞、巴里にまします、我が、北白川宮成久王殿下の薨去、妃殿下房子内親王、及び、朝香宮鳩彦王の御重傷の報を滿載す。黯然措くところを知らず。）

思想の險惡化と行動の兇暴化とを慨す

法學博士　堀江歸一

思想は思想を以つて、之に當らしめると云ふことは、文明國に於て、思想問題の取扱はれる要訣である。時に國民の一部に極端なる過激思想を懷く者があつたり、又反社會的信念を持つ者があつたとしても、多數の國民に常識あり、教養あり、加ふるに生活の狀態に安定が保たれて居つたとしたならば、社會の基礎は些の搖振を受ける可きものではない。陽春から夏季に至る土曜日の午後や、日曜日に倫敦のハイド公園や、ハムステツド、ヒースに行くと、多數の勞働者が其處彼處に群を成して、勞働運動者の演說に耳を傾けて居る。演說者の內には興に乘じて資本主義を叩き潰せとか、經濟的革命を惹起せとか、日本ならば差し詰め警察官の厄介に爲るやうな言論をする者もあるが、警察官自身は一向に之に對して注意を拂はない、却つて微笑を洩して暗默の間に贊成を表するやうな態度を示すこともある。然らば斯る演說は聽衆に大なる感動を及ぼして、直に實

行運動にでも着手する者があるかと云へば、必ずしもさうでなく、多數の人々は一個の意見として之を受取るだけに止まり、中には即座に辯士に對して、揚げ足取りの質問をしたり、反駁を加へたり、一種の興味を覺へつゝ、四散すること稀れなりとしない。或る人は之を以つて英國人は誠に煮へ切らない人間であるとか、其本質が鈍重であるとか云ふような非難を加へる材料とするが、私は直に斯る批判に贊同するを得ない。要するに英國に於て過激の言論が行はれながら、行動の之に伴はないのは、

第一、英國民の常識が一般に發達し、且つ國民性の概して穩和中正を得て居ること、

第二、言論出版等に對する干渉の寛大である爲めに、國民をして政府に對する反感を懷かしめる機會の少ないこと、

第三、議院政治に對する信賴の念が國民の腦裡に深く植付けられ、過激の運動を試みるよりも、議會に對する運動に依つて、輿論の實現に勉めるのを捷徑とすること、

第四、國民生活の程度が他の諸國に比較して、割合に高く、生活難に惱惑して、經濟組織を呪咀するが如き者の少ないこと、

の四點に歸するを得ると思ふ。

之に對して我國現時の狀態を目して、私は何と感ずるであらうか。思想の險惡化と云ふことは從來から一部の人士に依つて、憂慮されて居つた。如何なる程度に於て、我國の人心が險惡に爲つて居るかは、判斷に苦しむ。單に新聞や雜誌を一瞥した所では、日本の現狀に不滿を懷く文字は近年に至つて、隨分多く見受けられるように爲つた、然し其多くは飜譯物であつて、時に依つて流行が推移して已まなかつた。クロポトキンとか、ラツセルとか、モーリスとか、マルクスとか色々の人々の說が引合に出されて、私有財產制度と自由競爭とを經緯に充てゝ、編み出された從來の經濟組織を非難する議論の根據に用ひられたが、何分にも外國學說の受賣りであつては、ピツタリ我國現時の國民生活には符合しない、何か其處に或る蟠りの存することは免かれ難い所であり、又人々の實感を挑發する効果も薄かつたのである。隨つて私は何人の學說が飜譯されようが、之に對して少しも畏怖する所を知らなかつたのであるが、官憲は頻に此點に憂慮を懷き、種々の干渉を加へたように聞くが、其眞意は何處に在つたか、之を知るを得ない。

國民の思想は外國學說の飜譯位で動くものではない、多少動いたとしても、其れは輕跳なる一部の青年者流である。然も彼等の移り氣の強いことを知つたならば、今日の急進者流は明日の

保守者流と爲るが如き有樣であつて、何の恐れる所があるであらうか。

若しも我國民思想にして險惡化した徴候ありとすれば、其れは飜譯學説に刺戟された結果でなくして、社會に實在する幾多不祥の事實を見せ付けられる爲めであると認めなければならぬ。然らば吾人は如何なる事實を目睹せざるを得ないかと云へば、其第一は議院政治に對する不信任であり、其第二は黨派的政爭の醜陋なることであり、其第三は國民生活上の不安定であり、其第四は弱者階級に對する壓迫の日に月に加はることであつて、是等幾多の事實が思想を險惡化ならしめつゝあることは、私の疑を容れない所である。第一、第二の點に就ては、最近第四十六議會に關する記憶の新しい吾人に對して、何等の説明を要しない。彼の如き議員や、政黨に幾何の信用を拂ひ得るであらうか、又彼等を通じて如何なる政治が行はれるであらうか。斯る議員や、政黨が跋扈して居る一方に、政府亦彼等と歩調を一にして、政權を運用しつゝある位、低劣の者の集まりであるとすれば、國民生活の改善されない處か、不景氣の日に深刻と爲る結果、却つて生活上に不安を覺へる人の多くなることも失業者の到る所に輩出することも、共に異とするに足らない譯であつて、斯くて困惑の極まる所、如何なる結末を見るであらうかは、私の寒心に堪へざる一事である。

近頃奈良縣に於て、水平社と國粹會との間に、衝突が起り、互に干戈を交へて、流血の慘事を見るに至つたことは、世人に一驚を喫せしめた。而して社會に無辜の民とす可き者が偏頗なる人々の感情に依つて、不公正なる取扱を受けて居ることの殘虐なる事實も次第に世人の注意に上り來つたようであるが、今日の社會に於て虐げられつゝある者は獨り水平社員のみに止まらない。資本家に對する勞働者、地主に對する小作人、雇傭契約に於ける傭者と被傭者の如き關係を辿つて見れば、其處に多くの虐げられつゝある階級の存在することを認める。所謂解放運動なるものは、彼等に對して口に於てこそ識者に依つて、叫ばれ出したとしても、其進捗に至つては、牛歩緩々たるの趣きを免かれない。然も斯く虐げられる階級の知識が上進し、他の階級と水準を同じうする意思の生じ來つた場合に、此種の要求が社會に依つて、顧みられない、甚だしきに至つては、危險思想として法律上の制裁を受けるような有樣であつては、何として彼等の胸臆の安きを得るであらうか。我國現時の如く虐げられる階級を何時までも其儘に置いたならば、是れこそ思想の險惡化と行動の凶暴化とは招かずして、來らさるを得ない。間違つた思想は正しき思想を以つて、壓倒しなければならず、誤ま

つた行動は之に當るには直き行動を以つてしなければならぬ。然し間違つた思想の内には物質上の關係に依つて、國民の間に醸成されたもの丶少なからざることと亦吾人の觀察を逸す可からざる所である。今日の經濟組織に於て堯舜の世を見ることは、望み難き所であるとしても、爲政者の心掛け一ツで、國民生活の安定を期する位の事は何でもない話である。其れも戰敗國や戰時に國力を疲弊させた國ならば兎に角、斯る事情に居らざる我國にして思想の險惡に加ふるに行動の凶暴化を以つて、國民生活に於ける尋常の出來事とするように爲つたのは、専ら爲政者の不手際の然らしめる所と斷言するの外はない。政治家が責任を負ふのも、國民が既成政黨や、型の定まつた政治家に三行り半を叩き付けるのも、今日ではあるまいか、斯く爲つても我國民に覺醒の模樣なしとすれば、私は筆を折るの外、爲す可きの道あるを知らないのである。

原因を研究して對應策を講ずべし

内ケ崎作三郎

一 戰爭の惡影響

戰爭の後には會議と舞踏とが流行するものだと西洋人の間に言うてゐると、近頃米國より歸つた一友人が私に語り聞かせた。戰爭の後仕末をつけるためには講和會議や、經濟會議や、勞働會議や、首相會議や、何だかだと開かれるのは當然な事である。ヴエルサイユ會議以來ワシントン會議やローザンヌ會議に至る迄大小幾十回の會議が開かれた。また戰爭中は男女共に戰鬪もしくは、軍需品の製作のために一生懸命に働くので、その間の交渉もおのづから疎遠になり、或場合に於てはやむをえず冷淡とならざるをえない。この緊張と亢奮と犧牲と禁欲との後に平和が回復されたとする。一種の反動として弛緩と享樂と休養とが來るのは怪むに足らない。そのために舞踏が流行し出した。否中止せられたものが、その以前に輪をかけた勢で勃興

して來た。米國ではヂヤス・バンドとかいふ、變な官能的な、幾分か我が國の馬鹿囃しのやうな音樂がはやりて、之に合して舞踏することが盛である。太平洋沿岸の日本人社會でも、青年男女がヴイクターの蓄音器のヂヤス・バンドに合せて、夜遲くまで踏るので困るとの小言を二年半ほど前に私自身で聞かせられたことを思ひ出す。我國にも此趨勢が侵入して來たので、ダンス熱がめつ切りと強くなつたのである。

しかし戰爭の影響は啻に會議とダンスとの流行のみでない。その最大なる惡影響は、秩序及び一切の善良なる習慣の破壞である。一體人間は靈長類の首班を占むるに至るまで、永い、永い、蒙昧な野蠻時代を經由したのである。假に人間が猿猴類と共同の祖先から發生した時代を今より百萬年位と假定すると、人間は百萬年近くも無明の野蠻狀態に微かなる光りを求めつゝ、暗中摸索を試みてゐたのである。されば人間の性質のうちには、その後一萬年近くもかゝりて陶冶し、訓練し、修養して來たものゝ、何處かにその遠い過去の痕跡が殘留してゐる。これが何等かの機會をえて、間がな折がな、擡頭せんとしてゐる。而して戰爭はこの遺傳的野蠻的本能の解放である。勿論人間の道德や宗教の美はしい崇高なる一面もあらはれる。しかし大體からいへば、野蠻的本能がより強く現れる傾向が強い。

しかもこの戰爭が世界の歷史に先例のないほど長期にわたりて、殘酷に無慈悲に行はれた後の世界である。秩序に對する尊敬や、道德や宗教の權威がやゝ、少くとも此處二三十年の間は、薄くなるのは已むをえない事實として承認せねばならない。もと／＼人間の性質は有機的生命であるし、また幾千年間の進化と訓練と慣習の結果として、貴重なる道德と信仰と理想を把持してゐても、大戰爭といふ動亂のなごりとして、人生觀の不安定を感ずる人々の少くないのも當然である。

此度の大戰爭は幾多の革命を生んだ。革命の成功した國に於ては、以前の專制政治に對する暴力の反抗が大仕掛けに行はれた。その最も甚しいのは露西亞である。又革命の代りに改革の行はれた國、もしくは現狀維持の國に於ては來らんとする革命の豫防、もしくは來りそうもない革命に對する恐怖のあらはれとして、反動がそろ／＼生じかけてゐる。この場合に於ても幾分の暴力もしくは腕力がその痕を示したがる。我が國の國粹會と水平社とは兩極端ではあるが、いざとなれば、力づくでも行こうとする風がある。現に奈良縣に於て兩派が可なり大仕掛けの衝突をしたではないか。

二　米國に於ける反動的運動

米國に於ける反動運動は K. K. K. 即ち Ku-Klux Klan である。南北戰爭が終りて、南部諸州の白人は黑人より强い壓迫を感じ、その反動として、白人青年の秘密團體が一八六五年にテンネツシエーのプラスキに組織せられた。やがてこの團體は一種の隱密の警察力を具備するに至つた。その目的は政治及び社交に於ける有色人種(當時は勿論黑人を意味した)の勢力に反抗し、又白黑兩人種の雜婚を豫防せんとするにあつた。その頭目はナタン・ベットフオード・フオーレツト將軍で、大魔法師 Grand Wizard といふ名目で、南方の「見えざる帝國」を支配すると稱した。フオーレツト將軍は南方聯合軍側の騎兵團の指揮者であつた。各州には大龍 Grand Dragon が、各部には巨人 Grand Giant が支配した。又幾部かの聯合には大巨神 Grand Titan が指揮し、地方の小單位の團體では大獨眼巨人 Grand Cyclop が統御した。そして各役員はいづれも神秘不可思議の名を有した。而して各會員は食人鬼 Ghoul と稱した。彼等は白の制服を着、武裝して、騎馬し、恐しげな假面を被り、眼穴にはカン／＼燃えてゐる石炭をさし込みたる髑髏を携へてゐた。黑人が戰慄したも無理もない。是等の騎兵士が眞夜中に乘りまはし、いかゞはしい黑人はいふ迄もなく、白人に對してさへ、制裁を加へたり、或は放逐したり、時には暗殺さへもやつた。南部諸州にては斯る團體は幾つとなく生じたので、一八七一—二年の法律にて政府は之を嚴禁した。要するに K. K. K. は南米戰爭の影響の下に發生したものに外ならない。北軍のために敗られた南軍の腹いせもあつたであらふ。とにかく一時的無秩序に乘じて起つた暴力團體であつた。

一九一五年に、この K. K. K. がジヨージア州に於て復活した。頭目はウイリアム・ヂヨーセフ・シンモンス Col. William Joseph Simmons である。この團體は友愛團體即ち a fraternal organization で、秘密團體ではないと聲明した。大戰爭の終ると共に、この運動は南部より北部に普及した。この團體復活の原因は戰爭のために黑人勞働者の需要が增加し、又黑人が士官や兵士として召集せられ、又不景氣のために職を失ひたる黑人が市民の平等權を要求したことなどであらふ。日本人及び東洋人、羅馬敎徒、猶太人及び外國に生れた者、(黑人はいふ迄もなく)は會員たる資格はない。一九二三年のウオールド・アルマナツクによると三十五萬人の會員を有してゐる。

ニユー・ヨークの大新聞ウオールドは漫畫の續き物で K. K. K. を冷かした。すると會長から、お蔭で會員が增加したとて感

謝狀を送つて來た。この皮肉に憤慨して、ウオールド社の編輯局では漫畫を中止して、腕利きの記者を南部に派遣して、この運動を素破抜いた。するとウオールドの發行部數は十二萬枚ふえた。さてその續き物が終ると共に十二枚丈け減つた。そしてK. K. K. の會長から御吹聽によりて、會員が倍加したといふ禮狀が屆いたさうである。昨年の暮、ブルツクリンのバプテスト教會で、日曜夜、一會員が白色の制服をつけて、主義を說明するといふ廣告を出したら、大した聽衆であつたといふ事である。されば K. K. K. は當分存在を繼續するのみならず、その勢力を增加するかも知れぬ。

三　フーリガニズムの流行

英語で Hooligan フーリガンといふ語がある。ならず者、亂暴者といふ譯語を英和字書はつけてゐる。この起源は次のやうな事である。南阿戰爭當時、一九〇〇年の頃、ロンドンのサウスワーク（東京ならば本所深川といつたやうな、テームス河の南岸）に亂暴者の團體があらはれた。その領袖は Hooligan フーリガンといふ靑年であつた。多分 Hooley フーレーといふのが本名であつたかも知れぬ。よつてこの團體を Hooley Gang フーレー・ガング（ガングは惡徒の團體といふ意味）と呼び、轉じて Hooligan と呼ぶやうになつた。つまり、戰爭最中の警察の手薄なのに乘じて、亂暴者が跋扈したのであらふ。或は不景氣とか失業とかいふ社會的背景を有してゐたかも知れぬ。爾來、街上にて亂鬪することを Hooliganism と呼ぶやうになつた。この語は歐洲大陸にまで廣まつて、露西亞化して Khuligani とか、hooliganzy などと發音せらるゝやうになつた。

英國は由來紳士淑女の本場として名高い。しかし戰後は著しい變化があるやうだ。殺人とか離緣とかいふやうな事は大に增加したやうである。コソ〳〵泥棒などもふえたやうである。詮ずる所戰爭の惡影響である。

露西亞の赤色脅迫主義、ハンガリーの白色脅迫主義、伊太利のフアスシステー運動や（ラテン語 Fascia は結束の意）、西班牙のトラシスト、希臘の革命團の如き、皆變形したるフーリガニズムに外ならない。

この影響が我が國にも及んで來た。否日獨戰爭以來、西比利亞出兵、北樺太占領と續いて來た軍國氣分の原因が立派に我國にも存在してゐる。戰爭は力則權の象徵である。理論や道理はまどろしこいといふのである。廻り遠い議論より腕づくで來い

といふのは現代式である。これが警察官の言論壓迫となつてあらはれ、議會に於ては多數黨が小數黨の討論を一蹴し去らんとする直接行動となつてあらはれた。

四　對應策如何

いかにしてこの氣風を矯正すべきであるか。これは國民的大問題である。

第一。これは何といつても「時」の勢力に頼らねばならぬ。五年間に何千萬の生命と何千億の巨資を犧牲にした大亂脈の後始末である。チョックラ埒が明くべき筈がない。あまり氣を短くせず、悲觀せず、失望せずして、忍耐することが肝要である。空前の大戰爭をさへ辛棒しえた人類は、その揺れかへしや、飛ばつ尻りを我慢が出來ぬ理由はない。しかし袖手傍觀は禁物であるから、出來うる丈の事はやらなければならぬ。

第二。そこで何等かの方法を講じなければならぬ。先づ、我々は戰爭の原因や內容等を理解し、之を一般民衆に徹底的に普及することが必要である。戰爭は不可抗力として放任せず、その豫防の方法を十分に研究せねばならぬ。戰爭は避くるをえたのであることを世界人類に理解せしむることが必要である。而して戰爭に伴ふ惡影響をも合理的に說明することが大切である。

第三。既に人類はなすべからざる戰爭を敢てし、今やそのために煩悶し、苦痛しつゝある。昨の非を悔ゆる懺悔の精神を喚起することが肝要である。そして、平和と愛と協力と相互扶助とに對する自覺を促進せねばならぬ。この意味に於て新宗教の運動の意義の甚だ大なることが解る。舊式の宗教の使命は略々盡きてゐるかもしれぬが、新しい世界の煩悶と困難とに對應しうる新しい合理的の宗教の使命を認めねばならぬ。

第四。力則權に對して正義即權であるといふ思想を普及せしめなければならぬ。宇宙人生の根本に正義が存することを力說せねばならぬ。このためには言論の自由を唱道し、出來うるだけ、相反する思想の接觸と發表とを獎勵せねばならぬ。內務省は思想の發表に對しては出來うる丈寛大の態度をとるべきである。議會に於ても小數黨をして言ふべき丈を言はしむるやうにしたければならぬ。

第五。文化運動を普及して、音樂や、藝術や、娛樂や、運動等によりて、民衆の氣分をのんびりとして、落ちつきのあるやうなものにすることを怠つてはならぬ。大なる音樂や藝術を上流階級や、富豪階級に獨占せしめず、出來うるだけ民衆に解放する方法を講じてもらひたい。貴族的分子を民衆化してもらひ

たい。これは實行方法となれば大問題であらふ。それだけ研究をする餘地があらふ。

第六。かゝる重大問題に對してはよろしく宗教家、教育家、新聞記者、文部省、内務省關係の理解ある官僚や、上下兩院の有識者中から調査委員會を組織するも可なりである、從來あるが如き選抜にあらずして實力本位の委員會を組織するも一案であらふ。英國では重大なる問題が起る毎に勅命委員會 Royal Commission が組織せらるゝが、我國に於ても、この種の委員會を組織して、この問題を研究してはいかゞ。

第七。新聞雜誌記者も、教育家も、宗教家も、藝術家も、小說家も、役者も、講談師も、活動辯士も、或は劇場や活動の經營者も、一樣に、戰後の重大なる問題の解決に多少の貢獻をする積りで、各自の立場で眞面目に工夫し、努力するやうにしたい。大仕掛けの破壞事業の後仕末には矢張り大仕掛けの建設をやるより外に方法はない。

歴史の教訓に眼覺めよ

今村力三郎

德川幕府の倒壞は、尊王賤覇の思想が主因を爲せることは、史家の定說であるが、此思想は遠く三代家光の頃に、其萠芽を發してゐるから、尊王賤覇の思想が、明治維新の王政復古を成就せしむるまでには、二百有餘年を經たのである。

幕府時代に於ても、種々の思想があつて、爲政者の最警戒したのは、所謂切支丹宗であつたが、幕府を滅ぼしたものは、切支丹宗ではなくて、意外にも、親藩の水戸あたりで、最高唱された、儒教から來た、尊王賤覇の思想であつた。幕府は前門の切支丹を拒がんとして、全力を注いだが、遂に其禁遏も出來ないうちに、後門の尊王賤覇に嚙まれてしまつた。

一の思想が、改革を遂ぐるまでに成熟するには、長き時間を要することや、爲政者の警戒する方面と、異りたる意外の處か

ら、大事を勃發することや、權力で思想を禁遏せんとしても、到底不可能であることや、德川幕府の衰亡が、我等に遺した敎訓は、頗尊く頗多い。

幕府は、安政の大獄を起し、當時の志士を一網に打盡し、暫時天下の物議を屛息せしめたが、其反動は忽ち怒濤澎湃の勢を以て、幕府に迫り、井伊大老の櫻田門外の遭害、次で安藤對馬守の坂下門外の襲撃と爲り、志士の行動が、一變して暗殺に次ぐに暗殺を以てし、次で各處に幕命を奉ぜざるの徒が起り、終には討幕の大旗を飜へすに至つたのは、細論すれば幾多の原因はあるにもせよ、安政の大獄が、其最大なる原因の一ツであることは、何人も肯定するところであろう。當時の申渡書に、諸藩浪人妄說に惑溺とか、人心狂惑にも拘り候儀とか、彼此被信妄說候儀とかの、文字が處々に用ゐられてあるのを見ると、今日の朝憲紊亂だの、秩序紊亂だのと云ふ、法律語と思ひ合せて、安政の昔も大正の今日も、人間のする事が、大抵似寄つて居るものであるのが、面白く感ぜられる。

一の主義思想として、多數の信仰を集むるものは、必ず人類の幸福と平和とを理想するものである。夫れが一變し、再變して、段々險惡と爲り、遂には當初の理想に反して、血を見るやうになるのはドウした譯か。夫れは其思想の實現に反對するものと戰はんが爲であることは言ふまでもない。だから雙方の力が強ければ強いほど、戰は激しくなり、一方の手段が獰猛なれば、他の一方も、夫れに連れて險惡となるのである。

安政の大獄がなかつたならば、井伊大老の暗殺も無かつたであろう、幕府が大獄を起したのは、當時の危險人物を殲滅して、社會の安寧を保たんと企てたのであらふが、其結果は、全然豫想に反して、却て益紛亂を甚ふし、幕府の衰運に速度を加へたのであるから、安政の大獄は、幕府自ら尊王黨の目的を達成せしむる爲めに、助力を與へたと同一の結果を招いたのである。

クロポトキンの迫害に、あらん限りの手段を盡した露國が、共產黨の爲めロマノフ家の社稷を覆され。クロポトキンに、安息と自由を與へた、英國が、却て共產主義に累せられないのを見て、安政の大獄の前後を回顧すれば、思想問題に對する最良の政策が、那邊に存するかは思半に過ぐるであろう。

尊王賤覇の思想が、王政復古の目的を遂ぐるまで、二百有餘年を要した。今日の思想家が、マルクスや、クロポトキンを、即時に實現せんと焦慮したり、當局者が、赤旗を見て、明日にも革命が來るやうに騷ぐのは、餘りに氣が早い。夫れが爲め無益の犧牲を拂つたり、見戲に等しき衝突を起したりする。そし

て其度毎に、思想が險惡になる。双方共に、沈滞に一歩々々、大勢に順應すべきである。「いそかすはぬれさらましを旅人のあとよりはるゝ夕立の雨」、大に味ふべきではないか

秦の始皇帝は、六國を討滅して天下を統一し、萬里の長城を築て匈奴を朔北に退け、學者は古を尊び今を誹り、人民を惑亂し治安を妨げるものであると、咸陽に大抗を堀つて、一時に四百六十人を生埋にし、先王の書籍は、醫藥、種樹の外、殘らず焚いてしまつた、是れで愈天下泰平、自分を始皇帝とし、二世、三世と、萬世無窮に傳へることが出來ると、安神して崩御されたが、萬世無窮どころか、二世皇帝が即位した年に、陳勝、吳廣が百姓一揆を起したのが始まりで、秦の天下が亂れ、三年目には、奇麗サツパリと滅亡して仕舞つた。

秦の次に天下を統一した、漢の三代目に文帝と云ふのがあつた、秦の時代から、誹謗妖言を罰する法律があつて、群臣が何か直言したいことがあつても、此法律で罰せられる虞があるから、危きに近よらず、直言するものがない、夫れでは皇帝が自分の過失を知る機會がない。文帝はこれでは不可ぬと、早速此法律を全廢して、群臣をして忌憚なく直言せしむることにした。途上で鳳輦を止めてまでも、臣下の申上ることをお聽になつた、支那の歷史家は、文帝を百世帝王の師と稱贊して居る。漢の天下が四百年も續いたのは、文帝の善政が與つて力あることであらう。

始皇帝は、軍閥主義、權力主義の人である。文帝は、文治主義、自由主義の人である。其優劣是非は言ふまでもあるまい。世界の興亡史を按すれば、此類の事例は枚擧するに遑がないであらう。

堅甲利兵や、深刑刻法は、決して治國の要諦では無い。露獨の覆沒の跡を察するに、權力階級が、自家を擁護する爲に、多年養成し來つた軍隊が、矛を逆にしたことから始まつて居る。徳川幕府の末路を見ても、三百年間懷柔した、譜代や、親藩のうちから、續々と敵を出して居るではないか。

王者無敵、人道と正義に立脚したほど强いものはない、希臘で前内閣員を銃殺したり、露西亞で高僧を死刑に處したりするやうでは、彼等自身の滅期も遠くはあるまい。

衆議院が柔道の稽古場のやうに爲つたり、何々會、何々團と血生臭ひ集團の、一雨毎に殖へるのは、憂ふべき現象ではあるが、明治より大正に亘り、權力、武力、財力と、力に偏した政治の生める必然の産物に外ならぬ、今は秦の始皇帝よりも、漢の文帝を竢つ時代である。

危險思想・過激行動對應策

安部磯雄

大分前から、又近頃も危險思想と云ふ言葉が盛に用ひられて居るが、之れに對する私の考は斯うである。或場合には社會改造の爲めに或一階級が非常な損害を蒙る事がある。殊にそれが有産階級、又は其當時の特權階級であるとすれば、さういふ階級から見れば社會改造の思想は確かに危險に思はれるのであつて、今日用ひられてゐる危險思想といふ言葉の中にはさういふ意味が含まれて居るのである。譬へば社會主義の思想に就いて云へば、有産階級、特權階級の立場からは社會主義思想を危險視するのは一應尤もな點がある。併し社會主義に對して危險といふ言葉を使ふのは當らない。何故ならばこれは有産階級、特權階級といふ少數な階級から見た危險であつて、社會全體から見れば社會主義の思想は決して危險でないからである。社會主義は總ての階級の利益を圖るやうな社會を造る、一視同仁的に總ての階級の隔てを去り、總ての階級の幸福と安全とを目的とする。其主張する所は建設的であつて破壞的ではない。改造といふ以上一面破壞を意味するが、それは建設の爲めの破壞であつて立派な理想社會を建設する事が社會主義の目的である。だから今日の特權階級が社會主義を危險視するのは明かに彼等の誤解に基くのであつて、彼等は社會主義の眞の意味を了解して居ない。何故ならば社會主義が實現されゝば特權階級も亦幸福を得るのであつて、無産階級のみが幸福を得て、特權階級が不幸な位置に立つ事を意味するのではないからである。社會主義の眼から見れば今日の特權階級も亦不幸な位置に立つて居るのであつて、彼等の生活は決して安全に保障されて居るといふ事は出來ない。彼等の地位は無産階級からは攻擊の標的となり、憎惡の焦點となつて居るが、さういふ不幸な、不安な地位に立つてゐる階級をも救はふとするのが社會主義の態度であつて、だから特權階級の立場から社會主義其物を危險視するのは見當違ひである。それならば社會主義には全然危險がないかといふにさうではない。社會主義にも危險の伴ふ事は認めなければならない點

であつて、只社會主義に危險の存する所は社會主義の思想其物にではなく、愈々社會主義を現實の社會に實行する段どりになつて、其處に安全な道と共に危險な道が存するのである。要するに社會主義を此世に實行するには極めて平和的な方法と、幾分危險を含んだ方法とがあつて、道路に譬えて見れば一方は坦々として砥の如きものであり、一方は間道であつて横道から入らうとするものである。具體的に云へば一は社會主義を信ずる者が代表者を議會に送つて其理想を實行せんとするもので、之れは勿論何等危險を含まない平和的な方法であるが、他は所謂直接行動と稱するもので、革命的手段に依つて社會主義の主張を實現しやうとするものである。此後者に少からぬ危險が含まれて居るのであつて、之れは前に述べた特權階級が社會主義に對して危險を感ずるのとは性質を異にする。一方は單に一階級の問題であるが、革命は國家の内に存在する總ての階級に影響するのであつて、革命に伴ふ苦痛が如何に甚しいものであるかといふ事は總ての人々が十分に了解してゐる事である。革命の後には總ゆる國民が非常な苦痛を嘗めるのであつて、それは一時的のものではなく永い間に亙つて續く。實にそれは全然戰爭の苦痛と同じで、歐洲戰爭が止んで既に數年を經過したにも拘らず、其間各國々民の苦んで居る狀態に見ても想像せられる所の苦痛である。で、社會改造の爲めに革命といふ一の手段を執らねばならぬ事は國家にとつて愼重に考へなければならぬ問題である。

今、議會主義に依つて理想を實現するのは平和的手段であり、直接行動に依つて目的を實行するのは主戰主義であつて、それは戰爭と平和の異る如くに二つの道は異るのである。私共は革命の思想が段々今日の國民の心を支配する事になれば、それ丈け國家は危險に近づきつゝあるものと考へなければならぬ。革命後大なる苦痛の來る事はいろ〳〵な事實に依つて見ても分るのであるが、萬一我國に此恐るべき革命が行はれる場合がありとすれば、其苦痛は露西亞や獨逸の經驗したやうなものではないと思ふ。それは寧ろもつと甚しいものがあるに違ひないので、其理由は我國に於ては今日の特權階級にとつて代るべき無產階級、殊に其中堅たる勞働階級に訓練がないといふ點にある。今日の我國の勞働者が天下の實權を握る丈けの實力があるかどうかといふ事は問題であつて、私共は常に勞働階級に對して非常な同情を持ち、結局世界の大勢を見て我國も何時かは勞働階級が天下を執る時代が來る事を信ずる者であるが、今さういふ力が勞働階級にあるかと聞かれゝば殘念ながら然りと答へるに躊躇せざるを得ない。從つて直接行動の如き非常手段を用ひる事は

今日我國に於て不利益な事情があるのであるが、今早い話が一例として此處に一つの工場があるとする、工場は資本家が所有し、其中に勞働者が働かせられるといふ制度は甚だ面白くないが、之れは農民問題の場合に於ても同じであつて、土地は地主が所有し、其土地を耕す者は小作人であるから常に問題が絶えない、此問題を解決するには政府が地主から土地を買ひ取り、それを二十ケ年賦か、三十ケ年賦で農民に賣り下げれば小作人も自ら自作農になれるのであつて、此方法が一番好い方法であるが、事實世界中何處でも今日農民問題の解決方法は斯くの如き趨勢に向つて居るのである。然らば何故に勞働問題に於ても同じ事が行はれないか、少くともそれを主張する者がないのは不思議であるが、農民問題に於ける自作農の場合を勞働問題の上にも持ち來せば同じ事が出來るのであつて、今政府が自ら工場を買ひ取り、二十年、三十年賦で之れを勞働者に賣下げる事になれば勞働者は自分の所有する工場の中で自分が働く事になるのであるから、其處に資本對勞働の衝突がなくなる譯である。併し私の問題とする所は其點であつて、今云つたやうな事は理論としては好いが、いざ勞働者に工場を持たせて勞働者自身がそれを立派に經營出來るかどうかといふ事になると、小作人が自作農になる場合のやうに簡單には行かない。小作人が自作農になつても土地は一人で耕す事が出來るから特別に訓練は要らないが、工場には常に數百人、數千人の勞働者が居るのであつて、それが團結して工場を經營しやうと思へば出來ぬ事はないが、今日の實際に於ては未だそれは不可能である。何故ならば彼等には十分に訓練がないから今一つの工場を與へてもそれを立派に經營する手腕がないからである。で、勞働者が天下を取る世の中になる爲めには猶其處に多くの訓練を必要とするから諺に云ふ通り急がば廻れで、議會政策に依つて議會に勢力を占める事に依つて勞働者が次第に訓練される事を待たなければならないのであつて、今日直ちに社會主義の理想を實現する事は出來ない。此意味から云へば今日の一般の思想が過激化し、惡化して行く傾向は認められるのであつて、勞働者は云ふ迄もなく、無産階級全體の空氣が焦慮の氣分に充ちて居て、議會政策の如きはまだるこしいから一擧に資本制度を倒さねばならぬといふ革命思想の漲つて居る事は確かに思想上の危機である。私は常に社會主義運動の模範とすべき國は英國であると思ふ。英國のやうに勞働階級が漸進的態度をとつて實力を養ひ、議會に勢力を占めて行くやうにするのが最善の態度と考へるのであるが、今日では此英國の勞働階級の態度を學ばうとするやうな考を持つ人は少くなつて來て居る。勞働階級の同情は寧ろ露西亞や獨

邊といふ所に一番多く、英國などは眼中にないと云つて好い位であるが、それ丈け又革命思想が一般に漲つて居ると云はねばならない。併乍ら今日一般の思想が次第に過激化しつゝあるといふ點から、社會主義、無政府共産主義を危險視する者があるけれども、危險なのはさういふ思想を指すのではなく、それ等の主義の依つて立つ理想を實行する方法が問題なのである。

次に廣義の暴力化といふ點に就いて云へば、暴力といふものは全然人類社會から葬り去る事が我々の理想であるが、今日の社會に於ては猶ほ暴力が用ひられて居る事は事實である。それを種々の立場から辯護する者もあるけれども、何と云つても人間は道理に依つて立つべき者で、其生活は理性を原則とすべきものであるから暴力を用ひる事を是認出來る筈がない。今日までの人類進化の過程を見れば、小さい團體と團體との間に於ける暴力の使用は次第に少くなり、今日公然と暴力を用ひるのは國際戰爭の場合丈けに限られて居る。國際戰爭は未だ跡を絶たないけれども國内に於ては暴力を用ひる機會は殆どないといふてよい。換言すれば今日の文明國には内亂と云ふものがない。世界に於て内亂の多い國は支那、メキシコ位が其實例であつて我國に於ても西南戰爭以來國内に於て戰爭といふものを見ない。で、之れを推して考へれば將來國際戰爭といふものもなくなる譯であつて、現に多くの人々が再びさういふ事を繰り返さないやうに熱心に努力をして居るのである。それにも拘はらず今日猶ほ主戰論者が絶えないのであつて、それは軍人ばかりではなく、結局人類の間には戰爭は絶えないもので、戰爭の範圍は廣くなればとて絶滅する時がないと云ふ說を唱へる者が少くない。只玆に注意すべきは彼等の唱へる主戰論が單に國際間にのみ限られないで、さういふ主戰論が成立つ結果國内に於てもそれが樣々な形に於て現れて來る事である。無論國内に於て種々の形で暴力の行はれるのは之れに相當の理由があるのであつて正當防衛といふ立場から、一方が腕力を用ひる場合に全く無抵抗主義で行く事は不利であるから、先方が腕力で來れば腕力を以て對抗するに至るのは有り得る事であるが、併し正當防衛の點から腕力を用ひる事が是認される說が成立つ間は社會から暴力を絶滅する事は出來ない。玆に私が政府に對して遺憾に堪えない點は、政府が過去に於て壯士を養つたといふ事である。又政黨に於ても政友會などは三多摩の壯士を傭つて政友會自身の護衛としたり、憲政會に於ても亦さう云ふ種類の團體があつて同じ目的の爲めに働いて居る者があるやうである。彼等は度々表面には表れないが過去に於て屢〻小競合を繰り返した。又近頃社會の注意を惹いたものには國粹會對水平社の爭ひがあるが、之れは

最近に社會の表面に現れた事實であつて今後の成行に就いては豫測する事が出來ないけれども、今の所双方腕力を標榜して居るのであるから政府が今の中に取締らなければ將來由々しき大事に至らないとも限らない。萬一之れが政黨の色彩を帶びるやうになると双方の人數が多い丈けに問題は一層大きくなる危險があるのであるが、國粋會は政友會に關係があるといふ風に思はれて居るから、憲政會は水平社に接近する態度に出でないとも限らないので、腕力が横行する世の中であるから如何なる事態を生ずるか測り知る事が出來ない。私は大體に於て水平社の運動に同情を表する者で、水平社の人々が自覺して此度のやうな運動を起したのは好い事であると思ふが、それには政府に於ても進んで水平社の運動に援助を與へる態度に出でる事が望ましいので、それは物質的にではなく、例へば全國の警察に命じて水平社の人々に對して侮辱的な言語や擧動を爲す者があれば訓論、懲戒をするとか、兎に角水平社自身が制裁を下す前に政府が同情を示す事になれば、水平社の人々の暴力を未然に防ぐ事が出來るのであつて、さういふ同情的援助こそ最も必要なのである。此點政府の方針如何に依つて平和的に行くか、暴力化するか孰れかに決するのであつて、總ては政府の態度が問題である。

次いでに思想が過激化し、行爲が兇暴化する原因に就いて考へて見たい。自ら其處に救濟策が暗示せられるので、それに依つて今日の不幸な傾向を未然に防ぎたいと思ふのである。

第一の原因は最も深い原因であり、一般的な原因と信ずる。それは我國の一般の狀態を見ると輿論と云ふものがなか／＼出來ない。社會が正しい意見を認めて十分にそれに贊成し、又それに援助を與へる事が必要だが、どうもそれがないやうである。誰れの意見が採用されるかと云ふ標準がない。如何なる名論卓說があつてもそれに共鳴するとか、人が傳へて思想の普及に努める事が缺けて居る。卽ち輿論が微弱である。誰れが有力な說を天下に唱へても反響といふものがなく、思想界が混沌として如何なる思想が世の中を指導するか、どちらに風が吹いて居るかも分らない。英國の政治は輿論政治であつて、輿論が現れると直ちに政治に反響する。卽ち英國に於ては國民の輿論がどちらに向くかゞはつきり現れて居るやうに思はれる。佛蘭西がルール地方を占領した時英國が傍觀的態度をとつてはつきりした態度を示さなかつた。獨逸が益々窮地に陷つて來ると、一方に於て英國の輿論は確に政府の態度に慊らないで、それが直ちに政治上の實際方面に現れ、丁度補缺選擧のあつた時で、輿論が政府に慊らないために勞働黨が選擧に勝ち、政府黨が敗れた。之れは一つの例であるが、斯くの如く英國に於ては明かに

國民の意向が政治上に現れるが、日本に於てはさう云ふ事は極めて曖昧摸糊の中に行はれるやうな氣がして、其處に人々の不滿な點がある。幾ら物を云つて見ても社會に反響がないので其點最も智識階級に不平がありはしないか。智識階級の職分は譬えば東京の如き大都會であれば四谷見付の如き所にある高い塔に昇つて火事があるかないかを見て市民に報告するやうなもので、大學で專門に研究して居る學者は此火の見櫓に立つ如き者で、世界の出來事に就いて報告したり說明したりするのであるが、さうしても一向に手應えがなく、折角半鐘を打つても反響がないと云ふ有樣で、其處に智識階級の現代の社會に對する不滿が生じて來る。これは學者の罪か社會の罪か明でないけれども、兎に角智識階級は現代の社會に物足らないので智識階級の人々の中には可なり烈しい思想を抱いて居る人もあるやうである。

第二の原因としては今日の生活難である。之れは世界を通じての困難な問題で、失業者や貧乏人は次第に多くなり、今日の文明國に於ては其七八割は無產階級、貧乏人であつて、生活難が人々をして過激な思想を抱かしめ、革命を望ましめて居る。此際有產階級の代表者たる政府が失業問題、貧乏問題を解決する事が出來なければ將來も特權を維持する事は困難である。佛蘭西、露西亞の革命に見ても、原因は遠い所にあるかも知れぬが、それに火をつけたものは貧乏人であつて、彼等は食ふ事の出來ないと云ふ絕望から恐るべき爆發性を有つに至る。生活難は危險思想を產むばかりでなく、世に腕力沙汰が行はれる一の原因としても生活難は關係を持つて居るのである。普通に職業があつて生活に困難を感じないものは政黨に屬して壯士となるやうな事もないであらうし、從つて國粹會の如き團體も出來ぬ筈であるが、腕力を用ひる階級の出來るのは丁度其階級に適當した職業を得る事が出來ない事に原因すると思ふ。これは一つの例であるが或處で農民運動の演說會があつた時、地主側から賴まれて演說の妨害に來た者があつて、それが國粹會員らしかつた。別に腕力でどうするといふ事はなかつたが、種々演說の妨害はやつた。それは皆地主から日當を貰つて傭はれて來たらしいので、向ふ見ずの腕力を持つ者があればそれを利用する者が出來て來るのである。世の中に腕力沙汰が絕えない原因は一つは此生活難に依るのであつて、政治家はかゝる弊害を除くためには生活難や失業問題に溯らねばならぬ。

第三の原因として見るべきものは、我國に於ては未だ上の爲す所下之れ倣ふで善くも惡くも政府が手本となるのであるが、其政府當局が先に立つて國粹會を成立した事である。前內務大

臣床次氏は國粹會員に會ふ事を初め好まなかつたやうであるが、政友會の誰れかゞ仲に入つて種々の經緯があつた後、結局晩餐會をやつたのが動機となり、國粹會の如き團體が生れたのであるが、近頃噂さに依れば政友會では國粹會員を政友會員にしやうとして勸誘したと云ふ事である。之れも單に噂さであつて信ずるに足らないが、現に角當局の內務大臣が一つの團體を作つた目的は良かつたにせよ、今日それが暴力的團體であると思はれて居るのは遺憾である。此事は政府自ら、政黨自ら腕力を必要とする者と見られるも止むを得ないのであつて、それは自ら大なる問題である。斯かる代表的團體が腕力を必要とする社會からは、暴力を全然取り除く事が出來ない。

意思の社會的開發と力の爆滅

杉森孝次郎

新日本が、かねてから崇拜のまととして來たヨーロッパが、四年有餘の久しき期間にわたつての戰亂をしめし、その戰亂のはてぬうちに、社會革命が、ロシヤの最大規模及び至深程度に於けるのを筆頭に、獨にも、墺にも、なほその他にも勃發して成功した當の瞬間に、今日の位置はあるのだから、さらでだに感激性と模倣心の強い日本人が、いくらかの思想の險惡化と、行動の兇暴化を自身またしめしても、それは、單なる反射運動としてさへ、決して理解にあまる現象ではない。いはんや、現在の日本には、あるひは、にも、改造と革正を要するいく多の弊習と罪因とあるに於いてをや。

目的または結果としての革命は、もしも革命といふことばを根本的、飛躍的進化成長の意義に解するならば、現在の日本に於いて、實にそれの文化の多くの方面に於いて、必要を告げてゐる。文化のうちの政治方面に於いても、經濟方面に於いても、性關係方面に於いても、教育方面に於いても、道德方面に於いても、社會科學、精神科學、思想、宗教等の方面に於いてもだ。

現代に於いては、目的または結果としての革命を成功にみちびくべき最上策は、廣義の教育にあるのだが、現代人は、教育や研學の代表的方法を學校にみとめてゐるくらゐだから、廣義の眞の教育は、まだ現代人にとつては未獲得の方法だ。それは現代に於いて未發達だ。發生はしたがあまりに幼弱だ。そこで、現代人は、手段としての革命を、しばしば時代錯誤的に信用する。けれども、手段としての革命は、現代に及んでは、結果としての破壞だ。

現代は、意思の時代であると同時に、力の時代だ。現代は意思の時代だ。それは、現代人は、自己の意思の信者であるといふ意味に於いてだ。現代は、同時に、力の時代だ。それは、現代人は、相手の意思を、自己の意思と同時に信ぜんと欲する綜合的努力の信者ではないといふ意味に於いてだ。

人間關係に於ける力とはなにか。それは、他の意思を否定し、もしくはそれに反抗する一とつの意思だ。意思は、それの內的關係に於いてはすべて、かならず自由だ。いかなるオートクラツトの意思も、いかなるデモクラツトの意思も、この點に於いては無差別だ。同一だ。しかし、意思は、他の意思との關係に於いては、すなはち、その意味に於いての外的關係に於いては、かならずしも自由ではない。他の意思を否定し、もしくはそれに反抗する意思は、その他の意思の立ち場から考へるならば、不自由だ。なぜかといふに、意思は、それの內的關係に於いては必然的に自由だ。しかるに、いま、一とつの意思は、他のある意思を、それの內的關係にさからつて扱ふ。すなはち、その一とつの意思は、自分の內的自由のために、他のある意思としての自由を犧牲にするからだ。そしてこれが力だ。人間關係に於ける力だ。いひかへるならば、社會科學の一概念または一名詞としてみとめられべき性質の力だ。人間關係に於ける意思と力との別は、かくして、一とつの意思が、それの外的關係に於いても自由であるか、そして、その場合には、その一とつの意思は完全に意思であるし、あるひは、それが、それの外的關係に於いては不自由であるか、そして、その場合には、それは力であるといふ事情を內容とする比較判斷にほかならない。文化の進步は、人間關係に於けるすべての力は、人間關係に於ける意思の成長によつて全然廢用にされることを本質的一必要事とする。正しき意味に於いての教育は、實に、この必要に應ずる手段中の手段だ。最も選擇され、最も機會を與へられべき手段だ。

近代は意思の發達だとしば〱いはれる。自治としてのデモクラシイの發達が證示する限りに於いて、いかにもさうだ。し

かし、それと同時に、近代が力の自覺であり、また發達でもあることは、最近に、歐洲戰爭があつたことがこれを例證する。また最近に、ボルシェヴィズムがあつたことがこれを例證する。戰爭も、革命も、國民的または階級的專制としての力に反抗する自治の主張であるのだが、同時に、それは、ある程度に於いて、自身また力の主張だ。力に對する人類の信念は、古代から近代に進むにつれて、個的から團的にそれの形式を進化させたが、實質的に瀕絶にも、皆無にもなつたわけではない。國民主義も力の團的一形式であつたし、プロリテリアニズムもまた力の團的一形式としての新發達だ。その團の外延が擴大するにしたがつて、それの內包としての意思は自治の範圍をひろげる。しかし、その外延は、同時に戰線である可能がある。アングロサクソン系諸民族とラテイン系諸民族との間にそれのいくらかの現實がある。人種爭がくる可能があると假定するならば、そこにもそれの一例證があることになる。國際橫斷のプロリテリア獨裁運動が多少の現實であり、また可能であるとするならば、それも、勿論、それの一例證だ。

人は、現代に於いて、及び現代になつても、決して單なる平和的理性と平和的情愛のみにかれの行動を支配させない。かれは、いまでも、恐怖心に聽從し、恐怖を機會として反省する一側面をあざやかにしめす。かれは、正義や、責任を、直接に理性によつて知り、信じ、行なふだけでなく、恐怖心にみちびかれてさうする。かれは藝術的道德家であるだけでなく、功利的道德家であるのだ。かれの理性の活動は、甚だしばしば、自己目的でなく、手段だ。あるひは、獨創でなく、派生だ。

思想の險惡は、意味に於いては行動の兇暴でなくてはならん。意味に於いてはとは、目的または結果に於いてはといふことだ。それゆゑに、行動の兇暴を十分に論ずるならば、思想の險惡は論ぜられたことになる。行動の兇暴は人間關係に於ける力の一形態だ。あるひは、それの別名だ。兇暴なる行動としての力は、恐怖心を相手に呼び起こすことによつて、相手の理性及び理性的行動に發動の機會を與へる方法として、ある事情下には有價だ。軍備に於ける合理的要素と、警察に於ける合理的要素と、革命に於ける合理的要素とはそれのある例證だ。

しかしながら、力の信者は、事實上、及び可能としても、自己の非理性に行動的成達を與へ、相手の理性にそれを奪ふ弱點を持つ。力のための力の信者はその弱點を絕大に持つが、理性のための力の信者として自認し、または他認される人々でも、通例、その弱點をあまりに大きく持つ。手段としては、教育に絕對信を持つほどの人にして、始めて、力の聖用を解しうるの

だ。力は、いまなほ無用ではない。しかし、力が無用である社會と時代を、現代人は、一刻も早く到來させるやうに努力すべきだ。



◇東京豊島師範學校教諭 栗原寅治郎著

新刊 大日本地理精説

（菊判最上製美本 全壹冊七百頁 内容 本州全部 四國まで）

正價金五圓八拾錢 送料廿七錢

《本書の特色》日本地理教授の目的は専ら本邦國勢の現狀を詳かにして愛國心に基づく有爲の國民的活動に導く事にある。本書は著者年來の經驗に則つて特に最新の材料を蒐集撰擇し帝國の國勢を形成せる自然並びに人文の兩方面に亘る各般の事情に就て懇切叮嚀に叙述を加へられたる斯界の權威書なり。

小林一郎著 ●日蓮主義日訓 壹圓八拾錢 送料十二錢

荒井庸夫著 ●平將門論 正價金貳圓 送料十二錢

栗原寅治著 ●世界地理精説 五圓八拾錢 送料廿七錢

小林一郎著 ●巴蕉七部集連句評釋 參圓九拾錢 送料廿四錢

今井政吉著 ●露西亞文明記 貳圓五拾錢 送料十二錢

宇野哲人著 ●支那文明記 改訂 貳圓八拾錢 送料十二錢

植松安著 ●記紀の歌の新釋 正價金貳圓 送料十二錢

上田恭輔著 ●生殖器崇拜話 正價六拾錢 送料金四錢

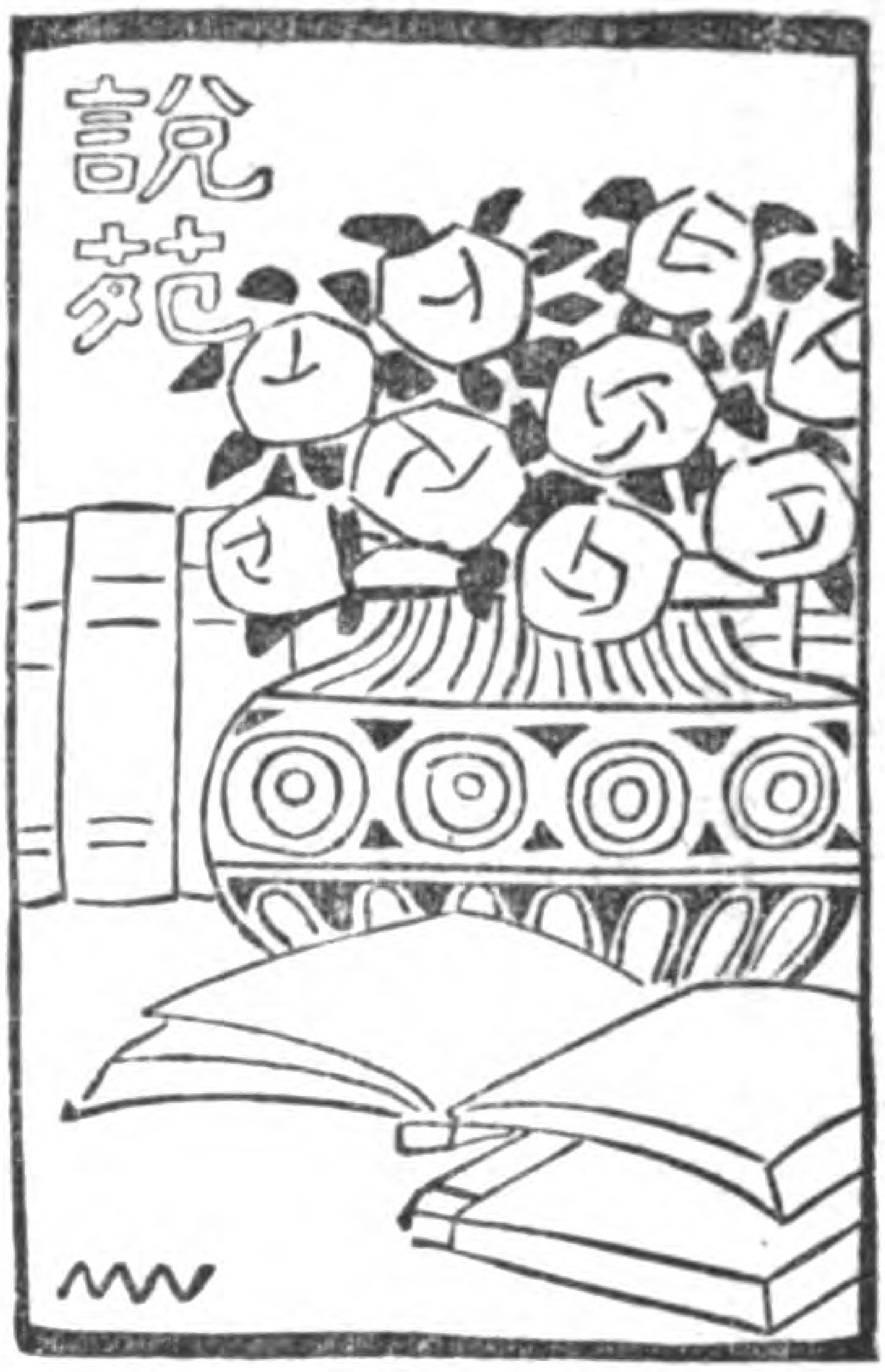
◇渡部政盛氏新著 ◇初版再版忽ち賣切 増刷出來 正價金五圓八拾錢 送料金廿七錢 ◇

三版 最新哲學辭典

菊判最上製 美本全壹冊 箱入六百頁

《本書の特色》現代文化民衆の哲學慾を充すを目的として編纂したる事。文章平易記述繁簡宜しきを得て一讀直ちに其の要點を捕捉し得る事。内容は所謂廣義の哲學以外現代の文學藝術社會問題經濟問題婦人問題等にも亘り其の重要なる記述は總てこれを收めた事等なり。そして代價は文化生活への奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事である。大好評を博して増刷出來す。

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七二番



歐羅巴から見た特殊國日本

荒井陸男

「廬山に入りて廬山を見ず」秀麗なる富士の姿を、その有るが儘に眺めようとするには、登山してゞはなくて、寧ろ田子の浦に打ち出でゝ見なくてはならない筈である。それと同じやうに、私の所謂「特殊國及び特殊人」としての日本と日本民族とを、その如實の姿において眺めるには、暫く日本内地を離れて、外國に在つてこれを見るに如くはない。斯くして自分は、その第三次の渡歐を機會として、客觀的に日本を觀照したる感想の一半は、既に本誌に發表した處だが、更に語を繼いで、此の「特殊國及び特殊人」についての診察と投藥とを試みようと思ふ。

自分は故ありて假の歸朝をすることゝなり、十二月の末にマルセーユから、なじみなる日本郵船會社の船に乘つたのである。船は言ふまでもなく日本船であつて、船尾には堂々と大日章旗が掲げてあつて船長、機關長、事務長以下、ボーイ、洗濯屋、理髪師に至るまで皆これ日本男子たらざるはない。凡そ海外において、殊に支那・南洋若しくはアメリカならざる歐洲において、最も日本の國民的色彩を濃厚に鮮明に發揮してゐるものはこの邦船、――就中日本郵船株式會社の客船である。寔にこれこそ名實共に日本國家を代表して歐洲の各港に泛游する一小島の觀がある。されば自分の如き、一昨春日本を去つて以來、歐洲の各都市に住居して殆ど全く白人のみの中で生活して來た者に取つては、たまにパリ、ロンドンの街上若しくは倶樂部に於い

て、三五の、顔色の黄いな日本人を目撃し又たこれと伍することがあつたとしても、渾然なる一大團體としての日本的集團を目のあたりに見たことは、實にこのマルセイユ埠頭に於ける自分等の乘船を以て久し振りとなすのであつた。さればそれだけに又、この船上船内に於いて自分の受けた「日本及び日本人」といふ者の印象は一種特別な、そしてヴイヴイツドなものであつた。しかし、それも不幸にして、好印象といふでもなければ、從來刻みつけられてゐる「特殊國及び特殊人」としての印象を取消さしめるものでもなく、依然として、否一層印象深く自分は、日本人の免れ難き特殊性の感銘に徹底させられたやうな氣がする。

まつたく、雜閙した市街などで、たまに日本人が向ふから歩いて來るのを見た時などは、變な色をした小つぽけな、あたりと調子の合はない人間がやつて來る位に眺めるに過ぎない。それも晴れた空に見る無數の星の中を流星が通り過ぎた位なもので、大した氣にもとめないのであるが、斯うして堂々と、日本人の島か浮いてゐるのに接すると、如何にも日本の特殊さを見せつけられたやうな氣がして、そのグロテスクさと言はうか、非諧調さと言はうか、兎に角非常に突然な感じがするのであつた。

先づ彼等の肉體を掩つてゐるところの皮膚の黯黄色であるとか、眼の玉や髮の毛が黑いとかは別とするも、その非常に小さくて體格の貧弱なことから來る感じはどうしても病人である。恢復期にはあるが、まだ病院の中に居る患者のやうな氣がする。殊にその眼が釣り上つた、そして厚ぼつたい唇の前につき出した間から、虫齒だらけの齒ののぞいてゐるのを見ると、何處かの土人に接した時のやうな、ぞつとする氣がしたのである。一體、眼が血走つて釣り上つてゐるといふことと、そして唇が反りかへつてゐるといふことは、これは人間の常態を現はすものではないやうだ。先づ憤懣の意を現はす表情であつて、何か心に不快なことがあるので、或は腹が痛いとか何とか苦痛でもある時に、妙に神經がいら／＼して立腹をする時に見る表情である。かなり眼が下がつてゐる人でも怒てゐる時にはやゝともすると眼が釣り上つてくる、して見るとこの日本人は、何時もぶりぶり腹を立てゝ怒つてゐるのかも知れない。少しも情味のない顔であつて、藝術味も、柔かみも何處かへ飛んで行つてしまつて、不人情な、硬ばつた、何とも始末に終へない顔である。西洋人は一般に眼尻がだらりとしてゐて、何時でも愉快さうに見えるのは、生を享樂してゐるからであつて、思ふに大なる人物とか事業とか國家とかいふものは、斯うした餘裕綽々たる氣分

の顔の持主、眼尻のだらりと下つた人間からでなくては生れないやうに思ふ。それに又、口と來ると、むくれ上つた唇の間から、飯粒かと思はれるやうな大きな齒糞などのくつついた、穢ない齒齦が、齒並みも揃はずに、のぞいてゐる物凄さと來たら、まるで人喰人種のやうである。殊に人間が齒を露出すのは、その斷末魔を現はすものであつて、苦痛恐怖の極であると言つてよい。だから日本人の顔を見てゐると、上は憤懣を以て不動尊の如き形相を呈し、その下はまた苦惱を以て惡鬼の如き表情をなしてゐる、何と言つてよいのか身の毛のよだつやうなエキスプレッションを所有する人種である。おまけに眼の少し上にすぐ毛髪が生えて、そのこせ〳〵したゆとりなさを示してゐる有樣は鳥見たやうだ。そこで、我々は充分にこれを考察して大に改善をしたいのである。

斯うした日本人の表情は、主としてその島國民族であること、しかもその島も英國などのやうに廣々とした野原つゞきではなくて、巍峨突兀たる山島の人間であるからで餘儀ないことかも知れないが、その上にまた氣候の爲め、食物の爲めに日本人は餘程不幸にスポイルされてゐるのである。例へば濕氣の多いといふことが、日本人の體質に甚しい影響を與へてゐる。實に日本人程、耳鼻咽喉を害してゐる國民は世界中何處にも見當らないことは此の前に言つたが、大抵の日本人を見ると、耳か鼻か咽喉か、その一乃至二三を害してゐない人間は一人もないと言つてもよい程である。その證據に、日本人の集まつた場合、又は乘物の中などでそのやかましいこと不しだらなこと。こん〳〵咳をつかしてゐるかと思ふと、があ〳〵鼻をかんでゐる。やたらにそこいら、往來へでも何處へでもぴち〳〵唾を吐きすてる。その體たらくと言つたらないのである。この、人の前で鼻をかむとか咳をするとかは體質上止むを得ないにしても唾を吐くことは、歐洲では非文明人のすることとされてゐる。ロンドンの市街などには、わざ〳〵歩道と車道との間に立つたポストなどへ、人の氣のつかない程度に小さく、「往來に唾を吐くやうな不文明なことはお互に愼しみませう」といふやうな意味が彫りつけてある。然るに日本では處嫌はず、吐くことを禁止してある汽車や電車の中へさへも、唾は愚か靑啖などをかつと吐きかけてゐるのを見る。これは實に無作法であるばかりでなく、非衛生極まることである。然るに日本では何うしてもこれを矯正することが出來ないと見えて、到る處に唾吐壺といふものが置いてある。往來にこそ備へてなけれ、汽車の中、停車場、デパートメント、學校、官衙、甚しきは會社や個人の應接室にまで唾壺を見さるなしで、實に日本は唾壺の國である。昔から

ある煙草盆にはこれを吐月峯など雅な名をつけて各家家に唾吐器を備へ附けてあるのだ。こんな風にうるさく唾吐きの設備をしてある國が日本を措いて何處にあらうぞ。停車場だつて病院だつてこんな例は知らないことである。況んや煙草皿に唉吐を同居させるとは考へたものではあらうが、支那の料理屋でしきりなしにタオルの熱いのを持つて來ると同じやうに、むしろ奇異な感じがする。けれども、豚食人種にはそのタオルが必然であると同じく、先天的に、又國民的に鼻や咽喉を惡くしてゐる日本人に取つては一日として唉吐壺なしに我慢は出來ないであらう。まことに困つたことである。しかもこれは困るだけではなくて、日本人の能率に關係あるに至つては考へざるを得ない。何となれば、耳、鼻は眼と共に最も大切な感覺作用を司るところで、これに障害のあることは我等の身體及び智能上に非常な影響がある。況んや咽喉は內臟への關門であつて、殊にこれを害することに依つて呼吸器の諸機關に及ぼす影響に至つては寒心すべきであるのだ。一挿話として、これは船中で聞いたことである。それは日本の海軍飛行隊の教官をしてゐるイギリスの一士官が、歸國して再び日本に向ふのから聞いたのであつた。彼れは、日本人の飛行術も近來は餘程上手になつたが、しかし遺憾なことには敏感性が足りない。その爲めに日本ではまだ事故が多くていけないと言ふのであつた。それは、英國あたりの飛行家であると、耳を極めて微細に働かせてゐるから、氣流の變化とか、發動機の故障とかのあつた時には、忽ち音響によつて豫感するから、非常手段を執るのであるが、日本人は一般に耳が惡いのか、聽覺が鈍いのか、どうもこれ等に對して敏感でないから失策するのであるとのことであつた。現代に於ける最も進歩した一技術に對してすら、この耳器の不完全な爲め後れを取らなくてはならないとは、日本人たるもの大に考ふべきである。しかもこれ等耳鼻咽喉の惡いことは、確かに日本の風土の餘りに濕潤性を帶びてゐることから來るのは明かなことゝ言つてよい。現に、日本に於いてこれらに多少とも故障のあつた人が、ヨーロッパに居る間は全然これを感ぜず、今まで蓄膿症などで鼻を惱んだ人も、持續性の咽喉加答兒に冒されてゐる人も、けろりと忘れたやうになつてしまつてゐる しかもそれで日本に歸ると、神戸に上陸したその瞬間から、こん〱ごろごろとやらなくてはならない始末である、特殊國日本の特殊國なる、また故ある哉であらう。

　次には日本人の衣食住である。これについてもすでに十分に語つたが、食物については更に痛切に感じたことも少なくないから、反復しようと思ふ。

一たい、日本人は前述の如く耳鼻咽喉とか、或はトラホームや結膜炎によつて眼とか、大切な外部の器官を破壞してゐるのみならず、より甚しくその內臓とか、全體の健康とかを害つてゐることは甚しいものである。年々歳々傳染病、殊に肺結核や花柳病などによつて、働き盛りの人間があたら一命を賭し、又は廢人となることは夥しいもので、如何に戰爭に勝つても、時々刻々國民の資質を減損し行つては、大敗戰以上の痛手を國家か受けてゐることになる。その原因には多々あらうが、中にも體力——抵抗力の不足が最大原因であらうと思ふ。今日の如何なる進步した醫學說でも、傳染病は必らずしも恐るべきものでなく、身體に抵抗力があつたなら、白血球の力によつて病菌を食ひ盡して決して身體を侵させないものだといふことを肯定してゐる。然るに每年傳染病が流行し、流行すれば蔓延し、蔓延すればどし／＼斃れて行く所以のものは、日本人の體力にその抵抗が足りないからといふ外はない。しかもその抵抗力たるや、勿論正しい鍛錬、適當なる保健方法も必要であるが、何といつてもそのエネルギーの本源たる營養の如何にあると言はなくてはならぬ。卽ち食物である。日本人の食物が貧弱だといふことが、この抵抗力のないことと、體力薄弱なることとの最大素因をなしてゐることは、否まんと欲しても能はぬのである。——實に原動力が乏しくて、民に餓孚があつて、そして健全なる國民であり、健全なる國家であることを望み得べきであらうか。日本人の食物改良問題は正に聲を大にして呼號せねばならぬと思ふ。議會などでも、動もすれば食糧の多寡、その價格の高低などは問題になるけれども、日本人の食料の品質を向上し、營養素を十分に供給する爲めの考究は甚だ幼稚なやうである。彼の營養研究所の如きも、徒らに、澤庵や豆腐のカロリーのみを研究して、如何に少額の費用を以て、如何に可能程度の——卽ち生きて働ける最小限度の營養を供給し得るかといふやうな消極的方面を主として調べてゐるやうで、さなくとも貧弱な營養をます／＼貧弱ならしめ、ブルジョアの肥えたるに逆比例してプロレタリアの瘠せ細るための研究を積んでゐるかの觀あるのは大に慊らない。もつと積極的の態度に出でゝ、外國人は如何なる日常食を取り、それに依つて如何に多量の營養素を攝取しつゝあるかを、實際について研究して、この貧弱にして、益々身體の抵抗力を減耗しつゝある日本人の生活力、抵抗力を充實し、增加せしめるやうな方面を大に鼓吹して貰ひたいものである。雪駄の皮のやうなカツレツや、爪の先ほどなバターの營養價をすら容易に取ることの出來ない日本人の家庭食なるものに對して大に改良を加へられたい。勿論、これには日本現在の生活條件が

件はないであらう、それだから、如何に最小限度の價格で出來るだけ多くの營養價を取られるかといふやうな消極的な研究を必要とするであらうが、しかし事實を洞察すれば、お召の着物を着て毛皮を背に卷きながら、食事にはお茶漬を香の物でかき込んでゐるのが日本の、殊に家庭の有樣であつて見れば、他の方面の冗費を省き、場合に依つては犧牲的に削減しても、食物に相當の費用をかけることは、數字的に示されたカロリー以外に大切なことではあるまいか。

　自分は思ふに、どうも日本人の食物と、彼等白ん坊のそれとを比較すると、恰かも鳥に對する獸のやうな感じが一寸起る。第一、日本人は箸で飯を食ふ。然るにこの箸なるものは、嘴に通ずで、その昔誰れか、日本人の先祖が、鶴か鷺のやうな嘴の發達してゐる鳥の食事するところを見てゐたに違ひない。「はゝあ、此の鳥の嘴のやうなものを拵らへて、凹んだ器の中に食ひ物を押し込んで食べれば、指の先の汚れることもなく、また熱いものを摘んでも火傷をする患ひはない」と、馬鹿なところに感心をして、早速それを眞似たに相違ない。さう思つてみると、例の茶碗とか汁碗とかお猪口とか、日本の食器は大抵凹んだものであつて、鷺が泥鰌を掘つて食つてゐる溝泥の中の水溜りを連想させるものである。これは西洋人の食器がすべて平つたい皿であることゝ考へ合せると面白いことである。彼等はスープをさへも皿で吸ふのである。しかもそのナイフは鋭利なる牙を想はせ、フォークは無條件に猛獸の爪を連想させる。日本の箸とはいゝ對照である。勿論さう言つたからとて私一個の考へであつて、別に調査して述べるわけではない。然し餘程決定的な想像としても差支あるまいと思ふ。

　斯くして食ひ方を鳥の眞似をした日本人は、食ふものも亦、鳥の眞似をしてしまつたのである。先づ日本人の主食は穀物である。こいつは同じ鳥でも、鳩や雀の眞似をやつてゐると見てよい。けれども鶴、鷺式に見れば、又魚類を仲々食ふ。これは島國である關係もあらうが、やたらに魚、それも小魚を捕つて食ふ。泥鰌汁や鮒や鯊の佃煮を食ふところは何うしても動物園で見る鶴鷺式だ。それも少し宛突つついてお上品がつてゐるのだから、あの野獸式な白ん坊の食物とは比較になつたものでない。牛肉などを食ひ始めたのは實に維新前後である。太古から猪とか鹿とかは食つてゐたやうだが、それは狩獵をしてのことであつて、丁度農夫が作物を栽培するやうに牛や豚や家畜として、それを屠殺して常食にするといふやうなことは全然なかつた。そんなことは如何に屢々飢餓に襲はれて困るやうな實際問題にぶつかつても、夢想だもしたことはなかつたものだ。今日

では肉食が可なり盛んになつたとはいふもの丶、矢張りせいぜい切り刻んですき燒きにして突つつく位なことが主で、椋鳥式以上とは言はれない。最も肉食が必要だと云ても多量にとると胃腸を害し益々やせるばかりである。

鳥式であるのはひとり食物だけではない。住宅の如きも全然鳥式であつて、田舍の茅葺屋根の家などを見ると、まつたく目白か鶯の巣のやうな氣がする。そこいらの藁屑や木切れをくわへて來て、寄せ集めて來て巧妙に組立てたもの丶やうに思はれて、あの中に堂々たる日本男兒が生息してゐやうなど丶は、外國人ならぬ吾々にさへ一寸想像が出來ない。住居までが萬事鳥式であることは、これも昔からだと見えて、神社の鳥居なども矢張り鳥に緣が多い。着物も亦植物性のものが多い。獸の皮や毛は昔から殆ど使用したことがなくて、僅に非常時に用ひる皮羽織とかいふものがある位である。こんな工合で、日本人は衣食住共に植物性の物で、まづ獸よりも鳥に近い生活を營んでゐるといつてよい。

これに反して毛唐といはれる人種は何うであるかと見ると、彼等は最初、猛獸の食事をするところを見てゐたに違ひない。爪で肉を引裂く所などは、ナイフとフオークとを如何にも思はせる。ビフテキにローストチキン。如何にも猛獸が岩の洞穴の中ででも食つてゐさうな光景である。その他、羊に豚に兎に、彼等は盛に獸を飼つてそれを食つてゐる。まことに猛烈なものである。着物も亦日本人が日常用ひてゐる織維質のもの、殊に絹類などは贅澤な裝飾品に止まつてゐて、實用としてはすべて動物の皮や毛から成つたものである。頭に被る帽子、足に穿く靴に至るまで悉くさうである。男にしても女にしても、まるで山中から飛び出した獅子か熊かのやうな裝ひをしてパリやロンドンの市中を歩いてゐる。住居と來たらこれもまた皆、石か、石の代用品である煉瓦、コンクリートといつたものばかりだ。餘程贅澤な富豪の別莊か何かでなくてはわざわざ木造の建築などはしない、ましてや茅葺、藁葺の屋根に於ておやである。

玆に至つて大に考ふべきことがある。一體人間は、獸類的に生存すべきものであるか、鳥類的に生存すべきものであるかだ。さあこれが吾々に取つての一大根本問題である。文化生活も糞もあつたものではない。そんなことは抑も枝葉の問題で、それよりも根本問題を何とかしなければ、實は何事も解決出來るものではない。私は玆で、卓子を一つぶん擲つて、コップの水をぐいと飮むところだ。

今更動物學者の說などを聞かなくても、誰にも解つてゐるこ

とだが、地球が出來て、更にその地表が冷却して、それから何かの拍子にひよつと生物が發生して、いつしかそいつがアミーバ狀態から動物と植物とに分れ、更に動物の中でも有性生殖を營むやつが出來て來て、それから發生した所謂脊椎動物の最初をなすものは魚であつた。その魚が水草を追つて海陸兩棲をやり出してからこゝに陸上動物の主體が先づ存在するやうになつたと假定する。これが即ち前史時代の爬蟲類であつて、今日の蛇や蜥蜴などの御先祖に相當する素敵に巨大な脊骨と、驚くべき堅固な頭骨と、それから中には長い尾骨、或は肢膜のある前肢を以て飛翔することの出來るいろんな怪物となつた次第である。日本の博物館は貧弱だから、こんなものゝ標本すら備へてないのだが、英佛獨米何處へ行つても歐米諸國ではこの前史時代の爬蟲類の遺骨を見ることが出來る。さて、これらは勿論最初から翼もなければ四つ脚でしつかり立つことも出來なかつた。丁度今日の龜とか鰐とか、或は蛇とか蛙とかのやうに、のろ／＼とそこいらを這ひまはつて、誠に不得要領な運動のみをしてゐた。その癖これ等は恐ろしい巨大な怪物であつたのだ。この前世紀の匐ひまはつてゐる動物の觀念を、神話時代まで持ち越して、龍とかドラゴンとかいふものにしてゐた。

そこで矢鱈に匐つてばかりゐる奴等が、なか／＼歩くのに時間がかゝつて面倒臭くて仕方がない。殊に芋蟲の如き先生に至つては——これは科學的の精確な論理を超越しての話だが——氣がいら／＼しだして來た。何とかしてもう少し手つ取り早く敵を追ひかけたり、敵から逃れたりする方法はないものかと、地團駄を踏んであせつて見たところ、急に羽が生えてふらふらと飛ぶことが出來たのである。そこでこいつは面白いと思つて、矢鱈に地球を離れて上の方へと飛び出して見た。そして恐ろしい高い木の上などを休憩所や住居に使ひ出したのである。兎に角もかうして出來たものが鳥である。勿論その場に、長い進化論上のプロセスはあるだらうが、詮じ詰めれば斯うして鳥類なるものは出來たに違ひない。

然るに玆に一方、地面に取り殘された連中がある。彼等は、こいつはうまいことを考へついたものだ、俺はもう這ひたくはない、何とか鳥の如くに飛んで見たいものだと、彼等も大に羨ましがり、大にあせつたものであるらしい。ところが此の連中もまた偶然なる僥倖を得た。彼等には飛ぶことは出來なかつたが、下の方に四つの突つかい棒が出來た。同時に胴體を一寸でも地面から離すことが出來るやうになつた。そして巧みにその突つかい棒を前後に運動させて、速力を出すことが出來た。しかもその速力たるや、可なり、飛ぶ程度に近いものでなつて、

犬や馬が疾走すると溝とか塀とかを勢に任せて飛び越える位になつた。その姿勢などから見ても、鳥とまでは行かないまでも、飛行機の滑走位までは漕ぎつけることができた。だから胴體はそれに依つて飛ぶことは出來ずとも、非常の速力で頗る遠距離にまで行動がされるやうになつた。今此處に居たかと思ふともう數哩の遠方に一寸ゐるような譯である。斯うなつて來ると彼れ等四つ足先生達も、のたく〳〵匍ひ廻つてゐたのん氣な時代とは天地霄壤の差がその生活振りに生じたのである。これが即ち獸類である。

所がこの獸類達は、なる程爬蟲類とは違つて大きな四つ脚がある。頗る迅速に驅け、甚だ勇敢な行動を取ることが出來る。けれども、矢張り胴體は下向きになつて、何となく爬蟲類時代の面影が殘つてゐるのを非常に苦痛にした、そこで何とかしてぴゆうつと氣持よく首を揚げて、飛びあがることは出來ないものかなと更に考へた。そこで盛に鳥の如くに地面から離れる姿勢を試みたのである。所が偶然にも、一寸した機會に前足を空間に上げて、うんと空中に飛び出す姿勢を取つてみると、前足は要らずに後ろ足のみで歩けるやうになつて來た。そして前足はぶらんとぶら下つて、自分の欲するものを勝手に取つたり棄てたりすることが出來るやうになつた。さうなつて見ると、四つ足などで歩いてゐるのは誠に馬鹿氣てゐて、苦痛になつて來た。そして前足はぶら下つて腦髓の働きを滿足させる道具に使はれるやうになつた。これが獸類から進化したところの人間である。世界太古の生存物爬蟲類の連中から斯くして鳥類が出でると共に、一方に又獸類が出て、それから又進化して人間なるものが出來たのである。

そんな樣な譯だから、理論上から言つても大いに人間は獸類に近いのである。早い話が、お互の面を見てゐると、何だか猿のやうな奴だとか、馬のやうに長い顏の奴だとか、狸見たやうな奴だとか、狐とか猫とか、獸類を以て形容したい顏がやたらにある。百舌のやうだとか、雀のやうだとか、鳶とか烏とかいふ奴は仲々ない。勿論、鰯や鮪に似た奴などは一人もない。あつても極めて稀れである。殊に最も生物の原動力として見なくてはならぬ×××に至つては、男も女も獸類のそれと大體その形狀を同じくしてゐる。犬猫は勿論、馬や牛の物でさへも、何となくお互に相通つてゐるやうな感もするが、まさか家鴨や烏のとは比較も出來ない、××の場合に於いても、人類と鳥類とは非常に違つてゐるが、獸類のそれとは先づ前後の關係は似てゐる。それに古來、人獸姦といふものは世界各地に於いて盛に行はれた。エジプトの牝牛に對する貴族の夫人の關係、土耳古

の犬、端西羊飼の羊、――ギリシヤのサチールなど枚擧に遑がない。然るに鳥に對しては、レダなどの傳說もあるけれど、眞の性的交接が人間と鳥との間に行はれる道理がない。それに又、獸慾を逞しくするなどゝは言ふが、鳥慾盛んにして精力が何うとかいふやうな形容詞もあまり聞かない。

先づ、地球上に於ける鳥獸類の履歴を調べて見ると、さつとこんなものであらうと思はれる。すると、人間は何うしても鳥類の御親類ではなくて、矢張り四つ足の仲間と餘り緣の遠いものではないことは解るだらう。たゞその突つかい棒の四本あつたやつが、いつしか後ろの二つだけになり、前の二本はいつもぶらぶらとさせて置いて物を摑んだり捉へたりする用に供するやうになつてから、鳥獸中間階級の二本棒先生――つまり人間が出來たところを見ると、或は全然鳥と無緣だとは云はれない樣だが、それは表面だけのことであつて、その生理上すべてのものは四つ足先生と少しも違ひはないのである。さうなつて來ると、人間は鳥類として生くべきか獸類として生くべきかはおのづから明かな次第である、然るにこゝに鳥類の眞似をして生活してゐる日本人といふものがあるとすると、これは大に自然の理性に悖るものと言はなくてはならぬ。彼等は謂はゞ、自然に出來上つたものに對して反對の方向に歩いてゐるやうなものである。勿論、獸類にだとて牛や馬のやうなものがあつて、草を食つたり豆を食つたり、丁度鳥類のやうな生活をしてゐるものもあるが、それだからこそ彼等は可憐さうに人間に飼育されて、夙くから彼等の自由動物としての特權、野獸たるの權利を剝奪されてゐるのである。矢張り動物の中でも、牛馬、或は兎などの草食動物よりも、獅子、虎、狼、狒々、猩々といつた肉食の猛獸が威張つてゐるのである。鳥だとても同樣で、鳩とか雀とか、鶴とかよりも、肉食の猛禽類、――鷲、鷹、鷗などの方が鳥界の勢力を占めてゐるのである。それだから人類にしても鶴や鳩の眞似をしてゐる日本人には、却つて飛行機などの發明をして鳥を凌駕するやうな人物は生れず、むしろ獸類を氣取つてゐる先生達の方から、新しい鳥の眞似でもやれる器械を發明し、そしてそれを現に數へられてゐるやうな始末である。

こんな次第で日本人は今尙ほ貧弱な鳥的生活をしてゐるために、お互にどれだけ不幸な目に遭つてゐるかわからない。第一、鳥の眞似をして、箸の先で穀物を突つついて食つたりなどしてゐる爲めに、胃袋をこはす、蛋白質も脂肪も乏しい。折角人間には、野菜の食へる臼齒と共に牙を備へてゐて、肉を裂いて食ふことが出來るやうになつてゐるのに、それを用ひないで豆や

豆腐のやうなものばかり食つてゐる。これも恐らく人が鳥の眞似をしたわけだらうが。鳥と、獸から進化した人間とでは大に違ふ。第一鳥は人間のやうに硬い臼齒や鋭利な牙はあるわけではなくて、軟骨の齒齦があるだけで物を齒で咀み砕いたり裂いたりすることは出來ない。だから鷲や鶴のやうな頸の長い鳥は勿論鷄などでも口はたゞ食物を含むだけの用で、餌を捕へたかと思ふと直ぐに嚥み下してしまふ。さうすると咽喉から胃袋までは人間などよりずつと距離が長くなつて、しかもその間の食道には嚥んだものを咀み砕くことの出來るだけの設備が出來てゐるのである。その上に胃袋が非常に丈夫でとても人間などの比ではなく、且つそれだけで猶ほ消化には設備が不充分だといふので、わざ／＼石ころなどを拾つて食つて消化を助けてゐるのである。こんな動物と、食道の短かい、胃袋のお上品に出來てゐてしかも胃液だけで消化しなくてはならない人間とが同じ物を食つてたまつたものではない。これだけでも人間と鳥とを間違へては大變な話だ。こんな大錯誤をやつてゐるが爲めに日本人は、體質は薄弱であり、筋骨は發達せず、小人島の侏儒の如き風采の人間のみである。しかも顏には憤懣と苦悶との表情を湛へてゐるのは、自分たちの生活の不自然と不平とがある譯でそれがすでに自然に反してゐることに基くのだが、今日までそれに少しも氣附かなかつたのは觀察の粗漏もこゝに至つて驚ろくべき至りだ。その上に猶ほ坐る爲めに先天的に屈曲した短かい脚をもつてゐるといふ憐れむべき狀態にある。今日、この體軀の矮小なる日本人が、パリの町などをぴよこ／＼と歩いてゐるのを見ると、何とも言へぬ情けなさである。こんな考は日本にゐると餘り起らぬのであるが、ヨーロッパに來て、體格の偉大なる白ん坊ばかりの中にゐると、特に強く感ずるところである。

鳥類的生活の及ぼす影響がそれだけに止まるならまだしもよい。更にその爲めに身體の抵抗力をなくして、やゝもすれば傳染病その他の病氣に冒されて、能率を減殺されることが少くない。殊に歐米人に比較して見ると日本人の短命であることも著しい事實だが、最も寒心すべきことは日本における女性の死亡率が男子に比較して高いことである。しかもこの事實が主としてその生存法、殊に飲食物において男にも劣り、實に想像以上に酷劣なものであることに基くことを否定されない。凡そ人類はその生存の必要上、最初の出生數の比率に於いて、女子よりも男子が多いものである。所が、世界中、未開の一小部分を除いては生後僅かの間に於ける死亡率が女子よりも男子の方が遙に多い。今假りに男が十人生れるとする。それに對し女は八人

だけしか生れないとする。然るに出生後一ヶ月經つと、その間に男子の方が四人死に、それに對して女子の方は二人きり死ぬる。そこで男女は忽ちにして同數になる。然るに又一ヶ月の後には、男子が二人死ぬるに對して女は一人しか死なない。さうすると女子の方が一人だけ男子よりも多くなる。所が此の比率はそれに止まらないで、次の月には男が又一人死んで女の方は死なぬといふやうな事實になる。無論これはほんの概括的の計數で、具體的に確實な統計を示したわけではないが、俗に日本で謂ふ「男の兒は育てにくい」のは世界的共通の事實として認めなくてはならない。卽ち人間はその出生數に於いて女よりも男が多く、發育過程に於いて女よりも男が多く死亡して行くのである。その上遺傳病及傳染病（花柳病、呼吸器病などの）も亦、女には少くして、大抵は男の方がこれを有りがたく頂戴するのである。さればヨーロッパでは、何處の國のセンサスでも、男子の數が女子の數よりもだん／＼少くなつて行く、殊に年齡を重ねれば重ねるに從つて男女間の比差は大になつて行くのである。眞に悲慘なる哉、男子の體質とでも言ふ有樣なのである。さればヨーロッパにては、男やもめは後家さんに比して少ない。最近戰爭の結果、男子が多く鐵砲の的にされてしまつたからでもあるが、それ以前から女が多い、殊に後家さんの多いことは著しいのであつた。その上、世界中でも、高齡者など丶言はれる人にはお婆さんが多いのである。だから日本人でもヨーロッパに來て、何故こんなに女が多いのだらうなど丶、驚異の眼をみはるのであるが、それには以上の理由があつて當然のことである。

所がこれはヨーロッパの事實であつて、日本に於いては反對に年々歲々男の方が殖えて行く。そして本來ならば遺傳病にも冒されず、傳染病の心配もない女の方が却つて多く早く死んで行くといふ、例外的な現象を呈してゐる。そこで何故、日本にばかりこんなに女子の死亡率が高いかと研究して見ると、殆どその多くは肺結核で斃れるのであるといふ。然らば又何故女子ばかりがさう肺結核で斃れなくてはならないのかといふに、これがつまり體質の關係、抵抗力の關係、換言すればその原因する所は營養の劣惡から來るのである。然らば何故に男子に比して女子の方が、日本では特に營養の劣惡を見るかといふと、これは食物が男子と女子に依つて非常に違ふ、卽ち男子の方は比較的營養素に富んだものを取つてゐるが、女子にはそれが與へられてゐないといふことになるのだ。一寸考へて見ては腑に落ちないやうであれど、今日の多くの家庭に於ける女子の生活振りを見るがよい。勿論德川時代のやうに、女子を虐待してすべ

ての待遇を男子よりも數等低下してゐる所は、流石に餘り澤山はないであらうが、それでも皆無であるとは言はれまい。けれども、外で暮す機會の多い亭主と、然らざる主婦との間に食物上雲泥の相違のあることは大抵の場合認めなくてはならぬ。例へば主人は勤める所などに行き、晝食には鰻飯などを食ふ機會も多い。然るにおかみさんたるや、その留守の間に燒豆腐か煮豆位にお茶漬ですまして置く、せい〳〵學校から子供が歸れば燒藷でも買つて一つ二つ食ふ位なものである。宴會、即ちディンナー・パーテーだとか何とかいふものがあつても奧樣は餘り招かれない。西洋では公式非公式を問はず、必らず夫婦で出かける。それも細君が夫の袂にぶら下つて行くといふのではなくて、すべて同等な權利をもつて夫と並んで堂々と出て行くのである。然るに日本では招かれるのは亭主ばかり、またよしや招かれても、外務省の夜會か園遊會でゞもなければ、亭主とならんで出かける奧樣なんぞそこいらに餘りありもしない。さういふ次第で本式の御馳走には奧樣はなか〳〵有りつかれない。そこで亭主は一人で山海の珍味を賞美し、大に營養價値のあるものを攝取することもあるが、おかみさんは十年一日の如く臺所の隅から拾つて來た菜つ葉や澤庵の屑で非營養的な食事をしてゐるのである。ところがたま〳〵、主人が宴會などの料理屋で、自分の食べ殘りの鯛の片方のまだつゝかずにあるものや前齒の形が二つばかりついた蒲鉾や、或はきんとんの殘り物などを、無論西洋ならば犬にくれるか掃溜にでも棄てるべきものを、日本では折箱に詰めて貰つてお土産なりと稱し、亭主はそれをぶら下げながら電信柱にぶつかつたりなどして、苦心慘憺をしながらやつと家に辿りつき、いざ安心とお手製のライスカレーでも玄關の入口に撒き散らかす。先づさう言つた順序で、眠い眼をこすりながら、眠つたともつかず、醒めたともつかぬ、肺結核質のマダムに「さあ、これがお土産だ」とか何とか言つて投げてやる。そしてその晩はその儘で陶然として眠つてしまふ。翌日になると、件の食ひ殘りの折詰は、亭主の出勤の留守に頑是ない子供と共に、その奧さんは、冷たい鯛の半分きりない鹽燒や、少々ぷんと臭ひのする蒲鉾や、藝者の涎の這入つてるきんとんや、爪の垢のうんと混入した煮ころがしなどを「お父樣のお土産でおいしいでせう」などゝ、子供に向つて喚舌くりながら、さも〳〵珍味佳肴らしくぱくつくといふ始末だ。その位ならばまだよい、令夫人殿はこの半分腐りかけたきんとんを子供に分けてやりながら、實はきんとんの味も何も解つたものではない。妾の夫は昨晩これをつゝ突きながら、席に侍る藝者の顔を見て何ういふことを考へてゐたのであらうと、その際の夫の

表情から、涎でも垂らしてゐる口元から、みだらな指先のことまでも、あらぬ想像をそれからそれと廻らしてゐる。されば現に子供がどんなものを食べつゝあるのかまたその爲めに消化不良になるのかなどを考へる餘裕もあつたものではない。斯ういふ生活をしてゐる女たちが、だん／＼ヒステリックになつて、根性をひがますのは當然である。そして又斯ういふ女から生れ、斯ういふ心から育つて行く子供等が、不良性を帶びて、お互のやうなろくでなしになるのも無理はないと思ふ。しかも斯うしたお餘りの御馳走頂戴にあづかることすらも一年に一回か二回なんだからたまらない。何しろ料理屋で、客に、その家族へ持つて歸るお土産を出すなんといふのは、家族に對する一片の同情かは知らないが、ロンドンだつてパリだつてありはしない。薔薇の花などを呉れる料理屋はあらうが、亭主の食ひ殘りの料理をぶら下げて歸らせるなどゝいふ所は世界中に日本だけであらう。しかも、情けない哉、これだけのお殘り頂戴さへも、家庭に取つては滅多に惠まれないエキストラの營養分であるといふに至つては驚く外はない。

然らばその外の場合、即ち日本人は常食としてどんなものを食べてゐるかと、もう少し立ち入つて考へてみると、それは要するに米と鹽とを主としたものである。人間の食ふものは適度の澱粉と適度の蛋白質であるべきこと勿論で、澱粉はいろんな運動を起させる一種の燃料であり、實質として身體を補益するものは蛋白質であることも勿論である。そしていろんな野菜などは、鐵分とかその他小量の要素を加味するものに過ぎないのである。然るに日本では、この澱粉質の米の外には、鹽で味をつけた野菜が主である。無論、鹽も野菜も大切なものには違ひないが、しかし、野菜などはほんの附屬物に過ぎない。それだのにやたらに鹽菜のやうなものばかりを詰め込む。まるで洋食ならばオール・ドーブルのやうなものである。日本人が副食物として食べてゐる多くは、西洋のオール・ドーブルその儘である。これは元來、食事の初めにおいて、食慾を起させる爲めに出すもので、主食でも何でもありはしない。然るに日本ではこのオール・ドーブルを副食物として、うまくもない飯といふものを、目の玉を白黒させて無理に詰め込む爲めに食ふのである。そして斯ういふ刺戟の強い鹽つからいオール・ドーブルを矢鱈に取る結果は、盛に液體を要求することになるのだ。まつたく日本人程お茶を飲む國民はないものである。一寸訪問してもお茶、應接室にもお茶、お役所にもお茶、大抵の官廳や會社にはお茶掛りの子供が二人も三人も置いてあつて、朝出勤すれば必らず社員一同にお茶を出す。社長とか專務とかがやつて來

ると、特に蓋附の茶碗か何かで別扱ひのお茶を出す。十時頃に更に一同へお茶を配る。晝食後も同樣である。午後も三時頃には必らずお茶が出る。その間に訪問客でもあると主客共にお茶だ。お茶坊主もなか／＼忙しくて、一人や二人では手の廻り兼ねる次第だが、それを呑まされる人の方でもなか／＼容易ではない、一日中仕事もせずにお茶を飲んでゐるやうなものである。フランス人が如何にカフエーを呑む國民だからとてどんな會社でも役所でも、人の來る度毎にカフエーを出すやうな事はない。だから勿論會社や役所にカフエー掛りの給仕などは居やしない。カフエーばかりではない、すべて飲食は料理屋以外でする者などはありやしない。どうもこれは考へるに日本人には平素家庭に於いて食堂なんといふものはありはしないから何處でゞも食ふ習慣から斯うなるのであらう。フランス人などはどんな場合でも必ず一定の量を守つてゐる、そしてなか／＼始末のよい國民のことだから、無駄を呑むやうなことはしない。朝食に呑めば晝食までは呑まない。あとも三時に一度と夕食に一度位なもので、日本人のやうに、のべつ幕なしにお茶を飲むやうなことをしてゐるのではない。イギリス人が紅茶を呑むのでも同樣である。然るに日本人のみはだらしなくいつもお茶びたりで居なくてはならぬといふのは、要するに此のオール・ドープルの鹽分に祟られてゐるからで、それに澱粉で胸が燒けるのだから、鹽とお茶でごまかすより仕樣がない譯である。玉川の水が不足して、東京市の水道がいつも干からびてゐるのも當然である。この分では今にお茶呑み亡國論でも鼓吹しなくてはならなくなるであらう。

それから序にこゝいらで言つて置かなくてはならぬのは、日本の野菜といふものだ。野菜が惡いといふのぢやないが、あれに用ひる肥料である。つまり日本では昔から廢物利用の意味で、われ／＼の排泄物をこれに使用するのだが、これは單に汚いばかりでなく、衞生上にもこんな惡いことはあつたものでない。これは本來、根本的に排泄物の處分方法から講じなくてはならぬのだが、何しろ今の日本ではこれが農作物の唯一の財源になつてゐるのだから、經濟問題であつて、單に下水設備位から論じられることではあるまい。兎に角そのお蔭を蒙むつて日本の野菜は實に危險である。だから西洋人は決してこの日本の野菜類を生食しない。それどころか、或る外國婦人は、日本は美しい處だから行つて見たいが、蚊の多いのと野菜の汚ないのとに閉口してゐると言つてゐた。實にこれが媒介になつて傳染病に感染する數は非常なものである。日本の腸チブスが世界的に多數であるのも勿論これからの關係である。嘗て入澤博士かどド

イツに留學してゐた時のこと、――といふと餘程以前の話だが、或る大學教授が、今日は餘程珍らしい病氣の患者が出來たから、研究の爲めに是非連れて行つて見せてやるとのことで、好奇心に驅られてついて行くと、何のことだ、腸窒扶斯患者である。日本の博士も呆氣に取られて、これは日本にさらにある傳染病だと語つたといふことだ。それ位に糞から起る病氣は世界的である。一體日本人とくそとは餘程緣があると見えて、くそ喰へ、やけくそ、くそ野郎、くそたれ、何くそ、やたらにくそをつける。「大德のくそひりおはす枯野かな」といふと風雅なやうに聞えもするが、あまりありがたいものではない。何うかして野菜からくそを退治するだけのことでも早く考へて貰ひたい。コレラが入つて來てから魚河岸を止める前に年々歲々糞から生じる病氣位は豫防したいものだ。

話が飛んだ方面に發展したが、兎に角にこんな貧弱な飲食物を取つてゐる癖に、その食べ方のだらしなさといふのか、無理解といふのか、まるでめちやくちやである。彼等の食事をしてゐるのを見ると、食つてゐるのだか詰め込んでゐるのだか分らないとは前にも言つた所であるが、彼等の多く、殊に家庭にゐる女とか子供とかは一日中、所謂てんやわんやで食つてばかりゐる。その證據には、汽車の物賣を見ればよくわかる。ヨーロツパでも停車場で物賣はあるけれどもあんなに食物を賣つてゐる所はない。尤もそれは一つは、外國の停車場は日本と違つて、大抵驛の構内にカフエーやお茶や輕い食事位は取られるやうに出來てゐるからでもあらうが、僅か新橋から十六哩行けば、もう横濱には辨當を賣つてゐる。それから又次の急行停車驛である大船も同樣である。その外窓際から覗けばいろんな食物を賣つてゐるのを各停車場で見受ける。そして客はまた連りにそれを買ひ込んで、急行の速力よりももつと急行で詰め込んでゐるのである。實に無闇矢鱈に食つてゐるものと見てよい。それだから汽車の中は食物の殼だの食ひかけだのゝ散らばつたので、通ることも出來ないやうな有樣である。然るに又一方では、日本橋あたりの商家で小僧の食事をするのなどは驚くべきもので、奥の方から「おい何々どん」とか名を呼ばれると、ちよこ〳〵と奥へ這入つて行く、行つたかと思ふと、口をもぐ〳〵させながら前垂で頰のあたりを拭きながら、「入らつしやい」とか言つて出て來る。彼はその間に饗食――と言つてもお話にならない貧弱なもので、例のオール・ドーブル式よりももつとみじめな飯と鹽氣とを搔き込んで來るのではあるがそれにしても、その間に一杯の飯を嚙んで食つたとはとても思はれない、お茶で食道から流し込む時間もあつたものではない。まるで切腹を

して、お腹を斷ち割つてそこから飯を詰め込んで手早く蓋をして出て來ることとの出來る瞬間だけである。とてもお茶碗を手に取り上げて箸を持つて、歯の間で唾液に混合させながら嚥下して、食道から胃へと落ちつかせるだけの餘裕などは何處にもあつたものでない。これ何たる人間の味感その他に對する虐待だらう。斯ういふ有様を見てゐると、われ／＼の身體の健康を保つべき、生命その物の綱であるところの食事を彼等は何と心得てゐるかと思ふ外はないのである。如何に假の家に住んで假の生活をしてゐると言つた處で、生きて居る間は食ふ時間の餘裕位はあつてもよささうなものである。

斯ういふ有様で食つたり飲んだりしてゐる日本人の狀態は更めて說明を要しない程である。殊に家庭の主婦なるものゝ生活の悽慘たることはお話になつたものではない。生殖氣分とか柔かみとかいふたけが野暮な次第であつて、まるで肺結核の寄生する道具に使はれてゐるやうなものである。おまけにあの、軒を出來るだけ前に突き出して、そして低くした、日光の當らない設備の室の中で、緣からは濕氣と冷氣とが遠慮なく上つて來るし、裏の汚ない疊では何萬の黴菌が所を得顏にどし／＼繁殖してゐる。天井は天井で小動物が住宅を構へ、跋扈し、運動やらダンスやを盛にやつて、糞と尿と塵とを頭の上から降らせる中に端座まします奧樣なるものを想像して見るがよい。日本では理想的の溫暖の地として、避寒地とされ、又肺結核患者が軒毎と言つてよい位に收容されてゐる鎌倉の地に住んで見て驚いた。朝起きて見ると硝子戸が曇つてゐるものだから、子供がそれに指先で字を書かうとすると、室内からは何うしても書けない。却つて外へ出て書くと鮮かに書くことが出來るのだ。つまり室外は暖くて室内はそれよりも冷たいのである。まるで反對だ。外が暖くて内が寒いなどゝいふことは冷藏庫の中より外にありつこはない。まるで冷藏庫の中に住んでゐるやうなものである。それが有名な健康地たる鎌倉に於ける事實である。して見ると、一般の日本の家庭に於ける健康狀態は知れたものであり、そこに鎭座まします山の神が肺結核に蝕まれて行くことも當然と言はなくてはならぬ。どうも吾々は考へて見ると、そんなへつぽこな女性から自分達が飛び出して來たんだから、今此のパリの町中で、毛唐人の體を見て地團駄を踏んだ所で何の役にも立たないやうな氣がする。嗚呼人類となるも×××となる勿れ。×××として生れ來つた吾等こそ……。

斯うした日本人、鳩か雀の食ふやうなオール・ドーブルとお茶とでごまかして生きてゐる日本人の體力を考へてみると、やつぱり古いことだが健全な身體に健全な精神が宿るといふこと

を考へずには居られない。今のやうな生活狀態である日本人に、果してどれだけのことが出來るか。

早い話が日本人特有の脚氣病についてゞある。元來此の病氣は同じ獸類から進化したものでありながら、ヨーロッパ人にはなくて日本人に特有といつてよい病氣である。これは要するに獸的が嫌ひな日本が、ひとり無暗に鳥式を氣取つたものだから、穀類、殊に白米を常食とすることによつて此の特有性の病氣を製造し且つ發達させたものである。日本では年々此の脚氣に罹る者の數が增加して現今では數十萬を算へるといふ、そして有爲な青年などで脚氣の衝心から倒れる者も少なくないのである。尤も斯ういふ病氣を製造して、自分の生命を犧牲にすることに依つて世界人類の爲めに偉大なる貢献をした點がないでもない。それは即ちこれから述べようと思ふヴイタミン發見の動機を與へたことであり、これに依つて一和蘭の藪醫者をして名をなさしめたことである。これも全體なら、自分達が犧牲的の病氣を製造したことなのだから、日本人がその位のことは發見しなくては濟まないのだが、何しろ豐葦原の瑞穗の國に米を食ふ鳥式人類では、殘念ながらそれだけのエネルギーがない。カロリーは即ちエネルギーの別名であるのだから、カロリーの不足な人間にはとても及ばぬことである。

兎に角日本人は、特有の病氣といふ名譽ある名の下に、長く且つ多くこの脚氣病に惱まされて來たのであるが、彼等はたゞこれを不治の難病であるとして苦しむだけで、その病氣の眞原因を探らうとか發見しようとか考へなかつた。考へた者はあつたかも知れないがカロリーの關係で日本人には不可能であつた。然るに玆に數年前、和蘭人でエイクマンといふ、名も無い藪醫者があつたもんだ。此の先生が、以前から日本人にある脚氣といふ病氣に對して少なからず興味をもつてゐたので、何とかしてこれは黴菌から來るものか、或は例の鳥式の食物から來るものか大に研究して見ようとの心が起つたものらしい。そこで先生、和蘭領である爪哇に、貧弱な傳染病研究所見たやうなもの〻あつたのを頼つて出張して來たものである。すると偶然にも、此の熱心なる藪醫者先生は、或る日和蘭人の飼つてゐる鷄が跛を引いてゐるのを眼にした。これは不思議だと思ひながら、この鷄の食物を見たところが、それは爪哇の監獄の囚人に食はせてゐるもの〻殘飯であると云ふことが解つた。そこで彼は豁然大悟して膝を打つた。「はゝあ、此の鷄は日本人の眞似をして米を食つて脚氣になつたに違ひない。」と。そこで彼は外の鷄にも試みたところ、白米を食はしたもの〻結果は皆、躄勝五郎になつてしまつた。それからその反對に、玄米を食はした所

が、その玄米を食つた鷄は一向に跛にも躄にもならない。茲に於いて先生は、白米には或る一種の黴菌か何かあるに違ひないと思つたものだ。所がこゝに又同國人のグリンスといふ矢張り藪醫者級の先生が居た。此の先生は米と違つて牛肉の實驗をした。即ち先生は生の牛肉と煮た牛肉とを別々に鷄に食はした所が、生肉を食はした方は跛は引かなくて、煮た肉の方は引いたのである。そこで米と肉と二つの議論が起つて來た。そして結局、兩者の論爭が研究の土臺となつて、玆にヴイタミンなる新存在物の發見となつたのである。そしてこのヴイタミンなるものは生の牛肉にも玄米にもあるが、煮た肉や白米飯には兩方共失はれてゐるといふ結論に到着したのである。従つてヴイタミンの有無が脚氣病と密接な關係があるといふことも根本的に解決されたのである。これはほんの數年前のことである。

所がこれに對して日本では何うであつたかといふに、日本人自身がこの犧牲を拂つて材料を提供しつゝある、否これに依つて大損害を蒙むりつゝある病氣の原因が外國人に依つて發見されたといふ不名譽さへあるに、すべての此の方面の專門學者等は寄つてこのヴイタミンに就いて嘲笑したものである。當時日本の醫界の大家にして專門研究家と言はれた山極博士だとか三浦守治氏だとかいふ人々は、頭からこれを否定してゐた。そんなことがあるものかと、殆ど鼻であしらつてゐたのである。然るに、實驗證明がいよ〳〵確實になつて來て、外國の諸學者が認めるやうになつてから、段々にそんなこともあるものであるといふやうになつた。どうもこれでは日本人なるものに對し心細くならざるを得ない。

日本人悲觀序でに今度は少し話題を轉じて、パリで見た日本人の印象記のやうなものを語らう。私は冒頭に於いて、マルセイユで初めて日本郵船會社の船における一小日本を見てその奇態さに驚いたことから書き出したが、そしてパリあたりでたまに一人二人の日本人に遭つても特殊國日本の感じはそんなに强く來ないと言つたが、しかしやはり日本人の貧弱さ、特殊さは感ぜずに居られない。實際、プールパールの人込みの中などで突然日本人に出くはした時には、そのあまりの惡相さ、無格好さには、ひやりとせざるを得ない。こんな場合には正直のところ、友情などゝいふ考は出なくなつてしまふ。斯ういふ顏や形の所有者は、室内だけでの親友にして置きたいものだと、ついよくない考も起つて來る。尤も先方でも、こつちの顏を見て人目のない時の友達にして置きたい位のことは氣にするに違ひない。それだけこちらも御多分に洩れない日本人に違ひはないのである。しかし面構へは惡くとも、體格がよければまだしも、

身體が惡いと來てるのだから困つてしまふ。去年の春のことであつた。フランスでは何ともなくて却つて日本では大評判であつたらしい例の日佛交換繪畫展覽會とかいふものゝあつた時のこと、その役員となつた人に、私の知つたのが二人居た。その一人は非常に人相も風采もよくない、横から見ても後ろから見ても縱から見ても、日本人の中に置いても振はないこと夥しい顏の持主であつた。確に一緒に食事でもしようものなら、相手の食慾をすつかり減退させてしまふだけの能力は充分に發揮されると思はれる者であつた。しかし自分は、此人の生ひ立ちを想像して、この内部の本質は決して此の面構へ程に猛烈ではないと思つてゐた。宴會や料理店で見る度毎に、此の男の心がけは決して顏程惡くはないなと考へつゝ見つゝ食事のおかずにしてゐた。氣のぬけたバター位は此の顏を考へることを味つたものだ。そして出來ることなら往來にて、「此の人の心は顏程ではない〳〵」と大いに叫んでやりたい氣がした位である。然るにもう一人の方は、丈が非常に高くて、おまけに足が長くて眞直で、後ろ姿のいゝことは西洋人そつくりである。これは役の正面を見ながら尙更いゝのであるが、一寸振り向いて後ろ姿を見た時などは、なか〳〵立派な人物に見える。かういふ丈の高い堂々たる體格の人に、いろんな點で一生を通じてなか〳〵得がある。第一借金などをしに行つて後ろ姿のいゝのなどを見ると、貸主に、此男なら必らず返すだらう位な信用は忽ち與へるものである。しかし、不幸にして斯ういふ立派なタイプの人は、パリあたりへ來る知識階級、上流階級にでもさう滅多にはない。註するまでもなく、極東の島國からパリへでもやつて來ようといふ程の人間は、日本でも選り拔きの人間と見なくてはならぬ。そこいらにごろ〳〵してる畫かき連中の外は華族様か富豪の坊ちやんか高等官か大會社の社員かと言つたブルヂョア、又は知識階級ばかりであるから、日本ではどうしてなかなか堂々たるもので、風采などもさう貧弱には見えないであらうが、遺憾なる哉、パリジヤンの中に立ち交るとさうは行かない。如何に東海君子國の御仁達でも、カロリー不足は爭はれぬもので、皆月足らずらしい御風采であらせられる。だからたまたま斯んな立派な日本人に出逢ふと、初めてなれば何うしても日本人とは思はれない。伊太利人か西班牙人、乃至は暹羅かせいぜい支那人位には踏むことが出來るが、お互の同胞と見るには[illegible]の日本人は、お氣の毒様のやうに[illegible]と苦悶とを滿面に表情した、[illegible]たるグロテスクだと思つたら大した間違ひはないのである。

所で斯うした美風采の日本人先生達、パリに來て何うしてゐるかといふことを申し上げよう。第一に、近頃視察とか出張を命ずとかで頻りにパリに乘り込む先生達は、毎月幾百人あるか解らないが、これ等の先生の大部は今も昔も相變らずの赤毛布先生、啞の旅行と來てゐる。英語のペヂカー一冊讀める樣なのも少ないのだから、フランス語を知らないのは當然過ぎる話、專門の視察どころか往來も一人で自由に歩けぬやうなのが多い。しかも氣の早いのが日本人の特色とでも言ふのか、此の赤毛布の啞先生たち、何を感ずつたのか知らないが、通りすがりに三日もパリに滯在しようものなら、一かどのパリ通になつたつもりで、何が何うの、彼が斯うのと、さも通人らしい批評を加へる。それも取りやうに依つては自分の言葉の通じない僻みか、鬱憤を晴らす爲めか、途方もない見當違ひの惡口などを云つて過ぎ去る連中が多い。パリに半年や一年や居たつてとても分りつこはないのは當然で、東京の町だつて二三年住んだ人でも隅々の町名は愚か名所の所在さへも知らずに過ぎるものを　あの複雜なパリなどが、數日の第一印象位で何が解るもんか。すべてが最初見た時と次に見た時と、その次に見た時とですつかり感じの違ふものであるのに、赤毛布の啞が駈足旅行で兎や角言はれた義理ではない。日本から來てゐる視察員、出張員などは大抵官廳なり會社なりから多額の旅費を貰つてゐるやうだが誠に勿體ないことゝ言はねばならぬ。彼等は到る處でこの金でもつて賣笑婦に接近し、やたらに高等料理を食つて歸る位なものである。しかもその視察報告たるやまことに堂々たるもので、そこいらから借り集めた材料を引き延ばして牛の涎見たやうなものを作製して出す。それも短いのでは受けが惡いとかで、殊更に長くするのださうな。パリの通信會議か何かで、或る人が報告を作製したところ、これでは短くて駄目だといふことになつて、更に五人がゝりで徹夜をして長く書き延ばしたといふ珍話さへある。

先づ一例をあげると、一人の役人がマルセイユへ上陸すると、必らずパリに在る同僚に向つて電報を打つ。それを受取つた同僚は、汽車の到着時間には停車場に出掛けて新來の客を待つのである。そして先づ型の如く宿屋に案内する。その宿屋も、大抵は日本人の定宿といふやうな處へ案内するのである。そこで旅裝を解くや否や、慰勞といふやうなことを言つて一番最初に連れて行く所は傾城の巷である。日本から來る奴さん達も亦、パリへ行つたら第一目的はこれと、見ぬ戀にあこがれてゐる譯で、船中などパリ色街の話で持ち切りである。全く日本からパリに行く人には女を買ひに出かけるといふやうな手合の

多いのは驚いたものだ。斯くして出迎ひ先生は頓珍漢なフランス語を以て通辯をしながら、怪しげな女の所へ行つて、マドモアゼル、何々といふやうな敬語を使つて紹介するのだ。しかしお互に言葉が通じないから、喃々喋々といふ譯にも行かないが、牛に引かれる如くに唾を流しつゝ怪し氣なホテルに誘はれて行く。異國情調も何もあつたものではない、態公八公的に一夜、否一時間許りの無言劇をやつて引き下るだけの話である。諸君、これが日本に於ける高等官何等かの御役人様が、パリお目見えの一幕なんだからたまらない。

或る海軍の佐官級の人物が、此の型に依つて或る踊り場に案内されたと思ひ給へ。――これは事實譚であるが。すると紅脂粉黛、頗る生殖氣分を滿足させるべき空氣の中に納つて、澤山のでれ〱黨が、魔性の女にしなだれかゝつて、ぐにや〱になつたり、ひよろ〱になつたりする所の光景を熟視せざるを得ざるに至つた。その人曰く、「フランスも斯うなつちやもう駄目だ、先きが見えてゐる。往年のベルダンの戰勝何處にありやだ」と叫んで、憤然として去つたといふのである。この方は前のお役人よりも主觀的に軍人氣質を出しただけに感心かも知れないが、そこが早吞込みの日本人の缺點で、赤毛布の赤毛布たる所以である。彼がたま〱目撃して、斯うなつちやフランスも駄目だとつぶやいた踊場たるや、そんなところへフランス人などが入込みはしない、其處に居る人達の殆どすべては何ぞ圖らん外國人(エトランゼ)であつたのだ。その大部分は金を棄てに來てゐるアメリカの成金か、それを見まねてゐる貧弱な日本人位なものであるのだ。斯うなると案内する奴も案内する奴だが、恐ろしく馬鹿に早く判斷する奴も判斷する奴だ。今假りにフランス人が東京に來たとする。その出迎ひのフランスの友人が、早速彼がつて、赤坂あたりの暗い横町に軒を並べてゐる淫賣宿か何かに引き込んで、僞りの愛や假りの情けやを撒き散らすのを見せつけたなら、恐らくは此の佐官と同じ嘆聲を發して引き下るかも知れない。しかし、これはパリの暗黑面だ、しかもその一小部分に過ぎないのである。それ以外に眞正のフランスとして眞面目に觀察しなくてはならないものが無數にある筈だ。それを見せないし、見ないしする爲めにつひさうした速斷をやつて惡印象を受けることになつてしまふ。假に人の家を見るにしても、玄關先、或は臺所口だけを見たのでは何も解る道理はない、更には座敷から物置、場合に依つては天井裏にまで登つて見なくては本當に見たとは言へないわけである。然るに僅か一夜を裏室に入つて見て、それでフランスはもう駄目だの何のと大きい口がよくも開かれたものだ。

ところで斯うした貧弱な、斯うした藪睨みのジャポネーであるに拘はらず、御當人の得意と來たらまさに千丈である。あの六尺男ばかりが堂々と林のやうに立つて歩いて、流暢なフランス語をつゝましやかに話し合つてゐる中をば、小さい變な奴が無闇に胸を張つて肩を怒らして、體を揺すぶつて歩いてる態と來たらこれまた一つの觀物である。まことにパリ街頭に於けるフチ・ジャポネーの威風凛然ほど滑稽な、しかも蠻味を帶びたものはない。丁度オペラの中で「鞭聲粛々」とうなり出されたやうな何とも言へぬ羞恥を感じる。しかも東洋豪傑を氣取る日本人はます／＼これを得意とするのだから呆れざるを得ない。深夜旅館で謡曲を唸つて隣室の人に野蠻人の喧嘩かと訝しまれたり、下宿の一室で牛鍋をやつて文字通りの鼻抓みをやられた位は何でもない、此の變な、東洋式の豪傑見たやうな、奇妙な振舞ひをパリジャンの中でされるに至つては實に困つたものである。今日アメリカのカリフォルニヤで、日本人を排斥するのは、無知にして無作法な日本人が安く働くのみでなく、他人に惡感を催させるに原因するのであるが、しかるにヨーロッパでは、日本から行つてゐる役人階級が一般の外國人から嫌はれて爪はじきされてゐるのである。それは何故かといふと、右の半野蠻なる東洋豪傑が災してゐるのである。内務省の勅任官程度の或る男は、ヨーロッパ中何處のホテルでも嫌はれて、同胞の恥を萬里の果に流し、遂にロンドンの林大使をして萬策窮した結果、まさに退去命令を下さうとしたが、さうなると日本に於ける彼の地位もなくなるといふので仲介者があつて特に懇請してその事なきを得たといふ。然るに此の危機にあつて以來、彼の勅任官先生、昨日までの豪傑の箔をすつかり落してしまつてそれよりは戰々兢々たること猫の如き有様となつてしまつた。覿面の食糧問題に脅しつけられると小さくなるところ、これ東洋豪傑の東洋豪傑たる所以とでも言はうか。しかしこれでは可愛いなどゝ言つてゐる譯には行かぬ。今一人、これは臺灣の判事か何かと聞いたが、彼れ性來の惡癖があつて司直の局にある身にも拘はらず、處嫌はず放尿をやらかす。或る日醉に乘じて、パリは繁華の巷ブールヷールに於て一曲やつて快哉を叫んだといふ。快哉も何もあるものか呆れて物の言へぬ次第である。今では日本の田舍の百姓でも人目にかくれてしやがんでやらかすことを、所もあらうにパリの大道でじやあ／＼やらかして快哉とは何事ぞ。こゝを通行しかゝつたパリジャン達は、ひそかに「パ・ジャンティ」と眉をひそめ、面をそむけたとのこと、さもあるべきだ。然るに何者の物好きぞ、それを聞いた日本人の中には、某は思ひ切つたことをやつた痛快な人物だと拍手し

て讀めるといふ馬鹿がある。實に何と言つてよいかお耻しい外はない。無智なる彼等の行動の背後に在留日本人の生活上及研究上に如何に莫大なる苦痛と障害が湧き起ると云ふことについて何等の考へもない。これ全く食ひ物の悪いのである。あのカロリー不足から來る所業であるのだ。

無論かういふ特殊國民ぶりを發揮して、一種の國辱事件を惹起しつゝあるのは、何もパリやロンドンだけではない。日本人が日本を離れるそも／＼の船中からである。何しろ日本郵船の船といへば、無論日本內地の延長であるから、自分の家のやうな氣がするも當然である上に、現代の日本には禮儀作法といつたやうな古い風俗習慣が頽廢してゐるところへ、これに代るべき新しいものが生れてゐないのだから、船の中に於ける日本人のふしだらさと言つたらお話になつたものでない。それをお互同士だけの間でやられる無作法さ、東洋豪傑風であつたらまだよいが、日本郵船の如きは今では世界第三位の大會社であつて、殊に歐洲航路では世界的に覇を爭つて日本人のみならず每航海每に多數の白人船客を收容してゐる。勿論それ等の船客は兎に角大部分一等客であり、然らざるも二等客であつて、外面だけでも身分を保ち體面を重んじてゐるのである。それ等の環視の中に立ち交つて、浴衣がけの肌ぬぎで啖呵を切られるのは、恐縮どころの騷ぎではない。素足着流しで日本の往來を步いてゐるのを見ても、寢室に於ける寢着以上に妙な感じと、野卑な氣持ちとを西洋人に起させるところへ持つて來て、まるで心ある者は自宅の中にてさへもせないやうな有樣を、印度洋などでは大抵の日本人が平氣でしてゐる。浴衣に兵兒帶位はまだよい、熱いからとて頰冠りをする。尻端折りをやる、そして睪丸を包んだ垢じみた、ぷん／＼匂ひのするやうなものを平氣でぶら／＼させながら甲板をうろついたり、寢そべつたりしてゐるに至つては言語道斷である。素足無帽で往來を步く者を一人も見ない西洋人に取つてはたまらない感じがするに違ひない。しかもこれが世界的の客船で、言はば日本とヨーロッパとを直接に通じてゐる天下の公道である郵船のデッキに於いては白晝公然として、我れも人も當りまへかの如く行つてゐる奇怪事である。

現に此の間箱根丸に於て斯んな一例があつた。それは大阪の某と呼ぶ紳商で、一人の子供をつれて船に乘つてゐた。或る日彼はソーシャルホール――スモーキング・ルームではなくて――へのこ／＼と這入つてゐた。そこにはファンの下に、數人の西洋婦人が凉を取りながら打ちくつろいでゐた。件の紳商、固よりそれに眼もくれず挨拶もせず、そこの椅子に腰を下したかと

思ふと、いきなり靴を脫ぎ始めた。西洋婦人等は何だか無作法なことをすると思つてわざ〳〵と見て見ぬふりをしてゐると、今度はそろ〳〵靴下をも脫ぎ始める。そしてしきりに足を撫でさすりながら、眞黑つくなつた膏藥の痕を剝ぎ取つて、新しい膏藥を貼り替へるのであつた。レディ達はもうたまらなくなつて、一齊に座を立つて去つてしまつた。紳商先生、無論それが何を意味するかを知らないから、得意になつて平然として、ます〳〵毛脛をなでさすり、悠然と足の手入れをしたものだ。

するとその例のレディの一人は特殊國日本人のすることだからとて放つて置くことが出來なかつた。彼女は淑女の前で斯ういふ無作法を敢てするのは殊更に侮辱したものだと思つたので、直ちに夫のところへ行つて此の事情を述べたものだ。するとその夫はまた非常に憤慨して、それは怪しからんと激昂の餘り一等船室の掲示板に持つて行つて、

「爾今、日本人はソーシャル（ホール）に於いて膏藥を取り替へる可からず」

と書き出したものだ。すると又、此の事情を知らない日本人たちがこれを見附け出して、これは怪しからん、斯ういふ掲示を船長の許しもなしに出すといふのは、大に日本人を侮辱するものだ。禮節を心得てゐる日本人中、誰れがさういふ馬鹿なことをする者があらうとて、大に白人側に對して抗議を申込み、こんな掲示した男に謝罪をさせたといふことだ。しかしすまないのは彼の大阪紳商先生の胸の中だ。今更自分がやつたと名乘つても出られず、內心大に恐れ入つて船室から顏も出さなかつたといふ。

これなどは最もよく洋行する日本人の狀態を語るものであつて、大なり小なり、斯うした奇行を演じない者は一人としてないと云つてよからう。浴衣がけで甲板でデッキビリヤードをやつてゐると、風が吹きまくつて始終股のあたりが露出するのは大抵の人がさうである。これは西洋と日本と習慣の相違で西洋人には何う思はれたところが止むを得ないなど丶は言つて居られぬ。日本內地で、自分の家の中でなら生蠻の眞似をしようがツングース人の眞似をしようが勝手だが、いやしくも西洋へ行かうといふ以上は、郷に入つて郷に從ふだけの心得はなくてはならぬ。それがいやならば外國などへ行かぬがよい。況んや今では日本でも電車や汽車の中に、太股（ふともゝ）を出すことを禁じてあつて、これが新日本の道德となりつ丶あることは誰れでも知つてゐるのだ。して見れば、船の中のやうな最もパブリックな所、殊にソーシャル・ホールにて靴を脫いで膏藥を取りかへてよいか惡いか位は分りさうなものだ。ましてや、西洋ではレディに靴を脫

して靴下を見せることは最も無作法な一つとされて居て、そんなことをやる者などはありやしない。況んやその靴下をも脫いでしまふに於いてをや。侮辱されたと思ふのは當然である。その他、郵船內では、白人客が甲板に出で〻藤椅子に仰臥して夜分涼みながら眠つてゐると、醉に乘じた日本人客が何の理由もなしにこれ等を一つ一つひつくりかへして步いたので、白人等は大に憤慨して船長に抗議を申し込み、彼の醉漢をして陳謝せしめたこともある。日本郵船の船は何と言つたところで日本で經營してゐる唯一の歐洲客船航路であつてみれば、何とかして日本の體面を保たなくてはならぬ。ホワイトスターとかキユーナードとかエム・エムだとかその他澤山に英佛伊獨等の客船があつて、それ等は郵船よりも速力も出るし、設備も整つて、おまけに言葉も自由に通じるのに、わざ〱それを外にして郵船を選んで乘つてくれる白人のあることを思へば、少しでも彼等に惡感を起させないやうに心懸けるのは、お互日本人客の責任ではないだらうか。何も郵船の提灯持ちをするわけではないが兎に角船中に於ける白人と邦人との態度の比較は事毎に注目に價するやうだ。

ついでに郵船會社に對する希望を一寸述べて置きたい、と云ふのは一等の食堂に出て客と共に食事をする船員があまりに多すぎるのである。陸上のホテルも及ばぬ程の堂々たる設備の巨船を所有してゐる英國のホワイトスターでもキユーナードでも日本の郵船會社のやうに船長、機關長、事務長、一等運轉士（一萬噸級の箱根丸伏見丸等のものには一等運轉士が二人出てくる）船醫及無線電信のオペレーターまで一等客の食堂に出てくる（猶最近には一等機關士まで出席する）やうな事はない、勿論他の先進國の客船がそうでないからと云てこちらも理由なくしてそれに似せろと云ふのではない。此如き多數の面々が一等食堂に出掛けて來て船員船客の間に益々親しみが起つてくると云ふ結果ならば少しも文句はないのであるが、親しみどころかかなり惡感を起させる點が彼等の中にあるのである、船長機關長の如き相應の年功を經た者には割合ないが、船醫、無線電信、一等運轉士などにめしの喰ひ方も知らないのが出て口角泡を飛ばして食事中に低級な生殖論などをしたりするのがゐる、して彼等の食事の食べかたの下等なる事東京の場末の洋食屋に出入する不良漢と何等變る事なく、又其人相の夥しく惡いのがゐる、こんなテーブルに四十日も鎭座させられては、いくら骨の折れた料理をだされても船が搖れなくとも食慾などは減退してしまう。一種の心理作用で胃腸の消化力などもたしかに衰弱をまぬかれない。而して又外國語の會話の力がない爲に同じ食卓の西洋人

の客とはまるで何にも云はず只だまずい人相が犬の如き食ひ方をしてゐると云ふに過ぎない、それが一日一回位ならばまだしもだ、三度もやられるのだから助からない、西洋人たるもの自國の船に乘ればよかつたと長嘆息するに違ひない。

　私は郵船會社が此の點に就いて改良されん事を非常に勸める。しかして英語位の會話の出來ぬ船長などは荷物船かなんかにまわすべきものだろうと思ふ。

　序でだからお話したいのは日佛交換繪畫展覽會の事である。これなどもよく、日本といふものをヨーロッパの環視の中にさらけ出したものだと思ふと、今更に冷やりとする。日本では新聞などに盛に書き立て、餘程いゝ氣になつて、日本の美術もいよく〳〵本場のパリに持ち出されて、對等の待遇を受けることが出來たなどゝ已惚れてゐるらしかつたが、豈圖らんやフランスでは問題にもされてゐないのであつた。少數の、いや全部のパリに滯在する日本人と、それに直接關係のある美術家とか、畫商とか、又はこれを外交上に利用しようとするやうな人達の間にこそ注目されもしたれ、數百萬のパリ人やパリに來てゐる歐米人に取つては全く風馬牛であつたのだ。勿論日刊新聞などに書きはしない。僅に美術雜誌や特殊の新聞に少しばかり書いただけである。第一そんなに騒ぎ立てられる理由など一つもないのだ。却つてフランス人などが行つて見てくれるのを擽つたく思つた位のもので、古い繪畫とか工藝品とかは別として現代人の作品などは一つとして見られたものはないのである。まことにあそこへ入ると、生殖氣分の少しもない硬い感じの人たちが何だか仕事をしてゐるやうなものばかりで、一つも藝術的の感激とか感興とかの漲つてゐるやうなものは見當らなかつた。但し自分は日本畫からは何物かを教へられたやうに思ふ。それは日本畫が如何につまらないものであるかといふこと、そして又日本人の油繪は西洋人のものとどんなに遠い距離があるかといふことであつた。これだけを教へられて、寧ろ益々非觀と絕望とに陷つた。

　何しろこれの主催者とか斡旋者とかいふやうな人物を考へて見るがよい。全部がさうだといふわけではないけれども、その中の一人に、例へばイギリスのアカデミー、それも本當のロイヤルアカデミーではなくて、ポートレートソサイテイか何かの會員にされたといふ大家がある。これは大へんな名譽のやうに新聞も吹聽し本人も思つてござるのだが、それは實は或る人が自分の爲めに苦心して斡旋の結果させてやつた次第で、何もそのソサイテイがこの大家を認めた譯でも何でもない。それを恰かも自分の實力でなつたやうに新聞記者に吹聽して、私のみでな

い日本全體の美術界の爲めだと言つてゐるのは聞いて呆れる。しかもその斡旋した某といふ、イギリスに居る日本人に宛てゝお禮の手紙などを出してゐるが、その手紙が又、御當人には讀めもしない英文を御丁寧にもタイプライターで打つた爲めに間違ひだらけと來てゐる、受け取つた人の細君が吹き出して笑つたといふ茶番まであるのだ。それを知らずに世間の若い畫家などは、手品のからくりなどは御存じないところからすつかり眞に受けて、有りがたがつてゐるに至つては噴飯の外はない。

　しかし兎に角一方において、春秋のパリのサロンに出品する日本人がだん〳〵多くなつて來たことは、何より結構なことであつて、すでにその中の一二はパリでも知名になつたのはこの貧弱な日本人の中にもたまには光つたのがあると心强くもなるが、しかし向ふに居る多くの帝展等に關係のある人達が、殊にその審査員推薦などになつた人達が出品しないのは何故であらうか。展覽會に入選する爲めに畫家になつたのではあるまいし、出ても出なくても、又評判が善くても惡くても問題ではない筈であるのに、毎年出品する人たちの大部分は無名の靑年畫家ばかりである。又、帝展などに於いて相當に認められる人だからとて、サロンは勿論アカデミーに落第ばかりしてゐる人があつたところで別にをかしくも何ともない。矢張り、日本人も大家だからとて恐がつて尻ごみばかりしてゐないで、あゝいふところで活躍するのが全體の爲めになると自分では信ずる。展覽會の落選を以て、妙に氣にして、まるで再び起つことの出來ない致命傷でも受けたやうに思ふのは大間違ひである。

　自分は上來可なりに日本人の惡口をならべたが、そして又それれ等は皆僞りのない事實であると信ずるが、それにしても、外國、殊にヨーロッパに在る日本人はもつと本當の意味で大に積極的に活躍し、日本人としての眞の發展を見せて欲しい。發展といへば相變らず踊場やプールパールの放尿位ではどうともならぬ。パリやロンドンで大に活動して、日本人はこんなに貧弱に見えても實際の仕事は出來るといふところを少し實際に示して貰ひたいものだ。さうしたらもう少し吾々も力み甲斐がある。然るに殘念にも今日までの實際はやはり極東の島國からぽつと出の田舍者で一向氣燄が揚つてゐない。パリとかロンドンとかで、日本人が何かこれはといふやうなことを仕出かした例は一つもないのである。そこへ行くと同じ白ん坊であるからか何うかは知らないが、アメリカ人はすばらしくやつてゐる。パリに於ける畫家などでも、日本人はアメリカ人に比較するとても問題にならない。パリ美術界に於けるアメリカ人の發展ぶりなど、それだけを書いても一つの參考記事が出來るであらう。ア

メリカ人は勿論、フランス人などに比較すると硬くてこなれてゐないには違ひないが、よくフランとフランス人とを理解し、且つ同化されるからどし〳〵仕事をして行く。試みにアメリカ人がパリに於いてアメリカ人がアメリカ人のために經營してゐる各種の機關を列擧するとアメリカ大使館の如きは別とするも、

American Consulate-General.
American Passport Bureau.
American Hospital of Paris.
American Chamber of Commerce.
American University Women's Paris Club.
International Chamber of Commerce.
American Library in Paris.
American Red Cross Society.
American Women's Club.
American Y. M. C. A.
American Y. W. C. A.
French-American We are.
American University Union.
U. S. Students and Artists' Club.
College des Etats-Uns.
Paris Ateliers.
New York School of Fine and Applied Arts.
American Graves Registration Service.
American Joint Distribution Committee.
American Aid Society.
Franco-American Social Centre.
Societé des Foyers de l'Union Franco-Americaine.
American Legion.
Women's Auxiliary of the American Legion.
Benjamin Franklin Post.

さつと見たところでもこれだけの機關がある。それと日本の物とを比較すると、これ又餘りに貧弱でお話になつたものではない。如何にパリ全市を鵜の目鷹の目で探して歩いたところで日本人のものは大使館と名譽領事の居る所と日佛銀行と日本人俱樂部位なものの外ありはしない。それでもパリやロンドンの日本大使館は堂々とした立派な建物で、且つ大使官邸は別になつてゐるといふすばらしさだが、他はとてもアメリカの側へも寄りつかれたものではない。日本人たるもの、ほんとうにしつかりしなくてはいけないと叫ぶ外はないのである。

次には、フランスやイギリスあたりで、日本人、つまり彼の

國に於ける外國人としての日本人は如何なる生活をしてゐるかである。それに先立つて言はねばならぬのは、日本に居る外國人のことである。パリに來てゐる吾々日本人は、フランス人に對しては外國人である。皆エトランゼである。それと同樣に、日本に居るフランス人及びその他の日本以外の國の人は、これも日本に對する外國人、異人であること勿論だ。所が、日本人が外國にゐるのと、日本に來てゐる異國人が、日本から見ての外國人の境遇とには非常の差がある。まづ日本に居る外國人の境遇を見るに、支那、暹羅、比律賓人等はさて措き、その外の外國人であるヨーロッパ人の如きは、日本に於いて日本の餘程立派な人よりも尙よい宿に居るのである。これを何れも名を呼ばずにホテル・ホテルと稱してゐる。東京でも横濱でも神戸でも鎌倉でも、貧弱ながら大建築物で、備附の自働車や人力車は勿論あり、電話、電燈、水道は固より、大抵の文明的生活機關は先づ一通り整つてゐる。そして外來人は皆、この大建築の中に納りかへつてゐる。自分たちが少年の時に、帝國ホテルの前を通ると、まだその頃は自働車はなかつたが、鳥の嘴のやうな鼻の赤面の外國人が、大名のやうな大した景氣で繰り出すのを見てびつくりしたものだ。何しろホテルの前にうろ〳〵してゐると來るのは皆外國人で、その建物の中に居る日本人と言へばボーイかクックの下働き位なもので、お客は皆眼の色の違つた毛唐ばかりなのに見とれてゐた。さうして一寸したいゝ料理屋に行つても、外國人はよく持てる。日本臣民では如何に「生來」でも、滅多に高貴な人などに逢ふことは出來ないが、外國人だと何處の馬の骨だか解らないやうな奴にでも貴族富豪が喜んで會見するといふ有樣であつた。數年前までは外國人でさへあれば何でもかでも公式の宴會などに招かれたもので、濱離宮や赤坂離宮にさへもその氣味がないではなかつたやうだ。近年になつていくらか此の感が薄らいだやうではあるが、まだ〳〵その因習は殘つてゐる。それから又一寸外國人などが、箱根や輕井澤あたりを散歩してゐると、物好きの學生などがあとからやつて來て、その外國人と英語などで、廻らぬ舌でもつて話しかけやうとしてゐる、これが又大した愛嬌のあるものであつた。又汽車にしてもその頃は一等に限つて乘つたもので、近頃のやうに二等などで見かけたことはなかつた。（近頃のロシアの亡命客などが、三等に乘つてゐるのは別問題である。）兎に角ヨーロッパ人は日本へ來て、丁度自分達の占領地か植民地へでも出かけたやうな氣がしてゐたのである。だから少々位掛價を吹かれたからとて、自分たちの權威にでも關するといふやうな顏をして鷹揚に構へ込んでゐたものである。今でも多くの外國人には

日本において此の態度を失つてはゐない。然るに同じ外國人でありながら、フランスあたりに來てゐる日本人となると、なか〳〵そんな譯には行かない。マークの安いドイツなどでは底ぬけの大名氣取りでゐる馬鹿者もあるやうだが、それにしても如何にドイツ人だからとて、日本で外國人を待遇する、或は日本で外國人が振舞ふやうな格別な優越振りを發揮もされなければ發揮させもしないであらう。だから一般的に云つて、ヨーロッパにおける日本人――無論、日本では中流以上の紳士階級であるところの――は、まあ大體政府の代表者もしくは大實業家などは別として、一般の知識階級など〻來ては、東京における帝國ホテルなどに泊まるものはない。せい〳〵中の下位ゐのホテルに納まりかへつてゐるのである。それならまだよい。學生とか藝術家とか、或は高等官程度の視察員とかになると、大抵は素人下宿又は中流以下の家庭に飛び込んで、おかみの儉約料理のもとに生命を繋いでゐるのだ。まづその生活程度から言つて、田舍から東京へ出て來た、大學若しくは專門學校の學生といふ有樣だ。無論往來を歩いてゐたところで、日本語で話しかけてくれるやうな物好學生は一人だつてありはしない。從つて看板とか標札とかに日本語のものなどは何處へ行つたつて見られはしない。パリの或る東洋品の骨董屋に、漢字でもつて「北京、長崎、横濱、東京」と楷書で大きく書いてあつた。ところがその漢字には劃に大分間違ひがあつて、餘程頭をひねつて判讀しなければ吾々にすら讀めないのであつた。これなども讀ませる爲めではなくて、床屋のねぢ棒と同じやうな一種の符號と裝飾とを兼ねたものに過ぎないのだ。その外には大使館でも日佛銀行でもロンドンあたりの日本商館でも日本字なんど書いたところはありはしない。宴會にしても日本の大使館ですら天長節位しかよんでくれはしない。況んやキングのガーデン・パテイだとか、大統領の宴會だとかに、無官の太夫ならさる勅任官あたりでさへ、滅多によんでくれることなどありはしない。まあ日本人が相手にされるのは、往來などを歩いてゐると、時々子供が「おまへは日本人か支那人か？」と訊ねられる位なものである。よく家庭で飯を食つてゐると、おかみさんあたりから、「お前の國にも汽車があるか？」だとか、「電話があるか？」だとかいふ不思議な質問を浴せかけられる。品物にしても日本では船來とか何とか言つてヨーロッパ人の手で出來たものを頻りに重寶がる。又實際その實質においても大抵のものが日本製より優れてゐるやうである。然るにヨーロッパあたりで日本製を實用に供してゐるものがあるかといふと先づない。戰爭中には日本の陶器が戰地で便利だとかで用ひられたさうだが、まづその位

なものだらう。曾て日本からブラシュをイギリスに輸入したところ消毒が不完全で忽ち排斥されたといふ有名な事實もある。

先づ斯ういつた次第で、日本に於ける外國人と、外國に於ける日本人との地位や狀態は大へんな差があることで、到底日本の內地に居て洋行者を想像してゐるやうな譯のものではない。尙又日本に來てゐる外國人となると、兎に角主な都會地では何處を歩いてもまづいながら自國の食事らしいものを大概食ふことができる。レストランなどいふ名は、近頃は場末にまで外國の字で書いてある。それにカフエなどいふ言葉も盛に使はれて日本飯がいやならそこいらへ飛び出せば向ふ三軒兩隣、どちら向いてもチヨツプ・ハウス位な料理は食はせてくれる。所がヨーロツパにゐる日本人――即ち外國人は、なか／＼さういふわけにはまゐらぬ。たまに日本飯が食ひたければロンドン、パリなら日本人倶樂部に行つて、うんとぼられるか、さうでなければ自分の室にアルコールランプを引張り出して、醬酒の匂ひをあたりに氣にしながら、食つてしまつてから窓を開けたりしてやつと日本氣分になるといふ戰々兢々たる有樣だ。その他すべての點からいつて、外國に居る日本人はあまり樂な、いゝ氣持ばかりのものではない。何しろ行くにはアメリカ廻りで一ケ月印度洋をのこ／＼速力の並み外れて遲い郵船や商船で練つて步けば、ロンドンまでまる二ケ月もかゝるといふ有樣で、歸るにしても同樣容易なことではない。まつたく往復共に命がけの仕事である。しかも行つて見ると、脊の高い、堂々たる人間の中に立ち交つて、ひくい、黃色い顏の蒟蒻芋のやうな奴だものだから、眼立つことも隨分眼立つて自分乍らきまりが惡くなつて並樹の影や橫町の方をこそ／＼步かうといふ氣にさへなる。無論日本に來てゐる毛唐だつて、顏や眼の色が違ふ上に數が少いのだから眼立ちはするが、それは寧ろよく眼立つ、こつちは徹頭徹尾惡く眼立つのだからやり切れない。

ところがこゝに、そんなことを言つても、近頃ではヨーロツパでなか／＼東洋研究、殊に日本研究が盛であつて、流行などにも頻りに日本物が流行るではないか。日本は今やそれだけ大に認められて來てゐるのだと、例の東洋式自惚根性から食つてかゝる手合ひがある。成る程それも事實でないことはない。しかしまあ靜かに聞き給へ、その眞相は斯うなのだ。元來人間といふものは、一つ所に停滯してゐると何事にも倦きが來るもので、新らしい刺戟を求め、流行を追はうといふことになるのは心理狀態上止むを得ないことである。例へば犬などを飼つて見ても初めつからブルドツグのやうな妙な顏の奴をかわいがつたものではあるまい。あんな怪物であるか犬であるか解らぬものより

も、やはり初めは犬らしい犬の方を愛したに違ひない。所が一つ顏の犬ではだん〳〵平凡に見え出して倦きて來る。さうすると却つて變な顏形の奴の方を弄んで見たくなるものだ。一寸天麩羅ばかり食つて倦きると、おしんこでやつて見たくなると同じである。近頃東洋人の研究が盛になつて來たのも、一つは斯うした心理狀態からではあるまいか。そしてそれが戰爭後、西園寺公がお花さんや新子夫人を連れ出したり、皇太子殿下が行かれたりするものだから日本、日本と騷がれ出したやうなものだ。何しろ日本趣味はすばらしいもので、ピエル・ロチのお菊さん位ではとても滿足が出來なくなつてしまつた。況んやラフカデイオ・ハーンやサー・エドウイン・アーノルドの「亞細亞の光」はとくに慢性となつて、もう一般の感興を失つた程にまで進んでゐるのだ。だから最近では主な新聞からわざ〳〵記者を日本に派して絶えず事情などを通信させてゐる。數年前までは幾日も續いて日本のことを載せる新聞などあつたものでないが、最近、殊にワシントン會議以後はひどくなつて、毎日、日本の記事が紙面に見えないことはない位である。考へてみるとアメリカは御丁寧にも高い廣告料を拂つて日本を廣告してくれたものだ。今度破壞された軍艦なども以て大に瞑すべきである。

こゝで少し、その新聞に見えた日本のこと、つまり外國人が日本に來て見た有様を一つ紹介したい。これは「エキセルシオ・ジヨールナル」に出た長い讀み物である。この新聞に數週間に亘つて連載されたもの、筆者はアルバート・ローンドルといふ名の人で、ロンドンのアルバート親王と間違へさうな名であるが、これは昨年の春ジョッフル元帥が日本に使ひして來た時に、一緒の船で元帥に隨行して親しく日本を見た人である。大體はなか〳〵よく觀察してあるが、中には隨分そゝつかしく早呑み込みをしたところがあつて、例の踊場でパリの將來を嘆じた先生に似たところがないでもない。何しろその全文を正直に紹介するとなると中央公論一冊位は埋まつてしまうが、如何に原稿料が澤山欲しいからとて、他人の名論卓說のお邪魔をしてはならぬ。だから最も興味のありさうな一部分だけを紹介する。

一番初め「エキセルシオ」に出たのは、何しろ非常に大きな文字で題目を掲げてあつた。吾々が見た時には、何か日本に事件でも起つたのではないか、又大臣か富豪でもやられたのかと思つて讀んで見ると、何のことだ小學校の教科書にでもありさうな日本の地勢が說き起してある。日本は五つの島から出來てゐるが、最初地圖の上で見た時には何處にあるか分らなかつた。第二番目に見て漸く解り、第三番目に見た時にははつきり分つたといふやうな調子でなか〳〵面白く書いてある。自分、

即ちアルバート・ローンドル君は、上海に着いたもんだ。所が黄浦江の入口に大きな石油のタンクが二つあつた。兩方とも「アメリカのスタンダードオイル」と書いてある。さてはアメリカの會社のものであつて、上海は先づその入口に於いてこの二つのタンクで砲臺のやうに脅かされてゐるのである。しかも支那人といふ者は、その下にのんきさうに穩かに眠つてゐる。ところが此の眠つてゐる大きい國のそばに、五つの小さい島だけが眼をさましてあたりをぎろ〳〵と見廻はしてゐるのだ。これが今自分の語らうとするジャポンといふ所であるといふのが前置きである。

彼は斯ういふ。此の國民は隨分おかしな顏をしてゐる。しかしわれ〳〵にはおかしく見えるけれども、此國民にはそれが却つてよく見えるかも知れない。そして世間ではこの國のことを軍國主義だといふが決してさうではない。少くとももとはさうではなかつた。しかし何時の間にか支那のものであつた臺灣を手に入れた、それから又何時の間にか滿洲、朝鮮などをも手に入れた。けれどもそれでも軍國主義ではない。――などゝなか〳〵皮肉を言つてゐる。彼はまた、「われ〳〵フランス人は室の中で着物を着換へるが、日本人は往來で着物を着換へる」とある。これなども面白い見方だ。多分下駄屋のおかみさんか何かゞ店頭で衣更へをやつてゐるのを見たのであらう。

それから「日本人は非常に謙遜で、且つ人に物をやることを非常に好きな國民だ」とある。東京のことについて書いた中にはなか〳〵面白いことがある。「文明的でも非文明的でもなく、近世的でもなければ古代的でもない。何だか分らぬ都だ。何處まで行けば端になるのかそれさへ分らぬ。或る日私は、此の市の端を窮めようと思つて自働車を命じて隨分長い道を走らせた。それは隨分長い時間を走らせた。すると遠くの方に靑々とした太平洋が見えて來た。（無論筆者は東京灣を太平洋と間違へてゐるのだ）自分は驚いて、『此處は何所です？』と訊いたら、「横濱です」と答へた。」とあるのは振つてゐる。また東京の路上所見などのことも書いてあつた。曰く、「夜の町を歩いた。何だか暗くつて、危い氣分で段々と歩いて行くと、往來のぶく〳〵した柔かい所へ出て來た。そして遠くの方へ、煙が澤山出てゐる。何かと思つたらそれは料理屋であつた。その前には下駄や靴などが、入口の方に無數にならべてあつた。」「又往來に、頭に繃帶をして白い着物を着て、腰に鈴をつけて非常に忙しさうに駈け出して來る男がゐる。さうかと思ふとバナナのやうな提灯を提げて、手には木製の短い棒を二つ持つて、これを叩きながら、ソクラテスのやうにゆる〳〵と歩いて來る男がゐる。雨

方共、何のためだか自分には分らなかつた。」とある。實に面白い觀察だ。

それから數日の後に、私は「エキセルシオ」の紙上に於て、「L'homme qui perdant son nom」といふ題目で日本のことが書いてあるのを見た。何かと思つて讀むと、「日本に行くと、自分の名がなくなつてしまふ。フランス人でもイギリス人でもドイツ人でも、アメリカ人でも、皆『あちらの人』だとか、『異人さん』だとか、或は『毛唐人』だとかいつて、自分の名なぞを呼ぶ人は一人も居ない」と書いてある。さすがのロンドル君も、日本では名なしの權兵衛さんにされたのが氣になつたものと見へてやたらに書いたわけである。實際日本ではどの毛唐も同じやうにアメリカ人位に見てゐるのだ。しかしこれは日本だけでのことではない。フランスにゐる日本人も矢張り同樣の待遇を受けてゐる。Japonais qui perdant son nom à Paris とでも題して、こちらも書きたくなる。パリの町を歩いてゐると、「ムシュー・ジヤポネー」などゝ呼びかけられることは誰れにでもよくあることだ。尤も日本と違つて「あちらの人」とか「異人」とか「毛唐」とかいふのではない。だから「ジヤポネー」と言はれた方がまだそれでも增しかも知れない。

倘此の人は續いて頗る不思議な觀察をしてゐる。彼は「日本といふ國は知識の市場だ」と言つてゐる。いろんな方面から各國の長所を取入れるのに一生懸命になつてゐる。今私は『帝國ホテル』といふ所に泊つてゐる。私の所に、フランスに好意を持つた人だとか、日佛協會の會員だとかゞ集まつて『貴方を招待して一緒に御膳を食べて、何か一つ講演を願ひたい』といふ大變叮嚀な招待狀が來た。私は何心なく、同じホテルに泊つてゐるドイツ人の讀んでゐる手紙をそつと見た。すると私と同じやうに、ドイツに關係のある學者や醫者や日獨協會などいふものから、『何卒お出でを願ひたい、食事を共にして、何か講演でも願ひたい』と書いてある。又たイギリス人に聞くと、ケンブリツヂやオツクスフオードに居た所の學者などが集まつて、イギリスの事について講演でも願ひたいといふ。米人は米人で、亦た日米協會などゝいふやうな所から同樣の招待を受けてゐるのである。斯うして日本人は、各國からいろんなことを聞かうとして努力してゐる。自分だけが特別に招待されたのかと思ふと大變な間違ひである。しかしながら、アメリカ人に對しては、日本人は非常に嫌つてゐる。無論中にはアメリカ崇拜の人がないではないが、大體さう言へる。今この日本に於ける富豪のやうな建築物帝國ホテルに、一人の日本の紳士が入つて來た。またその後ろから人形のやうな日本の娘が二人小さい足でぴよんぴ

よんと鼠のやうに喘ぎながら帳場に這入つて來た。さうして「こゝにアメリカ人はゐるか」と聞いた。ところがマネージヤーは『此所にゐるのはみんなアメリカ人です』と、さう言つたら、それでは左樣ならと言つて歸つてしまつた、とある。これは日本人がこんなやうに、アメリカ人を嫌つてゐるのと、ホテルのマネージヤーでも、外國人は皆アメリカ人にしてゐることとを書いたんだらうが、これは少し誇張のやうである。

それからロンドル君は、大阪のことを隨分澤山書いてゐる。先づ斯うだ。日本に行つた普通の旅行者は日光だとか鎌倉だとか奈良だとかへ行つて、綺麗な所だといつて歸るのが多い。ところが本當の日本を知るにはこの大阪を見なければならない」と冒頭して、「パリには Eglise が澤山あるが、此の大阪では Eglise の代りに Cheminée(煙突)が無數にある。町は二つの河と無數の運河とに依つて成立つてゐて、さうして此處からは織物だとか電氣機械だとか驅逐艦だとか、まだ澤山のフランスの酒だとかゞ造られる。何しろ非常に忙しい都市だ。この大阪にゐる日本人は外の日本人のやうにぼんやりした顏のものは少ない。もう少しヨーロツパ人のやうな顏してゐる。(註に曰く、隨分妙な見方もあるもんだ。)料理屋に入つても人々が非常に忙しく食べてゐるのを見る。お客は次から次へと來るので、席が空くと直ぐそこへ他の新しい客が來て坐る。食事をする時間も大阪ではない位に忙しい。此處の料理屋では爪などを磨いてゐるやうな悠長な婦人はとても見られない。(註に曰く、パリの女はよく晝飯などのあとに料理屋でゆつくりと爪磨きの七つ道具をならべて、爪のお化粧をして一時間も二時間も費してゐるところを屢々見受ける)先づこの大阪なるものを調べるのは新聞社に行くのが一番いゝと思つて、朝日新聞を訪ねることにした。――と、この記事は「Journal moderne」といふ題目で書いてある。

「先づ、住友を訪問してそれから新聞社へ行つたのだが、その間の道筋は極く小さい道であつてフランスの百姓などはとても耕すことの出來ないやうな石だらけの畑のやうな道路である。そこを一萬圓もする自働車が遠慮なく私を乘せて走つた。さうして朝日新聞社の前で停つた。この新聞社は丁度ベルリンの〇〇新聞社に大變よく似てゐる。ベルリンのそれも往來の四辻にあり、朝日新聞社もさうである。お負けに建物までもよく似てゐる。たゞ主筆の〇〇氏の居ないことゝ嘘をつかないことだけは違つてゐる。(註に曰く、朝日新聞に取つていゝ廣告だ。事務所に入つてから主筆に會ふと、編輯室に案内してくれた。ところが驚いてしまつた。そこには八十四人かの人が机に向つて

papier blanc に筆を走らせて、頻りに何か書いてゐる。その中四十人程は兩耳に電話の受話器をくつつけ通しで、筆を持つて紙に向つてゐる。"Est-ce l'école?"(これは學校ですか?)と私は主筆に訊ねた。ところが主筆は、「これは皆編輯員です」と答へた。それから主筆は、吾々は日曜日の附錄を每日八版を刷つてゐると言つた。それから主筆は「さあこれから印刷所へ行きませう」と私を促した。此所には四十幾字かの日本の假名と四千種とかの支那の文字の活字とが揃へてある。さうして澤山の活字拾ひがその字を拾つてゐる。その無數の字を拾ふことが見てゐると眼が廻る位に迅速で見てゐるのでさへもとてもたまらない。恐らくフランスの新聞の活字拾ひが廿四字のアルフアベットを拾ひ出してゐる中に、此の新聞ではもう一つの記事が出來上つてしまつてゐるだらう。丁度私がそこに觀に行つた時、フランスのポアンカレー內閣が成立したといふ電報が來た、さうして皆內閣員の寫眞をすぐ集めてしまつた。所が唯一つ、農商務大臣のシエロン氏の寫眞だけは手に入らない。さうすると主筆は社員に向つて、何うしてないんだとか言つて大變に怒つてゐた。そこでそれを聞いた私は、シエロンといふ大臣によく似た人の寫眞を持つてゐるから、これを出したら如何ですと言つて貸してやつた。その寫眞はミルラン內閣の時の司法大臣○○○氏の顏であつた。斯くて日本では前司法大臣の顏が農商務大臣シエロン氏に早變りして新聞に掲載されたわけだ」と素つ破抜いてゐる。

少し前後するが、ロンドル君は初めの方の項に於いて、Japonais ne connaissent pas Européans; Européans non plus que les Japonais と書いて、今迄のフランスの駐日大使の初代から現在までの名を列記し、これだけの人をフランスから大使として日本に送つてゐるのに、此の人たちは何をしてゐたのだらう、日本のことを一向吾々に紹介してくれてゐないと攻擊したものだ。「これ等の大使は日本の風景などを眺めて、詩などを作つたりして喜んでゐて、一向に政治經濟の方面で、日本は何をしてゐるかといふことをさへフランス人に知らせてくれなかつた。殊に今のフランス大使クローデルといふ人は、詩人だと言つて日本では詩や戲曲でもてはやされてゐるさうだが、此の人もフランスに居たら二流詩人にもなれなかつたものが、日本に行つて忽ち現代の大詩人に取扱はれてゐる。しかしそれにしても詩人などを大使として日本に置いたつて仕樣がないではあるまいか」といふやうなことを書いてゐた。

さうして又曰く、「日本は元來、素樸で文明といふものゝ中にあわてゝ飛び込んだ。所が這入つて見るとみんな外の奴が着

物を着てゐる。これはいけない。着物を着てゐなくちやいけない。さう思つて又あわてゝ着物を拵へ出した。それは軍艦だとか大砲だとか、水雷などのやうなものであつた。さうして支那を招待した。けれども支那はこれを拒絶した。すると日本はその首を捻つちやつた。そして何時まで經つても首を捻りつけて離さうとしない。そこでロシヤだとかドイツだとかアメリカなどが、そんな亂暴なことをしてはいけないと云つて支那を日本の手から離してやつた。さうして償金なども日本の言ひ價よりもうんと負けさしてやつて事を終つた」と書いてある。ロシヤだとか、ドイツだとか、アメリカだとか書いてあるが、それは無論間違ひで、實は御自分の佛國なんだ。露獨佛の三國干渉を先生は述べてる積りだらうが、何しろ餘りよく御本人が事實を知らないのか、それとも知つて居つて迴避してアメリカを愚者にしたのかは分らぬ。――さて、ロンドル先生は書き續ける。「所がその後、日本はこれではいけないと思つた。こんなに多勢が干渉して來るのは、俺の着物の着方がまだ少いからだ。もつと着物の數を殖やさなくてはならぬと考へた。それから更に戰艦だとか大砲だとかあらゆる武器を充分に造つた。そこで先づ大體出來上つたものだから、Mademoiselle chiosen といふのに手を出した。然るにこゝに北の方にロシアといふ大きい奴が居つて、これがまた朝鮮孃にすつかり惚れ込んでゐたもんだから、これから双方で大喧嘩を始めた。さうして又日本はロシアを組み伏せてしまつた。ところが今度は澤山着物があるもんだから、誰れも何とも言はなかつた。さうして日本は何はどし／＼着物を拵へ出した。しかしこんな小さな男の癖に、斯う澤山に身分不相應に製造し出したものだから、外の奴等は非常にそれを氣にし出して、へんな怪しい眼を以てじろ／＼と見るやうになつた。中でも一番驚いたのはアメリカで、海の向ふの小男が近頃しきりに危いものを用意するので無氣味でたまらなくなつた。そこで持ち上がつて來たのがワシントン會議である」

まだその外に、日本は歐洲文明を採用してすつかり模倣してゐるが、古來からの自分の國の習慣、趣味といふやうなものはちやんと壞さないで仕舞つて置いてあるといふことから、目下青年が吾々に場所を與へよ／＼と云つて叫んで、今は若き者の時代であるとて、大に新しい運動が勃興しつゝあることから、最近の思想上の問題に至るまで書いてある。また宗教上の流行も盛になつて來たこと、「出家とその弟子」や「親鸞」などが百何版も賣れたなどゝいふことまで書いてゐる。それから又、人力車に乘ると恰かもベニスのゴンドラに乘つたやうだと批評し、吉原のことも藝者のこともある。藝者は非常に丁寧で、大變に

長い蹴躓きさうな着物を着て來ることから、お客といふものと決して食事を一緒にしないなど〻、妙なことを非常に不思議がつて書いてゐた。その他大概はこれまでの外國人の見たところと大同小異であるし、又この紹介が餘り長くなつたから此の位で打切つて置く。

以上の次第で、最近兎に角東洋、殊に日本といふものが以前よりは多量に紹介されて來たので、毎日寫眞だとか記事とかが散見されるのだが、しかしや〻もするとそれには、歐洲文明と比較にならぬやう、幼稚なことが引き出されるので、隨分ひやりとする場合がある。例へば米搗男の寫眞や、桶屋が桶などを拵らへてゐる寫眞などを掲げて、日本は今日もこんなやうな Primitive な器械を使用してゐるなど〻紹介してあるのはまことに恐れ入る。しかもこれも現在日本の實狀であつて見れば、悔しいが抗議の申し込みやうもない譯である。何しろ日本といふ國は人力を節約して器械力がこれに代らなければなか／＼進國の後を追つて行く譯にはいかない。然るに今日尚ほ人間を不經濟に扱つてゐる國は恐らく日本あたりが世界第一等ではないか〻思はれる。私は曾て非常に驚いたことがある。私の住んでゐる Sèvre といふパリ郊外に停車場がある。東京で言へば目黒澁谷あたりの格であらう。そこの驛員は驛長外四人ばかりゐるが、ところでその四人は始終出勤してゐるのではない、晝間は二人だけで、しかも夜の十時過ぎからは一人になつてしまふ。そしてその一人が切符も切れば汽車に發車の信號もする、お客の開け放しの戸を締めて、客の切符も受取る、停車場の扉を開閉もする。私は或る日夜遅く此の停車場に降りると、丁度その時すれ違ひに向ふからも汽車がやつて來た。するとその一人ぼつちで居る驛員はいろ／＼と吾々の乘つて來た汽車の世話をし、そして早速青色のランプを赤色に變へて、その汽車に發車を命じ、同じお客の開け放しの戸をぽん／＼閉めながら列車の箱に飛び乘り猿の如くに向ふ側に這入つて來てゐる汽車を更に飛び拔けて反對のプラットホームに下りると、セーブル／＼と叫びながら、お客の札を受取りながら發車の信號を與へて、その汽車を出して、更に線路を横切つて出口に待つてゐる吾々の方に飛んで來て切符を受取り、吾々を外に出してくれた。その動作の敏捷活潑なることは、カフエーなどに一時間も二時間もぶらりとしてゐるフランス人とは何うしても思はれない早業だ。殊に日本人にはとても一人でこれだけを兼ねることは出來ない。一人で驛長も驛員も改札員もやれといつたところで全く出來ない相談である。しかもそれが、國勢傾いて文藝廢るなど〻惡口を言はれるフランス人に於いて實行されてゐることだとすると、

物の觀察といふものもなか〳〵むづかしい。何だかちつとも譯が分らなくなる。

しかも此の能率といふことについて日本人は餘程違つた考へを持つてゐる。例へば官廳などでも、もとは土曜日には正午まででで退廳したものだが、今の内閣になつてから節約とか能率增進とか稱して午後三時まで延ばしてしまつた。表面から見るとこれで甚だ仕事が捗つて行くやうに思はれるが、事實は決してさうではなく、高等官から給仕に至るまで、土曜日の午後に仕事などをするものは一人もありはしない。むしろ斯うして一週間六日といふもの、だらけた執務振りをさせる爲めに以前よりも能率が減少したとは某省高等官の僞らざる告白である。誠にさうなつて見ると折角の杓子定規は天下の愚と言はなくてはならぬ。自分は思ふに、それ等も表面上の時間などを問題とするよりも、日本人の體質、殊に働ける原動力を養成するのが先決問題ではあるまいか。こんな貧弱な體をして、一週六日間働き續けるのでさへ過勞の嫌ひあるのだ。フランスでもイギリスでも、官廳會社とも、午前十時頃から仕事を始めて、午後は一時から三時まで二時間休み、更に午後五時頃まで働くから、一日を二つに別けて休養しつゝうんと働く。その代り働く時にはうんと働くので、決して日本人の働く程度ではないこと今も述べたやうであるが、現に下女にしても、日本の女中とフランスあたりの女中との働き振りはすつかり異つてゐる。それは一つは責任觀念も日本と違つてゐるからであらうが、何しろその體格かよくて精力絶倫で、日本の六尺行將男兒よりも、パリの優しさうに見える下女の方が遙に重いものを持ち激しい仕事をもなし得るのである。自分がパリで使つた下女の如きも實によく働いた。その上に日本の下女は一々主人に訊ねないと何一つすることが出來ないのだが、パリの下女は、決して主婦に一々伺つてするやうなことはない。しかも一々順序正しく氣がきいて何から何まで、主婦の氣のつかないことまで一人でやることが出來て、微細な點にも間然する處がないのである。これあの生殖氣分の旺盛な、いつもじく〳〵してゐるやうなヨーロッパの男女にして初めて出來ることで、さういふ點でも忽ちへこたれて參つてしまふやうな弱藏の日本人には眞似も出來ることではない。尤もこれは啻に體力のみの問題でなくて、知力の關係、つまり教育上の理由も充分にあるだらう。何しろむづかしい文字を澤山詰め込まれて、貴重な教育時代を空費するといふことなく、日本の小學校六年程度で中等教育はすつかり出來るのだから、むかうの十二三歳の子供は日本の十八九歳の人間と同じ能力を發揮することが出來る。體格もさうであるし知力もさうで

ある。だから、自働車屋のおかみや肉屋のおかみたちが話をしてゐるのを聞いても「モンクール・プロレー」（私の心臓は涙を流す）といふやうなことを、井戸端會議の俗語として使つてゐる。日本ならば源氏物語とか徒然草とかを讀んで餘程の文學に通じた才媛でなくては口にし得な、ことを、俗語として平氣で語つてゐるなどはとても出來ないことで、これ教育の容易な證據であつて、それが又下女の能率にも關係してゐることは、土曜日の半日から能率を絞り出さうなどゝいふ姑息なことを考へてゐる婚燗内閣の諸公、大に考へて可なりだ。

兎に角上の如く、外國で見た日本といふものは、日本國内で日本を考へるのと違つて、餘程變ちきりんなものに見えるのであるが、しかし自分はたゞこれだけの漫罵を加へて得々としてゐる者ではない。自分が一昨年「特殊國及び特殊人」を書いて以來、荒井といふ奴は變な奴だ、徒らに漫罵の爲めに漫罵をして、自身が日本人であることを忘れてゐるやうだ。固より日本には日本の特性がある。それをたゞ外國と通じない特殊性だといふやうた見方のみをして、よい方面の實質を見ないのは怪しからんとか、成る程日本にはまだ成つてゐない所が多いであらう、しかし開國以來五六十年にして此の位までの進歩を見たのだから、さう頭ごなしにするよりも、今後の進歩發展をおだてに努力しなくてはならぬではないかといふやうなことを屢々耳にする。自分も勿論さう思ふ。これでもやはり日本國民のつもりでゐるのだから、如何に情けない運命にあるとは考へながらも何とかしなくちやならぬと思ふからこそ漫罵めいたことをも書きたくなるのだ。これ又一片の愛國心に基づく老婆心であると強辯すれば出來ぬこともない。但しさう言つたからとて已惚れてはいけない。成る程日本の過去にもよい所があつたらうが、不幸にしてそれは二十世紀も二十幾年經つた今日には通用しない。如何に浮世繪に現はれるちよん髷や打ち掛け姿が美くしいからとて、それでは現代に向かないからこそ何時の間にか斬髪もし、洋服も着るやうになつたのである。自分が頻りに歐化主義を主張するのも、ヨーロッパかぶれと見るから反感も起るので、現代の世界的共通性を採用するのだと思へば當然のことではあるまいか。これは別に醉狂でもかぶれでもないのだ。兎に角丸窓を通して琴の音などを靜かに聽いてゐるとか、或は柴の扉を叩いて山吹の七重八重などと歌つてゐた方が餘程のんきでよいのだが、自分だつて出來ればその方が好きなのだが、それでは斯んなに科學の進歩し、理知の發達した現代では、折角の光輝ある二千五百年の歴史ある日本民族が蹴飛ばされてしまふ。それだからこそ八々艦隊が必要であるやうに、洋服も洋食も洋風住

宅も必要なのだ。何も飛行機などで飛ばなくても歩いて間しやくに合へば歩いた方がよいのだが、外の人がやれば自分だけやらなくては見す〳〵後らされてしまふ。だから負けまいと思へば、悔しいながら眞似でも仕方がないからヨーロッパ人の後からついて行かなくてはならない。

又、そんなに漫罵して日本人は駄目だ〳〵と言はなくとも、五十年來の速力を以てすれば、日本人だつて今に毛唐位には追つ附いて、やがては驅け拔けてしまふと思ふだらうが、どつこいさうはまゐらぬ。一寸日本だけに居つて考へると、いろんなものが非常に急速な、驚くべき進歩をしてゐるやうに思はれて、或はヨーロッパ人が三百年もかゝつてやつたことを五十年でやつてのけたなどゝ自惚れるだらうが、どうして〳〵今日の歐米各國の進歩はそれどころではない。日本が加速度の進歩をしてゐる間に、ヨーロッパでもアメリカでも、その又加々速度の進歩をしてゐるのだ。早い話が日本で飛行機の稽古を始めたのはほんの去年あたりと思つてゐる中に、もう十數年も經つてゐる。その間にどれだけの進歩があつたか知らないが、依然として飛ぶよりも墜落するのが上手であるらしく、陸軍も海軍も一人立ちで飛べないで、フランス或はイギリスから教官を傭ひ入れてゐる。それでゐて尙ほ定期航空が一つも滿足に出來てゐない。大阪と東京の間すら、既に一週に一度も滿足に飛べないで途中着陸だ、故障だ、或は風雨のために中止だといつてゐる。況んやその他をやだ。然るに、ヨーロッパでは何うであるか、フランスで或る程度まで完全な飛行機を發明したのはやはり十幾年前に過ぎないのだが、それから後、今日までの進歩の速度といふものは驚くべきで、パリを中心としてフランス國内の各地を東西南北に亙つて、一日數回の定期飛行をやつてゐる航空路が幾十とあるのみならず、現にロンドン、パリ、マルセイユ、モロッコを經て遠くコンスタンチノープルまでの航空路、またパリからブラッセル、ベルリンを經てロシアの國境に至り、或はミユンヘン、ウインを經て近東地方に至るなど、海洋上の航海に劣らぬ程度に發達してゐる。しかもロンドン、パリ間を多數の旅客が双眼鏡で俯瞰しながら飛んで行くなどは昔話になつて、今日ではドーヴアー海峽で無線電話の受話器を耳に當てながら、パリのコンセルトを面白をかしく聞きつゝ愉快な旅をすることも出來る世の中である。それに比べると日本の飛行機など、明治五年に東京横濱間に始めて英國人に教へられてがた汽車が開通したと同じ狀態であつて、物こそ違へ、國の有樣はまだ〳〵そんなものである。しかも向ふはどし〳〵進んで行くから、よち〳〵歩きの現狀では何時になつても追ひ附くどころか遅れる

ばかりである。全く困つたものだ。

　これには上に述べたやうな根本的な原因、例へば日的の生活を歐式の生活に改める上から考へなくてはならぬが、手つ取り早いところを言つても先づ第一に國字改良問題位は早く何とか片附けてしまひたい。これだけから來る能率上の損失だけでも大したものである。漢字なんといふ樣な支那からの借り物の爲めに煩はされてゐる爲めに、飛行機もろくに飛ばされなければパリの往來に放尿をして快哉を叫ぶ東洋豪傑も出て來るのだ。これも研究だけは餘程盛になつて、現に先日もローマ字問題で何とかいふ京都の凡くら文學博士が、若い海軍士官にさん〲な目にやり込められてゐたが、あんなのが國字問題に奔走して一ぱしの見識振つたり、これをまた有りがたがつて發表するやうな不見識な新聞紙があつたりするやうではまだ〱國字問題だけすら容易なことではない。眼球運動が何うとか斯うとか、屁理屈見たやうなことを云つて見たところで、眼の玉が額に縦に一列について居ない限り、議論の成り立たないのは分り切つた話だ。眼の位置がすでに横に二つ並んで、眼の玉も上下より左右に動き易く、そして眼その物が横に切れて巾廣く取つてあるのを見れば、上から下へよりも左から右へ横に物を見るのが自然であるのは言はずと知れたことだ。殊に横目人種たる、眼の細長くて横に切れてゐる日本人には横に限ることは先天的と言つてもよい。運動の縦も横もあつたものではない。況んやローマ字は世界人類の過半以上を占めて使用されてゐて、その外は支那とか印度とか、アラビアとか、亡國や半亡國で用ひてゐるに過ぎないのだから、國際上の關係、文化上の關係からしてもローマ字採用は當然である。その上、漢字といふ原始的象形文字の出來そこないに惱まされながら、何時までも無用の議論をしたりなどして、因習にこびりついてゐたところで仕方がないではないか。國語調査會などゝいふ所は一體何をしてゐる所か知らないが、文字の數が四千字だの四千七十字だのと、そんなくだらない議論立てばかりをして、三年經つても五年經つても仕事らしい仕事はして見せてくれない。あんな老朽が集まつて議論に隙をつぶしてゐる間に、どし〲ローマ字を採用して實際に使つて見たらどんなものであらうか。一體、日本人は何々調査會だとか研究會だとか名義だけは堂々たるもので、一向何をやつてゐるのか分らないものが隨分澤山ある。手つ取り早くぐん〲進んで行かなくてはならぬ世の中にすべてのことが順序轉倒だ。

　さう云へば一番滑稽なのは、日本では一番大切なものが後廻しになつて、後からでもいゝやうなところが先決問題にされて

ゐることが可なり多い。例へば東京市の道路と地方の鐵道とを比較してもさうだ。地方の鐵道などゝいふものは、必要だとしたところで山林の中やお百姓が肥桶を擔いで通るところを鐵道にしたとてどれだけの利益があらう。これをさも／＼焦眉の急のやうに騒ぐのは、政黨が黨略に利用してゐると言はれても仕方がない。それよりも東京市の道路の有様は何事であるか？それだけでなしに自分が長く住んでゐるやうな住宅などは假の掘立小屋にして置いて、何うでもよい、ほんの一日に五時間か六時間か仕事をする役所などの方はずつと立派な永久的な、理想的なものに建築してゐる。住むところ、家族達の收容してあるところ、こゝで寢るばかりでなく、産れもせねばならねば、死にもせねばならぬ所は、日光の入らぬ、濕氣の多い、そして一寸した地震にでも潰れてしまひさうなものにして置いて、役所や事務所にうんと金をかけるのは何うしたものだらう。それもよいが、ほんの昇降の瞬間のみに使用して、われ／＼に取つては露天であつても不服は言はない停車場などを、あの宮殿のやうな大建築を造りあげるのは最も不可解なことだ。パリだつて、ロンドンだつて、ベルリンだつて、東京驛のやうなあんな贅澤な、寧ろ無用な建築物のある停車場は一つもありはしない。あれは停車場に立てたのかホテルに建てたのか、それとも二重橋前の脅かしに建てたのか見張り目的が分らない。殊に停車場としては不便極まる設備で、既に胴腹をぶつこ抜いて日本橋通りへ出て行く道路を造るといふではないか。これは東京停車場だけの話ではない。それから東京道路の言語道斷であることは今更言ふまでもないが、その道路たるや一番大切な商店の前などは泥濘だらけにして置いて、却つて橋のやうな短い、そして商店も家もない處には馬鹿に力瘤を入れてゐる。橋なんぞは一寸渡つてしまへばそれですむ處だから、車輛の通る處だけを耐重力のあるコンクリートか何かにして、あとの人道などは板でも何でもよい。それよりも大商店のある通り位は早く何とかしてそれから徐ろに橋梁の改築にかゝつたとて遲くはない。然るに今では道路を放つたらかして、何處も彼處も橋の建築に大忙しさだ。全く前後の顚倒である。その爲めにお互にどの位損をしてゐるか解つたものではない。市長さんは新しく平らだとか何とか納まつてござさつても一向新しくも平らでもない、道路など最も古くて凹凸だらけ、古でこその物である。せめて東京市だけでも先頭になつて何とか改良してもらひたい。

尤も東京市長も、市政顧問とかにアメリカからビヤード博士とかを招待して來て盛に遠大の計劃を立てゝゐるやうだが、遠大なとはどうでもよい、それよりも腕のきく技師を選りすぐつ

て、實際問題を解決してもらひたい。例へばビヤード博士の立案であるさうだが、八ツ山を一番地にして上野を八千番にして沿道の番地整理を行ふとかいふが、これなどもアメリカあたりの氣紛れ者でなくては考へつかないことだ。無論、吾々は東京の番地の亂雜さには困り抜いてゐる。人を訪問する時に何よりも大きい損失を蒙むるのは、容易に何町何番地が見當らないことで、やつと番地がわかつても何某は何處の邊に住んでゐるかを突き止めるまでが、これ又容易でない。三十分も探し廻つてゐるうちにいやになつて歸つてしまふやうなことは誰れも珍らしい例ではない。そこいらの人に聞いても分らない、交番の巡査も知らない、まつたく狐に憑まれたやうなものである。だから番地整理は急務には違ひないが、さればとて上野、八ツ山間を八千番に分けるといふやうな空想が實現されることだらうか。よしや實現されたとした所で、五千何百何十番地を探すために一番地からずうつとゆくやうな馬鹿げたことが出來るものだらうか。それよりも寧ろ自分は、フランスのブールバール何々式に、品川から新橋までのせめて半分位を、品川大通り、新橋大通り、更には京橋大通り、日本橋大通りといふ風に區劃して、その左を奇數番號右側を偶數番號として、建築物の一戸一戸に番地を附して行つたなら、どんなに整理されて探す上にも便利だか解らない。そして又須田町や東京驛前の如きは、プラース、ド、コンコルドの例にならつて、須田町廣場、東京驛廣場とし、一番二番でやつて行けばすつかり整理がついてしまふ。何しろ八千番とか一萬番とかアメリカ式の大きいことばかり考へて實際の役に立たなくては仕樣がない。東京市も大東京とか何とか稱して品川までも取り入れてだらしのないものにするよりも、内容の充實した小じんまりとした締まりのある都市にしたいものだ。道路の如きも、別に金がありもしないのにアスファルトだの木道だのと勿體ぶつたことを言つてゐずに、何時になつたつて出來上らないよりも、マカダムでも石ころでもかまはない、硬いものを道路に敷き詰めて泥濘膝を沒しないやうにしてさへくれゝばそれでよいのだ。そして道路の幅だつてそんなに氣取つてばかり居らずに、大通りと小通りとを區別し、日本橋大通り銀座大通りを造り、そして小通りより小さいのは何々横町一層小さいのは何々露路として區劃をすればそれでよい。そして何れも小砂利でもきれいに敷き詰めて、永久的なものにし、兩側の建物には兩側で奇數と偶數とを分けて番地を振ればそれでよいのだ。何でもないことである。

日本人が、一番大切な往來を顧みないのは氣の知れないことだ。フランス等では、往來が先づちやんと出來上つてゐないと

何うすることも出來ないとしてゐる。道路が不完全であるのは家を持つて、流しと米櫃とがないのと同じことである。戰爭中うつちやらかしてあつて滅茶苦茶になつてゐたパリの市街も、これがパリジヤンに取つては何よりの氣になることであつたものだから、戰後二年ばかりの間にすつかりもと通りに直してしまつた。私の行つたばかりの一昨年は、まだ所々道路の壞れたところもあつたが、今日では戰前と少しの變りがないまでにまれになつてゐる。ところがこれを見て日本人は、フランスには金がない金がないといふ癖に、道路にこんな贅澤なことをして、無駄な金を棄てゝゐるといふ。これは大變な考へ違ひである。日本のやうに道路だか泥田だか分らないやうなところを無神經に通つて多大の能率を減殺させながら氣附かないでゐるのとは違つて、金のあるなしは問題でない、都市生活の動脈たる道路は何よりも最初に整頓しなくてはならぬといふのが、フランス人あたりの考へである。これは假りの住居で鳥式の生活をしてゐる人間には一寸理解の出來かねることかも知れない。

尙ほ道路のことに附け加へて置きたいのは、近頃やたらに往來へ宣傳ビラ、廣告ビラを撒くことである。これだけ日本も宣傳や廣告に力を入れるやうになつて結構かも知れないが、あの爲めに往來を汚して美觀を傷けるのみならず、掃除の手數をかけることは大したものである。自働車の上からぱつ〱と撒き散らして走つたところで、あれが果してどれだけの役に立つものであらうか。わざ〱手に取つて拾つて見ようとするものは、文字の讀めない酒屋の樽拾ひか田舍出のおぢいさん位なもので一向知識階級とか購買力でもありさうな人間の眼には觸れずにしまふ。そして徒らに市街をきたなくするだけである。パリあたりでは、壁などへ廣告の貼附さへも法律で禁じてある位で、最近では撒水自働車のやうなもので、往來へ水をもつて廣告、又は宣傳文字を書いて行く。さうすると大勢の人が皆讀むことが出來て、しかも二十分も經てば後から後から消えてしまふ。ロンドンあたりでも、市中のアスファルト道へ、バケツのやうなものに石灰粉を入れたのをボン〱と落して歩くと、そこへ白い文字が石灰粉で現はれるといふやり方を用ひてゐる、又二階三階あたりから往來へ持つて行つて幻燈で文字や繪を落す、さうすると鏡のやうに磨かれた道路のことだから、はつきりとそこへ影が寫るのである。やり方は工夫すればいくらでもあるだらう。わざ〱紙きれを振り撒いて行くのは、紙や印刷費の經濟からも又宣傳能率からも何にもならないことだ。それよりも、自働車に大きい旗でも樹てゝ、もつとゆつくり練り歩いた方がずつと効果が多いではあるまいか。――これは、こんなこ

とさうしてわざく道路をきたなくすることが日本には流行して、しかもそれを代議士とか先覺者とかに依つて行はれてゐるのを目撃したから言ふのである。

道路の不整頓だけではない。ヨーロッパでは、人間の住むところには先づ、上水があつて下水があつて、即ち人體に注ぎ込む水と人體から排泄する水との區分を考へて置いてから家を建てるのであるが、日本では別項に語つたやうに下水の設備が全然ゼロであるのみならず、上水も殆ど設備が出來てゐない。東京市民の飲むだけの水さへ不足して、現に新しい取りつけは出來ないのである。況んや附近の郊外の住民は、病菌だらけの溝泥の流れ込んだ井戸水、それすら容易に得られないやうな始末で居る。だから、折角銀座日本橋の大通りに木道を敷いたところがその上に依然として新しい泥濘層が造くられ、下駄を埋め靴を汚してゐる。パリのやうに豐富な水を流して全市を洗滌することは出來ないにしても、せめてもう少し木道の掃除位は行き屆かして貰ひたい。尤もその外、敷石もない道路では、此間の雨降りの後など、靴泥を掻き棄てようと思へば土の三尺も根こそげ持つて行かなくてはなるまいから、當分出來ない相談であらう。

それにしても斯ういふ現代に在る日本に來て西洋人はそれを何と見るかといふことである。大抵の西洋人は日光の重寶なもので、來て見れば日本の風景がよいとか、人情が醇樸だとか空世辭をならべはするだらうが、此の道路と、この衣食住との有様を見て、驚かずに居られるであらうか。又ブシュマンやホッテントットあたりの蠻人と比較して考へずに居られるであらうか。西洋人といへば、今も多くは、來て見ぬ中は日本といふ國を、櫻の咲く美くしいローマンスの國で、ゲイシヤとシバヰとオテラとマウント・フジとミカドとの中世式名所に考へてゐるのであるが、斯ういふ人間が來て、現代日本の實際を見て、如何に大きい幻滅を感じるかは言ふまでもないことだ。見ぬ戀にあこがれてゐる中は、英米佛、いや佛を蹴落して世界五大國の一になつたなどゝいふ新聞紙の空報告を信じても居るであらうが、實見したならば果然自失言語も出でぬであらう。

依つて思ふに、パリあたりでは堂々と肩で風を切つて練り廻つてござる大使たちに忠告する。閣下等は世界の新興國としての大日本を大に紹介して下さるのはよいけれども、おくびにも西洋人が日本に來ることをお勸めにならないやうに。日本はよいところだ、美くしいところだと、空文的に宣傳なさるのは大によいが、進んで彼等を日本に誘ひ入れて化けの皮を剥はさないやうに御氣附けありたい。來て實見されたが最後、この道路と

この人獸臭とによつて折角苦心の宣傳も水の泡となつて、閣下等は再び肩で風を切つて練り歩くことは出なくなるであらう。そして外交の衝にあたつて國家の一大事を計つたところで、次第に相手にもしてくれなくなるやうなことのないやうに、折角御努力が願ひたいものだ。

長々と可なりしやべり續けたが、これを讀んで果して幾人が尤もと思つて讀んでくれただらうか。一體日本人ほど、情味、人情味、從つて他人に對して同感などのない國民はないやうだ。西洋からだん／＼と日本に向つて來て、コロンボからシンガポール、香港あたりまで來るに從つて顏面の表情がだん／＼なくなつてしまふ。支那人などでも、表情といふものがなくて、笑ひもせねば怒りもせぬ。まじめくさつてゐるが、日本へ歸つて來るともつと／＼ひどくなる。まるでつんとして愛嬌も何もあつたものでない。憤懣と苦悶とに充ち滿ちて、しかも人間らしいゆとりなどはまるでない。その癖、彼等は口を開けば國の爲めといひ、國家社會の爲めといひ、愛國心といふ。何が愛國心も何もあつたものか。殊に役人などは直きに、お國の爲め、お上の爲めをかつぎ出す。私もいゝ年になりましたから退職をしてもよろしけれど、これもお上の御奉公ですから今暫くといふやうなことを言ふけれど、その實、お上のためでも何でもあれやしない、皆自分の身の爲めで、それを最後の利己主義として發揮してゐるのだ。それならばそれで天眞爛漫にさういへばよささうなものだ。身の爲めはやがて民族の爲めであり、國家の爲めであつて二つはない筈だ。何しろ今のやうな狀態で進めば、何時になつても駄目な話だ。これといふのもつい近頃まで隣近所に毛唐の泥棒があちらからもこちらからも這入つたりするので、恐くて塀ばかり一生懸命で築き上げてゐたのだから、中の細工には少しも手が行き屆かなかつたのだが、だん／＼世の中が變つて來て、今ではこつちが泥棒の嫌疑をさへ受けるやうになつたのだから、思ひ切つて塀などはもつと低くしても、場合によつては撤廢してもよい。それよりも庭の手入れとか室內の狀態などをもつと整理して置かなくてはなるまい。また庭や室內が充分設備してあれば、泥棒が這入つたところで大抵は安全であらう。

しかしそれについては今一つ附け加へて置かねばならぬことは、外國から見た日本の危險狀態である。危險狀態といつても所謂危險思想の意味ではなくて、寧ろそれとは正反對に、軍閥とか官僚とか金持ちとか貴族とかゞ依然として橫暴をつゞけ民衆の生活を脅かしてゐることだ。斯ういふ狀態は思想問題よりも何よりも最も危險であつて、こんなことでは何時になつたつ

てろくな日本が出來つこはない。食ひたさ着たさは誰れにしても當り前のことである。それを特權階級が横暴を極めて抑へつけようとすると益々危險な狀態になる。日本はまさにこの狀態の絶頂にあると言つてよい。これが日本に居るよりも外國に居るとよく解る。子供を見てもわかるやうに、人間は誰れだつておだてれば調子に乘るが抑壓しようとすると却つて反撥してよくない結果になる。我々に地位を與へよと叫ぶものがあればそれを拒まずに、與へてやるがよい。殊に親讓りの地面などで豪奢を極めて、獨占してゐて他を顧みない樣な人間が多くてはこれこそ危險の上乘である。自分で叩き上げて土臺を造つた者が横暴を極めるのさへよくないのに、親の讓りの物でおめでたく世の中を渡つてゐる人が、さういふことでは實に危險であるのみならず、そんな人間が社會のことを顧みてくれない間は一般の日本人が島式の生活を脱し、人間味に滿ちた表情のある顔をして、立派な道路も造れば、飛行機でパリやロンドンへ飛んで行ける位になることはとても出來るものでない。

お互にしつかりしよう…

斯う叫んで私は長談議の壇を下りませう。(完)

再びニユウヨルクに住んで見て思ひ出した日本のいゝところ

佐々木指月

雪掃除を見ながら

今年は例年よりも温かいのに雪が澤山降るのは妙だ。と、思ひながら、私はニユウヨルクの街を歩いた。

いや、待て、新聞を見ると、もう五六度さがれば零度になる寒さであるやうなことを書いてゐたが、して見ると、陽氣は東京よりも寒くなければならないはずだが、どう云ふものか、それが却つて東京よりも温かい。寒暖計は寒く感じても、私の體

は寒く感じないのか知ら。そんなわけのあるべきはずのものではない。それでは、一たい、どう云ふわけだ。

さうさなア、なんでも日本の寒さは、から、氷のなかにでも漬けられてゐるやうな寒さだつた。あれは空氣の冷えた寒さではなくして、水の冷えた寒さだ。何しろ水の多い國だからなア、山にも水、野にも水、陸のまはりはみな水だから、その空氣も濕りを帶びて、それが冷え込んでくるのだから、あゝいふやうに寒いのだ。まるで、から、氷つたタヲルを膚に卷きつけられるやうな寒さだつた。さうして體は心から冷える。ぞくぞくッと、身振ひのでるやうな寒さだつた。

ところが、このニユウヨルクの寒さは、それとは、ちと、趣がちがう。こゝのは寒いのではなくつて、冷たいのだ。顏でも手でも、出てゐるところだけが、まるで切られでもするやうに感じる。だが、そんなに寒くつても、服に包まれてゐるところだけは、ぽかぽかと溫かいから不思議だ。

日本は『氣候溫和にして』なぞと、小學校にゐたときに、讀本で習つたものだが、あれは嘘だ。あのくらゐ氣候の變化が烈しくつて、荒い國はありはしない。私は、日本にゐた二年間、風邪を引きとほしたものだ。

なぞと考へながら、私は、西八十八街を、東へつき當つて、中央大公園の西側を右にまがつた。

この邊は、ニユウヨルクでも第一流の住宅區域で、東に中央大公園を一望に見渡した西側の建物は、低くとも五階より低いのはない。大理石に、赤い煉瓦をまぜた化粧建で、入口の階段から、石の窓框にいたる迄、浮彫をしたのが多く、豪奢をつくしてゐる。

然し、そんな事には私は一向かまはない。私は、木綿の襟卷を頸のまはりに卷きつけて、兩方の手を外套のポケツトへ突き込んで、口から白い息をたてながら、大きなラバシユースを引きずつて、歩いて行つた。

丁度、雪も小止みになつて、人々は、家の前の雪を掃いてゐる。そこの主人らしい人が出てゐる家もあれば、また下男らしいのが出てゐる家もある。なかには居候らしいのが出てゐて、いやに、幅をきかしてゐるのもあつた。いづれも、厚い手袋をはめて、シヤブルで雪を掃いてゐる。

家をならべて住むからには、隣同志にちがひない。隣同志ならば雪を掃く手の隙には、立つて話でもしさうなものだが、話どころか顏さへも見合はない。さつさつと、自分たちの家の前だけの雪を掃いて、隣りの家の前なぞには目もくれない。自分たちの家の前だけには雪が積つてゐて、隣りの家の前には雪

なぞは積つてゐはしないとでも思つてゐるのか。いや、隣りの家なぞと云ふものは、彼等の眼中にはないらしい、雪をかけば、わきにもしないで引き込んで行つてしまう。

私は彼等の掻いた雪のあとを見ながら歩いた。それは自分たちの家の幅さだけを、一分一厘違へずに、歩道の上まで掻いて、掻いた雪は車道の上に捨てゝある。

こゝからこゝ迄は、我のもの、こゝから向ふは人のものと、きちんと立てたシャブルの先で、くつきりと引いた線が、私には寧ろ、小憎らしい感じを與えた。

如何に、この西洋に住んでゐる人間が、自己と云ふことだけを考へて、他と云ふものを無視してゐるかと云ふことが、これで分ると私は思つた。さうして私の生れた國の日本の、人と人との關係を思つて見ないわけには行かなかつた。

今は日本も、大分西洋風になつて來たとは云ふものゝ、私の育つた東京は、雪が降ると、近所隣りの人が出て、お互ひに住んでゐる家の前の雪を掻いた。

『どうもひどい雪ですねエ、近年に稀なくらゐな大雪です。お宅の前も少し掻いて置きましやう。』と、お隣りの旦那が言ふと、

「毎度、お世話様でございます。あのお隣りの坊ちやん。丁度いま、おしる粉が出來たところですから、こちらへお這入りなさい。」と、こちらのお新造が云ふ。

坊ちやんは、おしる粉と聞いて、雪達磨をころがしてゐた手をやめて、水ツ鼻と一緒に、涎をたらす。

「難有うございます。では、坊や、御馳走になりな。行儀をよくするんだよ。」と、雪を掻いてゐる旦那は、自分の子供を、隣りの家へ送り込む。

と、云つたやうな工合だつた。日本の風習は、お互ひに、持ちつ持たれつだ。自己と云ふものを考へる時には、必ず、いや殆んど習慣として他と云ふことを考へて來た。

自分の家の前だけの雪を掻いて、知らぬ顔をしてゐたのでは人情に缺けると、日本の人たちは思つて來た。今でもさう思つてゐるに違ひない。

家の前の雪を掻いて貰つた。何とか、御禮をしなければ義理が立たないと、かう考へるのは、彼等の心の傾向である。さうしてその面倒な人情と、義理のやりとりを、日本人は昔から、今に至るまで續けて來た。

さうしてそれは、日本人が社會生活をする上の良心であるやうに私には見える。

それが、どこから起つたか、どうして養はれて來たかと云ふ

やうなことも私にはわかつてゐる。だがそれは、日本人には、恐らく、誰にでも、わかつてゐることであらう。

今は知らぬこと、昔は、雪が降りつもると、町内の若い者が殆んど惣出で、寒いのに、尻ツぱしよりの、素ツぱだしで、伊勢屋の前でも、大和屋の前でも、近江屋の前でも、どこの前でもかまはない、威勢よく雪を掻いたものだ。そこには、我のものとか、人のものとか云ふやうな考へはないやうに見えた。どうかすると、隣りの町内の雪まで手傳つて掻いたものだ。

それは、雪の時ばかりではない。火事の時でもその通り、町内の人々は、どこの家へでも飛び込んで、持ち出すものがなくなれば、根太板まで、はがして持ち出す。しかもそれは近火の時ばかりではない。田舎へでも行かうものなら、五里もはなれた他村から、若い衆たちは、高張提灯をともしつらねて、龍吐水かついで馳けつけたものだ。

他村の火を消しに出て、消口を、取られたとか、取つたとか云つて喧嘩までしてゐる。人のものを自分のものと心得てゐるとしか思へない。さうして、さう云ふ時には、皆、命賭だ。自分のものを人のものと心得てゐる、これが何よりの證據だ。

人の家が燒けるのではないか。消口なぞは、取つても取られてもどうでもよささうなものではないか。それより自分が怪我でもしないやうにするのが何よりであらうと思ふが、さて、日本人は、それでは承知が出來ないのである。いや、出來なかつたのである。

それがこのニユウヨルクの火事となると、どうだ。

『昨夜、四階目に火事があつたと云ふことですな。』と、二階目に棲んでゐる人が云ふと、

『さうです。私のところへは水が洩りましてね。』と、三階目の人が答へる。

『何しろ、夜中に、ポンプがやつて來て、やかましくつて寢られませなんだ。』と、一番下に棲んでゐる人は、こぼしてゐる。

少し、ひどい火事になると、この都會の人たちは、自分の家の入口に鍵を卸して、着のみ、着のまゝで、外へ出て來る。何一つ持ち出しはしない。

『家は借屋ですし、家のなかの品物は、火災保險に入れてありますから。』と、すましたもので、火事を見物してゐる。

この有樣を見てゐると、人間と云ふ感じがしない。何だか、かう、煉瓦か石の塊りが、人間の言葉を喋つてゐるやうに感じられる。煉瓦や石で、我と人との間を仕切つて活きて來た人間は、かうも冷たくなるものかと、思はれる程である。

話にまた、こゝの雪掻きに戻る。歩道の上の雪だけは、それ

に面してゐる家々の人がする。然し、車道に積つた雪は、こゝでは市廳で雇つた人足がすることになつてゐる。

電車の線路の上の雪は、雪除け電車が走つて來て、往來の左右にそれを掃きとばす。だから實際、人足たちの掻く分は、歩道と電車の軌道の間にはさまれた、二た筋の雪である。ところがそれが、なかなか、はかどらない。はかどつてたまるものではない。人足たちは、その仕事に、くツついてゐさへすれば、一時間いくらと云ふ金になる。

往來の四辻の角で火を焚いて、雪掻き道具を温めては、雪をそろそろ掻いてゐる。あらゆるものが、皆、全速力で走つてゐると云つてもいゝくらゐなニユウヨルクのなかだから、その雪掻きの、そろ〳〵が、全く、まどろツくさくツて、見てはゐられない。

人足たちは、二た掻き、三掻き、シヤベルを動かしたかと思ふと、もう腰をのばしてゐる、大きなパイプをくはへて、黄色い唾と、煙草の煙と、白い息が、のべつに彼等の口から出てくる。

そこへまた、戰爭の時に使つた、タンクのお古になつたやつの前へ、雪掻の鐵板をつけて、あの例の百足車で、ごと〳〵と雪を押すと、押された雪が、歩道と、車道の境の小溝に盛り上る。一度そこへ盛り上つたら、なか〳〵消えてなくならない。三日でも、四日でも、白い雪が煤煙で眞ツ黒になるまでも、そこに土手を築いてゐる。ニユウヨルクでは、朝のうち白かつた雪が、晩には、もう、黒くなつてゐる。だから雪が降ると實にむさくるしい都會になる。

そこへ陽氣が暖まつて、少し雨でも降らうものなら、それこそ往來は大變だ。ことに此頃では、雪が降り出すと、それが地面に凍りつかない前に、水道の消火栓の口をぬいて、どん〳〵と水を流す。ところが、小溝から、地下の下水に雨水を流し込む口が雪でふさがつてゐるのだから、水は往來にひろがるばかりで、全く足の踏み場はない。こちらの歩道から向ふの歩道へ、往來を横ぎらうとしても、うつかりしたところへ足を踏み込まうものなら、固いと思つた雪が案外溶けてゐて、ずぶりツと、踝のはるか上の方まで來る。

娘なぞは、立往生をしてゐる。なかに。きかない氣の娘は、スカートを高々とまくりあげて、自慢の肉色靴下の脛を長々とあらはして、やツと、小溝を飛ぶつもりで、雪水のなかへ、ざやぶんと落ちる。うつかり、そんな處へ通りすがらうものならば、きやツとばかりに、かじりつかれないとも限らない。この頃のニユウヨルクの往來で、土地の娘に、ジヤツプが、かじり

つかれたなぞと云はうものなら、私刑の憂き目を見ないとも限らないから、私なぞは、さう云ふところでは、なるたけ傍をよけて通る。

先づ、往來は、さう云ふわけで、そこへ、自働車が、遠慮なく、しつきりなしにやつて來るから、うつかりしてゐないでも、あたまの上から雫水の瀧が落ちる。高架線の鐵橋が天井になつてゐる通りなぞは、錆と油と雪解の水が上から落ちて、下は件の大洪水だ。電車や、自働車のはね飛ばす泥の雫は雨のやうに降つてくる。と、云つて洋傘をさしてゐては、先が見えなくて、とても往來は突ツ切れないし、いや、全く、向ふ側の步道へ無事に着くと云ふことは、容易な事ではない。それは、こゝで生れて、こゝで育つた女なぞでも、

「往來を突ツ切るたびごとに、私は、命拾ひをしたと思ふことよ」なぞと、云ひ出すやうな有樣だ。

東京なぞは、まだ、いゝ方だと思はなくてはならない。尤も、ニユウヨルクでは、雪のあとが雨になつても、往來の上が、おしる粉になると云ふやうなことはない。

だが雪がつもれば、都會のうちの交通は、全く不自由になつて來て、そのためには、ニユウヨルクとして失ふところは莫大だ。だから市廳では、一刻も早く往來の雪を掻いてしまひたいのだが、人足どもの方では、どつこいさうは行かない。

「おゝ、また、ちらちら降つて來た。この雪は止みさうもないなア。」と、降つて來る雪をあて込んで、

「どうだい、この寒いのに、こんな冷たい仕事をして一時間一弗とは安過ぎる。一つ値上げをして貰はうぢやないか」と、雪のなかで、雪掻き人足のストライキがはじまる。さうしてそれは、大雪さへ降り出せば、毎度のことだ。誰も、ニユウヨルク市の往來掃除課の御役人樣たちのために、犧牲になつて働いてやらうなぞと云ふやうな、忠實な人足はありはしない。

君の御馬前で討死した昔の士族はともかくも、町内の雪掃除に、尻をはしよる日本人とは、全くこゝが反對だ。

さうだ、個人主義と云ふ主義が、西洋から、追々、日本へはひつてくると云つて、私の父は怒つたものだ。それは、私が、まだ十二三の頃だつた。個人主義と云ふものが、どんなものだか、その頃の私には、無論わからうはずもないし、恐らくは私の父にも、それは、はつきりとわかつてはゐなかつたかも知れない。が、ともかくも、私の父は、西洋の個人主義と云ふものを憎んだ。さうして私も、西洋の個人主義と云ふものは、わるいものだと思つてゐた。それは丁度、今日の日本の人が西洋から來た社會主義を憎み、社會主義を是も非もなく惡いものだと

思つてゐるのによく似てゐた。

だが、今日では、私はじめ、日本人の多くは知らず知らずのうちに、餘程、西洋の個人主義に化せられて來た。『今の世の中は、個人主義でなくては、とても、やりきれない。』なぞと云ふ云ひ草は、日本にゐて、毎度、耳にしたところである。

西洋のものと云へば、日本人は、いつでも最初に食はず嫌ひをやつて見て、あとではその前に跪づく。だから日本人は、自分自身の持つて生まれて來た、しかも毎日やつてゐるその生活の、どんなものだと云ふことには、少しも考へを及ばさない。さうしてそれが、どくのらゐ、根深いものだと云ふことも棚にのせて考へない。自分の脚下の見えない國民、お先まつくらだから人のあとばかりついてあるく國民、全くあぶない話である。

併し私は、日本人が、やつてきた、お互に他の爲に自己を捨てあつて、自己のものは他のもの、他のものは自己のもの、持ちつ持たれつ盡し合ふと云ふ、あの行ひは好きだ。

かうして、はるばる外國に來てゐると、思ひ出すのは、日本のいゝところばかり。ことに日本の、昔の人の持つてゐた心は懐かしい。

やつぱり、東洋の宗教や道徳は、偉大だなアと思はせられる。

と、斯う考へながら、私は人々が、自己と他とのあひだの雪を、四角四面に掻き分けた歩道の上を、徘徊しながら歩いて行つたが、一つ、雪の公園を横ぎつて見やうと思ひ出して、往來を左に切れて、石の門内の道もないところに足をはこんだ。

雪の公園を歩いて

嘘が實か、實が嘘か、一寸見當がつかない程に込み入つた人間生活の、ニユウヨルクのまんなかにも、かうした大きな自然を容れた公園があると云ふことは、人間は、その生活が、こんがらかつて來れば來る程、他面に於ては、如何に原始の單純に戻らうとしてゐるかと云ふ、その、一つの象徴として、これを眺めることが出來る。

しかもそれが雪に埋もれて、一面の白銀世界をあらはしてゐるのだから、人間同志が、自分と他との總の間に、結局は守れもしない仕切をして、住んでゐる往來から這入つてくると、ほつと一と息つく程に、清々とした氣持ちになる。

こゝには、もう、雪を掻いてゐる人はゐない。天から降つた雪を掻く、時間を、己が食ひものにしやうとして、油を賣つてゐる人足たちもゐない。積つた雪は、春が來て自然に消えるに

まかしてある。

道も芝生も樹も石も、皆、雪に埋もれてゐる。栗鼠は穴にかくれて、池の水鳥は巣にかくれて、いつもは、人の姿を見れば、そのあとを追つて來る雀も鳩も、どこへ行つたか姿をかくして、公園のなかは、まだ晝が過ぎたばかりなのに、空の模樣もなんだかうす暗く、靜まり返つてゐる。

雪を被つてゐる露臺は、私の行く右と左に向ひ合つて並んでゐた。人の足跡は印されてゐないけれども、こゝが道であると云ふことは、露臺が並んでゐるのでわかる。露臺は丘の上にも、谷の底にもある。これが夏の夕方ならば、露臺のあるところには、きつと男と女がゐて、夏の暑さで釀された蜜のやうな囁きをかはしてゐるのだけれども、今は冬だ。樹や草もその緑の飾を落して、大地もその情熱をひそめる時だけに、人間も、その嚴かな寒さを畏んでか、流石にこゝへは來てゐない。人間の都、ニユウヨルクの公園でも、冬になれば、かうしたものかなアと、私は思はず微笑した。

毎度、話しに出るやうだが、この公園は、市内の公園としては、世界中のあらゆる市内公園よりも大きいと云はれてゐて、長さは五十街區、幅は約九街區程にあたつてゐる。こゝの一街區は、淺草公園の仲見世の長さ程あると思へばいゝ。だからこの、中央大公園は、長くツて狹い。狹いが歩いて突ツ切らうとすると、なか／＼容易でない。ことに夏の、大勢の男女が、入り混つて、露臺に腰かけてゐる時なぞは、向ふ側へ出るまでには、腦が少し變になる。のみならず、とても、男一人では、きまりが惡くつて通れない。それは昔の吉原の、花魁が張り見世をしてゐる江戸町京町を、通りぬける時の心持にくらべて、そんなに違ひはない。尤も私はさう云ふ事には、あまり小膽な方ではあるが。

だが今は冬である。清淨な雪の公園のなかへは、この都會で活きんがための渦卷きに、卷き込まれてゐる人なぞは、やつて來る用もあるまい。いや、華奢を競ふ女なぞは、這入つて來られないのも道理だ。私の履いてゐる靴は、足を踏み出す度に、雪のなかにもぐつてしまつた。

しばらく歩くと自働車の通る道へ出た。雪は平らにタイヤのために均されて、その上が鏡のやうに凍つてゐて、とても危なくて通れない。すツてんころりんと滑つたところへ、自働車が速力をつけて來たりなにかした日には、大變だと思ふと、もう、私の心は樂でない。向ふから來るのは目に見えるから、よけて通ればいいやうなものゝ、後から來るのは時々振り向いて氣をつけないと、道が大きな岩壁に隱れながら曲つたりなぞしてゐ

るところでは、どんな目に遇はないとも限らない。こんなつまらない心配をするよりも、やはり、小徑を暢氣に、てくつた方が、いくらましか知れない。急ぐ道ではなし、この邊から一つ斜に雪のなかを東五十九街まで出て見やうと、私は方角を立て直して、丘の半腹から谷のなかへとまぎれ込んだ。

裸木の小枝に積つてゐる雪が、時々、ばたりばたりと落ちる。小徑の上には橋があつて、橋の上には道がある。私の嫌ひな自働車がその上を走つて通る音がする。私は、どこ迄も谷あひを傳はりながら、うねりくねつてゐる道を、時には、右へ行かなければならないけれども、なるだけ、斜に、左へ左へと歩いて行つた。

そのうちに、丘はだんだん低くなり、谷は次第に淺くなつて、私は廣ツ場へ出た。雪はまたさら／＼と降り出してゐる。はてな、こゝはどの邊かしらと思ひながら後をふり向くと、遥かの丘越しに、メトロポリタン、ミユーゼアムの建物が見える。さうか、大分來たな。少し右によりすぎてゐるやうだ。もつと左にとつて行かないと、思ふところへ出られないと、かう考へて、私は、また幾つかの自働車道を横切つて、雪の廣場を、てくつた。ラバシユースのなかへ雪が溶け込んで、足の先は冷たかつたが、遅いながらも歩くのに骨を折つたものと見えて、體は熱くほてつてゐた。顔にちらつく雪はなんとも氣持がいい。自然のうちに飼ひ放されたやうな、暢びりとした心になつて、面白くつてたまらなかつた。多分は、この都會に活きてゐるものゝなかで、雪にまみれてうれしがるのは、私と、犬ばかりだらうと思ふと、をかしくなつて、私は獨りで、にこ／＼と笑つた。

それにしてもこゝまで來ると、もう、この都會の物音が、がや／＼と聞こえてくる。だが耳には近くはない。遠いどよめきは、木立の向ふの街並のうしろの方から、ほんの微かに聞こえてくる。見まはすと、この公園をかこんでゐる街々の、建物か、丁度、この公園の外に高い壁でも築いたやうに、隙間もなく並んでゐる。そのうちでも、灰色に降りかゝる粉雪の中空に、聳え立つた高い／＼建物は見ものだ。その窓と云ふ窓には、昼間ながらも灯をともしてゐるが、外の光が暗いから、それがまた、あたゝかく、赤く見える。ものを思はせる景色だ。私は、その窓を眺めて、歩きながら考へた。

左の端に見えるのが、ホテル、ネザーランド、それから右にホテル、プラザ、その次の高いのがホテル、グレートノーザン、これは皆、この都會に集まつて來る旅人が、安樂な寢部屋をそこに求めるために建てられたホテルだが、人間の寢るところに

しては、莫迦に贅澤な建物を建てたものだ、さうだ、あすこで人間が寝るんだなア。一間々々に部屋を仕切つて、人には見られないやうに、人の這入つて來られないやうに、なかゝら固く鍵をかけて、恐るゝ如く、憚るごとく、悪いことでもするやうに、人間が、あすこで寝るんだと私は思つた。

そればかりぢやない。あの部屋のなかへ、人に見られて恥かしい物なぞを、こツそりと持ち込んで、それを隠してゐるものもあるだらうし、また、人に聞かれて都合の悪い秘密話を、ひそひそと耳うちかはしてゐるものもあるだらうし、また人に知られてならない男と女とが、聲を殺して痴情の喧嘩をしてゐるものもあるだらう。鼠のやうに隠し食ひしてゐるものもあらうし、烏のやうに隠れ呑みしてゐるものもあゝらう。

人間の、寝る時間と、内證の時間を、あすこの部屋で送らせるそれがホテルの營業だ。私は、ヘヘツ！と妙な聲を出した。

何んと云ふ、これはあさましい想像だらう。然し、銀色の埠に立つて、向ふの空にかゝつてゐる、窓の赤い灯を見ると、不思議にも人間の、押し隠してゐる一面が、私の脳を馳けまはる。

然も、このホテルの後ろにはニユウヨルクの雑百の街があつて、そこには人間ばかりがうじうじと住んでゐる。家の上に家を重ねて、そこに住、小さな壁をめぐらして、そのなかで我と云ふものだけを中心として、人にはなるたけ知らさぬやうに築いてゐるのだが、それらの生活を思ふと、如何にもそれが、私には莫迦らしく見えた。

なぜさう自分と他との間に隔ひをつくつて、お互ひの生活を隠さなければならないのか、それが私にはわからない。いやよくわかり過ぎてゐて、考へれば考へる程くだらない。

そこへ行くと、日本は、まだ幾らか増しだと私は思つた。

私は、先年、日本へ歸つたとき、人の家を訪問するたびに、そこの家の格子戸の前に立つて、それを叩いたものだ。いくら叩いても家のなかから返事がない。そこで、聲を出して、その家の主人の名を呼んで見たが、同じく誰も返事をしない。少し無禮だとは思つたが、格子をがらり引き明けると、けたゝましく鈴の音が鳴つて、私は少なからず吃驚した。

『御免なさい。』と、二三度、聲をかけると、人の出てくる氣色がして、そこの障子がすらりと明いた。

『どなた様で御座いますか？あゝ左様で御座いますか。よく主人がね、お噂を申して居りましたよ。ほゝ！』何が、ほゝ！だかわからないが、先づさう云ふわけだつた。

日本では、人の家を訪問するのに先づ格子戸を明ける。そ

れでも返事がないと障子まで明ける。それでも人が出て來ないと、唐紙を明けて、無斷で二階へ上つて來て、

『ヤア先生。』なぞと、昼寝をしてゐるその家の主人に聲をかける、——さう云ふお客は私の家なぞへはよくやつて來た。

ところが、このニユヨルクとなると、アパートメントの入口には、鍵がなかゝらかゝつてゐる。戸の外の壁に、住んでゐる人の名札を嵌め込んだ郵便函が並んでゐて、その上に、押すと内の鈴を鳴らす鈕が出てゐる。訪問をする人は、その鈕を押すのだが、郵便廻しは一つ押し、ポリスマンは二ツ押し、三ツ目からは誰れが押してもかまはないと先づきめられてゐる。

どうかすると、内證々々の手遊びなぞをやつてゐるときに、部屋の壁の鈴が鳴る。ちりん／＼なぞと優しく鳴るのではない電氣仕掛の鈴だから、びりりりりりりんとくる。なかの人の神經はぴくりとする。びりりりん、びりりりんと二つなる。それツと云ふので、テーブルの上にならべた遊び道具をかたづける。胸がどき／＼する。そこでこちらの壁にある鈕を押し返すと、これも電氣仕掛けで、入口の戸の鍵が、かち／＼と音がして明く。下からは階段を上つてくるものがあつて、やがて、そこの部屋の戸をノックする。なかの人は恐る恐る戸を明けてのぞくと、ポリスマンと思ひのほか、仲間の一人であつたりなぞして

『おい、おどかしては、いけないぜ。』と、なかのものが云ふと、

『ヤア、やつてゐたな。道理で、なか／＼入口の戸をクリックしないと思つた。』なぞと、笑ひ事ですむ事もある。いや、これは想像だが、かう云ふことはきつとあるに違ひない。

だが、さう云ふ時に、なかの人が、部屋の壁の鈕を押して、入口の戸をクリツクするとしないとは、それはなかの人の勝手だ。

『あら、いけすかないねエ。誰かまた來たことよ。ほんとに、あたいは、どきりとしたわ。いゝわよ、かまひはしないわよ、いくらでも鈴をお鳴らし。今晩は留守ですよ。あら、どうしたのあなた。氣が弱いのねエ。なにをそんなに、まご／＼してゐるの？』と、云ふやうなことを女が云ひ出すことも、まんざらないとも限るまい。これも私の想像だが。

然し、かう云ふ時には、外に立つて、鈴を押してゐる訪問客は災難だ。往來から眺めた時には、窓に灯が照つてゐたから、内には誰か必ずゐるに違ひない。それだのに、いくら鈕を押しても返事がない。氣になるから、また往來へ出て、窓を見上げると、燈つてゐたはずの灯は、今度は消えてゐて、なかは眞ツ暗だ。はて、不思議だなア、てつきり、それに違ひないと、奴さん青筋立てゝ、押すは押すは、その鈕を、へつたやたらに押

したところで、戸が明かなければ這入れない。かう云ふたちの訪問客を、この土地では、ベル、パリシヤアと云ふ。鈴を光らせる人と云ふ意味だ。

『ほんとに、憎らしいのねエ、矢釜しいから鈴のなかへ紙をつめましやう。あなた、丈が高いから、一寸立つて、つめて頂戴よ。』と、かうなつては、もう朝迄その釦を押したところで、しかたがない。いゝ加減にあきらめて、歸るより外に道はない。

留守を使ふにしても、日本のそれに比べて、如何に、この二ユウヨルクの人々の使ひ方の殘酷なことよ。

外の戸をク、リツクしなければそれですむ。女中を出して、旦那樣は只今御不在で御座いますと云はせる必要もなにもない。壁の釦を押し返すと、押し返さぬとは、部屋にゐる人の勝手だ。他の人の知つた事ではない。こゝではすべて自分の都合が本位だ。

けれども、障子と襖とで、なかを仕切つた家に産れて、育つて來た日本人は、これ程、自分の部屋と云ふものに結びつけらた考へは持つてゐない。日本人の自分に對する考へと、こゝの人たちの自分に對する考へとの間には、紙を粘つた障子と、セメントコンクリートで固めた厚い壁ほどの差があると、私には思はれる。

日本人の自分の都合と云ふ考へは——若しそれがあるとすれば、さう古い以前からのことではあるまい、それは彼等が西洋式の家を建てて、西洋風の間取りをして、そこに住むやうになつてからの、後の時間に較べる事の出來る程な、極くあたらしいものだらう。

昔の日本人は、大抵は他の都合によつて、自分の都合をきめてきたものだ。いや、それは昔ばかりではない。私が二年日本にゐた、最近でも、先づ他の都合を先にすると云ふ習慣を彼等は今もつて重んじてゐると私には見えた。人のために遠慮をする、人のために氣兼をする。人のために機嫌を取る。『人のため。』と云ふこの觀念は、私の知つて來たどの外國人よりも、日本人が一番強いと云ふことは、まさに事實だ。

だから一面から云へば、日本の社會交渉は面倒だ。氣詰りだ。不思議な込み入り方をしてゐる。日本にゐれば、そこが日本の厭なところで、この國へ來れば、そこがまた、日本のいい處だ。人を訪問する度に、菓子折を持つて行くのは嫌ひだつたが、人が訪問して來る毎に、菓子折を貰つた心持は、今になつて思ひ出せばさう悪いものでもない。

日本の家の造りが、おツぴらきであるやうに、日本人の心も實は、おツぴらきだ。それは彼等の着物を見ても一の通り、お

ツぴらきだ。少し懇意になると、日本人はすぐ、自分の身の上話をする。もう少し懇意になると日本人は腹のなかをぶちまける。自己の心を空虚にして、他の心との融合をはからうと云ふのが、日本人の交際だ。これが女と男との間なら、すぐに心中話が持ち上るところだ。日本人は心中の好きな國民だと云ふことを、私は一度、書いたことがあつたとたしかに記憶してゐる。さうしてその時、日本人の最も不得手とするところはインパアソナルな交際だと私は書いたと覺えてゐる。さうして西洋人のインパアソナルな交際を私け滅茶に褒めたと思ふ。物は見方だ。見方は立場だ。立場をかへて眺めて見ると、日本人の竹を割つたやうな氣性。お互ひに自己を懺悔して、お互ひに私なしと云ふ態度は實に立派なものだ。西洋人が、自己と云ふものに屈託して、自分と云ふものゝまはりに圍ひを立てるから、自然、腹と腹との交際は出來ない。勢ひ、うはべだけで、さすり合ふやうに、即かず離れず、所謂、非個人的な交際をしなければならないのに比べると、日本人のやり方は、本當に内に徹した非個人的、即ち、自己と他と、ともに立てない君子の交りと云ふべきである。西洋人の外觀的なインパーソナルな交りとは、その精神が違つてゐる。

日本人の臭袋までぶちまけ合ふこの心持を見そくなつたのは私の至らないところであつた。お詫びを申す次第であるが、私は今の日本人が自覺なくして、たゞ舊來からの風習でやつてゐる、『實は、あの、斯様々々で』なぞと、その實の字のつく、こんな、打ち明け話しなぞを褒めたのでもなければ、そんな事に、この頭は下げはしない。

ところで、このアメリカの社會的交渉を見渡すと、これはまた日本とは大ひに違ふ。元來アメリカ人と云ふ國民は、人に遠慮をしない國民、人に氣兼をしない國民、人の機嫌なぞにはかまはない國民、無作法な國民、我儘な國民、傍若無人な國民と昔から相場がきまつてゐる。どうしてこの國民が、そんなに、無禮千萬な國民になつたかと云ふことを考へて見ると、なかなか面白い。

コロンバスがアメリカ大陸を發見してから後に、こゝに移住したのは西班牙人で、それから佛蘭西人や、和蘭陀人や、英國人が移住した。日本に近い、カリホルニヤ州なぞへ一番はじめに入り込んだのは西班牙人で、あの邊の古い都や町の名は、多くは西班牙語で名づけられてゐるのを見ても、それがわかる。今でも西班牙人はキユバ島や、メキシコの方へ追ひこくられてそのダンスと女だけがニユーヨルクあたりでは持てゝゐると云ふ有様だ。ルイジアナ、ニユー、オーレアンスには、今でも佛

蘭西系の市民が多い。そこの都の舊家なぞは、大抵は佛蘭西人の子孫である。北の方へ殖民した佛蘭西人は、その後、カナダの方へ追ひこくられて、今では、クベツクにその子孫が住んでゐる。このニユウヨルクは、昔の名をダツチタウンと云つて、和蘭陀人の始めて開いた都だつた。だからこゝでの舊家にはやはりその子孫が多い。然し今では、アメリカのパイオニヤと云へば、ニユーイングランダア、つまりボストンを中心として住んでゐる英國人の子孫であるやうに思はれてゐるが、南の諸州に移住した英國人もなかなかどうして古いのである。北と南と兩方とも、この連中の子孫は、話をするときに妙な訛を出すから直ぐわかる。日本の所謂、京都訛りと、云つたやうなもの、いひ方をする。こいつで女なぞに喋られると、いゝ加減英語になれた外國人でも一寸閉口するらしい。日本人なぞには、この連中に電話をかけられて、

『なんだ、あの女の英語は、鼻にばかりかゝつてゐて、さつぱりわからない。』なぞと、怒り出すものさへある。

それは兎も角、この連中の先祖たちは、この新大陸の入口で先づ、以前から渡つてゐた、西班牙人や、佛蘭西人と爭つた。と同時に、大昔から、このアメリカに住んでゐた赤銅色の皮膚をしてゐる、所謂、印甸人と闘つた、さうして追々國を開いて行つたのだが、その後で渡つて來たのが獨逸人だ。これはアメリカの入口で排斥されて、西の方へ追ひこくられて、シカゴ以西に彼等の都を建てるやうになつた。それから次に渡つて來たのが、スカンヂナビアンで、これもまた、東の方は、もう、住むに餘地なく、と云つて、南の方は溫度が高く、寒い國から出て來た彼等にはその氣候が適しない、そこで、ミネソタから、南と北とのダコタ州に、彼等の農園を開墾することゝなつた。スカンヂナビアンと前後して這入つて來たのが、伊太利亞人だ。こいつはひどく排斥されて、東部の方では、奴隷同様のあつかひを受けた。住むに地もなく家もなく、彼等は追はれ追はれてカリホルニヤ州へと入り込んだ。日本人を排斥するサンフランシスコ一帶には、この伊太利亞人、それからポルトガル人、それからギリシヤ人、それから世界中での嫌はれもののユダヤ人なぞといふ、いづれも、前から移住してゐたものに追ひこくられた連中が、やつと、そこへ落ちついた。北の方シヤトルには、露西亞人なぞが多くあつまつてゐる。メキシコ境の沙漠には今でも西班牙系の牧民が多く住んでゐる。山國の、コロラド、ワイオミング、モンタナには、なる程、人も住んでゐるが、多くは一つ鑛脈でも掘りあてやうといふ氣まぐれものでなければ、あんなところには止まらない。ユタの沙漠には、モルモン教徒が

追ひ込まれて、歐洲に添ふて都が建つた。

さて、そこへ、チヤイナメンが入り込んだが、これは、とうとう都を立てるところがなく、今に至るまで、あつちへ、追はれ、こつちへ追はれ、それでも家いや、シカゴにも、ニユウヨルクにも支那街を建てゝゐる。後れ走せながら、罷りつん出たのがジヤツプだ。へいまことにお氣の毒さま、大入りで御座いましてな。なんなら立見では如何で御座いますかと、布哇の片隅にやつと邑を作つてゐる、カリホルニヤへ入り込んだものは人間あしらひされてゐない。ジヤツプ入る可らず、なぞと云ふ高札を立てられてゐる。

それで、土着の印何人は、どこにどうしてゐるかと云へば、山のなかや、沙漠のなかで、もうその種族も絶えかゝつてゐるではないか。

かう云ふ風に、このアメリカ大陸に住んだものは、昔から、誰にも屬してゐない土地を出來るだけ廣く繩張りして自分のものにしたものだ。つまり、早いもの勝ち、我れ勝ちに繩張り込んだ。

彼等の昔の法律は、六連發のピストルだ。勝つたものが勝だ、取つたものが取り得だ。突き飛ばし、はね飛ばし、なぐり飛ばしても、人のものを自分のものと定めれば、それは自分のものだと、かう彼等は考へた。

人のものは自分のもの自分のものは自分のものと云ふ考へは、印何人を追つぱらつて、その土地を分け取りした、この國の人たちが當然持つた考へである。

この國の人は、人のものを取る時には遠慮はしない。然し自分のものとそれがきまれば今度は死んでも放さない。

だから、アメリカ人に、日本流の深切なぞを盡してやると、次にはそれを向ふから要求してくる。日本流の氣兼なぞをしてゐやうものならば、これはいゝ機會とばかりに難癖をつけられてしまふ。日米間の外交がそれのいい見本だ。

何もそれは、アメリカ人が外國人に對する時ばかりではない、アメリカ人同志でも、彼等はさうして爭つてゐるのである。向ふが強ければ隙につけ込む。向ふが弱ければ踏み倒してでも人のものを我がものにする。まことにいい心掛けだ。それでいいわけだ。世の中のものと云ふものは、自分のものにしなければ誰かのものになつてしまふ。元來が誰のものでもないのだから、自分のものにして一向差支へないではないか。一應御尤もで、しかし、アメリカ人は一度だつて、他の都合を本位としてものを考へたことはないやうに私には印象されてゐる。親子のなかでも、夫婦のなかでも、兄弟のなかでも、彼等はいつでも自分の都合

を本位にしてゐる。

世の中のものといふものは、元來が誰の物でもないのだから、御入用ならば、殘らずでもお使ひなさい。いや、それでは濟まないこれだけ使はして頂きましやうと、互に讓り合ふことを人間の道としてゐた日本人とは大分そこに隔りがあるやうだ。

遠いと思つて眺めてゐた、ホテルの高い建物は、私の歩くにしたがつて、だん〳〵目の前に聳えて來て、遂には、あふ向かなければ、その窓の灯が、見えない迄に近寄つた。

雪の雫の滴れて來る常盤樹の、雪を被りながらこんもりと繁つてゐる下を通つて、私はいつか目的の、東五十九街の角の、モニユーメントのところへ出てゐた。

茶亭でした會話

晝のランチもたべないで、雪に埋もれた公園を横ぎつたのだから、私のお腹は北山となつてゐた。公園の白銀世界のなかに於ては、大分、聖人らしい心持を持ち得たが、私も同じく人間の悲しさには、ものを食はねば活きては行けない。『どつかこゝらに茶屋あらば』と古い芝居の文句ではないけれども、もの食ふところを、あすこにしやうかこゝにしやうかと思ひまはした末、この公園に程近い東六十街に、以前から私とは知り合ひの、ジユリアナ、バスビーと云ふモデル上りの美人が茶亭を營んでゐる事を思ひ出して、その茶亭へと足を向けた。

二街區程のところを歩いて、やがてそこの前へ立ちどまつて大きな一枚張りの硝子窓の外からなかをのぞき込むと、なかはあまり込んでもゐない。一番奥のテーブルに、ジユリアナは、二三人の女たちと一つの大きな圓テーブルをかこんで、何かお喋りをしてゐたが、なかゝら外をすかして見て、私の姿を見つけたか、白い手で、おいで〳〵をしてゐる。

私は、外套の雪を拂つて、序でに帽子の雪も拂つて、ラバシユースの雪を、そこの入口で、ばた〳〵と踏み落して、戸を明けて、のつそりと這入つて行つた。

そこらに居合はした人々は、顏色の違つた外國人が這入つて來たので、この野郎、何をしに來たかといふやうな、目を私に向けてゐた。私は、ずつと通つて、ジユリアナたちの圍んでゐた、そのテーブルに向つて、命じられたまゝに、そこにあつた椅子にかけた。

ジユリアナは、人々に私を紹介して、

『さて近頃は何を考へてお出でです』と、これは例の南國の訛りを持つた言葉できいた。この美人は、但し、昔は素敵な美人だつたさうだが、今ではもう四十の坂を越えて、丁度今が、日

本の形容で云ふならば、桃櫻の盛りも最早少し過ぎたと云ふところだ。だが、髮はブロンドで、ぼつでりと肥つて、日本のお婆アさんとは餘程趣きが違ふ。

『近頃は、西洋人の內面生活と、東洋人のそれとの間に、どの位な相違があるかと云ふことに就いて考へてゐるのですが。』と私は答へた。

『東は東、西は西と、昔から異つたもののやうに考へられてゐるけれども、心のなかはそんなに違つてはゐないでしやう。』と、私の左にゐた、廿五六の顏の青い女が云つた。

こいつ古い文句を並べるなと、私は思ひながら、その女の顏を見て、

『そこに違ひがあります。』と、答へた。

『どう違ひます。』と、今度は、私の右に掛けてゐた、五十ばかりの目のぎよろりとした婆さんが訊いて來た。

『待つて下さい手短かに答へますから』と、私は、默つて考へた。うつかり喋り出さうものなら、貧い英語の力では、とてもこの大問題を、手ぎはよく向ふに納得させるわけには行きさうもないと、かう思つたからである。何か、こいつは比喩を用ひて一刀兩斷に埒を明けるのでなければ面白くないがと、私はテーブルの上を、きよろきよろ見まはした。どうも自分の考へを說明するのに適した品物はそこにはない。私は致し方がないから、一つの急須を指して、『これを一つの宇宙と見る。ようござんすか？』と、かういつた。

皆は、默つて、私の顏と、その急須とを、見くらべてゐる。

私は、それの柄を取つて、

『かうすれば、この宇宙は、凡て、この柄によつて支へられてゐる。この柄を私と見れば、この宇宙は、凡て私に屬してゐる。』

云ひながら皆を見ると、どうやら皆は分つたやうだ。そこで私は、今度はその急須の口の方を持つて、

『然し、かうすれば』と、言葉を續いで、『この宇宙は凡て口によつて支へられてゐる。この口を、あなたとすれば、私たちは、凡てあなたに屬してゐる。』と、なかなか說明は骨が折れる。

皆は、私の言ふところにうなづいた。

『すると、この宇宙は、あなたにも、また同時に、私にも屬してゐる。お互ひのものに屬し合つてゐて、實は、あなたのものでも、あたしのものでもない。私たちは皆、宇宙に屬してゐる。どうです。』と、私は、念を押した。

女たちは、どうやら煙に卷かれたやうだ。

『それ故に、東洋人は、かうした考へ方から人間の道を定めた。私のものはあなたのもの、あなたのものは私のもの、夫のものは妻のもの、妻のものは夫のもの、妻は夫のためにその貞操を守り、夫は妻のために、その節操を守ると云ふのが、東洋人の貞節に對する考へです。』と、かう私は、少し、さうではないやうだが、先づ、さう云ふことにした。實は日本の男は、妻のために、あまり節操を守りはしないのだが、さう云ふ事にしないとこゝのところ工合が惡いから、この女たちのよく實情を知らないのにつけ込んで、さう云ふことにきめてしまつた。

『私も、それが本當だと思ひます。』と、ジユリアナは贊成した。

彼女がこれに贊成するのは、少し、私には、くすぐつたいが、それとも近頃は、さうした心になつてゐるのか、どうもそこは疑問だつた。

『だが、待つて下さい。』と、私は、皆を眺めて、『私の知つてゐる限りに於ては、このアメリカでは、妻の貞操は、妻自身に屬してゐて、それは自分のものだから守るので、夫のために守るのではない。それを守ると守らないとは妻の勝手だと云ふことですが、さうですか？』と、いや、さうですかどころではない。私は知りぬいてゐるのだが、そしらぬ顔をして、實は痛いところを一本參つた。

女たちは、ぐつとつまつた。

すると先程からジユリアナの隣りに默つて私たちの話を聞いてゐた婦人らしい三十女が、

『でも 日本では離婚された女は、裸で追ひ出されると云ふことではありませんか。』と、いつた。

『そんな事はありません。』と、私はそれを否んだ。

『それでは、どれだけのものを女に與へて離婚しますか。』と、突ッ込んで來た。

『どれだけのものッて、女の持つて行きたいだけ持つて行かせます。』と、どうも、少々旗色が惡くなつて來たから、私は、かう返事をした。

『それでは、私は日本の紳士と結婚しましやう。』と、彼女は笑ひながらいふ。

『ところが、あなたのやうな考へを持つて結婚する女は日本にはありません。この國の夫婦のやうに、いつも自分と夫との財産しらべをやつてゐるやうな、そんな夫婦は日本には、昔はなかつたのです。』と、私は、うまく切りぬけた。

話は、國々の、異つた夫婦關係にと亘つて行つたが、その婦人風の女の話によると、彼女の故國の獨逸では、今でも、やはり夫婦の間の財産なぞと云ふものは、はつきり分け隔てはしない

と云ふことだつた。どうしてもアメリカは、そこが、いやに水臭いと云ふことに、どうやら話は納まつた。

『いや、私にはまだかつてハスバンドはないから、その方の事はどうでもよいが』と、例の目のぎよろりとしたお婆アさんが

『それでは東洋人は、若しそこに、自分が取つても差し支へない空隙があつたとしたら、どうしますか。』と問題をあらためて訊ねて來た。

『取ります。』と私は答へた。

『若し、その空隙がなかつたならば。』と、

この婆さんなか〳〵どうして油斷がならない。うまいところへ當つてくる。

『空隙はどこにでもあります。』と。私は、もう無茶に出た。

『ところがそれが、このニユウヨルクにはないのです。』と、婆さん、しみじみ、云ふ。

私は笑つた。

『つき飛して、空隙をこしらへて、それを取つたらどう云ふものです。』と、私は云つた。

皆はあたしの顏を見てゐる。

『もしその方が他のためになるならば。』と私は、後へ、つけ加へた。

婆さんしばらく考へてゐたが、にこ〳〵笑ひながら立ち上つて、

『どれ、それでは一つ、他のために、空隙を得て來ませう。あなたの云ふことは、なかなか面白い。』と、云つて、そこを出て行つた。

後できくと、この婆さんは、株式の仲買ひをしてゐる人ださうな。

かうして話してゐるうちに、黒ん坊のウエートレスは、食事を運んで來た。私は、先づ、自分のお腹の空隙から充たしにかかつた。

茶は、ジユリアナの手でつがれた。他の奴たちは、何か自分たちの間だけの話をしだした。私は食べながら考へた。

握つて放さない奴のは、撲つて放させるか、くすぐつて放させるか、或はもつと與えると見せかけて、手をゆるめたところをひつたくるか、ともかくも放させると云ふことが、彼等の心を安樂にしてやる唯一の道だ。自分のものだと思ふから、人間は慾を起して跪くのだ。何でもこれは、自分のものだなぞと云ふものは世の中に唯一つもないといふやうに、人間を教育し直さなければ駄目なのだ。

だが待つてくれ、世の中を金と女の二つに分けて、金の方はそ

れでいゝとしても、女の方もそれでいゝわけのものか知ら。自分に屬した女なぞといふものは一人もゐない。來る女は可愛がつて、去る女はしかたがない。女は天下の廻り持ち。――それではまるで赤色露西亞にでもありさうな社會をこしらへてしまう。少し間違つてゐるやうだな。然し、どこが間違つてゐるのだらう。これを若し女の方から云はせれば、男は天下の廻り持ち。――人の亭主だらうが、そんな事はかまひはしない。おい〳〵冗談ぢやない。これは何も赤色露西亞に限つたことではない。日本の社會だつて、またこのニユウヨルクだつて、ありのまゝを、この目で見れば、この目には、さうした社會が映つて來る。果して人間と云ふものはそれでいゝものだらうか？

友人の女房が浮氣をしてゐる。友人はそれを知らない。誠に氣の毒の至りだ。自分が他し女と浮氣をした。女房はそれを知らない。まことにいゝあんばいだ。一たいどちらが人間にとつては正しいのだ。

私自身に云はせれば、人樣の女房は、その人に氣の毒だからお斷りをする。自分の女房には可愛さうだから打ち明けずに置く。萬事、他のためを思ふからである。ところがこのアメリカでは、さうではなさゝうだ。亭主が人をよくしてゐれば、間夫の奴は、しまひには、その亭主の目の前で、その女房と巫山戯ちらす。亭主が文句を云ふ。女房は『ナッチユア、ビジネス』餘計なお世話と、つんとする。亭主がたまらず、女房の相ひ顧みんことを希ふと、『お前が不自由だからつて、そんことを私が一々、縣念してゐられるかね。私の體は、私のものだわね。』と來る。どこが夫婦なんだか　私たち日本人の目には、さつぱりわからない。然しそれはまだいゝうちだ。少し女房に金でもあると、女房は、一軒別に持つ、さうして勝手なことをする。尤もさう云ふのばかりもないかも知れないが、兎角、この國の女房どのは、御自分の御都合本位だからね。

ふと、私は目の前の、ジユリアナの顏を見た。さうして、この女の亭主、ジヤック君が、私に愚痴を云ひながら、こぼした二たつぶ程の涙を思ひ出した。

『何をあなた、私の顏を珍しさうに見てゐます。』と、彼女はきいた。

『いや、前に見たときよりも、お若くなつたやうだから。』と私はいつた。

『まことにどうも難有う。と云つてランチは御馳走と、いつの間にきめたでせう。』と彼女は笑ふ。

食事のあとで、私は烟草の御馳走をうけてまたしばらく無駄話を交へたが、

『まだ外にも、行かなければならないところがあるから』と、別れをつげてそこを出た。

雪はそろ〲やんでゐた。日の短かい最中のニユウヨルクはもう往來は暗かつた。何時だらうと時計を見るとまだ四時にはならない。建物が高いから、この都は日の暮れるのが早い。

もと來た道を引きかへして、第五廣小路の角まで來るとこゝは自働車が雪崩のやうに通つてゐて、なか〲向ふの歩道へは、足をはこぶ隙もない。自働車にまざつて、乘合自働車もやつてくる。その乘合自働車の二階を見上げると、この寒空に晒されて、そこに幾人かの人が乘つてゐたが、なかに若い男と女が抱き合つて何か熱心に話しながら、肩のゆれるたびごとに、キツスもしかねまじき有様だ。外は冬でも、彼等は春の夢心地だ。

こんな圖は、西洋にゐればちよい〲見せられるので別に珍らしくはないが、

『これは、俺のガールだ。私たちにかまうな。他人の知つたことではない。』と、御自分たちの御都合から割り出して、往來のまんなかで、これはどうも恐れ入つたわけである。

然し、これが、日本ならばどうだらう。誰も何んとも云はなからうか。

『月の光にあたりをかねて、はなれればなれの二人づれ。』と云ふ都々一の文句さへある。

『冗談ぢやアねい。見つともなくつて、手なんか引いて歩るけるけい。』と、今でも、向ふ鉢卷のいなせな兄いには、さうした氣分がたつぷりある。

女と往來で立ち話なぞするのは恥としたものだ。これは皆、先づ他人の思惑と云ふものに重きを置いて來た、東洋風の道德から出て來たものではあるまいか。

私は二年の間、日本にゐて、日本の女と連れ立つて歩くたびに、往來の人々は、まことにお氣の毒のやうな心持がした。さうしてそれは、このニユウヨルクへ再びやつて來たのちでも、女と一緒に歩く度に私は同じくさう感ずる。外國人の私が、この國の女なぞと一緒に歩くと、この國の獨身ものに對して濟まないやうな氣がする。私はいくらこの國に長くゐても、要するに外國人なんだ。いくらこの國の習慣に染つても、私のハートは、いつも人　氣兼をする日本人なんだ。さうだ、それに違ひないと思つて、あたりを見まはすと、何だか往來の人がこゝは、お前の立つてゐるところではないと云ふやうな顏をして、私を睨んでゐるやうに感じた。

丁度、往來を横切る自働車があつたので、これと並んで私は馳けて、やつと向ふの歩道へ着いた。一外國人は、往來を突つ

切るのにさへ、何かの力を借りなければならないやうな氣がした。

私は、往來の人々に顏を見られるのが嫌だつた。また私は、往來の人の顏を見るのが嫌だつた。どうしたつて、この一日本人の心は彼等には、わかりツこないと思ふと、私は寧ろ、人を見ないで歩く方が氣樂だつた。煉瓦や、石や、鐵や、雪は、私の目に映つた。然し、下ばかり向いて歩けば、夕暮れのニユウヨルクの街頭に、人ツ子一人もゐなかつた。

―完―

續々々近世名匠傳

村松梢風

森寛齋

(一)

森徹山は、森貴信の子であるが、父の弟森狙仙に養はれて其の繼嗣となつた。父も叔父も大阪に住まひ、どちらも狩野派の畫家であつたが、養父となつた狙仙は、猿を描くことを深く研究し、自ら狙仙と號した程だが、遂に其の獨壇の技に依つて天下に名を擧げた。當時、關西の畫壇に、別に一大光彩を放つてゐた巨匠は圓山應擧であつた。其の寫生の畫風は一代を風靡してゐた。徹山は、父や養父が執つて來た狩野派の流れを汲まずして、早くから應擧の門に入つた。そして遂に應擧門下の十哲の一人に擧げられるに至つた。後更に西洋畫を學んで、稍其の風を變じて別に一格を成し、人物花卉禽獸を描くに工みで、用筆秀潤なるを以て藝林に推重されてゐた。應擧の沒後四十有餘年、其の間に他の高足は漸次世を去つてしまつたので、今は徹山獨り大阪に在つて、圓山派の法灯を掲げて後進を教授してゐるのであつた。

天保六年のことであつた。或日一人の青年が徹山を訪れて來て、弟子にして吳れと言つた。自ら語る處を聞くと、長州の藩士石田傳内の一子幸吉といふ者で、幼少の時から畫が好きで、是れ迄も田舍で獨學で研究してゐたが、畫を以て身を立てることに決心して、藩廳の許可を得、兩親も同意の上で、徹山先生の教へを受け度いと思つて遣つて來たと言ふのであつた。身の丈秀れ、筋骨逞ましく、容貌も一と癖有りげな面構へである。年齢を訊くと、二十二歳と答へた。

徹山は、青年の顏を凝と見詰めて言つた。

「貴君は、武士の家に生れ乍ら、何の因果で乞食の仲間に入らうと云ふのです?」

「先生のお言葉はどういふ意味で御座いませうか?」

「さればさ。世間を見るのに、畫家ほど貧しい生活をする者は無い。だからよく世人が畫家を罵る言葉に繪かき乞食と云ふではないか。それは勿論馬鹿にした言葉だ。併し、よく考へて見ると、是れは吾れ／＼が常に肝に銘じて置かなければならない言葉である。何故かといふのに、苟も畫家にならうと思ふならば、決して少しでも名利を貪つたり、好い衣物を着たり、旨い物を食べたりし度いといふやうな邪念があつてはならないのである。さういふ物慾があつては佳い繪は畫けない。畫家になるには、常に困窮しても迷はない、變へないといふ覺悟のあるのが第一義である。處が、近頃の人はさうでない。だから一向名人が出ないではないか。不幸にして世人の嗜好にあはなくて一枚も繪が賣れなくても自身に安んじて、盟つて畫三昧で世を送る覺悟がなければ優れた畫家にはなれない、詰まり、繪かき乞食を以て自ら甘んじる程の覺悟がないくらゐならば、最初から畫を志さないはふが增しなのぢや。お見受けした處、貴君は、體格と云ひ器量と云ひ別に不足は無い、武士で暮せば其の儘で立派に一人前の働きの出來るお人ぢや。それだのに、何を好んで畫家などになつて、餘計な艱難苦勞を求めようとなさるのです」

「御教訓はよく解りました。併し先生、私はどうあつても畫を學び度いので御座います。只今のお諭しは、私も豫て其の覺悟を有つて居ります。鄕里に居る時で御座いました、山口の湯田といふ處に角力の興行がありましたので私も看に參りました。すると若い角力取が集まつて朝稽古をして居りました。見ると各々柱へ額を打ち付けては力を出す稽古をして居るのです。額が破れて鮮血が迸つて出ても、平然としてやつて居ります。私はそれを見て非常に感激致しました。一藝に達する迄には、是れ程に身を苦めて修業をしなければならない、安逸を求めて居

ては駄目だと覺りました。其の時から、私は畫を研究する爲めには此の身をどれ程苦しめても厭ふまい、と決心を致したので御座います。幸ひ御覽の通り體だけは人一倍丈夫に生れ付いて居ります。どのやうな艱難でもそれに負けるといふ心配は御座いません、何卒、曲げて私の願ひをお聞き入れが願ひ度う存じます」

　青年は思ひ込んだ體で言つた。挺子でも動かないといふ氣組みが見えた。徹山も何となく賴母しい氣持になつた。

「それまでに云はれるなら、兎も角も居て御覽なさい。併し、此の通り狹い家ぢや、お身が寢る場所もありませんぞ。それから、案外用事が多い、家事も手傳つて貰はねばならん。それも御承知か？」

「有難う存じまする、お言葉も勿論心得て居ります」

　青年は喜び勇んで答へた。其の日から、石田幸吉は徹山の家に内弟子となつて住み込んだ。併し、彼の役柄は、弟子といふよりも寧ろ下僕といふはふが中つてゐるくらゐであつた。晝の間は、客の取次ぎ、臺所の用事、使ひ走り、其の他何くれとなく雜用に追ひ廻されるので、到底繪筆を持つ暇は無い。おまけに家が狹いので彼は裏の物置小屋で起き臥しをしてゐた。夜は其の小屋へ這入つて繪筆を取つた。小屋の廣さは二坪位だが、一時大工の仕事部屋だつた後と見えて鋸屑などが一杯散らばつてゐた。幸吉は古筵を一枚土間の隅に敷いて、土風爐と土鍋を側へ備へて自分で飯を炊いて食つてゐた。夜も、亥の刻を過ぎて師匠が寢につくのを見てからはじめて小屋へ退いて繪筆を握るのだつたから、眠る時間は殆んど無かつた。衾をかついで寢るなどといふことは無論なかつた。體が疲れて睡たくなると、壁に凭り掛つた儘でウト〳〵とやるだけだつた。夏の間はまだよかつたが、冬になると辛かつた。小屋の入口に立てる戸が無かつたので、蓆を上から吊して置いた。が、風が吹く度びに蓆がフハ〳〵と動いて、凍て付いた寒氣が用捨なく吹き込んだ。冬の或晩、幸吉は寒さを耐らえて繪筆を持つてゐたが　其の寒さ以上の睡魔に襲はれて、何時とも知らず其の場へ眠り臥してしまつた。やゝ暫らく經つて明けがたの寒さを感じて眼を醒ました。餘り襟元が冷めたいので手をやつて見ると、夜半から降り出した雪が蓆の隙間から吹き込んで、頭髮の上に二寸位の厚さに積つてゐた。

　さういふ苦學を彼は續けた。畫の進歩は師の徹山も舌を卷く程だつた。後には徹山は幸吉の前途に多大の望を囑して、我子を見るやうに愛してゐた。或時徹山は其の弟子を一室に呼んで言つた。

「お前が此家へ來てからもう四年になる。僅かの間によくそれほどに上達して吳れた。私の門下には俊才が少なくはないが、眞に私の衣鉢を傳ふべき者はお前を措いて他には無いと思つてゐる。今後失敗さへなかつたら、お前に依つて圓山の門風を揚げる時節があるだらう。どうか此の師匠が、人を見るの明が無かつたと云はれないやうにして貰ひ度い。處で、一つ相談がある。と云ふのは、私の同門の人々も近年は皆故人になつたので、今京都には圓山派の名ある畫家は一人も居ない。私は常にそれを殘念に思つてゐる。自身で京都へ行つて畫塾を開きたいとも思つて見たが、もう何分年を取つたので私ではそれができない。其處でお前に賴むから、今から森の姓を名乘つて、京都へ行つて圓山の旗幟を揚げて貰ひ度いのだ」

幸吉は驚いて、自身の微力では到底其の任に堪へないからと辭退した、が、師匠は許さなかつた。幸吉も遂ひには師の恩に感憤して其の言葉に隨はないわけにはいかなかつた、

彼は改めて森寛齋と名乘つて、筆硯を載せて京都へ上つた。

其の時寛齋は二十五歳であつた。

（二）

寛齋は、京都へ來たけれども、其の抱負を實現することは容易にできさうもなかつた。京都には、岡本豐彥、松村景文などの老大家がまだ存命でゐた。其の他南宗畫の、小田海僊、貫名海屋、浦上春琴の如き名手が、それ〳〵覇を爭つてゐた。さういふ中へぽつと出の無名の寛齋が飛び込んで來たとて、誰れも顧て吳れる者は無かつた。最初はどうにか門戶を構へて見たけれども、何時になつても繪は一枚も賣れないので、直きに其の家も張り切れなくなつて、師匠徹山の親戚で佛光寺通堀川の田中藏之丞といふ人の處へ居候に轉がり込んだ。處が、此の田中の家が矢張り火の車だつた。土藏があつたけれど、中は空虛(かつぽ)で何時でも其の扉が明けッ放しになつてゐた。寛齋はそれを見る度びに可笑しくて堪らなかつた。

或時寛齋は主人の田中に向つて眞面目な顏をして言つた。

「御主人、私は近頃名歌を詠みましたよ」

主人も和歌は少しく嗜みがあるはふだつたので、

「へえ！、どの樣な歌ですかな？」

「斯うです。——見わたせば質おく草もなかりけり藏の戶前の秋の夕暮——とは如何です？」

すると主人は眞赤な顏をして、

「他人の處へ食ひ潰しに來て居ながら冗談も休み〳〵にして貰ひ度い」といふので大層腹を立てた。寛齋は平謝りに謝まつて

勘辨して貰つた。

寛齋は、京都へ來てからも、時々自作の畫を師匠の手許へ送つては觀て貰つてゐた。處が、二年餘經つて、天保十二年に師の徹山は沒してしまつた。寛齋は實の父を喪つたやうに哀しんだ。大阪へ歸つて懇ろに追福を營んだ。

師を喪つた後は誰一人相談相手はなかつた。自分獨りで研究するよりほかはなかつた。此の頃から彼は悟る處があつて南畫をも深く研究した。彼の畫は圓山派の巧緻な寫生の筆に、南畫の氣韻が加はつて來た。

彼は旅行もした。そして、名山大澤を歴遊して、胸底に無限の丘山水を貯へることに努めた。此の遊歴は勿論畫をうり〲歩くのだが、無名の旅繪師を何處でもさう歡迎してくれるわけはなく、嚢中常に冷やかなので、しみ〲と世路の艱難を味はされるのだつた。

數年を旅で費して寛齋は京都へ歸つた。

嘉永六年のペルリの來朝は、夜半の警鐘の如く我國民を長夜の眠から呼び醒した。國論は俄かに囂々として沸騰した。徳川二百年の太平の礎が忽ちぐら付き出した。開港佐幕・尊王攘夷の二派の軋轢は日を追うて熾烈になつた。遂ひに安政戊午の大獄を出現するに至つて、怨恨の聲が天地に瀰漫し、櫻田門外の慘劇を手始めに、世間は血腥い報道を迎へることに忙れ日も足らぬ有様となつた。

勤王の志士は期せずして京都に集まり、互ひに相往來して倒幕の秘策を暗々裡に繞らすのであつた。森寛齋も其の一人であつた。

彼は飽く迄も正義の人であつた。常に京都に住んでゐて、王室の式微を目擊するにつけても、悲憤の情を禁じ得なかつた。偶々大義名分を唱へる聲が興るが否や彼は直ちに共鳴した。そして繪筆を投じて、生死を國家に委ねる覺悟を決めたのであつた。

寛齋は其の頃佛光寺通に住まつてゐた。そして日夜王事に奔走してゐたが、畫家であるので、幕吏の嫌疑を蒙る怖れが比較的少なかつた。そこで彼の家は多くの場合同志の者の密議の場所に利用されてゐた。勤王の志士の中では、寛齋を識らぬ者はなかつた。其の中でも、福岡の平野國臣、聖護院宮家の臣河瀬太宰、彦根の谷鐵臣、備前の藤本鐵石、或ひは小室信夫、また長藩では廣澤兵助、山縣狂介、品川彌次郎などは最も深く往來した仲であつた。其の他にも、宮家の臣、公卿の諸太夫などで苟も勤王の事に携はつたほどの者は大概寛齋と交際があつた。當時勤王黨の領袖と云はれた久我家の諸太夫春日讃岐守、或ひ

は有栖川宮の臣、飯田忠彦、二條家の諸太夫小林良典の如き人々もみな寛齋と周旋する所があつた。

或時山縣狂介と品川彌次郎が遣つて來て、寛齋に向つて

「足下を一つ煩はしたい事がある。毛唐人の像を實物大に畫いて呉れないか？」

「そんな繪を畫いて何にするのだ？」

「實はネ、射撃の稽古をするのに、たゞの的では面白くないから、君に毛唐人の繪を畫いて貰つてそれを的にしようといふ考案なんだ」

「成る程それは面白い。では早速畫いて上げたいのだが、實は僕はまだ毛唐人といふ者を一遍も見たことがないのだ。何か手本を探してから畫くことにするから暫らく待つて呉れ給へ」

「宜しい、では是非頼む」

それから寛齋は手本を心掛けて探してゐたが、或日道具屋で舶來の皿を見ると、それに可成り細密な紅毛人の像が畫いてあつたので、買ひ求めて歸つて來て早速それを手本にして六尺餘の大きさに異人の圖を二枚畫き上げた。山縣と品川は大層喜んで持つて行つて、三條蹴上の長州屋敷で的にかけて射撃して快哉を叫ぶのであつた。

文久三年八月毛利家は朝敵の名を着せられて堺町御門警衛を解かれ、長藩士の入京を禁じられた。幕吏は絶えず密偵を放つて長州人を搜索して、武士だらうが町人だらうが防長の者とさへ云へば直ぐ樣ひツ縛つて獄に投じるといふ有樣だつた。

到頭寛齋の家も襲はれた。其の時彼は漸う命拾ひをして清水産寧阪の曙樓といふ會席へ逃げ込むと、同じ樣に追はれた同志の者が四五人集まつて來た。其處で一同で相談をした結果、今日のやうに交通が杜絶して京阪の事情が國許で知れてゐない爲めに、藩廳の爲す事が悉く機を失するのであるから、同志の中で誰か一人國元へ急行して、京都の事情を君侯に陳じなければ不可ないといふことになつた。で、誰を遣るかといふことになると、一同は是非寛齋に行つて貰ひ度いと言つた。寛齋は承知して、危險を犯して長州へ下ることになつた。

寛齋は、簑笠を着て、一升德利を手に提げて百姓の姿で京都を落ちのびた。そして漸う大阪に辿りつき、玆で更に同志の者と會合した後、金比羅詣の姿をして便船で讃岐へ渡つた。彼は晩山と名を變へて、金比羅の社務所に暫く足を停めて世の動靜を窺つてゐた。

金比羅の社に、應擧の筆に成る虎の圖の衝立があつた。それは應擧の傑作中の傑作であつたが、大分縁が破損してゐた。寛齋はそれを惜しく思つたので、神官と相談の上補筆をしたが、

應擧の筆法を少しも損ぜずに美事に修補が出來たので、大いに神官の信用を博した。

社務所の前に、古い石の神馬があつた。よく子供が集まつて其の神馬に跨がつたりして遊んでゐた。處が、其の神馬は、首が破損して胴體から離れかけてガタ〳〵動いてゐた。子供はそんな事には頓着なかつた。寛齋はそれを見る度びにどうも危なくて堪らなかつた。そこで或日、首が落ちないやうに繩を持つて行つて縱横に絡げて來た。

「恁うして置けば子供が乘つても大丈夫だ」と寛齋は思つた。

處が、何時となく其の神馬へ子供が乘つて遊ばなくなつた。

「變だな」と彼は思つてゐた。さうかうするうちに、時々人が來て神馬へ賽錢を上げて拜んで行つた。寛齋は不思議に思つて其の一人を呼び留めて訊ねて見ると恁う言つた。

「此の神馬は夜になると走り出すさうです。だから恁うして飛び出さないやうに縛つてあるのです。靈驗あらたかで、脚の病ひなら立所に癒して下さるさうです」

神馬に詣る人が段々多くなつた。社務所の小使は、思はぬ役德が出來たので、寛齋を神の如く崇めた。

(三)

寛齋は漸くの事で山口へ到着した。彼は直様登城をして君侯に謁見して、京都御所の事情から幕府の機密諸藩の動靜などを詳さに上申した。君侯は厚く其の勞を撈はれた。

寛齋は面目を施して城を下つた。すると道で舊友秋山義兵衛に邂逅した。互ひに一別以來の挨拶をして無事を祝し合つた。

「今度は萩へも行くだらうね」と舊友は寛齋に向つて言つた。

萩には彼の生家があるのだつた。

「否、萩へは寄らずに、直ぐに京都へ歸る」

「何故萩へ行かないのだ、君のお母さんは、僕に會ふ度びに君の事を言つては戀しがつて居られる、一度歸つて顏を見せて遣り玉へ、どんなに喜ぶか知れないから」

寛齋は、國を出てから二十年、まだ一度も故郷へ戻らぬのだつた。母は八十近い齡になつてゐた。其の母は末ッ子の彼を殊に愛してゐるのだつた。老ひ先きの短い身で、旅に出た儘歸つて來ぬ愛兒の事を日夜案じて暮してゐるだらうと考へると、彼は何時でも泪を催すのだつた。然るに今日友の口から母の事を聞いたので、猶更胸が張り裂けるやうな思ひがあつた。彼は餘つ程萩へ行つて、一と目母に會はふかと思つた。が、自身の帶びてゐる用務と、京都で自分の歸るのを首を長くして待つてゐる同志の事を考へると、猛然として心を取り直した。

「折角ぢやがわしは歸らん、お國の爲めに一刻も猶豫して居られん場合ぢやから、お母さんには會ひ度いが、會はずに京都へ行つたと、後で君から傳へて呉れ玉へ」

寛齋は泪を揮つて恁う言つて、舊友に別れて山口を去つた。

京都は大火の後で落莫たる光景を呈してゐた。其の上白晝でも盜賊が横行し、新撰組の浪士は到る處に狼藉を働き、宛然無政府狀態に陷つてゐた。幕吏の志士に對する追求は益峻烈になつて來た。

寛齋は、幾度びも危險に遭遇したが、何時も運よく遁れた。或時は林の中の叢に潜み、或時は寺の床下に眠つたりした。

其の時は丁度三日間といふもの食はず飲まずで過した。彼は、生命の危險よりも、飢餓のはうが堪へられなくなつた。夜半に隱れ場を出て、豫て懇意な經師屋で柳馬場の木村治助といふ者の處へ遣つて來た。治助の家も燒けたあとで、纔かに殘つた土藏の中で主人の治助獨りが暮してゐた。其處へ突然寛齋が遣つて來たので、治助も駭いた。

「よく御無事でおいでなされました、久しくお見えになりませんから、實はどうかと思つてお案じ申して居りました」治助は藏の戸に内から鍵を掛けた後でさう言つた。

「うん、どうも今度はゑらい目にあふつ、まるで溝鼠のやうに逃げ廻つてゐるのだ。處で治助、俺は今日で三日物を食はんので腹が減つて堪らない。何か食ふ物を振る舞つて呉れないか」

「へい／＼宜しうございます、飯がありますから直ぐ差上げますが、併し此處では夜半でも新撰組が歩いて居りますから危なう御座います、此の床下に穴藏がありますから一時此處へお潜れなさいまし」

恁う言つて治助は握り飯を三つ四つ拵らへて寛齋に渡して、彼を穴藏の中へ入れた。寛齋が穴藏へ下りると間もなく、藏の戸をドン／＼叩く者があつた。

「何方で御坐います？」

「明けろ／＼、新撰組の關三十郎だ、お上の御用で參つた、早く明けんか」

「はい／＼、只今明けますで御坐います」

治助はぎよツとしたけれど、心を落ち付けて戸を明けた。三十郎は、捕吏を六人ばかり引率して、拔刀の儘で飛び込んで來た。

「貴樣の家へ先刻森寛齋が來たらう、早く森を此處へ引きずり出せ」

「何を仰しやいます。私は宵から此處に臥つて居りまして、只今旦那方に呼び起されて眼を醒ましたので御坐います。ほかに

誰も參つては居りません」

「此奴隱し立てをするとは太い奴だ、突き留めて來たのだから早く出せ」

三十郎は怒う言つて、鐵扇で治助の肩をピシリと打つた。

「何と仰しやつても、居らぬ者は居りませぬ。御不審と思召したら、狹い家の中ですから、何處なとお探しなされませ」

三十郎は捕吏に目配せをした。六人の捕吏は直ぐ樣家探しに掛つた。押入から二階から隈なく探したが、穴藏の口には蓆が敷いてあるので誰れも其の床下に氣の付く者はなかつた。

「お頭、何處にも居りません」

「さうか――あの鈍め、では風を喰らつて遁げをつたと見える、忌ま／＼しい奴だ」

三十郎は殘念さうに舌うちした。一同引き上げて行つた。治助は胸を撫で卸して、暫くしてから穴藏の蓋を明けて寛齋を呼び出した。

「來たやうだつたな」寛齋はにこ／＼笑ひ乍ら出て來た。

「どうも駭きました、闕三十郎といふ奴が、鐵扇で私の肩を打つて脅かしやがつた。でもいゝあんばいに穴藏に氣が付かなかつたとは、先生の御運が强かつたのです」

「貴樣のお蔭で命拾ひをした、此の恩は忘れんぞ、併、腹も出來たからそろ／＼出掛けよう」

「是れから何方の方へいらつしやるおつもりですか？」

「かう探索が嚴しくなつてはとても京都には居られないから、暫く田舍へ行つて潛れるつもりだ。が、治助、お前にももう會へんかも知れんな」

「縁喜でもない事を仰しやいますな、どうか御無事でお暮し下さいませ。時に先生、お孃樣は何處へお預けなされてあるので？」

「うん、娘か、あれは山科の知邊に托してあるが、是れもまた何處ぞへ場所を變へねばなるまい」

彼の妻は數年前に一人の娘を遺して沒したのだつた。其の後は男の手一つで養育も出來ないので里子に遣つてあつたが、十歲の時から取り戻して暫くは手許へ置いたりした。が近頃は人の眼を掠めて遁げ隱れてゐる身の上なので、娘の顏を見る機會もなくなつた。

「大きくおなりで御坐いませう、お愛らしう御坐いますな」治助は灯の蔭で泪を拂つた。

寛齋は有合はせた簑笠を着て農夫の姿にやつして遁げることにした。

「では、治助、ゑらう厄介を掛けた」

「あ、先生、一寸お待ち下さいませ、お立ちの前に、何ぞお形見を書いて頂き度う御座います」

治助は恁う言つて紙と硯を持ち出して寛齋の前に置いた。

「よい事を言つて吳れた。近頃のやうに繪筆を執らぬと、矢張り書き度いものでなあ」

寛齋は筆を握つて、根笹に雞の圖を書いた。

彼は夜陰に乘じて京都を落ちのびた。

山科の娘を預けてある家へ着いた時分には夜が明けてゐた。其の邊も探索が嚴しいと聞いたので、娘を自分の手に受け取つて、其の足で大津へ行つた。大津には河瀨太宰の妻が潜れてゐる。寛齋は太宰の妻に娘を托して、更に大和路へ走つた。

當時長藩の內部では、在來の尊攘派のほかに、幕府に服從すべしといふ軟論派が擡頭して可成り勢力を得て來た。寛齋は道路で其の說を耳にしたので、直ぐ樣長州へ潜行した。

寛齋は山口へ到着するが否や、旅裝を解く遑もなく直ちに登城して藩の重役に對面して、滔々として勤王の大義を論じ、倒幕攘夷の一日もゆるがせにすべからざる所以を力說した。老職達は、彼の言が餘りに激烈で、萬一聞かれない場合には其の場で刺し違へでもしかねまじき劍幕に畏をなして、

「足下の議論は十分了解した、就いては猶委曲を盡す樣に書面に認めて、手續きを以て老侯に上申したら宜敷からう」と言つた。

寛齋は諾して、旅宿に歸ると燈下に紙を展べて長文の建白書を認め、早朝に奉行所へ進達した。彼は其の建白書を差し出した後で旅宿に謹愼してゐた。老職を非議し、分を超えて國政に容喙した罪は何れにしても免れ難い事である。重くて斬首、輕くても切腹と覺悟を定めてゐた。すると其の翌日になつて目附役から「早々登城するよう」と沙汰があつたので、心靜かに用意をして登城すると、二名の目附役から、

「足下の建白書は昨日すでに奉行所より老侯の御手許へ差し上げた。老侯は大層足下の言を御感賞あつて、尙ほ〱王事の爲めに力を盡す樣寛齋に傳へよとの御諚である」と言ひ渡した。

寛齋は、命のないものと覺悟してゐたゞけに、意外でもあれば忝なくも思つた。彼は有難き次第を答へて退出した。彼は其の後も數日山口に留まつてゐた。

或日茶道の飯田宗治といふ者が寛齋の旅宿へやつて來た。何事かと思つて對面すると、老侯からの御使だと云つて、茶室の袋棚の小襖を二枚持參して、

「老侯が拙者を御召しになつて、寛齋がまだ城下を去らずに居るだらうから急いで行つて此の襖に畫を命じて來いとの仰せで

あります。速かに御採擇なされたが宜しいでせう」と言つた。

それは老侯が、彼の建白書を正しく見たといふ事を知らせるための謎であつた、寛齋は感激して、其の場で小松を畫いて捧げた。

（四）

明治の世となつた。幕末の騷亂も今は一場の夢と化した。維新の後は、寛齋は絕えて政事を口にしなかつた。彼は京都に永住して、再び自己の天職である繪筆に心を潛め、悠々として畫三昧の日を送るのだつた。曾て國事に奔走し、萬死を賭して辛酸を甞めた事は悉く忘れたやうな顏をしてゐた。世間では、彼を一介の老畫工だと思つてゐた。

明治初年は、極端な繪畫不振の時代であつた。世人は悉く新奇の事物に熱中して畫を顧る者は無かつた。五六年頃からはやゝ其の趣味を樂む者ができて來たが、併し其の後の十年間は文人畫跋扈の時代となつた。京都では、中西耕石、谷口靄山、田能村直入などが全盛を極めた。狩野、土佐、圓山の諸派の畫は全く見捨てられてしまつた。それらの畫家達は、友禪の下繪などを畫いて漸く口を糊してゐた。

寛齋も、繪畫の門戸を張ることは張つたけれど、畫の依賴に來る者がないので大いに窮した。一と頃は三條堀川に夜店を開いて、頭巾で顔を隱して、客の望みに應じて席畫を畫いたりして僅かな錢を得た。

何しろ貧乏で堪らなかつた。借金取りは蛸の如く攻め寄せた。けれども、無い袖は振れない譬へで、さうなると反つて氣樂だつた。月末に借金取りが遣つて來ると、寛齋は奥の一と間に立て籠つて笙を吹いてゐた。幾人遣つて來て呼ばふが喚らうが聞ゑぬ振りをして笙を吹いてゐるので、是れには債鬼の面々も呆れて、終ひには根負けがして退却するのだつた。

藤助といふ下僕を雇つたところが、これが大變篤實な男で、よく寛齋に仕へて家事を取る暇には内職をして、貯へた金を持つて行つては借財を拂つた。

寛齋は、中林竹溪とは至つて親密な間だつた。常に往來しては畫論を闘はせなどしてゐた。或晩も竹溪がやつて來て、例に依つて夜半頃迄談じた。歸る時竹溪は提灯の蠟燭が切れてゐたので借りてとぼして行つた。其の後にまたやつて來たが、談しの半ばに竹溪はふと思ひ出して、

「先夜貴公の處で蠟燭を借りたが、今日お返し申さうと思つたが家に蠟燭が無い。併し、先夜借りた蠟燭は半分とぼし掛けだつたから、一丁の半分の代價だけお返し申す」

と云つて、一文錢を五文出して盆の上へ並べた。

「是れは〳〵、早速の御返濟で忝けない」寛齋は喜んで其の錢を收めた。

中林竹溪は、竹洞の子で、岡崎に住し、家風を畫かずして一機軸を出したが、中年で沒した爲めに其の作品は餘り世間に澤山無い。彼は奇癖を有し、常に古英雄を慕つて、家屋の構造及び庭園の裝飾を英雄の隱遁してゐる體にして、畫室には矢屛風を立て廻し、太刀を飾り、熊の皮を敷き、道服を着て其の上に座してゐた。外出する時は、或ひは虛無僧に扮し、或ひは朱鞘の大小に角鍔をかけたのを帶して、鐵扇を手にし、編笠を冠つて武士の如く裝ほつた。旅行に出る時こそ大變で、鎧を着け、弓を袋に入れて從者に持たせ、宛も戰國時代の人だつた。或年の春、東山の花が眞つ盛りで、花頂山の山門の邊は殊に綺羅繽紛として往來の男女織るが如く、雜沓言ふばかりなかつた。時に一人の醉漢があつて、花見の人に突き當つては口論を吹つ掛け、婦女子に戯れ狼藉見るに堪へなかつたが、誰あつて是れを留める者もなかつた。と、ある花の蔭から編笠を冠つた一名の武士が立ち出でて、忽ち其の醉漢を捉へ、肩にかついで擲げ出した。醉漢は恐れて逃げ去つた。人々は是れを見て武士の力量を賞讃してやまなかつた。彼の武士は軈て塵を拂ひ、笠を取つて手に提へ、謠曲をうたひつゝ悠々と歩いて立ち去つた。すると群衆の中に其の顏を知つてゐる者があつて「あれは岡崎の中林竹溪である、竹溪は畫工とばかり思つたら、武術も大した腕前だ」と言つたので、一時京の話柄となつた。處が、いづくんぞ知らん、其の醉漢は竹溪が金を與へて雇つたのであつた。

京都の風俗として、祇園祭りの時は家々で美事な金屛風や或ひは古名匠の筆になる屛風を店先に立て、互ひに其の美觀を競ふのであるが、寛齋の家は貧乏で何一つ飾る物が無いので一策を案じ、畫用の澁引假帳を數枚並列して、其の上へ胡粉で芒を畫いて立てた。すると秋風忽ち座に滿ち凉味掬すべき思ひがあつた。

繪畫の暗黑時代は過ぎ去つた、米人フエノロサに依つて點火せられた畫界の革新運動は急激な勢ひで國中に火の手をあげた。東京では、狩野芳崖が芝公園の荒物店から躍り出して忽ち天下に覇を稱へた。京都でも、森寛齋、岸竹堂、鈴木百年、幸野楳嶺の諸家が一せいに擡頭した。就中寛齋は圓山の嫡孫で而も最も先輩であるので特に尊重され、殆んど應擧の再出したやうな有樣で待遇された。寛齋の名は隆然として關西の天下に轟き、畫を需める者が其の門に群がつて市を成した。

寛齋の畫は、水墨に於て、一代に頂きを成すものである。然

るに、寄畫を畫いても、一葉一葩も苟くせず、纖毛の美を發揮して、圓山派の衣鉢を傳へて餘りあるのである。圓山派は寫生を尊ぶ結果として、其の末流の畫く處は兎角俗に陷るのきらひがあつたが、寬齋は少壯の時から南畫の畫論をも深く研究した爲め、其の畫は氣韻橫溢して明人の域に進んでゐた。

寬齋は決して下繪をつけるといふ事をしなかつた。曾て宮內省から皇居の御杉戸に小鍛冶鍊刀の圖を畫くことを命ぜられたが、例に依つて下繪を徵された。すると寬齋は固く辭して言ふのに、

「畫といふものは下畫に拘束されて決して畫けるものではない。又同一の畫を二度畫くといふことは不可能である。今下畫を奉つて、本圖を畫く場合にそれと異つた物が出來たならば至尊を欺き奉る道理である、それ故强いて下畫を徵されるならば、此の御用は御辭退を申し上げるのほかはない」

それは一面に於ては、宮內省の役人が下畫を見た上で彼れ是れと差し出口の注文をする事を知つてゐるからでもあつた。爾來宮內省でも寬齋だけは破格に下畫無しで御用を仰せ付けた。

寬齋は、同一の畫を二度と畫いたことは生涯のうちに決してなかつた。或西洋人が、寬齋が金比羅神社へ奉納した衝菊に栗鼠の畫を見て激賞して、態々寬齋を訪ねて「あれと同じ圖を畫いて貰ひ度い」と言つて依賴んだけれど彼は聞かなかつた。其處で西洋人は「潤筆料は望みの儘差し上げるから是非畫いて貰ひ度い」と言つたが寬齋は斷然謝絕した、

明治十五年に東京で繪畫共進會が開かれた時、寬齋は墨畫で赤壁の圖を畫いて出品した、其の圖は意匠筆力共に秀逸であつたので、鑑藏家の激賞する處となつて、美術協會では參考品として買ひ受けの交涉をした處が、既に他に約束があるからと云つて寬齋は斷はつた、其の繪は寬齋自身でも得意の作だつたので、彼はそれを舊友品川彌次郎に贈らうと思つてゐた、

當時品川は御料局長の職にあつて、たま／＼生野銀山へ赴く途中京都へ來て尊攘堂へ詣でた。寬齋は早速品川を訪ねて、

「今度赤壁の圖を畫いて共進會へ出品したが、貴君が觀てお氣に入つたらば進呈したいと思つてゐる、若し貴方がお氣に入らなかつたら、小室信夫氏に贈らうと思ふ、小室氏も望まないと云ふやうだつたら、瀨田の橋から湖水へ投じて龍王に獻じようと考へてゐる」と言つた。

「それは有難い、赤壁の圖は評判だけはきいてゐるが、忙がしくてつい拜見ができなかつた。併し定めて傑作だらうと思つてゐます、何よりの贈り物で忝けない、僕の家の寶にして秘藏することにしませう」品川は喜んで言つた。

それから品川は御料地を巡視してきた京都へ來た。すると寛齋が答禮としてやつて來て

「實は困つた事が出來した、と云ふのは、過日至尊が共進會へ行幸になつた折、圖らずも赤壁の圖が御意にかなつて、早く買ひ上げて遣はせとの御言葉で、其の節他へ約束のある由を言上した處が、それでは新たに同じ圖を命ぜよとのことで、昨日其の旨が侍從職から御達しがあつた。至尊の勅りとは申し乍ら同じ圖を作る事ばかりは、お引受けができない事だ。と云つて折角の御意に副ひ奉らぬのも恐れ多い事であるから、あれは貴君から宮中へ献納して頂き度い、貴君には又私が別の畫を作つて進呈するから」と言ふのだつた。

品川は寛齋の正直にも驚いたが、承諾して、直ぐ樣東京へ歸つて赤壁圖を献上した。至尊は大層お喜びになり、古代硯箱を品川に賜はつた。其の硯箱は月に櫻の蒔繪を施した古名匠の作であつた。品川は寛齋と相談の上、恩賜の硯箱を尊攘堂へ納めた。

（五）

フエノロサは京都へ來て、寛齋を訪問して圓山派の來歷と寛齋の畫に對する懷抱を叩いた。其の時寛齋は言つた。

「應擧は師傳にかたよらない。己れが欲する處に從つて和漢の故人にのぼり、或ひは寫生を忠實にするのであつた。併し、現今の寫生と唱へる處とは異つてゐる、卽ち應擧の寫生は、物の形のみを寫すのではなく其の眞を寫すのである、どれ程精細に形を寫しても、眞を得なければ畫とは云ひ難い。畫は筆力氣韻にあるのである。應擧の如きは、天禀の筆力があつて、其の上に刻苦して縱橫の筆を運んでゐる。だから千尺の物を一筆に縮めても勢ひが紙中に溢れてゐる、方寸の中に宮殿樓閣人物禽獸等を畫いても、形が完全で大作と少しも異はない。また歌妓遊女などを畫いても是れを仙佛聖賢の圖の傍らに置いても決して賤しくないのは全く氣韻が高いからだ」

「腕が乏しくて只强く見せようとするのは邪である、又萎縮する者は痴である、應擧の如きは其の時の力量に應じて一筆も苟くせず、日々に進み、夜々に發明し、一歩も止まつてゐない、だから其の作を見ると、筆に年號がある。年號が書いてなくても明かに明和とか安永とか判然するのは應擧に限つてゐる。又、應擧の畫は老年に至つても筆が愈麗はしくて少しも衰へない、早年の時の畫のはふが筆致が反つて蒼然としてゐる、畫才の豐富な證據である」

「西洋畫で影を寫すことは至極然るべきことではあるが、影は

日月の度により朝夕同じでない、影に囚はれて眞を失ふ場合がある。日本畫では影を嫌ふ、只、影も有るやうに見え、花には香があるやと思はれ、鳥も羽を動かさゞらんやと思ふ所に至つて、日本畫では寫生の鉅手と云ふのである」

寛齋の處へ弟子になりたいと云つて來る者があると、先づ第一に身體の健弱を檢査した。「繪畫を學ぶ程の者は無病息災の者でなければ其の技を神妙の域にまで進めることは不可能である」といふのが寛齋の持論であつた。身體檢査が濟むと、今度は、「お前は畫で飯を食ふつもりかどうか」と訊くのだつた。

若し、さうだと答へる者があると、

「畫は飯を食ふ爲めの技ではない、飯を食ふ爲めなら、算盤を彈くか、鋤鍬を握るに越した事はない、畫を學ぶのは止すがよい」と寛齋は言ふのだつた。

飯は食へなくても構はない、只畫を學べば滿足である――眞實さういふ氣持で畫家になりたいと言ふ者でなければ弟子にしなかつた。

初めて入門した者には當分の間圓を畫かせた。それが濟むと今度は棒を引かせた。圓と棒が十分熟した處で、次ぎに圓に玉を付けて寶珠のやうなものを稽古させた。さういふつまらぬ物で十分に筆力を養はせた上で初めて畫を教へるのだつた。

「圓や棒は何の癖もない型に依らぬ力である、それを基力といふ、是れが他日色々な方面に働くのであるから、基力を養ふ事が肝要である」と彼は常に言つた。

彼は終生刻苦して一日たりとも畫の研究を怠るといふことはなかつた。老年に至つて、畫名天下に轟き渡つてからでも、屹々として研究を續けてゐた。或時、妙心寺へ依賴して、林良の鳳凰の圖を臨寫さして貰つた。土用の眞最中なので、汗をダク〱流してやつてゐるのを見て或人が

「寛齋老人が、冥途の土産で莫迦な骨を折つてゐるものだ」と笑つて言つた。

それを傍で見てゐたのが野村文擧であつた。文擧は鹽川文麟に學んで當時旣に一家を成してゐたが、寛齋の熱心に大いに感じ「此の人こそ我が師と仰ぐに足れり」と思つたので、遂に請うて弟子入りをした。

寛齋は常に言つた。

「私は六七歲の昔から筆を執り初めて今日迄如何な流離困難の際でも一日として畫を作らぬ日はなかつたが、まだ一幀も自分で是れならばと思ふ程の物が畫けない。天賦にも依ることだらうが、繪を畫く事は實に容易でない、だから私は棺桶へはひる迄は修業する覺悟でゐる。就ては合點のゆかないのは美術學校

で何年で卒業といふ事だ、繪畫の技は五年や十年で卒業のできるものではない、當世の人のする事には折り〳〵おかしい事がある」と言つて笑つた。

寛齋は、客が來て畫を需める者があると、親切に其の希望を聞いて、さうした上で初めて筆を染めるので必ず依頼者を滿足させることが出來た、或時書畫屋の依頼で豫じめ潤筆料を定めて屏風に靑金泥を以て滿月の圖を畫いた、出來上つてから書畫屋が遣つて來て其の圖を見て、

「先生、大層結構な出來ですが、此の月はお願ひした時の約束よりも餘程大きいではありませんか。實は都合がありますので恐れ入りますが小形に畫き直して頂き度いものです」と言つた。

すると寛齋は素直に承知して、

「あゝさうでしたか、それは私が寸法を間違へて惡るかつた。早速畫き直さう」

そして書畫屋の注文通りの寸方に畫き改めて與へた。其の時門人が「せめて畫き直しの金粉の代金だけも別にお取りになるが宜しいでせう」と言ふと、寛齋は、

「否、月が約束よりも大き過ぎたのは己れの過りだ。殊に商人は算盤を彈いて生活をしてゐるものだから、若し此の畫に豫算以上の潤筆料を拂ふ時には、畫の善惡に拘はらず快く思はない快く思はないやうでは、己れの處へ揮毫を頼んだ當初の意志に叛くことになる、お前達もさういふ事はよく心に留いて貰ひ度いものだ」と言つて弟子を戒めた。

また或時病氣に罹つて醫者が固く筆を執ることを禁じたにも拘はらず、尚繪を畫いてゐるので、門人等が體に障ることを恐れて諫めたが、寛齋はそれでもきかずに筆を執りながら言つた。

「此の畫は書畫屋某の依頼である、彼れは己れに繪を畫かせてそれを賣つて生計の助けにしてゐる男だ、だから日を延ばして商賣を妨いでは氣の毒だ」

寛齋に畫を依頼する者が、潤筆料を紙に包んで贈ると、寛齋はそれを受けて納めるけれど、頼まれた畫が出來上る迄は決して包みを開くといふことはなかつた。或時品川彌次郎が其の譯を尋ねると、

「私は潤筆料の多少に依つて畫を上下する考へは持つては居らぬ、けれども凡夫であるから、初めに包みを開いて若し思つたより少なかつた場合に、筆を執る心持が少しでも變らぬとは保證しがたい、だから畫き上げてしまふ迄は絶對に開かぬことにしてゐるのです」と寛齋は答へた。

寛齋は多藝多能で、餘技としては和歌もやれば俳句もやり、端唄小唄も作り、三味線も彈いた。若い時分烏丸佛小路の藥師

神田某について徘呂を學び、笙と笛は許しを得てゐた。一絃琴や一節切（ひとよぎり）をも嗜みがあつた。さうかと思ふと武士の表藝たる武術も堂に達して、劍と槍とをよく使つた。毎朝抹茶を一二椀啜つた後で、長槍を執つてりゆう／＼としごいた。深夜孤燈の下で秋水を揮つて神を澄ませてゐることもあつた。

併し、書についでの寛齋の生命は酒であつた。生涯酒は斷たなかつた、朝でも晝でも晩でも夜なかでも、一時でも酒の氣がなしではゐられなかつた。夜遲く床へ這入つてからでも、枕頭には必ず酒を貯へて置いて、眼が醒める度びに手を伸ばしてはグビリ／＼と飮んだ。客が來れば必ず酒を出した。氣持よく醉ふと、古への忠臣義士の事跡を談論したり、古書畫を品藻したりして、意氣頗るあがるのだつた。月の一日には、故舊門人は云ふまでもなく、酒屋、米屋、薪屋のやうな平常出入りをする家の番頭共まで呼び集めて大酒宴を開き、三味線太皷で大騒ぎをして、寛齋自身も三味線を彈いて遊び暮らすのが恒例であつた。

男爵北垣國道は、明治十四年に京都府の知事として赴任すると、一日置き二日置き位に寛齋を訪ねて寒暖を見舞ひ、盃を傾けて交はつたが、其の前後も、北海道に居ても、東京に居ても熊本に居ても、毎月銘酒を一樽づゝ寛齋に贈つた。お陰で寛齋は、赤貧洗ふが如き中に居りながら酒だけは事を缺かなかつた。

どういふわけで北垣がそれ程迄に寛齋に禮を盡すのかといふと、それは理由のある事だつた。嘗て維新の前、京都を逐はれた寛齋が、故藩に還つて正論を皷吹すべく長州へ潜行した時だつた。其の時道で長藩の奇兵隊に捕はれて幕府の間諜だといふので首を斬られかゝつてゐた男があつたので、寛齋が見るとそれが北垣國道だつた。北垣は當時まだ柴捨藏と云つてゐた時分で、生野銀山の義擧に加はつたが戰に破れ、首領平野國臣は幕吏に捕へられ、同志は悉く陣歿したので、國道は身を以て遁れて長州に走つたのであつたが、偶々奇兵隊の爲めに怪しまれて囚はれの身となつたのであつた。寛齋は豫て京都で度々北垣とは往來して王事を計つたこともある仲だつたので、驚いて奇兵隊に向つて辯疏して、北垣を放免して志す處へ行かしめた。其の時寛齋が通り合はせなかつたならば、北垣は柴捨藏のまゝで道路に屍を曝し、後の榮達は得られなかつたのである。

（六）

或朝寛齋の家の門人の者が起きて見ると、庭の眞ん中に疊を重ね一疊が伏せてあるので、驚いて[illegible]した。[illegible]に說見

の痕が點々と印されてゐる。

「泥棒が這入つたに違ひないが、先生のお身の上に別條はないか」と門弟達が蒼退て丶二階へ驅け上つて見ると、寛齋先生は自身で雨戸を明けて朝の空氣を吸ひ乍ら悠然たるもので例の猪口を擧げてゐた。

「先生、大變です、泥棒が這入りました、何ぞ持つてかれは致しませんか？」

すると寛齋は莞爾として、

「うん、騷がなくても知つてゐる、ゆうべは綠林先生が出て來てな、どうも面白かつた」

「へえー、では先生は泥棒とお會ひになつたんですか？」

「うん、二人で一杯やつてなあ、又來いと云つて歸して遣つたが、——夜なかに目が醒めて見ると、其の綠林先生が來てゐるから己が聲を掛けると、爺い金を出せと云ふのだ、金を遣り度いと思つたが生憎昨夜は一錢もない、どうも氣の毒でな、併し折角來たものだから何か遣り度いと思つて探して見たが何にもない。博覽會で貰つた銀牌があつたから、是れは潰せばなにがしかの金になるがどうだと云つて見せた處が、そんな物貰つても仕方がない、と先方が云ふのだ、酒は好きかと聞くと大好きだと云ふから、それは先づよい、兎に角一杯やらうから座れと云つて酒を呑ましてやつたさ。近頃よい仕事があるかと聞くとうまい仕事がないので困ると云ふ。泥棒に來たからは何か持つて行かなければ商賣にならない、己の着てゐる衣物でも熊の皮の敷物でも持つて行け、此の蝦夷錦のでんちばかりは天子様から拜領した物だから遣れないが、他の物なら何でも構はぬから持つて行けと云つた處が、何れも是れも貰つても仕方がないと先方で云ふのだ。では酒だけは澤山あるから十分呑めと云つてな、到頭夜明け迄飲んだが、なか／＼面白い奴だつた」

門人達は呆れ反つて、

「では泥棒は到頭何にも持たずに歸りましたのですか？」

「否、歸りがけに氣が付くと臺所に鰹節が一本あつたから、それを土産に持たせて遣つた」

寛齋は何びとに對しても親切で思ひ遣りが深かつた。妻を先立て丶からは二度び娶らず、家に女子を容れなかつたので炊事は門人等が毎日交替でやつたが、室内掃除を初め身のまわりの事はすべて自分の手で始末をした。彼は朝五時頃に起きて先づ厠へ行くのが例であつたが、厠の掃除は若い者は厭がるだらうと思つて、毎朝門人達の起きぬうちに自身で厠の掃除をして置いた。

山元春擧は十五歳の時入門した弟子であつた。其の時分寛齋

は七十餘でもう腰が曲つてゐた。其の老體でも寬齋は厠の掃除を自分で爲てゐるのだつた。春擧はそれを知つて子供心にも痛はしく感じた。「第一弟子の身で師匠に厠の掃除をして貰つては申譯がない」彼はさう思つたので、其の後每朝師匠よりも三十分位早く起きて厠の掃除をして置いた。

「此の頃は誰れが掃除をして吳れるのか厠が綺麗になつてゐるので氣持がよい」

師匠はさう言つて喜んでゐたが、餘り永く續くので或朝いつもより早起きして厠へ行つて見ると、凍り付いた霜の中で、一番幼年の春擧が井戸水を汲んで來て厠の掃除をしてゐた。

「此の頃中每朝厠の掃除をして吳れたのはお前か？」

「はい――」と少年は答へた。

「よく爲て吳れる、忝けない――」

孤獨な、老畫工の眼には泪が光つてゐた。

其の春擧がやゝ長じて木屋町の下宿に住まつてゐた時、脚氣を病んで、續いて又赤痢に罹つて、下宿屋で呻吟してゐた。すると寬齋は八十近いよぼ〳〵の體を杖に縋つて每日やつて來て藥を飲ませたり汚れ物を自分で洗つたりして、我子を見るやうに看病するのだつた。

寬齋の門人に久保田僊齋といふ者があつた。當時年が若かつたので、ふとしたはずみから遊里に溺惑して、それが爲めに郷里から持つて來た學資を使ひ果し、紙筆の料にも事を缺くやうになつたので、到頭塾にも居溜れなくなつて、口實を設けて塾を出て寺町のある破寺の一と間を借り、繪も畫かずに食ふや食はずの境涯で日を送つてゐた。寬齋はそれを聞き出すと或日突然其處へ訪ねて行つた。僊齋は駭いたけれど今更隱す事も出來ず、有りの儘の事情を語つた。師匠は泪を流して弟子の將來を戒めた後で、扇面を十枚買つて與へて、

「是れにお前の得意な物を畫いて持つて來い」と言つて歸つた。

僊齋は漸う蘇生の思ひがして、それから一生懸命工夫して十枚の扇面を畫き上げて師匠の處へ持つて行つた。寬齋は一枚々々それを見て、出來のよいのを數枚撰んで落欵を入れさせて、

「直ぐにそれを持つて龍鱗堂へ行くがよい」と言つた。

龍鱗堂は室町の筆墨舗である。僊齋が扇面を持つて出掛けて行くと、龍鱗堂では豫て寬齋から依賴されてゐたと見えて快く其の扇面を買つて吳れたので、僊齋は其の金で更に必要な筆墨を求めて歸つた。

明治二十三年宮內省に帝室技藝委員を置かれるや寬齋は眞つ先きに其の撰を受けた。其の時寬齋は、老耄拙劣其の任に堪へざる旨の辭退書を草して、切りに固辭したけれどもそれは遂に

許されなかつた。

翌二十四年十月、帝室御用品として宮内省から命ぜられて、絹本双幅蓬莱山の圖を畫いた。其の賞として金百圓を賜はり、又御思召を以て白羽二重一匹を賜はつた。

寛齋は、苟も一藝一能の士と遇へば自分から進んで交際した。相手の身分の高下を問はなかつたので交際の範圍は非常に廣かつた。

小室信夫とは維新前から心を許して交つた仲であつたが、明治初期の畫界不振の時代から續いて南畫跋扈の時代迄小室は絶えず寛齋に米鹽の料を送つてゐた。其の間寛齋が畫筆も捨てず、餓死することもなかつたのは大部分小室の恩惠であると云はなければならなかつた。彼は終生小室を徳として、常に門人等にも小室の厚誼を語つて已まなかつた。

寛齋は、曾て木屋町二條の井上伯爵の別邸を借りて住んだことがあつた。「恁んな立派な家に住む機會は又とない、がどうせ一時の腰掛けだ」と言つて「一時館」と畫いた扁額を居室に掛けた。其の時戯れに今様歌を作つた。

　春は梢になく黄鳥（うぐひす）。夏は高瀬に鳴く蛙。あはれをさそふ友千鳥。雪のあしたのかん酒は、すこしぬるても大事ない。

それを獨逸へ行つてゐる品川彌次郎の許へ寄せると、品川は直ちに酬ひて、

　三千里外の旅寢の枕聞くも戀しき一時館。

其の品川が一躍して内務大臣となると、寛齋に直ぐ様一首の俗謡を作つて寄せた。

　何事もいはでの森のアレ郭公かけてあんじてゐるわいな。サコヤリヤ〳〵。

品川彌次郎は寛齋と交ること頗る深厚だつた。だから品川の夫人も寛齋に對しては舅に仕へるやうであつた。或時夫人は品川と共に寛齋の病氣を見舞つた。すると寛齋が破れて垢のついた蒲團を着て寢てゐたので、夫人は見かねて早速上等の蒲團を四枚誂へて寛齋に贈つた。寛齋は喜んで、其の禮狀の後へ、

　おぼしめし厚きふとんをうちかぶり冬はいづことよろづ夜やねん

其の夫人の爲めに寛齋は四季の月の圖を四幀に畫いて贈つた。

寛齋は八十歳の時、自身の幼年時代の戯れ遊びを想起して、小兒二人が相戯るゝ圖を作つて、其の上へ、恁う題した。

　雪やこんこん霰やこんこんの前だれにうけてたはれし昔戀しも。

明治二十七年の春、咲きかけた櫻の一枝を瓶に挿し、半紙の小切に一句を題して結び付けた。

やう〳〵に夜もとゝなひひぢ枕。

其の年の六月二日、寛齋は八十二歳で此の世を去つた。

追　記

近世名匠傳は三月號を以て一時打ち切る考へであつたが、友人の誰れ彼れや、本誌の主幹瀧田樗陰氏の勸說によつて、ともかくも今一回だけは稿を續けることにした。が、これまでの處は東都の名匠のみを擧げて來たから、今回は關西に於ける巨匠を物色して筆に上することにした。其の材料蒐集の爲め、二月の初めから京都へ行つた。當初の計劃として、畫家では森寛齋、幸野楳嶺の二家に筆を染める考であつた。で、楳嶺に關する資料は主として門人竹內栖鳳先生から仰ぎ度いと思つて、着京早々栖鳳先生を訪問したのであつたが、其の時先生は何故か進んで恩師の事を語るを好まさるかの如きものがあつて、遂に僕を引見だにせぬのであつた。僕が近世名匠傳の述作に志して以來教へを仰ぐ爲めに門を叩いた碩學大家は尠くないが、何れも僕の微志に贊成して、繁劇の時間を厭はず、先師或ひは亡友の事蹟を語り、其の徳をたゝへ、語つて尚足らざるを恐るゝかの如きものがあつた。僕をして人情の美はしさに感激せしめるのが常であつた。然るに今筆硯を載せてはる〳〵と京都へ來て見れば、忽ち人情かばかりに異るのである。こは僕の文名の小なるがため、かの低級悪辣なるモグリ記者の類と同一視されたのか、或ひは栖鳳先生日頃商賈幇間者流とのみ交り、尊大倨傲に馴れ、士人を遇するの道を知らざるにや、何れにしても僕の如き狷辯者のよく堪へうる處にあらねば、潔く去つて再び其の門を訪はなかつた。名匠傳中に、近世花鳥の名手幸野楳嶺を逸した事は、自己の不徳と共に重ね〳〵の恨事である。

森寛齋の事を記した物に、「森寛齋先生行狀記」及び森大狂先生の著「近世名匠談」がある。近世名匠談は收むる所五篇、狩野芳崖、菊池容齋、狩野一信、森寛齋、田崎草雲、の五家の傳を載す。研究精密取材縱橫、行文また流麗を極めてゐる。蓋し畫人傳中の白眉で、僕の駄文の如きと日を同じうして語るべきものではない。僕は、幸ひにして這の先輩の研究を藉り、更に寛齋門下の高足山元春擧先生に就いて其の直談を聽くことにした。一日僕は春擧先生を琵琶湖畔膳所の別業に訪ねた。瓦ケ濱といふ處は、海岸の漁師町の如き感じがあつた。湖水に臨んだ宏壯な邸宅が春擧先生の別莊であつた。先生は僕の遠來を欣び直ちに眺望絕佳の一室に引いて快談し、恩師の事蹟逸話性格を語り、或ひは秘藏の墨蹟參考品等を出して說明するなど、應對懇切、師弟の情誼の厚きを思はせるものがあつた。僕は初めて彼の栖鳳先生の門に到つて得た一顰を恢復して、心に愉快禁じ

雜ければ、湖魚の料理にてあるじの進むる酒に醉ひ、半日の清興に腸を洗つて京都へ還つた。

其の翌日京都大學の新村出先生を訪ねて、鮮擬堂所藏の畜齋の遺作を數幀閲覽させて頂いた。是れまた頗る裨益された。文を爲すにあたつて助けとなつたことも莫大であつた。深く其の厚意を謝する次第である。

旭玉山

（一）

淺草今戸邊に或る眞宗の寺があつた。其の寺には兄弟二人の子供があつた。其の子供の父親は、下の子が生れた七夜の日に沒したので、二人は母親ひとりの手で育てられて來たのであつた。

母親といふ人はどちらかといふとお人好しみたいな女だつた。夫の忘れ形見の二人の子供を教育して立派な人間に仕上げて見ようなどといふ堅固な意志もなければ智識もない平凡な母親だつた。

先住が沒した時は、跡繼ぎの子もまだ幼少だつたので、寺の事務は後見人がはひつて扱つてゐた。後見人は矢張り同宗の僧侶で、親戚合ひにもなつてゐて、淺草區内の或る寺の住持を勤めてゐる人だつた。が、此の人物は、元來あまり善良な性質ではなくて、後見人といふ立場を利用して、反つて私腹を肥すことばかり考へてゐるやうな頼母しくない後見人だつた。けれども口先きが旨いので、寺の後家や檀家の者を胡麻化して行くことだけは上手だつた。で、もとから餘り裕福でもない寺が、先住が死んでから數年經過つた時分には財産はなくなり其の上借金が出來てゐるといふ始末だつた。

後見人と母親がそんな風なので、二人の子供は、まるで放りツぱなしで大きくさせられた。それでも總領の子はお經を讀むすべを教へられたが、弟のはふは手習ひにもやつては貰へず、幼いうちから使ひ走りや拭き掃除の雜用にばかりこき使はれてゐた。

富丸——といふのが弟の子の名前だつた。富丸は、幼い心にも、自身の境遇を悲しく思つた、幾つになつても字を知らない事が一番辛かつた。餘所の子供は六つ七つになれば手習師匠の所へ通はせられた。草紙を提げて寺小屋へ行く近所の遊び友達の身の上が羨ましかつた。

「字を知らぬ人間は偉い者にはなれない」

さういふものだといふことは誰れに云はれたともなく聞いて

知つてゐた。
「偉い者――」
それがどういふ者なのかはつきりとは分つてゐない。けれども、草や木が日光のあたる方へと伸びて行きたがるやうに、人間の幼い魂の中からふき出した芽は、自然と其の方へ向つて這ひ出して行くのであつた。
「おつかさん、あたいも寺小屋へ上り度い」富丸が恁う言ふと
「お前は此の寺を繼ぐ子ではないから、手習ひなぞはしなくてもいい」母親はさう言つた。
兄は十五になると型通り相續をして一ケ寺の住職となつた。寺の爲めにも兄弟の爲めにもならなかつた後見人は、其の時から身を退いた。
弟の富丸は十一の年に他家へ養子に貰はれることになつた。其の家は矢張り淺草の內で、養父は小商ひなどをして世渡りをしてゐる人だつた。夫婦暮しで子がないところから、世話をする人があつて富丸を養子に貰つたのだつた。
「商人の子が何丸なんて名前ぢやあおかしい」
といふので富三郞といふ名に改めた。
養家も勿論貧しい暮しではあつたが、併し親子三人きりなので割りに氣樂だつた。養父母はどちらも富三郞を可愛がつた。養父は殊に腹のきれいなさつぱりした氣性だつた。だから富三郞は生家に居る時よりも餘程幸福になつた。彼は多年渴望してゐた寺小屋へも上ることが出來た。
併し、天は此の少年に對して平穩な行路を與へなかつた。富三郞が十三の年に養父は病に罹つて死んでしまつた。
富三郞はまだ何も仕事は出來なかつた。母親が內職をしたとてそれも知れたものなので、親子二人は忽ち生活に窮する身の上となつた。
其の年の十月二日の夜のことであつた。四ツ過ぎといふ時刻に、突然大地震が起つた。富三郞母子は仰天して飛び起きるが否や、雨戶を蹴外して家の外へ飛び出した。瓦落々々といふすさまじい物音、其の中で助けを呼ぶ人の聲。あたりの家は將棊倒しに倒れた。地面は波のやうに搖れた。其の中を富三郞母子は互ひに手を引き合つて安全な處まで逃げのびた。其處から振り返つて見ると、自分の家もたうに倒れてゐた。さうかうするうち忽ち諸方から火の手が上つた。
それは安政二年の大地震であつた。此の時の地震では江戶中の家屋が大半倒壞して、倒れなかつた家とても火事に襲はれ、昨日までは繁華をほこつた江戶の市街も一夜のうちに淡々たる燒野原と化してしまつた。

燒け出された富三郎母子は、一先づ今戸の寺へ身を寄せた。其の寺は幸ひ破損したゞけで濟み火災をも免かれたのであつた。

併し何時迄も母子二人で寺へ厄介になつてゐるわけにもいかないので、どうにかして家だけは持つたが、何を云ふにも稼き人がないので暮しが立たなかつた。で、寺のはふとも相談の上、富三郎だけは當分生家へ戻ることにして、養母は田舍の親類をたよつて行つて暫く身を寄せることにした。

富三郎は、生家とは云ひ乍ら暖かくない家庭へ戻つて、遊んでゐるわけにもいかなかつた。寺の雜用を助けてやる暇には、生れつきの器用でおぼえた指物の細工などを始めた。誰れにも敎はらなくても、自分の工夫で大ていの物は造り上げるのだつた。お宮だの鼠入らずのやうな物を拵らへて夜店のあきんどの處へ持つて行くと、どうにかこうにか貰つて貰へるやうになつた。淺草の廣小路あたりに、一品二十八文の露店が出た。さういふあきんどの賣る品物を富三郎は拵らへた。

最初はそれでも面白かつた。が、ぢきにそんな物は拵らへて見ても詰まらないやうな氣持がして來た。いくら骨を折つて拵らへて見たところで、お宮はお宮で、鼠入らずは鼠入らずで、ちつとも自分の氣持を滿足させることはできなかつた。

或日も富三郎は、漠然とした不滿足な氣持を感じて考へ込んでゐた。彼が起き臥しをしたり細工物をしたりする部屋は、庫裡の隅つこの陽あたりの惡い疊の腐つたやうな陰氣な間だつた。寺のことで家は廣いので、此處にゐれば人の話し聲も聞えず、考へ事をするには持つてこいだつた。

梅雨期(つゆどき)の雨がじめじめと降つてゐた。手入れをしたこともない庭の草木が雨に濡れて不氣味らしく葉を顫はせてゐた。富三郎は緣側からぼんやりと庭を眺めてゐた。すると、其處には澤山の蛙が、のろのろ這ひ出したり、ピョンピョン飛んだり、あるひは兩手を前に突いて根氣よく空を仰いでゐたり、彼等だけは愉快さうに見える生活を營んでゐる。

富三郎は何といふこともなしにそれらの蛙を眺めてゐるうちに、不圖「蛙を彫つて見よう」といふ考へが浮かんだ。すると當てのない今までの思索の中に急に一つの道がついたやうに感じられてきた。

彼は有り合はせた小さな木切れと鑿や小刀を緣側へ持ち出して、一匹の動かない蛙を手本にして、實物大位の蛙の製作に取り掛つた。モデルの蛙はいつの間にか逃げて行つてしまつたが、それから餘程經つた時分に、富三郎の手の內には一箇の木彫りの蛙が出來上つた。其の蛙は自分ながら不出來だつたが、併し

生物の形を其處に再現したといふことの何とも云へない一種の滿足を彼はおぼえた、それは指物では到底味はへない氣持であつた。

富三郎は面白くなつて。それからは毎日蛙の製作に沒頭した段々手際がよくなつた。蛙の形態もいろんなのを作つて見た。何しろモデルは庭先きへ出れば幾らでも居るので、自由な研究ができた。しまひには蛙が角力を取つてゐる圖などを彫つて見た。

或日其の中から出來のよい蛙を二つ三つ撰んで、廣小路の夜店で根付などを賣つてゐる商人の處へ持つて行つて、

「是れを買つて呉れませんか」と言つて見た。

すると商人は手に取つて見てゐたが、

「成る程、是れあ中々佳く出來てゐる、お前さんが拵らへた――ふうん、器用な若い衆だね――さうさ、買つて遣つてもいゝが、色付けがないから客受けがどうかと思ふんだが――併し折角持つて來たことだから兎に角買つて上げよう、一個百文ではどうだね？」

「結構です、どうか買つて下さい」

あきんどは二三百文の錢を富三郎に渡した。富三郎は嬉しかつた。二十八文店の細工物をするに比べたら餘程割りがいゝ――。

（二）

富三郎は、十六の年から再び養母と一緒に暮すやうになつた。今戸の附近に小さな家を借りて住まつた。富三郎は相變らず小細工物をやつたり、蛙の根付を彫つたりした。がそれも思ふやうには賣れないので、親子二人の生活はいつも困難だつた。で富三郎だけは御飯を生家のお寺で食はせて貰ふことにして、三度々々の食事に寺へ通つた。

其の頃は兄はすでに細君もあつて一人前の坊さんになつてゐた。

「富丸、お前にも少し小遣ひ取りを敎へてやるからお經を習へ」

兄はさう云つて富三郎に少しばかりお經の讀み方を敎へて呉れた。それから富三郎も頭を剃つて、時々法衣を着て兄に隨いて檀家へ出掛けたりするのだつた。さうすると富三郎の分もお布施が貰へるので、兄はそれを弟に與へた。

兄が忙しい時などは代りにお經を讀みに行つたりもするやうになつた。けれども富三郎は心底其の仕事は厭だつた。自分がほんとの坊主でもないのに坊主の眞似をして錢を貰つてゐるのだと考へると穴の中へでも這入り度いやうな氣持がした。しか

し、兄の命けではあり、それに飯を貰つて食つてゐる身分でもあるので厭だとも云へず、不精無性に我慢してやつてゐた。そんな風だから、お經は何時になつてもほんのぽつちりしか知つてゐなかつた。

「たとひ三文でも五文でも自分の拵へた物を人に賣つて暮して行き度い」彼が日頃の願望はそれであつた。

或日も富三郎は兄の代理で神田三河町迄お經を讀みに行かなければならなかつた。それは或る家から、母親の五十回忌を勤め度いから來て貰ひ度いと云つて賴まれたのだつた。

行つて見ると、其の家は三河町の裏長屋で、たつた一と間きりの、疊も敷いてないやうなあばら家だつた。其處に六十位の日に燒けてよぼ／＼した親父と其の娘らしい女とが暮してゐた、思つたよりひどい貧乏の有樣だつた。

「恁んなむさくるしい處へおいでを願つてお氣の毒で御坐りました。私は日傭ひ稼ぎで此の娘と二人暮しで御坐いますが、當年は死んだお袋の五十回忌に當りますので、こんな暮しの中だがお經だけでも讀んで頂き度いと思つてお願ひ致したので御坐ります」と親父は富三郎に言つた。

富三郎は遙々やつて來たのに少しあてが外れた。

「此の分では幾らもお布施は呉れまい」と思つた。

ともかくも經を上げることにした。佛檀と云つても粗末な型ばかりの物だつた。其の前へ座つて富三郎は殊勝らしく念珠をつまぐりながら經を讀み始めたが、大體少しゝか經を知らないのに、今日は殊にお布施が輕いと思ふのでいい加減な處でお仕舞ひにしてしまつた。

「御苦勞樣で御坐りました、誠にハヤ有難いことで」

親父は恁う云つて頭を下げた。娘が手製のぼた餅を譯山盛つて出した。富三郎はよばれる物は遠慮なく御馳走になつた。すると親父は佛檀の前にあつた眞つ黒い筒の中からびた錢を出して數へ始めたので、富三郎は「お布施の錢を數へてゐるのだらうが、精々五十文位のものだらう」と思つてゐると、二百文紙に包んで呉れた。

「お布施が輕くてお氣の毒樣で御坐ります、が、私は先程も申した通り日傭ひ稼業で御坐りますが、今日はお袋の五十回忌を勤め度いと思ひまして、毎日一文か二文宛此の筒の中へ入れて溜めました、是れで勤めを果したので誠によい心持で御坐ります」と親父は言つた。富三郎は急に申譯がないやうな、氣の毒なやうな氣持になつた。が、後からお經を讀み足すわけにはいかなかつた。其のお布施を貰つて歸つた。

富三郎は、あの日に燒けたよぼ／＼の親父が日傭ひ稼ぎをし

て得た中から、一文二文と溜めた錢だと思ふと、其の二百文の錢はどうしても使へなかつた。

「坊主といふ者は罪な商賣だ」とつくぐ考へさせられた。

それから間もない或日のこと、藏前を通つて一軒の古本屋を素見して見ると、北齋の版本で大變面白い物があつた。「幾らだ」と訊くと上下二册で百五十文だと亭主が言つた。其の時もまだ例の二百文のお布施が其の儘手を付けずにあつたので、富三郎は其の錢で到頭其の版本を買つてしまつた。

本を買つたりしたことは初めてなので富三郎は何となく嬉しかつた。本を風呂敷に包んで持つて歸つて來ると、駒形の往來端で評判の誠齋といふ講釋師が野天講釋をやつてゐた。葦簾で圍ひをした入口の處に「世界物識早學問」と書いてある額と、「誠齋」と大書した看板があがつてゐる、富三郎はふと其の講釋を聞いて行く氣になつて中へ這入つた。

誠齋の講釋は普通の寄席講釋とは趣きが異つてゐた。彼の講釋は民衆の道德教育を目的としたもので演る物が皆訓話的の內容を持つてゐた。忠臣孝子節婦の傳、高僧隱者の生活から學問風流の逸事といつたやうな事が題目だつた。それへ彼が自慢の雜學を織りまぜて聽者を煙に卷いて得意になつた。高座の背後にビラを貼り出して演題に因んだ標語がそれへ書いてある、其の頃如水といふ大道講釋もあつたが、此のはふは心學を基礎にしてゐた。誠齋にしても如水にしてもつまり風流志道軒を學んだものらしく、一種の民衆教育家を以て自ら任じてゐるのであつた。誠齋は後には席へも出た。

富三郎が這入つて行くと、客はまばらだつたが、丁度誠齋が高座へ上つた處で、見ると例の背後のビラには「卒受眞施」といふ四文字が達筆に書いてある。軈て誠齋は咳一咳して喋り出した。それは茶の講釋だつた。

「そもく世界に初めて茶といふ物が出來たのは——」

といつた調子で茶の起原から說き起し、それが日本へ渡來した事。茶の人體に及ぼす效能から茶の飲み方に移つて、茶道の濫觴にさかのぼり、東山の將軍から千利休の逸事などを喋へてゐるかと思ふと、忽ち賣茶翁の傳にはひつて來た。それが今日の主題だつた。

「さて曰く、釋氏の世に處る、命の正邪は心なり、跡にあらず、夫れ袈裟の德にほこりて人の信施をわづらはすは、われ自ら善くする者の志にあらず——」

賣茶翁が眞の志を受けるがために、茶を賣つて飢えを助けるに至つた心機一轉の心持を誠齋は講釋するのだつた。講釋が一席了ると若い男が盆を持つて廻つた。富三郎は持つてゐた錢を

みんな盆の上にあけてしまつて外へ飛び出した。

富三郎は感動した。さうして自分自身が恥かしくて溜まらなくなつた。

「賣茶翁ほどの修業を積んだ高徳の人でさへ、袈裟の德で人の施しを受けるのは潔くないと云つて茶を賣つたのだつた、然るに此の自分はどうだ、經文一つ滿足に讀めない身分で、空々しく佛の前へ座つて布施を貰つてゐるのだ――」

三河町の裏屋の親父の日に燒けた顏が眼に浮かんだ　富三郎は總身から慚愧の冷汗が流れるのを感じた。

「さうだ、たとひ飢え死をするまでも、二度とこんな眞似はしまい。一文二文の物を賣つてなりと今後は誠の志を受けていかう」

富三郎はさう決心した。

世界が急に廣々として來た。

（三）

富三郎は、生家の寺で飯を食はせて貰ふことをやめた、同時に兄の手傳ひをして坊主の眞似をして歩くことも斷然廢めてしまつた。

彼は、蛙の根付を彫つて、それを賣つて生活をすることに決心した、生活が出來ても出來なくても、自分だけは三度の飯を一度に減しても、それで押し通さうと考へた。

富三郎は、漸う十七歲になつたばかりであつた。

彼は黃楊で蛙の根付を彫つて夜店の商人に買つて貰つた。安いけれども、兎に角買つて吳れた。其の代り蛙一方だつた。彼はまだ蛙以外の物は一度も彫つたことがなかつた。下手に他の物を彫つて賣れなかつたら其の日の米が買へなくなるので、馴れてゐる蛙ばかり彫つてゐた。段々蛙が上手になつて來た。

間もなく養母と一緒に神田鍛冶町へ移つた。さうして相變らず蛙の根付を彫つてゐた。一個二百五十文位に賣れるやうになつた。尤もそれは夜店へ賣るのでなく、袋物屋へ賣るやうになつてからの相場だつた。一百五十文あれば養母と二人の一日の生活費があつた。

富三郎の蛙は商賣人の仲間でもきまつた相場が付くやうになつた。「是れ位に出來るやうになれば銘を入れなくちやあいけない」と人から勸められて、自分で考へて「玉山」といふ銘を入れた。

其の頃四谷に靜眠といふ蛙彫りがあつた。靜眠も矢張り蛙專門で、此のはふは餘程古くから賣り出してゐたが、靜眠の蛙は赤蛙の性だつた。處が玉山は、青蛙でも、ゐぼ蛙でも雨蛙でも

蛙なら何んでも御坐れで彫つた。

「靜眠い蛙もいゝが、近頃玉山といふ蛙彫りが出來て、様が變つてゐて面白い」と世間で云ふやうになつた。

安政六年五月、幕府は横濱長崎箱館を開港し、米露英佛蘭五國と通商を開始した。外國貿易の開始が日本の國情に影響を及ぼしたことは甚大であつた。當時の輸出品の主なる物は生糸、茶、水油、蠟、雜穀などであつたが、さういふ物資以外に一部の外商が着眼した物は日本の美術品であつた。其の美術品の中でも最も外人の鑑賞に適して羽が生へて飛んだのは根付であつた。木彫りでも象牙でも飛ぶやうに賣れ出した。そこで以前は根付と云へば多くは御家人の内職位のものだつたのが、俄かに盛大になつてあらゆる彫刻師が根村を彫らないものはないやうな有様になつて來た。

玉山の蛙も、さうした趨勢につれて俄かに芽をふいて來た。今迄は、夜店から袋物屋へ轉じて其の仕事をしてゐたのが、流行り出して來ると道具屋の「ハタ師」が來るやうになつた。其の後は專らハタ師の注文で輸出物ばかりを彫つた。

「黄楊では仕方がないから象牙で彫つて下さい」

とハタ師が云ふので、象牙の根付を初めて彫つた。それから今度は根付ばかりでなく、筆筒などに草木を入れたりして平彫りもするやうになつた。其の時分になると、以前淺草の古本屋で買つた北齋の繪が參考になつて大變役に立つた。筆筒などのやうな大きな物になると象牙では材料が高いので、初めのうちは水象へ彫つた。二十一二歳の頃からは大きな物でも象牙へ彫るやうになつた。蛙しか彫れなかつたのが今では何でも彫れるやうになつた。就中猿などは蛙に繼いでの得意の圖だつた。

其の時分に今迄來たハタ師が失敗して金が廻らなくなつてしまつた。玉山も同情して色々心配して遣つたがどうにもならなくて其の男は地方へ行つてしまつた。其の後へ來るやうになつたハタ師は柳原に家があつて、油紙屋を廢めて道具のハタ師になつた人だが、その仲間での幅利きで其の家はハタ師の寄合場所になつてゐた。

明治になつた。明治元年は玉山が二十六歳であつた、其の年彼は妻を迎へた。

其の時分から玉山は象牙で髑髏の根付を彫つて見たりした。髑髏の實物は手に入らないので、友近の髑髏の根付を見て參考にしたりなどした。

明治二年であつた。或日袋物商の梅屋といふ人が玉山の家へ遣つて來て

「あなたに是非一つやつて頂き度い仕事があるのですが」とい

ふので聞いて見ると恁うだつた。

それは梅屋が出入先きになつてゐる松本順がある人からオランダの軍人の頭骨を貰ひ受けた。でそれを手本にして象牙で根付位の大きさに作らせ度いといふ注文なので、梅屋が引き受けて寶實に頼んだ處が、寶實は一度行つて實物を見たばかりで氣味が惡がつて這々の體で逃げて歸つてしまつた。さういふわけで今度は玉山に頼みに來たのだが、引き受けてやつてはくれまいかと梅屋は言ふのだつた。寶實は谷中邊に住まつてゐて根付では屈指の大家だつた。

「それは面白い、是非私にやらして下さい、實は私は本物の髑髏を一遍見たいと思つてゐた處です」

と玉山は進んで承知したので梅屋は大變喜んで、早速玉山を伴つて松本順の家へ行つた。當時松本は會津から禁獄を許されて歸つたばかりで、早稲田の高松候の屋敷を買つて病院を開いてゐた。松本は名代の奇人で、パツチをはいて尻ツ端折で往診に歩いてゐた。玉山は一と月程其の病院へ通つて、實物の髑髏に就いて研究をしながら製作をした。松本は詳しく頭骨の構造を説明して呉れた。象牙の髑髏が出來上ると松本は大變喜んでそれを時計の紐に附けて歩いた。其の髑髏は後に品川彌次郎が公使となつて獨逸へ行く時松本から貰つて持つて行つた。玉山は、その縁故で松本に引き立てられるやうになつた。

或時玉山が疥癬にかゝつた。すると松本順が藥をこしらへて呉れて、「是れをつければすぐ癒る」と言つた。玉山は藥を塗り〳〵してゐるうちに、成る程表面の疥癬は癒つたが、內部へ追ひ込んでしまつたと見えてそれから大變體の具合が惡くて寢込んでしまつた。さうしてゐる處へ或日若い二等軍醫が馬に乘つて其の時分は下谷二長町に住んでゐた玉山の家へ遣つて來た。

「松本先生から頼まれて來た」と言つて軍醫は診察して呉れた。其の二等軍醫は石黑忠悳であつた。石黑ともそれから懇意になつた。或年の元日に石黑の處へ年始に行くと、

「良いお年玉を上げよう」と言つて髑髏を紙に包んで呉れた。それは日本人の髑髏だつた。

玉山は其の時分から髑髏を專門に研究してゐた。彼は以前から、氣分や感じで物の形を彫るといふことはしなかつた。蛙でも、猿でも、すべて實物を寫して來た、さうして實物を寫し寫しゝてゐるうちにどんな形でもそらで彫れるやうになるのだつた。さうなるともう寫生であつて而も寫生を超越してゐるのだつた。彼はいつでも自然其のものを粉本にもし師匠にもしてゐた。さうしてゐるうちに何時か自然は彼自身の物になつてしま

つてゐるのであつた。

生涯それを繰り返した。髑髏の研究をする場合にも其の順序を踏んだ。

明治初年に佐藤春海が和泉橋の藤堂家の跡へ大病院を建設して後進を養成した。それは後に大學東校と變つた。玉山は石黒の紹介で其處の解部科へ行つて、人體骨骼の構造作用を研究した。解剖の主任は田口和美であつた。田口は懇切に教へて呉れた。併し髑髏の研究も研究する程六ケ敷くなつた。或る時獨逸から頭骨が澤山到着したことがあつたが、其の一つ〱に就いて研究して見ると、どれもこれも異つてゐた。生きてゐる人間の容貌に同じ顔は一つもないやうに、髑髏の表情でも、骨骼でも、同一の物は決してなかつた。

米國の醫務總裁グロースから松本軍醫總監にあてゝ著書を贈つて來た。それに對する返禮を陸軍病院から贈ることになつたが、何がよからうかと云つたが、結局玉山の髑髏を贈ることになつた。其の依頼を受けて玉山は象牙で時計下げの髑髏を彫つた。それを贈るとグロースは大變喜んで口を極めて其の妙技を賞讃した。

それ以來玉山の彫つた髑髏を時計下げに附けることが大變流行つた。殊に外國へ行く醫者などはそれが無くてはならぬ物のやうになつてゐた。玉山の髑髏は外國の好事家の間にも有名な物となつた。

明治十年の第一回内國博覽會へ玉山は象牙で三分ノ一大の人體の全骨を彫つて出品した。其の博覽會には出品人に對して東京府から資金を貸與するといふ内談があつたので、彼は二百圓借りてそれで象牙を買つたのだつた。其の作品は龍紋褒賞を得た。第一回博覽會には隨分變つた出品があつたが、九尺四方の有平糖だの、直徑六尺の饅頭などが出た。

其の髑髏の彫刻は、翌十一年に再び佛蘭西の博覽會へ出品したが、どういふものだか外國で行方不明になつてしまつた。

十四年の第二回博覽會には五分ノ一大の髑髏を出品した。玉山はそれに對して名譽賞を授けられた。名譽賞といふ最優等の賞は第二回の博覽會が初まりであつた。其の時の名譽賞牌は三十五匁の純金で造られた　のだつた。名譽賞に入つたのは十八萬餘の出品物の内僅か四點に過ぎなかつた。而も個人の製作出品は玉山の髑髏だけだつた。名譽賞の第一席は仙臺の伊達安藝の屋敷跡の開拓事業、(繪圖面出品)第二席旭玉山製作の彫刻、第三席富岡製糸場の製品、第四席愛知七寶會社の製作品、といふ順序だつた。此の時に限り博覽會の式場へ明治天皇が行幸ましまし、其の御前で總裁能久親王御手づから賞狀を授與された。

僅か一寸位の小さな彫刻は、全會場を壓倒してゐるかの觀があつた。

彫刻家旭玉山の名聲は、隆々として儕輩の上にあつた。

（四）

彫刻界は象牙萬能の時代だつた。當時象牙彫刻を以て聞えてゐた人々にと云へば、旭玉山、石川光明、川本舟榮、島村俊明、大谷光利、田中鶴玉、山田玉寶などが主るものであつた。石川や島村は同時に木彫もやつた。併し、それらの大家が群雄割據の有樣で、彫刻家同志の會合とか聯絡とかいふことは更になかつた。

玉山は湯島天神町に住んで弟子を養成してゐた、が、「是れでは不可ない」と考へた。

「彫刻家同志が折り／＼一つ處へ集まつて談しをしたり、各々の作品を持ち寄つて批評の交換をしたりなどしたならば、相互の進步を促がすことにもなつて有益だらう」

斯ういふ意見を玉山は平常抱いてゐた。で其の事を象牙美術商の發山長藏や金田兼次郎に漏らすと、どちらも非常に贊成して、

「それは至極結構な事です、是非さういふ事をやり度いものだが、あなたが一つ中心になつて下さるなら我れ／＼も大いに骨を折りませう」

といふので下相談がバタ／＼と出來てしまつた。早速、玉山、發山、金田などの名で前記の大家連中に檄を飛ばし、競技會といふ名目で、每月一回宛作品の批評會を開くことになつた。そして優等の作品には賞を與へる規定を作つた。競技會への出品は無名の新進作家の作品をも勸誘した。第一回を開いたのは明治十一年三月であつた。最初のうちは向柳原の金田兼次郎の家の二階でやつてゐた。

處が、はじめの程こそみんな出て來たが、根がヅボラな職人氣質の連中ばかりなので、そんな几帳面な事は肌に合はないので間もなく出て來なくなつた。で主唱者の方から每月出掛けて行つて狩り出して來なければならないといふ始末なので、考へた末に、無盡をこしらへることにした。そんなことで兎も角もやり續けた。

當時の彫刻家は皆純粹の職人だつた。心持がさうであつたやうに、身なりから萬端それであつた。競技會へ出席する時でも身巾の詰まつた着物に平ぐけを腰つ骨の處で結んで、四ツに折つた手拭を鷲掴みにして「眞つ平御免ねえ」といふ調子だつた。其の中で玉山一人がいつも羽織袴できちんとしてゐた。玉山は

厳格で、そして飽く迄正直だつた。禮儀がやかましくて、思ふ事は眞つ直に言つてしまふといふ性格だつた。

そんな風だからみんなが玉山を煙つたがつてゐた。煙つたがるばかりでなく、幾らか苑提れてゐた。

或る時仲間うちに不幸があつて、彫刻家連中が揃つて會葬した。葬式もすんで五六人がたまつて歸つて來たが、途中鳥屋の前へかゝると、

「どうだえみんな、茲らで景氣直しに一杯やつてお開きといふことにしようぢやあねえか」と誰かゞ言ふと、

「それがいゝ、それがいゝ」と一同は直ぐ様賛成して鳥屋へはいりかけた。

すると玉山が顔色を變へて

「怪しからん事だ、今が今友達の不幸を見て來たばかりなのに、鳥屋へはいつて景氣直しもないものだ」

と偉い剣幕で怒り出したので、一同も仕方がなく、いつもなら此處らで窮屈袋を脱いで、都々逸の一つも御順に廻して、風向次第では何處ぞへ繰り込まうとでも云ふ處だが、何しろ玉山が白い眼をしてゐるので、おとなしく引き上げてしまつた。

競技會は後には不忍辨天の別當所を借りて月々開いた。或時も其の會へ大家連中が集まつて作品の鑑査をしてゐた。丁度其の日に限つて玉山は何か故障があつて來るのが遅くなつた。夏の事で池の中でも暑かつた。「何しろ恁う暑くつちやあ遣り切れねえ」といふので一同は大肌脱ぎで鑑査に熱中してゐた。

と、其の時誰れかが表の方を見て

「おい、不可ないく、玉山が來た」と慌てゝ知らせた。

「何、玉山が來た？玉山が來ようが、誰れが來ようが、暑いから肌をぬぐんだ、不思議はなからうぢやあねえか」

さう言ひ乍ら、一同は何時の間にかコソく と肌を入れてしまつた。

「今後の彫刻家は技術ばかり學んでも駄目だ、人格を向上させ頭腦からつくり直さなければいけない」

さういふ趣意から、當時美術界で非常な聲望を集めてゐるフエノロサを招聘して、毎月の競技會の席上で連續講演をして貰つた。門人の有賀長雄が通辯をした。田口博士を招待して解剖の講義を聽いたこともあつた。併し、フエノロサの藝術論にしても、解剖學の講義にしても、當時の彫刻家の耳には縁遠いものだつた。

「藝術々々つて、一體何の事だい？」

「己達の拵らへる彫刻の事なんだとよ」

「へえー」と不思議な顔をした。

みんな講演が始まると居睡りばかりしてゐた。

併し、競技會は追ひ／＼基礎が固まつて來た。最初は牙彫の人達が主だつたのが、木彫の人も加盟するやうになつて段々盛大になつた。明治十八年に、競技會を廢して、新たに彫工會が興された。渡邊洪基を其の會頭に仰いだ。彫工會になつてからも玉山が會の牛耳を執つてゐた。それから間もなく皇居の御造營が始まるといろ／＼彫刻の御用が彫工會へ對して下るやうになつた。玉山がいつも代表者で宮内省へ出頭して仕事のお受けをして來て、それを會員達にわけるのだつた。さういふ事などから、それ迄不調でゐた木彫の人々が急に世に出て來た。

玉山は三十八歳の時妻を喪つた。それから二三年經つと養母も沒した。男の子が一人あつたが、其の後は獨身で通して、家庭の問題よりも、門人の養成に力を盡してゐた。其の前からひとりの甥を養子にして自己の業の後繼者に仕立てゝゐた。

玉山は酒も煙草ものまず、さうかと云つて別な道樂もなかつた。只、仕事だけが好きだつた。

或時玉山は松本順から鹿角の煙管筒を頼まれた。下圖は河鍋曉齋の筆で、蛙が水に飛び込み、柳の下で泥鰌が躍つてゐる圖だつた。處が、其の下圖では泥鰌の腹が出てゐたのを、玉山は彫る時に泥鰌の脊を出して彫り替へてしまつた。彫り上げてから其の筒を持つて曉齋の處へ行つて

「先生の下圖では泥鰌の腹が見せてありましたが、繪としては至極面白い御趣向ですが、御承知の通り鹿角は擦れると自然其處が黑くなります、白い腹が黑くなつてしまつてはどうかと思ひますので、實は私だけの考へで脊を出して置きました。惡しからず御諒解を願ひ度いと思つて參りました――」と言つた。

玉山の云ふ處は理の當然なので、曉齋もそれに對しては一言もないわけだが、併しそれだけになほのこと面白くなかつた。それに例によつて一杯のんでもゐた。

「お話しは分りました。處で、全體貴君は私の處へ斷りに來たのか、それとも私を遣り込めるつもりでおいでなすつたのか、先づそれを伺ひませう」と例の酒癖の惡い處を發揮し始めたので、眞面目な玉山は弱つて逃げ出した。

其の筒は實に美事な出來だつたので松本は喜んで秘藏してゐたが、後にそれを花柳壽輔に贈つた。

玉山は柴田是眞とも親しくしてゐた。或時玉山は人から頼まれて「狗の胴體を見せずに首だけの物を彫つて貰ひ度い」と云はれてゐたが、どうも思はしい考案がつかなかつた。一日是眞の處へ行つて其の話をすると、

「そんな物は雜作もない、恁んな風に彫つたらどうです」と言

つて先頭は筆を執るが否や半紙へ、狗が笠の破れ目から顔だけつき出してゐる圖を畫いて玉山に示した。

　玉山は喜んで直ぐに其の圖で彫り上げた。

　明治卅三年頃から玉山は眼を煩つた。醫者から仕事を禁じられてしまつた。仕事もせずにブラ〳〵して暮してゐたが病眼は思ひのほか永引いた。すると大磯で病院を經營してゐた松本順から「當分大磯へ來て見てはどうか、家も建てゝ遣るから」と云はれたので急に其の氣になつて、湯島の家を畳んで、弟子も大勢ゐたのをそれ〴〵身の振り方を付けて置いて、養子と實子だけを連れて大磯へ行つた。松本は山の上の眺望のよい場所へ草ぶき屋根で十五坪の家を建てゝ呉れた、玉山は眼の養生をして暮してゐた。

　其の生活は實に靜かな生活だつた。親子三人水入らずで何の事件も起らない單調な日が永く續いた。けれども、玉山は其の間に樣々な事に就いて考へた。幼少の時分から生活の爲めに苦しみどほしで、其の後は志は得たけれども、年から年ぢう仕事のことや、門弟の薫陶や、其の他同業者間の問題とか、さういふやうな事柄の爲めに追ひ廻されてばかりゐて、一向落ちついて考へて見たこともなかつた内心の問題が、大きな意味をもつて自分の前に現はれて來た。人生といふものゝ意義とか、仕事といふものゝ本來の目的とか　さういふ事についても初めて深く考へさせられた。さうして彼が得た處の新らしい觀念に依つて更に物を觀たり考へたりすると、自分がこれ迄暮らして來た生活といふものが急に詰らなく映つて來た。正直だと思つた自分自身の心にすら不純な曇りはあるのだつた。

「藝術家といふ者はいつも淋しく自分獨りの道を進んで行かなければならないものだ」といふやうな考へが胸に起きて來た。

　東京の陽氣な、慌たゞしい、自分自身を忘れがちなあの生活を二度と繰り返す氣がなくなつた。ならうことなら人間の臭ひのしない山奥へでも這入つてしまふか、百姓か漁師になつて、閑な時に好きな彫刻でもやつてゐたいくらゐな氣持になつた。

　併し、東都の彫刻界は、玉山が居なくなつたゝめに急に前歯が一本缺けたやうな氣味があつた。そこで頭株連が寄り〳〵協議の結果「何時迄も玉山が引つ込んでゐては困る、大分眼も癒つたさうだから、一日も早く引つ張り出して來よう」といふので、其の代表者として高村光雲、石川光明、島村俊明、登山長藏、金田兼次郎の五人が揃つて大磯へやつて來て、早く東京へ戻つて貰ひ度いと云つて勸説した。

「諸君の御厚志は誠に有難い、併しまだ眼病も全快したといふわけではなく、少し思ふ事もあるから暫らく考へさせて頂き度

い」

玉山はさう答へた。五人の者は空しく東京へ歸つた。

大磯へ來てから一年經つた。二十五年の冬、玉山は一家を擧げて京都へ移住してしまつた。

京都へ行つては、加野夏雄の紹介で其の親類の某をたよつて行つて世話になつた。夏雄は元來京都の人で、其の子の一人は玉山の門人になつてゐた。

京都へ隱遁した玉山の心持から云へば、煩はしい世間的の交渉は悉く斷ち切つてしまひ度いのであるが、併しさうばかりもならなかつた。二十八年の第四回博覽會(京都)と、三十六年の第五回博覽會(大阪)には審査官を勤めた。

三十三年の巴里博覽會へ出品する目的で、農商務省から資金を借りて象牙を買つて、二尺位の高さの官女を彫刻した。が、それは期日に間に合はなかつた。玉山は農商務省から借り受けた資金だけは返金しなければならなかつたが、それは象牙の代金ばかりで五百圓を要した。其の彫刻は美術協會の展覽會に出品して、遂に東宮職御用品となつた。

帝室技藝委員の内命に接すると、玉山は何處迄も固辭して受けなかつた。

京都へ行つてからも象牙を彫ることは彫つたが、彼は正倉院あたりの古美術に就いて學んだ結果、嵌入彫刻を熱心に試みた。そして遂ひにそれも大成した。嵌入にかけては、近代に於て玉山に及ぶ名手を見ないのである。

玉山が自己の後繼者として唯一の力にしてゐた養子の榮三が父に先立つて歿した事は、玉山に取つて何より大きな不幸であつた。

大正十年に、美術協會の建築費へ寄附をするために、協會の委員が合作の屛風を作つた。其の時玉山は多年秘藏してゐた海松の材料を用ゐて扇面へ萬年青の嵌入を試みた、其の作は殊に傑出して合作中での逸品であつた。

それが玉山の刀を執つた最後であつた。(完)

追記　玉山先生訪門記

旭玉山の名を私が初めて知つたのは、名匠傳の述作に着手してからのことだつた。それは他の彫刻家の傳記に關する材料を蒐集してゐる場合に、折り〳〵其の中へ旭玉山の名が出て來るのだつた。さういふ程度で知つただけの旭玉山の輪廓は極めて朦朧とした程度のものであつたが、それでも玉山といふ人が、極めて人格の高い、そして勝れた技倆を有つてゐる彫刻家であるといふことを知るには十分であつた。僅かに片鱗を現はしても、波間に隱るゝ大魚の姿は遂に見遁せないのであつた。そこ

で私は斯道の先輩に就いて玉山の事を問うて見ると、「旭玉山は明治の彫刻界に於ける元勳で頗る非凡な技倆を有つてゐる人だ」と何人でもさう答へた。猶私は玉山は現在でも京都で存命でゐるといふことも知つた。

「それ程の大家をどうして自分は今迄知らずにゐたのだらう？」と私は思つた。無論私自身が美術の門外漢であり且つ世事に疎いからには極まつてゐるが、それにしてからが名前位は朧でも知りさうなものだつたのにと、些か不思議の感に打たれた。で考へて見るのに、世の中といふものはまことに不公平なものである。同じ位の力量を有つてゐても榮える人と榮えない人とがある。藝術家などに至つてはそれが殊に甚だしい。さしたる天分も技倆もない人が不思議に人氣を博して一代の流行兒になつてゐるかと思ふと、一方では眞の天才が世に埋もれた儘終生頭角を露はさずに終るやうな例は、東西古今を通じて珍らしくない。藝術其のものは飽く迄純粹なものであるけれど、それを鑑賞する者は世俗なのだから勢ひ斯うした矛盾も免がれないことである。又、眞價以外に、其の人の置かれた地位境遇の如何に依つても、社會的の名聲は大を成す人と成さない人とが生じて來る。だから藝術ばかりは棺を蓋はぬ間は到底其の眞價を測る事は不可能だ。死後百年二百年の後に至つて初めて公平な標準が取れるのである。それでいいのだ、そも／＼藝術家を志すほどの者なら、一時の名聲だの物質上の報酬だのは眼中に置かず常に百年の後に知己を俟つ底の覺悟をもつて自己の藝に精進すべきだ。藝術家だとて人間だから名聲も欲しい金も欲しいそれで立派な生活を營むのに何の不思議があるかと近頃では云ふ人があるけれど、それは間違ひだ。藝術家は自己の藝を生かすことだけが爲事である、自分を生かし家族を生かす事は本來の目的にはならない。私は飽く迄所謂名人氣質といふものを尊重し憧憬する者である。兎に角、旭玉山の如き名人が、比較的社會に認められず若しくは忘れられてゐるといふやうな事は當然有りがちなことである。私同樣に、これまで旭玉山の名前を知らなかつた人が世間には尠くあるまいと思ふ。で私は、是非共玉山の傳を書いて見度いと考へた。私の今度の仕事は、著名な藝術家の傳記を書くよりも、寧ろさうした隱れたる名匠の事蹟や性格を研究して、それを社會に紹介する處に、より多くの意義があると自から信じるのである。

さういふ目的を抱いて、玉山の事を知つてゐさうな二三の人に就いて訊いて見た。すると斷片的の材料は多少獲られたが、一向筋道が立たない。處が、或人に敎へられて、梅澤隆眞氏の紹介を以て京橋大鋸町の金田兼次郎氏を訪問した。當代の金田

氏は二代目だが、先代は彫工會の發起者で日本の彫刻界に多大の貢献をした人で、明治初期の彫刻史からは名前を逸することの出來ない功勞者である。いまの金田氏は其の養子となつた人であるが、是れまた柴田是眞に就いて畫を學び、後に其の女を内室にして、繪畫彫刻共に造詣が深く一家の見識を具へて居られる人であつた。金田氏は、私の目的を聞いて大層喜ばれた。

「併し私も玉山先生の事は、明治十年以後の事だけしか存じませんが」と言つて、十年頃からの事を詳しく話された。當時の彫刻家の一般の生活や彫工會の前身の競技會時代の事柄などを私は氏によつて知ることが出來た。其の上氏の手許に秘藏されてゐる玉山の彫つた髑髏と、例の曉齋が下圖を畫いた煙管筒を見せて頂いた。此の煙管筒は、花柳壽輔の手を離れて其の後轉々した揚句に不思議な因縁で金田氏の有に歸したのであつた。

が、まだ是れでは傳記にならない、何故かといふと肝心の生ひ立ちが一向分らない。併し折角茲迄こぎ付けながら此の儘で手を引くのも殘念だから、少し大仕掛にはなるが自身京都へ行つて玉山を訪問して、直接に談しを聞くよりほかはないと決心した。其の考へを金田氏に話すと、

「それは非常に結構な事ですが、唯困つた事は、先生はもう二年程此のかた病氣で床について居られるのです、何しろ老體の事ですから恢復は六か敷いでせう、會つても談しが出來るかどうか疑問なのと、もう一つは、玉山といふ人はまことに無慾なそして名聞を好まぬ人ですから、滅多なことでは自身の口から經歷などは話しますまい、ですから、京都へお出掛けにならうといふのなら、其の前に私から書面で樣子を問ひ合して見ませう」

と金田氏は言つた。其のことに依賴して私は歸つた。處が間もなく金田氏は京都へ行かれた。玉山先生の處へ、病氣見舞をかねて旁々私の事を先方へ通じて置いて下さらうといふ親切からであつた。私は金田氏の歸りを待つて京都へ向ふべきであつたが、他に都合もあつて氏と行き違ひ位に東京を發つてしまつた。それから四五日後に私は京都へはいつた。

麩屋町通の澤文といふ宿屋へ着いて、中飯を濟ますが否や、私は先づ第一に玉山先生を訪問すべく俥を傭つて宿を出た。何年振りかで見る落ちついた京都の町が私の心を愉しませた。二月の十日頃だのに、其の日は割りに暖かくもあつた。俥は上へ上へと驅けた。皇居の中の公園を拔けたりした。俥屋は、紫宸殿だの、何の大納言の屋敷跡だのと云つて私に敎へて呉れた。

室町通下立賣といふあたりは、場末に近いらしく、しもた家の多い淋しい町だつた。俥屋はのろのろと歩き乍ら軒別に表札

を覗き込んで行つたが、とある家の前で梶棒をおろした。見ると、べにがら塗の格子造りの古い家の門口に「旭玉山」と書いた小さな木の表札が掛つてゐた。

其の家は、入口から奥へ土間が突きぬけてゐて、突き當りの境に暖簾が掛つてゐた。丸髷に結つた婦人が執次ぎに出て來た。私が名刺を出して簡單に來意を述べると、婦人は私を取つ付きの八疊位の間へ上げて座蒲團などを出してから、名刺を奥へ持つて行つた。其處は疊も壁も古びてゐたが、隅のはふに土佐繪か何かの屏風が立てゝあつた。間もなく其處へ四十位の質朴な樣子をした男の人が出て來て、初對面の挨拶をした。それが玉山先生の息晴一氏であつた。

「あなたのお話は先日金田さんがお出で下すつた節伺ひました。態々お出掛け下すつて誠に恐縮致します」晴一氏は何處迄も謙抑な調子で話される。

「先生の御病氣はいかゞですか」

「それがよろしくないのです。何しろもう齢が齢ですから……」

「いかゞでせうか、お目に掛つてお話しを伺はせて頂くわけにはまゐりませんでせうか」

「さあそれが……醫者からも談話をとめられてゐるやうなわけでして、それに宅の親父はまことに無口な人間ですから、お會ひ下すつた處で格別の話しもあるまいと思ひます。併しあなたの事は金田さんからのお話しで親父も承知しては居る筈でございます」

私も京都へ飛んで來は來たものゝ、大方恁んな事になりはしないかと實は大部分豫期してゐたのだつた。いかに私がづうづうしい人間でも、重態で床についてゐる病人に對つて「あなたの身の上話しが聞き度い」などとは言へたものではない。私は斷念するよりほかは仕方がなかつた。

「それでは一つ、あなたからお話しを願ひ度いものです。恁ういふ事もあつた、あゝいふ事もあつた、などと日頃お聞きになつてゐる事もおありでせうから」

「どうもそれが何にもお話し致す事がないのです。申し上げたやうにまことに無口な人でして、若い時分の事なぞを何一つ話したことはありません、ですから家族の者でも親父が昔どんな事をして來たか、どういふわけで彫刻を始めたかといふやうな事も一向存じませんのです」と晴一氏は言はれた。

私は殆ど當惑してしまつた。玉山先生の口からは聞かれなくても、家族の方々にあへば大抵な材料は獲られることゝ思つてゐた。晴一氏といふ方は、知つて隱して居るやうな人でないことは明かである。又そんなわけもない。此の上はもうすべてを

斷念するのほかはなかつた。

「どうも私としては殘念ですが致し方がありません、それでは傳記のはふは斷念致しますが、併し折角出掛けて參つたことですから、せめて先生に一寸でもお目に掛つて歸り度いものです。それも御氣分の惡い時では押して願ふことも出來ませんが、まだ暫くは滯在する考へですから、ちよい〳〵伺つて見ることに致しませう、どうかそれだけお願ひ致し度いものです」私はせめて玉山翁の顏も見て歸らないことには、諦らめるにも諦らめられないのであつた。

「少々お待ち下さいまし、一寸きいて見ますから」晴一氏は恁う言つて私を殘して奧へ行つた。やゝ暫らくして晴一氏は戻つて來て

「親父に申しました處が、今日はいつより氣分もよいからお目に掛ると申します」と言はれた。

私はそれだけでも非常に嬉しく感じた。他人に讀ませる傳記などは書かなくも、自分の尊敬してゐる老藝術家の風丰に接することが出來るなら、私自身の心にだけはいつ迄も忘れない印象を殘すことができるのだ――。

暗ぼつたい六疊位の中の間を通ると、其の奧の座敷が玉山翁の病室だつた。翁は、厚く重ねて敷いた床の上に、さらに壁際へ寄せて蒲團や座蒲團などを三尺位の高さに積み上げて毛布を掛けた上へ、上體を仰向きに凭せ掛けて寢んで、輕く眼を閉ぢてゐた。頭は禿げて後ろと横にだけ薄い毛が殘つてゐる。おも長で、眞つ白い頤髯が四五寸位の長さに伸びてゐる。其の顏は一と目見た時殆んど死相に近い程窶れて、瘦せ衰ろへてゐた。

何といふ質素な光景であらう。其の家と云ひ、あたりの樣子と云ひ、餘りと云へば質素である。私は最初から、玉山先生が堂々たる邸宅を構へて豪奢な生活をしてゐるとは無論豫期してゐなかつた。けれども、隱遁したとは云ひ乍ら一代の巨匠である玉山先生の住居であるからには、きつと小薩張りとした風雅な暮しであらうと想像して來た。處が私の其の小さな想像さへ全く裏切られてしまつた。玉山先生の住居は、小薩張りもしてゐなければ、微塵の風雅も無い。極端に質素なのである、ほんたうを云へば貧しいのである――。

天井も煤び返つてゐたが、壁も襖もよごれてゐた。病人の枕許の黄色い壁はザラザラした中塗りのやうな壁だつた。身に掛けた物も粗末だつた。搔卷だけは古くも絹布だつたが、上に掛けた二枚の蒲團も、下に敷いてゐるのも、木綿で綿の固さうな蒲團だつた。

床の間には見舞の菓子折が澤山置いてあつた。
六十位の、半白の老紳士が一人、病床の裾のはふに座つてゐた。
玉山翁は、胸の上で兩手を組み合はせた儘ぐるりと頭を廻して、
「是れは〳〵、初めてお目に掛ります、私が旭玉山で御座います、遠方からようこそお訪ね下さいした」と、皺枯れた苦しさうな聲で言つた。
「其處にいらつしやる方は、足立さんと云つて、お醫者様ですが、私が京都へ來た時から御懇意に願つてゐる方です」
恁う言つて玉山翁は、半白の老紳士を私に紹介して呉れた。
其の後で又恁う言つた。
「先達ても金田さんがおいでになつて、あなたが私の傳記を書いて下さらうといふお話を伺ひました。併し私は、人様に知つて頂くやうな人間ではない、詰まらん事しかして居りません。ですから以前にも、新聞や雜誌の方から經歷を話せと言はれたこともありましたが、何時でもさう云つてお斷り致しました。しかし、金田さんのお話しもあり、あなたも御親切にお訪ね下すつたことですから、私も考へて見ましたが、玉山といふ人間はどんな人間だつたかといふ事を、幾らかの人様に知つて頂くのもいゝやうに思ひます、傳記などといふ事は別にしまして、今日は幸ひ足立さんもゐらつしやることですし、それに昨日注射をしたので今日は痛みもなくて氣分がよう御座いますから、纏りはありませんが、思ひ出した事を、少しばかりお話し致しませう」
私は意外だつた。嬉しかつた。併し、此の重病人に長噺しをさせて萬一體に障りでもすると申し譯がないと思つた。すると足立國手が側から、
「何、私が附いて居るから大丈夫です、折角話さうといふのですから聞いてお遣んなさい」と言つて呉れたので私も安心して聞くことにした、晴一氏も側へ來て聞いてゐた。
玉山翁は、幼少の時からの事を話し出した。子供の時分の貧乏だつた事を話してゐる時の翁の顔にはいまだにそれが消えないやうな痛ましい影があつたが、後年彫刻を以て一家を爲した時分からの話になると、翁の語氣には俄かに元氣が附いて來た。華やかな春青の追憶は、此の瀕死の老人の肉體に生き〳〵とした血しほを盛り返して來たかのやうに見えた。
ぼつり〳〵話されるので、二時間以上もかゝつた。
「私の生涯は大體それでお仕舞ひです、明治二十四年に京都へ來てからの事は、何もお話しする事がありません」

玉山翁は恁う云つてやゝ暫らく深い瞑想に耽つてゐるやうだつた。それから後で又恁う言つた。

「お聞きの通りで、私の彫刻には師匠がありません、だから私は本筋の彫刻といふものを習つたことがない、古い物を模刻した事もない、只我流に、物の形を寫すことだけしか知りません。ですから當今のやうに人の頭が進んで、藝術といふ物を大變六かしく云ふやうになつて來ると、私の彫刻などは何にも價値のないものなのです」

「お言葉ですが、傳統を學ばなかつたといふことは、先生の爲めには反つて善かつた事ではありませんでせうか」と私は言つた。

「否、さうではありません、古人を學ばない者は、狹い自分といふものから出られないから、立派な傑れた仕事は出來ません。それと私は、最初から錢を取る仕事をした、明治になつてからは象牙の輸出に眼を着けて、輸出物ばかり多くやつた、いきなり金になる仕事ばかりやつて來た、それが不可なかつたのです。併し、私はさういふ時代の人間だからそれでも僻はないとしても、弟子に氣の毒でした。私が本筋の彫刻を知らない爲めに、弟子にも矢張り自分のやるやうな事ばかり習はせました。これがために時世が變ると間に合はない、私が世話をした弟子の中にも才分のある者もありました、が、師匠の私が惡るかつたために今の世になつて傑れた彫刻家になれた者が一人もありません、私は是れだけが實に……」

玉山先生の言葉は其處で切れた。其の時、仰向いた儘固く閉ぢてゐる其の兩眼から泪が迸つて、肉の落ちた頰を傳つてツル〳〵と落ちた。私自身も、言はふやうない感激に撲たれて胸が迫つて來た。私は、玉山先生の心持を理解することが出來た。今殆んど臨終にも近い病床に横たはつてゐる此の老藝術家の、心の苦悶と悔恨とを思ひ遣ると、其の僞りのない泪に對して、心からの同情をそゝがずにはゐられなかつた。

私は清一氏に頼つて、第二回博覽會の名譽賞牌を出して見せて貰つた。

牙彫髑髏　　東京府本郷區湯島天神町　旭玉山

寸餘ノ牙材ヲ用ヰ髑髏ヲ彫模シ其顱蓋ヲ平斷シテ内部ヲ開示ス精緻纖巧造化ノ秘ヲ奪ヒ醫學ノ資トナル眞ニ絶世ノ技倆ナリ又福井安兵衛出品ノ印籠ニ鹿角ヲ用テ螳身蘆葉ヲ彫嵌スル意匠嶄新活機ヲ具フ精粗兩ナカラ得タリ共ニ功名譽ヲ輝カスニ足ル絶タ感賞ス可シ

此の一枚の賞狀こそ、まさに玉山の生涯を飾るに足りるものであらう。

先刻足立國手は淸一氏の内室を側へ招んで「つかん事を云ふやうですが、此の家に算盤と帳面があるかどうか調べて見て下さい」と言つてゐたが、妻女は暫く經つてから來て、

「算盤は見掛けたことが御座いませんでしたが、帳面も只今探して見ましたが一冊も見當りません」と言つた。

「あゝさうですか、御面倒でした」足立國手は妻女にさう答へて、それから其の元氣のよい顏を莞爾々々させ乍ら私に向つて言つた。

「私は玉山さんとは三十年來の交際ですが、其の交際を始めた動機について、一寸面白い事があるからお話し致しませう。其の當時私は京都醫學校――京都府立大學の前身です――に奉職して居りました。當時の校長は猪子博士でしたが、其の猪子さんが明治二十五年に獨逸へ洋行なさる時、職員連から餞別を贈ることになりましたが、何を贈るが宜からうと相談した結果、旭玉山に賴んで時計下げの髑髏を彫つて貰はふといふことに決つて、東京へ照會してやつた處が玉山は去年から京都へ來てゐるといふことが分つたので、其の時私がお使役でやつて來て、初めて玉山さんに會つたのでした。で、其の事を依賴すると、其の前に一つ同じ物を他から賴まれてゐる、それを彫つてからでなければ取り掛れないか、さうしてゐると到底日限がないから引き受けられないといふ挨拶でした。それでは困るので段々聞いて見ると其の前約者といふのが我れ〳〵の知つてゐる人でしたので、其の人のはふへ交渉して、我れ〳〵の注文のはふを先きにやつて貰ふことになりました。そこで初めて彫刻代は幾許ですかと訊ねた處が、五圓だと云ひます。明治二十五年でも五圓は大金でありません、餘り安いので私も案外だつたが、實は職員全部で醵金するのだから金が澤山集まるから、代金は何十圓でも構はぬから一つ精一杯骨を折つて彫つて頂き度いと云ふと、精一杯にやつて是れ以上には出來ないといふ處で五圓だと玉山さんが言ふのです。兎に角それで賴んで歸りましたが、品物が出來上つて來てから、五圓では餘り氣の毒だから十圓出した處が、五圓だけ返してどうしても受け取らない。餘り安いではありませんかと私が云ふと、否決して安くはない、實は東京に居つた時は十圓取つたが、京都は屋賃初め物價が安いので一日の生活費が五十錢あれば足りる、それで髑髏一個彫るのに丁度十日掛るから、五圓貰へば丁度宜いわけであると玉山さんは言ふのでした。其の時から私は、此の人は面白い人だと思つて、段々深い交際をするやうになりました。玉山といふ人は萬事が

さういふ遣り方で實に無慾な人です。つい近年石黑忠悳さんから賴まれてゐた象牙の筆筒を彫りましたが、是れは是眞の下圖で、明治七年に材料と彫刻代七圓を受け取つた儘になつてゐた物ださうですが、玉山さんに云はせると是眞の下圖が面白くないといふので手を着けずにあつたのです、私も頻りに勸めて先年それを彫り上げましたが非常によい出來で石黑さんも大層お喜びでした。處が玉山さんは、彫刻代は明治七年に貰つてゐると云つて受けないのです、たつた七圓ばかり貰つてゐたつてそれでは餘り莫迦々々しいではないかと其の時も私が云ふと、玉山さんは、否、七圓だと思へば安いやうだが、明治七年から彼れ是れ五十年の利息を勘定して御覽なさい、此の彫刻位高い物はないと言ふのでした。實に金の嫌ひな人ですよ。それから、只今お聞きでせうが、此の家には算盤と帳面が無いさうです、是れは以前誰れかに聞いた事でしたが最前ふと思ひ出したので調べて貰つたのですが、矢つ張り無いさうです、それで玉山といふ人が無慾な人だといふ事が分りますでせう」

すると、默つて聞いてゐた玉山翁は、痩せ細つた手を横に振り乍ら言つた。

「不可ませんく\、そんな事は決して褒むべき事ではありません、私は謂はゞ職人根性で、無慾ではない自墮落だつたのです。仕事をすれば飯は食へるといふ考へで暮して來たのです、私が自墮落だつたばかりに、今日家族の者に難義を掛けて居ります。實にお恥かしい次第です」

何といふ潔白な人格であらう？今日の世の中に於て、兎も角も清貧に甘んじて生活してゐる人があつたならば、それだけでも確かに尊敬に値する人である。然るに玉山先生は、清貧を以て甘んじてゐるのでもなければ、無論それを誇りとしてゐるのでもない、先生はそれを自己の不德だと思つてゐるのである。玆まで到達して初めて眞の悟りを得た人と云はれるのであらう。

偉大なる人は、限りなく謙遜なるものだといふ事を私は知つた。

私は、此のたつた一度の玉山先生との對面に依つて、千冊の書物を讀んだよりも、萬度びの說敎を聽いたよりも、遙かに多くの事を敎へられたやうな氣持がした

其のむさくるしい家が、燿く殿堂のやうに思はれた、垢染みた蒲團の上に横たはつてゐる老彫刻師の顏は、穢れのない物の尊嚴を示して、神のやうにかうく\しく見えた。私の頭はおのづから其の前に下つた。

「瘠我慢の說」に關する徳富君の記事に就て

石河幹明

貴誌本年の新年號に載せられた徳富蘇峯君の回顧錄の一節に福澤先生の「瘠我慢の說」に關して左の記事があつた。

明治三十三年の末から四年の初頃かと覺ゆ福澤翁に曾て勝、榎本二氏の出處進退に釋然たらざるものあつて「瘠我慢の說」なるものを著きそれを兩氏に示されたることがあつたそうだが久しく其れを篋中に藏して居たに拘はらず何を感じられたか其れを當時公にせられた勝先生は福翁から返事を求められたに際し「行藏は已れに在り是非は人に在り御意見忝く承り置く」といふやうな挨拶であつた流石に先生だと思つた然し後進の予としては既に世間に公にせられた以上それを看過する譯には行かなかつたから自ら揣らず「瘠我慢の說を讀む」といふ題にて予の所見を陳じた自ら僭して海舟翁に代りて陳じたといふではない併し翁の意志を忖度すればまさに斯くの如くあるべしと思ふたのであつた處が其論文は意外にも反響があつた之に對して更に福澤翁の駁論が出て來つた翁が自ら筆を執つたか或は他人に代筆せしめられたかそは予の知る所でないが兎に角翁の駁論なるものが出て來つたやがて間もなく翁は逝かれた（中略）そこで右の予に對する翁の駁論は翁の絕筆でなければ少なくともそれに近いものであつたらう云々

右に付き余の聞知した事實を述べて貴誌讀者の參考に供したいと思ふ「瘠我慢の說」の公表に付き徳富君は「久しく其れを篋底に藏して居たに拘はらず何を感じられたか其れを當時公にせられた」と言ふて居るが當時これを公にしたのは斯ういふ譯合からである福澤先生があの論文を書いて勝榎本兩氏に贈られたのは明治二十四年の冬頃であつた爾來深く篋底に秘して一二の親友の外は何人にも示されなかつたが同三十三年の末頃に至り其れが地方の新聞に現はれ又都下の雜誌などにも出たから余は不審に思ふて之を先生に語りし處先生の言に自分にも分らぬが聊か思ひ當ることは曾て知合の栗本鋤雲翁は平生舊幕の遺臣を

以て自から居り（筆者曰く陶淵明燈下讀書の圖と云ふ題で「門巷蕭條夜色悲、鵂鶹聲在月前枝、誰憐孤帳寒檠下、白髮遺臣讀楚辭」と云ふ翁の有名なる詩を見ても其志を知る可きである）終身その節を變ぜざりし立派な人物で勝氏等の行爲には大反對の意見を抱き自分と會談の折には常に之を憤慨して居たあれを書いたとき一本を寫して之を懷にし翁を本所の宅に尋ねた處翁は老後眼病で字を讀むに餘程困難の樣子であつたから斯う〳〵いふ趣意で一篇の論文を草し勝榎本兩人に贈つたがこれは他人に示すものではないこれを示すは貴君と拙者の恩人たる木村芥舟翁とのみであるとて其大意を語つた翁は之を聞て涙を流して非常に喜び善くも書いてくれられた緩々拜讀したいから暫時借用したいと言ふので其儘置て歸て來たが栗本なり木村なり決して人の秘錄を他人に示すやうな人ではない察する所或は栗本翁の許に置て來た寫が翁の死後その家から出たものではなからうかと言はれた依て余は新聞雜誌に出た文には大分文字の誤脫等がある既に出た上は世に誤りを傳ふるよりも寧ろ正文を公にした方が善いと思ひ先生の許を得て明治三十四年一月の時事新報に之を載することにした次第であるが其後當時仙臺の奥羽日々新聞の主筆であつた友人横武氏の談に據ると同新聞の社長をして居た友部伸吉と云ふ人の弟が曾て栗本翁の世話になり報知新聞の記者をして居たことがあつた其緣故で伸吉氏も翁の家に出入することゝなり翁の死後「瘠我慢の說」の一書が自ら氏の手に入つたので鬼の首でも執つたやうに大喜で仙臺に持歸り其大要を新聞紙に掲げ大に勝榎本の行爲を論じたことがあつたと云ふ其出所は果して先生の推察通りあつたこれが「瘠我慢の說」が世に公にせられた顚末である尙ほ序ながら先生は「瘠我慢の說」を兩氏に贈つた後更に書狀で其返答を促し兩氏からの挨拶もあつたが何れも要領を得たものではなかつた其後先生が紅葉館で何かの宴會のとき勝氏と同席したので直接に其意見を問はれたら氏は之に對し「何分にも親方(慶喜公の事)が臆病であつたものだからあのときは困つた」と申譯的の辯解のみで多く語らなかつたと余に話されたことがある。

「瘠我慢の說」が時事新報に出ると間もなく國民新聞に其評論が出たので時事新報は更に又これに對する評論を載せた之に付き德富君は「翁が自ら筆を執つたか口授せられたか或は他人に代筆せしめたか兎に角翁の駁論なるものが出て來つた」と言れて居るが時事新報に出た評論は余の書いたもので先生の執筆でも口授でも代筆でもない先生は明治三十一年九月の大患後全く執筆を止められたのである先生は其病前幕政の當時親しく見聞せられたる事實に據り我開國の次第から幕末に於ける外交の始

末を記述して一書を著はさるゝ考で腹案も既に成り共事に就て毎度余等に話されたこともあつたが病氣の爲めに其れが出來なかつたのは非常の遺憾である國民新聞に「瘠我慢の說を讀む」といふ評論が出たとき誰れからか之を聞かれ病後の不自由なる言語で二三の事實を指摘せられ「石河さん豫ねく話して置いた事實に據り一つ駁論を書いて見てはどうか」と言はれたので書いたものが時事新報に碩果生の名を著した「瘠我慢の說に對する評論に就て」といふ一文即ち德富氏が福澤翁の駁論と認めたものであるが實際先生の執筆でないのは無論又口授代筆でも何でもない唯余が平生折り〳〵先生から聞知して居たる幕末の事實を根據として之に自家の意見を附したもので立論行文とも全く余のものであるから聊か其事實を述べて回顧錄讀者の參考に供する次第である。

皿の話

工學博士　佐藤功一

壺の話がすんだら、こんどは皿の話をせよといふのですか、それではイソップ物語のあの狐と鶴のやうですね。狐が鶴を招いて平皿で豆のスープを馳走したら、嘴の細長いかなしさにはどうする事も出來ず、淚をぼろ〳〵とこぼして口惜しがつた。そしてその返禮に狐をよんで口の小さい壺に料理を入れて出したといふあの話。イヤ其の逆で鶴が先に壺で馳走したので狐が其返禮に皿を使つたのだつたか、孰れにしても壺と皿とは陶器の形の兩極端、盤はその中間にある。昔の鹿爪らしい本などには壺と皿と盤とは陶器の三才也などと書いてあるかも知れぬ。此の三者の間にそれ〳〵の異相あつて總ての陶器はそのうちに含まれる。孰れにしても壺と皿とは其兩端に相違なく、壺の愛好者である私がどうして皿の愛好者でなければならぬといふことがいはれるでせうか。

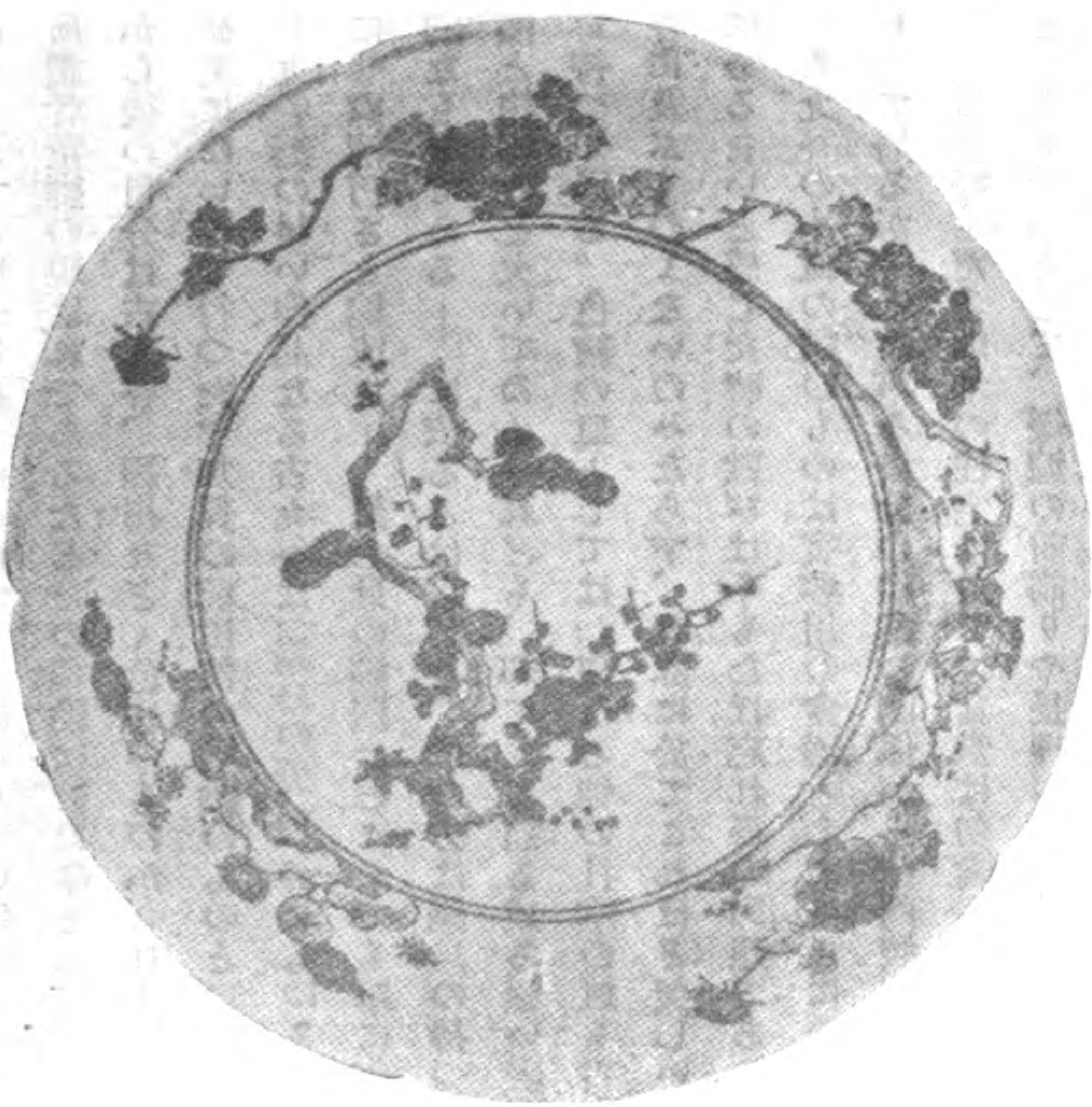
なぜ壺だけが面白いのか、陶器には色々あるのにたゞ壺のみ

を好むとは料簡が狹ますぎる、と或人のいつたに對して、液體は澤山あるのに君はなぜ酒だけを喜ぶのかと答へたことであつた。とはいふものゝ私は決して皿を好まぬといふのではない。實をいふと壺は本來壺そのものとして好きなのだが、古陶器として最初に私の目を醒してくれたのは皿で、數年前O氏から柿右エ門と鍋島の講義を聞いた時からであつた。尤もその以前に倫敦のサウスケンシントン博物館で波斯物のすばらしい色繪の皿を見て、またなく美しいものと感じたがそれはその當時だけ頭を支配したに過ぎなかつた。

多くの標本に付てO氏の該博な説明は、日本に、こんなに美しい色繪の皿があるかと私を驚かした。如何に其折の講演の藝術的のもので且つ深い研究からなされたものであつたかは、此講演を骨子として編まれた同氏の著書「柿右エ門と色鍋島」の内容や、今日最も多數の會員を有する陶磁器鑑賞家の會合である彩壺會が此の講演に基いて起つたのに見ても明かである。此席にあつた聽衆のうちには、翌日から骨董店や夜店までもあさつて、柿右エ門風と鍋島風の皿を求め、O氏の教室に鑑定を請ふものが多くあつた。

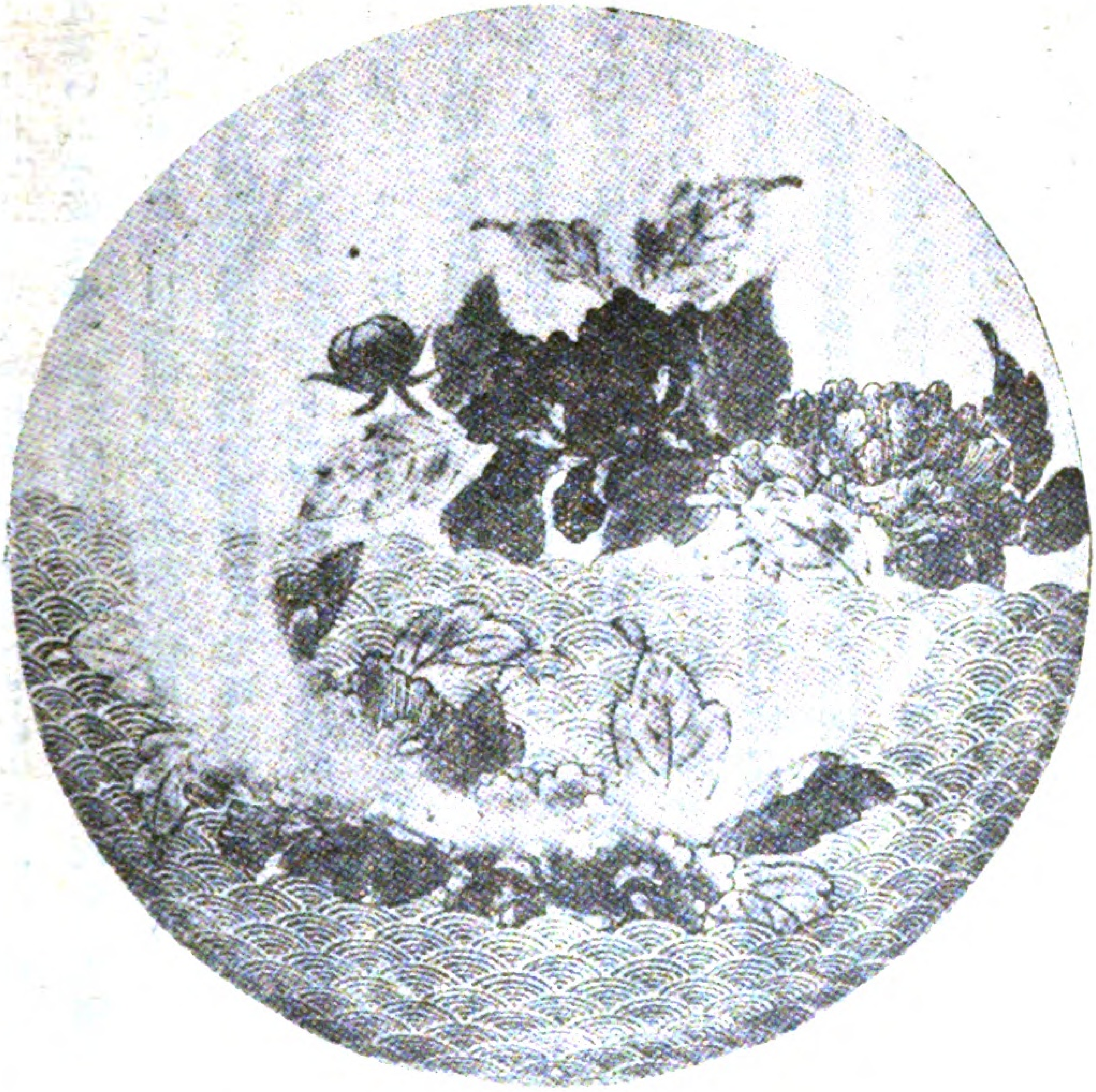
柿右エ門とは伊萬里の酒井田柿右エ門窯の陶器をいひ、鍋島とは同地の鍋島侯「官窯」の製品であつた。柿右エ門の皿の特色ある乳白色の地に朱と淺い綠青の目立つ優さしい文樣は、どんな無關心な人をも引きつけずにはおくまいと思はれた。それほども純な、そして純なだけ極く解り易い藝術品である。(第一圖)

第一圖「O氏所藏中皿」



鍋島の方は、これはまた洗練の極致である。あの端形のある

高い「こう臺」、稍深めにむつくりと整つた曲面は、全く日本化されたもので古い時代の我國の木彫の神像などに見るあの單純



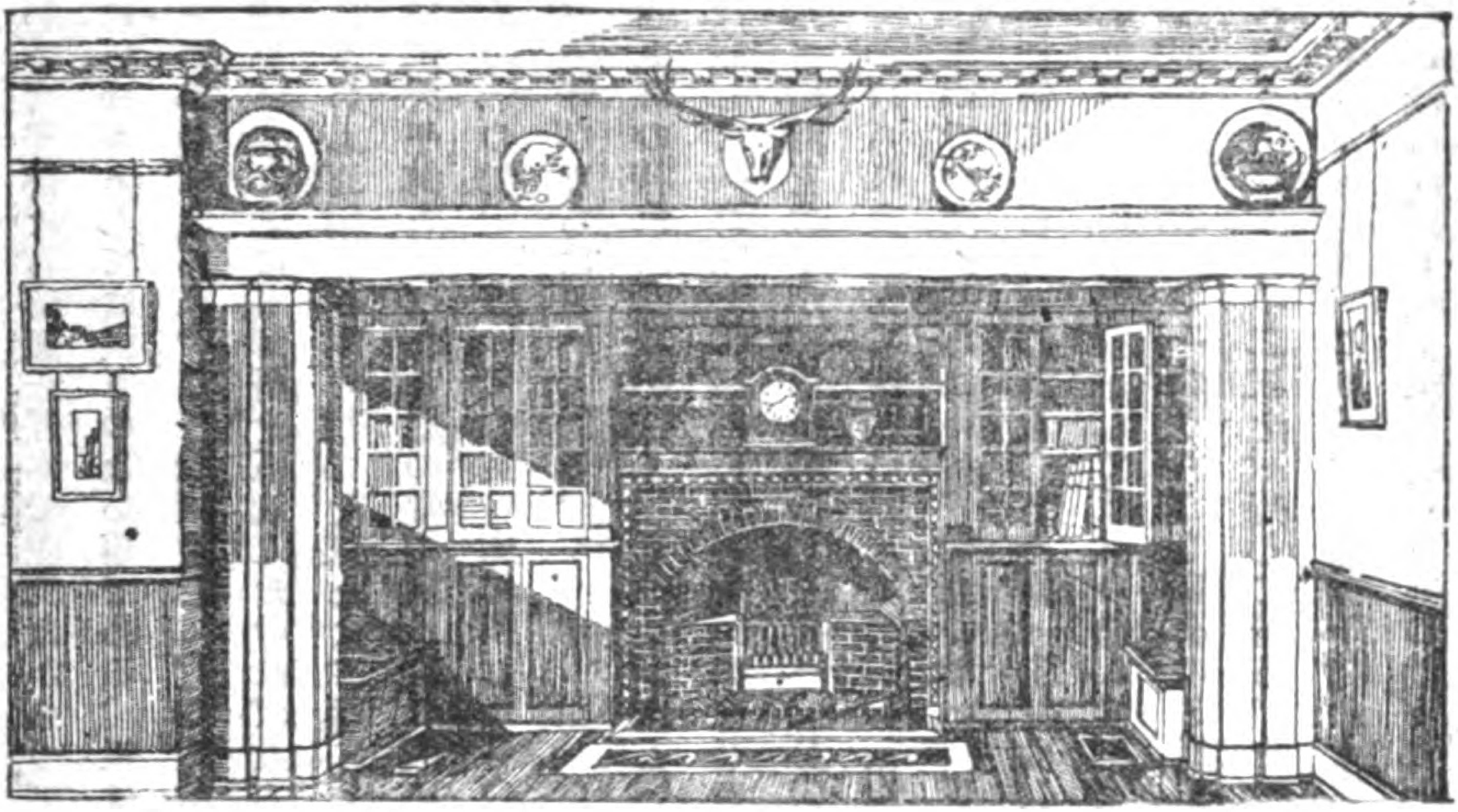
第二圖「O氏所藏の波に牡丹の中皿」

にしかも豐圓な形式と一致する。そしてその内部に施された文樣は洵に絢爛を極めたものである。(第二圖)

初めて或る藝術史を覗いた人の多くは、其解得した是等の藝術の約束を準繩として、これぞと思ふ藝術品に當つて判斷を試みやうとする興味を持つ、これが人々の陷り易い知的の遊戲で所謂骨董癖の現はれであるなどとの議論はせぬ事として、それから後の自分は古九谷、穎川など丶色繪のものから日本陶器の研究にはいつて行つた。加賀の前田侯の奬勵のものとに發達した九谷窯の早い作品なる古九谷は、鍋島の美が、一糸もゆるがせにせぬ精巧さと婉麗さ——然し此の婉麗はどこまでも單に表面的なものである——に依るとは事替り、此の方は鍋島の持つ整然と絢爛とを欠いてゐるけれども、却て人に逼る或る強い表現を持つて居る。色繪の皿としては如何なる他の日本の皿も古九谷に及ぶもの丶ないのみならず、世界に於てこれほど美しい皿はあるまいと感じた時の歡びは今もなほ忘れ得ぬ回想である。

古九谷の小皿の揃のものは賓客用の食器として人々に珍重せられて居るが、私は寧ろ自分の職業の關係から室内裝飾用として大皿を好んだ。歐米の住宅に於て、食堂は勿論客室や書齋などの壁面裝飾として、煖爐の前飾りや長押の上や戸口の額緣の上などに皿が「額」として揭げられる事は普通である(第三圖)。書物や實物に依つて此種の裝飾に目なれて居る私は、此の要途に向つて色繪の皿に強い執着を持つた。しかも柿右エ門や鍋島

第三圖



は纖細に過ぎて私の趣好の外にあり、古九谷だけが此の要求を滿足せしむるものであつた。

古九谷の皿の最もすぐれたものの一つは、巴里のゴンセ氏蒐集品中の守景下繪のものであらう。それは滿開の老梅の巨幹を主として其の根もとに小松と竹とをあしらつた畫題は月並のものであるが畫面効果の雄大な傑作である。（第四圖）

第四圖



尤も此種の大皿は商賣の稱呼としては大平鉢と呼ばれる。併し私は大皿と呼びならはして居る。鉢とは印度語の鉢多羅の略

字から出て居るのだそうで、總て皿よりは稍深い食物を盛る器である。平鉢ならば皿と呼んで差支なからう。物を古に遡て正格にいはうとしては限りのない事である、皿は其の點では寧ろ盤と書かねばならぬ。こう詮索をして行つては結局は深いDishと淺いplateとにも譯語を區別しなければならぬ事となる。私は斯ういふ面倒をさけて總てを皿とよぶ事にして居る。尤も此の所謂大平鉢とよばれる緣の幅の廣く底の深い皿は、熱い「つゆもの」の馳走を盛つて會食の席に出したもので、一名をシツポクと呼びならはされて居る。

古九谷の特色は素地が堅く燒き締まつたといふ外觀を持ち、釉は概して稍青味を帶び柿右エ門や鍋島などの所謂伊萬里燒に比して滑澤を欠くが却て堅緻の趣を與へ、ゴスの染付は淡朴で、厚くかけられたしかも透明に極めて美しい綠青、黑味がゝつた黃、厚つでの紺色、あはい紫、光澤のない寂びた赤、是等の配合が如何にも古雅なしかも力ある調べを表はして居る。

古九谷の皿の蒐集家としては私の知人で東京だけで數氏を舉げる事が出來るが、そのうちでも麻布のS氏がその最たるものであらう。私も其の二三を所持して居る。そのうち最も意にかなつてゐるものは、これも所謂守景下繪の大皿で、直徑一尺一寸、周邊には廣く綠青釉を掛け、其の釉下に七寶つなぎを表はし、綠青釉の内側には黃釉の輪をめぐらして釉下は波模樣、中央のパネルには紺青の竹と紫の梅の枝とを畫き、梅の花は赤に

第五圖



し、それに頭と翼とを綠青、嘴と胸部とを黃に彩つた翡翠をとまらしてある(第五圖)。孰れ誤り取り落して傷けたものであら

う、瑕こそあるが蓋し此種の皿の最も優秀なもの丶一つであらうといふ事を斷言するに憚らない、いま器物としての形をしばらく問はず、文様と皿の面積そのものとの關係、部分と部分との調和、色彩の反映など、皿といふ用途を問題外に置いて見ても、即ち工藝美術の立場を離れて考へても、藝術品として相當な位置に置かれるべきものと思ふ。瑕が鑑賞上の價値に關係する事は勿論であり、磁器のやうな完全珠の如きを喜ぶ性質のものにあつては殊にさうある可きであるが、商賣の實際取引きの上に於て瑕が物そのもの丶價に影響する事意外に甚だしい。これは日本の蒐集家が總て「實用」を目途として古器物を集めて居るからで、所謂「きづもの」は彼等に不用のものとして顧られない故に、比較的容易に私共のやうなもの丶手に入れることが出來るのである。

昔の蒐集家の心理には到底解し得べからざるものが應々ある。「譚海」にある次のやうな話などはその一例である。

大阪鴻池なるもの丶家には、名物の青磁の皿一枚あり、同人ある日二三輩同道して生玉の酒屋に遊びたるに、料理に出せし皿のうちに此名物の皿と同樣の物あり少しもたがはず、一座讃美せしに、鴻池なるもの此皿を亭主に懇望し、金三十兩遣しもらひうけ、即座に金子相渡せし所にて皿をば打碎き捨てたり、同伴のもの怪しみて仔細をとひければ、此皿我等家に所持と毫末も違ふことなし、我等所持の皿は世上に人の知る所なれば、同樣の物二つ有てはわれら所持の名を滅す故くだきすてたり云々。

若し眞にさう感じたにしたところが、家に持歸つて竊かに壞つべきであらうに、さうしなかつたところに感情の不純さが窺はれる。恐らくは、家に持ち歸つたなら在來の秘藏の皿も生玉の酒屋から買取つたものであるといはれるであらうと顧慮したのではあるまいか。それは兎に角洵につまらない考を起したものでなぜ一對のものとして愛藏する事に氣がつかなかつたのか地上に存する藝術品を一つなりとも失ふ事はまことに悲しむべき事である。それにしても蒐集家の心理を「無意識にせよポリガミーの思想に出づる」と論ずる評家は、これを以て寧ろモノガミーの把持者として賞讃するかも知れぬ。

同じ皿をこはした話でも「明良洪範」にある、

加藤左馬助嘉明は（中略）慶長年中、南京より渡る所の成化年製の燒物の器を多く買入れたり、其中十枚小皿あり、これは世にいふ虫喰南京といふものにて、藍色土目等得もいはれぬ出來なりとて殊に秘藏しけるに、或時客饗應の節、近習の士其小皿を取落し破る、其士大に恐れ閉居せんとする由を聞

き早々呼出し、皿破る迚何ぞ閑居するに及ばんや、敢て苦しからず、殘りの皿を取寄せ悉く打碎きて、此皿〃枚殘り有るうちは一枚誰が麁相して破つたりも、いつ迄も汝が麁相の名を殘す事、わが本意に非らず、何程尊き器物なりとも家人には替難し、云々。

とある話は前者とは趣を異にして居る。

ロマン・ロランがランス本寺の獨軍から砲撃された後に、ランスの如き藝術品は一人の生命より遙に價値が多いと論じた事などは、其對照物が外國製の染付の皿位なものではないからであるが、チョット考へさせられる事である。尤もこれに對して獨逸の識者は一齊に、獨兵一人を失ふよりは寧ろあらゆる傑作を亡ぼす可しだと答へて居た。

鴻の池の皿は名物の青磁の品一枚ありといふから大皿に相違あるまい、小皿ならば組んだ揃ひのものでなければ名物にはならぬ筈である。恐らく見事な大皿であつた事であらう。

文化の程度の低い時代に於ては總ての民族が青と綠との區別をつけない。支那や日本では今でも普通語には此の區別がない。青磁といふ名稱は、色の定義から見て多少不純であるにせよ寧ろ綠磁といふべきではなからうか。あの堅燒きな見事な青磁、即ち歐米人のいふあのセラドンを唐時代より存在せるものとする人もあるが、恐らくそれ以後のものであらう。今昔物語二十八の左京太夫□付異名語第二一に、村上天皇の御代に舊宮の御子にて左京の太夫といふ男があつて、顏色蒼白な男であつたから殿上人は皆彼を青經の君とよんだ。天皇聞しめしていと便無き事也と仰せられたので、殿上人共、以後決して此のあだなをよばぬといふ誓をたてたが、堀川の兼通の大臣が此誓を忘れて、此人の立て行く後を見送つて、彼の青經丸は何處へ行くといつた。その贖として殿上人を馳走した。その折此のいたづらものゝ大臣は、自ら青き衣をきて總て青ぞつきの器で御馳走をした。そのうちに「一人には青く綵りたる折敷に青瓷の盤に酒を□て盛りて居たるを持せたり云々」とある此の青磁の皿が綠釉のかゝつた陶ならば舶來のものに相違あるまいが、それが今日いふあの青磁即ちセラドンであるかどうか疑はしい。綠釉の柔かい陶器は漢代より存在するが、青磁が此の時代に既に存在して居つたが、尤も村上天皇ならば時代は宋初にチョット掛るが。

十訓抄に、白河院が皇大后宮を訪はせられた際に、童の十七八計なるが綠青にて色どりたる折鋪に、金の御盃すゑて、こんるりの御皿に云々」とある。此頃の日本ではまだ紺瑠璃の釉のかゝつた陶器の出來やう筈もなければ、これもまた舶來品に相違ない。時は支那の宋で徽宗皇帝時分にあたる。恐らくはいま

京都在住の博識なる古美術鑑賞家M氏所藏の紺色のコバルト釉を施した三足附皿の如き物であつたらう（第六圖）。これは大さ



第六圖

は直徑九寸一分、高さ一寸九分、色はあの唐窯三彩に用ゐられる紺色で、濃淡の有様は恰度後世の所謂吹墨のやうになつて居る。

これは支那の出土器としても甚だ稀なものであつて、從て日本に將來したのは恐らくはこれ一つ位なものではなからうか。その裏面の中央部は堅い白土素燒の儘である。三足は此種の形の皿に用ゐられる普通の足と異つて各半圓狀をなして居る。

文書にあらはれて居る皿の古い記事では、書記の仁賢記にある、

皇太子億計、宴に侍り、瓜を取りて將に喫はんとしたまふに刀子なし。弘計天皇、親ら刀子を執り、其の夫人小野に命せて傳へ進らしむ、夫人、前に就きて、立ちながら刀子を瓜盤に置く云々。

といふ記事であるが、それが陶製のものか金屬製のものであるかも不明であるし、此の盤が今日の所謂皿であるかどうかも不明である。

皿が如何にして何時頃から出來たかは、一般陶器の起原と同じく到底知るよしもない。文化の幼稚時代に軟かな粘土の上に印された裸足の跡から思付いたなどゝ見て來たやうな事をいふ人もあるかと思へば、ドクトル・アルベルト・ノエブーゲルなどゝいふ人は、其著「古代の技術」といふ書物で「佛蘭西の航海者ゴンヌヴイルがブラジルの海岸で次のやうな木製の臺所道具を見出した。それは粘

土を被ぶせた木の皿で、偶然のことから木皿が土の外被から離れ、土の皿が殘つたのである」など丶鹿爪らしく暗示的に説いて居る。

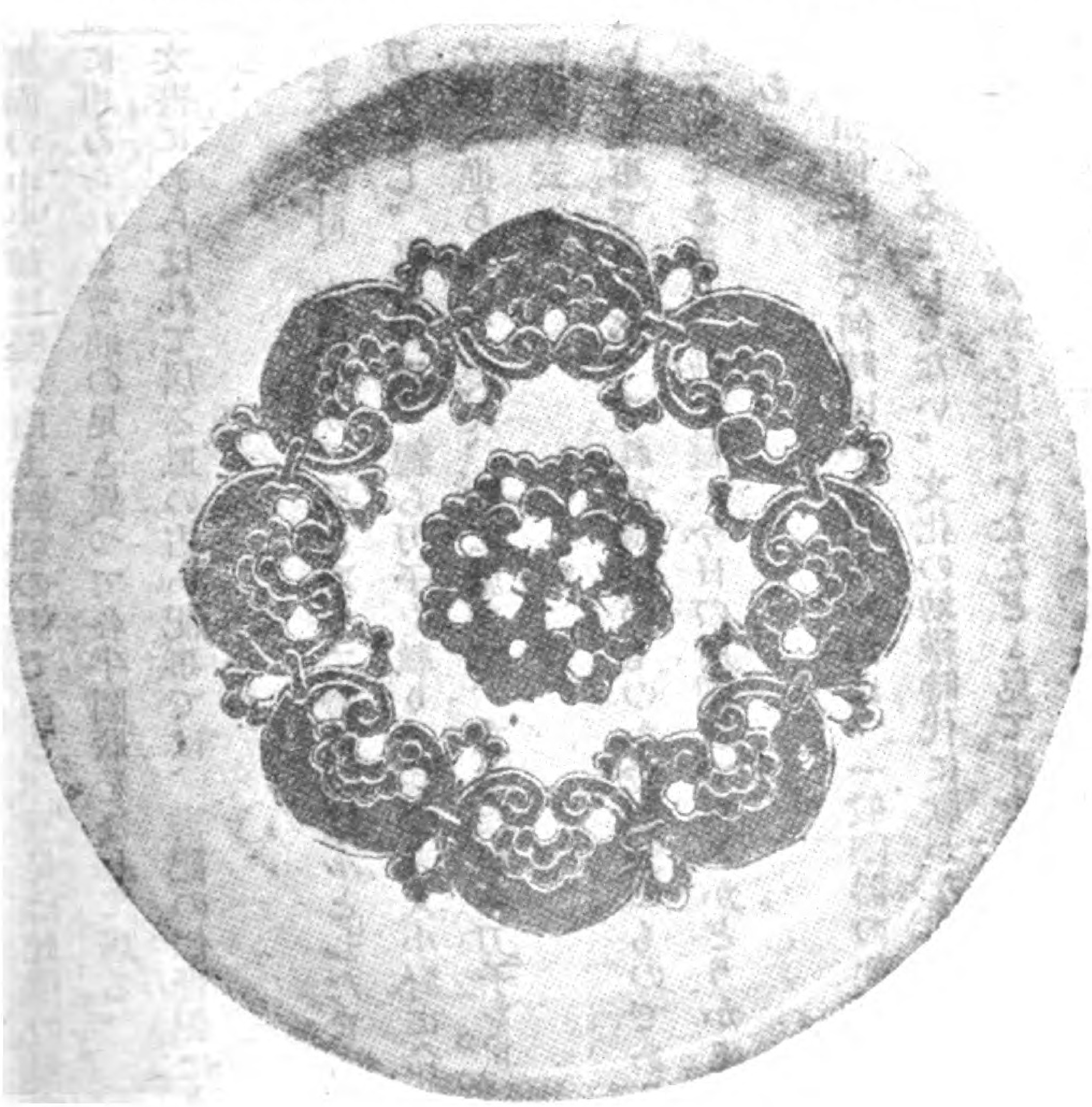
私の今知れる限りでは、日本の石器時代には深みのある盌形のものはあるが、今日いふ淺い形の皿といふ可きものを見出し得ない。併し皿は要するに盌の淺いものであるから、皿の起原などとそんなにむづかしく詮索する必要もなからう。

尤も日本の石器時代に石皿と稱せられるものはあるが、それは一種の臼であるとは高橋健自氏の説である。また皿の語源が盆を朝鮮でソラといふ、それにあるといふのも同氏の説である

支那の皿の起原に就ても、既に其以前希臘や羅馬に立派な皿があるから特別な考證の必要もないであらう。

dish に與へられ、希臘の名稱は διοκ'ρ παροψίρ. τρύβλιου などであり此の第三の名稱は詩人アリストフアネスの作に屢々現はれるものであるが、第二の名稱はそれよりもづつと後に出來たものらしく、羅馬人によく用ゐられたものだとの事である。Plate に對する名稱は πιναξ(ピナックス) であり、形は今日の所謂西洋皿のやうに縁と底とに一つ段のついたやうなあの形である其の内の魚皿は底の凹みが深く、魚や貝等を繪いてある。是等は勿論肴を載せるのに用ゐられたもので、眞中の凹みはソースを容れるためである、羅馬には食事用の皿に數種の名稱があり、今其の用途も大體わかつて居るが茲には述べない。

第七圖



支那の皿で私の見たもの丶最も古いものは唐窯三彩の皿で、

玆に掲げたものは其の一つである(第七圖)。直徑一尺四寸六分五厘、高さ二寸一分五厘、其下底に三足がついてある。その三足の附いて居る中央部は素燒の膚を露はして居るが、他は總て上釉があり、其地をなせる釉は深い黄綠釉で表面が將に眞珠色化しようとして居る。中央の唐草とこれを周つて連續した八個のアンテミオン風の唐草繋ぎは、輪廓を陰刻にして黄、綠、藍の三色を以て彩られてある。これも京都のM氏の所藏品である。

第六圖第七圖とも孰れも磁器ではないか宋時代に入ると三彩の磁器の皿が存在する。

私の見た赤繪の最も古い皿は、其の裏面に泰和元年二月十五日記(一說にこれは記でなく祀であらうといはれる)の文字と其下に花押のある皿である。これは一つの場所からいくつも發掘されたもので、日本には三つ來て居る。一つは前出の京都のM氏、一つは東京高輪のY氏、他は同市ヶ谷のK氏の所藏に屬する。圖に掲げたものはM氏の所藏品で、直徑五寸一分、高さ一寸三分、胎は赤土で其上に白土を塗り、赤色を以て花鳥を描き、外圓の環狀を爲せる部分と葉とには綠を又緣の周圍には黄色を施してあり、畫彩大膽に筆力亦雄健なものである(第八圖)。

是等の皿は皆磁器に類し、孰れも裏面の「こうだい」の周圍に墨汁を以て前記の年號と花押とが書いてある。恐らくは副葬品として棺中に入れる際記入したものであらう。これも同時に出た同じ記入を持つ盌が東京のT氏の所藏品にある。泰和元年

第八圖



は金の年號で南宋寧宗皇帝の嘉泰元年(我朝の土御門天皇の建仁元年西暦一二〇一年)に當り、恰度宋儒朱熹の歿した翌年に

當る、當時楊子江以北全部は金の領地であつて、磁州窯（現時の直隷省にある）が金の領有地内にあつたから金の年號を記載したものである事は明らかである。是等は實に古き色繪陶器の年代を明かにする事の出來る陶磁器史上の貴重なる標本といはねばならぬ。

陶器が如何なる地方に發生し、如何なる地方に於て最も發達したにした所が、今日見るやうな見事な白磁、「はくぎよく」のやうなあの磁器、現在では餘りに容易に多量に生産せられて吾々の日常の各種の用途を滿足せしめて居るために當然の事として觀過されて居るあの磁器の發明、陶磁器史上に最も重要な時代を劃する此の發明の名譽は、支那人に冠せしめねばなるまい。此完成は恐くは明代の初期であらう。支那人は此白磁に於て上釉を施さぬ前に胎に酸化コバルト卽ちゴスを以て文様を描き、上に硝子様の透明の釉を施した所謂「染め付け」を考案した。珠をのべて作つたやうな白磁は、此のチツト胎ににじみこんだやうな「そら色」の染付け文様に依つて更に數等の美がつけ加へられた。したたらんばかりつややかに滑らかな此の白磁の上に浮き出でた、形容するに言葉のないほどやさしくやはらかなコバルト色の美しさは、發明者その人にすら驚嘆の聲を放たしめたに相違ない。しかも圖様筆力とも明代のものが所謂古染付と呼ばれて最も趣があり、足利末から日本に渡來したと呼ばれ先きに加藤嘉明の愛藏したといふあの古染付の皿といふのが卽ちこれである。（蟲喰といふは胎と釉との附き不充分で其稜角をなせる部分が蟲の喰つたやうに剝落して居るのをいふ）清代に至つては文様餘りに精巧に過ぎて却て雅致をなくしてしまつた。

明代に於ては色繪がまた此の白磁に施された。その一つはコバルトの代りに辰砂を用ゐたものであり、これはそら色ではなく淡紅色の染付けである。普通これを染紅手（センコウデ）と呼んで居る。併し眞に色繪と呼ばれるのは釉を施し燒き上げた後に彩色して更に燒かれたものである。これも染付けと同じく明代のものが圖様もフアンタスチツクに筆力も亦雄健で最も雅趣に富んで居る。日本に於ては此の明代の色繪陶器を古赤繪、萬暦赤繪或は南京赤繪とよばれるものと、呉洲赤繪と呼ばれるものとの二つに別けて居る。前者は重に下に染付けを施して更に上を彩色したもので、小皿中皿は多いが大皿は極めて稀である。後者は染付けを施すこと極めて少く綠青と赤とを以てグローテスクの文様を奔放に描いたものである。前者と反對に大皿は極めて多いが小皿中皿は少ない、多くは雜器として製作されたものらしいが精巧なものになると、金を燒き付けたものすらある。此の種の陶器は茶儀に用ゐられる手頃の形のものにあつては今日萬金を以

て取引きせらるゝものすらあるのに、これに反して大皿は其價極めて安價である。吳州赤繪は淸朝に及んでも多く製作されたものと見てよからう。

茶人は會席に於て食器の取合せに苦心する。從つて種々の陶質と形と色の趣ある配合が行はれる。古拙な皿で喜ばれるものは繪唐津（肥前の唐津窯）、繪志野（尾張の瀨戶窯の一種で足利義政が志野宗臣に命じて造らせたものが基をなして居る）、織部（同じく瀨戶窯の一種で天正年間茶人古田織部正の工夫に始まる）、古曾部（攝津の古曾部窯の製品）、八代（肥後の八代窯）、古萬古（伊勢の萬古窯）、安東（伊勢の安東窯）などである。備前窯にも古拙な趣ある器物を產して居るが、皿にはよいものが殆どない。京燒きでは仁淸を最上とする、露草に虫のとまつて居る文樣の小皿で、何ともいはれぬ趣のあるものがある。なほ仁淸系統としては古淸水、粟田、御菩薩（ミゾロ）窯などが喜ばれる。他に京都の陶工の作では穎川の吳州赤繪寫し、永樂保全の金襴手（淸朝初期の金の燒付けを行つた色繪の模倣）色交趾寫し（紫、綠、黃の彩色を有する交趾窯の寫し）などが珍重せられ、永樂和全の色紙寫しの皿に見事なものがあり、古くは仁阿彌道八の作、新しくは眞葛長造の作などは殆ど悉く名品として取扱はれて居るが、あれだけの名工であり乍ら靑木木米作の小皿のよい作を見ない、恐らくは其處に却て木米の本領があるものであらうか。乾山の小皿と稱せらるゝものもあるが、孰れも初代の乾山の作である事に付ては疑問がある。

第九圖



是等の皿の形や色に依つて上に盛らるゝ料理が定まるもので

ある。伊萬里窯や京燒には特に鮎の鹽燒を盛るための皿さへ出來て居る。

以上のやうな取合せのために、人々は古い揃ひの皿の蒐集に苦心する。

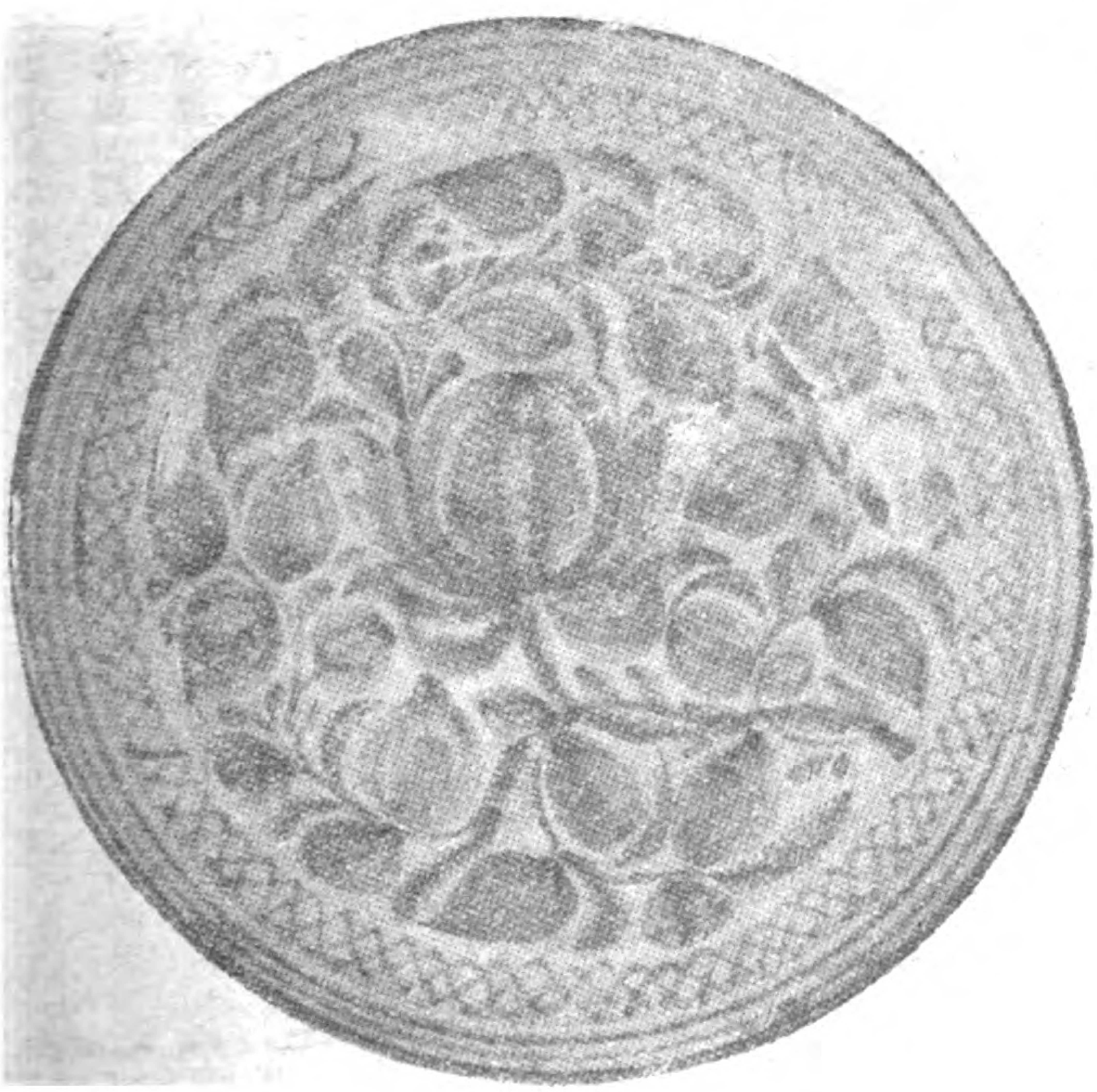
併し乍ら皿に對する私の鑑賞は、それを實際に食器に使用しやうとか或は手に取つて處理しやうとかいふのでなく、總て額皿として壁にかけて眺めやうとするのである。從て用途は甚だ限定せられて居る。其ために大皿である事を要し、描かれた文様も遠く隔てゝも明瞭に、また印象の強いものでなければならぬ。

以下なほ少しく自分の藏する二三の大皿に付て述べたい。

第九圖に掲げたものは所謂古和蘭の色繪の皿で、大さは直徑一尺一寸五分、色は濃藍、淡青、紫、綠、黃、赤の六種からなる。周邊の文樣、中のパネルの不思議な畫樣は、誰の眼にも一見直ちに支那の古赤繪の影響ある事がうなづかれるであらう。しかも支那陶器そのものに見せんが爲めの模倣でないことは、文樣の手法、色の使用法に依つても明かで、却て特種の情趣を呈して居る。

第十圖は大さ直徑一尺一寸、これも古和蘭のものではあるが前者と異り全部の文樣は染付である。和蘭の染付は支那の古染付の影響を受けたものであるが、未だ歐米人が磁器の製作を知らぬ時代のものであり、胎は淡赭色の軟土から出來ては居るが白土を掛けて其の上にゴスの染付を施し、上に軟い硝子釉で被ふたものである。從てコバルト色の白の地膚ににじみ込んだやわらかさ、觸覺の心地よさ、支那染付の到底企て及ばさる一

第十圖



種の味がある。私は此の意味に於て此の皿を支那の古染付以上に好むものである。

第十一圖



第十一圖はこれも古和蘭の皿で、直徑九寸八分、色は淡青、紫、黄の三色で、模様は如何にも現代流行の手法に似て居る。

西洋皿で内部に模様を描くことは十八世紀までといふ事である。事實皿の底のパネルをこれに盛る食物のバックと見るときは、餘りに華やかな文様は却つて不適當である。日本の皿で古志野や古織部などの喜ばれるのは全くこれによる。此の點に於て色鍋島の如きは單に手に執つて弄ぶ可きものに屬するといふても過言ではあるまい。生活の方式がだん〳〵變り行くに從て皿もまた變つて行くことであらう。しかも古志野や古織部などのやうな、膚の滑かでなく且つ色の濁つた「うつは」は、現代文化のもとには衞生上日用の食器として用ゐられるに不適當であり、質の弱き事は經濟上から見ても亦缺點である。日常の食器は硬質のそして洗淨と消毒とに便利に、且つ内に盛る食物のバックとして調和よきものにかはつて行かねばならぬ。私の此の言葉に對しては異議をとなうる人の必ず多い事と承知するが、是等の人々は日本の生活の殆ど總てが「原始的簡易」をそのまゝに贅澤にしたものであり、現代文化と共の方向を異にしてゐるものゝ多い事を考へて貰いたいものである。私は總ての古い工藝美術を現代の生活にそのまゝもつてこやうとは考へたくない。此意味に於て昔しの美しい皿はこれを室内裝飾として役立てたいのである。(了)

當世百物語

影

豐島與志雄

叔父達が新らしい家へ移轉してすぐに、叔父は或る公務を帶びて、二ケ月ばかり朝鮮の方へ旅することになりました。勿論この旅行は前から分つてゐましたが、その出發の間際に、前々から探してゐた適當な貸家が見當つたので、慌しく其處へ引越して、まだ荷物もよく片附かない三日目の朝、叔父は特急の列車で朝鮮へ出發しました。そして新らしい家の中には、叔母と、八歳になる千代子と、五歳になる繁と、顏の眞圓い女中とが、ごたごたしてる荷物と一緒に殘されたのです。

その頃私は、本郷に下宿して高等學校に通つてゐました。叔父一家の引越の時は、その高輪の家まで、夕方から夜の十時頃まで手傳ひに行きました。實は泊りがけで學校も休んで手傳ひたかつたのですが、私用のために學校を休ましては國の御父さんに濟まないと、嚴格な叔父が命令的に云ふものですから、それに從つてゐました。所が叔父の出發の日は、暗默の許可で學校を休んで、品川驛まで見送りをして、それから叔母達と一緒に高輪の家へ歸りました。何しろ叔父の旅の方の用事が多かつたものですから、家の中はまだちつとも片附いてゐませんでした。それで、半ばは私の方から願ひ、半ばは叔母の方から願ふ形で、私は二三日學校を休んで手傳つてゆくことにしました。はつきりした口實の下に公然と學校を休んで、好きな叔母と無駄話などしながら、のらくらと家具なんかを弄つて、そして晩にはうまい御馳走になり、おまけにいくらかの——學生の身には可な

り有難い額の——小使を貰ふ目當があるんですから、實にいゝ機會だつたのです。

所が叔母の方にも、單に私から手傳つて貰ふといふこと以外に、私を引止めたい他の理由があつたらしいのです。「この家をどう思ひますか、」と尋ねておいてから、こんなことを云ひ出したのです。

「日當りのよい割合に、何だか陰氣な變な家ですよ。妙に息苦しい氣がして夜中に眼を覺すと、それから頭のしんが冴えて、どうしても寢つかれません。そんなことが、引越してきた翌晩——一昨日の晩も、昨晩も、あつたんですよ。」

私は叔母の蒼白い顏を眺めながら答へました。

「それは引越に疲れたせいでせう。」

けれども心の中ではかう考へました。「この呑氣な叔母も案外神經質だな。親しみのない新らしい家と、良人の旅行とのために、神經が興奮してるんだな。」

けれども私達は、そんなことにこだはつてはをられませんでした。前の家とはすつかり間取りの模様が違つてゐましたので、家具を据付けたりなんかするのにも、何度かやり直してみなければ氣が濟みませんでした。それに道具好きな叔父なものですから、いろんな品物がごたごたしてゐて、なかなかうまく治りがつきませんでした。その上、障子を張り替へたり、庭に盆栽を並べたり、いろんな用がありました。

そんなことを隙にあかしてゆつくりやつてゐるうちに、いつのまにか夕方になりましたので、また明日のことだと一先づきりをつけて、叔母の心盡しい御馳走が並んでる餉臺で皆け樂しい晩餐をしたゝめました。可なり遲く八時頃だつたと思ひます新らしい家と主人の不在とのために、何だか電燈の光までが珍らしげな色合をしてゐるやうに感ぜられました。

その電燈が、丁度食事の終り頃、ふいに消えてしまつたのです。千代子と繁とが一度に驚きの聲を立てたきり、動いてゐた皆の手や口や眼が途中ではつたり止つて、暗闇の中にしいんとしてしまひました。暫く待つても、電燈はなかなかつきさうにありません。叔母は女中に蠟燭を探さしました。女中は長い間かゝつて、漸く一本の小さな蠟燭を持つて來ました。それを食臺の眞中に立てゝ、皆は赤い光の中でまじまじと顏を見合せながら、食事の終りを簡單に濟しました。

その時、箸を置いて立上りかけた繁が、ふいに大きな聲を立てました。

「やあ、兄ちやんの影が！」

振返つてみると、後ろの壁に馬鹿に大きな影が寫つてゐまし

た。ひよいと首を引込めると、影もひよいと首を引込めました。
「あら、影が踊つてるわ。」と千代子が頓狂な聲で叫びました。
私はその方を振向きました。すると、向ふの壁にも、千代子と繁との影が二つ並んでゐます。
「後ろを見てごらん、千代ちやんと繁（しげる）ちやんとの影も寫つてるよ。」
二人は同時に振向いて、自分達の影を見ました。影の頭が動いて横顔になつた途端に、小さな鼻の頭が少し覗き出しました。
「あら、繁ちやんの影には鼻があるわ。」
その時私は蠟燭を取つて、ずつと二人に近寄せました。二人の影が大きく背延びをして天井まで届きました。
「おばアけ ……。」
繁は吃驚して母親の膝に寄り縋りました
「ちつとも恐かないわ。」と千代子は云ひました。
私は立上つて、何か恐い影を寫してやらうとしました。途端に、電燈がぱつとつきました。皆は變挺な氣持で顔を見合せました。私は蠟燭を手にしてつゝ立つてる自分の姿を、明るい光の下に見出して、極り惡さのてれ隠しに、電燈の光に代つて云つてやりました。
「今晩は。」

そして蠟燭の火を吹き消しましたが、その時、千代子の新たな影が壁の上に小さく蹲つてるのを見て、また惡戯氣分が湧いてきました。
女中が飾臺を片附けてゆくと、私は電燈を低く引下して千代子と繁とを相手に、壁に影を寫して遊びました。擴げた兩手の先をふらふらと動かし頭を下げて、すーつと伸び上りながら、
「おばアけー。」と云ひますと、その影を見て、繁は急いで逃げて行き、千代子は眼を見張つて我慢してゐます。やがてその不安な遊びは、彼等二人をも引込んでしまつて、三人でいつまでも影人形の遊びに耽りました。
「もうお止しなさいよ。」と叔母が云ひました。
「それより叔母さんも寫してみませんか。」と私は反對に勸めてみました。「叔母さんが長い髪を振亂して中腰で立つと、乾度本物のお化のやうな影が寫りますよ。」
「お止しなさいよ、本當に！」と叔母は云ひました。「子供が夜うなされて困りますから。」
私は晝間の言葉を思ひ出して、叔母は子供達よりも自分がうなされはすまいかと恐れてるのだ、とそんな風に考へました。
そしてなほ執拗に影人形の遊びを續けました。
やがて、子供達が寢る時間になりましたので、叔母が彼等を

寝かしつけてる間、私は二階に上つて、叔父の書棚を片附けたりなんかしました。挿繪のある書物はそれを一々眺めたりして、ゆつくり時間をつぶしてるうちに、だいぶたつてからふと、椽側の硝子戸に自分の姿が、額や手先の皮膚をなま白く浮出さして、底氣味惡く寫つてるのを見付けました。それを見ると、天井板や床の間や唐紙の模樣など、凡て眼新らしいその室の中が、心をそゝるやうな冷かさに靜まり返つてきて、また同時に、先刻の影人形の遊びの氣分がむらむらと湧いてきて、私は我知らず立上つて、兩腕を擴げ首を前に突出し變挺な蟹足の足取りで、「おばアけー」と云ひながら踊り出したものです。そして次の瞬間には、自ら喫驚して立ち悚みました。自分の踊りが餘り馬鹿げきつた變挺なものである上に、「おばアけー」と云つたつもりの聲が少しも出なかつたのに、俄に氣付いたのでした。ぞーつと怪しい氣持に襲はれ、逃げるやうに階下へ降りてゆきました。

叔母が茶の間にぼんやり坐つてゐました。私はその顏を見て喫驚しました。

「どうなすつたんです！」

「どうつて……あなたこそ！」と叔母は鸚鵡返しに云ひました。

實際叔母は、しかめた眉の下に眼を圓くし、口を尖らして、不滿なのか悲しんでるのか分らない顏付をしてゐました。そして私は叔母の言葉で、自分の顏の筋肉が變に硬ばつてるのを知りました。

私達は妙に無言になつて、ぢつと坐つてゐました。暫くすると、向ふの室の方で、何かひそひそ囁く聲が聞えます。耳を澄すと、「恐い？……恐くない？」といふやうな言葉や、「そらこんどは狐よ、」などといふ言葉が聞き取れました。

「ごらんなさい、」と叔母は云ひました、「いつまでも寢つかないで、いろんな手眞似をして脅かしあつてるぢやありませんか。あなたがあんまり惡いたづらをするからですよ。」

そして叔母は何度も立つていつて、子供達を叱つたり賺したりして、無理に布團の下に押し入れてるやうでした。

そのうちに、子供達は眠つてしまひ、夜は更けて、家の中がしいんと靜まり返りました。まだ荷物の取散らされてる新らしい家の、鼻馴れぬ呆けた香りが、あたりの空氣に籠つてゐて、妙に氣持が落付きませんでした。私達の話は自然に叔父のことへ向いてゆきました。もう神戸……岡山……あたりだらうかとか、いつ頃朝鮮へ着かれるだらうかとか、そんなことを話しながら、闇夜の中を走つてる汽車と、それに關連するいろん

な想像上の椿事とが、心の奥に巣くつてきました。そして二人は、何か遠くを見守る心地で、お寢みなさいとはいつまでも云ひ出しかねてゐたのです。女中までが隅の方で、妙にまじまじとした眼を、眞圓い顔の中に見張つてゐました。

「おや！」と叔母は突然顔を上げました。

「え？」と私は眼付で尋ねました。

「誰か來たのぢやないかしら？」

然しそんな筈はありませんでした。もう表の門も玄關の戸も早くから女中が閉めてた筈です。それでも、暫くすると、叔母はまた誰か來たやうだと云ひ出すんです。

「表をこつこつ叩く音がするんですよ。聞いてごらんなさい。」

耳を傾けると、しいんと靜まり返つた夜更けで、風までがぱつたり止んでしまつて、何の物音もしませんでした。

「この家には鼠一匹居ないやうですね。」と私は云ひました。

叔母はぴくりと眉根を動かしたきり、何とも答へませんでした。けれどやがて、また戸を叩く音がすると云ひ出すんです。私も少し氣にかゝつて、兎も角も見て來ることにしました。

茶の間を出て、階段の横の薄暗い廊下を通り過ぎて、何の氣もなく階段を見上げながら、一寸薄ら寒い氣持になり、それから、玄關の障子を開くと……ぼんやり、輪廓のぼやけたものが……ぼーつとした影が、其處につゝ立つてるのです。おや！と思つて一歩退ると、影がむくむくと伸び上つたのです。「何だらう？」と思つた途端に、がーんと響く大聲で、「俺だ！」

ぞーつと冷たいものが全身に流れて、私は其處に棒立ちになつてしまひました。が次の瞬間には、もう影も何も消えてしまつて、茫つとした薄ら明りが玄關に一杯湛へてゐます。氣がついてみるとついてた筈の玄關の電燈が消えてゐます。それで私はまたぞつとして、茶の間に引返すはづみに、後からついて來てる叔母に突き當りました。

「あなたにも聞えましたか。」と私は息をはづませて尋ねました。

「え？何が？」

その叔母の顔は俄に眞蒼になりました。

私はほつと息をつきました。そして茶の間に戻りながら、夢からさめたやうな心地で明るい電燈の光を眺めました。

＊　＊　＊　＊

私はその話を叔母へは——また誰にも——決してしませんでしたが、叔母はその家が何だか陰氣で不氣味だといふので、間もなく他へ引越してしまひました。そして影のことは、それきりになつてしまひました。

番町の怪と高輪の怪と

小山内薫

私は幽靈といふものはあると思つてゐる。怨念といふやうなものもあると信じてゐる。この宇宙は靈界と物界とで成り立つてゐて、その靈界と物界との間には、絶えず交通があるものだと確信してゐる。

それ故、私は好んで怪談を讀む。殊に西洋の優れた詩人の書いた怪談を讀む。エドガア・アラン・ポオだの、エエ・テエ・アア・ホフマンだの、ハンス・ハインツ・エエエルスだののやうに、既に、その方面で名の高い作家は問はないとしても、西洋には隨分優れた作家のものでこの方面の名作がある。古いところで、ダニエル・デ・フオオの『ヰイル夫人の幽靈』、近くはキップリングの『幽靈人力車』、モオパッサンの『ラ、オルラ』などは誰でも知つてゐよう。キイルラントの『シエスタ』、アラルコンの『丈の高い女』、コムパアトの『物言はぬ女』なども有名である。殊に露西亞には優れた作家にこの種の作が多い。プウシユキンの『ピック、ダアム』、ドストエフスキイの『死人の笑ひ』、ゴオゴリの『消えてなくなつた證書』、レルモントフの『未完小説の斷篇』、ツウルゲネフの『幽靈』などは誰でも知つてゐやう。その外、リエスコフの『白熊』、ソログウブの『新聞廣告に依つての死』、ブリユソフの『辯護』など、いづれも第一流の作家が書いた第一流の怪談である……

併し、私の今の目的は、私が道樂半分で得た貧弱な組織立たない怪談小説の智識を列べ立てることではない。私は今自分自身が見た――或は經驗した――幽靈或は怪異を、率直に物語らうとするのである。

（一）

私が高等學校へ通つてゐる時分のことだから、もの二十二三年も前のことである。

私が五つの年からその頃まで住んでゐた麴町の富士見町の家を母が人に賣つて、新に巣鴨の宮下町に七間程の平家を新築し

始めた頃のことであつた。

私達は一時假越しに、×番町の××番地の借家へはひつた。そこは五間程の小さな家で、がらくた道具の多い私の一家にとつては少し狹かつたが、兎に角一軒立ちで、門もあるし、門と玄關の間に多少の距離もあるし、とても富士見町の家とは比較にならなかつたが庭も少しはあつて、ちよいと見つきの好い家だつた。

門の右手の所に、座敷が離れのやうに突き出てゐて、そこの窓からは直ぐ往來が見られた。私はこの部屋が一番明かるくもあり、奥の座敷とも離れてゐるので、そこを自分の部屋にして貰つた。

私の部屋には父から傳來の大きな衣裳棚と自分の安物の硝子書棚とが置かれた。私の部屋と奥の座敷との間の暗い部屋には昔風の大きな長持が置かれた。それ故、そこはやつと人が一人通れる程の疊廊下のやうなものになつてしまつた。私はかうして自分の部屋が母や妹のゐるところと隔てられたのを却つて幸んだ。靜かで、勉强が出來て好いと思つて……。

私はその時分から暗い部屋では寢られなかつた。まだ電燈の一般に普及しない時分で、私はいつも枕元にその頃はやつた太いゴマ竹を柱にした丈の高い臺ランプをつけて寢た。私はその時分讀んでも讀まないでも枕元に澤山書物を積んで寢るのが癖だつた。

私は生れつき寢つきもよく、夜中に目を覺ますやうなこともなかつた。殊にその時分は元氣の旺盛な青年のことでもあり、夜はいつもぐつすり疲れて寢て、夢もろくろく見なかつた。

それが或晩のことである。私は寢てゐる内に非常な胸苦しさを覺えた。何か重いものが自分の胸の上にのしかかつて、ぐんぐんぐんぐん押しつけてゐるやうな氣がした。私は目を瞑つた儘暫くその力と爭つたが、どうしてもその重いものは私の胸の上を去らなかつた。

あまり苦しいので、私はたうたう目を覺ましてしまつた。目を明いて、見るともなく枕元を見ると、誰か坐つてゐる。確に女だ。それが膝ばかり見えるのだ。私はいまだにその着物の柄を覺えてゐるが、それは古風な薄茶色の織物風な着物で、決して人がふだん着に着るものではなかつた。

私は初め母かと思つた。併し、母が今頃自分の枕元へ來る筈はない。第一、母がこんな立派な着物を家で來てゐる筈はないと思つた。私はぞつとしたが、それでも勇氣を皷して、その坐つてゐる人間の顏を見ようとした。ところが、膝の先から帶のあたりまでは見られたが、それから上がどうしても見られない。

古風な繻珍のやうな帶で、それに古風な金具の帶留がしてあるところまでは見えるのだが、いくら身をもがいても、それから上が見られないのである。

その內に胸は益々苦しくなつて來た。私は手を動かさうとしたが、どうしても手を動かすことが出來ない。脚に力を入れて起き上がらうとしたが、どうしても上からの重みで起きられない。聲を出さうとしたが、どうしても聲が出ない。

さうして、凡そ十五分間も身を悶えてゐたかと思ふ內に、突然わつといふ叫び聲が出た。聲が出ると同時に、體が急に輕くなつた。私は夜具を蹴つて跳ね起きた。

併し、もうその時には、女の影も形もなかつた。

私の家族は女ばかりだつたから、朝になつても、その事は誰にも話さなかつた。學校へ行く道でいろ〱考へて見た。私は人に怨みを受けるやうな覺えはなかつた。夢かしら。夢にしては、目が覺めても女の姿の見えたのが訝しい。神經衰弱にでもなつたのかしらと思つたが、學校へ行つて課業を受けても一向そんな徵候は見えなかつた。

私はその晩、床にはひるのが恐かつた。併しみんなに話せば恐がるだらうと思つて、やつぱり默つて同じ部屋へ寢ることにした。

私は明かりをカン〱つけた。枕元の着物が或はさう見えたのではないかと思つて、その晩は着物も枕元には置かなかつた。

私は又何か恐ろしいものに會ふやうな氣がして、なかなか寢つかれなかつたが、それでも若い者のことで、いつの間にか疲れてぐうぐう寢てしまつた。

私は寢てゐながら、夢のやうに、「丁度ゆうべの今時分だつたな。用心しなくちやならないぞ。」と思つた。さう思つた途端に、また胸が苦しくなつて來た。ゆうべと同じ苦しさである。何かが胸の上にのしかかつて、ぐんぐんぐんぐん押しつけるのである。

私はゆうべの經驗があるので、直ぐと目を大きく開いた。すると、今度はゆうべと同じ着物の女が私の胸の上に跨がつてゐるのである。私は渾身の力を集めて跳ね起きやうとしたが、女の重さは大きな石のやうで、どうにも身動きが出來ない。今夜こそ顏を見てやらうと思つたが、自分が仰向けに下になつてゐながら、やつぱりどうしても帶から上が見られない。

私はあたりを見廻した。ランプもちやんと見える。書棚もちやんと見える。私は明かに夢ではないと思つた。

私の抵抗は丁度ゆうべと同じ時間續いた。やがて、ゆうべの

やうにわつといふ叫び聲が出ると同時に、私の軀は跳ね起きてゐた。そして、もうその時は怪しいものの影も形も見えなかつた。

二晩續けて同じものを見た私は、もうそれつきりその部屋へは寢なかつた。

間もなく私達は巣鴨の家へ越したが、あとで聞くと、その×番町の家には昔或軍人が住んでゐて、妻君と妾とを一緒に住まはして置いた。そして、その妾が妻君に虐遇されて死んだ――さういつた事があつたさうである。

私の見た幽靈とこの事件との間に關係があるかどうかを私は知らない。私は唯二晩續けて、同じ時間に着物から帶から帶留まで全く同じ幽靈を見たのである。私はどうしてもこれを夢だとか神經衰弱だとか言つてしまふことは出來ないのである。

×番町の家はいまだにある。今はその家の前を電車が通つてゐる。

(二)

これは割合に近い頃のことである。

私は赤坂の田町にゐる時、火事に會つた。その晩直ぐ家を探して、芝明舟町の裏長屋へ半分燒けた荷物を運んだ。もう子供は二人ゐたし、如何にも狹い家で困つたが、家主が親切な人なので、半年程は辛抱した。ところが、どういふわけか溫かくなるに連れて南京虫がうよ〳〵出て來て、家内中の者が苦しんだ。

丁度、その時分大阪の尼ヶ崎にゐた親戚の家族が東京へ越して來た。主人が外國へ行くので、その留守を東京ですることになつたのである。子供が六人、女中が四人といふ大家族で、一時はステエション、ホテルにゐたが、やがて北品川に大きな家が見つかつて、そこへ住む事にした。ところが、庭の直ぐうしろを通る汽車がうるさいのと、井戸の水が悪いのとで、又忽ち越さなければならないことになつた。

或日、姉が――親戚といふのは私の妻の姉の家なのである――明舟町の家へ來て、高輪に家が一軒見つかつたが、廣過ぎるから、お前の家も一緒にそこへ越して來たらどうだと言つた。南京虫で弱り拔いてゐるところだつたので、私達は一も二もなく贊成した。

併し、二つの家族が一つ家に住むことは餘程考へなければならないことなので、私は姉について一應その家を見に行つた。

高輪×町×番地である。電車道ではあるが門はずつと奥へ引つ込んでゐるので、市街の電車の音はさう邪魔にならないが、

庭の前が直ぐ海で、そこを省線電車と汽車が通るのである。

家は成程廣かつた。大玄關が横四疊で、その隣りが書生部屋で、そこにも格子戸の入口がある。玄關の右へはひると、廣い板敷の向うに十疊ほどの風呂場がある。下の座敷は五十疊と二十五疊との二間で、五十疊の方には二間の床の間がついてゐる。二階は二十五疊と十五疊で、房總の山々が手にとるやうに見える。これが母屋で、これに附屬して六疊と七疊との二間の平家があつて、六疊の間から土藏へはひれるやうになつてゐる。この方にも風呂場がついてゐる。勿論、便所も母屋と平家とに一つ宛ついてゐる。臺所はこの附屬の家の方についてゐたが、これが又二十疊敷ほどの大きな臺所で、臺所を出ると、石造りの土藏が又一つ建つてゐて、そのわきに稻荷の堂がある。海に向つて、家の左手には三百坪ほどの明き地があつて、無花果が澤山植えてある。ここも子供の遊び場所に使つて好いのだと言ふ。

これで家賃が五十圓だと言ふのには驚いた。併し、私達は唯安いと思つて驚いただけで、決して別に變なことは考へなかつた。私の家族が始終二間の附屬家屋ばかりで暮らせると思はなかつたが、兎に角、藏はあるし、寢るだけはそつちへ別に寢られると思つたので、私は早速姉の提議を入れた。

二つの家族がそこへ越して行つた。主人側の女が四人、男が一人、子供が兩方合せて八人、女中が全部で六人といふ人數である。

越してから三日目である。魚屋がハシラを持つて來た。大阪から來たばかりなので姉の家族が東京のハシラを食べたいと言つた。入る程とると魚屋は一圓だと言つた。そして、お代はあとで好うございますと言つて歸つて行つた。勿論、始めて來た魚屋である。いなせな、高輪邊を歩く魚屋とは思へない、好い男だつた。

子供達はどうもなかつた。その晩十二時頃になると、大人達が順々に苦しみ出した。一人一人が枕元に金盥を置いて嘔いたり瀉したりした。私は外へ出てゐたので、そのハシラは食べなかつた。驚いて知合の醫者のところへ驅けつけて、寢てゐるのを無理に起して、助手と二人を自動車にのせて連れて來た時は、もう午前二時だつた。醫者は流行性の腸カタルだと言つた。醫者は一人一人に注射をしたり、頓服藥をのませたりした。

夜が明けると、みんなけろりとしたやうに癒つてしまつた。それだけのことなら何でもないが、不思議なのはその好い男の魚屋で、もうそれつきり一度も顔を見せなかつた。金も何も取りに來なかつた。

これが不思議の始まりで、それから色々なことが始まつた。

私はその頃毎晩のやうに外へ出て、大抵十二時を過ぎなければ歸らなかつた。妻が一人起きて留守居をしてゐると、十一時頃までは何事もないが、十二時を過ぎると、きつと表の門を叩く音がする。出て見ると誰もゐない。汽車がごうッといつて通る。もう汽車の通る時分ではないのに……。

或雨の降る晩に、妻が仰向いて寢てゐると、土藏の右の壁に人の顏のやうなものが見えた。妻は雨じみだらうと思つた。ところが、朝起きて見ると、そこにはなんにもなかつた。天氣の晩にはなんにも見えないが、雨の降る晩には、きつとそこに雨じみのやうな人の顏のやうなものが見えるのである。

表の右の土藏には、あまり物を入れなかつたが、或日私が何かを探しにはひると、扉の入口のところにどういふわけか「怪談乳房榎」の芝居番附がはつてあつた。

或晩、私は珍しく早く歸つた。妻が直ぐ寢るかと訊くから、いや今夜は爲事があるから徹夜をすると言つた。「それでは、どうかうただ寢をしないで下さいよ。」「宜しい。大丈夫だ。」さう言つて、私は白い寢間着に着換へて、母屋の二階の十五疊の部屋へ行つて、そこで爲事を始めた……。

暫くして、私は妻に搖り起された。私は仰向けに疊の上に寢倒れてゐたのだ。

……妻が床へはひつてから暫くすると――それはもう十二時を過ぎてゐた――足元の障子ががらりと明いた。その音に目を覺ますと、廊下のところに私と同じ白い寢間着を來た人が立つてゐる。――「あなたですか。」と訊いても返事がない。それから飛び起きて見ると、障子は明いてゐて、もうその姿が見えない。急いで二階へ上がつて見ると、私が仰けに寢倒れて、うん〳〵うなされてゐた。

「あなた、今下へ降りて來ましたか。」

「いや。僕はさつき二階へ上がつたきり一度も下へ降りやしない。」

「さうでせう。だから、うただ寢をしちあいけないと言つたのに……。」

妻はそれつきりその晩はなんにも言はなかつたが、あとで前のことを聞いた時は流石に私も氣持が惡かつた。

段々氣味が惡くなつて來て、先づ姉の家族が田村町の方へ越してしまつた。それから一週間ほどして私達も麻布の方へ引き移つた。

その後その家には誰も住むものがなかつた。間もなく取り毀されて、今では大きな自動車の工場になつてゐる。その自動車の會社も事業が振はないで、もうぢき潰れさうだといふ話であ

る――しかも不思議なことには、偶然その自動車の會社の社長になつてゐるのが私の從弟なのである。

あとで聞いた話だが、この高輪の家は或大きな質屋が持つてゐたのだが、株か何かに手を出して失敗した揚句、擔保流れで銀行へ取られてしまつた。(さう言へば、私達の住んでゐた時分も家主は或銀行であつた。私は毎月銀行へ家賃を拂ひに行つた。)主人は絕望のあまり土藏の中で首を絞つたが、死に切れないで、庭の井戸へ身を投げてしまつた――成程、さう言へば庭に注繩のはつてある石の井戸があつた。

その後、或若い華族がここへ越して來て、そこでお嫁さんを貰つた。婚禮の式を擧げた當夜、下の廣間の二間の床の間に列べてあつた祝ひ物の內、目ぼしいものがみんな盗まれてしまつた。しかも、何處をどう探しても、外から人のはひつた形跡はなかつた。華族の新夫婦はその翌日根岸の方へ越してしまつた。

それから一年間、誰も借り手がなくて明いてゐたのを、なんにも知らずに私達が借りたのである。さう言へば、私達の越した時、表の瓦斯燈にはまだその華族の名が書いてあつた。名前は書けないが、華族でなければない名だから、私の聞いたことも滿更嘘ではないらしい。

家の怪異に就いて、私はもう一つ經驗を持つてゐるが、それは今非常に人の大勢出はひりする場所なので、ここには遠慮して書かずに置く

兎に角、私は知らない家にはひるといふことがその後恐くなつた。殊に私は土藏を恐れる、井戸を恐れる……極端に言ふと、土地その者にも怨靈のついてゐるところと、さうでない淨いところとがあるやうな氣がする……。

(大正十二年四月)

貸間を探がしたとき

小川未明

一

春の長閑な日で、垣根の内には、梅が咲いてゐた。私は、その日も學校から歸ると貸間を探がしに出かけた。

その日は、小石川の臺町のあたりを探がして歩るいた。坂を登つて、細い路次にはいつて行つた。赤い煉瓦塀について行つたり、壞れかけた竹垣に添つたりして、右を見、左を見たりして行くと、ふと左側のすぐ道ばたの二階家に、「貸間あり」の紙札が下つてゐた。

私は、先づ外から立つて其の家の有樣を眺めた。古い家で、四角な、さう大きな家でなかつた。そして、二階家といつても非常に低くて、背伸をしたら、二階の内部が往來からでも見えさうであつた。思ふに、その家は、可なり低地に建つてゐたものと思はれる。何しろ、私が學校に行つてゐる時分のことであつて、もうかれこれ二十年近くの昔になるから、はつきりとした、其の時の印象が浮んで來ないのに無理はない。しかし、その壞れかけた垣根の内から、外の方へ差し出た梅の枝には、ぽつら〳〵と白い花が咲いてゐた。

私は、とにかく入つて、其の室を見ようと思つた。そして、入口から聲をかけると白髮の爺さんが、庭先に何かしてゐたが、

「どうぞおはいり下さい。二階ですから」と、言つた。

私は、早速家にはいつて二階へ上つて見た。疊の汚れた、天井張りの低い六疊の間であつた。外から見た時には、南に椽側がついてゐるので、暖かさうに、日がよく當つてゐて明るさうであつたが、室の内にはいつて見ると何うしたことか、陰氣で、暗つぽい感じがした。しかも窓が、東の方にも付いてゐたけれど、どういふものか氣持を引立てなかつた。

「この室には、はいる氣がしない」

私は、たゞこんなことが、念頭に浮んだ。そして、爺さんが

静かだとか、日がよく當るとか、學校にもさう遠くはないと言つたことなどを耳に聞きながらも、私は、しばらく默つて考へてゐた。

「また、よく考へて來ます」

かう言つて、私は、其家から出た。そして、他にも、貸間はないかと、方々探かして歩るいた。他にも、好ましい家はなかつた。しかし、私は、思ひ返して、二たびあの二階家へ行つて見る氣は、どういふものか起らなかつたのであつた。

ある時、Bの室で、二三人學友が集つた時、貸間の話が出たのであつた。やはり、みんなも貸間を探がしてゐたと見える。

Nが、電燈の下で、眼鏡を光らせながら言つた。

「棗町になら、一軒二階で貸間があるんだ。まだ、きつと開いてゐるだらう。長くゐるものがないのだ。僕の友達も、あすこへ行つたのだ。移つて行つた晩だね、夜中頃に、ふと眼をさますと、女が室の中を歩いてゐるのださうだ。青い顔をして、俯向いて、隅の方を足音を立てずに歩いてゐるのださうだ。友達は、自分は、夢を見てゐるのではないか?と、氣をしつかり持つた。しかし夢ではなかつた。自分は、幻想を見てゐるのでないか?と考へた。しかし、眼にはつきりと其の女が見えた。友達は、怖しくなつて蒲團を頭から被つた。そして、夜の明けるのを待つた。

夜が明けると。もう、一日もこの家に居ることができなかつた。それでね、早速荷物を片附けて、前の下宿へ歸らうと思つて、さう斷らうと梯子段を降りると、爺さんも婆さんもゐなくて、十二三の女の子がゐた。仕方なく、その女の子に話すと、「やはり、何か見えましたか?」と、女の子が言つたさうだ。「ぢや、僕ばかりでないのだね、この家へは幽靈が出るかね」と、友達は、聞いた。

女の子は、笑ひもせず、ぢつと友達の顔を見て默つてゐたさうだ。

友達は、すぐに、其の家から越してしまつた」

私は、この話を聞くと、あの二階家が目に浮んだ。ほんたうに、そんなことが、この世の中にあるのだらうかと思つた。

一、二年後であつた。私は、其處を通ると二階家が見えなかつた。垣根などが新しくなつてゐた。其の家は、壞されたものと思はれた。

二

私は、この世の中に、「妖怪」の存在を否定する何ものも自か

ら行しないかはりに、また、「妖怪」の存在を肯定するに足る程の實驗にも觸れて見ないのだ。けれど、「妖怪」以上の恐怖すべき光景に接することがないではなかつた。

この一つも、やはり、學生時代に、貸間をさがした時に見た、光景の一つである。

關口の瀧の附近に、黑く塗つた壁板には、武者窓が附いてゐる、古くからの家があつた。しかし、其れが外部から見ても陰氣な二階建になつてゐた。一軒の前に、「あきま」の紙札が貼られてゐた。

私は、こごんではいらなければならぬ、くぐり戸の外から、「ご免下さい」と案內を賴むと、「なにご用ですか」と、つんけんどんな、婆さんの聲が內からした。そして、誰も出て來なかつた。

私は、最初の印象が、すでによくないと思つた。しかし、こちらから案內を賴んだ上は、仕方がなく、

「あきまを見たいのですが」と、言つた。

「おあがんなさい」と、愛想氣のない調子で、おなじ聲が答へた。

私は、すべりのよくない障子を開けて、窮屈な土間から框へ上つた。すると、奥に頑丈さうな白髮の老婆が、怖しい眼付をして、こちらをじつと睨んでゐた。

「どの間ですか」

私は、もう聞かなくてもいゝやうな氣がしたが、やはり行きがかり上から言はなければならなかつた。

「二階の六疊ですから、ごらんなさい」

婆さんは、起たうともしなかつた。

私は、家へはいると、外で見たよりも、一層陰氣を感じた。そして、急な狹い、暗い梯子段を上つた。つきあたりの六疊を、これかと思つて覗いた。壁は處々壞れてゐた。新聞紙などが古くから貼られてゐる、色が黃色くなつてゐた。そして、疊の表は、すでに幾年前に換へられたのか分らなかつた。襖でし切つてもう一間あるらしかつた。

その室は、どんな室かと思つて、私は、廊下つゞきに並んでゐるので、隣の間を覗いて見る氣になつた。高窓から、鈍い光線が射し込んでゐた。私は、其處を覗くと同時に、苦しさうなうめき聲が起つた。蒲團を敷いて三疊の間に、女が枕を廊下の方にして、仰向になつて臥てゐるのであつた。もう長いこと臥てゐると見えて、黑い髮の色は、つや氣がなく縺れてゐた。そして、兩方の頰骨が高く突き出て、眼は底の方に落込んでゐた。血の氣は全く失せて、顏の色は、白い花瓣のやうであつた。女

は歯を露き出して、痩せた躰を悶えて、肋骨を二重に折るやうに、うすい蒲團の下で波打たせてゐた。

「あ―つ、あ―つ」

病婦は、他人が覗いてゐるといふことを悟る筈がなかつた、かうして、獨り苦しんでゐた。枕許には、吸飲が置かれてあつた。

私は、逃げ出すやうにして下へ降りた。外へ出るまでに、殆んど發作的に、

「あの六疊の間ですか?」と、言つた。

老婆は、冷淡な顔を上げて、やはり坐つたまゝで、

「そのうちには、隣の三疊もあきます」と、言つた。

私は、無言で外へ出た。そして、茫然として、ある戰慄を全身に感じた。

―一二三四月―

老媼茶話

菊池寛

私が今までに讀んだ怪談奇語の中では、「老媼茶話」にあるものが、一番面白い。これは、會津の人三坂大彌太と云ふ浪人がかいたもので、この人は伊達に滅ばされた三坂越前守の後裔である。加藤家が、會津を領した頃を中心として會津地方の怪談奇話を蒐めたものだが、文章簡勁で、何となく實感があつて物凄い話が多い。その中で、一地恐ろしいのは「會津諏訪の宮の朱の盤」である。

奥州會津諏訪の宮朱の盤といふおそろしき化物有ける。或夕暮年頃廿五六成若侍一人諏訪の前を通りけるに、常々化物有よし聞及びすごく思ひける折、又廿五六なる若侍來る。好伴と思ひともなひて道すがら語りけるは、此處には朱の盤とて隱れなき化物ある由其方も聞及び給ふかと尋ぬれば、後より來る若侍其化物は斯樣の者かと、俄かに面替り眼は皿の如くにして額に角一つ付、顏は朱の如く頭の髪は針

の如く、口耳の脇迄きれ歯たたきをしける音いかづちの如し。侍是を見て氣を失ひ半時許息絶けるが、暫有て氣付てあたりを見れば諏訪の前也。夫より漸く歩みてある家に入、水を一口所望しければ、女房立出何にて水を乞玉ふぞと問ければ、侍朱の盤に逢たる物語をしければ、女房聞て偖々おそろしき事に逢ふもの哉。朱の盤とは斯様の物かといふを見れば、又右の如くなる顔と成て見せければ、かの侍又氣を失ひけるが、漸氣付其後百日目に相果てけると也。

これは、怪談の型(タイプ)であるが、一番巧妙な、一番氣味のわるい型である。何かの本で讀んだが江戸半藏御門近くで、ある仲間がのつぺらぽうの大坊主に合ひ、膽を潰して馳け出し、やつと夜泣うどんの灯を見付けて、蘇生の思をなし、怪事の始末を語ると、そのうどん屋が、「それはこんな顔かい」と、云つてのつぺらぽうの大坊主になつて見せる話があつた。一度脅して一旦安心させて、安心しながらヒヤ／＼してゐるところをドカツと脅すと云ふのは、人心の心理を摑んだ戯曲的骨法で、妖怪と云ふものが一の演戯であるのだから、昔の妖怪が戯曲術の要領を呑み込んでゐたのも尤もである。

この朱盤の相棒が、舌長姥といふのだ。この舌長姥の活動は次ぎの話をよめば分る。

越後より武藏へ登りける旅人。蘆の原海道に懸り諏訪千本の松原に日暮て道に迷ひ、はるかに火の影を見て漸たどり着たるに、一つのあばらや軒かたぶき壁崩れたるに、七十許の姥いろりのはたに苧をうみ居たり。戸をたゝき是は越後より江戸へ赴く者なるが、不知案内にて道を失ひ候。夜明まで宿をかし給へといふ。姥立て戸をひらき爰は人宿する處にはなけれども、道に迷ひ玉ふといへば宿かし給はんとて内へ入る。時秋にして落葉颯々として淋敷に落葉を焚て茶を煮旅人をもてなす。壹人の男旅草臥にや正體もなく眠る。一人は寢もやらず柱にもたれ居たるに、かの姥折節口を大きに開き口をあき、五尺許の舌を出し首をのべ、かの眠れる旅人のあたまをねぶる。殘りの男是を見て氣味惡く咳拂ひすれば、さりげなきふりにて苧をうむ、時に窓より内をのぞく者ありて云。舌長姥／＼何とて捗をやらぬぞと云、姥誰ぞといへば諏訪の朱の盤坊也手傳ふべきかと云て戸を破り内へ入る。旅人是を見るに面の長き事六尺許色赤くして朱の如し。旅人刀を抜て礑と打つ。斬られて坊主失たり。姥は眠れる男を引提て表へ出ると思へば、今迄あり

し庭も跡なく消て荒々たる野原となる。旅人はせん方なく大木の根に腰を懸夜を明し、日出てそこらを見廻るに、遙遙き草村に、先の旅人はあたまより總身の肉皆ねぶり喰はれ、骸ばかり殘りたり。夫より旅人は一人白川の城下をたどり行、かく語りけるといへり。延寶五年卯月下旬出來せし板行本諸國百物語といふ五册ものにあり。

長面朱面の怪物も、舌長姥も、會津特有の怪物で、どれも東北的な凄味があつて面白いと思ふ。又、これらの怪物が、狸や狐の化けたのでなく、怪物自體であるのも面白い。朱の盤は男性だが、その二怪が夫婦なのかそれとも、單なる仲間なのかは明示されてない。

それから、この本の中にあるもう一の怪物は、猪苗代の城の化物である。城の怪物では、播州姫路城の刑部姫が尤も有名である。この猪苗代の城の化物さへが、刑部姫との知人關係を自慢してゐる。

加藤左馬助嘉明同式部少輔明成御父子の時、猪苗代御城代堀部主膳相勤む（祿壹萬石）寛永十七年十二月主膳只壹人座敷に有ける折、いづくともなく禿來りて、汝久しく此城に在といへども、今に此城主に御目見をなさず。いそぎ身を清め上下も着し來るべし今日御城主御禮請させらるべしとの上意也。故に御目見可仕と云。主膳聞て禿を白眼み此城主は主人明成當城代は主膳也。此外に城主あるべき樣なし。につくきやつめと禿をしかる。禿笑て姫路のおさかべ姫と猪苗代の龜姫を知らざるや。汝今天運すでに盡果て又天運のあらたまる時を知らず。猥りに過去を咄出す。汝が命數もすでに盡たりと云て消失たり。明る春正月元朝主膳諸士の拜禮を請んとて、上下を着し廣間へ出ければ、廣間の上段の座敷棺桶をそなへ其側に葬禮の具揃置たり。又其夕べいづくとも知れず大勢のけはひにて餅をつく音せり。正月十八日主膳厠より煩付廿日の曉死たり。其年の夏柴崎又左衛門といふ者。三本杉の清水の側にて七尺許なる眞黑の大入道水をくむを見て刀を拔飛懸り切付しに、大入道忽行衛なく成たり。久しく程過て八ヶ森に大き成古むじなの死骸のくされて有りしを猪苗代木地小屋のもの見付たり。夫より絶て何のあやしき事なかりしといへり。

同じ、本の中の「靑五輪」など云ふ怪談も、可なり創意があり、特色がある。

南山街道飯寺村道はた右の方の田の中に大塚あり。其塚の

上に大榎有。慈現院壇と云。慈現院といふ山伏生ながら入定せし所故俗に慈現院壇と云とふるき者の噺也。今も深夜に聞ば塚の中にてほら貝を吹音聞ゆといへり。此塚の東向ひ青五輪と云有。此五輪夜々化して慈現院より青五輪迄一面に鐵のあみをはり。往來の人をさまたぐる。或夜更過て南山のもの此の所を通りけるに、六尺許の大山伏と同長なる黒入道と、口より火を吹出し、鐵の鋼を張り其の鋼の内に見法師女童の首いくつも懸り有て、此首共此男を見てにこり〳〵と笑、此男元來不敵もの也。是を見て走り懸り大入道がてつぺんをしたたかに切付る。手ごたへして鋼も山伏も入道も消失て深夜の闇と也けり。其夜明て件の男夕べ通ける道筋へ來て能見るに青五輪の天窓を半分斬り砕き血の色少し見えたり。是より刀をば五輪砕と名付秘藏せりと也。

この本には外に、面白い魔術者の話も多い、その一を擧げて見る。

武州川越の御城主秋元但馬守殿領分三の町と云所へ、行脚の僧一人宿をかりけるに、あるじ慳貪なる者にて宿をかさゞりけり。僧ひたすらに歎き日は暮るる、いたく草臥て足も引れ不申。せめて軒下なりと御借し候へ。夜明れば早々出行可申と云。主人是非なくしぶ〳〵立て戸を開き態と燈をも立ず。坊主内へ入水を求め手足を洗ひたばこを呑み休息し。燈はなく候やといふ。是なしといふ。其時坊主、左の手をいろりの内へ差入れ五つの指を火にもやし燈となし。目を張こぶしを握り鼻の穴へ入るる事肱迄也。其後鼻を、しかめ口をあきくさめをすれば、長二三寸許の人形共二三百吐出す。此人形共立上りて手に手に鍬を以て座中をすき、忽、苗代田の形をなし水を引籾を蒔き田となし、穂出てあからむを、人形共鎌を取大勢にて刈取、つきふるひ米となしたり。其後坊主人形共をかき集大口をあき、一呑に飲納、鍋來れ〳〵と呼に庭の片角の竈にかけし鍋、おのれとおどりて坊主が前に來りければ。坊主ふたを取米水を鍋に入、左右の足を踏のべいろりの椽へ當て、傍に有ける大なたを以て膝節より打砕き〳〵薪となし。火にくべて程なく飯を焚納め數升の米不殘食盡し、水を一口呑いろりに向ひ吹出しけるに忽いろり泥水と成り蓮の葉浮び出て蓮の花一面に咲、數百の蛙集りかまびすしく鳴きさわぐ。あるじ見て大きに驚きひそかに表へ出で若者共を呼集め、件の事供語りければ、聞者共夫は慥かに化物なるべし。取逃すな

と罵りてん手に棒まさかりを取持て屈强の若男十四五人許。家の內へ押入見るに坊主ゆたかに伏ていびきの音高し。しすましたりと坊主が伏たる跡先を取圍手足をとらへ頭を强く押へかゞめ是をとらんとするに、坊主目を覺し押へけろ手の下よりふつと拔出る。是を見て手に手に棒をふり上げ、たたき伏せんとするに、かげろふ稻妻の如く飛廻り手にたまらず。傍に有ける大きなる德利の內へ飛び入たり。取逃すなと罵り此德利を取上るに重くして上らず。德利おのれと迸廻る。さらば打碎けと、棒まさかりを振上るに德利の中より黑煙吹出し德利の中鳴りはためき終に二つにわれたり。其響き大雷の如し。十四五人の者ども氣を失ひ爰かしこに倒れふす。此さわぎの內に坊主はいづかたへ行たりけん。跡もなく失けりとなり。昔松永彈正久秀永祿の頃多門の城にありし時。果心居士といふ幻術者久秀をまどはしける事あり。果心も此類にや。

友人の實見譚

稻垣足穗

これは去年の夏、郷里神戸で友人岡田一雄君から聞いた實話である。同君は私の小學時代からの知己、現今早稻田大學理工科に籍をおいてゐる。

それは去年の十二月のことだと云ふから、即ち一昨年の冬に當る。岡田君は、それまでにゐた本鄕の下宿から下戸塚の方へ引越した。それについて、常から變り者として有名な彼とその下宿の主人との間に、かなり面白い小說的ないきさつがあつて、彼はまづそのことについて卅分ばかりしやべつたが、私には忘れた個所もあり、又、この話に大して必要なことでないからはぶく。さて、かうして、彼の轉居したのが、學校に近い閑

靜なところだと聞いたが、どのあたりであると云つたか思ひ出せない。何でもそれは元々下宿屋に建てたのではなく、かなり大きな古い屋敷の内部を下宿に改造して使つてゐるのださうで、同宿人はそれでも十五人以上は居たと云ふ。彼の部屋は、その離れの二階にある六疊で、南側の障子のむかふには目白の高臺が見え、北側にある少さな窓をあけると、ちよつとした櫟の木立があつて、隣家の庭につゞいてゐた。しかし、どちらかと云ふと、今まで御粗末な造作ながら新築の下宿に居た彼に、そこはうすぐらくよごれてゐて、最初見た時から、あまりいゝ氣持がしなかつた。が、そこより空部屋はなかつたし、一つには、一學期二學期の勉强をまつたく閑却してゐた彼は、正月がすむと共に、一生懸命にやらうと思つてゐたので、却つてそこが、同宿人から隔離されてゐるので、都合がいゝとも考へなほして、荷物をはこんだ。

二三日を過してみると、この部屋も思つたほどわるくない。同宿人も少いし、本郷よりも氣が落ちついてよかつた。そのうちに、一月がすぎて、何でも二月の中頃の土曜日だと云ふ。冬にしてはいやにあたゝかい晩で、朝來からの雨がまだ止まずに、屋根瓦や軒でビショ〱といふ音が、夕方になると共に仕方なく机に向つた彼の心をいやに滅入らした。折から訪ねて來たのが、明大へ行つてゐる友人の村井とか云ふ男で、「ちやうどいゝところだ」と喜んで迎へた彼と、世間並の話題の二三を交してから「やつともらつたよ」と、この村井がニヤ〱と笑つて。たもとからつかみ出して彼の前にならべたのは、新らしい紫色の十圓札がしかも二枚だと云ふのだ。それは村井が或るところへ賣つた寫眞器の代金で、手に入つたら一しよに飮まうと、かねて約束してゐたそれであつた。「まつてゐた!」とばかりに、顏の相好をくずして立ち上つた岡田君と、村井氏の二人は、さつそく本郷の方へ——たしか三丁目のどこかと云つた——景氣をつけに出かけた。

雨方ともかなりにいける二人が、牛鍋をつゝいて、いゝかげんに醉つぱらつて、村井氏の方はグデン〱になつて、表へ出たのはもう一時をすぎてゐた。雨はやはりボシヤ〱と降つて、いやに生ぬるい風がサツと二人の頬をわたる。電車はないし、辻待の車夫の姿も見えぬので、二人は早稻田まで雨中の强行軍をやることにした。彼は左手に傘を持ち、右手にしどろもどろに放歌する村井の腕をつかまへて、春日町から傳通院まへ、大曲り、新小川町の方へとフラ〱と歸つて來た。大男二人に一つの傘、それも定まらぬ手元に支へられたことゝて、意地のわるい風にあふられてうしろへ飛ばうとする、キリ〱

とまふ、かてゝ加へて横しぶきに變つた雨に、二人のからだはビショ／＼である。くらやみにつまづく、足駄をはづしてビシヤリと泥を踏みつける、襟元から心持のわるいしづくが背中へつたへば、足の下から冷たい水がしみこんで來る……それでも、二人はデカンショをどなり、さゝのさをうたつた。却つてその困難を面白いことにして、メチヤクチヤに歩いた。とう／＼車屋まへまで來た。村井氏は別れて鶴卷町の下宿へ、彼は終點から道を左に、こいつは又、もろにまつくらな學校の裏通りを突破して、まづ泥ねづみにもならずに下宿に着いた。

足駄のうへに足袋をすておきにした彼は、階段の上の板敷にぬれた着物をぬいで、そのまゝ夜具のなかにもぐりこんだ。しばらくはウト／＼としたが、いやに蒸あついので寢返りをした。ところが、ふと、氣がついたのは、天井からふとんの上へさがつた電燈と自分の眼との間を――彼はいつもそんなふうにして。まぶしいのをかまはずに眠るのださうだ――何か邪魔するものがある。それがちやうど、物乾竿の浴衣がフラ／＼するやうに、チラ／＼と電燈の光をさへ切る。何だらうと思つて彼はフイと目をあけた。――そこに、電燈のまへに朦朧とした女の半身が立つて、藻草のやうにふわ／＼とうごいてゐるのである。影のやうな半透明のからだをとほして電燈が見える。しかも、その白い衣のはだけた胸に刻みつけたやうな肋骨が、―！左右にたれた兩手の骨ばかりになつてゐるのが、ハツキリと見える。ギヨツして、彼は夜具の襟に手をかけた――その刹那に、女がスーツと自分の上へ倒れかゝつて來た。エイツ!!!その青白い額から顏の半分をかくしてたれた黑髮か、正に自分の顏へふれやうとした時、彼は恐怖とも戰慄とも威嚇ともつかぬ叫びをあげて、半身をはね起した。女はスーツと元の位置にもどつた、この時のおそろしさは！……（と、あの豪膽な男が顏中に粟粒をみせて私に云つた）――彼の目には、その部屋の唐紙の模様も、本箱も、その上の置時計も、しかも、その針が三時半をさしてゐるのまでわかつた。しかも、その影のやうな女の姿は、電燈のまへにふわ／＼と、ひるのやうにゆらめいて、ちよつとでも、油斷をすると、何物かをねらふやうに迫つて來る。この息づまるやうな對抗の間に、彼は、バサ／＼とみだれた髪におほはれてよく見えない女の口元から、さは／＼と、木葉のゆれるやうなつぶやきを聞いた。女は隙を見ては、接近しやうとしたが、彼も又死物狂になつて向ひ合つてゐたので、そのうちに、ボーツと消えてしまつた。ゾツと、何とも云へぬさむけが、彼の全身をおそつた。……

夜が明けるのを待つて、彼は雨戸をあけ放した。雨は名殘な

く晴れて、朝日が緣側にさしこんだ。北の小窓をあけやうとすると、たしかに閉めた筈の戸が、閂もはづれて、二寸ばかり開いてゐた。だが、これは別段不思議な氣を起させなかつた。あるひは閉め忘れたと思つたからだ。しかし、おどろいたのは昨夜の實に何とも云ふことの出來ない怪異である。そのものすごい形が目のまへにまざ／＼とせまつて、さしも、柔道二段の岡田君も、即刻に宿を變へやうかと思つた。しかし、だん／＼と氣が落ちついて來るにしたがつて、そこに又、並ならぬ好奇心もおぼえて來たと云ふ。それについて、いろ／＼な話をしたが、ともかく、岡田君は、この新らしい經驗について、最も愼重な態度を採らなければならぬと考へた。で、その日は、誰にも話さずに、只、平常から彼の氣にかゝらぬでもなかつた、その離れの下の廊下の突き當りにある、釘付になつて使用されてゐない便所について、それとなく女中にたづねてみた。しかし、この女の口からは、何等具體的なものをつかまれなかつた。だが、さすがに夜になると、彼はあまりいゝ氣持にもなれなかつた。幸ひその晩幽靈は出なかつた。次の晩も、その次の晩も……。かうして、日が經つうちに、この何事にも無頓着な友人は、あるひは夢だつたかも知れぬとさへ思ひ出した。その夜の怖ろしさは、心の奥から離れなかつたが、その一面、堂々たる男子が、そんな事をいつまでも考へてゐるのは、馬鹿／＼しいとも考へられた。で、幽靈は彼の胸のなかに、そのまゝ何人にも語られずに葬られてしまつたのである

紙數を限られてゐるので、クド／＼した叙述をやめて大たいの條を運ぶが、その幽靈が、三月になつた或る晩、だしぬけに彼の部屋に再現したと云ふのである。やはり同じ時刻に。そこに又、雨の夜と同じやうなことがくり反された。おどろきと疑惑はさらに輪をかけて與へられたことになる。ところが、こゝに一つの奇妙な發見は——それはその次の朝、何と云ふこともなしに彼の腦裡にひらめいたと云ふが——ちやうど、その前夜、柔道部の送別會があつて、そこで自分が遲くまで牛鍋をつゝいて痛飮したといふ一事である。それから歸つて來て寢たところへれいの女が現はれた。そして、この前の二月の晩のときはどうかと云ふと、それもやはり彼が村井と牛鍋をつゝいた夜であつた。それに、その時の朝、隣家の垣根に接した櫟のある窓の戸が少し開いてゐたが、この度もやはり同樣に二三寸のすきが明いてゐた。この二つの點に思ひ當つた彼には、その幻影と牛肉と窓との間に、何かの關係がなければならぬと考へられた。さう云へば、二回目の夜、最初よりも膽をすへた彼が、一心に幽靈をにらまへて、そのザワ／＼いふつぶやきに耳をか

たむけてゐると、「憎い！　憎い！　憎い！………」と同じことをくり反してゐるやうに聞きとられた。が、その「ニクイ！ ニクイ！　ニクイ………」とうらみをのべる聲が、こんどはどうやら「ニク！　ニク！ニク！　………」だつたやうに解釋される。「いや、それにちがひない」と彼は考へた。「あれはクドくしたなげきや、おそろしいのろひでなく、只、ニク！　ニク！ ニク！と、簡單に、しかも渇した者が水を求めるやうに反復する切ない求願の聲だつた。ニク！　ニク！　ニク！　ニク！　さうだ！　それはやがて、肉！　肉！　肉！　牛肉！ 牛肉！　牛肉！　でなければならぬ」――そこで岡田君は、その午後友人が來て、茶を持つて二階へ上つて來た主婦に一部始終を語つてみた。

「さう仰しやればたしかに見當りがあります」と、襟元を合はせるやうにして聞いてゐた主婦が、彼と友人に聞かしたといふのが、次のやうな憐れな話であつた。「――あなたが、二三寸開いてゐたと云はれる窓の向ふにあるおとなりですが、あそこに十九になる娘さんがありました。なかく温和なしい利口な方でしたが、その娘さんが、ありや去年のたしか十一月でした、肺病でなくなつたのです。その病氣がいよく惡くなつて、今日明日にも危いといふ時、その娘さんが、お母さんに牛肉を食べさせてくれと賴んださうです。ところが、このお母さんと云ふのがほんとうの親ではなく繼母で、あまり評判がよくありませんが、その時も何でも、お前は早くよくなつて貰はなきや困るのに、病人のくせに生意氣な事を云ふと云つて、可愛想に、その針のやうにやせ細つて、さうたのむ聲もとぎれくで苦しさうな娘さんを、散々に叱りつけた、娘さんは泣き伏した、それをおとなりの女中さん――この間鄕里へ歸りましたが、それが傍で見てゐて、いじらしさに覺えず顏をそむけたさうです。この話もその口から聞いたのですが、近所にも知られてゐるやうです。こんなわけで、お孃さんは、最後の望みもかなはずに亡くなつたので、その恨が殘つて迷つてゐるのでせう………」

この話の後、義理堅い岡田君は、主婦と相談して、牛肉を五十目買つて來て、その晩から窓のそばへ供へた。二三晩それをつゞけた後、彼は村田氏の居る鶴巻町へ移つた。………岡田君から聞いたのはこれだけである。尤も、窓ぎはへ置いた牛肉が、朝になるとなくなつて、皿ばかりになつてゐたと云ふ。しかし、岡田君は主婦の話を聞いてから二階の六疊には寢なかつたので、どうしてなくなるかは見とゞけなかつたし、そんた勇氣も出なかつたが、不思議にも、その度毎に、れいの欅の見え

る窓が二三寸開いてゐたさうである。だが、これは私にはまさかと思はれる。猫か何かゞ食べるのではないか？　それにしても、——第三者の私にはハッキリした事は云へないが——若しこれが事實であつたら、近來、オリバーロッヂやメーテルリンクによつて提唱されるスピリチュアリズムの實例として、たしかに面白いものではなからうか？

　實は、昨冬私自身で目擊した或る屋敷の怪異を書くつもりでゐたが、それは可成複雜な話で廿や卅の枚數にもり切れぬために、これを代りにした。記述の稚拙は今さら慚汗の至りだが、岡田君の話によると、電燈の前にかゝつた亡靈の姿などは、實に鬼氣迫るものがあつて、その一ケ月ばかり私に牛鍋をつゝくに躊躇せしめた。ちなみに、岡田君は——未だに明治時代の壯カラを誇つてゐるこの口述者は、決して出たらめが云へるやうな種類ではない。をかしいのは、同君がこの不可思議を經驗した後でもなほ、その以外の一切の靈怪現象と云ふものに對しては、從來通りに、頭から馬鹿にしてかゝつてゐるといふ事だ。そして、この岡田君の所謂「只一つの例外」について、もつと詳はしいことを知りたい人には、私からその本人を紹介してもいゝことをつけ加へて筆を擱く。

彼女の見た幻影

久米正雄

私は割合に神經系統がノルマルだから、今迄殆んど自分で、怪談めいた異常の世界を、感得し得た事はない。他人（ひと）の話なら、隨分聞いてぞつとした事もあるが、自分で慄然と戰くと云つたやうな事は、全く無いと云つてい丶。其癖さう云ふ不思議の存在を、人一倍信じてゐるのだが。そして又今だに、夜更けに便所へ立つ事などには、妙に怖がる臆病さを持ち合せてゐるのだが。——便所と云へば、夜中一時過ぎの場末の、靑い灯がついたやうな共同便所と、山の中の溫泉場——それは箱根の上の方あ

たりでも、――の夜更けの便所は、なまじい手水を湧くまゝに流してあつたりすると、小供の時に感じたにおさ〱劣らぬ位怖い感じがする事だけは知つてゐる。………………

茲に鳥渡、怪談のおとし話を書くが、それは僕が今迄他人から聞いた怪談の中で、一番身に浸みた話だからだ。

或る時、或る山の中の溫泉場に、長く逗留してゐた事がある。徒然なるまゝに、又餘りに淋しきまゝに、山の下なる或る町から、藝者を呼んで貰ふ事にした。その子は前にその町へ泊つた時、まア見初めて置いたと言ふやうな、割りに可哀いゝ子だつた。その子と、もう一人、差し障りのなささうなワキ役の藝者とは、山の上からの召に應じて、薄暮自動車で、山の上なる溫泉宿まで着いた。

着く早々、彼女は私の顏をぢつと見ながら、眞劍な顏をして話し出した。

「今、途中の自動車の中で、何だか氣になる怖いものを見たのよ。彼處の山へさしかゝる前に、片つ方が田圃になつてる所があるでせう。彼處でなの、まだ自動車は燈火をつけてゐなかつたので、田圃が何だか灰色に蒼く暮れかゝつてゐて、道だけが白くぼんやり見えるんでせう。いゝ景色だけれど、淋しいやうに思つたもんですからね。ふいと運轉手さんの肩越しに、何氣なく前の方を見ますとね、道つ傍の自動車の行く手に、一人の縞襤褸を着たお婆さんが、地藏さまの被るやうな笠を、うしろへ負ふやうに刎ねのけて、しよんぼり立つてゐるのよ。それが黃色つぽい顏をして、そして下を俯向いてゐるんですけれど、上眼使ひに私たちの自動車を、白眼でぢつと見てゐるのよ。私怖かつたわ。何でもないんだけれど、ぞつとしたわ。そして少し行つてから、運轉手さんに向つて、今道傍に立つてゐたお婆さんは、何だらうつて聞いて見ますと、ね、運轉手さんは、いゝえ、そんなものは居ませんでしたよ、つて言ふんでせう。けれども私は確に、猫背のやうに俯向いたお婆さんを、確にはつきり見たのよ。すつと、其前を掠めて、自動車は通つちまつたけれど。――さア、それから何だか、私、いろ〱氣になつてならないの。自動車が轉覆するか、此處で災難に會ふか、ひよつとすると家のお母さんが、――風邪で寢てるんですけれど、――私の居ない内に亡くなつたりしやしまいかと、何だか落着いてゐられないのよ。だから濟みませんが、今日は成るべく早く歸して下さいな。ほんとに何かの、凶い前知らせぢやないでせうか。私怖いわ。氣になつてならないわ。………」

彼女は幾らか媚びるやうに、私の顏を覗き込みながら、かう云つた。

私は勿論、その彼女の見たものを、眞實だと思つた。そして其幻影が、彼女と自分との間にある以上は、止むを得ないと考へて、一二本の酒の相手をして貰つただけで、夜がまだ淺い中に、彼女を歸さない譯には行かなかつた。

私が他人の怪談を聞いた中で、一番身に應へた話と云ふのは、まアこれ位なものである。何だ、つまらない、と、讀者よ嗤つてはいけない。女と云ふものは、よくかうした怪談を、男にしたがるものだから。そしてそれは私の場合は、「怖いから、濟みませんが、早く歸して下さい」だつたが、又或る場合には「だから、是から怖くて歸れませんから、泊めて下さい」と云はないとも限らない。不幸にして私のは前者だつた！

誰でも云ふ事だが、考へて見ればまつたく、此の人生の「夜道」に於て、「女」と言ふものに會ふ程、ぞつとする事はない。……なんぞ、と云ひましたつてね。是で當世百物語とやらになりますかしら。

隱元豆と蕎麥と富士と

宇野浩二

身の毛の彌立つやうな話——と記者から求められたのであるが、私自身平生餘りその樣な話に興味を感じない、從つて私は今改まつて書くやうなさういふ種類の題目の話を持合さない。その癖私自身はといふと、至つて臆病者で、常々知人の間でその爲に笑はれ者になつてゐる位のものである。が、子は怪力亂神を語らずといふ言葉もある、出來るなら私もそんな風に言つておさまつてゐたいつもりであるが、けれども又、要するに文學とか小說とかいふものは、一種の怪力亂神の話に過ぎないではないかと言はれたなら、私は返す言葉を見出さない。啻し言は傍に置いて、さて私自身の經驗から言ふと、實は私は屢々人並でないものに不思議な恐怖を感じることがある、それは丁度年の行かない子供が、大人が見て了解に苦むやうな事や物やに

怯えることがよくあるが、私のさういふ時の氣持はそれに似てゐるのである。人並でないと言つたのは、例へば山とか、颱の音とか、雨雲とか、(後者は雷が大嫌ひであることから、いつとなく起つたものらしい。)いふやうな、十人の人が十人まで何とも思はないものに對してだからである。だから、私のさういふ時の氣持は容易に人に分つてもらへないだらうし、自然それをどんなに一所縣命に說明したからとて、所謂無駄であるだらうし、と思つて、私はそれに就いて話す勇氣を持たないのである。要するに、私のやうなそれは、神經衰弱者の持つてゐる病氣の一種なのであらうか、そして所詮健全な神經を持つてゐる人には一つの譫言に過ぎないであらう。ところで、私の觀察したところに依ると、一概に神經衰弱者といつても、矢張り女のヒステリイ病者と同じことで、その病氣の現れ方や、惱み方は、各人樣々に五百羅漢のやうに違ふといふことである。

私の友人にFといふ男があるが、この男は隱元豆を見ると、忽ち傍の人たちが了解に苦しむやうな、甚しい恐怖に襲はれる癖を持つてゐる。初めよくこの男が私に向つて、「僕は君のやうに雷とか風とか、或ひは地震とか火事とかを恐いなどとは思つたことはないが、僕は實際隱元豆にはかなはないよ。」「隱元豆つて、あの豆のことか？　あれの煮たのか、それとも畑に生えてゐるところか？」「あの豆のことだよ。實際、斯うして話してゐるだけでも僕は何とも言へぬ厭アな氣がするね。畑のは見たことがないから知らないが、だから、まあ煮たやつだね、僕はあれを見るとゾッとして、實際だよ、身體中の毛が彌立つんだ。」と言つてゐた。

が、私のやうな謂はゞ同じ神經病者でさへも、彼のやうに隱元豆のやうなものが、どうして、どんな風に恐いのか、全然理解することが出來なかつた。そして彼のその言葉を噓か、でなくても多分の誇張があるのだらうと思つてゐた。ところが、その後或日のこと、私は滅多に彼と席を共にする機會を持たなかつたが、偶然或る女たちなどのゐる席で彼と一緒になつたことがあつた。その時私たちはみんなで何か頻りに陽氣な話をしてゐた。殊に彼はその中でも一番喋り手であつた。彼は何かといふと、大男で、體格も頑健で、顏なども厳めしい方であつた。そこへ、女中が菓子の鉢を持つて來たのである。すると、私たちが菓子が出たな、と思つた時と、彼がきやつと女の魂消るやうな叫び聲を上げた時と殆んど同時であつた。私たちが驚いて彼の方を見ると、彼は顏色を眞青にして、兩腕で頭を抱えてぶる〳〵震へながらみんなの人に背を向けて、疊の上に俯伏しになつたのである。私たちには何が起つたのか分らなかつた。

が、中に様子を知つてゐるものがあつて、急いで菓子鉢を持つて部屋の外へ出て行つたかと思ふと、空手で元の席に歸つて來て、「F君、F君、もう女中に持つて行かしたから、F君、もう大丈夫だから、」と宥めるやうに俯向いてゐる彼の耳元で叫んだ。その時も私は未だ何の事だか分らなかつたのであるが、後で聞いて、その菓子鉢の中に隠元の鹿の子があつたからといふことを知つたのである。そして、それは決して彼の嘘の感情ではないらしかつた、何故と言つて、彼はそれからも暫く顔色は青ざめたまゝだつたし、今先までのやうな快活な氣色に容易に戻らなかつた。彼はその馬鹿々々しい事を恐れたのを、後で人に知られて、殊に女たちから頻りに嘲笑されてゐたが、そんなにお喋りの癖に、それに對しては唯氣まづさうな顔に苦笑を浮かべてゐるだけであつた。

私は今、食べ物で恐れる話に、もう一人のKといふ友達を思出した彼のは蕎麥であつた。彼のは然し、Fが隠元豆を見たゞけで恐毛を震つたやうに、無論彼も蕎麥とか蕎麥饅頭とかいふものゝ、あの薄黒い色を見ると、何とも言へない不快を感じるとは言つてゐたが、そんなに甚しくはなかつた。そしてFの恐怖の仕方が謂はゞ神經的な怯えであるのに比して、Kのは肉體から來る反撥であるやうに見えた。言ふのは、彼のは蕎麥そのものは言ふ迄もなく、若し知らずに極く少しでも蕎麥の混つてゐる食べ物を口に入れると、間もなく忽ち全身が鳥肌のやうに粒立つて來て、それに何とも堪えられない痒みを覺える、すると見る見るうちに身體中に赤い斑點が出來て來る。そればかりでない、胃の中を何かで掻き廻されたやうな不快な刺戟を覺えてだから無論激しい吐き氣を催す、が、少しも吐かない、そして咽喉の邊を內側から毛だらけの手か何かで引掻かれるやうな、何とも堪らない氣持になる、と言ふのである。

或時、彼が旅先の宿屋で夕飯を食つた後で、忽ち今言つたやうな状態に陷つた。彼は苦悶しながら女中を呼んで、夕方の食事の中に何か蕎麥の類があつたらうと詰問すると、女中が答へて、「あなたの御覧になつた通り、或ひはお上りになつた通り、そんなものは何にもありません、」と言ふのだ。「なかつたとは思ふが、實は自分が蕎麥の類を口に入れると、必ず斯う斯ういふ状態になる。そして今その状態に陷つたのだから、何か這入つてゐたに違ひない。念の爲に料理場に行つて調べて來てくれ、」と彼は言つて、女中に料理場へ聞きにやつたが、矢張り先と同じ答であつた。「そんな筈はない、蕎麥を食はなければこんな事になる譯はないのだから、」と彼は言つて、改めて料理人を呼んで色々譯を話したり詰問したりしたところが、到頭料理

人が膝を叩いて言ふには、「分りました。それではあの天麩羅でせう。といふのは天麩羅の衣に使つた饂飩粉の箱が、蕎麥粉の箱と隣同志の場所にあります。多分、いつとなしにその隣の蕎麥粉が饂飩粉の中に少し位混つたんでせう。」――だから、先にも言つたやうに、このKの場合は恐がる例としてよりも、もつと外の場合の例として適當であるかも知れない。

さて、一兩年前から私のところへ時々尋ねて來るTといふ青年があつたが、彼は神戸の者で、現に兩親は神戸にゐて、彼は東京の下宿屋で勉强してゐた。家は相當の資產家らしかつた。或時私のところへ彼が來て言ふには、近いうちに彼の母が東京にやつて來る、といふのは周旋する人があつて今度箱根に土地と家を買ふことに略々相談が定つたが、當時彼の父が用事の爲にどうしても家を空けられないので、東京にゐる彼の樣子を見かたがた、その箱根の土地と家を調べる用事を以て、彼の母親が來るのといふのである。母親は東京に來るのはそれが生れてから二度目のことであつた。彼女は或晩神戸から東海道の汽車に乘つた。東京行の汽車に乘つた關西の人たちの誰もがさうであるやうに、彼女も亦夜が明けたら彼女の目の前に開けるに違ひない富士山の景色を見ることを、子供のやうな心で樂んでゐた、彼女はこの前に來た時に天候の都合か何かで餘りよく見なかつたところの、その山の風景を心に浮かべながら、夜の明けるのを期待してゐた。

靜岡邊で夜が明けたところで、その朝は都合よく秋の晴天だつたので、左の窓の外に富士山は、文字通りその白扇を倒まに置いたやうな秀麗な姿を旅人に仰がせた。Tの母はこの前の旅には雲がかゝつてゐたのでそんなにはつきり見ることが出來なかつた代りに、今こそ初めてその天下の名山を見た思ひで、流石に眺めても眺めても見飽きぬ景色だと感嘆しながら、貪るやうに眺め又眺めた。多分、彼女はさうして一時間近くも左の窓の外の、或時は森の上や、竹藪の間や、川の上や、人家の上や、樣々のものを前景にしたその山の眺望を樂んだことに違ひない、のである。やがて汽車は興津を過ぎて間もなくの頃、突然薩埵峠の隧道に這入る、神經質な彼女はあわてゝ或ひは硝子窓を閉めたり、手巾を口に當てたりして、顏を顰め、目をつぶつたことに違ひない。そしてもう隧道を出るかもうそれを過ぎるかと希望してゐるにも拘らず、それが隨分長いので、益々氣を腐らしてゐたのであらう、そのうちにほの〲と窓に明るみが射して、汽車は間もなく隧道の暗から開放された。そこでほツとして彼女は何氣なく顏を上げた時、忽ちはツと驚かねばならなかつた。何故と言つて、彼女はその汽車の左側の座席に腰かけて

ゐたので、これ迄は身體を振り向けて、その窓の外に眺めてゐた筈であつた富士山が、今、どうしたのか、彼女の反對の側の、右の窓の外に思ひがけなくその姿を現したからである。（これは東海道の馴れた旅客なら誰も知つてゐる、所謂「左窓富士」「右窓富士」の眺望の爲である。）

一瞬間――或ひは一分間も二分間も、彼女は自分で自分の目を疑つた。彼女は念の爲に左の窓を覗いても見た。彼女は一寸口に言へない程の狼狽を感じた。恐らく彼女の直隣の席に女の客でも乘合はしてゐたら、平素の知らぬ人に物を言ひかけることの嫌ひな氣質などすつかり忘れて、「どうしたんでせう、富士山は、どうしたんでせう？」と泡喰つた言ひ方で尋ねたに違ひない。彼女は何とも言へぬ恐怖に襲はれた。そしてさういふ氣持で、改めて、恐わ恐わもう一度反對の右の窓を眺めると、更に驚いたことには、それは決して目の間違ひとか、或ひはそれが何かに映つてゐるとかいふのではなくて、あり〱と富士山が先よりも一層近づいて、その窓の外一ぱいに、他の點景を悉く退けて、山そのものだけが一ぱいに、聳え立つてゐるのを見出した。その時は彼女は實際聲を上げたい程驚きの頂點に立つた。

つてしまつた、外は最早やすつかり明け放れて、澄み切つた秋の良い日が輝いてゐることは十分わかつてゐながら、然しどうしても彼女の目はふとその方に向ふとあわてゝ外に反らされねばならなかつた。そこに富士山がゐる、――見えると言ふよりは居るといふ方がその時の彼女の氣持に適當してゐた、――といふ豫想が、彼女に言ひやうのない恐怖を吹き込んだ。そしてそれが何方の窓にゐるか分らないといふ考へが、更に彼女の不安を激しくした。

やがて、彼女は國府津で汽車を下りて、それから小田原に行つて、目指す箱根へ向つたのであるが、その途でも屢々富士山に惱まされねばならなかつた。先にも言つたやうに、その時の彼女の用事といふのは、箱根山の或場所にある地所と家とを買ふことだつたので、國府津までその方の世話をする人が迎へに來てゐた。從つてそれからずつと箱根まで、彼女は連を持つてゐた譯である。それにも拘らず、彼女は富士山のことが氣にかゝつてならないし、又それを思ふと恐くてならなかつたので、一人心の中で、あれはたゞの山なんだ、而も美しい山なんだから、などと幾ら自分と自分に辯解して、どんなにその不思議な恐怖を退けようと努力したか知れなかつた。無論そんなものを

行く土地と家に就いての話が出た時、彼女は「富士山が見えるでせうか？」と聞いて見た。「えゝ、それはもう手に取るやうに見えます。」と連の人は彼女の氣持を知らないから、語を強めて斯う答へた。

現に途で彼女は日傘の間から思ひがけなく、背窓を限つて富士山の姿が見えたので、ほッとしたことが二三度ではない。やがて、その目指した場所に着いて、「景色だけは何と言つても日本一でせう。」などと言ひながら、世話人がそこの家の座敷の西の窓を開けると、忽ち飛び込むやうに富士山の姿が見えた時は、彼女は「どうかなさいましたか？」とその人に尋ねられた程さッと顏色を變へた。彼女はそこ〳〵にその場を引上げた。そしてその日のうちに東京のTの家に行つて、そこから神戸へ電報を打つて、根根の地所と家を買ふことを止めさせるように言つてやつた。――

私のところへ、彼女がTと一緒にやつて來たのはその翌々日かのことであつた。その時私は初めて彼女に會つて、その話を彼女とそして彼女の子のTから聞いたのであるが、彼女は五十歳近い婦人でそんな大きな息子があつたにも拘らず、もつともまだ夫があるからであらうが、三十歳代にしか見えなかつた。そしてはひどく神經質らしい、私のやうな、私自身がさうであるものには、この疊を汚なく思ひはしないか、座蒲團にほこりが溜つてゐると氣にしはしないか、私がお喋りであるのを何とか思ひはしないか、私が默つてゐるのを不快に思ひはしないか等と、相手にそんな碌でもない懸念を抱かせる程、極端な狷性らしい様子のあり〳〵と見える人であつた。そして、どういふ機會で、その富士山の話を彼女がしたのか私は今は忘れたが、「それからといふものは、富士山が歩いて來るやうな氣がして、恐うて恐うて……」と彼女は上方言葉で言ふのである。

この文章の初めに言つたやうに、私自身も子供の時分に祖母に連れられて、和泉の國の堺の郊外を歩いたことがあつた時、私は或天皇の荒れ果てゝ、木のもく〳〵繁つた、古い堀に圍まれた御陵の景色を見て、それが何といふこともなく物凄く恐い氣がしたと思つたら、その日から一週間ほど毎晩つゞけ様にその御陵の中を汽車で通つたとか、或ひはその御陵の堀に陥ちたとか、かと思ふと、突然その御陵の中を迷子になつて歩いてゐるとか、兎に角悉くその御陵に關係した夢を見て魘かされたのが最初の記憶で、それから二十歳時分に學校の休暇毎に、東海道の汽車の窓から見る江州の伊吹山の景色に、私は何とも言へぬ

恐しい印象を受けたことがある、そして時々それと何の關係もない場所や時に、ふとあの山の姿を思出して、子供のやうに恐くなる、それから最近では上州高崎から安中、磯部にかけての汽車の中から眺めた妙義山及びあの邊の信州境の山の形が私には何とも言へず恐い、一昨年の春のこと、夜汽車で前橋から磯部に向つた時、夜で而も雨の日のことだつたので、窓の外など無論見えないのであるが、ふと以前に見たその邊の窓の外の山の景色を思出して、三十分ばかりと言ふもの、何かに憑かれたやうにがた／＼身體が震へて、頭を抑えたまゝで怯え出したことがある、――さういふ山を恐れる經驗を持つてゐる私のことであるから、私にはこの富士山を恐がる氣持には、私自身富士山など少しも恐くはないが、十分了解することが出來るのである。無論、斯ういふ氣持の了解出來る者は健全な人間ではないのである。諸君のうちにさういふ不健全な人が何人かでもあるでせうか。（四・八）

高野山の御廟

近松秋江

慄然としたことはないか、とのおたづねであつたが、自分には餘りさういふ經驗はない。しかし、不思議なことがあるとか、化物が出るとか、忌はしい出來事があつたとかいふやうなことでなく、たゞ何となく、妙に神經がいつも不氣味を感じてゐたといふやうな話ならばないこともない。それとて格別不思議と

それは、先年一と夏高野山の寺院で過した時の心持である。一體、寺院などゝいふものは餘り快活な氣持ちのする處ではないが、高野山といふ處は、何といふ譯もなく私には不思議に、ある陰慘な聯想が伴つてゐる。それは何故にと訊ねられても答へることが出來ぬが、たゞ何となくそんな感じがするのであ

主となつてゐるのかも知れぬ。昔――といつて、さまで古いことでもないが、――今から三四十年前高野山の中腹で赤穂の侍の仇討ちがあつた。赤穂の侍はよく仇討ちをすると見える。それは、淺野内匠頭の仇討ちではない。明治の初年に赤穂の藩論が、ある事に關して二派に分れ、軋轢の結果暗討ちにせられた者の一味家族の者が、其等の敵の仲間を何年かの後に討ち果して本望を遂げたといふのである。敵味方共十人以上の多勢であつたが、遂に討たれてしまつた。それは、高野山の中腹神谷の宿から少し降りた處で行はれた

私がまだ極めて幼少の頃、田舍の者達が毎年一度、その人達にとつては一生に一度の伊勢參宮といふことをして、無論その頃は汽車などもなかつた頃のことで、草鞋に脚絆で道中をするのであるが、その序にずつと、大和めぐりから京、大阪の見物、高野山までも詣つて戻つてくる。其時高野の中腹で丁度赤穂の仇討ちのあつてからまだ間のない時分で、赤穂は、私の郷里から、國も縣も違つてゐるが直ぐ隣郡であつて、その時の出來事は隨分噂せられたものと見える。まだ往來の脇に菰を着せ掛けたまゝの死骸が置いてあつたとか、隨分ひどい斬合であつた、敵の方は本道を登つて來る。そいつを討つ方では間道を抜けて途谷の宿から、ほんのもう一寸行くと極樂橋といふのがある。それを向うに渡れば結界になつてゐて、如何なる罪人も罪を問ふことが出來ない。彼等は、もう直きと云ふところまで逃げて來て、そこで遣られた。

又、二里ばかり離れた所の、ある村に昔一人の惡漢があつて女を殺し放火をして高野山に逃げ延びた。その奴も、これからやつと高野へかゝらうとするところで追手に捕へられて引いて行かれ、遂に犯罪のあつた生れ故郷に連れ戻されて後手に絞り上げられ、馬に乘つて曝らし者にされた上で打ち首に處せられた。

………かういふ恐ろしい話を幼少の頃の頭に印象されてゐたので、たゞ何となく高野山といふ處が恐ろしい、陰慘な場所のやうに思はれてゐた。勿論後になつては、道理上さういふ筈はないのだが、たゞ感じのうへでさう思はれてゐるのであつた。實際高野山は千何百年の長い間、人間の靈魂の問題を取扱つて來た舊い道場であるだけに今日尚ほ遺つてゐる、いろ／＼な物が妙にそこの人間の怨念といふやうなものが纒まり着いて居りはせぬかといふやうな不氣味な心持ちがすることは爭はれない。極樂橋といふのは女人堂から約一里ばかりの山下にあるのだが、その古風な擬寶珠欄干の丹塗りが剝落してゐるのも古へ

か偲ばれ、此處を幾千人と知られぬ、靈の惱みを抱いた者、叉恐ろしい罪を犯した者が一度はどうしても渡つて行つたかと思ふと、一寸好い氣持ちはせぬのである。

その夏高野山では、ある寺院の、ずつと奥まつた廣間に遊いてもらつてゐたが、その寺は馬鹿に大きな方丈を新築しかけて、工事は殆ど全部出來上がつたが、まだ細い所の造作は完成してゐなかつた。他の方から一間幅の廣い、長い廊下を傳ふて、約半町くらゐも出て來なければ、來僧や納所などのゐる賑かな處に出て來られなかつた。その廊下の往復に、まだ本壁などのすつかり出來上がつてゐない薄暗い上壇の間に弘法大師の御像の大幅が掛けてあつた。それは曲彔にお倚りになつた姿で、丁度等身大、或はもつと太きいお像であつた。濃色の法衣に顏は白い胡粉を塗つてあるので、それが妙に、薄暗い所であるだけに餘計に眼に付く。繪としては巧みな物でもないが私はそこを歩く度びにそのお像が氣に掛つて何となく不氣味で堪らなかつた。どうしてあれが、かう薄氣味が悪いのであらう、と思ひ直してみるがやつぱりその心持ちは止まない。大師はあれほど多くの人類に敬信せられるお方であるのだから、人に慈悲こそ垂れられるが、何も恐ろしいところは無い筈だと思つてみてもや

總本山の金剛峯山の大方丈には、いろ／＼な由緒のある間が多くあるが、中にも關白秀次の自害の間といふのは、思ひ做しにであるが、甚く陰慘な聯想を思ひ起さしめた。秀次自害の後、火災があつて建物は變つたが、やはり以前のに模して造つたものであるから、當時もそのとほりであつたらう。襖には枯柳に白鷺の繪が描いてあつたが、その鷺にもし顏があるならばと思つて見ると、眞白い胡粉を用ゐて描いてある白鷺が何となく秀次の怨靈のやうにも思はれた。

上田秋成の雨月物語には、奥の院の大師御廟の畔で關白の怨靈を目撃するところを書いてゐるが、私はその大師御廟には屢々詣うでた。寺院のある處から御廟までは十八町といはれてゐるが、一の橋を渡つてずつと老杉の並樹の中を行くと、半道ほどの間に碑佛は古墳墓碣累々として、幾萬の人の靈が其處に眠つてゐるか數知れない。けれども、高野は今日ひどく俗化してゐるので、御廟に到る墓徑は決して陰氣な感じはせぬ。私は幾度となく十八町の道を歩いて大師御廟に參拜したか知れぬ。それは甚だ勿體ない譯であるが、信仰からではない。自分は大師を崇敬はするが、何の宗教によらず宗教上の信仰といふ心は持てない人間である。

歩いていつた。道の左右には無數の古墳が堆く積んでゐるけれど、どちらかといふと科學の信者であつて、迷謬の信者でない私は、ひどく恐いとも氣味が惡いとも思はなかつた。何者も出はしないと思つてゐる。却つて晝間そこを歩いてゐて、毎時、知つてゐながら吃驚りさせられるのは、大阪の俠客小林佐平といふ人間の大きな銅像が立つてゐるのが、ふつと出し抜けに黒い巨像が眼に入るので脅かされるくらゐのものであつた。

今晩も亦た、晝間の、あの小林佐平の銅像に脅かされないやうにと少し前からそのつもりで氣を付けながら行くと、却つて夜はそこまで眼に入らないので銅像が何處に在るか分らない。十八町の道は、奥の十町餘りの處から花崗岩の石疊になつてゐるのさへ淺草か成田のやうに流行する佛寺のやうに思はれて、陰氣といふよりも陽氣である。そのうへ一町置きくらゐに燈籠が立つてゐて、それには電燈が點されてゐるから、頭の上は高い空さへ見えぬくらい、眞黑い杉に蔽はれてゐても道を歩くに不自由はない。自分と同じやうに、夜を籠めて御廟に詣る者があると思はれて、折々向うから歸つて來る人に出會ふ。それでも、自分は何ともないつもりで、強い氣でゐてもその實何處かに臆病風が吹き誘つてゐると思はれて、向うから戻つて來る者があるといゝがなあと思ふ、向うに往つたら、もう何人も居ないかなと思ふと、何だか足が前へ進まぬやうな氣がする。しかし、折角此處まで來て引返へすのも、誰れにも賭け事をしてゐる譯でもないが、何だか自分ながら意氣地がないやうである。何となくその頃から妙にぞく／＼身が總毛立つたやうで、身柱もとの處が凍て付いたやうに思はれる。

自分で自分を叱しながら、

「何が居るものか。」と理性の力を强めようと努力するけれど、さういふ意識が明かになればなるほど一層身體が寒氣がして來てがた／＼する。私は極力力こぶを入れてステッキを元氣よさゝうに打ち振りながら花崗岩の石疊の上を歩いてゆくと、自分の歩く足音が又惡く、鋭つた神經に響いて氣になつて爲樣がない。とても佛法僧を聽かうとする餘裕がない。やう／＼休憩所のある處まで辿りついた。そこでは晝間お蠟燭を上げたり、守札などを賣つてゐるのだが、もう夜が遲いので戸を締めてゐるが、大きな石の線香立ての中にはまだ宵に上げた線香の燃え殘りから煙が立つてゐる。

それを少しゆくと、玉川の橋が架つてゐる。上田秋成が關白秀次の化物を見たのはその橋をかた／＼と渡つて來る警蹕の聲

にそれと氣が付き、はて、斯かる深夜に貴人の參詣は不思議であると思つて、そつと蠟燭堂の物蔭から盜み見てゐると、果して惡鬼の相形をした關白秀次が左右の侫臣ばらとゝもにそこへ來かゝるところであつた。

私はそれをまた、高野に來てから讀んでゐたので、あの橋だなと思ふと、どうもなんとなく氣味が惡い。何にも居る道理はない。吾々は二十世紀の近世科學文明の信仰者である。つまり弘法大師や豐臣秀吉よりも遙に進歩した文明人である。と思つてみるが、それはそれとして、やつぱり玉川の橋を向うに越すのが氣が進まぬ。

玉川には又傳説に、大師が魚を助けてやられた奇蹟が遺つてゐて、その山上の小川に棲んでゐる魚の背には一様に鐵串を刺した痕跡が殘つてゐるといはれてゐる。なるほど魚の背にはそんなものが見られる。

そして私は進みかねてゐると、これは〳〵背後の方から賑かな聲がして、から〳〵と石を踏む音も聞え、大阪あたりの人間で山上の寺院へ避暑に滯在してゐる者と思はれ、肥つた五十恰好のお父さんに垢脱けたお母さん、二十二三の青年とその妹らしい十八九の美しい娘とがから〳〵と深夜のお山に鳴り響くやうな下駄の足音をさせて詣つて來た。それは化物ではなかつたので、私は其等と前後になつて、やつと御廟にまゐつた。

女犯の血しほ

上司小劍

私は精神のどこかに缺陷があるのか、幼い頃から怖いといふことをあまり感じたことがない。生きた人間を怖いと思つたこ

念をもつてゐて、近所の人々から憎らしいほど怖がらないと、一種の爪彈きを受けたことすらある。私の育つた田舍の家は、

たつた一人でそこに暫らく住んでゐた。兩親の臨終の室を寢室にしたのは、態とでもなかつたが、其の六疊がまだ一番綺麗で便利なので、つひ氣が付かずにさうなつたのである。

夜おそくまで友達の家で遊んで、十二時過ぎに歸つて來た時なんぞ、餘り氣持ちはよくなかつたけれど、しかし怖いといふことを知らずに、ガタ〳〵の雨戸を一枚引開け、父が病中に便通のそさうをした痕が、どうしても消えない緣側から這ひ上つて、ガタ〳〵の雨戸を元の通りに締め、マッチ一つ擦らず、ランプも點けずに、敷きつ放しの冷たい床へ入つて眠るのだが、何か出やしないかと思つて、流石に氣味わるく思ひながら、眼を開いても、暗黑のほかには何もない。月夜の折りなんぞは、板がそり反へつてところ〴〵に隙の出來た雨戸から、月影が射し込んで、破れ障子にいろ〳〵の形を描く。伸び放題に伸びた庭の植木が風に搖いで、月を遮る度に、障子へ映つた影の形が變る。こんなのを見て幽靈か化け物だと思ふ人間があるのだらうなぞと考へてゐるうちに、いつしか熟睡してしまつて、眼が覺めるともう、朝日の影が月影に變つて、破れた雨戸をおとづれてゐる。

村の人たちは、私のこの話を聞いただけで見ぶるひをしてゐの意味ではなく、梅の坊と言つて、僧侶の私宅であつたのだ。無論葬式なぞは扱はない大きな寺の塔中の一つだから、墓場のないのが凄味を缺くけれど、相馬の古御所とも言ひたいほどに荒れ果てたのが、晝間さへも臆病なものには、ちよッと尻込みさせるほどだもの、夜そこへ一人で寢るといふことは、屈強な若者にも、非常な冒險だと思はれる。雨の漏る室が多くて、疊も腐つてゐるが、私の父母の臨終の室だけは、屋根が滿足で、疊もさう古くない。其の六疊と隣りの十疊とだけが、まア住めば住み得る、廣い家の安全地帶で、其の他の室には、床の下から、竹が古疊を突き上げてゐたところもある。

「幽靈といふものは、世の中にないとわたしはきめた。若しあるもんなら、あんたがさうやつて毎晩あの化物屋敷のやうな家で、一人寢てはるんやもん。一遍ぐらゐはどうしても出んならん、お父つあんも、お母さんも、一人子のあんたに、あないに執念殘して死なはつたもんなあア。」

こんなことを言つて、村の老人の一人は、私の臆病でないのに感心するとゝもに、幽靈がないといふことを確信してしまつた。

怖いといふことを知らぬ私も、其の家で毎晩便所へ行くのが、少し氣味わるかつた。便所は三つあつたが、下女下男用

のは、屋外に別棟になつてゐるから、庭へ下りて下駄を穿かなければならないし、家族用のはひどく破損して、雨が漏る上、掃除口なんぞスツカリ破れてしまつて、風が吹き込むから、冬なんぞ兎ても寒くて入つてゐられない。そこで私は一番奥の客用のへ行くことにしてゐたが、長い廊下を三度曲つて、漸く其の便所の入口に到着するので、入つたところに二疊敷ぐらゐの空室があつてそこに二つ扉が並んでゐる。手前の方のが小用ので、奥のが大便のである。どちらも廣々としてゐて、大便の方のには疊を敷き、黒塗りの金かくしには蓋がしてある。全體に古い腐りかゝつた家だが、この便所だけは、割合に新らしくて、少しも破損したところはなかつた。たゞこゝへ來ると、妙に身體が押し付けられるやうで、手足を動かすのも何んだか大儀になるし、足が床へくツ付いたやうに重くて、力を入れなければ歩けない。丁度泥田の固まりかけた中へ、足駄を踏み込んで、拔くのに骨が折れるといふやうな風のこともあつた。

ある時、それは晝間(夕方)であつたが、友達が遊びに來て、暫らく話してゐるうちに、私が其の便所に行かうとして、入口の二疊に入ると、大便所の中で、ぽんぽんと柏手を打つたものがある。友達のやツ、廊下を通らずに、座敷の方から拔け駈けして先きへ入つたな、と私は思つて暫らく待つてゐたが、なか〳〵出て來ない。こいつ意地わるく長雪隱をするんだな、と私は少し癪に障つて、『おい早く出ないか。』と言ひ〳〵、コツコツと扉を叩くと、内部からはまたぽんぽんと柏手が鳴る。其の柏手があまりによく鳴つて、この村であれだけよく手を鳴らすものは、神主を職業の私の亡き父よりほかになかつた。さう思ふと、どうしてもあの柏手の音は亡き父の手其のまゝの響きだ。あの若い友達がいつの間にあゝもよく手を鳴らすやうになつたかと感心してゐると、内部からはまた得意氣に、ぽんぽんと鳴る。「もういゝよ、おい。早く出てくれ。』と言つてゐる私の背後にギク〳〵と足音がして、『おい、何を獨言を言つてるんだ。おかしな奴だな。』と言つたのは、大便所の内にゐるとばかり思つてゐた友達であつた。

私は其の時、全身に水を浴びたやうに慄然とした。しかし、誰れか惡意なものが、いつの間にかこゝへ入つて、惡戲をするのだといふ考へが、直ぐ氣味わるさを消してしまつて、『おい開けるぞ。』と斷りながら、多分内部から固く栓を押さへてゐるであらうといふことを豫期しながら、うんと力を籠めて大便所の戸を引き開けると、拍子拔けがして、こつちの身體がひよろ〳〵となるほど、輕くあいたので、また慄然とした氣持ちで、内部を見ると、古くはなつてゐるが、場所が場所だけに破れも

しない蓋と黒塗りの金かくしに蓋のついたのとがあるばかり、しいんと靜まりかへつて、前の小窓には、こゝばかり時々貼りかへる小さい障子の紙が眞白で、沈默其のものゝやうにキチンと締まつてゐた。

そこで私が今の不思議を友達に話すと、友達も氣味わるさうな顏をして、『それはきツと狸だよ、狸が腹鼓を打つたのだ。』と言ひ／＼、大便所の内へ入つて、金かくしの蓋をとつたり、疊まであげて見たりしたけれど、何の異狀もなかつた。

疊の下の板に黒い汚點がある。それは、この家がまだ寺であつた頃、何代目かの大德（坊主のこと）が、戒律の特に嚴しい律宗の僧でありながら、女犯の罪におちて、寺社奉行の手に送られようとした時、遙々江戸に出て日本橋の袂で晒らしものにされるよりはと、この便所で舌噛み切つて死んだ其の血が、拭いても、削つても染み込んで取れないので、わざ／＼疊を敷くことにした其の痕なのである。

友達はそんなことを知らないから、微かに殘つた血の痕の黒いのには、一向氣のつく樣子もなく、變に腥いやうなにほひのするのに顏を顰めつゝ、もとの通り疊を入れたりしてゐた。

『どうしても狸だよ、これは。………一つ狸退治をしてやらうかな。この狸は大工といふ種類で、なか／＼器用な奴だから、退治るのにも骨が折れるだらう。』と、友達はもう狸ときめてしまつてゐた。昔こゝで舌を噛み切つて死んだ坊主、白衣を血に染めて、こゝに倒れてゐた圓い頭の無殘な遺骸のことを考へると、流石の私も身の毛のよだつのをおぼえた。しかし、それは友達に話してやらなかつた。小窓の外からは漸く黃昏が覗いて來て、荒れた庭に、蟲の音が、土から湧き出るやうに響いてゐた。

しやりかうべ

室生犀星

電燈の下にいつでも座つてゐるものは誰だらう、──いつだつて、どういふ時だつて、まぢまぢと瞬きもしないでそれの光

を眺めてゐるか、もしくはその光を肩から腰へかけて受けてゐるかして、さうして何時も眼に觸れてくるものは、一たい何處の人間だらう、――かれはどういふ時でも何か用事ありげな容子で動いてゐるが、しかしその用事がなくなると凝然と座つてそして物を縫ふとか、あるひは口をうごかしてゐるとか、または指を折つて月日の曆を繰つてゐるかしてゐる、――かれのまはりには白い障子と沈丁花のやうな電燈とが下つてゐるだけだ。

誰でもこんな姿を見たことがないか――あるひは五年も十年もさきから、いつだつて晩にさへなれば形紙の中から拔け出した蝙蝠色をした姿を、おのれの住家の中に――飽き飽きしながらもその影を除くことのできないやうにして座つてゐるではないか――よく考へて見てもそんな人間に知り合ひはないが、よくよく見ると見覺えのある毎日見る顏で、毎日見てゐるために何時の間にか忘れ果ててしまつてゐるやうな顏付で、さうして急にはちよつとは思ひ出せない顏付――さういふ馴れきつた顏つきであるために、心には何も殘してゐないやうで、とうていその顏付から逃げ出すことのできない宿命じめた蒼白い顏付――それが春夜にもなほ電燈の下に座つてゐる――。

晩になると一軒の家にきつとこんな姿が決つて座つてゐる。どんなところにも默りこくつて、考へ込んで、考へ込むために動ずんだ姿で、季節はづれの菌のやうに滋つてゐる――それは客間でも座敷でも茶の間でも、あかるい電燈の下にはいつでもきちんと座つて、十年が二十年でも、さうしてこの世の終りまでも見とどける心がけで、この世の終りはきつと自分だけが居殘るだらうといふ自信をもつて、實際は見とどけ過るやうな長生きの前例で、さもしくしかしこつそりと一人で微笑んで座つてゐる、――このおしの強いどうにもならない宿命じみた陰影をどうしたつて追ひ拂ふことはできない、――明るければ明るいほどこの姿は濃い――消えてゆくやうな影や形ではない。

こんな人生のくらしを眼をほそめて眺めて見わたすと、家といふあんな陰氣な箱みたいな二重にも三重にもあるひは十重二十重になつた中から、ただ映つてくるものは一つの電燈の下つてゐる眞下に、いつまでも消えさうもない宿命の姿だけが家々の内部からえぐり出したやうに見えてくる――劇場のさじきに一人づつおさまり返つてゐる看客のやうに、人生のひもじい堪らない晩には、あんなにくどくどした宿命がにじんで、たいくつな此の世の終りを、自分のまはりに生命をもつたものの終りをちやんと見とどけるために座つてゐるではないか――。かれらは退屈を退屈としてゐない宿命のかげである。強情と我慢こからきた人生の骨拾ひで、對手のしやりこうべを火葬場の寒い

[illegible]の衣の[illegible]しく[illegible]して[illegible]さて箸のさきにつまみあげてほ、と、ほ、と、安心しきつた顔つきで優しい微笑をもらすところのゴヤの婆さん――そして己れもやつと宿命の衣を脱いでしまつて、それきりがつかりして

「わたしはこれから何をしたらいいのだらう――もうあんなにきちんと座つてゐなくともよい、あんなに碌でもない片いじな晝も夜もない見張りをすることもいらない。」

かれは心でさう言つても、やはりぬけきらない宿命のつづきを已れの子供や、子供の又の子供などにむかつて、くどくどと又あたらしく範を編むやうに考へ出すのだ、――そしてそのひ、ま、ひ、ま、には、あのやうにしやり、か、う、べ、になつて、灰の粉になつて、もうあんなまんまるい形さへなくなつた骸骨(がいこつ)にまでも、遠いむかしの考へを比較(つきあ)てはそれを子供にためさうとする――あのときはああいふふ、う、だつたし、このときはあの人はこんな顔つきでこんな調子で物を言つたから、この子供にはこれ、こ、れ、のことが適當だらうとまだこは、れもしない人生の算梯(そろばん)をはじくのである。そしてその、子供につきあてた考へが當つたらこの宿命のかげは心しづかに、この世の清い言葉で言ふなら、全くほんたうにこころ靜かに何十年ないほほえみを漏らすのだ。――あんなに永い間電燈の下で辛抱してゐたことも、ここまでくれば結局どんなに辛抱甲斐のあつたことかもしれない――とさうかれはかれらしく考へるのである。だが、とうてい彼は彼らしい以外には何も考へることはできなくて、しまひにはかれはその以前の、かれのための宿命である――いまはそのしやりかうべが何か言はうとするのを聞きすてるわけにゆかないのである。

「もう止せ。」

しやりかうべは言ふた。

「いえ、わたしはわたしの言ふだけのことを、わたしの生きてゐる間はみんなに言はなければならないのです。」

「あとの者どもはあれらに勝手にさせたらいいだらう。おれ一人に取り憑いた宿命でおまへはもう澤山だらうからいいかげんに止せ。」

「あなたはしやりかうべですもの――そんなことは言つたつて言はなくたつて、この世には何んにもならないことだと左う思ひませんか。」

「ふむ、なるほどおれはしやりかうべだ。――だが、おまへもそれにな、つ、てしまつて、箸のさきでその頭の鉢を曾つておれののを拾ひあげたやうに、その子供らにつまみ上げられるだらう――だからいいかげんにしろ。」

「いえ、わたしはまだまだですもの。ほんとにまだまだだ――。」

かれはかれらしく早速みぶるひを一つやつて、さて霜どきの蝗のやうに瘠せたからだを身構へることによつて、已れの健康がどれほどもどうもなつてゐないのを喜ばしげに顔の上にあらはした。

「迎えにゆくぞ、――。」

「來られるものですか？ 不吉な、そして用もないしやりかうべさん。」

かれはそこで又一つ、追ひかぶさつたやうに身ぶるひをした。

「その頭の鉢の地がだいぶ剝げかかつてゐるぜ、――風邪をひとつ罰いたつてもうそれきりだと思ふがよい、おれの見舞ひにゆく前に、誰かが行つておまへのかたをつけてしまふだらう。」

「おどかしたつてそりやだめです。――このとほりわたしはありがたいことには、全くこのとほりにいきいきしてゐるんでございますからね。」

「いや、ありがたいことにはそんなひまにも少しづつづり込んでくろやうな氣がするからね、まああはてずにおれみたいになるんだね。」

[illegible]つて、そしてその姿を消してしまつた。――かれは間もなく嘔氣に似たうすきみわるさを汚ない匂ひをかひだやうに、その鼻膜のあたりにかぎつけた。そして何度も蒼白い唾を椽側へ出て、地面の上に吐きつけた。そして執念深さうにかれはつぶやいた。

「しやりかうべになるなんて厭なことだ。わたしはまだまだ――。」

そして彼女（かれ）はやはり雪洞の下で、そのくろずんだ姿をいつまでも凝然と座らせてゐた。――その姿はかつてしやりかうべでなかつたかれの男の、嘆息のもとであつたが、いまはその子供らがかはるがはるその姿を見ては、溜息をついてゐた。そして子供ら同士がささやき合せた。

「いつまであぁしておれだちのことを、くどくどと小言を言ひ出すのだらう――もう止してくれればいいのに。」

第二の子供は言つた。

「いいかげんに往生とやらをしてくれればいい。」

＊

或るところに二つのしやりかうべがころがつて、向き合つて永い間どちらからも喋らなかつた。が或るとき一つのしやりかうべが言つた。

「見覺えのある顔だ、――」と、さう考へてじろじろ眺めた。

も一つのしやりかうべも殆ど同時に「どこかで見かけたことのあるやうな顔だと思つた。しかしどちらも默つてゐた。それから何十年經つたか、或ひは何百年經つたかも知れない、——風雨にさらされながらも二つの白いしやりかうべは、向き合つたままでゐた。

一つのしやりかうべの穴のところに、毎年のやうに紫色をした威勢のいい凛とした菫の花が咲いた。——別のしやりかうべはその花の色の美しいのに見とれながらゐたが、あるとき珍らしく聲をかけた。

「その花をくださいな。」

その時しやりかうべは吃驚りして、あいつはいつも電燈の下に座つてゐた奴だなと思つた。——あいつはこんなところへまで出て來ておれに又たせがむんだなと思つた

「こんな花をお前は何にするつもりか——。」

が、も一つのしやりかうべは何も知らないやうに言つた。

「その花はたいさう美しくて可哀いいんですもの。」

「ふう！　お前にはまだ花なんかのことを氣にしてゐるのかい。」

かれが左う言つたとき始めて、別のしやりかうべは氣がついて、嬉しさうにこんどは遠慮もなく菫をへし折つて了つた。

「それを折つてはいけない——。」

さういふ聲はきこえなかつたらしい——。

「あなたのならかまはない。」

しやりかうべはかういふと、あるたけの菫をむしり取つてしまつた。別のしやりかうべはがつかりしたはづみに、大方、この間からのひでりつづきの故だつたのだらう——その白いしやりかうべをあとかたもなく、ぼろぼろに崩れ落してしまつた。——も一つのしやりかうべはそんなことを少しも知らないで、紫の色をした菫を抱いて、その匂ひを專念にかいでゐたのである。——そして氣がついて見ると、も一つのしやりかうべの跡方もなく崩れてしまつたのを見て歎いた。が、その次ぎにはまだ自分がこのやうにがつしりした形をもつてゐることを何より喜んだ。

「わたしはまだまだ、——。」

だが、崩れたしやりかうべのそばには、いつの間にか菫の花が咲かなくなつて、そこは粉つぽい粗い地面になつてしまつた。——それにもかかはらず別のしやりかうべは枯れた花を抱いたまま、こんどはすこしづつ崩れはじめた。——そしてしまひには跡方もなくなつて、いつの間にか其處に一本の電柱が建つたきり、あの世とこの世とを正確にしきりをしてしまつた。

梨の花と貸間札

白鳥省吾

一

家に憑いてゐる黒い陰影の戰慄といふやうなものを、私は二三度經驗したことがある。幽靈にはその家に固着して現はれる家付きの幽靈と、路上に浮游する通りがゝりの幽靈と二種類あるさうだが、私はまだその足のない幽靈の正體は見たことがない。しかし家相の惡いといふ點や遺傳から來てゐるらしい運命的な黒い手に、ひやりと觸られて逃げだしたことが二三度ある。結局、私などの見る怪異は、とりとめのないその程度のものであらう。

人間の力でわかりかねる不思議なことが人間界になかく多いが、科學の力がいくぶんそれらを減らしてゐることも事實で、障子を明るくして空を唸つて飛ぶ光り物が隕石であり、山の光り物が山鳥の尾であり、那須野ケ原の殺生石が硫化水素とかで[illegible]のであらう。巨[illegible]の祟りなどいふものも

人間の精神力のいかに激しいかといふことがわかれば、何かの手がかりがないでもあるまい。生物の殺生から來る祟りなどいふことも心理的に生理的に或は說明出來やう。然し不思議は不思議として解けないものも多い。

宮城縣玉造郡鬼首村に蝦蟇のやうに手足に厚い膊があり、匍匐してゐる妙齡の娘があつた。それはその母が交尾してゐる蝦蟇をたくさん捕へて來ては、皮を剝いでその肉を賣つたり喰つたりした祟りだとされてゐる。明治四十年頃、私が實見したところのものである。同縣遠田郡涌谷町に口の周圍が五六本の枝のやうにに裂けた女が居る。その女の父は川魚を發破（ダイナマイトの一種）で取ることが好きであつたが、或る日、小娘であつた當時のその女が、その發破を飴玉と思つて口中に入れて爆發したので、その裂け目を縫つた跡なのである。町の人はそれを魚を取つた祟りだといふのである。それは現に看護婦になつて東京に來てゐたが、誰かの胤を宿して三歳の男の子がある。

同町にはまだ頸の曲つてゐる三十男がある。代々呑屋を業としてゐるのであるが、この男の曾祖父の死んだ時に、祖父が棺の中に入れやうとしたが棺が小さかつたのか頸がどうしても棺の外に餘つてゐた。どうせ死んだ者のことゆゑ痛くもあるまいといふので、頸を左に折つて無理に入れたのであるが、その後二代とも長男が左に頸が曲つた者が生れて現在に至つたのである。

人間が臨終の場合にその遠近の近親者へ行ふ怪異も、激しい精神力からの第三者への念寫であらうか。線香が消えたり、屋鳴りがしたり、飯の色が赤く見えたりするごとき、また僧侶は深夜、客殿の方で物音がするときは翌日必らず男の死者があり、臺所の方で音する時は女の死者があるといふことを知るといふことも不思議と言へば不思議である。

過、現、末のいろいろ縺れまじる人間界。それらのじめじめしたところに咲きはびこる惡の華、毒の蕈といふやうなものは有り得べきことである。さきに言つた死靈、生靈の祟り、惡の應報、家にまつはる怪異、遺傳。

私は大正九年四月廿日、私の郷里でこういふ光景を見た。宮城縣栗原郡一迫村字長崎で兄殺しがあつたが、その殺人犯である弟が人力車に乘せられててうど通りかかつたのである。飛行帽のやうな灰色の帽子をかぶつて、左側にそれで兄を突き殺したといふ桁を横へさしてあつた、少し蒼ざめた顏だが腕組をして存外平氣でにやにやしてゐる樣子だ。そのすぐ後から自轉車に乘つた巡査がついて行つた。人の話に依ると殺された兄といふのが餘程古くに實父を殺したことがあるので、弟が仇討をしたやうなものであるといふことである。剛脈な家に流れてゐる惡の血！。

東北には「おかみ」と稱して死人の代言をする一種の巫女が居るが、中國のH市の某友は私に依頼してその祖先のことを聞いてくれと言つて來たことがあつた。その家では代々、いくぶんか順境に向うと轉落するやうに悲運に突き落されるといふことであつた。私はそれらの事柄を一切沈默して巫女をして語らしめた。彼女は弓弦を鳴らし歌ふやうな哀調で語りはじめた。即ち何代か前の祖先に無理死をしたものがあるので、それを厚く祭るべきを諄々として語つたのであつた。友にそれを告げたところに思當ることがあると言つた。

私はとりとめのないことを徐りに書き續けて來たやうである。さて家に憑いてる黑い影についての經驗を次に語らう。

二

私の先輩である詩人山尾朝光（匿名）はその愛妻を亡くした當時で、どこかへ轉居しやうとしてゐた。明治四十五年の春である。その頃貸家は今と違つて到る處にあると言つてもいゝ位であつた。然し朝光は人一倍、縁起を擔ぐ方であつて、東京市の地圖の上に磁石を置いたりして方角をいつも氣にしては家を探した。新智識を受けた人に似合はぬといふので誰でもそれを陰で笑つたが、當人は大眞面目であつた。四月廿二日の午後四時頃、戸山の原の散歩の歸りに立寄ると、手不足で困つてゐた朝光は、もう夕刻だが明日の引越の樂なやうに掃除だけして置かうと言うので、五六丁しかない引越先の家につれ立つて行つた。朝光はバケツを手にし、私は彼の亡妻の小さい鏡臺を下げて行つた。雜司谷町の細いF字形の横丁をのぼると突き當りの門を左に入つた、つまりFの上端に當る所にその家があつた。

私達は先づ雨戸をガラ〳〵と開けた、そして、朝光が後ろの差配の家から借りて來た帚とはたきで掃除をはじめた。

『いやに濕つぽいな』

と朝光が言つた。Fの下段に當る家の裏の小窓がすーつと開いて年增の奥さんが、こちらを不思議さうにそれは失禮なほどいつまでも見てゐるのである。どんな人が隣家に來るだらうかといふことは誰でも持つ好奇心であると思ふから私達は深くも氣に止めなかつた。

便所に通ふ椽側に大きい草鞋の泥跡がある。赤インクか血かわからぬものを小刀で削つた跡がある。臺所にも草鞋の泥跡があつて、板をはいで見ると古枕があつて、つまみ上げるとボロ〳〵にふやけて中から蕎殼がこぼれ落ち、その傍には髪が一がたまりある。朝光は椽にかがんで煙草を吸つた。そこへ小さい庭の枝折戸を明けて十六七の御用ききが『ヤア失敬!』と兵隊のやうに右手を擧げて敬禮してはいつて來た。朝光と見知り越しなのであるらしい。なか〳〵人を喰つてる小僧らしく言葉もぞんざいである。

今度、此家へ引越して來るのかね、また取つて呉れたまへ。』

『うん、いゝとも。おい此家は餘り人が居つかんやうだがどういふわけだい。』

と朝光は何か氣になるらしく小僧にたづねた。

『わけがあるんだよ。』と小僧は言つた。

『えツ』と朝光は頸をのばすやうにした。

『誰にも言つてはいけないよ、この門が鬼門に當つてると言ふので』と小僧は顧みて指しながら、『引越して來る家族はいつも誰かが病氣で死ぬんだよ。もう三人も引越して行つたのを己は知つてる、この間のは奥さんが亡くなつた。……』

『それぢやよさう』と朝光は顔蒼さめて立ちあがつて私を見た。縁側の血痕、古枕、黒髪、等からの陰濕な氣が二人の胸に同時に漲つて來た。小僧は朝光の驚き方が激しいので、折角ふえた一人の御得意を失くしたといふわけでもあるまいが、却つて呆氣に取られてこそこそと歸つて行つた。

明け放つた雨戸もそのまゝにして、朝光と私はその家を出た。それでも朝光は籥を差配に返してくれと私に命じたので、飛石を踏んで、明々と灯のともつてる家に『野田さんはこちらですか』と玄關で聲をかけた。すると、『手前は松本です』といふ四十恰好の男の聲がした。私は他に家があるかと思つて見廻したが、この門內で灯のついてゐる家はその家だけである。もう月の光が庭いつぱいに散つてる白い花を照らしてゐた。大きい梨の木からこぼれる花だ。籥を借した家は無い！私は籥を庭に捨てて、何かに魅入られたやうにいそいで門を出た。體軀の偉大で人一倍臆病な朝光は、もう五六間さきを薄暗い陰影のやうに大路に急いで、こちらを振ゆむきもしなかつた。

大正二年の九月、ちやうど早稻田を卒業した私はどこか閑靜な素人下宿に宿をきめて勉强しやうとあちこちを探し廻つた。何日かを探しあぐんだ四日の晝頃の事である。氷川下町から西北にかけて、いつたいに林が多く、丘陵めいたところに靜かな好ましい家があるやうな氣がされた。今は住宅地となつたが、處々とした森や池があつて、無數の五位鷺や鴨の巢である伊達屋敷なども近くにあつて、その頃はむろん電車も開通されてゐなかつたし、なまなか郊外よりも閑寂な落付きを見せてゐるやうに思はれた。千川といふ小さい溝のやうな流を北に渡ると坂になつてもう丸山町である。左側はどこかの屋敷らしく、深い林で右側だけに家が並んでゐる。その家々の背後も林である。市內でもこんな林が殘されてゐるのかと不思議に思はれるほどであつた。殘暑がまだひどくて、法師蟬が、オーシーツクツクとそちこちに頻りに啼いてゐた。片側の家もつきると坂はやや急になり、兩側とも全くの林となつた。私はそこを兎も角、登り切つて林町の方に出やうと思つた。すると思ひかけなくも右側に一軒の家があつて『貸間あり』といふ古びた木の札が塀に打ちつけられてゐた。丘めいた林を地ならしして建てた家らしく、周圍の林がその家を包んでゐる。夜などは少し寂し過ぎるかと思はれたが、その靜かなのに心を惹かれて、玄關に立つた。すると强烈な藥の匂ひがぷんと鼻を撲つた。私は、既に聲をかけたあとなので引返すこともならず立つてゐると、五十過ぎの婆さんが出

て來た。玄關のすぐ左は三疊位の茶の間で、そこに爺さんと婆さんが居たのだ。爺さんは長火鉢に顏を向けるやうにしてこちらを見ることを避けてる樣子である。家の眞中に廣い廊下があつて、その兩側に六疊位の間が二つ宛並んでゐる。さほど廣くもない家に幅廣い廊下があるといふのも變だが、殊に驚いたことは、障子がみな外づされて一ところに立てかけてあるが、ひどい雨漏りのためかぼろ〳〵に裂けてゐる。一昨日は豪雨であつたがそのためであるらしい。右側の奥の間は誰かが借りてるらしく、男の着物が釘にかけられて、鳥打帽などもある。机の上に藥瓶が三四本並んでゐる。と、北隅の便所の戸が開いて廿歳位の女がすーつと音もなくその室の方に消えてゆく、橫顏の窶れて蒼ざめた細帶姿である。これは婆さんの娘といふよりは、室のまとまつてる樣子から見ても、夫婦者が間借りしてるらしい。とんでもない所に來たものだと私は思つた。

それと向ひ合つてる室を借すのだと婆さんは案內したのである。いつたいにこの家にはいつた時から冷やりとしてゐたが、北の方の雨戸は閉ぢられたまゝなので、外はかんかんと日が照つてゐるのにこの室は妙に特別に冷やりとしてゐる。疊はまだ新しいのにじとじとと濕つてゐる。庭の方を見ると、林の土を二三尺切り下げて地ならししたらしく、林はずつと上に見られるし、土にたてかけて片隅に浮彫の石地藏等が立つてゐる。南が壁で塞がつて西が出入口で東にのみ開いてゐるのも妙な建て方である。

『この室は幾らですか』と私は訊いた。

『八圓で……』と婆さんも、どこか力がなく病氣のやうに見えた。髮はひどくほゝけて、眼の色も、黃色の皺の顏も疲勞し切つた上におど〳〵して見える。

その頃、下宿料は十圓前後が普通であつた。

『賄付きですか』と私はきいた。もともと居る氣はないのだが、行きがゝり上、そうきく外なかつた。

『賄はしません、室だけで……えへへ。』と婆さんは私の顏をしげ〳〵と見て笑つた。その笑ひは人の心を見通してるやうなまた自分の不幸に泣いてるやうな妙な笑ひであつた。私はぞつと寒さが背筋を通り、頭髮がみなよ立つたやうに感ぜられた。言葉の上でのみ知つたこの恐怖を表はす言葉が、事實、恐ろしい場合にほんとうに髮の毛がよだつものだと感じた。どこか妖怪的氣分を暗示して寒い淒さが心を撲つたのである。

『いづれ考へて見ましてまた伺ひませう。』

と私は逃げるやうにそこを飛び出した。さつきの病婦の夫のであるか太いステッキが玄關にあるのが目についた。それが氷

川下町邊の工場の職工だといふ風に何となく感ぜられた。古びた木の貸間札を怖ろしさうに再び見捨てて、もう貸間を探す元氣もなく、『不思議な家だ』と何度も呟やきながらその坂を下りた。庭さきの地藏尊強烈な藥の匂ひ、あれは女、婆さんの笑ひ、そして『貸間あり』。——その家の陰影はいつまでも頭にこびりついてゐた。

首くくりの部屋

佐藤春夫

私は以前さういふ題目に相當興味を持つてゐたけれども、今ではどちらかといふとそれほどにも思はない。それや無論、興に乘れば話し出す材料も多少はある——以前に人から聞いたり自分でも感じたりした（へんなものだからはつきりと見たとは言へないから）事柄も無いではないが、それを描き出して見るだけのパッションを今は感じない、

このほど、内田百閒氏の「冥途」といふ本を見た。實に面白い本だ。その本がそつくりそのまま當世百物語だ。不思議なチャームのある作品集だ。ただ私にとつてはやはり少し古い氣がする。といつてその感じ方ではない。ただ取材が古いだけで、感じ方はむしろ斬新だ。あんな空氣の世界をあれだけに表現する手腕が私にあつたら私も今何か面白いものが書けるのだが、どうも我々の筆は理窟にかなひすぎてゐて百物語は書けない。

こんな話のうちで、私を一番脅かすものは分身——離魂病ドッペルゲンゲルの話だ。自分自身とそつくり同じ人間がもうひとりひよつくり現はれるといふ考へだ。雪隱の戸を開けてゐたら自分がしやがんでゐたなどといふのは古くからある奴だ。これは人から聞いたことだが、彫塑家荻原守衛が死ぬ時には、その一週間とか十日とか前から毎晩のやうに寢床の上を一寸とか二寸とかぐらゐの侏儒が、それもうぢやうぢやとむらがつてまわり歩いて彼を惱したさうだが、その侏儒がよく見るとどれも

これも形が小さいだけでそつくりそのまま自分の姿をしてゐたといふ。どうもいやな幻影だと言つて彼の友人にこぼしたさうである。

ビスマークが臨終の床にゐるといふ時にどことか新築の橋の上を歩いてゐたさうでそれを見かけて敬禮した人が澤山あるといふのは有名な話だ。ところが私の父の分身が現はれたといふ話があるのだ――「私の父が狸と格闘する話」といふ童話風の話を私が書いてゐるが、あれは第一行目から最後の行までそつくりそのまま事實である。つくり事は一字もない。一口に言ふと、ある月夜の晩に私の父が自轉車で或る切り通しの坂道を越してゐて、そこで狸にとつつかまつて狸と格闘をしたのださうである。それをその坂道の片側町にゐる人が、物音をききつけて障子の隙間から覗いてゐたといふ。この人は父が狸をねぢ伏せて、自分も怪我をして自轉車を引擦つたまま家の方へ引返したところまで見たさうだが、不思議なことには、もうひとり別の人がその坂道を通りかかつて怪我をして自轉車にすがつて通る父を見かけたさうである。――この人はこの坂道とはよほど遠い場所に家のある人である。つまり、同じ事件のつづきが、二人の何も知らない人たちによつて見られたのだ――もとより父はその晩うちでぐつすり寢入つてゐた。この話は二十年ほど前の事件で、私の町の人でまだ覺えてゐる人もある。私にはどうも考へがつかないほどへんな氣持をさせたものだが、今でもやつぱり考へるとへんである。

これは去年の初夏の話だが。――

ある素人下宿に私は二週間ほどゐた。私の部屋は二階だがうす暗いし、私はそのころ殆んどその家では夜寢るだけであつたが、或る日、稲垣足穂などと同じ家の三階で話してゐて夕方、散歩に出る前に自分の部屋へちよつと這入つてそのついでに戸をしめて置かうと思つて何氣なく障子を開けると、その廊下の戸ぶくろのところの柱に得體の知れないものがひつかかつてゐる。ぶらさがつてゐる。よほどくらい夕闇のなかをぢつと見てゐたが、どうも何とも見究めがつかない、私は急にこわくなつて部屋からとび出した。稲垣と外にもう一人つれて來て、今度は電燈をつけて――さつきはあんまり慌てたので電燈をともしてゐるひまもなかつた――見ると、それや洗つてかわかした足駄のつま皮であつた。何のことだと大笑ひをしたが、私にはどういふわけか、さつき見た時には、それが足駄のつま皮などといふ小さなものではなく、といつてそれほど大きくもなかつたがすくなくとも今考へて二尺見當のもつとどつしりしたものが

ぶら下つてゐると感じられた。私は憶病な男だが、何がなんだつてつま皮ぐらゐなものでは飛び出しはしない筈だ。

その家は名うてのいやな家であつた。人が三人とかへんな死方をしてゐた。私のゐた部屋には首くくりがあつたのだといふ。若しあの部屋で首をくくるとするとある廊下のところなどが一番自然な場所のやうであつたし。――その家のことは稻垣が書くさうだからこれ以上は書かないが。

私は憶病だ。子供の頃からさうであつた。父は私をよくそのために叱つた。「一たい何が出てくると思ふのだ?!」と言つたものだが、私にはその言ひ方が子供ごころに不滿であつたが、出てくるものがわかつてゐるほどなら何もおそろしくはないのだ。思ひがけなく何かが出て來て、しかもそれがいついつまでもどう考へても考へがつかない代物でゞもあつたら……、この氣持ちと理窟とは今だに私には消えないでゐる。

林中の妖美人

山田耕作

私がまだ北海道の××に居た時のことでした。たしか夏もすぎかゝつて、秋のおとづれが野末の草の葉先に、黄いろく見えはじめたころだとおぼえてゐます。私はある日叔父の用で、急に隣村まで出かけて行かねばなりませんでした。

隣村といつても、私の住んでゐる××からは、およそ四里ばかりも距つてゐます。それに私たちの村と、その村の間には、大きな森林があつて、晝間ならば兎に角、夜間は勝手を知つた人々でさへも、野獸の襲撃をおそれて、滅多に一人歩きはしないといふほどでした。私が家を出た時には、もはや四時に近い時分でしたので、うつかり道を歩きおくれて、森林の中で日が暮れでもしては大變だと思ひましたので、一生懸命足を急がせました。

しかし森にさしかゝつたところには、もう夕日もそんなに傾いては居らず、鬱蒼と生ひ茂つた木の間をもれて、丁度金の箭でも落したやうに、下萌の青草の上に、その影を投げてゐたのでした。日が落ちてしまふまでには、大丈夫この密林を通り越して、隣村に着くことが出來ると思つてゐた私は、青年の血氣に任せて、大聲で歌を歌ひながら、元氣よく足を運ばせてゐたのです。私の歌聲が、谺して物凄く響いて來るのさへ、私にとつては却つて愉快に聞かれました。

それでも私は萬一の場合を慮つて、仕込杖を携帶することを忘れませんでした。そして後になつてしみじみ後悔したことですが、それをすらりと拔き拂つて、狹い道の兩側に生ひ茂つてゐる灌木の枝を切り拂ひ切り拂ひ進んで行つたのでした。

その内に私は、もはや餘程の道のりを歩いて來たにも拘らず、依然として森の深みの中をさまよつてゐることに氣づきました。行く手の木の間を通して、廣々と開けた平野のグリムプスが、すぐにも眼の前に現はれることを信じてゐた私は、それと氣がついた時には、少しは途方に暮れてもゐました。

いふまでもなく深林の中の小徑のことですから、道は幾曲りにもうねつてゐます。私は私の足の下を一筋の布を長く延べたやうに、ちよろちよろと走つてゐる小さい道が、木の間に隱れて行くのを見る度毎に、あそこの曲り角を廻りさへすれば、森の出口は目の前に見えるのだと、我と我身を勵ましながら、小走りに急いで行くのでしたが、さうした曲り角を幾度か曲つて見ても、私の前には何時までも同じやうな密林の中の光景が展開されるばかりだつたのです。そればかりか、思ひもかけない二股道が、ひよつこりと飛び出すことさへありました、その度毎に私は腕を拱いて考へて見たり、あるひは右に行つたり左に行つたり、または前に進み後に退き、如何ほど思案を重ねて見たかわかりませんでした。普段から森の中の案内をよく知つてゐた私は、それでもまだ私が道を迷つたのだといふことを、信じたくはなかつたのですが、信じまいとしても、事實は如何ともすることが出來ませんでした。

その内に日はいつしか西に傾いたらしく、夕暮の闇が何處からともなく、沈默のうちに忍びよつて來ました。私は焦りはじめました。私は急ぎはじめました。けれども私の足よりは、暮れて行く日足の方が、遙かに早かつたと見えて、私がまだ正しい道を見出し得ない先に、四邊はもはや全く闇になつて終ひました。

やがて月が空に上つたものと見えて、生青い淡い光が、木の葉の間からもれて來ました。私が森にさしかかつた時分に、草

の上に落されてゐた金箔にかへて、青白い月光の銀箔がまき散らされ初めましたが、もとより私にはそれを美しいと見るだけの餘裕はありませんでした。それほど私の胸の中に、焦慮とそして今までに覺えなかつた恐怖を以てみたされてゐたのです。

私は夜間この森の中をさまよひ歩くといふ恐ろしい野獸の話を思ひ浮べました。――一分間も止まつてゐてはいけない。歩くだけ歩いて見るのだ。よしんば正しい道に出ることが出來ないでも。――私はかう心をきめて、足に任せて歩き出しました。もちろん今では最早歌を歌ふだけの元氣は殘つてゐません。唇をかたく嚙みしめて、默々として歩いて行く私の頭の中には、たゞこの密林の中から遁れ出でたいといふ願望のほか、何ものもなかつたのです。

そのうちにふと私は、私の後方に當つて、何者かの足音を聞き出しました。日が暮れてからは人つ子一人通らないこの森の中を、今時分歩いてゐる人が、私以外にありさうにもないと信じてゐた私は、はじめは氣の迷ひかと思ひ、また私自身の足音の反響かとも考へて見ましたが、しかし輕い草履をはいてゐる私の足音が、そんなにまで高く聞えやうとは思へませんでした。何者かが私の後をつけてゐるのだと氣がつきはしましたが、振り返つてこれを見ることは、その場合私にとつてはあまりに恐ろしいことでした。

奇怪なのはその足音の主が、常に私と一定の間隔を置いて、私と同じ早さで歩んでゐるらしいことでした。私が止まれば足音も止まり、私が急げば、足音もまた早くなるのです。私は八分の恐怖心に襲はれながらも、二分の好奇心に驅られて、振りむくまい、見向くまいと思ひ定めてゐた私の決心を、私の眼と共に後に飜へしました。すると、――驚くではありませんか。

年のころは恐らく二十歳を越したか、越さないかでせう、蒼白く瘠せた淋しい顏を、ふりみだした黑髮の間から現はした、早くいへば繪で見る幽靈のやうな若い美しい女が、たゞ一人私の後につつ立つてゐるのです。そして振り向いた私の顏を見ると、猫のやうに眼を細くしながら、輕い笑をその瘠せた頰にニツと浮べたのでした。その笑の中には、幾分の媚と、そしてなまめかしさがないではありませんでしたが、それは女の凄いまでに美しい細面とともに、反つて私の恐怖を增すものでありました。熱心な基督教信者の家庭に生れ育つた私は、平素から靈魂の不滅を信じこそはすれ、幽靈の存在を肯ふことは出來ませんでした。隨つて今目のあたりかうした異樣な姿の出現したのを見ても、それを幽靈だと斷定することはどうしても出來なかつたものです。

狐か狸の仕業に違ひない——それは私としては可成り突飛な考へだつたに違ひありませんでした。平素の私なら勿論そんなことを信じ得られさうにもありません。けれども極度の恐怖は私の判斷力を十分に痲痺させてゐました。まるで電氣のやうに、さうです、ほんたうに電氣のやうに早く、そして鋭く、この考へが私の頭の中を走つたのです。きつと狐か狸の仕業に違ひない、氣に留めれば留めるだけ自分の敗だ。愈々それにつけ入つて悪戯をするだらう。——さう思つた私は——いゝえ、さう思ひ込まうとした私は、「振り向いてはならない、眞直に行け」と心でさゝやきながら、足を急がせました。

その恐ろしい惱ましい存在は、それでも尙私から去つて終ひませんでした。矢張り何時までも私との間に一定の間隔を保つたまゝで後をつけて來るのです。今にも後から飛びかゝつて來さうなものだと思ひもしてゐた私は、又しても怖いもの見たさの念に驅られて、肩の上から覗くやうに後を振り返つて見ました。けれども其處には長い尾を後に垂れた野狐が、私の考へを裏書すべく立つてくれてはゐませんでした。もとのまゝの物凄い女が、もとのまゝの物凄い表情で、もとの通り私を見ては、にたりと物凄く笑ふのです。

私は其の場にうづくまつて終ひました。私は其場につつ伏してしまひました。眼を堅く閉ぢて、兩手を強く握りしめて、私は一心不亂に神に祈つたものです。何と言つて祈つたかは、勿論今では覺えてゐません。いゝえ、恐らく祈つてゐるその時にすら、私は自分自身の言つてゐることを、理解することは出來なかつたことでせう。

祈つても祈つても、もとより私の恐怖は、全く消え去りはしませんでした。けれども私は無理からでも、恐ろしいその現象が、最早私の眼前から遠ざかつたであらうといふことを、信じなければなりませんでした。全く安心した譯ではありませんがしかし幾分さうした事實を豫認しながら、眼を開いて見た私は三たび見るべからざるものを見なければなりませんでした。しかも女は私の目からは三尺と離れない距離にあつて、私と同じやうにうづくまりながら、上半身を心もち前に傾けて、まるで釘付けにでもされたやうに、じつと私の顏を覗き込んでゐるのです、

女の蒼白い双頰には、今までとはまるで打つて變つた、しかも今までに比べてもつともつと怖ろしい、異様な表情が漂つてゐました。私が彼女を振り返つて見た時の媚となまめかしさは、今では全く彼女の顏面から消えさつてゐました。そしてその代りに二つの瞳——黒水晶のやうに美しい双つの瞳には、怪

許さうな物をさぐるやうな光がひそんでゐるのです。私の横に眺め入つたまゝ、じつと動かない二つの瞳の底に潜む冷かな光は、私の頭からさつと水を浴せかけました。

それまでには極度の恐怖に襲はれながらも、そして又ほとんど全く心の平衡を失つてゐながらも、私はまだ自分自身の身體を、自分自身の意志によつて、動かすことが出來てゐたのですが、もうその時には、女の瞳のもつ異様な光が、私の神經を奪つて終つてゐました。私はもう私自身を抑制して行くことが出來なくなりました。そして思はず大きい聲を上げて、わつと大聲に叫び立てました。

私の叫び聲とともに、女はまるで夜鳥のやうにけたゝましい叫びを上げて、すつくと立ち上りました。私はその時女の顔に青白い血液がさつと走つたやうに覺えてゐます。けれどもその次の瞬間、女は素早く身をひるがへしたかと思ふと、もう私の眼前から消え去つて、何處かに姿を隱して終ひました。私は唯もう夢我夢中で走り續けました。何處が道やら何やら、勿論私には判斷がつかなかつたものです。走つて走つて走り通して、漸く我に返つた時に、私は何處をどう走つたのか、何時の間にか森を越え、野を横ぎり、私の用のある隣村の家に驅込んで、門をくゞつたまゝ、まるで失神したやうに倒れ込んだ私自身を見出したのです。もうその時には、何でも夜半の十二時を、よほど過ぎてゐたもののやうでした。

＊　＊　＊　＊

物凄い風の音が、濤の音をまじへて、窓邊に近く聞えて來るある夜、火鉢を距てて私と相對してゐたXは、此處まで語つて來た時、ふと口を噤んで終ひました。日頃から沈着なそして冷落な男として知られてゐた彼が、まるで眼前にその女の幻を見てでもゐるかのやうに、聲をうるませながら語るのを聞く時、私は私自身が淋しい北海道の密林の中で、その女の幽靈を見たかのやうにさへ感じられました。自分の物語が聞いてゐる私たちの心理の上に、十分に薄暗い陰影をなげかけたことを見定めたXは、やがて又おもむろに口を開いて、そしておだやかな調子で

「後になつて聞いたことだが、君、その女の幽靈といふのは、實は隣村で有名な色情狂だつたといふことだよ。」

とつけ加へました。

詞 華

海を戀うて（俳句五十章）

荻原井泉水

由井が濱

海を戀うてけふは來し早春の白波

水平の一線さびし心ひらける

身を吹く風の早春の浪が目に滿つ

早春の浪を見て勇める犬を呼べども

ひそけきもの砂の足跡波の消すまで

さびしきものおのが足跡ひとり見返る

濱の芥火とろとろと時をけぶらす

大佛

久久にして見れば春照る佛の顔

大佛の瞼厚く春の日影たまれり

御佛の眼に童居り春の草を摘む

たゞ麗かに佛の前にありて足る

春山の風光りつつ雲をあそばす

大佛ほとりうらうらと雀鳴くばかり

長谷寺

光くまなし梅花ほろほろ空にあり

佛の梅花の濃き影踏みて詣る

古鐘鳴らすことなく春は梅さけり

繪馬の古さも仰ぎ春風の海見る

海光強く椛燃えきりて落ちる

切通し

青空映す井を見てもかまくら

道端荒れし藪の木木皆芽ぶなり

土の肌青く藪ゆする春風

極樂寺は青空に梅が咲くばかり

古きいしぶみの春日の温みに手を添へ

落葉あたたかく湧く水を湛へてあふらす

七里が濱

春風に咽び光搔分け行きがたし

着てゐし物脱ぎ抱へ日の中に疲れる

海風に鈴鳴らしゆく電車の窓の顔

道にはなれて麗かな浪と遊び行かうや

麗はし小貝見ならざれば拾はず淋し

大島は霞む日の浪に足をぬらされる

春風の登療園の薄枯れたつ

兒が淵

春風まともに岩を打つて浪来る

大空消ぎわたる日の船うらうら

浪の麗らに舞ひいでし帆の舞ひ去るや

ここに我うららかな浪とし息づく

うららかな浪に濡れ岩の濡れ色

早春の岩に立ち浪に鈎（はり）を投げる

浪を見つつ子供に蜜柑たべさせる

江の島の漁村

ふらふらと凧泳ぎ出る淋しい村見ゆ

島の若者小さな凧の絲をのばす

日暮の青白い潮にて船を洗ひあげる

日暮の浪に追はれて遊ぶ島の子

赤きは椿一箕の塵を潮に棄つ

蜑の家盡きる岩山に行くべき路なし

岩やま蜑の家浪そのままに夕月となる

島の子竹馬を夕燒の潮に乘入れ

片瀬

朗朗と暮れし空仰ぐに圓し

島をへだつ潮まんまんと安けし夕べは

夕日の潮に入る川に船戻り來る

濱は戀猫の影動く船の月夜



時論

法學博士 吉野作造

朝鮮人の社會運動に就て

○

大正八年の春朝鮮獨立の騒動が鎭壓されて以來、朝鮮人の民衆的運動は種々局面の推移を示した。就中最近彼等のうちに無產階級解放運動がしつかりした底力を持つて擡頭しつゝあるは頗る注目すべき現象と云はねばならぬ。

政治的獨立運動も全く屛息したのではない。朝鮮議會の要請といふ穩な所で滿足しやうと云ふ連中の運動もある。內地の人々は朝鮮人の民衆運動とさへいへば徹頭徹尾政治的方面の要求に外ならぬと獨りぎめに決めて居るが多い樣だ。無產階級解放運動といふ點に目ざめて彼等も亦漸に現代通有の國際精神に動かされつゝあるに注意を怠らば、飛んでもない過誤に陷るだらう。況んや彼等の間に起れるこの新しい運動は、今や諸外國の——同時にまた日本內地の——所謂無產階級より直接間接の支持と聲援とを得んとしつゝあるに於てをや。之を好むと好まざるとに論なく、朝鮮問題に志ある者は深く這般の新機運に通ずる所なくてはなるまい。

○

大正八年の萬歲運動以後、その引き續きとも見るべき民衆運動は、時に依て其表現の形をこそ異にすれ、兎も角も熱心に續けられて今日に及んで居る。此種類に屬すべきものに、現在のところ硬軟の二派を區別することが出來る。硬派の者は、多く海外に在りテロリズムの傾向を有する。國內に在る者は自然巧に韜晦して其運動外面に現はれない。が、孰れにしても相當の勢力を認めねばならぬと云はれて居る。之に對して軟派の方は何事も實力の涵養が先決の急務だとの信念からして、教育と產業との振興に主力を注ぐのである。從て運動も外面的に幾らか花々しい。聞く所によると、當局者側は、硬派の方はどう取締つて居るか知らぬが、軟派の運動をば非常に危險視し、金融機

迫の方策に由て彼等の志す教育及產業の振興を防止せんと企てゝ居るとやら。夫れかあらぬか朝鮮人間の經濟的悲境は昨今實にヒドイもので、財源の涸渇は何事をも發展するに由なからしめて居る。斯んなわけで、政治的自由獨立を最後の目標とする側の運動は、硬軟兩派を通じて目今非常な進展を示して居るとは云はれない。

○

政治的要求の覺束なき貫徹に低迷して居る者の多い間に在て一部の朝鮮人間に、滔々たる世界思潮の刺激を受け無產階級解放の達成といふことに方向轉換の必要を覺る者を生じたのは、最近の現象である。人或は曰ふ、朝鮮には資本主義が發達して居ないから現代的意義の階級意識のめざめは期し難いと。併し乍ら耕地の大部分が極めて少數の日鮮大地主に獨占され、農民の經濟上に蒙る抑壓の甚しきを思ふとき、我々は彼處にも無產階級運動の勃興すべき素地は十分ある樣に思ふ。況んや昨今日本內地に續々入り込みつゝある朝鮮勞働者は、日本に於ける無產階級運動を識らず〳〵本土に傳へずして已むべからざるに於てをや。孰れにしても昨今朝鮮人の間に此種の新しい運動の起りつゝあるは爭ひ難い事實だ。この事實の發生を裏づけるべき沿革的乃至社會的の理由は、いづれ他日また詳論することゝして、僕は之より直に此種新運動の發展を概略語らうと思ふ。

○

先づ朝鮮內地に於ける無產階級運動發達の概要を見やう。之を述ぶるには大正九年より十年までを第一期とし、同十一年より以後を第二期とするを適當とする。

朝鮮に於ける無產階級運動の嚆矢は、大正九年の春京城に創立された朝鮮勞働共濟會だと謂てよからう。中央幹部の熱心は眞に敬服に値するものあり、講演會に機關雜誌（現に二種あると云ふ）に頗る宣傳に力めて居る。されば其發展も侮り難きものあり、支部も各地に設けられ、會員總數今や二萬六千を算すと聲言して居る。但し一部少數の者を除いては階級意識も甚だ不鮮明で、且種々雜多の分子の混入してゐるの弊は免れないやうだ。其後同じく京城に小作人相助會なるものが生れた。一部野心家の御用機關だといふ許判がある。また勞働大會と稱する灰色の組合も出來た。高麗共產黨とか漢城共產黨とかいふ秘密結社も生れたといふことであるが、其の正體は十分に分らない。之等諸種の團體の簇生に關し、極東露西亞の實際的影響如何の問題は、極めて興味あり又大切な事柄であると思ふが、之は他日の評論に讓らう。

以上は大正十年末までの形勢である。

大正十一年に入るや、京城に於ける形勢は新人同盟會及び無產者同志會の二團體の設立に依て、俄然一變した。そはこの兩者は共に共產主義的色彩を帶ぶるものたるのみならず、幹部は固より會員の多數また比較的に理義に明かな意氣の熱烈な人々であつたからである。やがてこの二團體は合同した。是に於て可なり根抵のある無產階級運動は一步一步を踏みかためつゝ漸次有爲な青年の間に喰ひ入ることゝなつた。朝鮮青年の內部的要求は斯くして今や政治的自由よりもモツト深いところに突進せんとして居るのである。

斯かる形勢一變の新にもたらせる最も著しき現象は、從來其自身統一的であつた各協力團體の內部に、思ひも寄らぬ平和攪亂の鐵槌をもたらしたことである。そは從來氣の附かなかつた所に大なる問題の伏在することを暗示し、之に由て黨內新に新舊二派の爭を生ずることになつたからである。斯かる動搖を經驗しつゝある有力團體に例へば朝鮮青年會聯合會がある。天道敎や佛敎等の團體も亦御多分にもれない。否同じ樣な動搖は勞働團體それ自身にも起つた。他の團體の事は暫く措く。今專ら勞働團體に付て觀るに、舊幹部中の裏切者や密に官憲と氣脈を通ぜる者やは改革運動の爲に放逐され、團體自身の階級鬪爭的色彩が頗る鮮明となつたことは最も注意すべき點であらう。此外その影響の下に、之と相前後して晋州・大邱・平壤・釜山・其他の重なる地方に有力なる勞働團體の簇生せることも亦看逃してはならぬ。京城に於てはまた多數の職業別勞働團體が作られ地方に於ても小作人運動は昨秋以來盛に起つてゐる。此種の新運動に參加せる者總數實に四萬を超へるといふが、機關紙「新生活」の氣焰には中々盛なるものがある。今後更に大に擴張するだらうと思はるゝ。

○

翻て日本內地に於ける朝鮮勞働者の狀況は如何。先づ其の總數を擧ぐれば廿五萬乃至卅萬の間を上下し、南は九州一帶より北は北海道樺太沿岸にまでも散在して居る。從來とても每日平均二百四五十名の移入者と約其半數の歸還者とがあつたが、昨年十二月十五日旅行證明制度の廢止の結果は、歸還者數は依然たるに來住者の數は激增して每日の平均が八九百名に上つたと云ふ。こは勿論昨年來の農村疲弊の結果が勞働者の出稼を餘儀なくした爲でもある。孰れにしても內地來往の昨今の趨勢はすさまじいものだ。序に云ふが、大正十年度の統計によると、來住勞働者數は、大阪府內だけでも、男・九三三五、女・三二六五で其中約四千人は工場勞働者、他は概して土工と無定職者ださうだ。其後來住者は益々增加し、昨今は二萬六千以上に達してゐ

ると云ふ。而して工場勞働者の總數は大正十年度とさして變らないと云ふから、激增した部分は全部土工と無定職者だと云つてい丶。是れ朝鮮勞働者の供給常に市場に溢れて居る以所である。彼等の賃銀が工場勞働者に在ても日本人たるそれよりも一日平均五十錢乃至七十錢方格安なるは、單に技術の未熟な爲ばかりではないらしい。)

○

何故に斯く多數の朝鮮勞働者が日本內地に移入し來るのか。其の大體の原因は前にも述べたが、今參考の爲に朝鮮人たる金鍾範君の說を紹介しやう。君は今實に朝鮮勞働運動の中堅人物である。

さて金君の擧げて居る理由は四つある。

第一、日本の對朝鮮政策の產物としての朝鮮農村の疲憊並に之れが結果たりし滿州露領方面への移住の最近の不便

朝鮮に對する殖民政策の根底が資本的帝國主義たるは言ふをまたない。其結果農商工業のあらゆる權利は資本家の奪ひ去る所となり、土着農民は遂に祖先傳來の鄉里をすて丶滿州及び露領西細亞方面へ放浪せねばならなかつた(最近十數年間に於ける此種の移出者實に百六十五萬に上ると云はれて居る)。然るに政府は之に對して政治上また經濟上何等の保護を與へさるのみならず、時に却て種々の迫害をさへ加へたのであつた。殊に夫の渾春事件あつてよりこの方、朝鮮勞働者は危難の起るべきを恐れて專ら日本內地に來る樣になつた

第二、小作人の生活難

物價騰貴に伴ふ支出の激增と諸稅金の加重とに反比例して、米價の低落甚しく、農家殊に小作人の生活は極度に窮まり、婦でも應でも出稼せねばならぬ羽目に陷つて居る。

第三、東拓の移民政策と支那人勞働者の移入とに由る朝鮮人の驅逐

東拓が日本人一戶を移住せしむること――それが豫期の成功を收むると否とに拘らず――の必然の結果は、朝鮮人の十數戶の耕地喪失である。昨今激增しつ丶ある支那人の來住も亦朝鮮人の職業を奪ふこと夥しきものがある。

第四、日本當局の朝鮮人招致策

日本政府では、一つには內地產業に於ける生產費を安くする爲め、又一つには由て以て日本勞働運動の鋒先を鈍らす爲め、寧ろ多數朝鮮勞働者の來住をよろこび、否之を奬勸せんとする傾さへ見へる。去年十二月十五日の旅行證明制度の廢止の如き儘にこの理由に基くものと思ふ。

以上の解釋の當否は姑く別論として、金君の樣な有力な地位

に在る人の言論である丈我々に取つては大に參考になるものがある。

○

日本内地に於ける朝鮮人勞働者の狀況につき最近最も看逃す可らざる現象は、『朝鮮勞働者同盟會』の創立である。

從來朝鮮勞働者は、比較的に多數密集せる東京・名古屋・大阪等の都市に在ては、夫れ〱さゝやかな團體を結んでは居た。併しそは質に於ても量に於ても大したものではなかつた。而かも共間に確とした連絡もない。最も多數を抱擁する大阪に於ても、十二三の小團體が雜然として割據し、『兄勞會』と稱するものゝ外は、勞働團體といふ名に應しい程のものではなかつた。若し夫れ之等團體と日本人勞働團體との關係に至ては、寧ろ不祥なる衝突の瀕出に惱まされて居た。現に九州に於ては國粹會の爪牙となつて純勞働運動の妨害に利用されて居るものもあるといふことだ。

併し朝鮮勞働運動も眞に無產階級運動として覺醒すべくんば日本勞働運動と徒らに感情的衝突を繽くべきではない。が、夫よりも先決の急務なるは、彼等自身の大同團結である。而して此の事が實に前揭の『朝鮮勞働者同盟會』の結成に依て實現の緖に就いたのである。

先是東京在住の一部の朝鮮人有志は、朝鮮勞働者の組合運動を起すの準備として各地に散在放浪する勞働者の調査を行ふの必要を認め、『朝鮮人勞働者狀況調查會』なるものを組織した。之れ實に昨年夏の事である。昨年の信濃川鮮人虐殺事件に刺戟されて起つたことは言をまたない。斯くて東京方面では機運は漸次熟して居つた。十月に入り、月の中は朝鮮內地の調查を了への歸途大坂に立寄つた調查會の金鐘範君は、既成の團體に關係のない勞働者諸氏と協議して一新勞働組合の組織を企てた。之が偶々大合同の端緖となつたのである。右の企てには東京の調查會も六名の委員を特派して援助し、超えて十一月日本勞働總同盟大阪聯合會も亦委員會の決議を以て朝鮮人勞働運動を極力後援するを聲明した。且事實組合組織の計劃に大に協力したのでもある。

共結果として昨年十二月一日に至り、所謂『朝鮮勞働者同盟會』の創立大會は大阪九條市民殿に於て開催された。會場は僅に二百名を容るゝに過ぎなかつたので、二千名以上の朝鮮人は門外に立往生するの外はなかつた。日本總同盟側からも數名の應援を送つたことは注目するの價値がある。不幸にも會半ばにして傍聽席から妨害が起つた。議論紛糾して遂に臨監の九條署長の解散命令に接したのは甚だ遺憾の次第であつた。混雜の中

から檢束された者も日鮮人を通して數名ある。解散後一部の勞働者は九條署に押し掛けて檢束者の釋放を迫つたが、發起人等は同時に他の場所に會合し組合組織の協議を續行したのであつた。翌二日府知事は命令を發してその宣言綱領の發表を禁止したので、幹部は綱領を左の如き形に修正して六百の組合員に頒つた。

一、我等は我等の結束の威力に依り階級鬪爭の勝利を獲得し以て勞働階級の生存權の確立を期す

一、我等は我等の膏血を搾取する資本制度を打破して『〇〇〇を以て本位とする〇〇〇〇〇を期す』

右の綱領にも明である如くこの團體の左傾的特質は極めて明瞭である。而して大阪方面に於ける朝鮮人勞働者の全部（又は大部分）が之に參加して居るのでないことは言ふまでもない。此外職業紹介と所謂鮮人の福祉とを主たる目的とする「大阪朝鮮人聯合會」なるものもある。之は前記同盟會の成立に刺戟され既成小團體の若干を合同して出來たものであるといふ。斯くて目下大阪方面に在てはこの右傾的組合とかの左傾的組合の對立を見て居るわけである。

兎に角右の朝鮮勞働同盟會は、創立後日猶淺きにも拘らず、着々發展して今や最も有力なる團體として評さるゝのみならず、又多望なる前途を祝福されて居る。而して之がまた日本勞働者と最も緊密に提携しつゝあるは頗る注目すべき現象であらう。無産階級解放といふ高處に手を握れることに老輩中或は之を一段の危險と觀ずるものもあらうが、又一方には朝鮮の民族運動が今や將に偏狹なる政治的獨立の埒外に出でんとしつゝあるに甚深の意義を了解せねばなるまい

猶昨年中東京に於て『朝鮮人勞働同盟』とか「黑友會」とかいふ團體の創立を見たが、未だ茲に論ずるに足る丈けの發展を示して居ない。

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き淸凉なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロット味（百日分）金貳圓
カロット具（永久使用 挽換簇入）金五拾錢
同 象牙サック入 金壹圓五拾錢
一組

送料（內地十八錢 台、朝、樺四十五錢）
引替送料（內地卅五錢 台、朝、樺五十五錢）

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地

榮川堂

電話丸の內一九一七 振替東京五二九壹壹

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

婦人公論『女性への抗

中央公論愛讀者諸君（七月十日發行）

三度び、婦人公論夏季臨時増刊『女性への抗辯』號發刊について、中央公論愛讀者諸君に御意得ます。『女性への抗辯』號は發表以來まだ間もないに續々御投稿下さつて難有う存じます。恐らく締切の五月十五日迄には玉稿山積して我が編輯室を埋めるであらうと樂しんで居ります。が吾等にも優して我全國の女性がいかに多くの期待を諸君の上に投げかけてゐるか、それは到底諸君の想像も及ばぬところでありませう。實に斯かる機會は、今日までたゞの一度も與へられなかつたのであります。相倚り相援けて最も親密なるべき男女兩性が、互に胸襟を開いて語り合ふことは未だ曾て許されなかつたのであります。女は男に劣る者と初めから相場を定めてかゝつて、侮辱と嘲笑を與へる外顧みられなかつたのであります。男子は自己の健脚に任せて女子を置いてき堀にし、女子は喘ぎながら男の袖に取縋つて、同じ途を歩きながら彼等はてんでん異つた途を歩いてゐたのであります。その間に何の優しい助言もなければ又一本の腕を借すだけの手引さへもしなかつたのであります。

それではいけない——と言ふのが今度の『女性への抗辯』號發刊の主意であります。互に手を組み合つて進んで行くには、どうしても男女の間をモツト接近させ理解あるものにしなければならない。さうしてそれは、男も、女も、實は待ち望んでゐることなのであります。お互が待ち望んでゐながら手を握らないといふのはその機會が與へられなかつたからだけであります。本號は實にそのほんのきつかけを與へやうとするのです。たださうするにはどうしても一度

「抗辯」號(夏季臨時增刊)原稿募集

君の投書を歡迎す(定價八十錢)

今日までのいきさつ、蟠り、すべて其間に欝屈する感情を流ひざらひ曝け出して見るに越したことはありません。お互が遠慮なくものを言ひ合つて見ることです。今日の女性は少々の惡口や罵詈を受けて神經を逆立たせるには理智が養はれ過ぎてゐます。教訓、指導、批判、忠言、その他、それは固より吾等の希望です。が、氣に入らぬ點があるなら、此際遠慮なく言つて下さい。それには誤解もあるでせう、それは又聽て兩者を理解に導きます。只願ふところは、これが我國全男子の代表的意見であつて欲しいことであります。再三御寄稿を勸誘する所以てす。いくら多くてもその勞は厭ひません。我國全國の婦人に提供するこの『女性への抗辯』は我國男性からの總量であつて欲しいことです。之を以て最後の勸誘とします。どうぞ五月十五日を忘れないやうに。では呉々も御願ひします。

(投稿規定)

一、投稿者は男子に限る。
一、原稿は五月十五日を以て〆切る。
一、原稿は論文、研究、隨筆、小說、戲曲、感想、詩歌、情話、報告、公開狀、諷刺文、其他如何なる種類を選ばずと雖も、要は兩性問題に關して、婦人の反省を促すもの、若しくは婦人の讃美罵倒等、少くとも日本婦人に讀ませる目的としたるものたるべき事。
一、原稿は長短隨意とす、但しなるべく簡單明瞭、字體を讀み易からしむる事。
一、掲載したる原稿に對しては一枚(四百字詰原稿紙)二圓以上八圓以下の原稿料を呈す。
一、原稿は東京驛前『丸の內ビルヂング七七六』中央公論社內婦人公論編輯部宛の事。
　但し「婦人公論臨時號原稿」と傍書あるべき事。尙四月一日以後は轉居先きへの事。
一、原稿には其終りに住所姓名明記の事。但し誌上の變名匿名は事情により別に之を許すことあるべし。
一、不採用原稿の返送を望まるゝ方は、投稿の際郵稅を添へて其旨附記せられたし。

オリザニン

脚氣治療劑の權威

帝大教授鈴木農學博士發見
水溶性ヴイタミンB製劑！
注射用、内服用製品數種あり

オリザニンの脚氣に對する治效の顯著確實なるは實驗諸家の報告に徵して今や殆ど疑ふの餘地なく脚氣治療特效藥として其聲價愈高し。

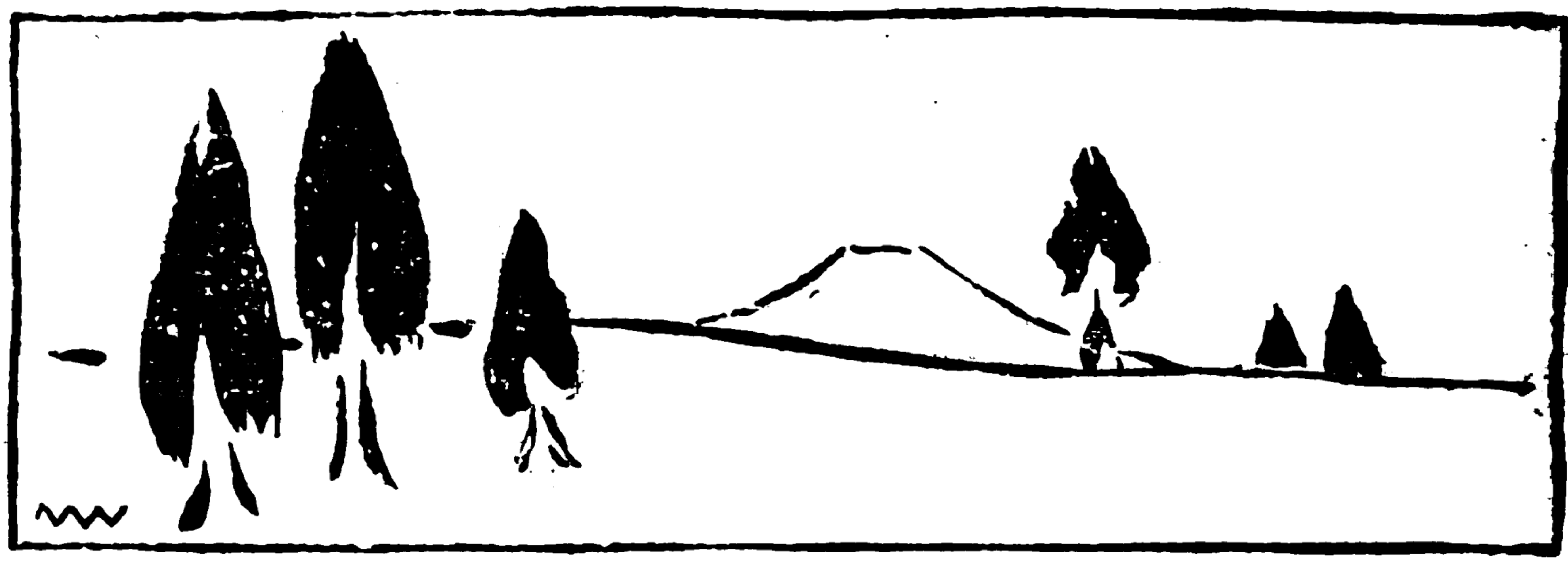
製劑の種類價格

注射用	オリザニン液	（一竓）六管入	二、〇〇	同一二管入 四、〇〇
内服用	オリザニン液	壹瓶 一〇〇瓦入	一、七五	同四五〇瓦入 六、九五
同	オリザニン末	壹瓶 三〇瓦入	一、四〇	同一五〇瓦入 六、〇〇
同	オリザニン錠	（〇・五）壹瓶一〇〇錠入	二、四〇	
同	オリザニン越幾斯	壹瓶 四五瓦入	一、七五	

文献集御申越次第進呈す

製造發賣元 **三共株式會社**

本社 東京日本橋室町三丁目
出張所 大阪東區淡路町堺筋
同 臺北市表町一丁目



村の教師

小川未明

いつになく汽車の笛が耳にはいつた。

みんなの耳に、その笛の音は、同時にはいつたのだけれど、禿頭を擡げて、太い眉毛を動かして、物を言つたのは、老父の瀧吉であつた。

貧しい、わびしい家の裡には、ランプが點つてゐた。ホヤが煤けてゐるので、暗かつた。しかし、その赤味がゝつた光りは、夜中この室の中を照らしてゐた。其の光りが、傷のついた壁にたどりついて、一面に、その赤味がゝつた光りで彩つてゐるのは、いつになく家内の人々に、ある不安な感じを抱かせた。

いまゝでもさうであつた。誰か病氣にかゝつて、熱が高い時には、夜の明けるのが待遠しかつたばかりでなく、このランプの壁に映る光りが、ちやうど熱の色のやうに、みんなの眼に何となく不安に見えたが、今夜のランプの光りが、ちやうどそのやうに家内の者には落付きがなく映つたのであつた。しかし、その光りも、やがて力がなくなつて、弱はり消えてしまふであらう。そして、間もなく、東の空が白むにちがひ

ない。一番鷄は、つい先刻啼いてしまつたからだ。

家の外は、曉前のちやうど底の知れない淵を覗いたやうな沈默に陷つてゐた。空は暗かつた。その暗い空に、一層濃く彩つて、木立は、呼吸の音を忍ばせた。風もなければ、まだ鳥も鳴かなかつた。この時、遠方で、どこか野原の一角を過ぎる汽車の笛の音が、その野原を渡り、森や、林の間をくゞつて、こゝにまで聞えて來たのだ。

「秀吉は、間に合つたかなあ」と、老父は、言つた。そして、またがくりと頭を膝の上に垂れてしまつた。

「ほんとうに、達者で行つてくれゝばいゝが、おら、心配でなんねえよ。あの子は、小さい時から、他の子のやうに、強くなかつたし、いつもおとなしくて、親の言ひ付に、やだといつたことはなかつた。一度なんか、家根からおつこつて、澤山鼻血を出したりした……おら、どんな苦勞をしても、あの子を遠く手離した なかつたゞよ」

年とつた、もう少しづつ髮の毛に白いところの見える母親は、枯枝を小さく手折つては圍爐裏にいれて火を焚いてゐた。火の上には多年使ひ古るした大きな鐵瓶がかゝつてゐた。火は、たちまち、新らしく投げいれられた枝先に燃え移つて、はねるやうな音を立てゝゐた。

老父は、兩手の指を組み合せて、俯向いてゐたが、これを聞いて、

「愚痴を言ふでねえだ。誰の顏も知らねえところへ行くとちがつて、あちらさ行けば、清造がゐるでねえか、先生さんと相談したことであるし、やつたのに惡るいことはねえ。地主樣に分つたら、俺が、あやまるべえ、何も心配することはねえだよ……」と、老父は、答へた。

長男の善藏は、まだ嫁を貰はなかつた。兩親は、そのことについて考へないのではなかつたが、其の餘裕がつかなかつたのである。彼は、どちらかといへば、愚直一遍の性質であつた、また床の中にあつたが、彼とて眠つてゐるのでは

なかつた。

「なんで地主様に分らねえことがあるもんか。分れば、怒らつしやるにきまつてゐる。去年の秋、俺が幾日もかゝつて崖を切崩して、蕎麦を蒔いたんだが、あすこも二三年は、年貢を取らつしやらん約束だつたが、きつと今年から取らつしやるだらう。お前達は、秀吉や、清吉のこつたといふと大騒ぎをさつしやるが、俺は、餘計に苦しまんけれやなんねえだよ」と、床の中から、頭をこちらに向けて、善藏は言つた。

母親は、默つてゐた。そして、火が消えかゝると、枯枝を折つて、爐の中に入れてゐた。火が新しく燃え移つた時は、汚れた爐縁までが活氣を帯びたやうに、明るく照らされたが、それは、長くはつゞかなかつた。間もなく、くすぶつて滅入つて行くのであつた。

老父は、その火が消えかゝる前に、首垂れてゐた顏を上げた。

「馬鹿言ふな」

老父の清吉は、悴のまだ臥てゐる方を見た。そして、いつまで臥てゐるのだといふやうな顏付をした。

「汝が、もつと働けれや、俺がこの年まで、こんなに心配しなくていゝのだ。みんな汝の働きがねえからだと思へよ」

と、老父は、言つた。

母親は、ちよつと下を向いて火を見詰てゐる顏を上げた。そして、老父の顏色を覗ふやうに、

「また、そんなことを言はつしやる。あんなによく働いてくれるでねえかい、親子が仲よくねえのは、何より一番いけないこつた」と、彼女は、言つた。

「あゝ、俺は、どうせ働きがねえやの、俺さいつか、こんなとこにゐたつて、面白くないから旅へ行くと言つた時、な

んで止めやしたか？　旅へ行けば、どうにでもして働いて、お前たちの食べる金を送るからと言つたのに、なぜ止めやした？　一日、朝から、晩まで働いて、何面白い目もしないのに、小言を聞いて堪まるけい。すぐに、清造は感心だの秀吉は可哀さうだのと言はつしやる……」

「あ、さうだとも、おらあ、お前を叱らしやる父さんが悪いと思つてゐる……何、不足言ふことがあるもんか」と、母親は、言つた。

老父は、やはり形を崩さずに、囲爐裏の端で、膝頭のあたりに手を組んでゐた。そして、默つてゐなかつた。

「何、言ひやがる……汝の年で、役場へ勤めてゐる者もあれや、また、町の會社へ勤めてゐる者もあるぢやねえか」

「それは、家か、金持だから、勤められるのを知らつしやらんか？　見さつしやい、貧乏人の家の子供で、他に、そんなのがあるけい」と、善藏は、言つた。

老父は、默つてゐた。しばらく、家の裡は沈默がつゞいた。春の末で、山櫻の枝に、綠色の若葉がすつかり付いた頃であつたけれど、まだ、明方は、寒かつた。そして、幾分づゝか、空が白らんで行くのに從つて、風が立つた氣はひがした。

母親が、枯枝をぴしり／＼と手折る音が、聞えた。あれぎり、汽車の笛の音は聞えなかつた。母親は、手を止めて、

「秀吉を、東京へやつたことが分つたら、地主様は、怒らつしやるかのう……」

「それは、分りきつてゐるでないかの、俺は、秀吉をやるにしても、よく理由を言つてからのことにすれやいゝと言つたんだ」と、善藏は臥ながら言つた。物の蔭になつてゐるので、ランプの光りは、そこまではとゞかなかつた。で、彼の顏は分らなかつた。

「理由を言つたつて、分るやうな地主様でねえことは、俺が、もうこの年になるまでに、よく知つてゐるだ。學校の先生さんが、言はしたことも、俺の考へと違ひなかつた。俺達せえ默つてゐれや、分りつこのねえことだ。秀吉が俺なんかの知らねえ間に逃げて行つたことにすれや、地主様だ　て、俺達に、そんな沒義道なことをさつしやるもんでねえ」

「秀吉は、おら家の子ぢやないかい」と、善藏が、言つた。

老父は、はじめて膝を振つて、禿げた頭を動かしながら、

「理由をいつて、分る地主様ぢやなし、なんで許るしてなんかくださるものか。知らねえと言ふに限る。開墾した山地に、今年から、年貢をかけるなんて、無理を言はしやるだらうと俺も思はねえでなかつたが。まだ、年の行かない秀吉が可哀さうでなんねえので、先生さんにお願したんだ」

考父は、土間に降りた。そこは、一層うす暗かつた。やつとランプの光りがとどく位であつた。老父は、トン、トンと鑿を叩きはじめた。

爐端には、母親とお霜が殘つた。お霜は默つて、みんなの話を聞いてゐたのであつた。

「あの、汽車に間に合つたでせうかね、お母さん」と、お霜は、この時まで、火の上に俯向いてゐた母親に話かけた。

爐の上にかけてあつた、黑い鐵瓶の湯が、かすかに音を立てゐた

「うまく、乘つてくれゝやいゝが、先生さんが送つて行つて下すつたから、お歸りになされや、分るだ」と、母親は、答へた。

お霜は、しばらく町へ奉公に行つてゐたのであつたが、圃が忙しくなつたので、去年の秋、家に呼び寄せたのである。彼女は、先刻老父が坐つてゐた場處へ膝を摺り寄つた。香油の匂ひの殘つてゐる、つや／＼した澤山な髮の毛は、

その若さを思はせた。彼女はその手で野良に出て働いてゐるとは思はれない程に、色の白い、やさしい指頭を揃へて火の上にちよつと翳したのであつた。
「停車場まで、先生が送つて下さつて、あとは、弟ひとりで行くんだわ」
「晩方さ、あちらへ着くさうだ。さうすれば清造が迎ひに出てゐてくれるから、案じなくてもいゝだらう」
「姿、あとから、先生に無事に弟が汽車に乘つたか聞いて見るわ」
「よう〳〵、お禮を言つてくれろよ。先生さんは、學校にゐる時分から、秀吉を可愛がつてくんなさつた」
二人は、話を切つた。やうやく家の外は、ぼんやりと林の影が、空の下に浮き出て見えるまでに明るくなつた。この時、ランプの光りは、だん〳〵衰へて行つた。そして、壁の色が、うす黃色くなつて、惠比壽の像の描いてある古い暦が、半分破れてゐた。
母親は、傍にあつただけの枯枝を一摑みにして、爐の中に投げ込んだ。
「お霜や、暇さあつたら山へ行つて、枯枝を取つて來てくれろや、もう、なくなつてしまつた」と、母親は、言つた。
お霜は、默つてうなづいた。彼女は、簡單な朝飯の仕度に、爐邊を立ち上ると取りかゝつた。
「おらも、旅へでも出かけていもんだな。ほんたうに、考へて見れや、馬鹿々々しいや」と、善藏は、溜息といつしよにかう言つて、あちらで欠伸をした。それから、やうやく床の中から這ひ出て着物を被るやうな氣はいがした。
「みんなが、そんげいなことばかし言つて、年寄達は、どうなることか……」
母親は、下を向いて、獨言をしてゐた。
お霜は、冷かなしつとりとした氣の中に出ると思はず、ほつとした。活々とした若葉の萠した木立は、さながら音を

立て地から水を吸ひ上げてゐるやうだ。そして、ぐん／＼とこれから夏に向つて生長して行く氣はひがあり／＼と見えた。空には、雲が日出前の移動をはじめてゐた。白い帷を拂ひ除けるやうに、灰色がかゝつた雲が見る間に消えかゝると、後には、太陽の活歩を待つやうに、目の醒める新鮮な綠色の空が、柔かな穀物を擴げたやうに現はれた。彼女は若葉に、こんもりと包まれた村を顧みた。――なんといふ人間の生活は窮屈だらう？　狹い、穢くさい我が家の有樣が目に浮んだ。貧困と苦惱と絶えざる不安から、父や、兄や、母が爭つてゐる有樣があり／＼と見られた。これに較べて、自然は何といふ自由さであらう？　なぜ、人間は、この自然のやうに、活々として生甲斐のある日が送られないのか？――彼女は、そんなことを頭に考へたのであつた。

田には、水がはいつてゐたけれど、まだ植付けられてはゐなかつた。彼女は、あちらに見える、こんもりとした、其處には香ばしい若葉の匂ひが漲つてゐる林の方に惹き付けられるやうに、田の間の細道を歩るいて行つた。

いま頃は、どこを歩るいても、誰にも遇ふまいと思つた。そして、この道は、村から、町へ行く一番の近道であると思つた時に、昨夜は、まだ眞暗の中を弟が先生といつしよに村から逃げ出して、この道を歩るいて行つたのだと思はれた。淡い、乳白の霧が一面にかゝつてゐたが、だん／＼それは、地の上から離れて、空に上つて行つた。霧の中から、道端に流れてゐる小川のさゝやかな音が洩れて來る。小川の淵には、ところ／＼こんもりと毬のやうに、圓い形をした藪があつた。藪の中からは、もう早起きの小鳥　低い聲で鳴いてゐるのが聞かれたのであつた。

お霜は、濕つた、冷たい、氣持の好い地の上を踏んで歩るいてゐたが、ふと小川の中から、大きな物體が動き出て、高く水音を立てたので、びつくりして眼を見開いた。それは、人間であつた。――今頃、もうこの川の中に來て何かしてゐるのであつた。

彼女は、誰であらうかと思つた。自分の知つた村の者であらうか、それとも顔を知らない他村の者であらうか？　いま頃川の中に入つて何をしてゐるのであらう。とにかくもう少し近付けば、分ると思つた。そして、足音を忍ぶように注意して近づいたのであつた。

「お霜さん！」

不意に、かう彼女は、自分の名を呼ばれたのでびつくりした。同時に、顔を知つた者であると知ると、かすかに安心を覺えたのであつた。しかし、彼女は、なほ返事をすべく躊躇された。そして、立止つて、聲をかけた男を凝視した。

「お霜さん、大へんに早いな。僕だよ……」

怪しな男は、水の中に棲んでゐる獸物が岸に這ひ上るやうな樣子をして、水を搔き亂しながら、道の上にあがつて來た。そして、彼女の眼がはつきりと、其の顏を見分け得るところまでやつて來た。

「まあ、若檀那樣……」と、お霜は、驚いて叫んだ。

この時、小川の水は、怪しな男によつて搔き亂されたところだけが、しばらく泥濁し、搖蕩をつゞけてゐたが、少し隔つたところはもとの如く、飽まで平靜であつて、鏡よりも淸らかなその表面に、遙かに高い、明けはなれて行く空の微光を宿し、雲の影を反映してゐたのであつた。

「お前は、いつもこんなに早く起きるのかい……」

水にぬれた、男は言つた。

「若檀那樣は、こんなところで、今時分、何をしてゐらしたんですか？……」

彼女は、自分のことを問はれて、それに答へるよりは、先づ自分の不審をたゞさずにはゐ　れなかつた。

「僕は、泥鰌を掬つてたんだ」

男は、平氣で言つた。

「まあ……」

彼女は、相手の顏を見守つて歎息を洩らした。――ほんたうに、この人は低能だ。恥かしいとも思つてゐない?――から、彼女は心の中で思つたが、それよりも目の當り、別に悧氣のない、もういゝ年頃の若者であるにかゝはらず、他の若者のやうに分別も持たないと思ふと、却つて、不憫の情が催された。

「なぜ、若檀那樣は、そんなことをなさるんです……」

「この間から、僕は、毎日暗いうちから、人の出ない間に泥鰌を掬ひに來るのだぜ、親父がだつて行けと言つて叱るんだもの」

「若檀那が、そんなことをなさらんでも、いくらもする人があるぢやありませんか……」

「親父は、僕に泥鰌を掬ひに行け、それでなけや、朝飯を食べさせんといふのだもの、お霜さん、お前は、いつもこんなに、朝早く起きるのかい。僕は、誰か、また他の奴等に見つかつたと思つた」

男は、大きな笊を抱へてゐた。そして、手拭で頰被りをしてゐた。

「若檀那さんは、きまりが惡いと思ひなさいませんの?」

彼女は、つひに思つたまゝを口に出してしまつた。そして、すぐに、とんでもないことを言つてしまつたと思ふと、自分の顏が熱てるのを感じた。しかし相手には、この僞等も應へなかつたと見えて、彼女は、安心したのであつた。

「僕は、あんまり人の出ないうちに、歸つてしまふから、氣まり惡いとも思はないが、泥鰌を知らぬ町へ賣りに行くの

は、氣まりが惡い」

男は、ほんたうに、そのことが苦痛を感ずるらしく、かう答へた、言葉の調子からも察せられた。

「まあ……やはり、檀那様が、――行つて貰つて來いとおつしやるんですか？」

「僕、厭だと言つても、親父がやらせるのさ。行かんけれや、叱るのだもの」

「そのお金をどうなさるの？」

「みんな親父が取つてしまふのさ。僕がお菓子でも買つて食べると、どうして今日はかう安く貰つて來たんだと言つて僕を擲るのだぜ」

「まあ……」

彼女は、利慾のためには、自分の子供も他人もない、頑固な地主の顔姿を眼に描かずにはゐられなかつた。そして、同時に、いつか差配の某が、お霜の父親に向つて、

「お霜さんを地主様の若檀那様のお嫁に望ましたら、お前達は承知をさつしやるか？」と、言つたことを思ひ出した。

彼女は、この時、弟の秀吉が小學校を卒へると、厭がつたのを無理に帳場に使ふのだからといつて自分の家に引取つてしまひ、其日から、無理な仕事をさせた地主を思つた。そればかりでなく、その上にも、低能な息子のために、自分を犧牲に强いようとしたのかと思ふと、彼女は言ひ知れぬ憤怒を感ぜずにはゐられなかつた。彼女は、ふとそんなことを思ひ出しだ。そして、默つてゐた。

「お霜さん、僕は双眼鏡を持つてゐるから、こんど、お前に見せてやらう。山男がよく見えるぜ。あしたの朝、また早くこゝに來ないか……さうすれば、お前に見せてやる」

「若槻那様、山男つて、どんなものですか?」

「お前、山男さ」

彼女の前に立つてゐる若者は、振向いて、あちらの山の方を指さした。山には、まだ日の光りが射さなかつたので黒く見えるばかりであつた。

「山男は知つてゐますけど、どんなものでございますか」

彼女は、口許に笑ひをたゝえた。

「双眼鏡で見ると大きい手や、足が、よく見えるぜ」

「若槻那様、あれは谷ですか、林なんですか」と、彼女は、多少好奇心を抱いて聞いた。

「馬鹿、山男は、山男さ」

「谷ですか?」

「なんで谷なもんか」

「林でございますか?」

「馬鹿、なんで林なもすか」

「なんでございまんか?」

「山男さ。お前、手もあれば、足もあるぞ」

「その手や、足が動きますか?」

「動く? そんなことは知らない。ちやうど鬼のやうな手や、足だ。いや、もつと大きいのだ」

彼女は、つひに笑ひ出してしまつた。もう、あたりは、餘程明るくなつた。明るい中で頬被りをして立つてゐる低能な男の姿を見ると、彼女の心に、いまゝで萌してゐた憐憫や、同情が忽ち消えてしまつた。そして、この若者には、もう構はず、彼女は、最初行つて見ようと思つた、若葉の色彩が燃えるやうな林の方に向つて歩るきはじめた。

「お前、双眼鏡を見たくないか」

うしろで、かう呼びかける大聲が聞えたけれど、彼女は返辭もせず、振向きもせずに道を歩るいた。

朝の風は、心地よげに吹いてゐた。緑色の若葉は、右にも、左にも、喜んで、躍つたり笑つたりした。

小學校の教師の小島は、全くあたりの暗いうちに秀吉をつれて、町の停車場へ行つた。そして、その驛を立つ一番の列車に少年を乘せて、彼の志す都へ送らうとした。

「途中は乘換へがないのだから、汽車に乘つたらぢつと一處にゐればいゝのだよ。晝時分になつたら辨當を買つて食べるのだ。晩方に東京へ着くからね……さうすれば兄さんが迎ひに出てゐて下さる。ちつとも心配をすることはない。體を大事にして、働くのだよ。そして、立派な人間になつてくれ。また、きつと、遇ふことがあるから、……東京は、日にまし暑くなるから、くれぐれも氣を付けて、めつたなものは食べないやうにしなければならんよ……」

小島は、小さな荷物を負つて、自分の先になつて歩るいてゐる十五六の少年に、噛んで含めるやうに言ひきかしてゐた。

町へ入つたけれど、廢墟のやうに、しんとしてゐた。停車場に着くと、そこだけは明るかつた。夜の空に、白い煙を

上げてゐる貨車の汽罐車に構内の燈火は反映してゐた。秀吉は、しばらく柵に凭りかゝつて、暗い空に、柔らかに上る白い煙を見つめて、何をか胸裡に考へてゐる如く沈んで見えた。

「この貨車がＳ驛に行つて、そこで摺違つて一番の乘る汽車が來るのだ。もう後二十五分ばかりある。それでも、よく間に合つてよかつた。地主樣の家では、誰も、氣付かなかつた樣子だつたかね」と、傍に立つてゐる小島は秀吉にきいた。

少年の短かく刈つた頭髮も、いつの間にか大分延びてゐて、何となく重苦しかつた。彼は、先生を見上げた。

「はあ、誰も氣が付かなかつたやうです。來る時に、私は、もう一度親達に遇つて來たいと思ひましたが、遲くなるといけないと思つて、すぐに先生のところへ行つたのです」と、秀吉は言つた。

「あゝいゝとも、私が、歸つたら、よく言傳してやる。いまごろ何うしたらうとみんなが案じてゐなされるにちがひない。無事に汽車に乘つて立つたからと話してあげる」

「先生、どうぞよろしくお願いたします」と、少年は、頭を下げた。

小島は、涙に咽んだ。そして、默つて頷いて見せた。少年は、またあちらを向いて、今まさに出ようとする貨車を眺めてゐた

「こんど、いつこの少年に、自分は遇ふことだらう！　しかし、その時分には、もう今日のやうな少年でない。その時、彼は、今日からして頼りなく停車場の柵に凭れて行末のことなど考へてゐたことを思ひ出すだらうか？」

小島は、そんなことを少年の後姿を見守りながら考へたのであつた

そんなことを思つたのも、瞬間であつた。また忽ち過去になつてしまつた。汽車は、少年を乘せて、この驛を離れて

遠く行つてしまつた時に、小島は、村の方へとまだうす暗い道を考へながら歩るいたのであつた。

彼の眼には、ある日、學校にゐる時には、最も成績の良かつた秀吉が、學校の終つた頃たづねて來て、

「先生、二番目の兄が、學校が卒へたら東京へ來いといひますので、私は、田舍にゐましてもこの上は勉強ができませんし、東京へ行つて働いて、夜學にでも入らうと思つてゐましたんですが、地主様が帳場に人が足りないから是非來てくれいと言はれるんです。父は地主様だから斷はれないと言ひますんですが……どうしたらいゝでせうか？」

秀吉は、かう言つてたづねたのであつた。小島は、何と言つて返辭をしたらいゝだらうと惑つた。彼は、秀吉の一家を知らぬのでなかつた。いろ〳〵な事情や、地主との關係がどうあるかといふことを知り過ぎる程知つてゐた。殊に、地主の性質について、そして、一村の者が抱いてゐる感情について知り過ぎる程知つてゐた。

「東京に出て、働いて勉強をする……そこには、兄が待つてゐる。なんでわるいことがあるもんか、この田舍にゐてどんないゝことがあるのだ。地主の苛酷な命令のまゝに、働かなければならない。それをなんでいゝからと自分は言ふことができやう？」

小島は、かう心に思つた。しかし、もしさう言つたら、秀吉の父親はどうするであらうか。

「さうだな。私にも分らないことだ。が、お父さんの言ふとほりに、地主様へ行つて見て、いけなかつたら、その時は東京へ行くことにしたらどうだ」と、小島は言つた。

秀吉は、默つて考へてゐた。そして、そのやうにしたのであつた。

ちやうど一年の間、秀吉が、よく働いたことを小島は知つてゐる。少年には、過度な仕事と思はれるやうなこともさせられた。幾たびか、少年は、暇をもらつて東京へ出たいといふことを學校に來ては小島に訴へた。小島は、ついに、

この少年を救はなければならなくなつた。さうするのが自分の義務であると考へるに至つた。地主に頼んでも暇をくれないと知つた時に、彼は、内密に兩親の承諾を得て、夜の間に地主の家から秀吉を逃がしたのであつた。自分は、停車場まで少年をつれて來て、汽車に乘せたのである。

地主の家では、秀吉がゐなくなつたので騷いでゐるだらう。むしろ口汚なく罵つてゐるだらう。そして、地主は、秀吉の父親を呼びつけて怒るだらう。父親は一切を知らぬと言張るにちがひない。そして、地主の足許に老頭を摺りつけて詫るにちがひない。

「なんといふ慘状だ！」小島は考へると、血が躍るのを感じた。

「仕方のなかつた時は、俺が一切を引受けるまでだ」

彼は、かう自分に言つた。廣い往來を歩るいて村に歸ることを避けた。誰か知つた人に遇ふのを慮つたからだ。「先生が、朝早く町から歸らした」といへば、秀吉を逃がしたのは、自分だといふことが直に悟られるからだ。彼は、町の裏通りを拔けて、田の間の細道を行かうとした。

町から少し離れ、遊廓が一區域を造つてゐた。淡く、白くかゝつた霧の間から龐雜な建物が覗はれた。多くの人々は、歴史の上だけで、昔の奴隸を想像してゐるが、現在目の前に、奴隸制度が行はれてゐることに氣付かない。それはどういふ譯けなのだ？　若い女が金で交換されてゐる。人肉が金で買はれたり、賣られたりしてゐるではないか？　そして、その妙齡な女は、物品の如く、また一個の器具の如く、自由を有しないではないか？……さういへば、金で賣れて行く女工も同じやうなものだ。おれも、やはり奴隸であるのか？　彼は、秀吉の姉のお絹が、工場に行くとか、また地主の低能な息子の嫁になるとか、そして、そのことを村の者は出世をするやうに考へてゐるにかゝはらず、彼女がそ

れを承諾しないので、こんどは、旅の料理屋へ女中にやられるとか、いろ〳〵な噂があるのをふと思ひ出した。

彼の足は、思はず鈍つた。宿直室へある時はお霜が、頼みもしないのに、洗濯に來てくれたり、またある時は、掃除に來てくれたりする。其の活々とした、村の他の娘達と較べて、町にしばらくゐたゞけあつて、様子もよく、言葉付も下卑てゐない、彼女の姿を眼に描いたのであつた。

彼は、胸の中に、差し込むやうな悲哀と焦燥とを同時に感ぜずにゐられなかつた。その原因は、すべて彼女にあることを知つた。しかし、彼は、この場合、深くその問題に、ことさらに觸れたくないやうな氣がした。

小川に架つた、板幅の狹い橋を渡つた時に、彼は、立止つて、あたりのしつとりとした、若葉に彩られた景色に見とれた。日が、やうやく、上つたのであつた。

眞夏の日が照りつける頃であつた。男が酒に醉つて、郭から足取りを亂して、分らないことを叫びながらこの川の袂までやつて來た。銀側の時計は、大きな勳章のやうに帶から腰の下にぶら下つて、この男の樣子を一層馬鹿者らしく見せたのである。男は、どこの者か、小島には分らなかつた。しかしこの男にも、また眞面目な場合もあらう、そんな時は、妻を叱つたり、子供に道理を說いてきかせるのだ。かう考へるとおかしくなつた。ちやうど、後から、若い女がだらしない風をして、男を追つて來た。赤い着物の裾は、毒々しい程、白熱した光線の世界に刺激するやうに染み込んだ。

「なんだね、あんたどこへ行くんですね」

女は、男を捕へた。そして、二たび郭の方へ無理につれて行つた。

享樂と壓制と浪費と貧窮と飽滿と飢餓と笑と涙と、かうした人間の相反した生活が、しかも不思議なく相抱き合つて、

濃厚な陶酔の悪夢をつゞけつゝあるのだと思つて、小島は、静かな、何もかもが、すべて清浄に見える朝の眠醒まつた遊郭を振向いた。何となく齊陶しさを感ぜしめる、其等の大きな建物は、尚ほ昨夜の疲れから慰られないものゝ如く、知覚なく横はつてゐた。

彼は、歩るきながら小川のさゝやきを聞いた。また、川淵の藪の中で低い聲で啼いてゐる小鳥の聲を聞いた。お霜がその瞬間に、彼を思つたやうて、彼は、またお霜のことを思つた。

「先生！」

小島は、かう不意に呼びかけられてびつくりした。その聲は、すぐ傍の若草の香ふ林の中からしたのであつた。彼は立止つた。そして、朝日の光りを顔に受けて微笑んでゐるお霜を見出した。

「誰かと思つた。お霜さんですか」

かう言つて、小島は答へた。そして躊躇したが、まだ見渡すかぎり田や、畑には人影を見なかつたので、濕つぽい、柔らかな草を分けて、彼は、冷氣と香氣とが一時に肌に染みるのを感じながら、彼女の立つてゐる方へはいつて行つた。すると、彼女は、いよ〳〵深くへ彼を誘ひ込むやうに、林の奥へ俯向きながら歩みを運んだのであつた。

日の前に垂れ下つた、細い一枝には、ちやうど白い蛾が止まつてゐるやうに、色の褪せた、咲き後れた瓣が、咲いてゐるのであつた。彼は、何の花だらうかと思つた。

二人は、別に、話すことはなかつた。心の中には、いろ〳〵言ひたいこと、聞きたいことはあるのであつたが、顔を見合ふと、どういふものか言葉には現はせなかつたのである。そして、こんな林の中にはいつてゐることが、誰も見てゐるのでないが、うしろめたいやうな氣持がして、却つて、胸が苦しくなつて、話を杜絶つてしまつた。

「弟は、無事に立つたでせうか?」

「あゝ、よろしく言つてくれいと、いひました」

小島は、木の根許に腰を下ろした。お霜はたゞふら〳〵と家を出たので、野良に出る時に着る短かい着物は被てゐなかつたが、粗末な着物に草履を穿いてゐた。彼女は、氣まり惡さうにして、彼から少し離れた處に立つてゐた。

彼女は、母親が、先生によくお禮を言つてくれと言つたことを思ひ出した。

「先生に、いろ〳〵お世話になりまして、母も、父も、よろしく申しました」と、彼女は、改まつて言つた。

小島は、被つてゐた黒の帽子を脫つた。その下には、ふさ〳〵とした髮の毛が澤山にあつた。平常、それを櫛ですかないと見えて、無造作に縺れてゐた。彼は、片手の指頭で、その髮を搔き上げた。

「どうか、あなたのお家では、一切知らんといつて下さい。まさかの場合には、私がしたのだと引受けます。お家では飽迄知らないことにして置いて下さい」と、小島は、言つた。

「先生……それでは、すみません」

彼女は、一旦燃えるやうな眼を上げて彼の顔を見たが、忽ちその眼を伏せて、あとの言葉は口籠つてしまつた。

「お霜さん、僕は、その時は、職を擲つても平常弱い者を苛めてゐる地主と戰ひます」

「先生……どうかそんなことをしないで下さい。みんな私達が馬鹿だからなんですもの……」

「そんなことはない。なにが馬鹿なんです?……」

彼は、かう激昂した時に、うしろの方で、

「へゝゝ」と、言つて、嘲笑したものがあつた。小島は、思はず起ち上ると、ぎよつとして振向いた。

お絹は、さつと顏の色を變へた。

「先生……若檀那樣ですよ」

「いゝとこを見付けた。僕、みんなに言つてやるぞ！」

「まあ……若檀那樣！　なんにもおかしいことがないぢやありませんか……」

お絹は、兩方の頰を赤くして、あちらを凝視して言つた。

「僕は、みんなに言つてやる！　いゝとこを見付けた」

低能の男は、先刻お絹が見たまゝの樣子であつた。頰被りをしてゐるので、そして、こんな短かい、汚れた着物に、花などを持つてゐたので、誰も、ちよつと見ては、これがこの村の大地主の息子であるといふことを知る者がなかつた。學校敎師の小島は、呆れた顏付をして、何とも言ふことができず見守つてゐた。彼は、心の中で、とんだところを見付けられたものだと思つて、暗い、押し付けられるやうな氣持を胸のあたりに感じたのであつた。

「若檀那樣、あなたこそ、そんな樣子をみんなに見られて、恥かしくはありませんか？　こんなに、明るくなつたのに！」

彼女は、かう叫んでから、あとは小さな聲で、

「妾の後をつけて來たんですよ……」

お絹は、低能の男が、父親から泥鰌を掬ひに出されて、それをまた町にまで、賣りにやらされる話を小島に聞かした。

小島は、この低能な若者に對する憤りを感じて、何か言つてやらうと思つてゐたのが、お絹の話によつて、强慾な父

親がその子供に課した仕事を聞くといろ〳〵な他のことが頭の中に混み合つて、たゞ默つてゐるより仕方がなかつた。

「先生、失禮します」

彼女は、この場合の處置に惑つたが、かう言つて、愚かな男の方に進み寄つた。そして、二言、三言、話し合つたが、彼女は、其の男をつれて、この林から、あちらに遠ざかつてしまつた。

後に、殘された小島は、一處ろに立つて默想した。彼は、言ひ知れぬ、ある種の不安を自身の生活の上に、豫覺せずにはゐられなかつた。

敎室の窓からは、田の上を越して、あちらの山の麓まで見えたのであつたが、日に、日に、若葉は、いつしか靑葉と變つたので、いまでは、窓の外を木々の葉で塞いでしまつた。たゞ其處には、すきとほるやうな初夏の日光が、つや〳〵した、美しい葉の面に照り返つて、風が吹いて來るたびに、それを波立てるのが見られたのである。

小島は、四年の生徒に作文をさせてゐた時であつた。眼鏡をかけた役場の書記が慌しく入つて來た。日頃から、よく顏を知り合つてゐる間柄にもかゝはらず、何となく鹿爪らしく、禮儀張つて、改まつた調子で、

「たゞ今、郡視學が村長とご同道になりますから」と、脊の低い書記は、言つた。

小島には、地主の前に、低く頭を下げて諂ふ村長の姿が浮んだ。さういへば、この書記だつて、彼等の仲間ではないか。無智な百姓の頭を押へる、權力に媚びる輩でないか。胸では、彼等を何とも思つてゐなかつたけれど、人見知りをする小島は、不意に郡視學が見えると聞いて、平靜を破られた。のみならず、いま來るといふ人間が、自分の職業を監視する地位にあるのだと知ると、言ひ知れぬ階級的憎惡と恐怖に似た反抗をこの瞬間に感ぜずにはおられなかつた。

「どんな様子をした男だらう?」

小島は、胸の裡でさう思つた。そして、

「いま、すぐに見えるのですか」と、書記に、低い聲でたづねた。

「さうです」と、眼鏡をかけた若い書記は、改まつた言葉で答へた。まだ、それらしい人間の影が現はれぬのにかゝはらず、書記は、一歩後方に退つて、體を壁に付けて、目上の人達を上手に導くやうな態度を示した。

小島は、もとの如く、教壇の中央に直つた。そして、いつも生徒に向つて物を言ふやうな調子で、

「みなさん、いまお役人様がおいでになつてみなさんの勉强をなさる有樣をご覽になりますから、行儀をよくなさいまし」と、言つて、諭した。

窓の外は、明るかつた。遙か沖の、北の方からは、微風が、たえ間なく吹いて來た。そして、草の葉や、木々の葉を搖つてゐた。日の光りが、波の如く、寄せては打返へしてゐる、稻の葉の伸びた頂きの空では、燕がしきりに啼きながら舞はつてゐた。

廊下に靴の音がした。羽織、袴の村長と、洋服姿の郡視學が教室にはいつて來た。郡視學は酒に醉つてゞもゐるやうに顏の色が紅かつた。そして、頭髮を奇麗に分けてゐた。

生徒等は、偉い人が來たと思つたのであらう。級長の號令に從つて、丁寧に頭を下げた。一瞬間、教室内が水を打つたやうに靜かであつた。たゞ外の空に舞はつて啼いてゐる燕の聲が、みんなの耳に聞えるばかりであつた。

小島は、强いて、いつもの穩かな自然な調子で生徒に對しようとつとめたが、さう意識すればする程、言葉付にも、また態度にも硬ばるところがあつて默目だつた。彼は、自から、そのことを不快に感じた。

郡視學のどことなく高慢な、そして相手を侮蔑するやうな嘲笑を含んだ眼付は、あたりに投げ付けられた。これに較

べて苦蟲を嚙み潰したやうな村長の顏は、ある一處に注がれて動かなかつた。

この時、一人の生徒は、手を擧げた、

「先生、知らない字をきいてい丶ですか？」

「よろしい」と、小島は答へた。

其の生徒は、言つた。

「先生、ホドコスといふ字を敎へて下さい」

小島は、すぐに、その字が頭の中に浮んで來なかつた。同じやうな字が、頭の中で混み合つた。しかし、彼は、猶豫してゐられないやうに、心の慌しさを感じた。なんで、この時間に、こんなやうな質問に出遇つたらう？彼は、白墨を握つた。

黑板に、

「弛」といふ字を書いた。

生徒は、腰を下ろした。小島は、何となく不安な氣がして、自分の書いた字を振向いた。その刹那、はつきりとホドコスといふ字が頭の中に思ひ出せた。

「あ、違つてゐました」

「施」と、彼は、前に書いた「弛」の字を掌で消して、新しく書き直した。彼の顏は、この僅かばかりのしくじりに對して眞赤になり、心臟はドキドキと打つた。

これと同時に、嘲笑は、郡視學の唇から起つた。

「ハ、ハ、ハ、ハ……」

彼が、全く書き終らないうちに、郡視學は笑ひを殘して、この教室から外に出たのであつた。その後から村長が從ひ、次に、書記が教室から出て行つてしまつた。

小島は、全身に水を浴びたやうに、震るひを感じた。もう彼は、そのまゝ殆んど授業をつゞける勇氣がなかつた。

地主と村長と郡視學とは、一つの政黨によつて結托してゐた。郡視學が、學校を參觀した日の晝飯は、地主の家で饗應されたといふことを小島は、傳へ聞いたのであつた。

秀吉を地主の家から逃がしたことについて、彼は、ある復讐を豫期せずにはゐられなかつた。

果して、それから長い後のことではなかつた。小島は、もつと山奥の寒村の小學校に轉任させらるゝ辭令に接した。

水田の中では、昔からの唄を、疑はず繰返へすやうに、蛙は鳴いてゐた。小島は、宿直室の窓から、あちらの山の方を眺めてゐた。こんど、自分は、あの霞んだ山影の彼に行くのだと思ふと、いつになく、この日の夕暮の景色がさびしかつた。この村に來てから、はや三年になつた。そして、このあたりの人々や、風景と親しくなつた。それも、長いことでない。やがては永久に別れてしまはなければならぬのであつた。

彼は、しばらく水田の中に鳴いてゐる蛙の聲を聞いて空想に耽つてゐた。この時、郵便配達夫が一通の封書を投げ込んで行つた。彼は、それを拾ひ上げて見ると、その後どうしたらうと氣にかけてゐた秀吉からの手紙であつた。

彼は、早速、窓に凭りかゝつて、晩方の光線の裡で、封を開いて見た。それには、故郷を立つて、東京に出てからの

いろ〳〵のことが書いてあつた。この頃、やうやくある新聞社の給仕に雇はれた。晝間は社で働いて、夜は夜學校に通つて、英語を學んでゐるといふやうなことまでが書いてあつた

彼は、この手紙を讀むうちに、自然と手の戰へるのを感じた。そして、何といふことなしに涙ぐまれた。

「どうか、できるだけ生長してくれ、私は、どうせ、田舍で終る身だ。お前は、ぐん〳〵と上に出て行つて、うんと戰つてくれ」

彼は、熱い息で、手紙を書いた少年に囑望したのであつた。

もう、あたりは、暗くなつて、暮れて行つた。しかし、遠方の山の頂きは、まだ、夜にはならないやうに明るかつた。

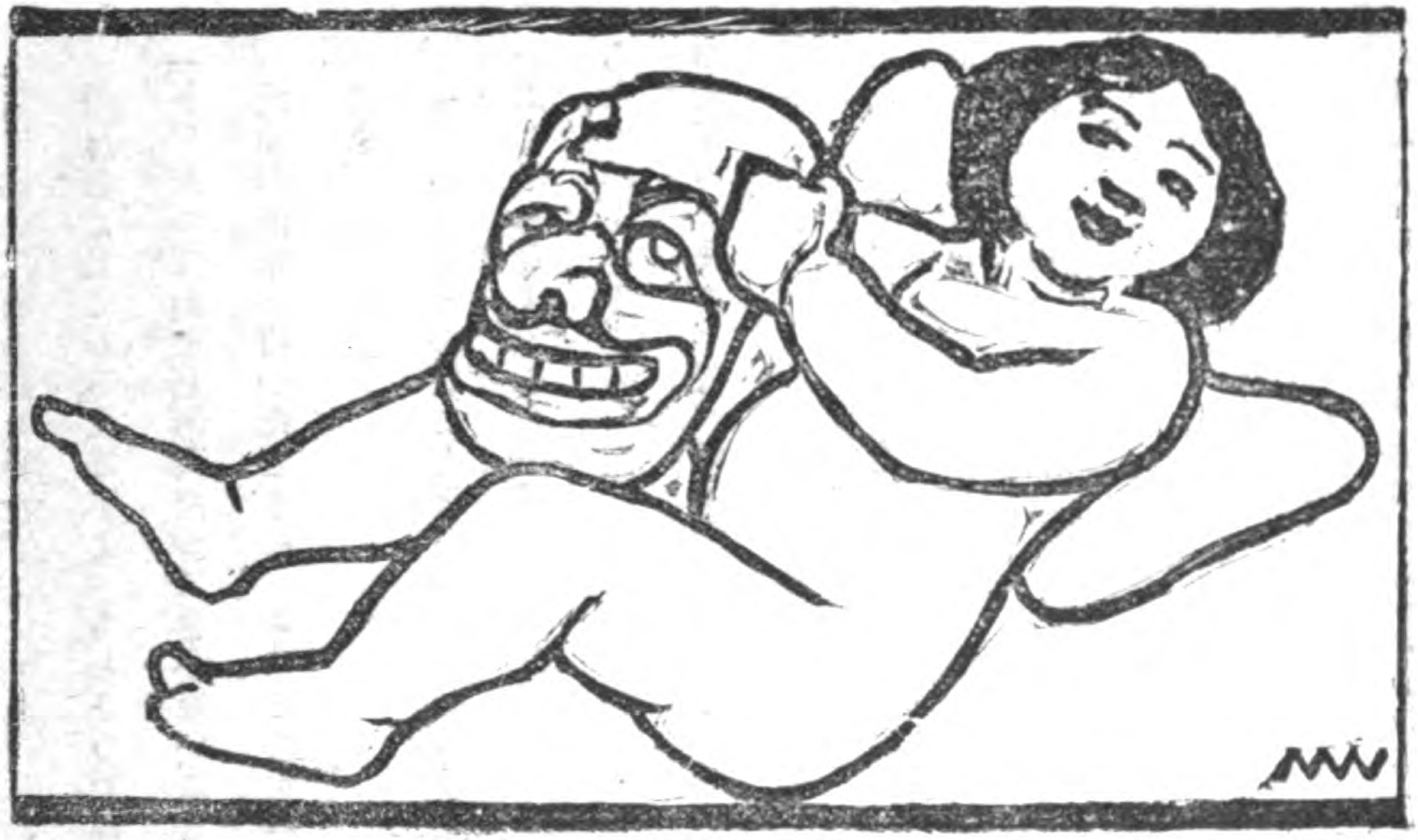
小島は、秀吉の一家の人々のことを思つた。愚直な兄の善藏、人の好い瀧吉爺、そして、お霜の姿などを眼に描いた。

あの人達とも、永久に別れなければならぬ日が、もう近いうちであると考へると、彼はたまらなくさびしかつた。

彼は、いつまでも、うす暗い宿直室の窓に凭つて、考へ込んでゐた。そして、こんど自分が赴任する、あちらの山の麓のまだ知らない村の有樣などを想像した。

他の秀吉が、其處でも、自分の來るのを待つてゐるやうな氣がした。すると、さびしいうちにもまた、希望の光りを感ずるのであつた。

――一九二三、四作――



嘆き

室生犀星

一

朝子はどうなることか？　と、母親の顏とおばさんの顏とをかはるがはる見戍つては、母親が承諾してくれればよいと、どきつく胸をおさへてゐたが、母親はいつに似ずすぐ受け合つたので、思はず飛びあがりたいやうな氣がした。

「では朝ちやんをおかりすることにしまし……。」

「でもいたづらさかりでございますから——どんなにお骨が折れることかと思ふんでございますよ。」

「もうこんなに大きくなつてゐらつしやるんですもの。」

おばさんがさう言つて、朝子のあたまへ手を遣ると、朝子はその手の上へ嬉しさうに少し羞かんで、自分の手を乘せた。

母親はちよつと柔らかくきめつけるやうに、朝子の、何となく眩

しさうにしてゐる眼を見た。

「溫良しくしてゐるんですよ。もしさうでないとあとでみんなおばさんに聞きますから――。」

「え、だつてわたし何時だつてきかないことはないんですもの。」

「此前湯河原へ行つたときに、おぢさんを蹴つたつてんぢやないの、――。」

「まあ、ひどい。」

一たい誰がそんなことを言つたのだらう？　おばさんでなければおぢさんだ。――朗子はそれが不純のことでないといふことを表はすことが、ちよつと口にはいへなかつたために泪ぐんで見せた。――何かのはづみに、あげた足が寢ころんでゐるおぢさんの額を踏みつけた。……ごめんなさい、と、さう言つて氣がつくとおぢさんは蒼い顏をして、自分の眼を見たまゝ、額へ手を遣つてどこか筋でもちがつたやうに痛さうに顏をしかめた。――どうかなさいまして？　おばさんがさう言つてそばへ寄るとおぢさんは頭が痛いと言ひ出して、きふにタオルで冷したりした。頭痛持ちのおぢさんだけに氣になつて、も一ぺんごめんなさいといふと、何んでもないよ、と、その儘で濟んだが、その翌日までおぢさんは青い顏をしてゐた。……そんなことから何時になくおばさんまで恐い顏付で、ふきげんさうにしてゐた。

が、いま考へるとそんな事――まで言はなくともいゝだらうと思つたが、

「わたしはづみで踏みつけたんですもの。蹴つたなんてひどいわ。」

おばさんをちらと見ると、微笑んでおもしろさうな顏をしてゐた。

「だからこんどはそんな事がないやうにするんですよ。」

母親はさういふと、膝がしらを合せて、

「ではさうおねがひすることにしましてーー今晩すつかり着物を持つて參りますから。」

「朝がお早いものですから、家から發つことにしようと思つてゐるんですよ。」

「まあ何から何までーーでは後ほどおうかがひいたします。」

母親がかへつてから、朝子はすぐおばさんをつかまへて、

「あんなことを言ひ附けたのはおばさんでせう。ひどいわ、これからおばさんのことも折言ひつけてやるから！」

さう言つて朝子はおばさんを睨んだが、おばさんは頭をふつて、

「わたしぢやないーー」

さう微笑ひながら言つた。

「ぢや、おぢさん？」

「さうかも知れないわ。ーーもう濟んだことだからどうでもいいぢやありませんか。」

「おぢさんに問つてみるわ。おぢさんは何處へ行つたの？」

「明日の買物にいらしつたの。」

「おかへりになつたら、うんと言つていぢめてやるわ。」

朝子はさう言つたが、「何のお買物？」と、些つと考へるやうにして、おばさんの顔を見あげた。そして言つた。

「あてて見ませうか。」

「えゝ、あててごらん。」

「おばさんのものでせう。」

「朝ちやんのものですよ。おぢさんの買ふものはきつと左うに決つてゐるんですから。」

朝子は嬉しさうな顔をして「何んだらう。」と言つた。……そしておぢさんが歸つてきても、れいの事は言ふまいと考へた。

夕方、おぢさんがかへつてきたとき、おばさんと朝子と、湯どのへ這入つてゐた。——なれた湯でないといけないと言ふので、おばさんはけふも先きにはいつたのである。

「いま直ぐ出るわよ。すぐよ。」

朝子のこゑが勝手で呼ばれたが、おぢさんは「ゆつくり這入つてゐたらいい。」と、左う言つた。しかし朝子は間もなく飛び出したらしく

「おかへりなさいまし。」

と、おばさんの眞似聲を襖の外でして見せた。

「まだ洗ひもしないのに、出てしまつちやいけないぢやないか?」

「だつてわたし入浴(はいつ)てゐられないんですもの。」

「なぜ?」

「なぜつてわけはないけれど……。」

襖の向ふで同じくおばさんが言つた。

「風邪ひきますよ、そんなに温まりもしないで飛び出してしまつちや――。」

「風邪をひいたつて關はない――。」

「母さんに言ひつけますよ、いまからそんなに聞かないぢや、向ふへ行つたらどんなにいたづらするか分らない……。」

「言ひつけたつていいわよ。」

朝子は扉のそとで着ものをきると、すぐ茶の間へ出た。そしていちはやくおぢさんの紙包みのボール箱を嗅ぎつけると、それに手をふれた。

「なあに？　これ。」

おぢさんは微笑つて

「あてて見たまへ。」と言つた。

「何か知ら？」

朝子は指さきで紙包をひねりながら考へては、あれかこれかと、心で探りあてて見た。――指さきがあんまのやうに器用に紙包みの内をさぐつた。そしてはつと思ひついて見て、全くその他の何物でもないと考へ當てると、いきなり叫んだ。

「分つてよ！」

「ぢや言つてごらん。」

朝子はそのとき湯上りのちいさい足をくるつと出して、その足の姿をひと撫でして見せたが、

「これでせう？」

「これとは?」

「靴!」

「當つた——。」

紙包みはすぐはしツこい指さきにつかまつたが、しで紐の結びがほつれなくて、心をおちつけるほど絡みついていらいらしてしまつたので、朝子は前齒できつちり當てがひ、紅い紐を二つに嚙み切つた。——紙包みをばさばさめくつてゐると、粉つぽいくせに濕氣のあるボオル箱が出た。

「まあ、嬉しい。」

踵のほそい女靴が一足、すぐ庭さきの明りを宿らして柔らかさうに、朝子の手の上にあつた。

「はいて見ていい?」

「いいよ。」

一度足を入れてから、又思ひ出して、

「靴下をはかなきや駄目よ、きつちりしないわ。」

朝子はこんどは靴下をはいて、新しい靴を着けた。そして、ちやうどいい——と、疊の上を歩いて見て言つた。……子供時分に靴などといふものを履いたことのないおぢさんには、それがちやうど自分がはいて見たやうな氣もちを無理にも感じなければならなかつたほど、筒袖姿の、哀れな自分自身をふりかへつて見たのである。

おばさんは湯どのから出ると

「まあ、いい靴。」

さう言つて朝子の肩を一つ、そつと叩いた。――朝子は肩をちぢめ、いたづらものらしくちい……と、おぢさんに舌を出して見せた。おぢさんはそつと睨むやうなまねをした。――が、おばさんの買ひものは一つもなかつた。

――晩に、三人は買ひものを整へるために又街へ出かけた。茶棚の上にある支那風なお厨子の、両扉に龍紋のあるそれをおばさんはぎいいと閉めた。いつも日暮れには左うするのだつたが、けふは朝子の母親が来たりしてゐて忘れてゐたのである。――どうしたはづみか、供へた花が扉にはさまつて、白い花瓣を浮かしてゐる。――おばさんはそれを中の方へ入れて、扉を閉めた。――おぢさんも黙つてそれを眺めてゐた。

「なぜ晩になると閉めるの。」

「お寺だつて晩には扉を閉めるぢやありませんか。」

「さう、そんなわけなの。」

朝子はさういふと、すぐ玄関へ出て行つた。――かれらは暗い町から夜の明けたやうな電車のなかに坐つて、さらに明るい大通りへ出て行つた。そして飾窓(ショオ・ウヰンド)を覗いてあるいた。いつも買ひつけの店へはいると、春のショオルが美しく下つてゐる。――おぢさんはそれを見てゐると、黙つてその柔らかい絹地に手をふれた。女ものは女に買つてやるより、かれ自身そのものが欲しいやうな気のするのを、それほど深い意味で考へなかつた。ただ好もしい明色ある気もちをかんじた。

「あれを朝ちやんに一つ買つてやらうぢやないか。よく似合ふだらう。」

「あれをですか。」

朝子はむしろそのとき本能的に、おばさんの顔をみた。おばさんの顔はすこし違つてゐるやうな氣がして、そのかげが自分の心にも落ちるやうな氣がした。――が、すぐおばさんは何か心づいて、へいぜいの顔いろになつたのを朝子は又偸み見た。

「朝子のお父さんには大へんお世話になつたから――。」

おぢさんは財布から金をつまみ出しながらさう言つて、朝子にショオルを卷かせた。朝子はあんまり突然にさういふショオルを貰つたので、吃驚したやうな顔付で、それを繊い首にまきつけた。

「いいおぢさんね。おれいをおつしやい。」

朝子はやつと安心をしておばさんの、へいぜい通りな言葉つきを聞いた。

「おぢさん、ありがたう。」

眞紅に漆黑な斑點のある、うすい絹地はながれて、朝子の白い足袋の爪さきまであつた。おぢさんは朝子の嬉しさうな顔をそのまま、むしろ靜かにこころよく眺めた。

「お前だつておれだつてそんなに他人から物を貰つたことはないだらう。そんなことはどうでもよいではないか。」

かれらはその店を出ると、茶を喫んで、また道路をあるいた。――朝子は嬉しさうに幾度もショオルを掛け換えたりしながら、そのたびに或る新鮮な感じた味ふらしかつた。二人の間にさういふ美しい小鳥がゐるやうで、明るい氣がした。

が、或るパラソルを賣る店から、突然縮緬の空色の派手な羽織を着た、まるで眼覺めるやうな美しい姿をした奥さま

風な女が、まだ誕生過ぎくらゐな赤ん坊を抱いて、番頭や小僧に送られて、車道に待たせて置いたらしい自動車に今にも乘り込もうとしてゐるのが二人の眼に映つた。……

そのとき朝子は呆氣にとられて、その奥さま風な女と美しく着飾らせた赤ん坊とを立ち止つて眺めてゐるおぢさん夫婦をかへり見た。――わけておばさんの眼は自動車のドアが最後にかあんと響いて閉められた後まで、凝然と見詰めてゐた

その奥さま風な女の母親らしいのがこれも店さきに立つて、手をふつて見せると、よく磨かれた車の窓玻璃に映る赤ん坊の、きよとんとした瞳が紅と綠との着衣の間に浮んでくろぐろと輝いてみえた。――そしてその奥さま風な女は赤ん坊に何かささやきながら、若い母親らしい艶やかな微笑を含んで、白い手を振つて、さよならを挨拶してゐるらしかつた。

間もなく自動車はうごいて、車道のかなたに消えてしまつた。――しかしおぢさん夫婦はぼんやりとまだ見送つてゐて、にはかに歩き出さうとしなかつた。朝子も些つと或る事を思ひついてそつと二人の顔をみあげて些つと悲しかつた。――一分間は過ぎた。かれらは歩き出した。

「お里がへりらしいのね。赤ちやんを抱いたりして？」

おばさんの、その赤ちやんを抱いたりして――が朝子には何となくおかしかつた、にも拘はらずおばさんの顔は左と右との顔色がまるで異つて、兩方の頰が何か言ひあらそひをしてゐるやうに悲しげに見えた。

「あの子供はきつと熱があるぜ、――あんなに瞳が、黒い筈がないよ、まるであれは熱で燃えてゐるやうだ。」

かれは何か怒つてゐるやうな顔をして、ことさらに荒々しく言つた。――赤ん坊にふうわりと被ぶせた緋縮緬のう

かけのやうなものに、何か金絲で編つてあつた模樣までが眼に殘つた。そしてあの嬉しさうな顏をして自動車へ乘り込んだ若い奧さん風な、誇らしいとも華々しいとも言ひやうのない色彩——あれだつて……あんな美しいまるまるした赤ん坊だつて——と、かれは、口惜しさうに心で食ひしばつて、そりやひよつと風邪でも引いたらそれきりだ、だのにさう殊更らに眼の前であんなにまでぱつと見せびらかさなくともよいのに、——さう思つたが、ひがんでゐるとも思つた。

「結局あれは何んでもない人の子だ。」

朔子はおぢさんのその言葉をきいて、それに答へないおばさんは、いつまでも默つて歩いてゐるので自分も默つてあるいた。ショオルを片ちんばに片つぽを長く垂らしてゐるのを掛けかへたかつたが、そんなことをしちやいけない氣がして、我慢してゐた。

「あんなにしてお里歸りをしたらさぞ樂しみでせうね、——ずゐぶん嬉しさうにしていらしつたわね。」

おばさんは半分朔子にさう言ひ、また半分をおぢさんに言つた。

「あの赤ん坊だつてちよつと惡くなつた日にや、もう取りかへしがつかなくなるんだよ、誰の赤ん坊だつて……。」

おぢさんは同じことを例の誰に對つて言ふでもなく惱つたやうな調子で言つた。

「でもあんな子は育つものよ、育つやうにできてゐるやうなんですもの。」

「わかるものか？　育てて見なけりや分るもんか。」

三人は默つて歩いた。まんなかに十二になる朔子をはさんで——さうして少しも屈託のない人間のやうな顏付だつた。この世のことがすつかり思ひどほりになつて、すこしの綻びも出てゐない人人に見えたらう——さう見えるならそ

れでもよい……おちさんはやはり惱つたやうな顔をして歩いた。

二

自働車が峠にさしかかると、濃い緑をかぶつた段々畑の蜜柑樹に、もう季節が過ぎたにかかはらず一杯の黄ろい實が揉みついて、そこだけ明るくなつて、傾斜に從つて暖かい色を燃して續いてゐた。――泥の色も乾いて白い眩しい光に照りかへされて、こんもりした蜜柑樹のかげは濃くこまかく見えた。

「蜜柑が實つてゐる。――」

朝子は手を拍つて、その黄ろい實が渦をなしてゐる畑を天から降つてきたもののやうに喜んだ。全く天から降つてきたやうな美しい木の姿だ――おちさんである倚文は眼にうつりかはる景色をながめ、何となく蜜柑の木といふものに仰敎くさいものだと思つた。明け方にその木の上に雲が浮いて見えたら、ちよつと或る爽やかな感じ以外に、何か佛の姿のやうなものを見えはしないか？　と、さう思ひついたのである。

「薄田さんは迎えに出てゐらつしやるでせうか。」

充子はさき廻りしてゐる夫の友達ちのことを、今ふと思ひ出した。

「待ちくたびれてゐるかも知れない。」

自動車が宿に着くと、薄田は玄關さきに出てゐて、毛唐のやうな眼でにこにこ微笑つて立つてゐた。

「さつきから幾度も出て見たんだよ。――部屋は氣に入るかどうか知らないがとにかく見たまへ。」

薄田はさういふと、充子とも挨拶をした。

「朝ちゃんてこの子かい？」

「手紙で知らしたのは、この子だよ。」

「朝ちゃん今日は？」

瀬川にさういはれると、羞かんだがすぐ今日はと言つて、きらひな人でないと左う直覚的に思つた。眼の大きい西洋人みたいな顔をしてゐるのが可笑しかつた。――それに絶えず煙草ばかり燻べてゐるのも頭に殘つた。

部屋は――鬱然と繁つた夏蜜柑の大樹の見える處に望んでゐた。その大きな實が粒々と枝から垂れて、そつと掌にふれてみたら重いだらうといふ氣がした。

「あれ、橙ですか？」

充子は明るい大きな果實をみあげた。

「夏蜜柑よ。」

朝子はさういふと、すぐその樹の下へ行つて、手をひろげて、聲一杯に何か感嘆したやうな聲をした。

「いい部屋だよ、ありがたう――君の部屋は？」

「二階なんだ。あとで來たまへ。――庭へ下りて見よう。」

三人は朝子のゐる方へ歩いた。――手を觸れてみると夏蜜柑は冷たくみつちりと水氣ぐんで固かつた。手で抱いてみると、些つと鋒といもののやうな氣がした、とは云へ、何だか珍らしい新鮮な或る人格化をかんじた。それに木のかげに佇つと無數の黄ろいらむぷが點火れてゐるやうで、あかるいくすんだ光がぼうと黒ずんだ葉陰に射してゐた。――こんな豐饒な光景にふれたことのない充子は、こんなにまで幸福さうな樹があるものかとまで思つた。

「おばさん、ちよつと入らつしやい、いいものを見せてあげるから。」

「何に？」

「入らつしやらなけりや駄目よ。」

充子は朝子の方へ行つたが、すぐ手に何か摑んで、それを抓んでこちらへ見せた。——そのとき倘文は何となく朝子の顔がいつもより紅すぎると思つた。あながち日光のかげんではないらしい……倘文に、すぐ朝子にこちらへ來るやうに言つた。

「これ、土筆よ、まあ、こんなに大きくなつて——。」

倘文はさういふ朝子の容をみると、紅く冴えて頬のいろもいつもより昂奮つてゐるやうだつた。

「ぢつとしてごらん——。」

倘文は朝子の額に置いた手のひらに、烈しい熱をかんじた。同時に倘文は自分の背中にすつと寒さが通り過ぎた。——

——これはいけない——。

「熱があるよ。」

「熱が？」

充子の顔いろはすぐ變化つた。そして狼狽へて自分の手を朝子の額のうへに置いた。——毎日毎日病兒の額に置いてその熱をみてゐた手のひらは、すぐ朝子の熱がどれだけあるかといふことまで、じはじはと下からむくれ上る發熱を感じるに鋭敏だつた。

「えゝすゐぶんあるやうですよ、——朝ちやん、氣もちはどう？」

「何んでもない――」

朝子はさういふと尚文が又額に手をふれるので

「熱なんかないわ。」

さう厭がつて言つたが、今ここで若しものことがあつたら、自分らはどうしたらいいのだらう？ 尚文は朝子の母親がわづかな遺産で育てて來て、行末は自分が朝子に據らなければならないといふ氣もちでゐること――そして神經質になつて育ててきたことを考へると、尚文はこのままにして置いてはいけないと思つた。

蒲田は醫者の子息らしく、平氣でちよつと額へ手をやると、

「自動車で搖ぶられたからだよ、何んでもない――。」

と言つて澄してゐた。――朝子は顏色までかへてゐる尚文や充子よりも、ずつと蒲田がものの解る人のやうに思へた。

「とにかく朝ちやんはぢつと臥てゐなければいけない――よくなつたら遊んだつていいけれど。」

「だつてわたし何處もわるいところがないのよ、熱なんてないわ。」

朝子は自分で手をやつてみると、いつもよりずつと熱いやうなほとぼりをかんじた。それに顏色の變化つたおぢさん夫婦を見るだけでも、氣がうつるのか？ 何んだか息苦しいやうな氣もした。しかし臥るのがいやだつた。

尚文は朝子を臥かすと、帳場へ行つて檢溫器を借りて來て――いやがる朝子のわきの下へはさめた。この檢溫器を毎日見なかつた日がなかつた、――透してながめる檢溫器を見るたびに尚文はいつも呼吸がはずんで、心はしづみがちだつた。かれはさういふ病兒を間にはさんで、充子の顏と、いろつやの不良い子の顏とをどれだけ眺めたかも知れない――

もし朝子にわるい事でも起つたらどうしたらいいのだらう——。

「八度二分！」

充子の瞳は恐怖（こは）さうに震えてみえた。その氣もちはすぐ尙文の心にもつたはつて、これはしまつた、といふ氣が足音をみだして胸のなかで荒れた。

「そんなにあるのか？」

尙文は女中を呼んで、町醫を呼んで貰はうとしたが、宿のかかりつけの醫者は外診で出てゐないから、その人のかへりまで待つてくれるやうに言つた。——では、その他に醫者はゐないのかと尋ねた。

「老人の方がございます。」

「ではその人を呼んでくれませんか？」

「その方はかかりつけの方ぢやないんですから——。」

尙文は勝手な理屈をいふ女中を小面憎く思つた。

「君の宿のかかりつけでなくともいいんだ。こちらに用事があるんだから枉げて呼んでくれませんか。」

「え、しかし。」

「ぐずぐずしてゐられないんだから、早く呼んできてくれたまへ。」

尙文はむしろ叱鳴るやうに言つて、出てゆく女中ののろい足つきまで不愉快な氣がした。——そして急に又た思ひついて、女中をも一度呼んで　氷をもつて來てくれるやうに言つたが、女中は氣のないふりで、低いこゑで返辭をして行つた。——いまにお前も子供をもつたら、それが病氣をしたらこの氣もちが分るぞといふ氣がした。むしろ女中の背後

から左う吐鳴りたかつた。

床につかせた朝子は先刻とは反對にこんどはいくらか蒼ざめた顏色をして、みんなが騷ぐせいか、悲しさうな眼つきをして、天井をながめてゐた。そして尙文と充子との顏と眼をかはるがはる見詰め、あいそらしく微笑つてみせた。――なんだか顏が小さく縮まつて見える……尙文は左う思つた。……いつでも天非ばかり見つめてゐた病兒のくろぐろした眼が、そつくり朝子の眼と入れかはつて、尙文の眉をしがめさせた。

電燈が點いてから、町醫はかたのやうな折鞄を持つて這入つてくると、檢溫器を振つて插めながら、老人らしくもなくぞんざいに診察してしまふと、意味のない微笑を一つしてから、

「胃がよくない――それにやはり自動車で搖ぶられたせいで發熱したんですね。これくらゐなら――。」

安堵していいと言つて、

「お孃さんですか？」

折鞄を手にとつて左う言つた。

「いや、實はよその子をかりて來たんです。それでなほ心配したんです。」

尙文は恥入るやうな思ひでさういふと、いくらか安心ができた。最後に醫者が老眼鏡をサックに入れるときに、その手つきが可笑しかつたのか、朝子はにつと微笑つてみせた。――尙文はたしなめるやうに睨んだが、朝子は今度はあつちイ向きになつて微笑つた。

醫者がかへつてから、充子と尙文は眼を見合つて吻とした。それから一時間ほどして氷で冷しても、熱は降らなかつた。やはり八度あつた。

「こまるな、下らなくては？」

氷嚢を額の上に乗せたがやはりききめがなかつた。

ふたりはまた震えるやうな先刻のおどおどした氣もちを繰り返した。――そこへ蒲田が這入つてくると、紙卷きを喫んだまま、

「熱は？」

と左う尋ねた。

「下らないんだ。困つた！」

「大したことはないよ、原因がわかつてゐるんだから。」

蒲田はさういふと拔うすつかり話の調子を換へて、

「今夜ちよつと活動を見にゆかうと思ふんだ。退屈で仕方がないから――。」

「へえ、活動をね――。」

「うん、宿にゐたつて爲方がないし……。」

尙文はこんなに朝子がわるいのを知つてゐても、何一つ手傳ひもしないで、自分だけのことを考へてゐる蒲田を些つと怨みたいやうな氣がした。しかも今日着いたばかりだのに自分だけの考へを勝手にこじふてかかる彼れを――さういふ事柄を何の感情をも挿しはさまないで言へるのを羨ましくも思つた。しかも蒲田は平氣だつた。

「今晩はかへりがおそいだらうから明日會はう。」

尙文はしかたなしに、「ぢや行つて來たまへ。」と言つた。

……時計をみると十一時に近かつた。どの部屋でも戸が閉つて明りが漏れてゐない——充子は近隣の部屋の人に遠慮しながら氷を割つてゐる。その音をきいてゐると毎日そればかり聞いてゐた病児のゐたころの、あの厭な鈍いがりがりした音が頭腦に倦るげに殘つて、今それが、呼びさまされたやうに痛んでくるのだつた。

「氣もちはどう——。」

「何んでもない。」

節子は幾度たづねても同じい返辭をくり返すだけだつた。そしていまはすつかり病人のやうな顏つきで、晝間のやうな元氣なところがなかつた。自分でもさう思つてゐるらしく思へた。——そのうちうとうとしたらしく、低いいびきが聞えた。充子はそつと檢温器をはさむために、その小さい手をもちあげた。そのとき尚文はぎゆうとした悲しい氣がこみ上げてくることを感じた……かれの眼底にはこんな世に生れてこなくてもよかつた我が子が、こんな世の中さへ知らずにさつさと消えて行つたことを又しても忌々しく考へ出したのである。

熱はやはり下らなかつた、——白い額に汗がにじみ出てゐる。

「よその子供なぞを連れて旅行するものぢやないね、どんな事が起るか分らないんだから。」

尚文は充子の顏をみて、晝間の汽車や自動車の疲れが出て、烈しい睡眠におそはれながら全く草臥れた聲だと自分の聲をさう思つた。

「こんな事になるなんてわたし少しも考へなかつた——。」

「誰だつて考へないさ。」

しばらくしてから薄田の部屋で障子をあける音がした。いま活動が濟んだのかとさう思つた。が、次ぎに起る音は何

もしないで二階はひつそりしてゐた——。
「薄田さんがおかへりらしうございますね。」
尙文は默つてうなづいた。——十二時になつて八度を二分だけ下つた。
「下つた、助かつた。」
充子は又たガリガリ氷を掻きはじめた。二時になると七度五分になつた。二人ともぐたぐたに疲れてしまつた。眠たさが折れ果つて鈍な重みを頭の上からおしよせて來る……溜息ばかりが衝いて出てくる。——そして二人の間に今もなほいまいましく掠める影は何であるか？　そんなにまで此世を悲しがらせるものは何であるか？
遠鷄の聲がしたころに尙文は雨戸を一枚だけ殘して置いたのに——靠れかかつて、いつかも同じいやうな姿勢で我が子の燒ける煙をそれとなく覘ふた晩のことを思ひ出した。……夜明けと夜との間から人間にはいつも特別な嘆きをつたへる鷄鳴が、つかれた頭腦へひびいて、痛かつた。
「もう大丈夫！」
充子は氷袋を額からそつと退けたときに、朝子はうすい眼をあけて、まぶしさうにかれら夫婦をちよいと眺め、また織い眼をとぢてしまつた。——朝子にはそれがおぢさんだかおばさんだか分らなかつた。ぶ、自分の母親でないことだけはうろ覺えにおぼえてゐた。では一たい誰だつたらう？　さう、もやもやな意識のなかで考へてゐるうち、洞のまはりの紅い自動車が一臺、走つてみえた。——規律正しい並樹の木が植つてまるつこい實がクリスマスのあかりのやうに一杯點火れてみえた。
……それから、朝子は何んでも明るいところに立つてゐた。砂が白く、その砂原のまんなかに青いどろんとしてゐる

沼だか池だか分らない池があつた。池の上に、かいつむりが頭だけおかしな形で出しながら「今日は？」と言つた。

「今日は？」

朝子もさう答へた。すると、かいつむりは指さして見せて「あれを見たまへ、あれは一體誰だらう。」

「あれとは？」

朝子はその方へ眼を遣ると、池のまんなかに靑い一枚の葉があつて、おばさんがぺたんこに坐つて、おかしな手つきで顏をおさへながら泣いてゐた。――朝子はおばさんがどうしてこんなところに來て、あんなに泣かなければならないのだらうか、さう思つておばさんは何故泣いてゐるのだと言ふと、かいつむりがおばさんの大切なものを盜んで行つたのだと言つた。

「おばさんの大切なものつて何の事だらう？」

朝子ははじめてその時かいつむりを見ると、かいつむりはおばさんの赤ん坊をちやんと抱いてゐた。それゆゑ朝子はかいつむりに縋りついて、その赤ん坊を取りかへさうとしたが、かいつむりは水の中へ沈んで行つてしまつた。――朝子もくやしくなつてすぐかいつむりのあとへ飛び込んで、水の中へ潛つたがからだぢゆうが冷やりとした。死ぬんぢやないかと思つた。

「もう快いんだからね、おばさんはさきに臥ますよ。」

「あ、」

朝子はふと目をさますと、そこにまだおばさんとおぢさんとが、ずつと起きてゐたらしく眼をさましてゐた。――紙

がつくと氷枕を取りかへたらしく新しい凉たさが滲透つて來たのである。……朝子は今朝からのことが百年も經つたやうな遠い氣もちで又た考へられてきたが、いつの間にか寢込んでしまつた――そして自分が寢てゐるといふことをはつきりと頭のなかで覺えてゐたが、やはり自家にゐるのか、それとも始めて泊つた宿かが分らなかつた。

三

朝、目をさますと朝子はさつぱりした顏つきで、昨夜からのことをすつかり忘れてしまつたやうにけろりとしてゐた。――そのさえざえした顏つきをみると倘文は特別に無事な穩やかな朝が來たやうにかんじられて、實つてゐる夏蜜柑の大きな黃ろい肌の片がわに、朝日をうけてかがやいてゐるのを美しいと思つた。――何んだか非常な不幸のあとにこれは又た思ひがけない仕合せがきたやうで、すこしづつ微風にうごいてゐる壯麗な果ものの光をながめた。

「わたし最うすつかりいいの、ほら！　熱なんかすこしもないわ。」

朝子はこんどは自分から額に手をやつて、倘文にもあてて見てくれと言つた。――それが決して自分は病人でないといふことを信じてゐるやうでいさぎよかつた。

倘文は手をやつてみたが、うつすりした冷たさで健康者の朝めさめた額の觸れ心地だつた。――充子も同じく手をあてた。

「熱なんてないでせう――。」

「まあ、いい鹽梅だつたわね。昨夜どんなに心配したか知れはしない。」

充子も吻と呼吸をついて言つた。――倘文は綠端へさす麗かなひかりが、もう朝子の心をそつくり誘ひ込んでしまつ

て、靜平として居させないのだと思つた。――朝子は夏蜜柑の實を見ながら足をぱたぱた鷄のやうにとんとん踏んだ。

「けさはもうしばらく寢てゐなきや惡いよ、午前中でもいいからね。」

「だつてもうすつかり快いんですもの。」

「たから暫らくでもいいから臥んでゐるといい。」

「ぢや午后ならいいの。」

「む、午后ならいいんだ。」

朝子は床へはいると、尙文は昨夜から何事も起らなかつたやうな落着きをかんじた。――薄田がすこしも朝子の病氣を問題にしたかつたことも、薄田がわるいのではなく、あの男の心には脅かされたことがないからだと思つた。それにくらべると絕えずおどおどしてゐる自分の病氣にたいする臆病さが、晴々とした日中だけに可笑しい氣がしてならなかつた。

「昨夜のことはまるで夢のやうな氣がする――あんな厭な氣もちたらなかつた。」

尙文は薄田にさういふと、薄田はそんなことはどうでもよいと云ふやうな顏付で

「君はあんなに書いてよく倦きないね。」

突然そんなことを言つた。

「おれだつて倦きるさ――だが、それよりさきに倦き切つてゐるから書けもするんぢやないか。」

「僕なぞ二三枚の詩をかいたつて、うんざりする……。」

薄田は暫らくでも人と話するとすぐ退屈するその癖をもう顏いろに出して、ぼんやりさう言つた。十年間に二冊の詩

樂しかもたないかれは何一つ面白さうな顔をしないで、ものの二三分も經つと既う對手に退屈しだした。

「おれは路傍で影のながい馬が休んでゐるのを見ると、まつたく退屈そのもののやうな氣がするんだ……いつまでも倦るさうに長い首をうごかしてゐる馬つてやつは、まるでくされた繩のやうに動かないんだ。」

　と、さういつか薄田が言つたことがあるが、薄田の顔をみるとすぐその言葉を思ひ出した。かれは併しどんなに退屈をしたつてどこへも旅行するではなし遊ぶでもない――まるでその退屈をどうしたら料理できるかといふことや、その氣もちから離れやうとはしてゐない――まるで馬の青いかげが一生添ふてゐるやうに、薄田はやはりその退屈と一しよに歩いてゐる――。

　話をするとすぐ倦きる氣もちはよく薄田に似てゐるが、伺文のは、できるだけ退屈から身もだえをして逃げるやうにしてゐる點がちがつてゐた、――伺文は心にないことまでさまざま工夫して退屈と無爲とから離れやうとする。退屈の方でそれを趁ひかけてゐる。が、どちらが本統かわからない――伺文はあるひは退屈からも書くことがある、どうにもならない剩つた時間をどうつぶしたらいいかといふときにも書くのである。その方が時間が經つてゆくからだ。

「も一つはおれは書いてゐるときと、書かないでぼかんとしてゐるときとの區別がない――睡眠以外は何時だつて考へてゐるし考へてゐるうちは何時だつて疲れてゐる。だから書いてゐると書いてゐないと、どれだけの區別ができるかおれにはよく分らない。」

――結局いつでも心で書いてゐるやうなものだから――假りに晩方になると書かない日だつてぐつたりとつかれてゐる――眼をさましてから見た平凡な下らないものにも心をつかひ込んでゐるらしい、そのため晩方はぐつたりとしてゐる――。

「さう言へば左うだが、單に考へてゐるだけなら疲れはしないよ、考へて疲れて書いてなほ疲れてしまふんだよ。」

薄田はさっ言ふと、どちらだつて同じぢやないかといふやうな顏をした。——倘文は何時までも書いてゐなければならないし、それ以外には何にもできない自分を忌々しく感じてゐた。——書かずにゐるわけにはゆかないばかりか、一ト月も書かずにゐると、やはり書きたくなるやうな、書いて見て書けないやうな寂しささへ感じるのはどうしたことか？　若い時分から癖になつてゐるせいもあるが、それより最つと本質的に原稿紙の上に顯はしてゆかないと、はつきり自分の心持ちを形の上に見ることができない——それではなかつたか？

「おれだつて一體いつまで書かなければならないかと思ふよ、——そんな人生にしたつて生活にしたつて書くことがあるか知らと思ふんだ。だが書けば書くことが有り過ぎるくらゐなんだ。」

倘文はちびた筆の穗のやうになつてゐる自分の心を、どんなに鞭打つたつて結局は詰らない一つの作品を生涯繰り返してゐるに過ぎないやうな氣もした。すくなくとも自分はいつもその窮屈で乏しい人生を、姿を變え、心を幾樣にも換えては書いてゐるやうなものだつた。それでもよいぢやないか？　かれは時をり苦しまぎれにさうも思つた。

「君のやうな男は書いて書きなぐつて、そしてやつと一行か二行くらゐしか掘り出させない男かも知れない——はじめからその一行か二行を目的にできさうもない男なんだから——。」

「それは當つてゐるかも知れない——結局は愚直で、その愚直ゆえにむだを書きすぎるくらゐ書いてゐるのかも知れない。」

その愚直ゆえに人一倍疲れて、人一倍損をしてゐるのだらう、——かれ自身もそれを知つてゐるが——十枚の紙數を二度も三度も數へなければその數の正確を信じきれない彼れは、よそから見たらばかばかしく、齒がゆいむだな草臥れ

を感じさせるだけだらう。そんなむだを絶えず繰り返してただ好き勝手に勞れてゐる人間だつて、他人から愚直だと笑はれたつて、どうやら最後の一行だけを掘り當てればいいのではないか？

「徒歩競走つてやつがあるね——あの一番さきに一等勇敢に走つてゐる奴が、一番さきに草臥れてしまつて、追ひつかれて又思ひ出して走り出すのは厭なもんだよ——それより初めから走れるだけのもので走つてゐたらどうだらう——しかしそいつはつゞまりびりになつてしまふんだが。」

「そのびりの方がいいよ、だが、君はそのどつちだか？」

薄田は話が初めて面白くなつたと云ふやうな顏をして、一つ皮肉な微笑ひをもらした。

「ところが佐藤春夫はどうだらう——ありや初めから走るのではなく、手をぶらぶらやつてまるでただ歩いてゐるのぢやないか。」

「あ、さう、あの男は歩いてゐるんだよ、はじめから——。」

薄田は微笑ひ出して、尙文の顏をれいのじろじろと見た。この薄田のじろじろ見る眼つきは、非常に陰氣で、陰氣以外の何ものでもない眼付だつた。——「薄田つて男は元來が悪黨なんだが、その生活の間に悪黨らしいものを出す機會がなかつた人なんだよ。」さう誰かが言つたことを、當つてゐると思つた。——かれの思ひやりは外から強ひられると勝手にそれを支拂ふが、しかし彼自身は人のことなどあまり考へない、彼自身はいつだつて誰からも離れて獨りでゐるらしかつた。

「おれは亡びるなら、勝手にほろびたつていいと思ふんだ。おれはさつさと亡びてしまつた方がおれのためにもいいと思つてゐるんだ。」

「現に亡びかかつてゐるぢやないか？　君の書くものはつまらないし——それに僕はあまり讀まないせいもあるが——今にみんな亡びてしまふんだから、早く亡びたらそれだけ樂になるんだ。それはもう時間の問題だ。」

尙文はつけつけ言ふ海田の顏をやはり氣もちよく見た。一たいこの男ほど惡口をいひながら、惡口らしくひびかない男はないと思つた、何だかなだめられてゐるやうな氣もした。

「君はどうだい。」

尙文は海田に微笑ひながら言つた。

「おれか？　おれなぞは君の詩が殘れば殘るよ、君の詩が殘らなければ無論殘らない——どうだつていいぢやないか？　殘らなくてもいいし殘つてもいい。」

「後世をたのむ氣はないか？」

尙文は半分冗談のやうに言つた。

「後世なんぞといふものは、いまから見ると見當のつきかねるものだよ。ばかな後世に仰つちや叶はないからな。」

ばかばかしい後世——そんなものを托む氣は尙文にはなかつた。咲いて散つて最後に何にも殘らなくともよい。咲いただけでもよいと思ふより仕方がない。——が、なほ半白に老ひぼけてやはり拙い植字工のやうに毎日心にもないことを書きつづけてゐなければならなかつたら、そしたらそれにもなほ世の罵りが加はるべきだらうか？　それとも猶ほこつこつとしやりかうべのやうな手つきで、人生のかすや殘りものを拾つて步かなければならないとしても、そんなに恥かしいことではない——と、さう言つて澄ましてゐられるだらうか。みんなが、みんなでさうやつて、恥も外聞も忘れてなほこの世の隅で嘆きをつづるべきだらうか——。

「藝術が亡びて友情が殘るかな――老ひぼけてしまつたらね。そんな氣もするぢやないか。」

尙文は實際は自分のやうな人間には、老ひぼけても友情なんて美しいものが益々ひしやげてしまふものではないかと、心で疑ひながらも言つた。

「或ひはさうかも知れない――老人の友情といふものは膠のやうな氣がするんだ。それほど面白いものかも知れない――。」

薄田はさういふと、ふいに立つて庭へ出て行つた。尙文はれいの退屈を感じ出したらしい猫脊の友だちがあちこち歩いてゐるのを見ると、彼も歩きたくなつて庭へ出た。池の中の魚が二疋づつつらなつてゐるやうに、何のためにさうしてゐるのか分らない――が、かれは煙草をふかして薄田と一しよに歩いた。それほど薄田が好きだつた。

四

又蜜柑の木は暖かい日だまりにこんもりと繁つて、れいのあぶらぐんだ肌をてらてらと日光に汇らしてゐた、……みんな一つびとつゞつ向いて、一つびとつが椿の油のやうな美しい透明な滴々を垂れて、ぽつつと重さうに下つてゐた。――

――朝子はよくそばへ行つて、その肌に手を觸れてみて、氣がついて狼てて手をひつこめた。が、いつの間にか餘りの美事さに又手を持つて行つて、冷たいぷつくりした質にふれた……そこに尙文が立つてゐるのが、朝子の眼にはいつた。朝子はかれの眼の前で、あまりに明るい日さしのまんなかに立つてゐるせいばかりではなく、少しきまり惡さうな顏いろをした。尙文にはその心持ちが分つてゐるだけ、なるべくその木のそばへ行かなかつた。

「わたし先刻から幾つ實つてゐるかと思つて數へてゐるんだけれど讀みきれないわ。」

朝子はさう言つて木を仰いで眺めた。まぶしいくらゐに粒々と輝いてみえた。」

「朝ちやんは一つほしいんだね。」

尙文は微笑ひがほをして、紅くなつた朝子の顏を見た。

「いやなおぢさん――ほしかないわ。」

朝子はさう言つて顏をねぢまげるやうにしたが、やはりその眼はうつくしい果物の肌にいつの間にか注がれて行つた。

「な薄田、朝子は先刻からあれを一つ失敬しやうと思つて、身構へしてゐるんぢやないか。」

薄田はこれも戯談らしく朝子の顏を見ながら微笑つて言つた。

「どうもさうらしいよ、さつきから傍へ寄つてゐると思つてゐたんだ。」

しかし朝子はその瞬間からすつかり先刻からの柔らかい表情を硬直させてしまつて、尙文を見つめたが、

「ひどいわ、失敬するなんて――。」

と睨んで言つた。

「だつて何度も手にふれて見てゐたぢやあないか。」

「手でふれたつて、そりや……。」

朝子はさう半分言ひかけて、ふいに彼方向きになつてしまつた。と、うしろ向きになつたまゝの手が、顏の方へ持つてゆかれるのが見えた、泣いた、わるいことを言つて了つたと氣がついたとき、朝子はしやつくり泣きをはじめた。

「おぢさんも薄田も冗談を言つただけなんだよ、何も泣かなくともいいぢやないか。」

尙文は薄田の顏をちらと見て、さう言つたが朝子は默つて物もいはなかつた。――薄田はへんな顏付で自分で自分の心持ちを胡麿化すために燐寸を擦つて煙草に火を點けた。――が、何か表情の中にはさまつたものでゞもあるやうな、窮屈な苦笑ひを一つした。尙文もそれに答へるために微笑をしたが自分でもきまりの惡い、心の寂くなるやうな微笑だつた。

「どうしたの、朝ちやんは？」

そこへ光子がやつてきて、そして尙文をやり込めた。

「いやなおぢさんね。」

朝子はまだ泣いてゐた。が、尙文は光子がきてから、ちよつと心に重みが脫けたやうな氣がした。――戲談を戲談としてしまつて他人に及ぼした氣もちを胡麿化してしまふ卑屈さを知りながら、自分でもほつとした。が、薄田はまだ惡いことをしたあとのやうな顏付でゐた。あの男の心は正直だとかれはさう首點いた。

「何んでもないことを朝子が憤つてしまふんだから――。」

「だつておぢさんが夏蜜柑をとつたやうなことを言ふんですもの。」

朝子は尙文の顏をみながら、あれだけ口惜しがつてゐたに拘はらず、すこしづつ微笑ひをうかべかけた。――尙文にはもう戲談を言ふ氣はしなかつた。

「おぢさんが惡かつた、――そして薄田もよくないぜ。」

薄田は頭を掻いて、朝子の、もうすつかり微笑つた眼をまともに見たが、どうやら眩しさうにしてゐた。――もう感情を胡麿化すこともしなかつた。

「おれもよくない――。」

薄田はやたらにそこらを歩いてゐたが、朝子はふと思ひついて

「夏蜜柑が一番よくないのよ、あんなに實つてゐるから。」

三人は微笑つた、――そして間もなくみんなの頭から、この挿話が消えてしまつてからも、尙文は妙な不愉快さをかんじた。――薄田にもそれが殘つてゐるらしかつた。が、朝子はすつかりその事を忘れてしまつてゐた。

「子供といふものはすぐ忘れてしまふものだが、それを最う一度思ひ返すことがあるものだよ、妙に一生忘れないやうなこともあるんだ。」

薄田は朝子が野菜畑の方へ行つたのを見送りながら言つた。

「大人になつてから思ひ出すことがあるね。」

尙文はそれだけ言ふと默り込んだ。――薄田も默つてゐた。朝子があちらで何か唄つてゐるらしい聲がする……。その纖い聲が濕つた空氣をふるはせて、さらに空へ抜けてゆくやうにも思はれる……。

夕方のことである。――朝子はふと尙文を手で招いた。庭さきの植込みのかげにゐた尙文と薄田は、築山の裏道から、朝子の方へ行つた。――朝子の顏はへんに昂奮して、眼がはしツこく動いてゐた……尙文は朝子の視線を辿ると離れにゐる十二三の男の子が、あちこち見廻しながらぐずり〳〵と歩いてゐた。そしてきふに歌をうたふかと思ふと、柿の枯枝をへし折つたりした、――何だか心が、ある一點に集められてゐるやうで、それを自分でも紛らせうとしてゐるらしかつた。

「あの子が、先刻からあそこを往つたり來たりしてゐるのよ、そりやおかしいわ。」

尙文はさういふ朝子が、自分でも少し赤くなつてゐるのを、眺めた、――朝子の眼はいつもよりいきつてゐる。

「それでどうしたと言ふの。」

「見てゐらつしやい、そりや面白いんだから。」

子供は紺の服を着てゐて、大方今着いたばかりらしい物珍らしい眼付をして、あちゆき此方ゆきしてゐる――その眼付が尙文には何となく……見當がつきさうな氣がした。しかも子供はいくらか苦しさうにさへしてゐたからである。

「そんなものを見るものぢやないよ、つまらない――。」

「だつてほらね、ほら！」

子供は木のかげへ來て、そして幾度も指で美しい夏蜜柑の下つてゐるのに觸れた。しまひにはそれをしつかり手で握るやうにして、氣がついてあはてて手をひいた。その度に濃い乾いた葉がすこしづつ搖れた――子供はあきらめることができないらしかつた。何かじりじり心にじりついてくるものを感じながら……――すこし木から隔れても 又いつの間にか木のかげへ行つて、ぐずぐずと居苦しさうにしてゐた。

朝子の顏もそれと殆ど同じ程度でいらいらして、その子供のすこしの動きまで見逃すまいとしてゐるらしかつた。――一つは監視してゐる心と、一つは自分でやきもき苦しんでゐる心と、そして苦笑ひして立つてゐる薄田のへんな顏付と……尙文はいつそあの子が思ひ切つて、あの果實を採つてくれればいいのにと考へた。

「覺えがあるね、あんな變なくらくらするやうな氣もちは？」

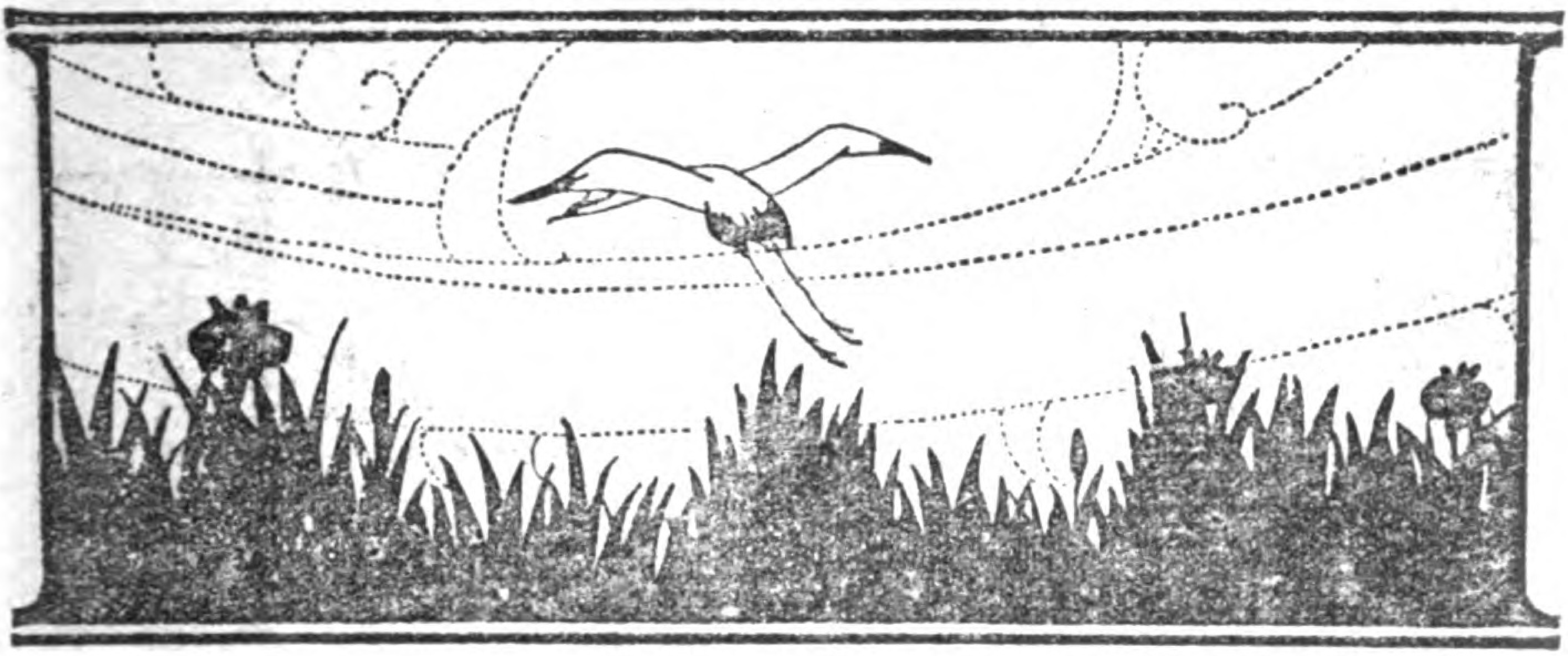
尙文は薄田の顏をみて、さう言つて、にが笑ひを一つした。自分で自分を恥ぢてゐるやうなにが、にが、しい笑ひだつた。

「ふん！」
薄田は鼻さきで自嘲的にさう言つたが、腹立たしげに紙卷きを下駄で踏みつけた。そして
「あの子はどうしたつて我慢できないらしいな、あれだけじりついてゐるだけでもみんな許されさうぢやないか？」
「さうとも！」
尙文はすぐさう言つて、又氣がついて低い聲で言つた。
「けれども朝子は許しはしないよ。あんなに熱心なんだから――。」
實際朝子の手さきはぶるぶる震えてゐるほど、ふしぎに昂奮してゐた。眼はぢつと注がれてゐる。
そのとき尙文はぐいと袖を惹かれて、あはてて朝子を見ると、朝子はもう一度袖を引いてから
「ほら、見てゐらつしやい。」
と、鋭い聲で言つた。
――その時子供はもう木の下へ寄ると、思ひ切つて大きな夏蜜柑を一つ手にとると、ぽつきりと枝をへし折つた。そのぽきりとした音が、弓づるが撥いたやうに朝子の心臟を打つて、手を震はせた。――子供はその夏蜜柑をうろたへて洋服の上着の下へかくして、上からそつと押へて、まだ暫らくぐずぐずしてゐたが、誰も見てゐないと思ふと、すばやくその木のかげから出た。――木のかげは暗かつたが、そとはまだ明るい夕あかりがちらついてゐた。――そして何か口笛を吹いて、離れの方へ行つた。
朝子の顏はがつかりしたやうな、むしろ茫乎とした腑拔けのやうになつて、失望したやうな顏をしてゐた。
「とうとう取つたわね。」

（四）　――・　寅　――

「うん。」

尚文はただそう答へた。朝子はさびしい歪んだやうな顔をしてゐた。――薄田はと見るとこれも腹立たしげに歩き出した。三人とも妙なことから心がおちつかずに、くろずんだ陰影を落されて、それを拂ひのけることかできないでゐた。



定評ある松坂屋の

靴を召せ!!

◇茶ロータース紳士靴（舶來栗色羊製米國象皮底 ヴエストン型オリエント型の二種）

短靴	十圓五十錢
編上	十二圓

◇黒ボックス學生靴（ボックス革製米國象皮底 型は斬新にして堅牢第一）

短靴	六圓八十錢
編上	七圓五十錢

◇黒ボックス女學生靴（先エナメル付にして輕快 優美のヴエネチヤ型）

短靴	六圓五十錢
二ツ綾	六圓五十錢
編上	七圓五十錢

送料

内地	二十七錢
滿鮮其他 荷造料共	九十五錢

御手紙にて御注文の節は御好みの品種及び御足袋の文數を御附記下され度候

‖通信販賣部宛‖

東京 **松坂屋いとう呉服店** 上野

（振替貯金口座東京五八〇〇番）

お品とお島の立場

徳田秋聲

一

青野は今朝は八時頃に目をさますと、眠り飽きた體に、昨夜遲くまで飲んでゐた酒の脂か何かが皮膚ににじみ出てゐるやうな氣味わるさを感じて、褞袍のまゝ楊枝をくはへて朝湯へ飛出して行つた

お島は疲れたやうな顔をして、まだぐつすり寢込んでゐた。彼女が寢所についたのは、もう一時か二時頃のことで、夜なかに舞込んで來た二人づれの醉漢が、おそくまでごてゝゐて、散々女中を手古擦らせた果に、漸と靜まつてからであつたらしいので、今が一番彼女の寢盛りなのだと思はれた。明りのさして來る中庭に臨んだ廊下へ出てみると、宵に降つた輕い春雨が、今朝は名殘なく霽れあがつて、後ろの家との仕切りになつてゐる、忍び返しのついた高い板塀の一部に朝日が照りつけて、金燈籠のすわつた植込みのなかに、八つ手の新芽を吹いてゐるのが、ふと目についた。それから氣をつけてみると、色の惡い瘦せた赤松の枝にも白い新芽をもつてゐるし、枯木のやうな楓の小枝にも、つぶ〱した細かい芽が吹出してゐて、松葉などの散らかつた黑

い土にも春らしい潤ひが感ぜられた。扉と扉の隙間からは、青々した空が春らしい潤みと光をたゞへて澄みわたつてゐた。陽氣が昨夜の一雨で、めつきりぽやついて來たやうに思へた。

昨夜の客はもう歸つたのか、それともまだ寢込んでゐるのか、二階からはこそと云ふ音もしなかつたが、女中はもう起きて働いてゐて、青野のために下駄を揃へてくれたりした。そこに泥靴が片寄せてあつたり、桶の傘挿に蝙蝠や番傘が亂雜に投りこまれたりしてあつた。そして格子戸を出て、兩側に木槲などの這つた三枚ばかりの敷石を歩くと、そこはもう門の外であつたけれど、路次のやうなせゝつこましい處なので、すぐ鼻のつかへるやうなところに、藝者屋が二三軒もごちや〱してゐたり、黑く意氣がつた待合の門がおつ立つてゐたりした。

青野がお島にそんな商賣をやらせてから、もう足掛二年にもなつてゐる。勿論お島も堅氣の女ではなかつたけれど、廣小路近くの島屋に三年ばかり住込んでゐて、いくらか飮み食を扱ふ手心を習つたといふだけで、かういふ種類の水商賣には全く經驗がなかつた。それに彼此四十になつた青野とは年もひどく違ふし、最初相談をかけられた時から、餘り氣が進んではゐなかつた。けれども彼女には年取つた母親が一人あつた。そして彼女の腕で母を一人、世帶をもたせておくことは、月々の收入だけではちよつと困難であつた。

「こんなところにゐたら、いくら不景氣の時でも日に四組や五組の客は扱ふだらうから、お前なんかの收入は大したもんだらう。」

青野は傍へ來て、鍋のなかの世話をやきながら、お酌をしてゐるお島に訊くのであつた。ちよつと言葉のアクセントに東京でないところのあるのと、お召など引張つてゐて、顏立も相當に調つてゐる癖に、様子がどこか垢ぬけのしないところがあるので、青野は多分西の方だらうと思つて訊いてみると、果して名古屋寄の方だつたので、その土地の話か

ら、氣分の暗い割に、口の輕い質の彼女が、どんな身分の女かといふことが、ほゞ青野にも想像できる程度で、身の上噺をしたところで、氣紛れな青野は遂きはしに謎でもかけるやうに尋ねて見たのであつた。お島は四五年前に、品川の方で大工をしてゐる叔父さんをたよつて、母と一緒に上京したとか言ふのであつたが、青野は最近少し工面が好くなつてゐたところから、少しばかり金をかけたら自由になりさうなそんな種類の女を、それとなく追求してゐた。

「駄目なんですよ。こゝぢや四組五組と云ふお客さまは兆もありませんよ。」お島は答へた。

「さうかね。尤もこの家は少し格式だからね。」青野は苦笑してゐた。

「旦那なんさ方々入らつしやるから御存じでせうけれど、こゝも一しきりは大變に流行つた家なんですてね。たゞ堅いから可いんですよ。」お島はさう言つて答へて、それから着物の裾や袖口の直ぐすつた切れることや、買喰ひや交際に費す金も少い額ではないと云ふ細かしい話などを、上方風の頭腦の働き方で、それからそれへと說明するのであつた。

「成程ね。今日日垢のつかないお召に、縮緬の裾廻しでも引張つて梯子をおりたり上つたりしてゐた日には、少しばかりの貰ひぢや遣切れなからうね。」節高な指に俗惡な金の指環なぞはめた青野は、少し禿げ上つた額に筋を立てながら、じり〳〵煮えつく鍋のものを突つきながら、酒を飲んでゐた。

「さうなんですよ。髮結錢だつて大變ですよ。客商賣の家にゐますと、まさか堅氣のおかさんや娘さんのやうなことはしてゐられないでせう。それに時間が惜しいんですから、何うしたつて、早くしてもらふには餘分なものを奮發まなければならないで勘定なんですの。お湯だつて矢張りさうでせう。家の名前がありますから、吝つたれな眞似はできませんわ。だから百圓やそこいらの貰ひでは、お母さんに仕送りするのは、骨ですよ。反物屋の拂ひだけでも、毎月々々大變ですもの。うつかりしてゐると、百圓や二百圓の借金は譯ないんですの。」

「それぢや何うしてやつて行くんだ。名々旦那でもあるて譯かね。」

「え、まあ中にはそんな人もありますけれど、公然(おほびら)ぢや矢張りね。」

「ちや隱密(ないしよ)ならいゝのかい。」青野は笑談のやうに言つた。

「それあ月に一度か二度のことなら、泊つたつて、別に小言も言はないでせうけれど、そんなに苦しい思ひをして、旦那をもたなくたつて……どうせそんな人は眞面目ぢやないんですもの。それにお金のある人は、上さんや子供があつたりして、迚も長持(ながも)ちがしないに決まつてゐますからね。」

「さうさね。世のなかはちやうどに行かないもんだからね。」

その晩は殊にも暇だつたので、お島は時々銚子や料理の代りを取りにおりて行くほかは、大抵傍に坐つてゐた。

青野はその時は、銚子を三本ばかりあけて、後で茶漬を食べてそこを出たのであつたが、お島が何だか徳川(とくがは)なぞのやうに思はれた。そして其處から彼女を引張り出すのに、少しばかり手間がかゝつたけれど、母親に逢つて話をしたりして、それから間もなく彼女をそこから足をぬかせたのであつた。

二

洗湯では番頭がもう長いあひだ馴染であつた。

「お早やう」なぞと其の番頭は彼の顔を見ると、お辭儀をして、桶に湯を汲んだ。

そして陽氣の話から、「もうお花見ですね」とか、「上野は彼岸が咲いたらう」とか、それから世間の景氣の話をしたりして、漸とさつぱりした氣持になつて、上つて來た。

歸つてくると、お島も床を離れてゐて、眠さうな顔で、手拭を姉さん冠りにして掃除をしてゐた。藝者の迎ひが來たり、二階ではちよく手が鳴つたりして、お島の監視のやうにおいてある年增の女が、忙しさうに上つたり下りたりしてゐた。

靑野は「また何うぞ」などゝ、お島にお世辭を言つてゐる若い子に、廊下で揶揄つたり何かしてゐるうちに、掃除ができたので、長火鉢の傍へ來て坐つた。

お島は鳥居にゐた頃から見ると、今年四になつたと云ふ年齢どほりに、樣子が大分更けて見えたけれど、その代り着附なぞは稼業者を見てゐるので、どこか野暮くさいところが取れて來た。それに體も氣も樂なので、血色や何かも好くなつて、ちよつと見ちがへるやうであつた。商賣の方も別にさうむづかしいとは思はなかつたし、お針の相當出來る母親を引取つてあるのもよかつたけれど、手がないので自然年寄を臺所働きなぞに使ふのが厭だつた。この頃は叔父の家に病人があるので、手傳ひに行つてゐたが、打算的な靑野に思遣のないのが不滿であつた。

靑野は下谷の方で、肴屋から仕上げた男で、近所へ小金を貸したりして、利殖を謀ることに、頭腦が狡く働いた。それから才があるところから、千三つ屋の仲間へも入つて、さう大きい仕事は柄になかつたけれど、こせく儲けることには拔目がなかつた。勿論こゝではまだ資本の回收といふまでには、まだく先が遠かつた。世帶が下谷のカフエと二つに分れてから、掛りが多いうへに、遊ぶときが多くなつたので、カフエの方の經濟もさう樂ではなかつた。

「こんな事してゐても詰らない。」お島はこの頃になつて時々さう云ふ氣が差してならなかつた。

「これぢやまるで靑野のために、母子づれで働かさせられるために來たやうなものだ。」彼女の頭腦にはさうした打算がはつきりしてゐた。

青野がどう云ふ風の男だといふことも、足掛二年の月日のあひだの色々の場合に、ほゞ感づくことが出來た。感觸の荒つぽいのも、ちよつとおつかないくらゐだつた。同じ傳法でも近在出の青野のもつてゐる傳法には、何となく硬いところがあつて、それがお島に肌に合ひかねた。そして金儲けの話なぞしてゐるところを聞いてゐると、素質がひどく惡黨のやうに感ぜられて、つくづく厭だと思ふことがあつた。けれども人の心持なぞのわからない點で、お島が腹に何を考へてゐるかなぞは、てんで氣を廻はしても見ないので、何んな場合でも、柔順に服從してゐるものと、大束に極めこんでゐるらしい態度が、お島には何處か拔けたところが、この男にあるのだとしか思はれなかつた。そしてさう云ふ一面では、彼にも案外善人らしい甘さがあるやうな氣がするのであつた。そんな意味では、お島も消極的には何うかからか安心してゐられるのであつた。

「何だか急に陽氣がぽかついて來たやうだが、此分ぢや二三日すると滿開だね。どうだ今年は一つ何處ぞへお花見にでも出かけるか。」

お島は鏡の前に立つて、髮や顏を直してゐたが、にやりと笑つて、

「いゝわね。どこかへ連れてつて頂戴。今日は駄目？」と甘えるやうに言つた。

「今日でもいゝが、まだちよつと早いだらう。何しろ今年は寒いからね。それに今日はちよつと家へ行つて見ようかと思つてゐるんで。」

お島は微かに顏を曇らせた。

「それもさうね。今日で五日になるわ。」

「さうか。それぢやお前も鼻につく時分だな。」

お島は「ふん」と笑つた。
「下谷の方も偶には氣がかはつていゝでせう。政ちやんの顔も見たいでせう。」
「政坊か。あいつも此の頃は生意氣にばかり成りやがつて、憎らしいやうだぜ。」
「そろ〳〵憎まれ口を利く時分だわね。」お島はさう言つて、鏡の前を離れると、長火鉢の前へ來て、出花をいれにかゝつた。
「でもお神さんはあゝ云ふ子供があるから氣が強いわね。」
「その代り骨が折れら。」
「それあ仕方がないぢやありませんか。先きへ寄つて樂しみがあるんですもの。」
「ぢやお前も一人拵へたらいゝぢやないか。」
「だつて體が弱いんですもの。」お島は沈んだ調子で言つて、その時女中が食べものゝ載つた飾臺と一緒に、そこへ運んで來た麥酒の瓶を取りあげて、膝のうへで口を取つて、コツプに注いでやつたり、棚から海苔の鑵を取出して、炙つたりした。
「さあ、何うしようかな。」青野はさう言つて、麥酒をぬかうとしてゐるお島の手元を見てゐたが、やつぱり手を出してしまつた。腸を惡くしてゐる彼も、麥酒だけは、大抵こゝにゐれば朝から飲むことにしてゐた。
「それ御覧なさい。やつぱり飲むぢやありませんか。」
「けれど昨夜は少し飲みすぎたとみえて、今朝は腹工合が惡いんだが、口がねば〳〵するんでね。」
「私には子供はないでせう。だから詰らないと思ふわ。だけれど、子供を産むと、その女が厭になるといふ人もあるの

ね。貴方もその組かも知れないことよ。」お島は寂しい微笑を浮べた。
「それも女によりきりさ。」
「お上さんは何う。」
「お品かい。さう、格別何うといふこともないやうだ。まあ、しかし能く働くから。」
「それあさうですもの。あの商賣は氣骨がおれなくて、働きばえがするんですもの。毎日目にみえて、お島目があがつて行くだけでも、張合がありますわ。」
「その代り忙しいや。」
「忙しいのはいくら忙しくても可いの、商賣が眞面目である分には……。」
「同じだよ。お品はお品で、お前を羨ましがつてゐるから。」
「それぢや私と入れかはつて貰ひませうか知ら。私あの方が何んなにいゝか。藝者衆なんかの機嫌を取るだけでも厭だわ。」
「ところがあすこには又女給といふ奴があるからね。中にはまたおとなしい者ばかりはゐないからな。」
「でも私さつぱりしたことが好きなの。こんな厭味な商賣は嫌ひなの。」
「さう言つたもんでもないよ。この方が意氣筋なんだからな。まあ默つて辛抱しろてこと。慣れて來れば止められなくなるから。これだつてお前大枚の金がかゝつてゐるんだ。さう我儘を言はれちや己も合はない。」
そして靑野は麥酒を飲み干して、コツプをお島にさした。
お島は、「いゝえ可けないの。」と手を振りながら、瓶を取りあげて注いでやつて、

「それよりか私お先きへ御飯をいたゞくわ。」
お島は臺所の方へ立つて行つた。

三

青野がお品のやつてゐる、下谷のカフエへやつて來たのは、お盆頃であつた。青野がこの店を人から安く讓り受けたのは、三年ばかり前のことで、その前には日本の安料理を出してゐたこともあつたが、カフエに取りついた時分には、彼は大分舊の肴屋氣分から脱化してゐた。お品は近在産れであつたが、帳面前を預けておいても、不安がないくらゐの頭腦の働きがあつた。それは堅氣の商人の家なぞに奉公してゐたりしたからで、人なぞ使ふにも氣が利いてゐるといふよりも、優しくて溫順しい方であつた。三年ほど前に二人目の子供を流産してから、健康が舊どほりに恢復しなかつたけれど、時々頭が痛くて寢るくらゐのことで、店のくりまはしに差閊へはしなかつた。

廣小路の電車通りから少し入つたところの、賑かな店屋つゞきの間に、間口の狹いそのカフエがあつた。手狹ではあつたけれど、近所の若い人達を惹着けるに恰好な女給をおいたりして、定連が多かつた。青野は造花の櫻の枝の這攔がつた、奥行の深い土間を通つて、青いカアテンの下つた奥へ入つて行つたが、お品は古簞笥や長火鉢などのごて〳〵置詰つてゐる六疊の緣側へ出て、ちやうど髮結に髮を結はせてゐるところであつた。

「お歸りなさい。」お品は青野の姿が目に映ると、髮の出來かゝつた首をすゑたまゝ微聲で言つたが、青野は口も利かないで、室内を見廻しながら外套を隅に脱ぎすてゝ、そのまゝ又店へおりて電話にかゝつた。客はなかつたけれど、出前があるとみえて、コック場からじい〳〵いふ音がしてゐた。するうち電話が通じて、青野は腦天から出るやうな高い聲

で、がみ〳〵債務者へ無遠慮な督促をしはじめた。そして其口が一つすむと、今度は別の口を呼出したが、それが共同の仕事についての仲間への交渉だつたので話が可成込入つて來て、調子がひどく焦燥氣味であつた。それが漸く終りを告げると、青野はがつかりしたやうに溜息をついて、そのまゝ長火鉢の傍へ來て坐つた。彼はこの頃餘り思はしい仕事がなかつた。景氣のいゝ時に、調子づいてあつちこつちへ思ひ切り利子を高く貸しつけた少し許りの金が、散らばつたまゝで一向回收してこなかつた。

「旦那はいつも景氣がよくて、結構でございますね。」年増の髪結が、器用な手つきで髷に櫛目を入れながらお世辭を言ふと、青野はどこか濁りのあるやうな目を見張つて、にこりともしないで、お品の頭髪を見てゐた。髪は緒い方だつたけれど、癖がなくて、髱や鬢の形がよくつくのであつた。で、小じんまりした中肥りの體つきで、色澤のすぐれない、顔をしてゐたが、目鼻立も尋常であつた。二三年前までは、睫毛の長目にもつと生彩があつたものだが、少し衰へた今でも、お島よりは寧ろ調つた顔立であつた。青野はこの女を別に厭になつてはゐなかつた。そして口數の少ない、おとなしやかな、氣にむらのない彼女の傍にゐると、少し氣詰りになつてくる、落着いた慵い氣持になつて、酒なぞ飲んでも調子がはづまなかつた。でもお品は、お島以上にも自分の氣持を解してゐるらしく、惡くどい仕事なぞしたときでも、批判がましい口を利いたり、そのために厭な顔をしたりしたことはなかつた。だから、お島と關係したことを感づいたときでも、何かのをりにちよつと厭味を言つたきりで、自分を主張しようとはしなかつた。青野も詳しい話はしなかつた。一度連れて行つて家を見せて、お島と顔を合させたきりであつた。

「わたし隨分つまらないわ。少し家の工面がよくなつたと思つて悦んでゐると、餘所に色女が出來たり何かして……。」お品は紅い顔をしてさう言つて太息をついてゐた。

「けどみづてん藝者など買つて、飲みあるくよりか、この方が何のくらゐ經濟だかわかりやしない。」青野はさういふ風に辯明してゐた。

「それあさうだけれど、こんな事はお金づくぢやないでせう。お金がかゝつても遊びの方が、こだはりがなくて何のくらゐさつぱりしてゐるか。」お品は言つた。

「まあ諦めろい。お前だつて、先きへよつて力になるものが出來ていゝぢやないか。あの女は世間ずれがしてゐないんでね、何でも己の言ふとほりになつてゐるんで、金をごまかすやうな氣働きもなければあ、贅澤をしようと云ふ考へもない。家のためには至極重寶にできてゐるんだ。ちよつと見たつてさうだらう。お前にだつて一日も二日もおいてるんだから。」青野は言つた。

お品は寂しい微笑を浮べてゐたが、愉快ではなかつた。それを道理あることだとも思はなかつた。青野のことだから、手を咬まれるやうな氣遣はないだらうとは思つたけれど、瞞されてゐるやうにも思へた。勿論氣持の硬く突張つたやうな男なのだから、打突つて行けば行くだけ損だと云ふ氣がしたが、今迄の態度をかへて、男に媚びるとか、故ら大切にするとか云ふ氣には尙更なれなかつた。今までだつて別にさう熱い愛があつたといふ方ではなかつたけれど、全く信頼してゐたことは事實であつた。それが他に愛するものが出來たとすると、この頑固な男の心にも、さうした厭味なところがあるのだと思はれて、傍にゐるのが不愉快になつたりした。

青野は行つたきりで、五日も七日も歸らないことがあつた。お品は電話なぞかけて、お島に出てこられるのも不味かつたし、彼女をまごつかせるのも氣の毒であつた。で、出來るだけ我慢することにしてゐた。そして氣を紛らせるために、成るべく店へ出て働くことにしてゐた。

「おかみさんはお氣毒ですね。」

女給たちが目でさう言つてゐるやうに見えた。勿論蔭ではそんな噂が出てゐるに違ひなかつた。コック場などでも、それ以來却つてよく仕事をしてくれるやうに思へた。そしてふとそこへ顏を出して行つたときなぞに、何か頻りに話してゐたコックとコックの下をやつてゐる兼出前持とが、急に口を噤んで、何事もなかつたやうに、俛いて仕事をしてゐるところを見ると、お島は理由もなしに彼等の心持を感謝したいやうな、悲しい弱い氣持になるのであつた。

「ほんとに女だと思つて、莫迦にしないでおくれよ。」お島は若い出前持なぞに、輕いヒステレの發作を見るやうな我儘な氣持で、厭味を言ふことがあつたが、自分が間違つてゐることは十分解つてゐた。

「世のなかに人鬼はゐない。」お品は心からさう思はずにはゐられなかつた。

しかしどうかすると、働くのに張合がないやうな表情を、皆ながしてゐるやうに思へてならないことがあつた。コックの木谷は、何時かちよつとした料理の間違ひが原因で、不斷から生意氣な風のあつた、渡りもの丶或る女給仕とひどい喧嘩をして、ぷり〳〵してゐたほどの愛嬌のある若者だが、どうかすると其處いらを飛び歩いて、客の忙しいところをまごつかせることもあつた。しかし孰かといふと素直な方で、仕事も叮嚀であつた。お品の氣持で餘所並に給銀を少し上げてやつてから、彼も一時浮ついてゐた尻を落着けて、眞面目に働いてゐたが、それが何時まで續くかは疑問で、一日でも仕事を休むと、お品はもう氣が氣でなかつた。越後の新發田から飛出して來て、蕎麥屋の出前持ちから叩きあげた男だけに辛抱づよいところがあつたので、お品も行く〳〵は心掛の好い女房をでも世話して、世帯をもたせてやらうと思つてゐたし、彼の前にそれを仄めかせてもおいたけれど、時とすると彼も自分自身のことを考へるらしかつた。お品は誰よりもこの男に氣をつけてゐたが、暮に感冒に罹つて十五日ばかり寝込んだときなど、青野に遠慮しいし

い殊にも親切にしてやつた。その時に餘所から臨時に年取つたコックを一人頼んで來たのであつたが、それでも結構間に合つて行きさうなので、病氣が癒つてから、木谷は自分から身を退かうと言ひ出した。

「それあお前さんのことだから、何處でもほしがつてゐるだらうけれど、折角病氣がなほつて、働いてもらはうと思つてゐるのに、何うして又そんなことを言ひ出すの。」お品は言ふのであつた。

「どうも濟みません。」木谷は頭を掻いてゐた。

「お前さんの出世のためなら、止めやしませんけれど、私はまたお前さんに長くゐてもらはうと思つて、氣をつかつてゐるんですよ。旦那はあんな頑固な人で、がみ／＼言ひますけれど、心から解らない人でもないんですよ。」

「さう言はれると私も困るんですが、決してさういふ譯ぢやないんで……田嶋さんにも氣の毒だし、私もこれを機會に、七年ぶりでちよつと田舍へ行つてこようかと思つたんです。」

「それなら行つて來たら可いでせう。歸つてくれさへすれば、この上十日や十五日くらゐのところは、あゝやつて田嶋も居るんだから。だけれど行き切りぢや、私も詰らない。折角お馴みになつて、氣心がわかつてゐるんですもの。」お島はいつになく力をこめて言つた。

木谷もちよつと胸へ響いた。悪いことを言つたと思つた。

「どうも濟みません。決してさう云ふつもりで言つたんぢやないんですが……。」

「私も邪推するやうで、悪いけれど……」とお島も妙に感傷的な氣持になりながら、

「それあ好い口があつて、そこへ行かうといふんなら、私も止めるところはないんですがね、それならさうと分明言つてもらはないと、お互ひに氣持がわるいですもの。」

「いや、まつたくさう云ふ譯ぢやないんで……私も散々お世話になつてゐますから、此處んとこで脫けるのは濟はすまないんですけれど、ちよつとさう思つたもんですから。」

その時は笑つて別れたけれど、それ以來二人は妙に引絡み合つたやうな氣持になつてゐた。

それから小いなりに此處の店の星とも言はれてゐた、丸ぽちやの可愛い女給が、昨年の暮不意に暇を取つたときも、お品は寂しい氣持がしたが、それはさう大したことでもなかつた。他の女もそれから二人も出代つた。

ところでお品は、それほど熱心に引止めてゐた木谷に、暇をやることに決めてゐたので、今日汐があつたら其言を言出さうと思つて、青野の樣子を見てゐた。

お品はしかし青野は何だかむづかしい顏をしてゐるので、近よるのが厭だつた。

「花がさいたらお島がお花見に行かうと言つてゐたが、事によつたら、此方も一日休んで見頃の日に飛鳥山へでも出かけるかな。」青野は硬ばつたやうな顏がほぐれて來て、さう言つて、お品の機嫌を取つた。

「え、それも可いかも知れませんわ。年に一度のことですから。」お品は氣のない返辭をしてゐた。

「お前も年から年中、碌でもない醉漢のふざけるところばかり見せつけられて、詰らないだらう。偶にや氣晴しもいゝやね。」

「……私なんさ別に……」とお品は寂しい微笑の影をたゞよはせて、眞鍮の煙管の雁首を脊の脚ではじくつてゐながら、

「お花見なんぞ埃を浴びに出るやうなもんですから、それよりかも一日家に樂をして寢てゐる方が可いんです。」

「さうか、それもいゝだらう。」青野も苦笑してゐた。

青野はそれから咽喉がねばつくと言つて、麥酒をお品にぬかせて、鹽の辛いハムで飮んでゐたが、淡紫色の手絡などかけたお品の顏が、今日は一際美しく見えた。

「それよりか、木谷が暇をくれといふんですが……。」お品は目眩しさうな目をして、その事が青野の耳に際立たないやうに、氣輕な調子で言出した。

「ふん」と青野は空虛な目をしてお品の顏を見てゐた。

「今あの人に出て行かれると、家でも困るんですけれど、あの人の都合なら仕方がないでせうね。私貴方にきいてからにしてくれと言つておきましたから、いづれ直に話をするでせうけれど。」

「どこか好い口でもあるのかい。」

「私聞いても見ないんですけれど、川嶋が後釜に來てくれるやうだと都合がいゝんですが。木谷さんは多分來てくれるだらうと言つてゐますの。」

「それから極めなくちや困るぢやないか。」

「それは木谷もその積りでゐますの。」

青野はそれ以上訊きもしなかつた。そして少し醉がまはつたところで、彼は腹が痛みだしたと言つて、苦い顏を顰めてゐた。そしてちよつと一時間ばかり横にならうと思つてやがて二階へ上つて行つた。二階は上り口が三疊で前が八疊になつてゐた。そこは夫婦の寢るところでもあり、客間でもあつた。天井が低いのに、往來が近いので落着がなかつたけれど、青野が疲れきつたやうな體を休めるのに十分であつた。

青野が羽織をぬいで、押入から蒲團を引張りだしてゐると、そこへお品も胡散な目をして上つて來て、急いでそこい

らを片着けた。それから青野に言はれて、しばらく腰のあたりをさすつてゐるうちに、快い眠氣がさして來て、手先がお留守になつたと思ふと、筋走つた長い手がいきなり腋のあたりへ延びて來たのに氣がついて、遽かに正氣づいた。

四

青野は或日の午後お島と淺草をぶらついてゐた。お島の好きな活動を二時間ほど見て、そこを出たのが日暮方であつた。で、どこかで夕飯を食べようと思つたけれど、目ざす鳥屋は種切れになつてゐたし、天麩羅屋も一杯であつた。

「つまらないわね、折角來て何にも食べないぢや。」お島は愚痴を言ひながら、青野について或る路次を歩いてゐた。

「ちよつとね、店は小いが、美味いものを安く喰はせる洋食屋を己が見つけておいたんだよ。そこへ行つてみよう。」青野は思ひ出したやうにそんなことを言つて、又後へ引返した。

花時のことなので、勿論その店も込合つてゐたが、婦人同伴席の方が、少しは餘裕があつた。二人は漸とその入口のところに席を占めた。電燈がもうついてゐた。

お島はつまらなさうな顏をして、四邊を見廻してゐたが、青野は早速生の麥酒に料理を三四品通した。

「こんな所も時々見學の必要があるんでね、何ういつたやうなものをお客が悅ぶか、かうやつて見ておくのさ。」青野は笑ひながら、「しかし此のくらゐ繁昌すると面白い。小さい處ではこゝが一番はやるやうだが、淺草へ集まる民衆は感心によく知つてゐるもんだね。」と高い聲で言ふのであつたが、お島には眞に受けることが出來なかつた。

二杯目の麥酒を半分ばかり飲んだ頃には、青野の顏にも少し醉が出て來た。そこへハムサラダやコールビーフのやうなものが運ばれた。

「さあお食り。麦酒はこれに限る。」と、青野はさう言つてだふ〳〵とソースをかけてゐた。

するど其の時戸の開け放された其の室の出入口の隅に、張番の若い衆がいつも頑張つてゐる椅子と卓子があつて、番號のついた黒い木札を出入りの客に渡したり受取つたりするのが、その男の仕事であつたが、ふと「郵便」と云ふ聲がして、その卓子のうへに、葉書が二枚飛込んだと思ふと、その一枚がひら〳〵と舞つて、今青野が便所へ行かうとして椅子から離れかけた足下へ散つたのであつた。

張番は別にあわてゝ其を拾はうともしなかつた。勿論客の出入りが引切りなしあつた。すると青野は立つた拍子に、危なく蹈みつけさうにした草履ばきの足を後へ引いて、何心なくその葉書を拾ひあげて、埃を吹いてゐたが、不思議なことには木谷由造といふ宛名が目についた。それは鉛筆で書かれた拙い字であつたが、最初ちらと見たときには、何處かで見たやうな名だと、ちよつとさう思つたゞけであつたが、その瞬間差出人の名が目に入ると同時に、由造が誰であるかゞ、はつきり頭腦に浮出して來た。差出人は女名前で、たゞ「しな」とちんまりした字態で書かれてあつた。

長みをもつた、口元に苦味のある彼の顏が、遽かに險くなつた。そして急いで文面を讀みはじめた。

薄い鉛筆の迹がぼやけてゐて、あわてた彼の頭腦では、聯絡の取れないところや、判讀しかねるやうな文字もあつたけれど、「その後別段お變りもありませんか。お忙しいことでせうと思ひます。私もこの頃は丈夫ですから、安心して下さい。店も繁昌してゐます」といふ部分や「……いつまでかうしてゐても詰らないと思ひますけれど、政坊といふものもゐますから、この子の大きくなるのを樂しみに辛抱してゐます。お前さんも堅く勤めて、早くお上さんをもらつて、店でも出すやうにして下さい。私も辛いけれど、それも双方の身のためなら仕方がありません。」と云ふ意味だけは判斷がついた。小包で何か送つたから、受取つてくれといふ、その品がじばんのやうにも讀めたし、げたか何かであるやうに

も想像されたけれど、かすれてゐて判然しなかつた。

青野は直きに一切が呑込めた。それは自分の頭腦の底に潜んでゐたものが、遥かに事實となつて目の前に現はれたやうなものであつた。木谷に暇をやつた前後のことが、まざ〳〵と彼の記憶に蘇へつた。

「ちえツ、畜生奴。」青野は吐出すやうに言つた。

「何うしたんです。あなた人の手紙なんか見ていゝの。」お島も一口二口飲んだ麥酒の醉が出て、目が輝いてゐた。

「どうも變だつたと思つたんだ。家の店に使つてゐた木谷が、この家にゐるだらうぢやないか。これ見ろ、差出人の名を見ろ。己を瞞着しやがつて畜生、太い奴だ。」青野はさう言つて、その葉書を、ちよつとお島に見せた。

お島は手に取つて見たが、漠然と想像がついただけで、何の事だか判らなかつた。

そこへ代りの皿をもつて來た。

「こゝのコツク場に、木谷由造つてのがゐる筈だが……。」青野はその給仕にきいた。

「木谷ですか。居ります。」そのボーイは答へた。

「おれちよつと其の男に逢ひたいんだが、コツク場は何處だ。今居るか。」青野は言つた。

お島は青野のさう云ふ恐しい顔を曾て見たことがなかつた。そして何事か起るだらうと、豫感にわななきながら、「およしなさいよ」と言つて止めたが、青野はコツクの先きへ立つて、づん〳〵行つてしまつた。

お島の氣持は二樣に働いてゐた。お品の身のうへに何事かゞ起つてくれゝば可いと望んだが、お品を可哀さうだとも思つた。勿論それは一つのものであつた。

ごた〳〵してゐるコツク場へ入つて行つた青野の狂氣じみた目が、直きに由造を見つけた。彼は油汚い姿をして、

椅子にかけて一服ふかしてゐる處であつた。靑野はその姿が目に入ると、憎惡の念が劇しく胸へ突きあげて來た。そして獲物を狙ふ野獸のやうに、いきなり傍へ近よつた。

木谷は吃驚したやうに、丸い目を睜つて、靑野を見てゐたが、起ちあがらうとするところを、ぽか〳〵と拳で三つばかり頰を喰はされた。木谷はよろ〳〵と倒れさうになつたが、抵抗もしなかつた。頰を抑へてじつとしてゐるきりであつた。

「この野郎太い奴だ。」靑野は飽足りないで、又打ちかゝらうとしたが、木谷は哀れみを乞ふやうに涙ぐんだ目をして、後へ退つた。

皆なは惘れた顏をして見てゐた。

「手前の荷のしまつてある處へ案内しろ。」靑野は木谷に命令した。

木谷はちよつと躊躇したが、それを汐に衆人の目から脱れようと思つたので、默つて悄々と先きへ立つた。そして麥酒の空樽や洋酒の空壜などの堆積した、ホールの裏手の土間を通つて、便所の前を突きぬけると、そこが彼等の寢室になつてゐて、扉をあけて入ると、カアテンの下つた押入のなかから、木谷は普通の柳行李と、鞄仕立の二つを引摺出して、彼の前で開けて見せた。靑野はいきなり手を突込んで、それを引掻きまはした。そして其處に風呂敷のなかゝら、お品が自分のものを仕立てなほしたに違ひない羽二重更紗の下著のやうなものや、これもお品のを著けかへた高貴お召のやうな羽織などが發見された。

「この野郎、ふざけた眞似をしやがつて……」靑野はまた堪らなさうに、悄然と隅の方に立つてゐる木谷に飛びかゝらうとした。すると其の時木谷の上を働いてゐるらしい、三十四五の男が、後からやつて來て入口の方で樣子を見てゐた

が、つかく傍へ寄つて來て、ちよつと青野を遮ぎるやうにしながら、少し興奮した表情で、

「一體この男が旦那に何をしたといふんです。」

「何もかもありやしない。此奴おとなしい顔をして、飛んだふざけた眞似をしやがるんだ。」

「それあまあ何をしたか知りませんが、御存じのとほり手前共の使傭人ですから、無闇なことをして頂いちや手前共が迷惑をしますんで。言ふことがあるなら、どうか他の時になすつていたゞきます。この通り忙しいんですからな。」

すると青野も漸と氣がついたやうに、少し落着いた態度で、事情を話したあとで、これから木谷を借りて行かうと言つて、交渉した。

コックはにやくく笑つた。

「そんなことでしたら、此處でお騒ぎになるのは反つて旦那のお顔にかゝりませう。可うがす。この男がお伴をするといふなら、させませう。」

そして彼は木谷を振顧つて、その事をきいた。

さうと極まつた處で、青野がお島のところへ歸つてみると、彼女は食べるものも食べずにぼんやり考へこんでゐた。

木谷が仕度をして、表へまはつて來たのは、間もなくであつた。彼は青野のあとから、少し距離をおいて、[illegible]ぎがちに歩いてゐたが、やがて電車に乘つてからも、窃と入口の方にもぐつて、二人の目を避けるやうにしてゐた。

上野の廣小路でお島は二人に別れた。

家へ歸つてからも、お島は今日の出來事について考へさせられた。そして其の事を母に話して聞かせたりした。それ

から風呂に入つたり、鳥屋時代からの馴染の客が來てゐたので、その部屋へ行つて一つ二つ猪口の遣取りをしたり、下へ來てお茶漬を食べたりしてゐるうちに、時間がたつて、直きに十二時になつた。今夜は青野も來ないだらうと思つた結果が何うなつたかと知りたかつたけれど、お品の前電話をかけるのが憚られた。

戸締りをしてから、そろ〳〵寢仕度にかゝつたのは、一時過ぎであつたが、手を延ばして、電燈に蔽ひを著せようとしてゐると、とん〳〵と戸をたゝく音が、不意に耳についた。

勿論それは青野であつた。

青野はひどく蒼白めた顔をしてゐた。お島は寢衣のうへに羽織を引つかけて、長火鉢の前にすわつてゐた。

「うんと遣つけてくれた。木谷の腕がもげるまで打たゝいてやつた。己は手が痛くなつたよ。」青野はさう言つて、腕を揉んでゐた。

「お品さんは。」

「あいつだつて起きあがれないくらゐ、踏んだり蹴たりさ。」青野は苦笑してゐた。

「木谷と云ふ人、ほんとに腕がぬけたんですか。」

「今頃は病院へでも行つたらうよ。皆なで騒いでゐたから。」

「まあ大變だ。」お島は鼻に小皺を寄せた。

「何うでもなるが可いんだ。まさか片輪にやなるまいよ。」青野は呟いてゐた。

お島は無氣味さうにその顔を見てゐたが、直きにうつむいてしまつた。

「お前はまさかあんな眞似はしないだらうね。」青野は笑談らしく訊いた。

「私？」お島はにつと口元に苦笑したが、
「まさか私がそんなことをするやうな……だけれど、お品さんは何うするんです。」
「あいつは何處か田舍にでも家をもたせて、月々政坊の養育費だけくれることにした。離縁はちよつと考へものだ。」青野は思案ぶかい顔をして言つた。
お島は顔を背向けてゐたが、思出したやうに、訊いてみた。
「私が若しそんなことをしたら……」
「して見ろ、物は試しだから。」青野は微かな冷笑を洩した。
「私だつて女ですもの、自分ぢやしない積りでも、時と場合で何うなるか知れやしない。」
「お前は大丈夫だよ。お品よりか少し人間が悧巧に磨れついてゐる。その代り、何時までたつたつて、この家をお前の名儀になぞする氣遣ひはないからね」青野は得意さうに言つた。
お島も仕方なし苦笑してゐた。

青野がお品を離縁したのは、それから半年もしてからであつた。
その後澀谷邊で、お品が木谷と一緒になつて、店を開いたことをお島は耳にして焦燥したが、お品の子供を打つけられながら、彼女自身は相變らず厭な稼業にその日〳〵を送つてゐた。

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘(海外郵稅貳拾四錢)
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國	
六册	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢	以上郵稅共
十二册	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢	

◉但し新年號春秋二期附錄號増刊は各倍册に付臨時號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵券代用 は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢　(集金委託料及送料共)
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年四月二十一日印刷納本
大正十二年五月一日發行
(禁轉載)

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 局丸ノ內三〇二
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工塲

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年四月二十日印刷納本
大正十二年五月一日發行

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

中央公論 五月號 （第三十八年第五號）